

為漢文叢
書劉生作



大禮記念

昭和漢文叢書

日本外史新釋

亨

文學士　賴成一著



日本外史新釋　亨册

目次

日本外史新釋　卷五

安藝　賴山陽先生原著　　賴成一解義

新田氏前記

楠氏

北畠氏　菊池氏　名和氏

兒島氏　土居氏　得能氏

〔敍論〕本論の大旨は、承久の亂以來、皇室では北條氏に對して憤怨してゐられた。後醍醐天皇の時北條氏を討たれたのは尤も千萬のことである。この際、楠氏の功は最なるものであつたから、こゝに特に標出して楠氏のことを叙べるのであるといふ意。

外史氏曰、余修將門之史、至於平治・承久之際、未嘗不舍筆而歎也。嗚呼、世道之變、名實之不相讐、一至於此歟。

訓讀　外史氏曰く、余將門の史を修め、平治・承久の際に至り、未だ嘗て筆を舍てゝ歎ぜずんばあらざるなり。嗚呼、世道の變、名實の相讐らざる、一に此に至るか。

通釋　外史氏が曰ふのに、自分は武門の歴史を編修してゐて、平治承久の邊に來ると、いつでも書きかけた筆を置いて、歎息せぬことはないのである。あゝ、世の道德なるものが廢れて終つて名前と實際とが合はなくなつたことはよくもこんなにまでなつたものである。

語釋　平治承久之際（平治元年信賴義朝の亂あり。承久三年義時三帝を遷す。）○名實不讐（武臣の名があつて少しも其の實なく君を犯すこと）

餘論　以上第一段議論の發端で、世道の變化したことを歎じたのである。

古之所謂武臣者、勤王云爾。如源氏・平氏、莫不皆然。至於平治之後、乘綱維之弛、以逞鴟梟之欲、有桀悍無忌者焉、有雄猜叵測者焉。雖所爲不同、而其蔑王憲、營私利、一耳。然猶有可言。曰、王族也、將家也。至於北條氏、以將門屬隷、而坐制朝廷、天下之事、不復忍言也。且夫承久之事、孰曲孰直、筆而傳之者、皆出北條氏盛時、今安考信

焉。況君臣之際、寧可較曲直也。乃指斥馮怒、極其凌辱、視萬乘之尊、不啻如孤豚。

〔訓讀〕古の所謂武臣なる者は、王に勤むと云ふのみ。源氏・平氏の如き、皆然らざるは莫し。平治の後に至り、綱維の弛むに乘じ以て鴟梟の欲を逞しうし、暴悍にして忌む無き者有り、雄猜にして測られざる者有り。爲す所同じからずと雖も、而も其の王憲を蔑にし、私利を營むは一のみ。然れども猶ほ言ふ可きあり。曰く、王族なり、將家なり。北條氏に至つては、將門の厮隷を以てして、坐ながら朝廷を制す。天下の事、復言ふに忍びざるなり。且つ夫れ承久の事は、孰れが曲、孰れが直、筆して之を傳ふる者、皆北條氏の盛時に出で、今、安んぞ信を考へん。況んや君臣の際、寧ぞ曲直を較ぶ可けん。乃ち指斥馮怒、其の凌辱を極め、萬乘の尊を視ること、啻に孤豚の如きのみならず。

〔通譯〕昔の所謂武臣なるものは皇室に忠勤を擢んでるといふより外はなかつたのである。源氏といひ、平氏といひ、皆左樣であつたのである。所が平治から後になつて、朝廷の紀律が弛んで來たのにつけ込んで、鴟梟のやうな强慾を、思ふ樣滿たし、中には兇暴で慓悍な、誰に憚る所もなく、惡事をなした淸盛のやうな男もあつたし、又猛々しく、嫉妬深い心の底の分らぬ賴朝のやうなものもあつた。そのやつた事はそれ〳〵違つては居るが、朝廷の御法度を無視して、自分一個の利益を計つたことは皆同じであつた。併し彼等には、まだ言譯の立つ所があつた。それは、何んと言つても、彼等は、王族であつたり、或は將家であつたりしたのであるから。所が北條氏となると、元來源家の家臣であるくせに、じつとしてゐて朝廷を抑へつけてゐた。斯うなると天下の事は迚もお話にもならぬ次第である。それに、あの承久の一件は、天子と北條氏と何れが、善いのか、惡いのか、(分つた者

でない。それは）此の事件を書いて後世に傳へた歴史がどれも皆北條氏の盛んな時代に出來たものであるから、今日どうしてその眞否を知ることが出來ようぞ、出來ぬことである。よし朝廷が曲であつたとしても君臣の道として、君、君たらずとも、臣は臣たらざるべからずであり、曲直抔を較べて論議すべき筋合でない。しかるに、北條氏は朝廷の惡事を指摘して、非常に怒り此の上もない凌辱を加へ奉り、尊い天子を見ることまるで豚一疋にも及ばない程であつた。

【語釋】鴟梟（惡鳥、兇暴に喩ふ。）○指斥馮怒（天子を斥け、非常に怒ること。）

【餘論】以上第二段、武門の次第に跋扈するに至つたことを叙べて、名實の當いなくなつたことをいふ。

嗚呼、八洲生民、誰不被先王之遺澤。當時所謂武士者、狃其豢養、供其使嗾、雖名位族望遠出其右者、奔走驅馳、甘爲之役之不暇。氣類所召、習以爲常。豈可勝言哉。即稱爲公卿者、平時趨蹌朝廷之上、取天子之爵秩、以驕天下。而及於此際、未嘗畫一策以救危難。袖手傍觀、以聽其所爲。是曷尤於武人邪。雖時勢有所未可、君德有所未洽、以致乎此禍、而亦臣子之罪矣。自是以來、百餘年間、廢立黜陟、一仰其處分。而朝廷煢煢、如被束縛。至於窺其顏色、以爲憂喜。何其甚也。

【通釋】嗚呼、八洲の生民、誰か先王の遺澤を被らざらん。當時の所謂武士なる者は、其の豢養に狃れ、其の使嗾

に供す。名位、族望、遠く其の右に出づる者と雖も、奔走驅馳、甘んじて之が役を爲すに之れ暇あらず。氣類の召く所、習うて以て常と爲す。豈に言ふに勝ふ可けんや。卽ち稱して公卿と爲す者は、平時、朝廷の上に趨蹌し、天子の爵秩を取り、以て天下に驕る。而も此の際に及んで、未だ嘗て一策を畫し、以て、危難を救はず。袖手傍觀し、以て其の爲す所に聽す。是れ曷ぞ武人のみを尤めんや。時勢未だ可ならざる所有り、君德未だ洽からざる所有りて、以て此の禍を致すと雖も、而れども亦臣子の罪なり。是より以來、百餘年間、廢立黜陟、一に其の處分を仰ぐ。而して朝廷は、蹙蹙として束縛せらるゝが如く、其の顏色を窺ひ、以て憂喜を爲すに至れり。何ぞ其れ甚だしきや。

通釋 あゝ、この大八洲の人民たる者、何人か、御歴代天皇の殘された御恩澤を被らない者があらうぞ。それにも拘はらず、當時の所謂武士なる者は、北條氏に養はれ、その恩に狃れ、その使役するがまゝになり、朝廷を後廻にしてゐた。官爵家柄が、はるかに北條氏よりも上の者でも、その命を受けて、かけ廻りいゝ氣になつて北條氏にこき使はれ寸暇もない有樣だ。同氣相求め、同類相呼び合つて遂にはそれが習慣となり、普通の事と思ふ樣になつた。實に御話にもならないことである。一方公卿と稱する者共は何うであつたかといふに、平常朝廷にあつて要領よく立ち廻つて天子の爵位高祿を我が物にして、それを振り廻して天下に威張り散らして居た。而も承久の際の如き大事に當つて、彼等公卿は一つでもよい謀を考へ出して、天子の御危難を救つたかといふと、中々左樣なことは藥にしたくもなかつた。たゞ懷ろ手をして、眺め過ごし、北條氏のするが儘に委かして置いた。こんな狀態だから此の場合武人だけを咎め立てられもせぬ譯である。實際當時の時勢が惡く、天子のお德も十分行き渡らなかつた爲めに、遂に遠方にお流されなさるゝといふ禍を來したのであらうが、併しこんなことにな

るのには矢張り朝廷の公卿共が無責任であつた爲めである。承久の亂後、百餘年の間といふものは天子を廢立したり、公卿將軍を進退したりすることは皆一々北條の處置を仰いでゐたのである。そして朝廷では身を縮めて小さくなられ、まるで縛られでもしたやうに、北條の顏色を窺つて、心配したり、喜んだりしてゐられた。何といふひどいことではある。

【語釋】八洲（大八洲のこと）〇豢養（鳥獸の人に養はれること）〇趨蹌（上手に周旋すること。）〇袖手傍觀（天皇方の流され給ふのを傍觀したのである。）〇百餘年間（承久の亂から高時の滅ぶ迄）

【餘論】以上第三段、武士も公卿も天子も皆北條氏に制せられるに至つたことを叙べて、武臣愈々其の名に負いて名實の當らないことを上ぐ。

余聞、後鳥羽上皇之徙隱岐也、因石窟縛屋、纔庇風雨、十有九年乃崩。蓋父子三帝隔絕千里、各居窮海、終天不得相見。是其心何嘗一日忘北條氏哉。則元弘之事、萬不可已也。而其勤王之功、余以楠氏爲第一。微楠氏、則西狩之駕、吾見其與承久歸一轍而止而已。

【通釋】余聞く、後鳥羽上皇の隱岐に徙さるゝや、石窟に因つて屋を縛し、纔に風雨を庇ひ、十有九年にして乃ち崩ずと。蓋し父子三帝、千里に隔絕し、各窮海に居り、終天相見るを得ず。是れ其の心に何ぞ嘗て一日も北條氏を忘れんや。則ち元弘の事は、萬已む可からざるなり。而して其の勤王の功は、余、楠氏を以て第一となす。楠氏微りせば、則ち西狩の駕、吾れ其の承久と一轍に歸して止むを見んのみ。

〔通釋〕後鳥羽上皇が隱岐に從され給うた時には巖屋を利用して、それに屋根を葺き、やつと風雨を避けられる程度にしたさうで、其の中に十九年もお住居なされ、終に其處で崩御せられたといふことを聞いてゐる。思ふに父子三上皇には別々に千里を隔てゝ、流され給ひ、皆遠き海島にお在しまし、この世の有らむ限り、二度と御面會もお出來なされなかつた。だから、三上皇の御心の中にはどうして一日たりとも北條の暴虐なる處置をお忘れなされようぞ。(怨んで居られたに違ひない。)されば元弘年間後醍醐天皇が高時討伐をなされたのは萬々已むことの出來ないことであつたのである。そして、この元弘の際、天子の爲めに働いた功勞者も多いが自分は、楠氏を勳功第一番とするのである。若し楠氏が無かつたなら、後醍醐天皇隱岐の御幸は承久の場合と同じ事となり、再び京都に還幸せらるゝこともなく終られたことであらうと思ふ。

〔語釋〕三帝(後鳥羽、土御門、順德)○隔絶千里(後鳥羽は隱岐、土御門は土佐、順德は佐渡、その間千里を隔つ)○西狩(狩は巡幸の意)

何哉。彼北條氏雖失於政、其權力有更甚焉。藉累世之威、而加積弱之餘、百萬虎狼、隨其指呼、煦咻中國、莫之或攖。天下方以承久無戒、重踵屏息、莫敢言勤王之事。而楠公獨以眇眇之軀、唱義其間、當其衝路、挫其爪牙、以鼓舞四方義士之氣、使之一時踵起、殄戮元惡斧鉞之下、報列聖之深仇、雪累世之大恥、天下萬姓、再得仰日月之光。雖曰屬皇運之泰、而非公爲之唱、焉能至此。是烏知非天生斯人以匡濟世道

哉。

〔訓讀〕何ぞや。彼れ北條氏政を失ふと雖も、其の權力は更に甚だしきあり。累世の威を藉りて、積弱の餘に加へ、百萬の虎狼、其の指呼に隨ひ、中國に咆哮せば、之に攖るゝある莫し。天下方に承久を以て戒となし、踵を重ね、息を屏け、敢て勤王の事を言ふ莫し。而るに楠公獨り眇々の軀を以て、義を其の間に唱へ、其の衝路に當り、其の爪牙を挫き、以て四方義士の氣を鼓舞し、之をして一時に踵いで起らしめ、元惡を斧鉞の下に殄戮し、列聖の深仇を報い、累世の大恥を雪ぎ、天下の萬姓、再び日月の光を仰ぐを得しむ。皇運の泰に屬すと曰ふと雖も、而れども公之が唱を爲すに非ざれば、焉んぞ能く此に至らん。是れ烏んぞ天斯の人を生じ、以て世道を匡濟するに非ざるを知らんや。

〔通釋〕何故楠氏を第一番とするか。それは下の理由による。彼れ北條は、政治上に失敗をやつてゐたが、併しその權力は其の父祖の世に比べて一層強いものがあつた。北條九代の權勢を憑みにして、それを以て、後白河帝以後益々衰へ給ひし朝廷にのぞみ、百萬の虎狼にも等しい猛將悍卒は彼の指圖のまゝに、國内に猛り狂ふのであつて、誰こそ之に觸れて防がうとする者もない有樣であつた。天下の者は、承久の事變を戒となして、（官軍に屬いた者は憂目を見た）北條に敵對しようともせず、足を重ね、息を殺して勤王の事を言はうとする者とてなかつた。而るに、楠公は獨り小身の軀を以て、大義をかゝる世に唱へ出し、北條の攻め寄せる正面にぶつかり、北條の爪牙となつてゐる將卒を打ち破り、以て天下の義士の氣を勵まし、それ等の義士をして一時に相繼いで奮起せしめ、とう／＼大惡人の張本、北條高時を一擊の下に誅殺し、後鳥羽天皇以後御歷代の御無念を報い參らせ、代

々の此の上ない大恥辱を清め奉り、天下の萬民が再び皇室の御聖德を仰ぐことの出來るやうにしたのである。勿論皇室の御運の開ける時に當つてゐたのではあらうが、楠公が最先きに立つて義を唱へなかつたら、どうして此くまで都合よく運ばうや。して見れば、或はこれは天が特に斯の楠公を此の世に降し廢頽してゐた世の道德を正し救ふやうにしたのかも知れない。

【語釋】 炰咻（自ら誇り、氣健なること。）○攖（引つかゝる。）○日月之光（天皇の德光に喩ふ。）○皇運之泰（泰は大に通ずること。易の地天泰より來る。）

【餘論】 以上第四段、楠氏の功は元弘第一で、世道人心を維持した功を叙ぶ。

後之論者、或有比之唐張巡者。巡戴全盛之唐室、拒狂胡之偏師。有二顏爲之先。有許遠爲之助。而不過遮蔽江淮、守城致死。以公視之、勢之難易、功之大小、豈可同日而語也。

【訓讀】 後の論者、或は之を唐の張巡に比する者あり。巡は全盛の唐室を戴き、狂胡の偏師を拒ぐ。二顏之が先を爲すあり。許遠之が助を爲すあり。而れども江淮を遮蔽し、城を守り死を致すに過ぎざりき。公を以て之に視ぶれば、勢の難易、功の大小、豈に日を同じうして語る可けんや。

【通釋】 後世の論者の中に、楠公を唐の張巡に比べるものがある。併し張巡は全盛を極めた唐の皇室を上に戴いて兵を擧げ、狂暴なる胡人の一隊を拒いだだけである。（楠公のやうに北條全軍に當つたのと事が違ふ。）其の上、顏眞卿・顏杲卿の二人が張巡に先き立つて、義兵を起したのである。（楠公は張巡と異り唱首である。）又許遠といふ

勇士が、その助けとなつてゐた。（楠公は孤立無援）それ程の良い條件を具へてゐて、彼れ張巡の爲したところは、江淮地方を賊に取られぬやうに遮りかばひ、睢陽城を守つて討死したといふだけである。楠公を之に比べると形勢の難易（楠公の形勢は困難、巡のは易く）、その功の大小（楠公の功は大、巡のは小）とても同日に語ることは出來ない

〔語釋〕張巡（安祿山の亂の時に働いた忠臣。）○狂胡（安祿山を斥す。）○偏師（祿山の副將令狐潮、尹子奇等の軍勢。）○江淮（江も淮も河の名。）

〔餘論〕以上第五段、客として張巡を出だし、これを比較して楠氏の功の大なるをいふ。

要之、位不滿其器、莫能展其才、而終能以躬殉國、靖獻先王、餘烈所及、不獨其子孫、自公卿、自將士、各執弓箭、以勤王事、概皆聞楠氏之風而起者也、嗚呼、如楠氏者、眞可謂不愧武臣之名矣。余故叙楠氏之事、以繼源平氏云。

〔讀方〕之を要するに、位其の器に滿たず、能く其の才を展ぶる莫し。而れども終に能く躬を以て國に殉ひ、先王に靖獻す。餘烈の及ぶ所、獨り其の子孫のみならず、公卿より、將士より、各々弓箭を執り、以て王事に勤むるは、概ね皆楠氏の風を聞いて起れる者なり。嗚呼、楠氏の如き者は、眞に武臣の名に愧ぢずと謂ふ可し。余、故に楠氏の事を叙して、以て源平氏に繼ぐと云ふ。

〔通釋〕之を要するに楠公はその位が卑くてその器量に相當しなかつたので折角の才能をも充分に伸ばすことが出來なかつた。けれども結局お國の爲めに身を棄て御歴代の天子の爲めに義を盡した。その忠義であつたことの

影響はたゞ楠公の子孫にばかりではなかつたので、公卿からも將士からも各〻弓矢を執つて天子の爲めに働く者が續出し、それが大抵皆楠公の風を聞いて起つたものであつた。あゝ、楠公の如きは、まことに、武臣といふ名前に愧ぢない人といふべきである。だから自分は楠氏の事を叙べて源平二氏の後に引繼いで書き載せることにしたのである。

【語釋】靖獻（靖は安、義を盡すに安んずること、そして自ら先王に獻ずること。先王の爲に心を盡すこと。）○自二公卿一自二將士一（公卿は源親房、忠顯、顯家、將士は新田、菊地、土居、得能の諸氏）

【餘論】以上第六段、結尾、楠氏が古の武臣の名に愧ぢないで、名實相當つてゐることをいふ。

楠氏、本姓橘氏、出二於敏達天皇一。天皇曾孫曰二諸兄一。爲二左大臣一、賜二姓橘一。橘氏後裔或降在二民間一。其居二河內一者、以レ楠爲レ氏。楠氏始著二於後醍醐天皇之時一云。

【訓讀】楠氏、本姓は橘氏、敏達天皇に出づ。天皇の曾孫を諸兄と曰ふ。左大臣と爲り、姓橘を賜はる。橘氏の後裔、或は降りて民間に在り。其の河內に居る者、楠を以て氏と爲す。楠氏は、始めて後醍醐天皇の時に著はると云ふ。

【通釋】楠氏は本姓、橘氏で、もと敏達天皇から出た家柄である。敏達天皇の曾孫に諸兄といふ方がゐられた。その方が左大臣に爲られ、橘といふ姓を賜はられた。その橘氏の子孫で、中に民間に降つて居るものがあつた。その河內に居る者が楠を以て氏となしてゐた。楠の一族は後醍醐天皇の時初めて世に著はれたといふこ

とである。

天皇於後鳥羽爲玄孫。後鳥羽二子、順德・土御門二帝、並爲北條氏所徙、以崩。後嵯峨帝以土御門之皇子、爲北條氏所立。而常痛先帝之蒙塵、欲俟時報之。而後深草・龜山、相繼卽位。皆帝之子也。帝謂後深草優柔不足與有爲、而愛龜山有英氣可以繼其志。故遺詔、龜山之後、永承皇統。故後宇多以龜山太子立卽位。而北條氏立後深草之皇子、又立其皇孫、承其後。後宇多上皇遣大納言藤原定房、責其再違遺詔、乃立上皇皇子。實後二條帝。遂建兩統更立之議。及帝崩、又立後伏見之弟。時後宇多、次子尊治、幼有英質。龜山上皇奇之、遣定房、諭北條氏而立之。是爲後醍醐天皇。

[illegible] 天皇は後鳥羽に於て玄孫たり。後鳥羽の二子、順德・土御門二帝、並に北條氏の徙す所と爲り、以て崩ず。後嵯峨帝は、土御門の皇子を以て、北條氏の立つる所と爲る。而して常に先帝の蒙塵を痛み、時を俟つて之を報いんと欲す。而して後深草、龜山相繼いで位に卽く。皆、帝の子なり。帝、後深草は優柔にして、與に爲す有るに足らずと謂ひて、龜山の英氣有り、以て其の志を繼ぐべきを愛す。故に遺詔して、龜山の後、永く皇統を承けよと。故に後宇多、龜山の太子を以て、立つて位に卽く。而るに北條氏、後深草の皇子を立て、又其の皇

孫を立てゝ、其の後を承けしむ。後宇多上皇、大納言藤原定房を遣はし、其の再び遺詔に違ふを責む。乃ち上皇の皇子を立つ。實に後二條帝たり。遂に兩統更立の議を建つ。帝崩ずるに及んで、又後伏見の弟を立つ。時にを後後宇多の次子尊治、幼より英質あり。龜山上皇、之を奇とし、定房を遣はし、北條氏を諭して之を立てしむ。是醍醐天皇と爲す。

【通釋】後醍醐天皇は後鳥羽天皇に對しては玄孫に當らせられる。後鳥羽天皇の二子、順德・土御門の二帝はいづれも北條氏の爲めに遠方へ移され給ひ、配所に在つて崩御せられた。後嵯峨天皇は、土御門天皇の皇子で、北條氏の立てた所である。後嵯峨天皇は常に先帝が邊地に移され給うたことをお痛みなされ、いつか時機を得たら仇を報いようと思召し居られた。それから後深草・龜山の二帝、相繼いで御位にお卽きなされた。皆後嵯峨天皇の皇子であつた。後嵯峨天皇は、兄の後深草天皇が優にしてやさしく、到底共に大事を爲すことは出來ないとお思ひになり、それよりは弟の龜山天皇の方がすぐれた氣象があつて、北條討伐の志を繼ぐことが出來ると思召し、龜山天皇を愛せられた。故に遺詔してのたまはしく龜山の子孫が永く皇統を繼げよと。そんな譯で後宇多天皇は、龜山天皇の太子になられて、後に位に卽かれた。而るに北條氏は後深草天皇の皇子(伏見天皇)を立て、又その皇孫(後伏見天皇)を立てゝ、其の跡目をお繼がせ申した。後宇多上皇は大納言藤原定房をお遣はしなされて、二度も、後嵯峨天皇の御遺詔に反いたことを責めさせられた。そこで北條氏は後宇多上皇の皇子を立てた。これが實に後二條天皇である。かくて遂に北條氏は後深草・龜山兩帝の御子孫が更番に御位に卽かせられるといふ意見を定めた。後二條天皇が崩ぜられ、又後伏見天皇の弟を立てた。當時、後宇多天皇の第二皇子の尊治親王は幼い時から勝れた氣象であらせられた。龜山天皇は之を並々の者でないと思召しなされ、定房をお遣はしになつ

て、北條氏に申し含めて之を立てしめられた。これが後醍醐天皇である。

【語釋】玄孫（孫の孫を玄孫といふ、後鳥羽—土御門—後嵯峨—龜山—後宇多—後醍醐）○蒙塵（天子が戰亂のために外に逃ぐるをいふ。）

當天皇之時、北條高時失政。其家宰長崎高資等恣權、將士離心、多背叛者。天皇陰謀乘是時討滅之、乃勵精求治、置記錄所、親聽訟訴、與大納言藤原資朝・右少辨藤原俊基等謀、稍延攬豪傑、置酒款語、破禮節、結驩心、目曰無禮講。美濃人土岐賴兼・多治見國長與焉。

【讀方】天皇の時に當り、北條高時、政を失ふ。其の家宰長崎高資等、權を恣にして、將士、心を離し、背叛する者多し。天皇、陰に是の時に乘じて、之を討滅せんことを謀り、乃ち精を勵まし、治を求め、記錄所を置き、親ら訟訴を聽く。大納言藤原資朝・右少辨藤原俊基等と謀り、稍く豪傑を延攬し、置酒款語し、禮節を破り、驩心を結ぶ。目けて無禮講と曰ふ。美濃の人、土岐賴兼・多治見國長與れり。

【通釋】後醍醐天皇の時に當つて、鎌倉の執權北條高時は、政治を失くぢつてゐた。北條家の切り盛りをしてゐた長崎高資等は、權力を恣まゝにし、それが爲めに將士は北條家から心を離し、背き叛する者が多かつた。後醍醐天皇は、このよい時につけ込んで、北條を討ち滅し、天下の實權を皇室にお取り戻しにならうと、こつそり御計畫になり、そこで天皇は御精を出されて立派な政治を心掛け給ひ、記錄所といふ役所を設置なされ、天皇御

自身民の訴訟事を聴し召された。大納言の藤原資朝や、右少辨の藤原俊基等と御相談になり、追々と天下の豪傑を味方に引き入れ給ひ、酒盛りをなされて、至極打ちくつろいで語り合ひ給ひ、禮儀作法を破つて、豪傑共と障壁のない打ち融けあつた心を結ばれた。それを名づけて無禮講といつてゐた。美濃の人士岐頼兼や、多治見國長なども其の仲間であつた。

【語釋】家宰（家臣の長、内管領といはれたもの。）○記録所（天下の訴訟を裁く所。後三條天皇の時に始めて置かれたといふことである。）○右少辨（右大辨といふのは太政官に屬し、兵部・刑部・大藏・宮内を管する。其の部下に右中辨右少辨がある。皆右大辨を助けて事を行ふ者。）○無禮講（知積院の僧玄慧の講談を聞くのに事よせて、集會されたことから講といふ字を用ひられたのである。）

頼兼族頼春、娶齋藤利行女。利行、六波羅府吏也。一夕、頼春偶與妻語、泣下。妻問「何泣」。頼春告實。妻走告其父。父告之六波羅。府發兵襲頼兼・國長。二人力鬪、不克自殺。高時聞之、遣兵來執資朝・俊基。帝因賜誓書、事得寢。乃釋俊基、流資朝。而帝志益鋭。與皇子護良謀、收結南都・叡山僧徒。

【訓讀】頼兼の族頼春、齋藤利行の女を娶る。利行は、六波羅の府吏なり。一夕、頼春、偶ゝ妻と語り、泣下る。妻問ふ、「何をか泣く」と。頼春、實を告ぐ。妻走りて其の父に告ぐ。父、之を六波羅に告ぐ。府、兵を發して、頼兼・國長を襲ふ。二人力鬪し、克たずして自殺す。高時、之を聞き、兵を遣はし來りて資朝・俊基を執へしむ。帝、因つて誓書を賜ひ、事寢むを得たり。乃ち俊基を釋し、資朝を流す。而して帝の志益ゝ鋭し。皇子護良と

謀り、南都・叡山の僧徒を收結す。

【通釋】頼兼の一族の頼春は、齋藤利行の娘を家内にしてゐた。この利行は六波羅の役所の役人であつた。ある晩頼春は不圖妻と話してゐる時、涙をボロ／＼流した。妻は何故お泣きなさるゝかと尋ねた。頼春は實はコレコレシカ／＼と事の次第を告げた。妻は走つてその事を自分の父に告げた。父は早速之を六波羅に告げた。そこで六波羅府では兵を繰り出して、頼兼や國長を襲撃した。二人の者は力め闘つたが、克つことが出來なくて、自殺して果てた。北條高時はその事を聞き、兵を遣はして、京へ上らせ資朝や俊基を執らへさせた。それで後醍醐天皇に於かせられては、北條氏に對して異心ないといふ誓ひの御書を北條氏へ下し賜はつて、此の事件は、それなりになつて終つた。そこで俊基を許し、資朝を流した。けれども後醍醐天皇の御志は愈ゝ益ゝ鋭くなり給うた。皇子の護良親王と御相談遊ばされ、奈良や比叡山の僧徒に機嫌を取り結ばれた。

【語釋】泣下（官軍に與みして討死すれば妻と別れねばならぬ。それに妻の父とは敵同志となる譯である。これが思はず泣の下つた所以。）〇賜誓書（天皇より下されるから賜ふとしてある。）〇流資朝（佐渡に流した。）

高時又覺之、捕僧圓觀等、再執俊基。遂與宰高資定議、欲廢帝如承久故事、遣二階堂貞藤、濟兵西上、夜至六波羅。府將北條仲時・北條時益、得高時書、未發封也。帝諜知之、乃用護良計、御藍輿、逃之南都、使大納言藤原師賢服袞衣、詐稱帝、赴叡山。僧徒大喜來聚、一夕得萬人。而仲時・時益謂帝猶在宮中也、遣兵索之、不獲。則收大納

言藤原宣房等四人而去、以萬人攻叡山。護良等擊卻之。而僧徒知帝非眞、悉散去。

訓讀 高時又之を覺り、僧圓觀等を捕へ、再び俊基を執ふ。遂に宰高資と議を定め、帝を廢する承久の故事の如くせんと欲し、二階堂貞藤を遣はし、兵を潛めて西上し、夜、六波羅に至らしむ。府將北條仲時・北條時益、高時の書を得、未だ封を發せず。帝、諜して之を知り、乃ち護良の計を用ひ、籃輿に御し、逃れて南都に之き、大納言藤原師賢をして、袞衣を服し、詐りて帝と稱し、叡山に赴かしむ。僧徒大に喜び來り聚り、一夕にして萬人を得たり。而して仲時・時益は、帝猶は宮中に在りと謂ひ、兵を遣はして之を索めしめしが、獲ず。則ち大納言藤原宣房等四人を收めて去り、萬人を以て叡山を攻む。護良等擊つて之を卻く。而して僧徒、帝の眞にあらざるを知り、悉く散じ去る。

通釋 高時は又その事を覺り、僧の圓觀等を捕へ、再度俊基を執へた。とう〱宰高資と評議を定め、後醍醐天皇を廢し、昔承久年間に天皇を徙し奉つた前例のやうにしようと思つた。それで二階堂貞藤を遣はし、兵をかくして京都に上らせ、夜六波羅に着いた。六波羅府の大將の北條仲時と、北條時益とは、高時からの書面を得たが、そのまゝまだ封も切らずに、見ないでゐた。一方天子樣の方では廻し者の知らせで、北條の存意をお知りになり、そこで護良親王の御計をお用ひになり、竹のお乘り物に召されて、奈良へ落ち延びさせられ、そして大納言の藤原師賢をして、天子の御衣を着けさせ、詐つて天皇なりと稱し、比叡山へ行かしめられた。比叡山の僧徒は、天皇の御幸なされたのを大に喜び、諸方の寺々から聚り來つて、一晩の內に一萬人にまでもなつた。けれども仲時、時益は天子樣はやはり宮中においで遊ばすと考へ、兵を遣つて搜し索めさせたが、もとよりお在で

なさらぬのだから、つかまへようはない。さればとて素手でも還へれぬので、則ち大納言の藤原宣房等四人を捕へて宮中を立ち去り、一萬人の軍勢をつれて比叡山を攻めた。護良親王等は之を擊つて退けた。そしてその內に僧徒もこれ迄眞んとの天子樣と思つてゐた方は、眞んとのお方でないことが解つたので、皆チリ〴〵に散らばり去つて終つた。

〔語釋〕圓觀（法華寺の圓觀、小野の文觀、淨土寺の忠圓等を召し、高時調伏の呪咀をしたことが幕府へ聞えたので、圓觀等を捕へ取調べ實を得たので天子廢立を行はうとするやうになつたのである。）○承久故事（仲恭天皇の御代には後鳥羽、土御門、順德の三上皇が在まし、後鳥羽上皇が政權を幕府から取り戾さうとされた。そこで承久の亂が起り、北條義時は終に天皇を廢し奉り、後堀河天皇を立て後鳥羽上皇を隱岐に、順德天皇を佐渡に、土御門上皇を土佐に、後に阿波に遷し奉つた。）○輿盤（竹で編んだ粗末な乘物）○袞衣（天子の正服をいふ。）

當是時、帝在笠置山。仲時・時益聞之、遣兵來攻、未至。帝下詔四方赴難。莫復應命者。帝憂迫、適夢。「紫宸殿南有大樹、樹下設虛位。二童子來、垂泣白曰、「天下無地容陛下。獨有此座而已。」既覺自念、「文木從南楠。當有姓楠人出扶朕以定禍難。」因召山僧訪之曰、「地方豪傑、豈有姓楠者乎。」對曰、「金剛山之西、有楠正成者焉。正成父、嘗憂無子、與其妻禱於志貴山而生焉。少字多聞、長以材武名。嘗平土寇、以功爲兵衞尉。」帝曰、「是也。」使中納言藤原藤房往召正成。

【訓讀】是の時に當り、帝、笠置山に在ます。仲時・時益之を聞き、兵を遣はし來り攻めしめ、未だ至らず。帝詔を四方に下し難に赴かしめらる。復命に應ずる者莫し、帝憂迫し、適〻夢む。「紫宸殿の南に大樹あり、樹下に虛位を設く。二童子來り、泣を垂れ白して曰く、『天下、地の陛下を容れまつる無し。獨り此の座有るのみ』と」既に覺め自ら念ふ、「文に木南に從ふは楠なり。當に姓楠なる人あり、出でゝ朕を扶けて以て禍難を定むべし」と。因つて山僧を召し、之に訪うて曰く、「地方の豪傑に、豈に姓楠なる者有るか」と。對へて曰く、「金剛山の西に、楠正成なる者有り。正成の父、嘗て子なきを憂ひ、其の妻と志貴山に禱つて生む。少字は多聞、長じて材武を以て名あり。嘗て土寇を平げ、功を以て兵衞尉となる」と。帝曰く、「是れなり」と。中納言藤原藤房をして、往いて正成を召さしむ。

【通解】是の時に當り、後醍醐天皇は笠置の山に在はしました。北條仲時・北條時益は其の事を聞きつけ、兵を繰り出して笠置の山を攻めしめたが、まだ其の兵はやつて來ない。そこで其の間に天皇は四方へ詔を出し給ひ、義兵を起して天子の危難を救ひに來るやうにと仰せられた。併し不都合な者許りで、此の詔命に應ずる者とて無かつた。天皇はいたく御心を惱ませられ、たまたま或る夜、夢を御覽になつた。それは京の御所の紫宸殿の南に大きな木があつて、其の木の下に御座をしつらへてある。忽然として二人の童子が涙を垂れつゝ、君の御前に現はれて「天下中に、陛下を御容れ奉るべき地もなく、お容れ申すことの能きる場所は、たゞ此の座ばかりで御座りまする」と申し上げた。斯くて夢さめて、天皇御自身、つらつら御考へなされるには、「文字で、木といふ字に、南といふ字を附けると楠といふ字になる。これは姓楠といふ者がゐて、其の者が出でゝ朕を助けて、天下の禍を平定して呉れるのだらう」と、かく夢の兆を判斷なされた。そこでお山の坊さんをお呼び寄せにな

り、御相談なされて仰せらるゝに、「此の邊の豪傑に、なんと、楠といふ姓の者がゐるだらうか」と。山僧は「仰せの如く金剛山の西に楠正成と申す者が居りまする。此の者の父の正康と申しまする者が、ヅット以前に、小供の無いのを案じまして、彼の妻と一緒に、志貴山の毘沙門樣にお祈り申して生れた小供が、その正成に御座ります。幼名は多聞と申しましたが、成人しましてからは、大層材藝武勇が勝れてゐるので名高くなりました。以前土民の一揆のありました際に、それを平定致しまして、其の手柄で兵衛尉を授けられました」とお對へ申した。天皇は山僧の言をお聽きになり、「さては夢の兆の人物は、慥かにその者である」と仰せられた。そこで中納言の藤原藤房をお使ひとしてお遣はしになり、正成をお召し出しになつた。

【語釋】笠置山（山城）〇虚位（空の玉座の意。）〇文（文字のこと。）〇木從南（從ふとは附着する意、木ヘンに南といふ字を附ければの意。）〇山僧（笠置山の成就房に住してゐた僧元律師のこと。）〇豈（反語の豈ではない。「其れ」とか、「推量して、なんと」といふやうな意。）〇金剛山（河内）〇志貴山（大和）〇多聞（毘沙門を多聞天といふ。故に多聞と名附け、神慮の子である意を表はしたのである。）

正成卽決意赴之、從藤房詣行在。帝使藤房言曰、「討賊之事、朕一以託汝。」因命座間計。正成感激、對曰、「天誅乘時、何賊不斃。東夷有勇無智。如較於勇、舉六十州兵、不足以當武藏・相模。較於智乎、則臣有策焉。雖然勝敗常也。不可以少挫折變其志。陛下苟聞正成未死也、則毋復勞宸慮。」乃拜辭還。實元弘元年八月也。

【通釋】正成卽ち意を決して之に赴き、藤房に從つて行在に詣る。帝、藤房をして言はしめて曰く、「賊を討つの

事、朕一に以て汝に託す」と。因つて座を命じて計を問ふ。正成感激し、對へて曰く、「天誅時に乘ずれば、何の賊か斃れざらん。東夷は勇あれども智無し。如し勇を較ぶれば、六十州の兵を擧ぐとも、以て武藏・相模に當るに足らず。智を較べんか、則ち臣に策あり。然りと雖も勝敗は常なり。少しく挫折するを以て其の志を變ず可からず。陛下苟も正成未だ死せずと聞きたまはゞ、則ち復宸慮を勞したまふこと毋れ」と。乃ち拜辭して還る。實に元弘元年八月なり。

【通釋】正成は何んの躊躇することもなく、卽坐に心を決めてお召に應じ、藤房に隨つて行在所に罷り出でた。天皇は藤房をして言はしめられた、「こんど賊を討伐することに就いては、朕は專ら其の方に任せるぞ」と。そこで正成に座席を賜り、緩々計を御下問なされた。正成は此の御優遇にひどく感動し、お對へするには、「陛下が討つ可き時をお逃しにならずに、天誅を加へ給ふならば、どのやうな惡者でも斃れぬといふことは御座りませぬ。北條方は勇氣こそあれ、智謀といふものは御座りませぬ。若し勇氣を較べますれば、それこそ日本全國六十州の兵士を全部擧げてかゝつても、北條方の武藏相模の二州の兵士の相手にはなり申さぬ。けれども若し智謀を比較するならば、臣は決して彼等に負けをとる者ではありませぬ。臣には良き計略が有りまする。しかし勝つたり負けたりすることは、軍の常の習でありまする。臣が少し位負け戰であつたからとて、それで討賊の志をお變へなさるやうなことがあつてはなりませぬ。陛下、苟も正成は未だ死なぬと聞こし召さば、屹度大丈夫に御座りまする故、御心安く在られませ」と申し上げた。そこで正成は、君の御前上首尾でお暇して還つていつた。その時は實に元弘元年八月であつた。

【語釋】行在（天子は四海を家となす、故にその行つて在る所が、卽ち御宮である、故に行宮ともいふ。假りの皇居の意なり。）○天誅（天の行ふ誅罰。）○六十州（日本は、六十六州、その大數をあげていふ。）○不レ可

以少挫折變其志（太平記に「一旦の勝負をば必ずしも御覧ぜらるべからず」とあるに當る。志を正成に掛けて見るは宜しくない。）〇元弘（後醍醐天皇の年號）

【餘論】以上二節は太平記の主上御夢の事附楠の事の條を參照せよ。

正成於是城于赤坂、將以奉乘輿焉。而賊兵已圍行在。參河人足助重範善拒、備後人櫻山茲俊、起兵應之。高時乃遣北條貞直・足利高氏等六十三將、以武藏・相模等、五州兵十餘萬騎西上。未至而笠置陷、重範被擒、錦織俊政・石川義純死之。帝與藤房奉神器逃。

【通釋】正成、是に於て、赤坂に城き、將に以て乘輿を奉ぜんとす。而して賊兵已に行在を圍む。參河の人足助重範、善く拒き、備後の人櫻山茲俊、兵を起して之に應ず。高時、乃ち北條貞直・足利高氏等六十三將を遣はし武藏・相模等五州の兵十餘萬騎を以て、西上せしむ。未だ至らざるに、笠置陷り、重範擒にせられ、錦織俊政・石川義純、之に死す。帝、藤房と神器を奉じて逃る。

【大意】そこで正成は赤坂に城を築き、其處へ天皇をお迎へ申さうとした。が併し、賊兵どもは早や既に行在所を取り圍んで終つた。參河の人の足助重範は善く敵を拒ぎ、又備後の人櫻山茲俊は兵を起して官軍に應じた。そこで高時は北條貞直・足利高氏等六十三人の大將を派遣し、武藏・相模等五國の兵十餘萬騎を率ゐて西方都へ攻め上らせた。其の大軍がまだやつて來ない間に笠置が陷落し、重範は生捕にされ、錦織俊政・石川義純は討死し

て終つた。後醍醐天皇は藤房と與に三種の神器を御持參になつてお逃げ遊ばされた。

語釋 赤坂（河内）○善拒（賊將荒尾九郎及び其の弟を射殺した。）○笠置陷（六波羅の兵に攻め落さる。）

於是、貞直等諸軍、徑赴赤坂城。城纔成、取農粟充糧焉。兵僅五百人。正成分其三百、以弟正季・族和田正遠將之、出城、草山而竢東軍。東軍至、望見其城、可方百餘步。乃憫笑曰、「此可隻手掀耳。」爭下馬、肉薄攻之。正成令士卒齊射、立斃千餘人。東兵沮卻、卸甲且息。而伏兵自左右起、正成以二百騎、闢門突出、三面合擊。東軍大驚擾亂、棄器械而走。旦日、東軍分爲二、一備伏、一圍城。正成豫築複垣、縋懸其外垣。敵蟻附焉。乃斷縄。敵與垣俱墜。乃投大石巨材、殺七百餘人。

訓讀 是に於て、貞直等の諸軍、徑に赤坂城に赴く。城纔に成り、農粟を取つて糧に充つ。兵僅に五百人なり。正成、其の三百を分ち、弟正季・族和田正遠を以て、之に將とし、城を出で、山に草はれて東軍を竢たしむ。東軍至り。其の城を望見するに、方百餘步可り。乃ち、憫笑して曰く、「此れ隻手にて掀ぐ可きのみ」と。爭うて馬を下り、肉薄して之を攻む。正成、士卒をして齊しく射しめ、立どころに千餘人を斃す。東兵沮み卻き、甲を卸して且に息はんとす。而して伏兵、左右より起り、正成は二百騎を以て、門を闢いて突出し、三面より合擊

す。東軍大に驚き擾亂し、器械を棄て、走る。且日、東軍分れて二となり、一は伏に備へ、一は城を圍む。正成豫め複垣を築き、縄もて其の外垣を懸く。敵、蟻附す。乃ち縄を斷つ。敵、垣と俱に墜つ。乃ち大石、巨材を投じて、七百餘人を殺す。

【通釋】笠置が陷つたので、貞直等の諸軍は直に赤坂城に攻め寄せた。赤坂では、やつと城の出來上つた時で、農家にあつた穀物を取り立て、兵糧に充當した。其の兵は僅に五百人であつた。正成は其の内三百を別に分けて、弟の正季、族人の和田正遠を以て其の大將となし、赤坂城から出て、山の蔭にかくれて、關東軍の來るのを待たしめた。關東軍がやつて來て、赤坂城を遠くから見るのに、僅か方百餘歩ばかりの小な城だ。そこですつかり馬鹿にしてセヽラ笑ひして曰ふのに「こんな城なら片手でさし上げられる」と。皆我れ勝ちにと馬から下りて、ヒシ〳〵攻め寄せた。正成は部下の士卒に命じて一齊射撃をさせて、卽座に千餘人を討ち斃した。關東軍は意氣折けて退却し、鎧を脫いで一と息入れようとした。すると、正季等の伏兵が左右から急に出て來るし、正成も二百騎を率ゐて、門を開いて突喊して出て來て、三方から力を合せて敵を討つた。關東軍は大に驚き亂れ、ものゝ具を棄て、逃げ出した。其の翌日、關東軍の方では、二隊に分れ、一隊は伏兵に備へることにし、一隊は城を圍んだ。正成は前以て二重の垣を築き置き、縄で以て、其の外側の垣を引つかけ置いた。敵は蟻がクツつくやうに城に取りついて登つて來た。そこで時を見計らつて例の縄を斷ち切つた。敵は垣と一緒に下に墜落した。そこで大きな石や、大きな材木を投げ下して、又七百餘人を殺した。

【語釋】掀（高くさし擧ぐること。）〇東軍分爲レ二（此處が正成の所謂、勇あれども智なしといつたゞである。一度伏兵に遇ふと又伏兵がゐると思ふのである。智惠のない話だ。）

居四五日、東軍修攻具、蒙楯而進、鐵鈎鈎垣。垣殆崩。正成令城兵人執長柄杓、沃沸湯。敵焦爛而退。東兵於是築營環城、爲持久計。而城内餘五日食。正成謂衆曰、「吾先天下舉大事。固不圖生。雖然、天子在焉。吾未可以死也。吾今佯死、敵則去。去則復起、使彼疲奔命。是全軀以亡敵之術也。」衆曰、「善。」乃鑿坑塡尸、以薪蔽之、乘風雨、夜稍稍逃出、入金剛山。留一人、誡曰、「度我遠而舉火。」火起。敵爭上城、見坑中積尸、謂正成既死也、引兵東去、使湯淺定佛代守其城。櫻山氏兵聞之潰散。茲俊自殺。

訓讀 居ること四五日、東軍、攻具を修め、楯を蒙つて進み、鐵鈎にて垣を鈎す。垣殆んど崩る。正成、城兵をして、人ごとに長柄の杓を取り、沸湯を沃がしむ。敵、焦爛して、退く。東兵、是に於て、營を築いて城を環らし、持久の計を爲す。而して城内、五日の食を餘すのみ。正成、衆に謂つて曰く、「吾れ天下に先だち、大事を擧ぐ。固より生を圖らず。然りと雖も、天子在せり。吾れ未だ以て死すべからざるなり。吾れ今佯り死せば、敵則ち去らん。去らば則ち復起り、彼をして奔命に疲れしめん。是れ軀を全うし、以て敵を亡すの術なり」と。衆曰く、「善し」と。乃ち坑を鑿ちて尸を塡め、薪を以て之を蔽ひ、風雨に乘じて、夜、稍稍逃れ出で、金剛山に入る。一人を留め、誡めて曰く、「我が遠きを度りて、火を擧げよ」と。火起る。敵爭うて城に上り、坑中の積尸を見る。正成既に死せりと謂ひ、兵を引きて東に去り、湯淺定佛をして、代つて其の城を守らしむ。櫻山氏の兵

之を聞きて潰散し、茲俊、自殺す。

【通釋】それから四五日經つて、東軍は攻め道具を修復して、楯をかぶつて矢を防ぎ乍ら進み、鐵の熊手で楯を引つかけた。楯が殆んど崩れようとした。正成は城の兵士に命じて銘々長柄の杓を持たせ、沸騰した湯をすくつては敵方へそゝがせた。敵は燒け爛れて退却をした。失敗だらけなので、關東の兵は、兵營を作り、城を取り卷いて、長圍ひの計略をした。一方赤坂城內ではもうあと五日間の食糧を餘すだけである。正成は部下の軍勢に謂つて曰ふのに「自分は天下に率先して大事を起したのである。だから固と〳〵生きるつもりはない。けれども天子樣がお在で遊すことである。自分はまだ中々死ぬる譯には參らぬ。自分が今死んだ振りをすれば、敵は此處から去つて終ふだらう。去つてからまた起れば、敵は又攻めて來るに違ひないから、かくして敵をアチコチと奔走に疲らせる。これが今の場合、自分の身を全うして敵を亡すの手立てゞあるのだ」と。多勢の者は「左樣、左樣」と贊成した。そこで穴を掘つて、討死した者の屍骸を入れ、薪でその上を蔽ひ、風雨のある晩につけ込んで、ぽつぽつ逃げ出して金剛山に入り込んだ。一人だけ殘して置いて、戒めて曰ふのに「我等が城を出て、餘程遠く迄行つた頃を見計らひ、火をかけよ」と。總て火事が起つた。敵はそれ進めと、爭つて城に上つて見ると坑の中に屍骸が積まれて燒けてゐるのを見た。ハヽア此の樣子では、正成は早や既に死んで終つたのだナと思ひ、そこで兵を率ゐて東に去つて終ひ、湯淺定佛をして、代つて赤坂城を守らせた。櫻山氏の兵はその事を聞いて潰え散じ、茲俊は自殺した。

【語釋】使彼疲奔命（命令によつて彼方此方と奔走して、道路に疲勞すること。）〇代守（これ迄は楠が守つてゐたのであるが、それに代つて守る。）

賊執帝于宇治、奉于平等院、遂欲徙之六波羅。帝令備行幸儀乃往。賊乃立後伏見帝子量仁即位。實光嚴帝。請帝傳神器。弗聽。請帝剃髮。又弗聽。每旦沐浴、拜皇祖、如常禮。賊畏憚之。僧良忠謀奪帝、不成。二年二月、高時徙帝于隱岐。其禮比承久頗厚。參議源忠顯・嬪藤原氏從。而賊將佐佐木高氏等、以兵三千護送、由山陽道。兒島高徳又謀奪之、復不成。

【訓讀】賊、帝を宇治に執へ、平等院に奉じ、遂に之を六波羅に徙さんと欲す。帝、行幸の儀を備へしめて、乃ち往く。賊乃ち後伏見帝の子量仁を立て、位に即かしむ。實に光嚴帝なり。帝の神器を傳へられんことを請ふ。聽さず。帝の髮を剃られんことを請ふ。又聽さず。每旦沐浴し皇祖を拜すること常禮の如し。賊、之を畏憚す。僧良忠、帝を奪はんと謀りて、成らず。二年二月、高時、帝を隱岐に徙す。其の禮、承久に比すれば頗る厚し。參議源忠顯・嬪藤原氏從ふ。而して賊將佐佐木高氏等、兵三千を以て護送し、山陽道よりす。兒島高徳又之を奪はんと謀り、復成らず。

【通釋】北條氏の賊どもは、宇治で後醍醐天皇を執へ、平等院にお連れ込み申し、それから天皇を六波羅にお移し奉らうと思つた。天皇は行幸の儀式を用意なさしめられて、それからお往きになつた。斯くて賊どもは後伏見天皇の皇子、量仁親王を推し立て、天子の御位に即かしめた。この御方が實に光嚴天皇と申上げた御方である。

賊は後醍醐天皇に三種の神器を光嚴天皇にお傳へなさるやうにお願ひした。けれどもお許しはなかつた。そこで賊どもは後醍醐天皇に髪を剃り落して、僧籍にお入りになるやうにとお願ひした。けれども、これ又お聽き入れにはならなかつた。後醍醐天皇は毎朝沐浴して、身體をお清め遊ばし、天照皇大神をお拜しになることは、平常の定まつた儀式通りに遊ばした。賊どもは手の下しようもなく、後醍醐天皇の嚴たる御樣子に、畏れ憚かつた。僧の良忠が、何とかして、後醍醐天皇をお奪ひ申さうと謀を廻らしたが、巧く行かなかつた。元弘二年三月、高時は遂に後醍醐天皇を隱岐の島へお流し申した。そのお取扱ひの仕方は承久の時に較べると餘程お手厚くした。參議の源忠顯と、女官の藤原氏とがつき從つた。そして賊の大將佐々木高氏等が、三千の軍勢をつれて護衛して山陽道から送つて行つた。兒島高德が又天皇を途中でお奪ひ申さうとしたが、これも失敗に終つた。

【語釋】行幸儀（行幸の時の儀式を命じて行はせられた所は、天皇の喪に屈服し給はぬ尊い所である。）○良忠（大塔宮の候人。）○比承久頗厚（承久の時、後鳥羽天皇は隱岐に入れられ給うた。それらに比べると餘程お手厚くしたのである。國分寺を以て行在としたといふことである。）○嬪藤原氏（嬪は女官、左近衞中將正四位下藤原公廉の女で名は廉子、三位の局である。）

兒島氏、本三宅氏、世居備前兒島。兒島範長者、爲備後守、子高德、稱備後三郎。帝之在笠置也、範長・高德欲赴援。聞笠置陷、楠氏敗、乃止。已而聞帝西遷、高德謂其衆曰、「吾聞、志士仁人、有殺身以成仁。見義不爲、無勇也。盍要奪駕以擧義」衆奮從之。伏舟坂山而待。久之不至。遣人候之。曰「駕向山陰道」乃間道至杉坂、則已過矣。衆乃散去。

高徳悵恨、不レ能レ去。乃變レ服、尾レ駕而行數日、欲二一見レ帝有レ所レ言、而不レ得レ間。於レ是、夜入二帝館一、白二櫻樹一而書レ之曰、「天莫レ空二勾踐一。時非レ無二范蠡一。」旦日、護兵聚視、不レ能レ讀也。乃奏レ之。帝熟二視之一、欣然心知レ有二勤王者一也。

【訓讀】兒島氏は本と三宅氏、世〻備前の兒島に居る。兒島範長なる者、備後守となり、子高徳、備後三郎と稱す。帝の笠置に在るや、範長・高徳、赴き援けんと欲す。笠置陷り、楠氏敗ると聞き、乃ち止む。已にして帝の西遷を聞き、高徳其の衆に謂つて曰く、「吾れ聞く、志士仁人は、身を殺して以て仁を成す有り。義を見て爲さざるは勇なきなりと。盍ぞ要して駕を奪ひ以て義を擧げざる」と。衆奮つて之に從ふ。舟坂山に伏して待つ。之を久しうして至らず。人を遣はして之を伺はしむ。曰く、「駕、山陰道に向ふ」と。乃ち間道より杉坂に至れば、則ち已に過ぎたり。衆乃ち散じ去る。高徳悵恨して去る能はず。乃ち服を變じ、駕に尾して行くこと數日、一たび帝に見えて言ふ所あらんと欲すれども、間を得ず。是に於て、夜、帝の館に入り、櫻樹を白げて之に書して曰く、「天、勾踐を空しうする莫し、時に范蠡無きに非ず。」と。旦日、護兵聚り視れども、讀む能はざるなり。乃ち之を奏す。帝之を熟視して、欣然心に勤王の者あるを知れり。

【通釋】兒島氏はもと三宅氏で、代々備前の兒島に居つた。兒島範長なる者が備後守となり、其の倅の高徳は備後三郎と稱してゐた。後醍醐天皇が笠置にお在でなされた時、範長と高徳とは援けに行かうと思つてゐた。所が笠置が陷落し、楠正成が敗れたと聞いたものだから中止して終つた。その内に高徳は、後醍醐天皇が西遷（隱

岐）へお遷され給ふと聞き、部下の軍勢に謂つて曰ふには、「自分は斯ういふことを聞いてゐる、仁に志す士や、仁徳を備へた人は、寧ろその身を殺して、仁を成すものであると。又人の履むべき道を見て、逡巡して之を爲さないのは勇氣のないといふものであると。（今後醍醐天皇を奉じて、その爲めに働くことは、卽ち仁を成すことまたそれが臣子としての履むべき義である。）どうだ、一つ、君等は拙者と一緒に、途中に天子樣をお待ち受けして、天子樣をお奪ひ申上げ、義兵を擧げ、一働きする氣はないか」と。多勢の者は奮つて之に從つた。そこで舟坂山にかくれて天子樣の一行を待ち伏せした。所がいつまで經つてもおいでにならない。人を遣つて樣子を搜ぐらせた。すると、「天子樣は山陰道の方面へお向ひなされた。」と曰ふ。そこで裏道から杉坂まで行くと、早や旣に天子樣はお通りになつて終つた後であつた。多勢の者は散じ去つて終つた。高德はなげき恨み、其處を去ることが出來ぬ。そこで變裝をなし、天子樣の跡をつけて行くこと數日、一度で宜いから、天子樣にお目にかかり、自分の心の中を申し上げ度いと思つたが、其の隙間はなかつた。そこで。夜コッソリ天子樣の御館に入り込み、そこの櫻の樹を削つて白くし、それに次のやうな意味の詩の句を書きつけた「天は決して越王勾踐を見棄てはせぬ。范蠡といふ賢臣を勾踐に下し與へて、會稽の恥を雪がせた。今の時にもその范蠡に相當するものが無いではありませぬ。此處に私が差し控へて居りまする」と。翌日護衞の兵士どもは、寄つてたかつて、櫻樹の詩句を視たけれども、勾踐眼に一丁字無き輩で、讀むことは出來ぬ。そこでこの事を天皇に申し上げた。天皇はつくづくこれを御覽になつて、お喜びになり、ハ、アこれは王事に勤め勵んで吳れる者がゐるのだナとお知り遊ばした。

語釋　志士仁人云々（論語衞靈公篇十五に見ゆ。）○見義不爲云々（論語爲政篇二に見ゆ。）○舟坂山（播磨）○杉坂（美作）○白（樹の皮を削いで白くすること。）○天莫空勾踐（越王勾踐が吳王夫差と戰ひ敗れたが、其の臣の范蠡と謀つて遂に會稽の恥を雪ぎ讐を復した。勾踐を後醍醐天皇に比し、自分を范蠡に比べたのである。其の詩句の意、一說に「天勾踐を空しうすること勿れ、時に范蠡なきにしもあらず」と讀んで、天は勾踐の志を

無效にするな。今日の場合にも昔の范蠡のやうな忠臣がないことはないと解するのであるが、此の說には從ひ兼ねる。）

帝至隱岐、居國府島。高時遂令隱岐守護佐佐木淸高將兵監護焉。又流藤房以下公卿六人、殺藤原俊基等四人。藤原資朝在佐渡。其子國光自京師赴省父。父已爲本間三郎者所殺。國光夜斬三郎而去。高時遂流皇子尊良・宗良・恒良、殺恒性。獨第三子兵部卿護良逃奔吉野。於是、四方無復勤王之師矣。

訓譯 帝、隱岐に至り、國府島に居る。高時、遂に隱岐の守護佐佐木淸高をして、兵に將として監護せしむ。又藤房以下の公卿六人を流し、藤原俊基等四人を殺す。藤原資朝、佐渡に在り。其の子國光、京師より赴き父を省る。父已に本間三郎なる者の殺す所と爲る。國光、夜、三郎を斬つて去る。高時、遂に皇子尊良、宗良、恒良を流し、恒性を殺す。獨り第三子兵部卿護良、逃れて吉野に奔る。是に於て、四方、復勤王の師なし。

通釋 後醍醐天皇は隱岐に御到着なされ、國府島に居られた。高時は鎌倉から遙々隱岐の守護職佐佐木淸高に命令を傳へ、兵を率ゐて天皇を護衛監督せしめた。一方藤房以下公卿六人を流し、藤原俊基等四人を殺した。藤原資朝は佐渡に流されて居た。其の子の國光は、京都から態々父の安否を尋ねに行つた。その時、父資朝は早や本間三郎なる者に殺された後だつた。國光は、夜、當の仇、三郎を斬り殺して其處を立ちのいた。高時は、遂に皇子尊良・宗良・恒良を流し、恒性法親王を殺した。たゞ第三皇子兵部卿護良親王だけは、吉野へお逃げになつ

た。こんな形勢でもう天下には勤王の軍隊も無い有樣となつて終つた。

四月、正成出金剛山、以五百騎、攻赤坂城。城將湯淺定佛、徵糧於紀伊。正成遮奪之、充苞以甲、使三百人荷至城下。別分兵追之。城兵望見、謂敵且奪我糧也、開門納之。三百人取甲於苞而甲、吶喊起鬪。正成奪門而入。定佛不知所爲、乃降。正成幷其兵、將七百騎、徇河內・和泉、悉下之。比及渡部、得二千人。進陣于天王寺。

【訓讀】四月、正成、金剛山を出で、五百騎を以て赤坂城を攻む。城將湯淺定佛糧を紀伊に徵す。正成、之を遮ぎり奪ひ、苞に充つるに甲を以てし、三百人をして荷ひて城下に至らしむ。別に兵を分つて之を追ふ。城兵望見し、敵、且に我が糧を奪はんとすと謂ひ、門を開いて之を納る。三百人、甲を苞より取つて甲し、吶喊し起つて鬪ふ。正成、門を奪つて入る。定佛爲す所を知らず。乃ち降る。正成其の兵を幷せ、七百騎に將とし、河內・和泉を徇へて、悉く之を下す。渡部に及ぶ比、二千人を得たり。進んで天王寺に陣す。

【通釋】四月、正成は金剛山を出で、五百騎をつれて赤坂を攻め立てた。城將の湯淺定佛は兵糧を紀伊から徵發した。正成はそれを途中で橫取りして、俵の中の兵糧は皆拔き取つて、其の中へ鎧を詰め込み、三百人の者に、擔はせて赤坂城下へ行かせた。別に兵を分けてその三百人を追つかけさせた。城兵は之を望み見て、すつかり欺され、これは必定敵が自分の方の兵糧を奪ひ取らうとしてゐるのだと思ひ込み、急いで門を開いて三百人の者を

納れた。三百人の者は早速鎧を俵の中から取り出して、それを身につけ、鬨の聲を揚げて起つて鬪つた。その内に正成は門を奪つて城内へ攻め入つた。定佛は慌てゝ途方に暮れ、どうして宜いか分らない。そこで遂に降參して終つた。正成は定佛配下の兵を合はせ、七百騎に將となつて、河內・和泉に布令を出して皆降參させた。渡部に行きついた頃には二千人の兵を得た。それから尙ほ進んで天王寺に陣取つた。

語釋 渡部（攝津）〇天王寺（攝津）

北條氏、自徙天子、謂天下無復足虞也。及正成起則大驚。六波羅二師、遣隅田通倫・高橋宗康、將五千騎擊之。正成分兵爲四隊、伏其三隊、而以羸兵一隊、扼渡部橋而陣。敵望見易之、輒競渡。羸兵佯走。敵追北過天王寺、陷於伏。急麾兵卻、我兵疾擊乘之。敵兵卻走、不可復制。爭橋而溺者無數。京師爲之謠曰「渡部之川、墜橋決田。」

訓讀 北條氏、天子を徙してより、天下、復虞るに足るなしと謂へり。正成起るに及んで、則ち大に驚く。六波羅の二帥、隅田通倫・高橋宗康を遣はし、五千騎に將として之を擊たしむ。正成、兵を分ちて四隊と爲し、其の三隊を伏し、而して羸兵一隊を以て、渡部橋を扼して陣す。敵、望見して之を易り、輒ち競ひ渡る。羸兵佯り走る。敵、北ぐるを追ひ、天王寺を過ぎて、伏に陷り、急に兵を麾きて卻く。我が兵、疾く擊つて之に乘ず。敵兵卻ぎ走り復制すべからず。橋を爭ひて溺るゝもの無數なり。京師、之が爲めに謠つて曰く、「渡部の川、橋を

墜し田を決す」と。

【通釋】北條氏は後醍醐天皇を隱岐に遷し奉つてからは、もう天下の事は心配するに足る者はないと思つてゐた。所が正成が兵を擧げるに及んで、大に驚いた。六波羅の二人の大將は、隅田通信・高橋宗康を遣はして、五千騎に將として正成を擊たせた。正成は兵を分けて四隊となし、其の內三隊を隱くし置いて、弱り疲れた兵士の一隊を以て、渡部の橋を拒ぎ止めて陣取つた。敵は之を望み見て、馬鹿にしてかゝり、いきなり、我れ先きにと橋を競ひ渡つて來た。弱り疲れた兵士共は佯つて逃げ出した。敵は逃げるのを追つかけて深入りをし、天王寺を通り過ぎ、隱くしてあつた伏兵に陷つたので、慌てゝ兵士に下知し、指招いて、退却しようとした。我が楠氏の兵は急に之を擊つて、敵の弱り目につけ込んだ。敵兵は退走し初めて、迚も制めることは出來なくなつた。狹い橋を爭つて渡らうとするので、川に落ち込んで溺死する者が無數であつた。都の者は之が落首を作つていふのに、「渡部の水いかばかり早ければ、高橋落ちて隅田流るらむ」と。

【語釋】○二帥（北條仲時。時益の二頭梁。）○四隊（第一隊は二百人、高津の森に伏し、第二隊は三百人、三津井寺の森に伏し、第三隊も三百人、神崎に伏した。第四隊は羸兵。）○渡部之川、墜ㇾ橋決ㇾ田（橋は高橋宗康をさし、田は隅田通信をさす。決は決潰すること。川と田とが押韻してゐる。渡部の川の水は、どんなに早いのか、橋をも墜し、田をも決潰して了つたと云つて、高橋隅田の兩名の軍が渡部で散々な目に會つたことを嘲つたものである。これは兩名が戰に敗れて這々の體で逃げ歸つた其の翌日、六條河原に之れを立てゝ、前に掲げた落首を記した。兩人は面目を失ひ、當分假病を使つて役所へ出なかつたといふことである。）

二帥愧ㇾ之、更命宇都宮公綱、以紀清兩黨五百騎代赴。正成族和田某、請逆戰曰、我已勝五千。何有於五百。正成默然良久曰、勝敗之機、在離同、不ㇾ在衆寡。公綱素負勇

名而以寡兵承敗。其將士同心於死可知也。我藉使克之、能無失亡。吾受大任、前途甚遠。而首傷我士、後誰爲我用者。吾將不戰而屈之也」遂拔營而去。公綱代營焉。既夜望四面皆炬火。漸多漸近。乃不釋甲而待者、三晝夜。兩黨懼請歸曰「楠氏兵日加也」公綱乃引歸。正成復軍天王寺、數出耀兵、令軍中禁鹵掠。遠近歸心、多來屬者。正成威振京畿。

【訓讀】二帥、之を愧ぢ、更に宇都宮公綱に命じ、紀淸の兩黨五百騎を以て代り赴かしむ。正成の族和田某、逆へ戰はんことを請うて曰く「我れ已に五千に勝つ。五百に何か有らん」と。正成、默然たること良久しうして曰く「勝敗の機は、離同に在りて、衆寡に在らず。公綱、素より勇名を負ふ。而して寡兵を以て敗を承く。其の將士の心を死に同じくするは、知るべきなり。我れ藉使之に克つも、能く失亡するなからんや。吾れ大任を受け、前途甚だ遠し。而して首に我が士を傷はば、後、誰か我が用を爲す者ぞ。吾れ將に戰はずして、之を屈せんとす」と。遂に營を拔きて去る。公綱代り營す。既にして、夜となり、四面を望むに、皆炬火なり。漸く多く、漸く近し。乃ち甲を釋かずして、待つこと三晝夜なり。兩黨懼れ、歸らんことを請うて曰く、「楠氏の兵、日に加はる」と。公綱乃ち引き歸る。正成復天王寺に軍し、數出でて兵を耀かし、軍中に令して、鹵掠を禁ず。遠近心を歸し、來り屬する者多し。正成の威、京畿に振ふ。

【通釋】六波羅の二師は之を恥ぢ、更に宇都宮公綱に命じて、紀黨・淸黨の名題の强い兵五百騎を率ゐて、高橋・隅田等に代つて正成を攻めにやつた。正成の一族の者に和田某なる者が、此の敵を迎へ度いと願つていふのに「こちらは旣に敵の五千人に打ち勝つことが出來たのです。這次の五百人位の軍勢なら何程の事がありませうぞ」と。正成はやゝ久しく默つてゐたが、その内に口を開いて曰ふに「勝ち負けのはずみといふものは、人心の離れてゐるか、よく一致和同してゐるかに依つて定まるものであつて、決して人數の多寡に由るものではないのである。あの公綱は平素から武勇の名聲の高い男で自ら負む所がある。それが僅かの兵を率ゐて高橋・隅田の失敗した後を承け繼いでやつて來た。これはたゞごとではなく、其の將士共が皆心を揃へて、討死を覺悟してゐることは知れきつてゐる。よしこちらが勝つたとしても、可成りな損害無しでは濟むまい。自分は賊を滅すといふ重大な任務を受けてゐて、これから先き仕事がまだ隨分あるのだ。それを初手から我部下の士を多く傷けるやうなことがあつては、後ち後ち誰れが自分の爲に働いて吳れる者が有らうぞ。自分は戰はないで敵を屈せしめる工夫をしようと思ふ」と。とうとう兵營を引き拂つて、其處を立ちのいた。公綱は代つてその天王寺の兵營に入り込んで、そこへ陣取つた。其の内に夜になつて、公綱は四方を望み見るに、皆松火で充ち滿ちてゐる。それがだんだん澤山になつて、次第に近づいて來る。そこで公綱等は危くて鎧も脫げない、今來るか、今來るかと、之を待つこと三晝夜であつた。紀淸兩黨の者は懼れをなして、都へ歸り度いと願ひ出て曰ふには「楠氏の兵は、日に日に增える一方です」と。そんな譯で公綱は兵を引きつれて、京都へ還つて行つた。それで正成は再び、公綱の還つた跡の天王寺に陣取り、度々兵を繰り出して、威力を四方に耀かし示し、軍中に命令を出して、地方民に狼藉を働いて掠奪押收杯のことをしてはならぬと差止めた。遠地からも近地からも心を寄せて、やつて來て正成の部下に屬

く者が多かつた。そのやうな次第で正成の威力は京畿地方に振ひ渡つた。

【語釋】紀清兩黨（下藏七黨の内の二黨である。當時一門で兵團を組織して某々の黨と號してゐた。この紀氏・清原氏の二黨は、皆宇都宮氏に屬してゐて、その强いことは七黨の中第一であつた。この二氏は同一の支配下であるので、一緒にして、紀清兩黨と云つてゐた。）○何有（何の難きことか之にあらんといふ意。）○負勇名（負ふは自信のあること。）○藉使（二字でタトヒと讀む。）

寺舊藏有上宮太子讖文。正成請僧發視之。文有曰「當人皇九十五代、天下一亂而主不安。此時東魚來呑四海、日沒西天三百七十日。西鳥來食東魚、海內歸一三年。如獼猴者掠天下三十餘年、大凶變歸一元。」正成指而諭衆曰「所謂九十五代、非今上耶。東魚乃高時、而爲西鳥所食、則終歸族滅耳。日沒西天三百七十日。上之復辟、蓋在明春。諸君勗之。」衆皆奮勵。

【訓讀】寺の舊藏に上宮太子の讖文有り。正成僧に請うて之を發き視る。文に曰へる有り、「人皇九十五代に當り、天下一たび亂れて主安からず。此の時東魚來つて四海を呑み、日西天に沒すること三百七十日。西鳥來つて東魚を食ひ、海內一に歸する三年。獼猴の如き者、天下を掠むる三十餘年、大凶變じて一元に歸す」と。正成指して衆を諭して曰く「所謂九十五代は今上に非ずや。東魚は乃ち高時にして、西鳥の食ふ所と爲れば、則ち終に族滅に歸するのみ。日、西天に沒する三百七十日。上の復辟は、蓋し明春に在らん。諸君之を勗めよ」と。衆、皆奮

勵せり。

【通釋】天王寺に古くから所藏してゐた大切なもの、中に聖德太子の未來記があつた。正成は寺僧に賴んで、その未來記を開けて見せて貰らつた。その文に次のやうな事が書いてあつた。「人皇九十五代の御代に當つて、天下が一たび亂れ、天子樣は不安に陷り給ふことゝなる。この時、東方の魚がやつて來て、天下を呑み込み、それがためにお日樣が西に沈んで出現せざること三百七十日間である。その內に西方の鳥がやつて來て、この東方の魚を食べて終ひ、天下は一つになるが、それは三年ばかりである。又手長猿の樣な惡い者が現れ、三十年餘りも天下を掠め取るが結局は大亂が變じて一統の御代となる」と。正成はこの文を指し示し、部下の衆を諭して曰ふには「この未來記に所謂九十五代といふのは、今の天子樣ではないか。東魚とあるのは高時のことで西鳥に食はれると書いてあるから結局は一族全部滅びて終ふだらう。お日樣が西天に沒すること三百七十日とある。して見ると、天子樣が再び御位にお復りになるのは來年の春であらう。（これで先きが見えたといふもの）諸君には一層努力せられよ」と。大勢の者は、皆奮ひ勵んだ。

【語釋】上宮太子（用明天皇の皇子で推古天皇の太子になられた聖德太子のこと。）○西鳥（楠氏に喩ふ。）○獼猴（足利尊氏に喩ふ。）○三十餘年（南北朝の間をいふ。）○歸二一元一（南北合一するをいふ。）

當是時、皇子護良起兵、據吉野、又諭赤松則村勤王。八月、則村起兵播磨。於是、京畿警聞、交至鎌倉。高時乃檄東北三道、大發兵、以子時治・族高直・大臣貞藤將之、而宰

高資監焉、西撃正成等。正成相金剛山之千窟、城之。城挾山帶壑、周回一里、高數百仭。中有五泉、雖旱不涸。造槽蓄之、養以黄土。雨則引屋溜於槽、乃使別將守赤坂、而自徙金剛山。

訓讀 是の時に當り、皇子護良、兵を起して吉野に據る。又赤松則村に諭して王に勤めしむ。八月、則村、兵を播磨に起す。是に於て、京畿の聲聞、交ゝ鎌倉に至る。高時乃ち東北の三道に檄し、大に兵を發し、子時治・族高直・大臣貞藤を以て、之に將とし、而して宰高資監し、西、正成等を撃たしむ。正成、金剛山の千窟を相して之に城く。城、山を挾み、壑を帶び、周回一里、高さ數百仭。中に五泉あり、旱すと雖も、涸れず。槽を造りて之を蓄へ、養ふに黄土を以てす。雨ふれば則ち屋溜を槽に引く。乃ち別將をして赤坂を守らしめ、而して自ら金剛山に徙る。

通釋 是の頃丁度皇子の護良親王は兵を起されて、吉野にお立て籠りになつた。又赤松則村をお諭しになり、王家の事に精出すやうに申された。それで八月には則村は兵を播磨に擧げた。そのやうな次第で京畿の地方が大變であるといふ報知が、入り交り立ち交り、鎌倉にとゞいた。そこで高時は、東北の三道に布令を飛ばして、大に兵を繰り出し、倅の時治・一族の高直・大臣の貞藤の三人を三軍の大將にして、宰の高資が、その總目附といふことになつて、西方正成等を撃つことになつた。正成は金剛山の千窟を見定めて、其處に城を築いた。城は山を脇ばさみ、壑谷を廻らし、周圍一里、高さ數百仭もある。そして城中には五つの泉があつて、いくら旱魃でも、

その水は涸れて無くなることはない。大きな水桶を拵へて、黃土をその桶の中に入れて、水の腐らぬやうにした。雨が降れば、屋根から落つる雨だれを、その桶の中へ導き入れるやうにした。そこで正成は別の大將をして、赤坂城を守らしめて、自分は金剛山の方へ徙つた。

註釋 赤松則村（則村の第三子則祐は、護良親王の從士であつたので、之を傳へて誤されたのである。）○東北三道（東海、東山、北陸の三道。）○時治（義子、もと阿曾氏。）○高直（大佛氏。）○貞藤（二階堂貞藤。）○高資（內管領長崎高資。）○挾山帶谿（山を城の兩脇に挾むこと。太平記に「南北は金剛山につゞき、東西は谷深し」とある。）○蓄以黃土（太平記に「舟の底に赤土を沈めて、水の性を損ぜぬやうにぞ拵へける」とある。水を貯へると兎角腐敗し易いが、黃土即ち山の赤土を入れて置くと、それがない。）○別將（平野入道。）

三年二月、東兵自三道上、分爲三軍、攻金剛山、及吉野・赤坂。赤坂城兵力拒、殺傷過當。賊絕其水道、城遂陷。吉野受圍七日、乃陷。吉野・赤坂既陷、關東三軍、皆萃于金剛山。而西南諸道兵、應高時徵者、亦會焉。稱八十萬、合勢攻正成。正成以千餘人拒之。賊兵四面仰攻、呼聲動天地。正成令士卒投大石、隨亂射之。無復虛箭。軍監高資命十二史記死傷、三晝夜不閣筆。乃令諸軍、勿復薄城。時大旱。賊火箭射城。正成以機注水、使不能焚。

通釋 三年二月、東兵、三道より上り、分れて三軍と爲り、金剛山及び吉野・赤坂を攻む。赤坂の城兵力め拒

き、殺傷、過當なり。賊、其の水道を絶ち、城、遂に陷る。吉野、圍を受くること七日にして乃ち陷る。吉野・赤坂、既に陷り、關東の三軍、皆金剛山に萃る。而して西南諸道の兵、高時の徵に應ずる者も亦會し、八十萬と稱す。勢を合せて正成を攻む。正成、千餘人を以て之を拒ぐ。賊兵、四面より仰ぎ攻め、呼聲、天地を動かす。正成、士卒に令し、大石を投じ、隨つて之を亂射す。復虛箭なし。軍監高資、十二吏をして死傷を記さしめ、三晝夜、筆を閣かず。乃ち諸軍に令し、復城に薄る勿らしむ。時に大に旱す。賊、火箭にて城を射る。正成、機を以て水を注ぎ、焚く能はざらしむ。

【通釋】三年の二月に、關東の北條方は、東海、東山、北陸の三方の道から攻め上り、分れて三軍となり、金剛山や吉野・赤坂に攻め寄せた。赤坂の城兵は一生懸命に敵を拒ぎ、其の結果、敵方の手負や死人は味方より遙かに多かつた。賊が赤坂城に引き込んであつた水道の口を絶ち切つたので、赤坂城は遂に陷落して終つた。吉野の方は如何かといふに、これも賊に取り圍まるること七日で、陷つて終つた。斯樣な次第で吉野も赤坂も既に陷つて終つたので、自然關東の三軍は皆金剛山目がけて、勢を集中したのである。其の上に、西南の諸道の兵で、高時の徵發に應じてやつて來た者迄も、一緒になつて、總勢八十萬と稱へてゐた。それ等の大軍が力を合はせて正成を攻め立てた。正成は僅か千餘人でこの大軍を拒いだ。賊兵は四方から金剛山目がけて仰ぎ攻め、その呼ばはる聲は天地を動かす程であつた。正成は士卒に命じて、大きな石を賊に投げつけさせて、その直ぐ後から矢を滅多矢鱈に射たせた。其の矢は一本の無駄矢もなく皆敵に中つた。賊軍の軍目附の長崎高資は十二人の書記に命じて、東軍の手負や死人の名前を記させた所が、其の數が多いので、三日三晩、十二人の者が筆を置く間もなかつた。そこで、此れではならぬと、諸軍に命じて、二度と城に迫ることのないやうにした。其の頃雨が無くて大

變な旱が續いた。そこで賊の方では金剛山の城が乾き切つてゐるので、火箭を放つて、城へ射ち込み、燒き拂はうとした。正成はポンプで、火箭の中つた所へ水を注ぎかけて、焚くことの出來ぬやうにした。

〔語釋〕 一二軍（二階堂貞藤が一軍を率ゐて護良親王を吉野に攻め、大佛高直が一軍の將となつて千剣を攻め、阿曾時治が一軍を以て赤坂を攻めた。） ○過當（相當の數を過ぎたこと、つまり敵の兵が多かつた事になる。） ○西南諸道（山陰・山陽・南海・西海の諸道） ○火箭（矢尻に松火のやうに火をつける仕かけになつてゐる。中ればその火が燃えつく。） ○機（喞筒のやうな仕掛けのもの。）

賊將高直議曰、「蕞爾山巓、不容有水。得非乘夜出汲乎。前攻赤坂、絕水而克。此計可襲也。」遣名越某、將三千人、柵守東溪。久之、毋出汲者。正成瞰其倦怠、夜出兵擊走之、奪其幟而還。旦日、樹之壁上、呼曰、「此名越公所贈、有公徽號焉。我無所用。願奉還之。」名越慚恚、舉族薄城。城上豫橫懸大木、及敵薄而發之、因射斃四千餘人。賊益畏憚、休戰、築長圍環守。城兵困之。正成乃作藁人數十、被以甲冑、夜列城下、兵伏其後、乘曉霧大閧。賊相告曰、「城兵窮蹙、出戰也。」舉軍競進。我兵頗發矢、輒退入城。而敵集於藁人、則巨石已碎其頭、立死五百餘人。賊不敢復薄城也。

〔口譯〕 賊將高直、議して曰く、「蕞爾たる山巓、水有る容からず。夜に乘じて、出で汲むに非ざるを得んや。前に赤坂を攻め、水を絕ちて克てり。此の計襲ぐべきなり」と。名越某を遣はし、三千人に將として、東溪に

柵守せしむ。之を久しうして出で汲む者なし。正成、其の倦怠せるを瞰ひ、夜、兵を出し、撃ちて之を走らし、其の幟を奪つて還る。旦日、之を壁上に樹て、呼んで曰く、「此れ名越公の贈る所、公の徽號あり。我れ用ふる所なし。願はくば之を奉還せん」と。名越慚恚し、族を擧げて城に薄る。城上、豫め横に大木を懸け、敵薄るに及んで之を發し、因つて射て四千餘人を斃す。賊益畏憚し、戰を休め、長圍を築きて環守す。城兵、之を困しむ。正成乃ち藁人數十を作り、被らすに甲冑を以てし、夜城下に列ね、兵其の後に伏し、曉霧に乘じて大に鬨す。賊、相告げて曰く、「城兵窮蹙し、出で戰ふなり」と。軍を擧げて競ひ進む。我が兵頗る矢を發ち、輒ち退いて城に入る。而して敵、藁人に集れば、則ち巨石已に其の頭を碎き、立どころに死するもの五百餘人。賊、敢て復城に薄らず。

【通釋】賊の大將の大佛高直が意見を述べて曰ふのに「こんな小つぽけな山の巓に水の有りやうは無い。これは屹度夜に紛れて、城外へ出で水を汲むのではあるまいか。前に赤坂城を攻めた時にも、水道を斷ち切つて打ち勝つことが出來た。今の場合も此の計略を其の儘うけ繼いで行つたら宜からうと思ふ」と。そこで名越某といふ者を遣り、三千人の軍勢を率ゐて、東の溪川に柵を作つて守らせて置いた。所が何時迄經つても、城外へ出て水を汲む者はない。名越の部下もソロ〳〵草臥れて來た所を伺つて、正成は夜兵を繰り出し、不意を討つて、名越の軍を追拂ひ走らせ、其の幟を分捕つて還つて來た。翌日、その幟を城壁の上に立てゝ、大聲に呼ばはつて曰ふには「この幟は名越公から頂戴したもので御座るが、これには公の紋所がついてゐる。折角貰らつたものでは御座るが、どうも此れでは用をなし申さぬ。何卒これをお還へし申し度いもので御座る哩」と。名越はそれを聞いて大に慚ぢ怒り、一族の者全部引きつれ、城に迫つて來た。城の上では前以て、横に大きな材木を引つ懸けて

置いて、敵が側へ詰め寄せるのを待つて、その材木を城の下へ切り落し、そして、その勢で隙かさず射て四千餘人を斃して終つた。賊は愈々以て畏れはゞかり、到底叶はぬと思つたか、戰爭を休めて、長い堤防を城の周圍に作つて、環狀に包圍して守つた。これには城兵は困しんだ。そこで正成は一策を考へ、藁人形を數十も拵らへそれに鎧や冑を被せて、夜の間に城の下にそれを列らべ、その後ろに兵士が隱れてをり、曉け方、霧がかゝつてゐて、敵の方から明瞭見えないのにツケ込んで、ワア〳〵と大に鬨の聲を揚げた。賊共は互に相告げていふのに「城内の兵共が弱り拔いて、出て來て戰はうといふのだ」と。賊軍は調子に乘つて、全軍を擧げて、我れ先に爭ひ進んで來た。我が官軍の兵は宜い加減に矢を發ち、直ぐ樣退却して、城内に入り込んだ。そして敵が藁人形目がけて攻め寄せて來ると、大きな石が城の上から落ちて來て、彼等の頭を打ち碎くといふ具合で、立ちどころに五百餘人から殺されて終つた。それで賊はもう悉つかり懲りて終つて、二度と城に攻め寄せようとはしなかつた。

【語釋】蕞爾（小さな貌。）○不容（不可。）○襲（ツグ。踏襲の襲。）○名越某（越前守で其の名は傳はつてゐない。）○徽號（旗印、三本唐傘の印だつたといふこと。）○長圍（長い土手を作つて城を圍み、兵を落ちつけた所。）○頗（少し許り）

三月、高時遣使者、督促諸將進攻。諸將合議、命工造雲梯。長二十丈、跨壑架壁、鋭兵六千、欲緣乘城。正成令投大炬、唧筒注油、以燒雲梯。烟焰噴起、賊兵前後喧騰。梯遂中斷、陷壑焚死者數千人。諸道豪傑、望正成之風、多應官軍者。

【通釋】三月、高時使者を遣はし、諸將を督促して、進み攻めしむ。諸將合議し、工に命じて雲梯を造らしむ。

長さ二十丈、壑に跨り壁に架し、鋭兵六千、緣つて城に乘ぜんと欲す。正成令して、大炬を投じ、唧筒にて油を注ぎ、以て雲梯を燒かしむ。烟焰噴起し、賊兵、前後喧騰す。梯遂に中斷し、壑に陷りて、焚死するもの數千人。諸道の豪傑、正成の風を望み、官軍に應ずる者多し。

【通釋】三月、高時は使者を遣はし、諸將を催促して進み攻めるやうにさせた。そこで諸將は相談して、工人に命じて雲のかけ橋を造らせた。長さが二十丈で、谷に跨げ、城壁に架け渡し、強い兵六千人が、その梯を攀ぢ傳つて城中へ乘り込まうと思つた。正成は命令を出して大きな松火を投げて、唧筒で油を注ぎかけ、この雲のかけ橋を燒かせた。雲のかけ橋に火がついて、烟や焰が吹き起つて、賊兵共は前後で喧ましく大騷ぎを初めた。その内、遂に梯は眞中から燒け切られ、それが爲め壑に落ち込んで燒け死んだものが數千人もあつた。諸道の豪傑共は正成の威風を望んで、官軍につく者が多かつた。

【語釋】雲梯（飛橋といふもので、高く雲の上までも至ることの出來る橋といふ意。）○乘城（城中へ入り込むこと。）○前後喧騰（前の者は梯を燒かれて進み得ない。後のものはそれを知らないで押す。大騷ぎが起る喧騰は騷ぎ立てること）○數千人（雲梯は一つではなかつたのでかく死者が澤山生じた譯。）

護良又命大和土寇、絕敵糧道。敵兵多逃亡。敵中有新田義貞、請護良令、稱疾東歸、謀攻鎌倉。於是、六波羅二帥、又遣宇都宮公綱、以千餘人來援、急攻拔柵、鑿城趾。正成應機拒之。敵竟不能拔。

〔訳〕護良父大和の土豪に命じ、敵の糧道を絶つ。敵兵多く逃亡す。敵中に新田義貞あり、護良の命を請ひ、疾と稱して東歸し、鎌倉を攻めんことを謀る。是に於て、六波羅の二帥、又宇都宮公綱を遣はし、千餘人を以て來り援けしめ、急に攻めて柵を拔き、城址を鑿る。正成機に應じて之を拒ぐ。敵竟に拔く能はず。

〔通釋〕護良親王は、父大和の土豪に言ひつけて敵の兵糧を運ぶ道を絶ち切らせられた。兵糧がない爲めに敵兵は多く逃げ去つた。北條方の中に新田義貞といふ者がゐたが、護良親王の令旨を頂戴して、病氣だと言ひ立て、關東に歸り、鎌倉を攻めようと謀つた。そこで六波羅の仲時・時益は、又宇都宮公綱を派遣し、千餘人をつれて援けに來させ、きびしく攻め立て、逆茂木を拔き、城の基礎を掘つて崩さうとした。正成は、その時その時に合ふやうな計略で敵を拒いだ。敵は結局城を陷れることは不可能であつた。

北條氏以天下多勤王者、慮帝逃出、戒佐佐木清高、益嚴防備。而清高族義綱守中門、竊謀脫帝、未敢發。一夜、宮女傳帝旨、賜酒守兵。義綱因白曰、上未聞之乎。楠正成據金剛山、興義兵、高時以百萬兵攻之、三閱月不能拔也。播磨・備前・伊豫將士並起應之、或謀迎駕、或窺京師。是皇運將回之秋也。而如聞高時兇懼、陰謀不良。上宜急艤千波港、幸出雲・伯耆之間。臣伴追而從之、事必濟矣。帝不輙信。因賜其宮女以察之。

【訓讀】北條氏、天下に勤王の者多きを以て、帝の逃れ出づるを慮り、佐佐木清高を戒め、益ゝ防備を嚴にす。而して清高の族義綱・中門を守り、竊に帝を脱せしめんと謀り、未だ敢て發せず。一夜、宮女、帝の旨を傳へて、酒を守兵に賜ふ。義綱、因つて白して曰く、「上、未だ之を聞かざるか。楠正成、金剛山に據りて、義兵を擧げ、高時、百萬の兵を以て、之を攻め、三たび月を閱して拔く能はず。播磨・備前・伊豫の將士、並び起りて之に應じ、或は駕を迎へんと謀り、或は京師を窺ふ。是れ皇運將に回らんとするの秋なり。而して聞くが如くんば、高時兇懼し、陰に不良を謀ると。上、宜しく急に千波港に艤し、出雲・伯耆の間に幸すべし。臣、佯り追ひて之に從はゞ、事必ず濟らん」と。帝輒く信ぜず。因つて其の宮女を賜ひ以て之を察せしむ。

【通釋】北條氏は天下に勤王の者が多くなつたので、後醍醐天皇が隱岐から逃げ出で給ふことを心配して、佐々木清高に油斷せぬやう申しつけ、益ゝ防備を嚴しくした。所が清高の一族の者に義綱といふのがゐて、行在所の中門を守つてゐたが、コッソリ天子樣をお逃がし申さうと謀つてゐたがしかし、まだ其の事を起す所まで行かなかつた。或る夜のこと、宮女が天子樣の思召を傳へて酒を番兵に下された。義綱は丁度よい機會であるから申上げて曰ふのに「陛下にはまだ御聞き及び御座りませぬか。アノ楠正成が金剛山に立て籠つて、勤王の兵を擧げましたので、高時は百萬の兵を率ゐて正成を攻め、早や三箇月にもなりますが、一向金剛山は陷れることが出來ませぬ。それに播磨・備前・伊豫の將士どもが、並び起つて、正成に加勢をして、中には陛下をお迎へして、此の島からお連れ出さうと計畫してゐるものもありますし、中には京都を覘らつて攻め取らうとしてゐるものも御座います。是は陛下の御運がよくなつて、元通りにならうとする時で御座ります。それに聞く所によりますると、高時が大に恐れて、良からぬことを謀つてゐるといふことで御座います。陛下には今の場合、取り急ぎ千波

港で船の御用意を遊ばして、出雲・伯耆の邊へお出で遊ばしたら宜しからうと存じまする。そして私は陛下を追つかける眞似を致しまして、陛下にお伴致しましたならば、この事は屹度成功しまする」と。併し後醍醐天皇はオイソレと彼の言葉を御信用にはならなかつた。そこでその取り次ぎをした宮女が義綱に下されて、義綱の本心をお搜ぐりになつた。

【語釋】 宮女（其名は白妙。）○播磨（赤松則村が摩耶山に據つて正成に加勢した。）○備前（伊東惟群は三石に據り、兒島高德は兒島に起る。）○伊豫（土居通治・得能通言、伊豫に起る。）○或謀迎駕（伊豫の勢、駕を迎へんと謀る。）○或窺京師（播磨・備前の勢、又伊豫の勢も京師を窺ふ。）○謀不良（陛下を弑せんとはかること。弑ー逆の名を諱んでいへる辭。）○千波港（隱岐）

義綱志益固。帝乃令先往出雲、誘其族人來迎。義綱往、爲族鹽冶高貞所拘留。帝以其久不返、遂決意、夜僞稱嬪御、與源忠顯、徒行逃出、叩一民家、問港所在。主人熟視帝狀貌、知非常人也、乃負帝至港、託諸舟人。舟人亦有感喜色。忠顯告以實、揚帆而南。天明、顧見數十艘近、則淸高也。舟人伏帝與忠顯於船底、覆以蒸魚、而坐其上。淸高來索。舟人曰、「何索。」曰、「先帝逃矣。」舟人曰、「果有是事。嚮京裝者二人、乘船發港。」因指曰、「在彼。」淸高赴之。帝遂達名和港、依名和氏。

【譯文】 義綱志益々固し。帝、乃ち先づ出雲に往き、其の族人を誘ひて來り迎へしむ。義綱往き、族鹽冶高貞

の拘留する所と爲る。帝、其の久しく返らざるを以て、遂に意を決し、夜、僞つて嬪御と稱し、源忠顯と、徒行して逃れ出で、一民家を叩き、港の在る所を問ふ。主人、帝の狀貌を熟視し、常人に非ずと知るや、乃ち帝を負うて港に至り、諸を舟人に託す。舟人も亦感喜の色あり。忠顯告ぐるに實を以てし、帆を揚げて南す。天明、顧みるに數十艘を見る。近づけば則ち清高なり。舟人、帝と忠顯とを船底に伏せ、覆ふに鯗魚を以てして、其の上に坐す。清高來り索む。舟人曰く、「何をか索むる」と。曰く、「先帝逃れたり」と。舟人曰く、「果して是の事あり。嚮に京裝せる者二人、船に乘り港を發す」と。因つて指して曰く、「彼にあり」と。清高、之に赴く。帝遂に名和港に達して、名和氏に依る。

【通釋】所が義綱は何處々々迄も陛下をお逃がし申さうと思つてゐて、其の志は愈々益々堅固であつた。そこで後醍醐天皇は先づ義綱を出雲へおやりになり、其處の一族の者を誘つて、迎へに來るようにせしめられた。義綱は出雲へ往つて、一族の者を說いたが失敗に歸して、族人の鹽冶高貞の爲めに引き留められて終つた。義綱が何時迄經つても歸つて來ないので、天皇は遂に御決心遊ばして、夜、宮女ぢやと僞り申されて、源忠顯と、徒歩でお逃げ出しになり、一軒の民家を叩き起されて、港は何處にあるかとお尋ねになつた。其の家の主人は、陛下の御樣子お顏立ちを、ヂット視てゐたが、此れは普通の人ではない、高貴な御方であると感附いたので、そこで、お歩かせ申すは畏れ多きことゝて、陛下を背負うて港までやつて來て、之を船頭にお渡し申し、宜しく賴んだ。船頭も有り難き事に思うて打喜ぶ氣色であつた。忠顯は、實はコレ／＼で、此處に渡らせらるゝは帝にゐます由を、船頭に話して、愈々帆を揚げて南へ駛つた。夜が明けて、振り返り見ると、數十艘の船が見えた。近づいて來たのを見ると、それは清高であつた。船頭は陛下と、忠顯とを船の底に隱して、その上に乾魚を覆ひ被せ

て、其の上に坐つて知らぬ顔をしてゐた。すると清高がやつて來て船を索し出した。船頭は「何をお搜しになるのですか」と。清高は「先帝がお逃げになつたのだ」と。船頭が曰ふのに「ハ、ア、成る程、慥かに其んな事がありました。先き程都の服裝をした人が二人、船に乘つて港を出ましたぢや」とて、アレあそこにある船、あれがそれです」と曰つて其の方を指さした。清高は其の船の方へ行つて終つた。とう〳〵天皇は御無事に名和港にお着きになり、名和氏におたよりになつた。

【語釋】稱二嬪御一（三位の局が病氣を催されて、外舍に就くのであると僞はられた。）○先帝（北朝の光嚴天皇に對して先帝と申したので、實は正統の天子に在しますのである。）

名和氏、本村上氏、世居二伯耆名和一。承久之役、有二名和行秋者一焉。與レ孫行高從二官軍一、事敗奪レ邑。行高四子、長高・長重・長生・氏高、皆有二武幹一。帝至二名和港一、令三忠顯登レ岸問二途人一豪族可レ倚者一。答以二長高一。忠顯乃踵二其家一。家方宴。忠顯直入傳レ詔。長高未レ答。長重進曰、「人之所レ重、名而已矣。今忝受二帝者自託一、事無二成否一、皆足三以揚二大名於天下一。」長高乃決意、計レ奉二帝于船上山一、令三長重等五人擐レ甲走迎一レ帝。跪二御舟傍一。帝欣然。長重被二薦子甲背一、負レ帝登レ山、藉二木葉一進レ食。長高欲レ移二倉粟于山一、募二村民能運二一擔一者一、賞二錢五百一。一日致二五千餘石一。乃盡燒二其宅一、率二百五十騎一、以護二行在一。因レ樹植レ柵、列レ扉爲レ垣。氏高造二布旗

數百、煤印近國諸豪章識、張之山上。

【細説】名和氏、本と村上氏、世伯耆の名和に居る。承久の役に名和行秋なる者あり。孫行高と官軍に從ひ、事敗れて邑を奪はる。行高の四子、長高、長重、長生、氏高、皆武幹あり。帝、名和港に至り、忠顯をして岸に登りて、途人に、豪族の倚るべき者を問はしめらる。答ふるに長高を以てす。忠顯、乃ち、其の家に詣る。家、方に宴す。忠顯、直に入りて詔を傳ふ。長高未だ答へず。長重進んで曰く、「人の重んずる所は、名のみ。今、忝くも帝者の自託を受く。事、成否となく、皆以て大名を天下に揚ぐるに足る」と。長高、乃ち意を決し、帝を船上山に奉ぜんと計り、長重等五人をして、甲を擐し、走つて帝を迎へしむ。御舟の傍に跪く。帝欣然たり。長重、薦を甲背に被り、帝を負うて山に登り、木葉を藉きて食を進む。長高倉粟を山に移さんと欲し、村民を募る。「能く一擔を運ぶものには、錢五百を賞せん」と。一日五千餘石を致す。乃ち盡く其の宅を焼き、百五十騎を率ゐ以て行在を護る。樹に因つて柵を植て、扉を列ねて垣と爲す。氏高、布旗數百を造り、近國諸豪の章識を煤印し、之を山上に張る。

【通俗】名和氏は、もと村上氏と云ひ、代々伯耆の名和に居つた。承久の亂の時に名和行秋といふ者がゐた。その人が孫の行高と一緒に官軍に屬いて、失敗して土地を沒收せられて終つた。行高の四人の倅、長高・長重・長生氏高、皆武技に勝れてゐた。後醍醐天皇は名和港にお着きになると、忠顯をして岸に登つて、路傍の人に、此の邊に、依頼になる豪族はゐないかと、お問はせになつた。すると路傍の人は名和長高といふ人のゐることを答へた。そこで忠顯は、その名和の家を尋ねて行つた。丁度酒宴の最中であつた。忠顯はヅカ〳〵其の家に入つて、

詔を傳へた。長高は突然のことでまだ御返事をしなかつた。すると弟の長重が進んで曰ふのに、人間に最も重んずべきものは名であります。今忝くも、陛下お直き〳〵の御依賴を受けることになりました。此の事が成功しようが、しまいが、何れにしても天下に大名を揚ぐるには充分で御座います—と。そこで長高は意を決めて、陛下を船上山にお迎へ申さうと計り、早速弟の長重等五人の者に、鎧をつけさせて走つて、陛下をお迎へ申させた。五人の者は御輿の傍に跪いて、畏つた。陛下は之を御覽ぜられ、お喜ばし氣になされた。長重は直ではお惱みなされて、畏れ多いので、鎧の背に薦を被て、その上に陛下を負ひ奉り、船上山に上り、木の葉を舖いて、その上に御召上がり物を載せ、御食物を奉つた。長高は自分の家の倉の中の米を山の上へ移さうと思つて、村の民に「能く一荷を運んで呉れた者には五百錢を御褒美として遣はす」といつて募集した。それで一日の内に五千餘荷を山上へ運んで終つた。そこで自分の居宅は全部燒き棄てゝ終ひ、百五十騎を率ゐて、行在を守護した。立ち樹を利用して、柵を植て、纛を列べて垣とした。氏高は布で旗を數百も作つて、それに近傍の諸國の豪族の旗印しを煤で捺して、それを山の上に一面張り渡した。

【語釋】帝者（帝たる御方。）○自詫（御自身直々の御依賴。）○船上山（伯耆國。）○藉二木葉一（食器の綺麗なのが間に合はぬので木の葉をしいて、その上に食物をのせて進め奉らせたのだ。一說に敷物の代りに木の葉を布き並らせたといふ。今は前說に從ふ。）○燒二其宅一（再び家に歸らざる決心を示したのである。）○（煤印一杉葉を焚いていぶし、煤をこしらへて紋所を書いたのである。）

明日、清高以兵三千、自山前後來攻。望見旗章、不敢進。我兵蔽林而射、射殺一將。敵八百騎乃來降。清高在山後、未之知也。更兵急攻。會日且入、大雷雨。長重・長生乘而

疾擊、擠賊乎谷、鏖千餘人。清高單舸逃去。帝授長高左衛門尉、兼伯耆守、賜名長年、子弟拜官有差。義綱・高貞以千餘騎至。山陰・山陽豪族、來屬數十姓。而兒島高德從備前往。

訓讀 明日、淸高、兵三千を以て、山の前後より來り攻む。旗章を望見し、敢て進まず。我が兵、林に蔽はれて射、射て一將を殺す。敵の八百騎、乃ち來り降る。淸高、山後に在りて、未だ之を知らず。兵を更へて急に攻む。會〻日且に入らんとして、大に雷雨す。長重・長生、乘じて疾く擊ち、賊を谷に擠し、千餘人を鏖にす。淸高、單舸逃れ去る。帝、長高に左衛門尉を授け、伯耆守を兼ねしめられ、名を長年と賜ふ。子弟官に拜する差あり。義綱・高貞千餘騎を以て至る。山陰・山陽の豪族、來り屬するもの數十姓。而して兒島高德備前より往けり。

通釋 其の翌日、淸高は兵三千を率ゐて、山の前後から攻め寄せた。併し山上の旗記しを遠望して、大軍が立て籠つてゐるものと思ひ、敢へて進まない。我が兵は林の間に隱れて矢を射ち、一人の大將を射殺した。そこで敵の八百騎は來り降つた。所が淸高は山の後にゐたので、そんな事が起つたのは知らなかつた。彼は兵を改め更へて、急に山を目がけて攻めて來た。丁度其の時、日は歿せんとするし、其處へ大變な雷雨がやつて來た。長重長生は其の日歿時の雷雨を利用して、烈しく擊つて出て、賊を谷へ落し込み、千餘人を皆殺しにして終つた。淸高は這々の體で、一艘の早舟に乘つて逃げ去つて終つた。後醍醐天皇は長高の功を思召され、左衛門尉をお授けになり、伯耆守を兼ねしめられ、名前を長年と下し賜はつた。長年の子弟共に官に任ぜられたが、夫々等級があ

つた。義綱と高貞とが千餘騎をつれてやつて來た。かくて山陰・山陽の豪族で、來り附く者數十姓の多きに及んだ。そして兒島高德は備前からやつて來た。

【語注釋】 單舸（單は一艘といふこと、舸は速力の早い舟。）

帝令高德等從源忠顯攻六波羅。長年子義高、初應高時徵、圍金剛山。聞長年應官軍、拔歸、亦從忠顯。忠顯行收兵、得三萬人。遇但馬守護太田守延、擁皇子恆良來會、合兵軍于峯堂。僧良忠軍男山、赤松則村軍山崎、皆奉兵部卿護良令、與叡山僧徒約、將戮力入京師。而忠顯欲專功、獨進敗走、守延死之。高德・義高留而力戰。忠顯在峯堂、恇怯不安、欲卻軍避敵、使使召還高德等。高德切諫止之、自以三百騎守七條橋、備敵夜襲。夜半、顧望峯堂、炬火稍熸。乃怪而還、遇丹後人荻野朝忠。曰、大將逃矣。高德往視其營、則錦幟仆地、鎧裝狼藉。高德取錦幟、追及朝忠、收潰兵、守高山寺。

【通釋】 帝、高德等をして、源忠顯に從ひて六波羅を攻めしむ。長年の子義高、初め高時の徵に應じて、金剛山を圍めり。長年、官軍に應ずと聞き、拔いて歸り、亦忠顯に從ふ。忠顯、行く行く兵を收め、三萬人を得たり。但馬の守護太田守延、皇子恆良を擁して來り會するに遇ひ、兵を合せて、峯堂に軍す。僧良忠は男山に軍し、赤

松則村は山崎に軍す。皆兵部卿護良の令を奉じ、叡山の僧徒と約し、將に力を戮はせ京師に入らんとす。而るに忠顯、功を專にせんと欲し、獨り進んで敗走し、守延、之に死す。高德・義高、留つて力戰す。忠顯、峯堂に在りて、恇怯安んぜず、軍を卻け敵を避けんと欲し、使をして高德等を召還せしむ。高德、切に諫めて之を止め、自ら三百騎を以て、七條橋を守り、敵の夜襲に備ふ。夜半顧みて峯堂を望めば、炬火稍熸す。乃ち怪しんで還り、丹後の人荻野朝忠に遇ふ。曰く「大將逃れたり」と。高德往いて其の營を視れば、則ち錦幟、地に仆れ、鎧裝狼藉たり。高德、錦幟を取り、朝忠に追及し、潰兵を收めて、高山寺を守る。

通釋 後醍醐天皇は高德等に命ぜられて源忠顯に從いて六波羅を攻めさせられた。長年の伜の義高は前に高時の召集に應じて、金剛山を圍んで居た。長年が官軍に屬いたと聞いて拔け歸つて、これも亦忠顯に從つた。忠顯は途中で兵を取り集めて、三萬人からになつた。丁度そこへ但馬の守護職太田守延が皇子恒良親王を奉戴してやつて來るのに出遇ひ、その兵をも一緒にして京都の西の峯堂に陣取つた。僧良忠は男山に陣取り、赤松則村は山崎に陣取つた。いづれも皆兵部卿護良親王の御命令の下にあつて、叡山の僧徒と約束し、それ等が協力して京都へ攻め込まうとした。しかるに、忠顯は自分ばかりの手柄にしたいと思つて、單獨に進んで敗北し、守延は討死して終つた。高德と義高とは、留まつて、力め戰つた。忠顯は峯堂に居つたが、臆病神にとりつかれ不安に陷り、軍を退け敵鋒を避けようと思ひ、使を遣つて、高德等を呼び還へさせた。高德は、熱心に諫めて之を止めさせ、親ら三百騎を引きつれて、七條橋を守り、敵の不意の夜襲に備へた。夜半頃にふり顧つて、峯堂の方を望むと、松明の火が、だん〳〵消えて行く。これは變だと思つたので、引き還へしたが途中で丹後の人荻野朝忠に出遇つた。朝忠が曰ふのに「大將の忠顯殿は逃げました」と。そこで高德は往つてその陣營を見ると、錦の御

旗は、地に倒れ、鎧や裝束は亂雜に散らばつてゐた。高德は、錦の御旗を取り收め（その間に朝忠が大分遠方まで行つて終つたので）急いで朝忠に追ひ付き潰えた兵士を寄せ集めて高山寺を守ることになつた。

〔語釋〕熸（火の消えること。）

高時聞金剛山久不拔、遣足利高氏・名越高家助攻。率萬騎至京師。忠顯・則村、破殺高家。高氏家聲素著。得新帝密旨、欲犯行在、意持兩端。比及丹波、聞高家敗死、乃屬官軍、返攻京師。將士競附之。獨高德不欲附、與朝忠別由若狹路入京師。

〔譯文〕高時、金剛山の久しく拔けざるを聞き、足利高氏・名越高家を遣はして助け攻めしむ。萬騎を率ゐて京師に至る。忠顯・則村、破つて高家を殺す。高氏、家聲、素より著る。新帝の密旨を得て、行在を犯さんと欲し、意、兩端を持す。丹波に及ぶ比、高家の敗死するを聞き、乃ち官軍に屬し、返つて京師を攻む。將士競ひて之に附く。獨り高德のみは附くことを欲せず、朝忠と、別に若狹路より京師に入る。

〔通釋〕高時は金剛山の城が、久しく陷らないと聞いて、足利高氏・名越高家の兩人を派遣して、助け攻めさせることになつた。そこで一萬騎を率ゐて、都へやつて來た。源忠顯・赤松則村は敵を擊ち破つて高家を殺して終つた。高氏はもと〳〵評判の高い家柄であつた。新帝光嚴天皇(北朝)の內密の御指圖を受けてゐて、伯耆の後醍醐天皇の假りのお宮を攻め犯さうと思ひ、實は內心何方に附かうかと形勢を觀望して、二た股心を持つてゐた。

丹波に着いた頃に、高家が敗れ死んだと聞き、そこで旗を飜して官軍に附き、引き返して京都を攻めた。諸々の將士どもは評判の高い高氏の所へ、先きを爭つて附いて來た。たゞ高德だけは、高氏に附くことを欲しなかつたので、萩野朝忠と一緒に、別に若狹路から京都へ入ることにした。

【語釋】高氏(後に後醍醐天皇から偏諱を賜り尊氏と稱す。)

五月、從諸將圍六波羅。結城親光出降。忠顯恐金剛山賊兵解圍來救也、急攻之。伯者・出雲兵、聯車數十輛、積以屋材、傅城火之。城兵逃亡相踵。二帥遂東走、死近江。而金剛山之圍、始解矣。

【訓讀】五月、諸將に從ひ六波羅を圍む。結城親光出で降る。忠顯、金剛山の賊兵、圍を解いて來り救はんことを恐れ、急に之を攻む。伯耆・出雲の兵、車數十輛を聯ね、積むに屋材を以てし、城に傅きて之を火く。城兵、逃亡相踵ぐ。二帥遂に東走して、近江に死す。而して金剛山の圍、始めて解けぬ。

【通釋】五月、高德は諸將に從ひ、京の六波羅を取り圍んだ。結城親光は出て來て降參した。源忠顯は金剛山にゐる賊兵共が、圍を解いて六波羅を助けに來ると厄介なことになるので、急に嚴しく六波羅を攻め立てた。伯耆・出雲の兵が、車を數十輛並べて、それへ屋材を積み、六波羅の城へクッ附けて火をかけ燒いた。城內の兵は逃げ出すものが次から次ぎへと出た。二帥の仲時と時益とは遂に居溜らず、東の方へ逃げ出し、近江の國で死んで終つた。而して一方金剛山の圍もヤットのことで解けた。

語釋　諸將（忠顯・則村等をさす。）〇屋村（家屋を取り壞して得た材木。）

捷報伯耆。天皇議還闕、親筮之、遇師之蒙。曰「大君有命。開國承家。小人勿用」。乃決議、二十三日、車駕發名和氏。長年帶劍侍右、百官戎服。至播磨、得新田氏捷報。「高時已伏誅矣」。正成乃以七千騎、迎謁于兵庫。天皇親勞之曰「今日之事、皆汝忠戰所致」。正成曰「不頼陛下威靈、臣安得脫重圍、再覩天日哉」。詔使正成先驅、歸闕、廢新帝而復位。於是、大索賊餘黨。詔以藤原師基爲太宰帥、討鎭西探題北條英時。未發。菊池氏與少貳氏・大友氏、竝馳使、報鎭西之捷。

訓讀　捷を伯耆に報ず。天皇、闕に還るを議し、親ら之を筮し、師の蒙に之くに遇ふ。曰く「大君、命あり。國を開き家を承く。小人は用ふる勿れ」と。乃ち議を決し、二十三日、車駕名和氏を發す。長年、劍を帶び右に侍し、百官戎服し、播磨に至り、新田氏の捷報を得たり。「高時已に誅に伏す」と。正成乃ち七千騎を以て、兵庫に迎謁す。天皇親ら之を勞して曰く、「今日の事は、皆汝が忠戰の致す所」と。正成曰く、「陛下の威靈に頼らずんば、臣安んぞ重圍を脫し、再び天日を覩るを得んや」と。詔して正成をして先驅せしめ、闕に歸り、新帝を廢して位に復る。是に於て、大に賊の餘黨を索む。詔して藤原師基を以て太宰帥となし、鎭西探題北條英時を討たしむ。

未だ發せず。菊池氏・少貳氏・大友氏と竝に使を馳せて鎭西の捷を報ぜり。

【通釋】六波羅の勝利は伯耆の後醍醐天皇の處に報告せられた。天皇は京都に還る御評議をなされ、御自身で易をお立てなされた所が、師の卦が出て上六の變爻で蒙の卦に變るといふ易が出た。師の上六の爻辭に「天子から論功行賞の命令が出た。或る者は土地を貰つて國を開き、或る者は大夫にして貰つて家を承けた。併し小人は手柄があつても擧げ用ひてはならぬ」と曰つてゐる。そこでこれは早く京都に歸つて論功行賞をせよとのことであるといふので、評議一決、二十三日天皇は名和氏の處を御出發なされた。長年は、劍を帶んでその右に侍し、諸の役人は皆武裝して播磨まで來ると、そこで新田氏の勝利の報らせを得た。「高時は、すでに誅に伏しました」といふことであつた。そこで正成は七千騎を引きつれて、兵庫まで御出迎ひ申し、天皇に拜謁した。天皇は御自身で、之を御勞らひなされて仰せらるゝに「今日このやうになつたのは皆其の許の忠戰の結果である」と。正成は恐縮して曰ふには「陛下の御威光に賴りませんでは、どうして臣はあの幾重にも取卷かれた圍を脫れ出て、天顏を拜する事が出來ませうぞ（皆陛下の御威光によつて今日あるを得ました）と。詔して正成を先驅として京都に御歸還になり、新帝光嚴天皇を廢して、もとの帝位にお復りになつた。そこで大に賊の殘黨を詮索した。藤原師基を太宰帥となされて、鎭西探題北條英時を討伐せしめられることとなつた。彼がまだ出發しないでゐた。すると菊池氏は少貳氏、大友氏と一緒に、使を京都に馳せて、鎭西で英時を亡ぼしたことを報告して來た。

【語釋】遇二師之一レ蒙（師の卦は䷆　蒙の卦は䷃。⚋は陰爻で六と稱し⚊は陽爻で九と稱し、下から數へて初、二、三、四、五、上といふ。師の卦でいふならば、一番下の陰爻を初六といひ、次ぎを九二、次ぎを六三、六四、六五、一番上を上六といふ。陰陽の各爻には老少がある。これは筮竹の數によつて決定される。老の場合にはそれは總て變化する。老陰は少陽となり、老陽は少陰となる。今こゝの場合は、師卦が出て、上六が老陰であつた。だから變爻して少陽となるから蒙の卦になつたのである。此の場合師の卦を本卦といひ、蒙の卦を之卦といふ。）○大君有レ命云々（此の文句は師の上六の爻辭である。大君は天子、即ち戰爭が濟んで天子が臣下の功勞を論じ賞を行ふことをいつたのである。天子の命令で大功あるものは領土を拜領して諸侯となり、功の小な

いものは祿を與へて郷大夫とする。小人でも功勞のある場合があるが、それには御褒美を澤山與へて官職に就かしめてはならぬ。小人が一旦の功で官職に就くと、地位を利用して惡事を働くから褒美だけに止めて置くやうにするといふ意。）（一）觀二天日一（天子にお目にかゝること）

菊池氏、本藤原氏、其先政則者、防元寇有功。及子則隆、賜肥後菊池郡、世襲。後十餘世曰武時。是歳三月、武時與少貳貞經・大友貞宗、謀應官軍、謀泄。北條英時在太宰府、召武時。武時欲先發、使使少貳・大友約期。貞宗依違不答。貞經亦聞京師官軍數失利也、遂斬其使、送首於英時。武時大怒曰「吾誤矣、與此奴輩謀事。奴輩不在、吾寧不能戰乎」乃以百餘騎發、過櫛田祠前。馬俄不前。武時曰「何物牛鬼、敢沮義兵」顧射其龜。馬輙前。前攻英時、戰譙門外、克之、前逼內城。英時將自殺。會貞經・貞宗以六千騎來救武時。乃遣歸長子武重、自與次子四人進戰、死之。已而貞經・貞宗聞京師平、金剛山圍解、則懼、合議攻陷探題府、殺英時。長門探題府、亦爲土居・得能氏所攻陷。

[illegible] 菊池氏は、本と藤原氏、其の先政則なる者、元寇を防いで功あり。子則隆に及んで、肥後の菊池郡を賜ひて、世襲せり。後十餘世を武時と曰ふ。是の歳三月、武時、少貳貞經、大友貞宗と、官軍に應ぜんと謀り、謀泄る。北條英時、太宰府に在り。武時を召す。武時、先づ發せんと欲し、使を少貳・大友に使はして期を約せし

む。貞宗、依違して答へず。貞經も亦京師の官軍、數〻利を失ふと聞くや、遂に其の使を斬りて、首を英時に送る。武時、大に怒つて曰く、「吾れ誤れり、此の奴輩と事を謀る。奴輩在らずとも、吾れ寧んぞ戰ふこと能はざらんや」と。乃ち百餘騎を以て發し、櫛田の祠前を過ぐ。馬、俄に前まず。武時曰く、「何物の牛鬼ぞ、敢て義兵を沮む」と。顧みて其の龕を射る。馬輙ち前む。前んで英時を攻め、譙門外に戰ひて、之に克ち、前んで內城に逼る。英時、將に自殺せんとす。會〻貞經、貞宗、六千騎を以て來り救ふ。武時、乃ち長子武重を遣歸し、自ら次子四人と進み戰つて、之に死す。已にして貞經、貞宗、京師平ぎ、金剛山の圍解けたりと聞き則ち懼れ、議を合せ攻めて探題府を陷れ、英時を殺す。長門の探題府も、亦土居、得能氏の攻め陷る所と爲る。

〔通釋〕菊池氏は、もと藤原氏でその先祖の政則といふ人は元寇を防いで功勞があつた。その子の則隆の時になつて、肥後の菊池郡を賜はり、代々其の地を相續して來た。その後十餘代目を武時といつた。この年三月武時は少貳貞經・大友貞宗と官軍に味方しようと謀つたが、その謀が漏れた。北條英時は丁度太宰府に居つた。武時を呼び寄せた。武時は眞先きに事を起さうと思つて使を少貳・大友の所へ遣つて、兵を擧げる期日を約束せしめた。貞宗は愚圖々々して返答しなかつた。貞經も亦京都の官軍が度々敗けたといふことを聞いたので、遂に其の武時からの使者を斬つてその首を英時の所へ送り屆けた。武時は非常に怒つて曰ふのに、「こんな手合と一緒に大事を謀つたのは、自分の不覺であつた。彼奴等が居なくとも自分は戰爭の出來ないといふことはないのだ」と。そこで、百餘騎を率ゐて出發し、櫛田神社の前を通つた。すると武時の馬が、俄かに立ち止まつて進まない。武時が曰ふには「如何なる妖神であるぞ、敢てこの義兵の邪魔立てをなすものは」と。顧みて其のほこらを射た。すると馬は譯なく進んで行つた。武時は進んで、英時を攻め、物見の門の外で戰つて、之に勝ち、進んで、本城へ

押し寄せた。英時は自殺しようとした。丁度その時貞經貞宗が六千騎を引きつれて、救ひに來た。そこで武時は長男の武重を自分の家に遣り歸へし、自分は次ぎの悴四人と進み戰つて討死した。その内に貞經貞宗は京都が平定して金剛山の圍も解けたと聞いて恐れ、相談して探題府を攻め陷し、英時を殺した。長門の探題府も亦土居と得能二氏の爲めに攻め落された。

【語釋】牛鬼（妖怪の神を罵つた語。）○唐門（物見のある門。）

土居・得能氏、皆出於河野氏。河野與兒島同姓、世著於伊豫。承久時、河野通信者、死王事。其庶子分爲兩家。曰土居、曰得能。及元弘時、有土居通治・得能通言。皆勇毅好義。是歲二月、並起兵應官軍。略地土佐、長門探題北條時直、以兵艦三百來攻。通治・通言逆戰星岡、大敗之。四國兵多來屬焉。乃議于今治、欲東攻六波羅。聞金剛山圍解、車駕歸闕、則往兵庫謁焉。時直既爲二人所敗、走歸英時。英時已死。則從少武・島津氏而降。於是天下大定。而金剛山潰兵聚般若寺、猶數萬人。正成與源定平、將畿兵攻之。時治・高直・貞藤・高貞・公綱等六十人、率衆降。皆處斬。獨公綱以特旨宥罪。

【通釋】土居、得能氏は、皆河野氏より出づ。河野は兒島と同姓にして、世伊豫に著る。承久の時、河野通信な

る者、王事に死せり。其の庶子分れて兩家となる。土居と曰ひ、得能と曰ふ。元弘の時に及んで、土居通治・得能通言あり。皆勇毅にして義を好む。是の歲二月、並に兵を起して官軍に應じ、地を土佐に略す。長門の探題北條時直、兵艦三百を以て來り攻む。通治・通言、星ケ岡に逆へ戰ひ、大に之を敗る。四國の兵多く來り屬す。乃ち今治に艤し、東六波羅を攻めんと欲す。金剛山の圍解け、車駕闕に歸ると聞き、則ち兵庫に往いて謁せり。時直旣に二人の敗る所と爲り、走つて英時に歸す。英時已に死せり。則ち少貳・島津氏に從つて降る。是に於て天下大に定まる。而して金剛山の潰兵、般若寺に聚まり、猶ほ數萬人なり。正成、源定平と畿兵を將ゐて之を攻む。時治・高直・貞藤・高資・公綱等六十人、衆を率ゐて降る。皆斬に處す。獨り公綱のみ特旨を以て罪を宥さる。

通釋 土居得能二氏は皆河野氏から出た。河野といふのは兒島と同姓であつて、代代、伊豫で名高い家であつた。承久の時、河野通信といふ者が天子の軍に屬いて討死した。通信の妾腹の子が分れて二軒となつた。一軒は土居といひ、他の一軒は得能といつた。元弘の時代になつて土居通治・得能通言といふものがあつた。皆勇氣があつて意志強く、義を好んで居た。この年の二月兩人共兵を起して、官軍に應じ、土佐に攻め入り、土地を取つた。すると長門の探題北條時直は兵艦三百艘をつれて、攻め來つた。通治通言は星ケ岡でそれを迎へ戰つて、大に敗つた。その結果四國の兵士で來り屬する者が多かつた。そこで、今治で船の用意をして東方六波羅を攻めようと思つた。金剛山の圍が解け、天皇も京都に御還りになると聞いたので、兵庫迄出かけて行つて拜謁をした。時直はすでに二人の爲めに敗られ、逃げて英時の處へ行つた。英時は其の時旣に死んで終つた後であつた。それで少貳島津の兩氏によつて、降參した。そこで天下は大に平定した。しかし金剛山で潰えた北條方の兵士は、般若寺に聚つて、まだ數萬人もゐた。正成は源定平と一緒に畿內の兵を率ゐて、之を攻めた。時治・高直・貞藤・

高資・公綱等六十餘人の者が、めい〱その部下を率ゐて降參して來た。皆斬罪に處した。たゞ公綱だけは特別の思召を以て罪を赦された。

建武元年、帝論賞戰功、以正成爲攝津・河內守護、名和長年爲因幡・伯耆守護、正成任檢非違使左衞門尉、特與長年並直決斷所、聽斷訟獄、令天下休兵務農、武人領邑安堵如故。

【讀方】建武元年、帝、戰功を論賞し、正成を以て攝津・河內の守護と爲し、名和長年を因幡・伯耆の守護と爲す。正成を檢非違使左衞門尉に任じ、特に長年と並に決斷所に直し、訟獄を聽斷せしむ。天下に令して兵を休め農を務めしめ、武人の領邑は安堵故の如し。

【通釋】建武元年後醍醐天皇は今度の戰功に就て論功行賞をなされ、正成をば攝津河內の守護職となされ、名和長年をば因幡伯耆の守護職となされた。又正成を檢非違使左衞門尉に任ぜられ、特に長年と一緒に決斷所に當直して、訴訟を捌かしめられた。天下に令して兵を休め、農業を務むるやうにせしめられ、武人の領地は皆昔の儘にされ、何等の變動もなかつた。

【語釋】安堵（堵は牆、自分の住居に安んずる意。）

帝以京師之復、爲足利氏之功也。歸闕之日、首超擢之。至是、又管四大國。尊氏猶觖

望、陰有異心。帝以高時邑自奉、以泰家邑賜皇子護良、以貞直邑賜三位局。三位局卽嬪藤原氏、有殊寵。內謁漸行。時諸皇子皆復故。而恒良爲藤原氏所生。又生成良・義良。意害護良。尊氏潛與合謀、遂構陷之。

訓読 帝、京師の復するを以て、足利氏の功と爲す。闕に歸るの日、首として之を超擢す。是に至つて又四大國を管せしむ。尊氏猶ほ缺望し、陰に異心有り。帝、高時の邑を以て自ら奉じ、泰家の邑を以て皇子護良に賜ひ、貞直の邑を以て三位の局に賜ふ。三位の局は卽ち嬪藤原氏にして、殊寵あり。內謁漸く行はる。時に諸皇子皆故に復す。而して恒良は藤原氏の生む所爲り。又成良・義良を生む。意、護良を害す。尊氏潛に與に謀を合はせ、遂に之を構陷す。

通釈 後醍醐天皇は、京都が回復出來たのを、足利氏の功勞だと思召された。京都にお歸還なされた日に順序を越えて第一番に彼をお引きあげなされた。愈〻論功行賞の時になつて、又四大國の守護となされた。併し尊氏はそれでもまだ不足に思つて內々謀叛の心を抱いてゐた。天皇は高時の領地をば御自分のものとなされ、泰時の領地をば皇子護良に賜はり、貞直の領地をば三位の局に下された。三位の局といふのは取りも直ほさず宮女藤原氏のことで、格別の御寵愛のあつた方である。これから後は追々奧向からの賴みごとが行はれるやうになつた。當時諸々の皇子は、皆もとのやうにお成りなされた。そして恒良親王は、藤原氏のお生みなされたお方であつた。藤原氏は又、成良・義良をお生みなされた。藤原氏はそんな譯で心中護良親王を邪魔にされて居つた。自然尊氏

は内々藤原氏と共に謀を合せ、とう／＼護良親王を讒言して罪に陷れた。

【語釋】四大國（武藏、遠江、常陸、下總。）

當是時、帝寖倦政、足利氏資望獨盛。新田氏亞之。正成以下充驅使而已。是歲春、北條憲法作亂、據飯盛山、赤橋重時起伊豫。正成討憲法、土居・得能氏討重時、纔平之。而帝游宴自如、益徵珍異。鹽冶高貞獻千里馬。帝出觀之、以爲祥瑞也。藤原藤房諫曰「天馬毋用於平生。近日賞罰無信、工役繁興、文臣內諛、武臣外怨、而姦雄窺釁其間。天馬之出、焉知非亂兆哉。」帝變色入。藤房驟諫、弗聽。遂舍官遁去。帝驚、使追之、不及。二年春、藤原公宗結北條氏餘黨、陰謀大逆。名和長年等、奉詔誅之。

【通釋】是の時に當り、帝寖く政に倦み、足利氏の資望獨り盛なり。新田氏之に亞ぐ。正成以下は驅使に充つるのみ。是の歲春、北條憲法亂を作し、飯盛山に據り、赤橋重時、伊豫に起る。正成憲法を討ち、土居・得能氏重時を討ち、纔に之を平ぐ。而して帝は游宴自如、益〻珍異を徵す。鹽冶高貞千里の馬を獻ず。帝出でゝ之を觀、以て祥瑞となす。藤原藤房諫めて曰く、「天馬は平生に用ふる毋し。近日賞罰信なく、工役繁く興り、文臣內に諛ひ、武臣外に怨み、而して姦雄、釁を其の間に窺ふ。天馬の出、焉んぞ亂兆に非ざるを知らんや」と。帝、色を

變じて入る。藤房驟〻諫め、聽かれず。遂に官を舍てゝ遁れ去れり。帝驚き、之を追はしむれども及ばざりき。二年春、藤原公宗、北條氏の餘黨と結び、陰に大逆を謀る。名和長年等、詔を奉じて之を誅す。

【通釋】此の頃天皇はぼつ〱政治にお倦きなされて來たが、足利氏だけはその門地聲望殊の外盛であつた。新田氏は之に次いでゐた。正成以下は、たゞ追ひ廻はされてゐるばかりであつた。この年の春、北條憲法が亂を起して飯盛山に立て籠り、赤橋重時は伊豫に起つた。正成は憲法を討ち、土居得能の二氏は、重時を討つてやつと之を平げることが出來た　所が天皇はいつも變らず酒宴をして遊び暮され、益〻珍らしい物を徵し寄せて居られた。鹽冶高貞が千里の馬を獻上した。天皇は態々出御になつて之を御觀覽になり目出たい前兆だと思召された。すると藤原藤房が諫めて申すには「天馬は平生無事の日には用のないもので御座います。此の頃賞罰は當つて居りませんし、その上色々の大工事が頻繁に起り、文官は宮中で天子樣に媚びへつらひ、武官は宮外にゐて天子樣を怨んで居り、奸惡なる強い者が其の間に隙をねらつて居ります。されば天馬が出たのは或は亂兆であるかも知れません」と。天皇は顏色をお變へになつて内にお入りになつた。藤房はその後度々諫めたが御聽き入れにならなかつた。遂に官職を棄てゝ遁れ去つた。天皇は吃驚なされて跡を追つかけさせられたが追つ付かなかつた。二年の春、藤原公宗が、北條氏の殘黨と結托して、内々謀叛を謀つた。名和長年等が詔を奉じて之を誅戮した。

【語釋】飯盛山(河内)○自如(常に變らぬこと。)○千里馬(一日に千里走る馬。)○天馬(翼があつて天を飛ぶことの出來る馬。)

夏、北條時行等作亂關東、攻陷鎌倉。帝命尊氏往平之。尊氏遂據鎌倉反。帝震怒。冬、

遂詔菊池武重等諸將、從新田義貞、東伐尊氏。正成與名和長年、居守京師。直義拒箱根之險。武重時爲肥後守。以其兵先登、仰攻御敵、追北陣山腹。諸軍乃繼進。而別軍攻竹下、敗退。大友貞宗・鹽冶高貞叛、降足利氏。諸軍崩潰。武重以四百騎扶義貞、而西。赤松則村等、並起應尊氏。帝賜天馬於使者、召還義貞。天馬途斃。

【訓讀】夏、北條時行等、亂を關東に作し、鎌倉を攻陷す。帝、尊氏に命じ、往いて之を平げしむ。尊氏、遂に鎌倉に據つて反す。帝震怒す。冬、遂に菊池武重等の諸將に詔して、新田義貞に從ひ、東、尊氏を伐たしむ。正成、名和長年と京師に居守す。直義、箱根の險に拒ぐ。武重、時に肥後守たり。其の兵を以て先登し、仰ぎ攻めて敵を禦け、北ぐるを追ひて山腹に陣す。諸軍乃ち繼ぎ進む。而して別軍は、竹下を攻め、敗れ退く。大友貞宗・鹽冶高貞叛き、足利氏に降る。諸軍崩潰す。武重、四百騎を以て義貞を扶けて西す。赤松則村等、竝び起りて尊氏に應ず。帝、天馬を使者に賜ひ、義貞を召し還さしむ。天馬途に斃る。

【通釋】その夏、北條時行等が關東で亂を起し、鎌倉を攻め落した。天皇は尊氏に命じて、往つて之を平げさせられた。すると尊氏は遂に、そのまゝ鎌倉に據つて謀叛をした。天皇は非常にお怒りになつた。その冬、遂に菊池武重等の諸將に詔して、新田義貞に從つて東の方尊氏を征伐せしめられた。正成は、名和長年と與に京都に留守した。直義は箱根の險所を拒いだ。武重は、その當時、肥後守であつた。彼は自分の手勢を率ゐて先登し、山を仰いで、攻めて敵を追ひ散らし、その逃げるを追つかけて、山の中腹に陣取つた。そこで諸軍は其の後に引

きつゝいて進んだ。而して別働隊は、竹下を攻め、敗れて退いた。大友貞宗・鹽冶高貞等は官軍に叛いて、足利に降つた。それが爲め諸軍は崩れ潰えて終つた。武重は四百騎を引きつれ義貞を助けて、西に引き返へした。赤松則村等が同時に兵を起して尊氏に內應した。天皇は例の天馬を使者に下されて、義貞を召び戻しにやられた。併しその天馬は途中で斃死して終つた。

語釋 竹下（河駿）

延元元年正月、尊氏・直義入犯京師。正成以兵五千守宇治、名和長年與源忠顯・結城親光、以二千守勢多、皆受制於新田氏。新田氏先失大渡・山崎之守、尊氏乃入京師。結城親光佯降、欲刺尊氏、不成而死。帝幸叡山。正成聞之、徑赴行在。名和長年欲一覩宮闕而行、還入京師。賊軍塡塞。長年十七戰而至大內、則諸殿已爲賊兵所毀。長年下馬向闕伏泣久之。終赴行在。信濃人勅使河原某在大渡、未知帝所之。謂其二子曰「吾亡朝之臣、何顏事逆臣哉」。亦還京師、自殺于羅城門。賊焚宮闕、進據園城寺、以逼叡山。山徒英憲・祐覺等、贊拒守之計。祐覺又受詔、以舟七百艘泛湖、迎北畠氏兵入援。

訓讀　延元元年正月、尊氏・直義、入りて京師を犯す。正成、兵五千を以て宇治を守り、名和長年は源忠顯・結城親光と、二千を以て勢多を守り、皆制を新田氏に受く。新田氏、先きに大渡・山崎の守を失ひ、尊氏乃ち京師に入る。結城親光僞り降り、尊氏を刺さんと欲し、成らずして死す。帝、叡山に幸す。正成之を聞きて、徑に行在に赴く。名和長年、一たび宮闕を視て行かんと欲し、還つて京師に入る。賊軍塡塞す。長年、十七戰して大内に至れば、則ち諸殿已に賊兵の毀つ所と爲る。長年、馬を下り闕に向ひ、伏泣すること之を久しうす。終に行在に赴く。信濃の人、勅使河原某、大渡に在り、未だ帝の之く所を知らず。其の二子に謂つて曰く、「吾は亡朝の臣、何の顏ありて逆臣に事へんや」と。亦京師に還りて、羅城門に自殺す。賊、宮闕を焚き、進んで園城寺に據り、以て叡山に逼る。山徒英憲、祐覺等、拒守の計を贊く。祐覺、又詔を受け、舟七百艘を以て湖に泛び、北畠氏の兵を迎へ、入りて援く。

通譯　延元元年正月、尊氏・直義は京師を攻めにやつて來た。正成は五千人の兵士で、宇治を守り、名和長年は源忠顯・結城親光と一緒に、二千の兵を引きつれ勢多を守り、皆新田氏の指圖を受けてゐた。新田氏は前に大渡と山崎との守備を失くじり敗れたので、尊氏は一氣に京都へ侵入した。その時結城親光は降參した振りをして、尊氏を刺し殺さうと思つたが、成功しないで殺されて終つた。それで後醍醐天皇には叡山に行幸遊ばされた。正成は其のことを聞いて、直ぐ樣、行在所へ向けて行つた。名和長年は、一度御所の樣子を見てから行かうと思ひ引き還して京都に入つた。京都の街は賊軍で一杯に滿ち塞がつてゐた。長年は十七度も戰ひ、やつとのことで内裏に來て見ると諸々の御殿はもう早賊に破壞されて終つてゐた。長年は馬から下りて、地にひれ伏し、暫らくの間泣いてゐた。かくして終に行在に赴いた。信濃の人、勅使河原某は、大渡に居つたが、天皇が何處へ行かれたか

が分らなかつた。その二人の倅に向つて曰ふには「自分は滅んだ朝廷の家來として、どの面下げておめく／＼逆臣杯に事へられようぞ」と。この人も亦京都に還つて羅城門で自殺した。賊軍は御所を燒き、進んで園城寺に立て籠り、比叡山に逼つて行つた。叡山の僧徒の英憲祐覺等は賊を拒ぎ山を守る計畫に盡力する所があつた。祐覺は、又詔を受けて、舟七百艘を引きつれ琵琶湖に浮んで、北畠氏の兵を迎へ、叡山へ入れて、官軍を援けた。

語釋　勅使河原某（名は丹三郎。）〇大渡・山崎（山城）

北畠氏、姓源、出於具平親王。世爲名卿。及元弘時、有顯家焉。帝復位、以從三位參議拜陸奧守。與父親房、奉義良親王、出鎭東邊。結城宗廣世居陸奧。與其子親光、先歸官軍。於是、受命副顯家。顯家年甫十七、固辭。乃詔曰「文武不可岐。貴戚掌軍、古之制也」。顯家赴任。東邊無虞。尋任鎭守府將軍。及帝討足利尊氏、詔顯家會軍。顯家至鎌倉、則尊氏業已西矣。顯家幷程追之。東北兵、爭附顯家。凡五萬人。至近江、攻六角氏賴觀音寺城、拔之、斬首五百級。遂至叡山、諸將因會議戰。或欲速襲之。正成等然之。即夜、顯家與諸將、攻破園城寺。新田義貞遂復京師。而夜爲賊所返襲、敗還。尊氏復入。

【訓讀】北畠氏、姓は源、具平親王より出づ。世々名卿たり。元弘の時に及んで、顯家なるあり。帝、位に復し、從三位參議を以て陸奧守に拜す。父親房と、義良親王を奉じ、出で、東邊を鎭む。結城宗廣、世々陸奧に居る。其の子親光と、先づ官軍に歸す。是に於て命を受けて顯家に副たり。顯家、年甫めて十七、固辭す。乃ち詔して曰く「文武岐る可からず。貴戚、軍を掌るは、古の制なり」と。顯家、任に赴く。東邊、虞なし。尋いで鎭守府將軍に任ぜらる。帝、足利尊氏を討つに及んで、顯家に詔して軍に會せしむ。顯家鎌倉に至れば、則ち尊氏業已に西せり。顯家、程を幷せて之を追ふ。東北の兵爭つて顯家に附く。凡そ五萬人なり。近江に至り、六角氏賴の觀音寺城を攻めて之を拔き、斬首五百級。遂に叡山に至る。諸將、因つて會して戰を議す。或は速に之を襲はんと欲す。正成等、之を然りとす。卽夜、顯家、諸將と攻めて園城寺を破る。新田義貞、遂に京師を復す。而して夜、賊の返り襲ふ所となり、敗れ還る。尊氏復入る。

【通釋】北畠氏は、姓は源で、具平親王から出てゐる。代々名高い公卿であつた。元弘の時になつて顯家といふ人があつた。後醍醐天皇が京都に還られ御位にお戻りなされた時、從三位參議といふ位で陸奧守に任ぜられた。それで父の親房と一緒に、義良親王を守り立て、東の邊境奧羽地方を鎭めに出かけることとなつた。結城宗廣は代々陸奧に居つた。その子親光と先づ官軍に歸服した。そこで命を受けて、顯家の輔佐役となつた。顯家はその時やつと十七歳であつたが、固くこれ等の職を辭退した。そこで、詔して仰せらるゝには「文と武とは、もと一途で、別々のものではない。貴族の者で軍事を掌ることは昔からの制度である」と。顯家は、致方なく任地に出かけた。かくて奧羽地方は變事もなく、靜穩に歸した。尋いで、鎭守府將軍に任ぜられた。後醍醐天皇が足利尊氏を征伐なさるゝことになつた時、顯家に詔して、その征討軍に一緒になるやうにせしめられた。かくて、

顯家は鎌倉までやつて來ると尊氏は早や西の方京都へ出かけた後だつた。顯家は二日の道のりを一日に詰めて大急ぎで之を追つかけた。東北地方の兵はわれ勝ちに顯家に附いた。凡そ五萬人からになつた。近江に至り六角氏頼のゐた觀音寺城を攻め落し、其の時斬つた首が五百級もあつた。猶ほ進んで叡山に至つた。そこで、諸將は會合して戰爭の相談をした。中に急いで賊を襲ひたいものだと主張するものがあつた。正成等も其の議に贊成した。その夜、顯家は、諸將と一緒に、賊の本據園城寺を攻めて破つた。新田義貞は、遂に京都を回復した。しかし、夜、賊の逆襲に遭ひ、敗れて叡山に還へつて來た。尊氏は、再び京都へ入り込んだ。

語釋 具平親王（村上天皇の皇子。）

當是時、諸道賊軍、悉聚京師。凡數十萬人。而官軍不滿十萬。諸將分將之、復攻京師。兵各可二萬。正成將五百騎、軍于糺林、縱火于出雲路。尊氏令上杉憲顯・足利高經等、以東國騎兵五萬、來衝擊之。正成豫造楯數百、鈕而聯之、自蔽以射。賊卻。輙縱騎乘之。賊辟易逃走。顯家・義貞遂擊走尊氏。而日暮。義貞欲留陣京中。正成往說之曰、「今日我軍克、而少所獲。以寡兵屯京中、鹵掠四散。盍懲前日之敗。使敵復振、後難爲力也。我且引還、養銳再舉、以驅敵於數百里外。是全勝之策也」義貞然之、乃皆退陣。

坂本。

是の時に當つて、諸道の賊軍、悉く京師に聚る。凡そ數十萬人。而して官軍は十萬に滿たず。諸將分ちて之に將とし、復京師を攻む。兵各二萬可り。正成、五百騎に將として、糺林に軍し、火を出雲路に縱つ。尊氏、上杉憲顯・足利高經等をして、東國の騎兵五萬を以て、來つて之を衝擊せしむ。正成、豫め楯數百を造り、鉏にて之を聯ね、自ら蔽れて以て射しむ。賊卻く。輒ち騎を縱つて之に乘ず。賊、辟易して逃走す。顯家、義貞遂に擊つて尊氏を走らす。而して日暮る。義貞、留つて京中に陣せんと欲す。正成往いて之に說いて曰く「今日我が軍克てども、獲る所少し。寡兵を以て京中に屯せば、鹵掠四散せん。盍ぞ前日の敗に懲りざる。敵をして復振はしめば、後、力を爲し難からん。我れ且く引き還り、鋭を養ひて再擧し、以て敵を數百里外に驅らん。是れ全勝の策なり」と。義貞、之を然りとし、乃ち皆退いて坂本に陣す。

この時にはもう諸道の賊軍が皆京都へ聚つてゐた。その兵數は數十萬人と註せられた。然るに官軍の軍勢は十萬に滿たなかつた。併し官軍の諸將は此の兵を分けて夫々將となつて、再び京都を攻めた。その兵は各隊二萬位宛であつた。正成は五百騎に將となり、糺林に陣取り、出雲路に火を掛けた。尊氏は上杉憲顯、足利高經等をして、關東の騎兵五萬を引きつれ、正成の軍を衝き擊たせた。正成は前以て數百の楯を造り、鉏で結び聯ね、各々その蔭に隱れて敵を射させた。賊は退卻した。隙かさず騎を放つて之に附け込ませた。賊は閉口して披き靡き退き逃げた。顯家・義貞は續け樣に敵を擊つて尊氏を走らせた。しかしその內に日が暮れた。義貞はその儘留りて京都に陣取つてゐようと思つた。正成は往いて義貞に說いて曰ふには「今日我が軍は戰にこそ勝ちま

したが・獲物が少なう御座いました。僅かな兵で都の中に屯したならば、その兵士どもが、賊の遺して置いた財物抔を分捕らうと思つて散り／＼になる恐れがあります。先日夜襲せられて、失敗なされた事にお懲りにはなりませんか。敵をして再び勢を得しめたなら、後來如何とも手の下しやうのない事になりはしませんでせうか。それよりは我が軍は一と先づ引き還へし、士卒の鋭氣を養つて、もう一と旗擧げ、敵を數百里も外へ逐ひ捲くつて終ひたいものです。これが全勝の策で御座います」と。義貞も其の說を尤もなことゝし、そこで皆退卻して坂木に陣取つた。

【語釋】 糺林（京都の北の方にある。林と書いてモリとよむ。）○出雲路（京都から出雲の方へ行く路、京都の北にある。）○前日之敗（此の前に義貞が京師を一回恢復した。そして其の夜賊に逆襲されて敗れ、復た尊氏が京師へ入つた）○難爲力（再び盡力のしやうがないといふ意。）○坂本（近江國。）

尊氏收諸軍、復入京師。正成素蓄一卒善泣者。旦日、敎其卒與僧數人、行物色原隰。賊兵問故。輒泣曰、「昨日之戰、七將皆沒。將獲尸葬之」。尊氏聞而大喜曰、「彼戰勝而退、有以也」。乃索義貞・正成首、獲稍肖者、梟之、以示於衆。其夜、正成遣卒數千、執炬北走、累累不絕。尊氏軍望見、謂官軍喪其將領而潰去也。急分其兵、四出要擊。在者不復設備。正成與諸將合兵、夜發、昧爽、直薄尊氏軍、縱火鼓譟。尊氏軍大潰而走。委甲蔽野。官軍不甚追賊。前者顧後者、以爲追兵也。往往自殺。死亡大半。

【書下し】尊氏、諸軍を收めて、復京師に入る。正成、素より一卒の善く泣く者を蓄ふ。旦日、其の卒をして、僧數人と行くゆく原隰を物色せしむ。賊兵、故を問ふ。輒ち泣いて曰く、「昨日の戰に、七將皆沒す。將に尸を獲て之を葬らんとす」と。尊氏聞きて、大に喜んで曰く、「彼れ戰勝ちて退きしは、以あるなり」と。乃ち義貞・正成の首を索め、稍肖たる者を獲て、之を梟し、以て衆に示す。其の夜、正成、卒數千を遣はし、炬を執りて北走せしめ、累累として絕えず。尊氏の軍望み見て、官軍、其の將領を喪ひて、潰え去ると謂ふや、急に其の兵を分ち、四出して要擊し、在る者、復備を設けず。正成、諸將と兵を合せて夜發し、昧爽、直に尊氏の軍に薄り、火を縱ちて鼓譟す。尊氏の軍、大に潰えて走り、委甲野を蔽ふ。官軍、甚だ追はず。賊、前者は後者を顧み以て追兵と爲し、往往自殺し、死亡大半なり。

【通釋】そこで尊氏は諸隊を引きまとめて、再び京都へ入つて來た。正成は平素から、泣上戸の兵卒を一人召し抱へてゐた。翌日、其の卒に申し含めて、數人の坊主と、其處らをブラつき歩いて野原や、水溜りを、如何にも誰れかの尸骸を搜し求めるやうな振りをさせた。賊兵がやつて來てその譯を尋ねた。其の泣上戸はソレ來たとばかりに泣いて曰ふには「昨日の戰で我が七人の大將が皆討死されました。それで尸骸を搜して之を葬らうとしてゐるのであります」と。尊氏はこれを聞いて非常に喜んで曰ふには「敵が戰爭に勝つたのにかく退却したのは、矢張りその譯が有つたのである」と。そこで義貞と正成の首を搜させて、稍ゝそれに似たものを得たので、それを曝し首にして、部下の軍勢に示した。その夜、正成は數千人の兵卒を遣はし、炬火をめい／＼に持たせて北の方へ向けて走らせ、引き續いて絕えなかつた。尊氏の軍では之を望み見て、ハヽアこれは官軍の奴等が、その大將を失つて、それで潰え走るのである哩と思つたので、急に兵を分けて四方へ繰り出し、官軍の出て來るのを待

ち伏せして擊たせ、そして、京都の中に殘つてゐた連中は、悉つかり安心して敵に對する備へをしてゐなかつた。正成は、こゝぞと諸將と兵を合せ夜出發して夜明け方に、イキナリ尊氏の軍に押し迫り、其處らへ火を掛けて太鼓を鳴らして大騷ぎした。尊氏の軍では不意を襲はれ、大に潰えて逃げ走り、棄てた鎧が野を蔽ふといふ程であつた。官軍はそれ程ひどく追つかける事をしなかつた。しかし賊兵は、慌てゝ前の者は後から逃げてゐる味方の兵を、追つかけてゐる官軍だと思ひ、早まつて自殺する者も可成りにあつたりして、結局敵の死亡した者は半以上であつた。

【語釋】一卒善泣者（越前の者、五郎作といふ。楠公に事へて杉本佐兵衞といふ。）〇七將（楠・新田・北畠・結城・名和・千草（源忠顯）・脇屋）〇將領（領は頸のこと。頭領、將領などと使ふ。大將のこと。）〇四出（鞍馬路・大原口・勢多・嵯峨・仁和寺等に兵を出して待ち伏せした。）〇死亡大半（往々自殺したから死亡大半といふのではない。尊氏の軍大に潰えて死亡大半であつたので、中には斯樣にして死んだりして散々の態たらくな有樣を述べたのである。）

二月、尊氏・直義走于湊川。官軍追擊、與直義戰于豐島。勝敗未決。正成後至、遶出敵後。直義不戰而走。會土居通治・得能通言、以舟師來援、擊破賊先鋒大友貞宗兵、復擊走直義。尊氏終令赤松則村守播磨、而航海走鎭西。

【通釋】二月、尊氏・直義・湊川に走る。官軍追擊して、直義と豐島に戰ふ。勝敗未だ決せず。正成後れて至り、遶りて敵の後に出づ。直義戰はずして走る。會々土居通治・得能通言・舟師を以て來り援ひ、賊の先鋒大友貞宗の兵を擊破し、復擊つて直義を走らす。尊氏、終に赤松則村をして、播磨を守らしめて、海に航して鎭西に走る。

【通釋】二月、尊氏と直義は湊川に走げた。官軍は之を追撃して豐島で戰つた。勝負がまだどちらとも決まらないでゐた。そこへ正成が後れ走せにやつて來て、グルリ廻つて敵の背後へ出た。直義は腹背に敵をうけ、コレは叶はぬと戰はないで逃げた。丁度そこへ、土居通治・得能通言が海軍を引率して助けに來て、賊の先鋒の大友貞宗の兵を撃ち破り、復た撃つて直義を走らせた。尊氏は終に赤松則村をして播磨を守らせて、自分は船に乘つて海を渡り、九州へ落ち延びた。

菊池武敏、武重弟也。時在肥後。聞少貳頼尚發兵迎尊氏也、將三千人追之、至水木渡。頼尚已濟、餘衆待舟。武敏撃殲之、遂攻少貳貞經于內山、斬之、遂與尊氏戰于鞴濱。有叛降者、武敏敗歸菊池城。城尋陷。武敏逃匿山中。於是九國悉附尊氏。

【讀方】菊池武敏は、武重の弟なり。時に肥後に在り。少貳頼尚、兵を發して尊氏を迎ふと聞き、三千人に將として之を追ひ、水木渡に至る。頼尚已に濟り、餘衆、舟を待つ。武敏撃つて之を殲し、遂に少貳貞經を內山に攻めて、之を斬り、遂に尊氏と鞴濱に戰ふ。叛き降る者ありて、武敏敗れ、菊池城に歸る。城尋いで陷る。武敏逃れて山中に匿る。是に於て九國悉く尊氏に附く。

【通釋】菊池武敏は、武重の弟である。當時、肥後に居つた。少貳頼尚が兵を出して、尊氏を迎へると聞いて、三千人を率ゐて、之を追つかけ、水木渡まで來た。頼尚は早や其の時には川を濟つた後で、殘りの軍勢が舟を待

つて居た所であつた。武敏は、撃つて、殘らず滅し、遂に少貳貞經を内山に攻めて、之を討ち取り、それから尊氏と轄濱で戰つた。叛いて敵に降つた者がゐた爲めに武敏は敗北して菊池城に歸つた。所がその菊池城も程なく陷落した。武敏は逃げて山中に匿れた。そんな譯で九州は全部尊氏に屬いた。

【語釋】水木渡・轄濱（筑前）〇叛降者（松浦氏。浦上氏。）

尊氏之西也、正成欲窮追之。義貞遷延、及三月乃發、攻赤松則村于白旗城。城固不拔。義貞弟義助說之曰「嚮楠氏據金剛山、北條氏擧天下兵攻之、不克。竭力一城、而顧失天下。君盍鑒焉。聞尊氏已幷九國、且東上。君宜分兵圍城、而急拔舟坂、以徇山陽。」義貞乃令義助攻舟坂。舟坂賊兵據險不下。

【通釋】尊氏の西するや、正成、之を窮追せんと欲す。義貞遷延し、三月に及び乃ち發し、赤松則村を白旗城に攻む。城堅くして拔けず。義貞の弟義助、之に說いて曰く「嚮に楠氏、金剛山に據り、北條氏、天下の兵を擧げて之を攻めたれども克たず。力を一城に竭して、顧つて天下を失ふ。君盍ぞ鑒みざる。聞く、尊氏已に九國を幷せ、且に東上せんとすと。君宜しく兵を分ち城を圍み、而して急に舟坂を拔き、以て山陽を徇ふべし」と。義貞乃ち義助をして、舟坂を攻めしむ。舟坂の賊兵、險に據つて下らず。

【評釋】尊氏が西に走つたとき、正成は之を追ひ詰めて、討ち取らうと思つた。義貞は愚圖々々して三月になつ

てから、やつとのことで出發し、赤松則村を白旗城に攻めた。城が堅固で、容易に落ちない。義貞の弟義助が之に說いて曰ふのに「以前楠氏が金剛山に立籠つたとき、北條氏が天下の兵を全部つれて、之を攻めたけれども、克つことが出來なかつた。そんな譯で力を一つの城にのみ盡した結果、北條は却つて天下を失つて終つた。兄上にはなぜ之を手本となされませんか。聞く所によると尊氏は、すでに九州を併呑し、近く東に攻め上らうとして居るさうです。兄上には、この際、兵を分けて城を圍み、別に一隊を率ゐて急に舟坂を陷れ、山陽道をとなへ從へるやうになされたらよいでせう。」と。そこで、義貞は義助をやつて、舟坂を攻めさせた。舟坂の賊兵は險處に立て籠つて中々降參しない。

初尊氏犯闕、山陽皆應之。獨兒島高德、以孤軍攻福山城、不克。其兵連叛、乃逃三石山。及聞義助攻舟坂、則喜遣間使、告曰「三石之南有間道、可以出舟坂之背。吾起兵于熊山、使賊分兵。公則一軍由間道夾攻之、必拔舟坂。舟坂拔、則西國無不服者矣」。義助大喜、與約期。先期一夜、高德與父範長上熊山。倉卒不及聚族人、兵僅二百。天明、舟坂賊果分三千人、七道來攻。高德防戰重傷、終奮擊走賊兵。而義助潛軍出賊後、遂拔舟坂、遣一將據福山。

【訓讀】初め尊氏の闕を犯すや、山陽皆之に應ず。獨り兒島高德、孤軍を以て福山城を攻めて、克たず。其の兵連に叛く。乃ち三石山に逃る。義助、舟坂を攻むと聞くに及び、則ち喜びて、間使を遣はし、告げしめて曰く、「三石の南に間道あり、以て舟坂の背に出づべし。吾れ兵を熊山に起し、賊をして兵を分たしめん。公、則ち一軍にて、間道より之を夾み攻めば、必ず舟坂を拔かん。舟坂拔けば、則ち西國服せざる者なけん」と。義助大に喜び、與に期を約す。期に先だつ一夜、高德、父範長と熊山に上る。倉卒にして族人を聚むるに及ばず。兵僅に二百。天明、舟坂の賊、果して三千人を分ち、七道より來り攻む。高德防ぎ戰ひ重傷す。終に奮擊して賊兵を走らす。而して義助軍を潛めて賊の後に出で、遂に舟坂を拔き、一將を遣はして福山に據らしむ。

【通釋】はじめ、尊氏が京都の御所に攻め上つた時、山陽道は一帶に皆尊氏に屬いた。たゞ兒島高德だけは孤立無援の軍勢を率ゐて福山城を攻めたが、克たなかつた。それに高德の部下の兵士が次ぎ〳〵と叛き去つた。そこで高德は三石山に逃げ込んだ。義助が舟坂を攻めると聞いてから非常に喜び、しのびの使を遣はして、告げて曰ふには「三石山の南に拔け道があつて、そこから舟坂の背後に出ることが出來ます。私は兵を熊山に起して、賊が私の方へも兵を分けて攻めて來るやうに致しませう。(さすれば貴下を攻める敵勢が削がれる譯) 貴下は別働隊の一軍を以て、その間道から敵の背後に出で、敵を挾擊なされば、きつと舟坂を陷れることが出來ます。舟坂が陷落すれば、西國地方は皆官軍に歸服することになつて終ふでせう」と。義助はそれを聞いて非常に喜び、共に攻擊の期日を約束した。その期日の前夜、高德は、父の範長と一緒に熊山に登つた。急の事で、一族どもを呼び集める暇もなかつた。從つてその兵わづかに二百ばかりであつた。夜明け頃、果して舟坂の賊が三千人の兵を分けて七道から攻め寄せて來た。高德は防ぎ戰つて、ひどい負傷をした。しかし結局奮擊して、賊兵を走らせた。

そして一方義助は、軍隊を悪して、賊の背後に出でしめ、遂に舟坂を陥れ、別に一將を遣はして福山に立て籠らせた。

語釋　福山（備後）○三石山・熊山（備前）○一將（大井田氏經。）

赤松則村馳使、告尊氏曰「白旗城陥、則公雖有衆、莫所用之。」尊氏乃大擧東上、水陸並進。福山城陥。義助引兵退。菊池武重殿之。賊舟師上陸、陣西川尻。高德聞之、欲合於義助、踰山而東。創劇。範長託之僧寺、以八十餘人東走。會義貞已釋白旗圍。赤松氏兵三百騎、見範長過、呼曰「敗卒盍釋甲降。」範長笑曰「嚮尊氏百方招我。我輒毀其書投火。今曷降汝輩哉。」潰其陣出。賊傳呼敗卒過。土兵羣起。範長悉亡其兵。所餘者六人。曰「悔我不擧族來。」乃伏刃死。

訓讀　赤松則村、使を馳せ尊氏に告げて曰く、「白旗城陥らば、則ち公、衆ありと雖も、之を用ふる所なからん」と。尊氏、乃ち大擧して東上し、水陸並び進む。福山城陥る。義助、兵を引いて退く。菊池武重、之に殿す。賊の舟師、陸に上り、西川尻に陣す。高德之を聞き、義助に合せんと欲し、山を踰えて東す。創劇し。範長、之を僧寺に託し、八十餘人を以て東走す。會義貞已に白旗の圍を釋く。赤松氏の兵三百騎、範長の過ぐるを見て、

叫んで曰く、「敗卒、盍ぞ甲を釋いて降らざる」と。範長笑つて曰く、「嚮に尊氏、百方我を招けり。我れ輒ち其の書を毀つて火に投ぜり。今曷ぞ汝が輩に降らんや」と。其の陣を潰やして出づ。賊、敗卒過ぐと傳呼す。士兵群り起る。範長悉く其の兵を亡ひ、餘す所の者六人のみ。曰く、「我れ族を擧げて來らざるを悔ゆ」と。乃ち刃に伏して死す。

【通釋】赤松則村が使者を馳せ、尊氏に告げて曰ふには、「もし白旗城が陷落しますと、君がいかに大軍を擁してゐられても、どうにも手の施しやうもなくなるでせう」と。そこで尊氏は、大擧して、東に攻め上ることゝなり、海陸相並んで軍を進めた。かくて福山城は陷落した。義助は、兵を引きつれて退却した。菊池武重が、その殿軍をつとめた。賊の海軍が上陸して、西川尻に陣取つた。高德は之を聞いて義助と合しようと思ひ、山を踰えて、東に向つた。併し創傷がひどく痛み出した。範長は彼を或るお寺に預け置いて八十餘人を引きつれ、東に走つた。その時には丁度義貞は、白旗城の包圍を解いて去つた後であつた。赤松氏の軍勢三百騎餘の者が範長の通過するのを見て呼んで曰ふには「落武者共、なぜ鎧を脫いで降參しないか」と。範長は笑つて曰ふには「以前、尊氏が色々に言ひ寄つて余を招いたが、其の度び毎に余はその書面を破つて、火中にした。それを今更らどうして、其の方共に降參出來るか」と。其の陣を打ち破つて切り拔けた。賊共は次ぎ〳〵と呼び傳へて曰ふには「落武者が通過してゐる」と。そこで、その土地の農卒が群がり起つた。範長はその部下の兵を皆失ひ、餘す所、僅かに六人のみであつた。範長が曰ふのに「自分は一族の者を殘らずつれて來なかつたことを殘念に思ふ」と。そこで刃にうつ伏して自殺して死んだ。

【語釋】西川尻(前備)

賊軍乘勝而進、義貞軍兵庫、飛書告急。朝廷震動。時北畠顯家已歸鎭、京師兵寡。帝命正成、往援義貞。正成奏曰、「尊氏新擧九國而來。其鋒甚鋭。我以疲兵格鬪、無他奇道、其敗必矣。爲今計者、陛下復幸叡山、召還義貞、縱賊入京師、而臣歸河内、絶其糧道、則賊兵日散、我兵日聚。於是、夾而攻之、可一戰而破也。義貞之計、蓋亦出此。顧慮人言耳。戰道非一。要歸於勝。願朝廷再計之。」諸公卿皆然之。獨參議藤原清忠、不可曰、「賊雖衆盛、不過如前役。王師有天命。宜防之外也。」帝從之。正成退、謂其子弟曰、「事已至此。何必抗議。」

通釋 賊軍勝に乘じて進む。義貞、兵庫に軍し、書を飛ばして急を告ぐ。朝廷震動す。時に北畠顯家、已に鎭に歸り、京師兵寡し。帝、正成に命じ、往いて義貞を援けしむ。正成奏して曰く、「尊氏、新に九國を擧げて來る。其の鋒甚だ鋭し。我れ疲兵を以て格鬪す、他の奇道なくんば、其の敗るゝ必せり。今の計を爲す者は、陛下復叡山に幸して、義貞を召還し、賊を縱つて京師に入らしめ、而して臣は河内に歸り、其の糧道を絶たば、則ち賊兵、日に散じ、我が兵、日に聚らん。是に於て、夾みて之を攻めば、一戰にして破る可きなり。義貞の計も、蓋し亦此に出づ。顧ふに、人言を慮るのみ。戰道は一に非ず。要は勝に歸す。願はくは朝廷再び之を計れ」

と。諸公卿、皆之を然りとす。獨り參議藤原清忠、可かずして曰く、「賊、衆盛なりと雖も、前役の如きに過ぎず。王師　天命あり。宜しく之を外に防ぐべきなり」と。帝、之に從ふ。正成退き、其の子弟に謂つて曰く、「事已に此に至る。何ぞ必ずしも抗議せん」と。

通釋 賊軍は勝つた勢につけ込んで進んで來た。義貞は兵庫に陣取つてゐたが、書面を都へ大急ぎで持たせて遣り、危急を告げた。朝廷では震ひ上り大騷ぎされた。其の時には既に北畠顯家は鎭守府へ向けて歸つて終つた後で、京都には兵士の數が手薄であつた。後醍醐天皇は正成にお命じになつて、兵庫へ行つて義貞を援けるやうにせしめられた。正成は奏上して曰ふには「尊氏は此の度九州の兵を引きつれて攻め來りました。その切つ先は中々鋭う御座いまする。こちらが疲れた兵士で以て戰ひました所で、何か外に良い仕方でも御座りませぬと、負けるに決まつて居ります。それで只今の場合、打つてつけの計略と申しますれば、陛下には今一度比叡山へ行幸遊ばし、義貞を兵庫からお召び還へしになり、賊を自由に京都へ入り込ませて置き、私は河内に立ち歸りまして、敵の兵糧を搬ぶ道を絶ち切つて終ひましたなら、賊の兵どもは食ひ物も充分でないとなりますると、日に日に散らばりまして、我が軍はその反對に兵が日に日に聚まつて來ることになるで御座いませう。左樣して置いて、弱つた所を夾み討ちに攻めましたならば、一度の戰で破ることが出來るで御座いませう。義貞の計畫も思ふに此れと同じで御座いませう。アノ樣に義貞が兵庫に頑張つて居りまするのは、世間の口が蒼蠅いからで御座いませう。戰の道は一樣では御座いませぬ。結局勝利を得さへすればそれで宜敷く、それが肝心な事で御座います。何卒、もう一度お考へお直ほし下され、此の計畫をお聽るし下さらん事を願ひ上げまする」と。諸〻の公卿衆は皆、口を揃へて此の說に贊成した。たゞ獨り參議の藤原清忠は承知しないで曰ふのに「成る程、賊は人數

多く盛んではあるけれども、どうせ此の前の戰爭のやうなものだらう。天子の軍には天命といふものがある。左樣な比叡山へお逃げになつたりせずに、京都へ入らぬやうに、外で之を喰ひ止めたら宜しからう」と。天皇はこの淸忠の計にお從ひなされた。正成は其の場を退き出で、自分の子弟に謂つて曰ふには「萬事がこのやうになつて終つた。これ以上反對の議論を申上ることはないのだ」と。

〔語釋〕夾而攻之（新田が叡山から、楠が河内から攻めて來むことになる。）〇慮人言（戰はずに歸ると、人から色々の非難をされるので兵を引き返さないでゐるのであるとの意。）〇前代（尊氏が[illegible]より京へ攻め上つて敗れた。その事をさす。）〇有天命（天命の歸する所は必ず王師である。）

五月十六日、與弟正季・子正行等、辭闕而西、至櫻井驛。正行時年十一矣。正成遣歸之河內、誡之曰「汝雖幼、已過十歲。猶能記吾言。今日之役、天下安危所決、意吾不復見汝也。汝聞吾已戰死矣、則天下盡歸足利氏可知也。愼勿計較禍福、以忘義、以廢乃父之忠。苟使我之族隸而有一人存者、則率以守金剛山舊址、以身徇國、有死無他。汝所以報我、莫大於此」。因以帝所嘗賜寶刀授之、訣別。正行請從共死。正成叱之起。正行揮涕而去。正成乃至兵庫、慰勉義貞、訣飲終夜。

〔通釋〕五月十六日、弟正季・子正行等と、闕を辭して西し、櫻井驛に至る。正行、時に年十一なり。正成之を

河内に遣歸し、之を誡めて曰く、「汝幼なりと雖も、已に十歳を過ぐ。猶ほ能く吾が言を記せん。今日の役は、天下安危の決する所、意ふに吾れ復汝を見ざるなり。汝、吾れ已に戰死すと聞かば、則ち天下盡く足利氏に歸せんこと知るべきなり。愼んで禍福を計較し、利に嚮ひ、義を忘れ、以て乃父の忠を廢する勿れ。苟も我が族隷にして一人の存するものあらしめば、則ち率ゐて以て金剛山の舊址を守り、身を以て國に徇ひ、死ありて、他無かれ。汝の我に報ゆる所以は、此より大なるは莫し」と。因つて帝の嘗て賜ふ所の寶刀を以て之に授けて、訣別す。正行、從ひて共に死せんと請ふ。正成、之を叱して起たしむ。正行泣を揮つて去る。正成乃ち兵庫に至り、義貞を慰勉し、訣飲すること終夜なりき。

〔通釋〕五月十六日、弟の正季・伜の正行等と、御所をお暇して西へ向つて去り、櫻井驛へ到着した。正行は其の時十一歳であつた。父正成は正行を本國の河内へ歸へしやり、訓誡して曰ふのに「お前はまだ幼少ではあるが、もう十歳を越したのぢや。だから子供乍ら乃父がいふことを、能く記憶てゐて吳れる事だらう。こん度の戰爭は、天下が安穩になるか、危くなるか、何方かに決まる戰であるが、どうも考へて見るに、こんどこそは討死ぢや。もう二度とお前には會へないであらう。お前が、此の父が既に討死したと聞いたなら、其の時こそは、天下が皆アノ憎む可き足利氏の手に歸して終ふといふことを知つて宜いのぢや。お前はよく／＼氣をつけて、一身の禍福などに氣を惹かされて、打算比較をなし、利のある方に向ひ、大義を打ち忘れ、乃公が此れ迄、有らん限り盡した忠義を臺なしにするやうなことがあつてはならぬぞよ。苟めにも我が一族・家來の者で、一人でも生き殘る者が有るからには、その一人でも宜い、之を率ゐて金剛山の舊との城址を打ち守つて、國家の爲に一身を投げ捨てゝ討死せい、ゆめゆめ他の料簡を出しでもすまいぞ。お前が乃父に報いて吳れる孝行は、此れに越したものは

ないのぢや」と。そこで前に、御醍醐天皇が下された寶刀を正行に授け與へて、別れた。正行はその時に是非お供をして、御一緒に討死致し度いとお願ひした。しかし正成は之を叱つて起たした。正行は致方なく、泣く泣く其處を立ち去いた。正成はそこで兵庫へ行き、義貞を慰め勵まし、お別れの酒を終夜酌み交はした。

〔語釋〕櫻井驛（攝津にある。今は田の中にその驛趾が有るといふことである。）○乃父（汝の父、卽ち倅に向つて親が自分といふ語、乃公は臣に對して君が言ふ語。）○徇（殉と同じ意）○寶刀（名作りの一寶刀。）

當是時、尊氏將水軍、直義將陸軍。陸軍稱五十萬。正成率手兵七百、陣于湊川以當之。義貞以三萬騎、陣于和田崎、以扞水軍。水軍先鋒過而東。義貞拔軍循之。而尊氏全軍、已上和田崎矣。正成顧謂正季曰、我腹背受敵、不可遁也。先破前者、而後接背者如何。正季曰、然。於是、兄弟並突入陸軍、七離七遭、欲獲直義。直義馬傷而陸。我兵垂及。有一敵將、遮鬪而逸之。尊氏亦分兵來援、包我軍後。正成兄弟、回馬當之、血戰十六合、盡亡其騎、所餘七十三騎。猶可以潰圍。而正成心不欲生。乃走入湊川北民舍、坐釋鎧。身被十一創。顧謂正季曰、死而何爲。曰、願七生人間、以殺國賊。正成欣然曰、是獲吾心。搆刺而死。正成年四十三。宗族十六人、從士五十餘人、悉死之。菊池武重在義貞軍、使弟武吉來視湊川戰狀。會正成且死、不忍去、亦死之。

【訓讀】是の時に當り、尊氏、水軍に將となり、直義、陸軍に將たり。陸軍は五十萬と稱す。正成、手兵七百を率ゐて、湊川に陣し、以て之に當り、義貞、三萬騎を以て和田崎に陣し、以て水軍を扞ぐ。水軍の先鋒過ぎて東す。義貞、軍を拔いて之に循ふ。而して尊氏の全軍、已に和田崎に上れり。正成、顧みて正季に謂つて曰く、「我れ腹背に敵を受け、遁る可からざるなり。先づ前者を破つて、而る後、背者に接する、如何」と。正季曰く、「然り」と。是に於て、兄弟竝びに陸軍に突入し、七離七遭、直義を獲んと欲す。直義、馬傷ついて墜つ。我が兵及ぶに垂んとす。一敵將あり、遮り鬪ひて之を逸せしむ。尊氏も亦兵を分つて來り援け、我が軍の後を包む。正成兄弟、馬を回して之に當り、血戰十六合、盡く其の騎を亡ひ、餘す所七十三騎のみ。猶ほ以て圍を潰やすべし。而れども正成、心に生を欲せず。乃ち走つて湊川の北の民舍に入り、坐して鎧を釋く。身、十一創を被る。顧みて正季に謂つて曰く、「死して何をか爲す」と。曰く、「願はくは七たび人間に生れ以て國賊を殺さん」と。正成欣然として曰く、「是れ吾が心を獲たり」と。耦刺して死す。正成、年四十三。宗族十六人、從士五十餘人、悉く之に死す。菊池武重、義貞の軍に在り。弟武吉をして、湊川の戰狀を來り視しむ。正成且に死せんとするに會ひ、去るに忍びず、亦之に死す。

【通釋】この時に當り尊氏は海軍の將となり、直義は陸軍の將となつてゐた。陸軍は總勢五十萬人と稱してゐた。正成は手勢七百人を率ゐて湊川に陣取つて此の陸軍に當ることになり、義貞は三萬騎を引きつれて和田崎に陣取つて海軍を禦ぐことになつた。海軍の先發が和田崎に上陸せずに、其處を通り拔けて東の方へ進んで行つた。義貞は和田崎の軍を引き拂うてそれに並行して進んで行つた。そして其の間に尊氏の全軍は早や和田崎に上陸して終つた。正成は振り顧みて正季に謂つて曰ふに「我が軍は前後に敵を受けることになり、もう到底遁れることは

出來なくなつた。先づ前の方を破つて、それから後に後方の敵にブッつかることにしたら如何だらう」と、正季は「それが宜敷いでせう」と曰つた。そこで正成・正季兄弟共に陸軍に突き進み、アチコチと奮戰して兩人は七度びも離れたり遭つたりし、どこ迄も直義を擒にしようと思つた。直義は馬が負傷した爲め馬から墮ちた。我が兵が殆んど之に手がとゞきさうになつた。一人の敵將がやつて來て、邪魔立てして闘ひ之を逃がして終つた。尊氏もその內に兵を分つて援けにやつて來て、我が軍の後部を取り卷いて終つた。正成兄弟は馬を引き返し、此の後部の敵にブッつかり、血みどろになつて戰ふこと十六度、部下の兵を大概失つて終つて、殘す所は僅かに七十三騎のみであつた。七十三騎もあれば敵の圍を破つて逃げ出すことは出來ないでもなかつた。而し正成はもう天下に望みがないことを知つて、心の內に生き延びることを欲しなかつた。そこで湊川の北の民家に入り、ドッカと坐つて鎧を脫いだ。脫いで見ると自分の身は十一ヶ所の負傷をしてゐた。顧みて正季に謂つて曰ふには「死んでから何を爲ようか」と。正季が曰ふのに「七度人間に生れ來て、この國賊を殺したいもので御座います」と。正成は嬉しさうに曰ふには「自分もそのやうに思つてゐたのだ」と。弟と刺し違へて死んで終つた。その時正成年四十三歲であつた。一族の者十六人、お供の士五十餘人、皆一緒に死んで終つた。菊池武重は義貞の軍にゐた。弟の武吉をして湊川の戰爭の樣子を視察にやつた。丁度正成が自殺しようとしてゐる所であつたので、義理にも見すく引き返へす譯にも行かず、この時一緒に自殺した。

【語釋】和田崎（兵庫の南。）○與レ軍偕レ之（大軍を逃がすまいと、これに添うて追かけて行く。拔軍とは軍を引き拔けること）○全軍已上二和田崎一（海軍の先發隊で義貞を牽制して、和田崎を守備にさせておいて、その背から後の本隊六千艘の舟が難もなく其處へ上陸した。）○腹背（陸軍が前に、尊氏の上陸した軍が後ろに。）○一敵將（薬師寺小次郎。）○宗族十六人（橋本正員・宇佐美正安・神宮正師・和田正典等。）○武吉（川[illegible]に[illegible]とあるは[illegible]。）

義貞敗退、尊氏入京師、送正成首於河內。一家聚哭。正行起入室。其母尾而闚之、則執父所授刀、將自殺。母徑入、奪刀而泣曰「汝何惑焉。乃父之遺歸汝、豈欲汝自殺也。汝啣遺命、歸來告我。而汝先忘之。惡能任王事。」正行大悟、自是、以討國賊、復父讎爲志。常與兒童嬉戲、爲馳逐狀曰「追足利也」爲斬首狀曰「獲尊氏元也」楠氏族黨、多死湊川、而河內・紀伊之間、猶有義故存者、皆思戴正行。

【訓讀】義貞敗れ退き、尊氏京師に入る。正成の首を河內に送る。一家聚り哭す。正行起つて室に入る。其の母尾して之を闚へば、則ち父の授けし所の刀を執り、將に自殺せんとす。母、徑に入り、刀を奪ひて泣いて曰く、「汝何ぞ惑へる。乃父の汝を遺歸せしは、豈に汝をして自殺せしむるならんや。汝、遺命を啣み、歸り來つて我に告ぐ。而して汝、先づ之を忘る。惡んぞ能く王事に任へん」と。正行大に悟り、是より、國賊を討ち、父の讎を復するを以て志と爲す。常に兒童と嬉戲するに、馳逐の狀を爲して曰く、「足利を追ふなり」と。斬首の狀を爲して曰く、「尊氏の元を獲るなり」と。楠氏の族黨、多くは湊川に死す。而して河內・紀伊の間、猶ほ義故の存する者あり、皆正行を戴かんことを思へり。

【通譯】義貞は敗れて退却し、尊氏は京都へ入つて來た。彼は正成の首を河內の正成の屋敷へ送り屆けた。一家の者共は皆聚つて哭いた。すると正行が起つて一室に入つて行つた。正行の母は變だと思つて正行の後を尾けて

樣子を覗つてゐると、正行は父が形見に與へた刀を執つて將に自殺しようとしてゐた。母はいきなり其の部屋に飛び込んで、其の刀を奪ひとり、泣いて曰ふに、「お前はマア何んでそんなに血迷うたぞ。御父上樣がお前を此處へお歸へしなされたのは、お前に自殺させようと思召されたのではありませぬぞ。お前は御父上樣の御遺言の御言ひ付けを承つて、歸つて來て私に言つたではありませぬか。そのお前からして先きにそれを忘れてお終ひです。そんな料簡で、どうして天子樣のお役に立ちませうぞ」と。正行は此の母の言葉で大に悟つて、これからといふものは國賊足利を討ち、父の讐を返へすことを常に心掛けてゐた。常も子供等と遊び戲れるのに、追かけ廻はす樣などして曰ふのに、「足利を追つかけるのである」と。又首を斬る眞似をして曰ふのに、「サア足利の首を上げるのだ」と。楠氏の一族徒黨の者は多く湊川で討死した。そして河内、紀伊の邊には猶ほ楠氏と義理ある舊臣黨與がゐて、皆正行を推戴しようと思つてゐた。

【語釋】送二正成首一（正成の忠義に感じて送つたといふ人もあるし、そこが尊氏如き奸雄で、いかにも人の心を惹かんとする猾い計略だといふ人もある。）

當リ二是ノ時一、天子避ク二賊ヲ於叡山ニ一。名和・菊池・土居・得能氏、皆從ツテ二義貞ニ一扞禦ス。源忠顯戰歿ス。官軍遂ニ出デテ攻ム二京師ヲ一。路人指シテ二名和長年ヲ一曰ク、「正成・忠顯等既ニ死シ、獨リ有ルノミト二此ノ人一。」及ビテ二戰フニ一大ニ敗ル。長年退キテ至リ二大宮ノ巷ニ一、自ラ閉ヂ二後門ヲ一、與ニ二百人一力戰シテ死ス。

【通釋】是の時に當り、天子、賊を叡山に避く。名和・菊池・土井・得能氏・皆義貞に從つて扞禦す。源忠顯戰歿す。官軍、終に出で、京師を攻む。路人、名和長年を指して曰く、「正成・忠顯等・既に死し、獨り此人ある

のみ」と。戰ふに及び大に敗る。長年退き大宮の巷に至り、自ら後門を閉ぢ、二百人と力戰して死す。

通釋 當時後醍醐天皇は、賊を比叡山に避けてゐられた。名和・菊池・土居・得能の諸氏は、皆義貞に從つて、賊を防いだ。源忠顯は討死した。官軍は遂に比叡山から出て、京都を攻めた。路傍の人々が名和長年を指して曰ふには「正成や忠顯等は、もう既に死なれて、今ではたゞ此の人だけが殘つて居る忠義な人だ」と。戰つて見ると官軍の敗北に終つた。長年は、退いて大宮通りに至り、自ら後ろの門を閉ぢて、必死を示し、二百人の者と力の限り戰つて討死した。

語釋 閉二後門一（退走するといけないから、閉ぢて必死を示したのである。）

冬、尊氏佯降、請二帝還一レ闕。菊池武重等從レ之。皇子宗良走二遠江一、懷良走二大和一。義貞以レ詔奉二皇太子恆良及尊良親王一之二北國一。土居通治・得能通言等從レ之。通言與二族通綱一殿。會二大雪一、至二鹽津一、迷失レ道。適値二賊兵一。將士凍飢、不レ能レ操レ兵。三百人皆植二刀于地一、伏レ之自貫而死。通治與二諸將一守二金崎城一。城陷、力戰自殺。尊良薨、太子被レ虜、入二京師一。

訓讀 冬、尊氏佯り降り、帝に闕に還らんことを請ふ。菊池武重等、之に從ふ。皇子宗良・遠江に走り、懷良・大和に走る。義貞、詔を以て、皇太子恒良及び尊良親王を奉じて、北國に之く。土居通治、得能通言等、之に從ふ。通言・族の通綱と殿す。大雪に會ひ、鹽津に至り、迷うて道を失ふ。適 賊兵に値ふ。將士凍飢し、兵を操

る能はず。三百人、皆刀を地に植て、之に伏し、自ら貫いて死す。通治、諸將と金崎城を守る。城陷り、力戰して自殺す。尊良、薨じ、太子、虜にせられて、京師に入る。

【通釋】此の冬、尊氏は降參した振りして、後醍醐天皇に京都へ還御なされるやうお願ひ申した。菊池武重等がお供になつて從つた。この時、皇子宗良親王は、遠江に走られ、懷良親王は大和に走られた。義貞は、詔によつて、皇太子恒良親王及び尊良親王を奉じて、北國に入つた。土居通治・得能通言等が之に從つて行つた。通治はその一族の通綱と一緒に殿を勤めた。大雪に會つて鹽津まで行つたが、遂に道を迷うて終つた。折から賊兵に出會つた。將士は凍えた上に飢ゑてゐて、武器を手に執ることが出來ない。三百人の者は皆刀を地に立て、其の上にうつ伏し、自分で自分を貫いて死んだ。通治は諸將と金崎城を守つてゐた。これも落城し、勉め戰つて自殺した。尊良親王も薨ぜられ、皇太子恒良親王は擒にせられて、京都に入られた。

【語釋】鹽津（近江）

帝之還闕也、尊氏已擁立新帝之弟。是爲北朝光明帝。請帝傳神器焉。帝弗聽。尊氏囚帝于花山院、殺從行者僧祐覺等、拘執其餘。獨三條景繁得侍。景繁潛進計、逃幸大和。帝夜服婦人衣、由壞牆出。扶上馬、景繁荷神器從。夜方黑。逢赤電照路、比曉達穴生。遣景繁諭吉野僧宗信。宗信嘗助將軍護良者。於是先衆來迎。正行聞而大喜、

與二從弟和田正朝等一馳赴レ之、護レ駕入二吉野一。河內・紀伊將士、相踵來衛、官軍復振。帝思二正成死二王事一、追二贈正三位左近衛中將一、叙二正行正四位下一、爲二帶刀一、遂襲二父官一、任二檢非違使左衛門尉一、兼二河內守一。於レ是建二行宮于吉野一、號二令四方一。

【訓讀】帝の闕に還るや、尊氏已に新帝の弟を擁立す。是を北朝光明帝と爲す。帝に神器を傳へんことを請ふ。帝聽さず。尊氏、帝を花山院に囚へ、從行の者僧祐覺等を殺し、其の餘を拘執す。獨り三條景繁のみ侍するを得たり。景繁、潛に計を進め、逃れて大和に幸せしむ。帝、夜、婦人の衣を服し、壞牆より出づ。扶けて馬に上らしめ、景繁、神器を荷うて從ふ。夜、方に黑し。赤雹路を照すに逢ひ、曉くる比、穴生に達す。景繁を遣はし吉野の僧宗信を諭さしむ。宗信は嘗て將軍護良を助けし者。是に於て、衆に先だつて來り迎ふ。正行聞いて大に喜び、從弟和田正朝等と、馳せて之に赴き、駕を護りて吉野に入る。河內・紀伊の將士、相踵いで來り衞り、官軍復振ふ。帝、正成王事に死するを思ひ、正三位左近衞中將を追贈し、正行を正四位下に叙して、帶刀と爲し、遂に父の官を襲ぎて、撿非違使左衞門尉に任ぜられ、河內守を兼ねしむ。是に於て、行宮を吉野に建て、四方に號令す。

【通釋】後醍醐天皇が京都へ還御になると、尊氏は既に光嚴天皇の弟君を守り立てゝゐた。是が北朝の光明天皇である。そして後醍醐天皇に御願ひして三種の神器をお傳へ下さるやうと申し出た。天皇は御不承知であつた。そこで尊氏は天皇を花山院に押し込め、從者の僧祐覺などを殺し、其の他の者は執へて禁錮した。たゞ三條景繁

だけは天皇の御側に侍ることが出來た。景繁はこつそり計略を申し上げ、こゝをお逃げなされて、大和に行幸せられるやうにした。天皇は夜女の着物をお召しなされ、こはれた垣根から逃れ出られた。天皇をお扶けして、馬にお乘せ申し、景繁自身は、三種の神器を肩に荷うてお供をした。丁度その夜は闇夜であつた。併し幸ひ稻妻が起つて、路を照したので、夜あけ頃には穴生に到着することが出來た。そこで、景繁を派遣して、吉野の僧の宗信に諭させ、後醍醐天皇をお迎へするやうにした。この宗信は以前將軍護良親王を助けた程の者であるから、早速衆に先だつて、お迎へにやつて來た。楠正行は天皇が吉野に行かれると聞いて大に喜び、從弟の和田正朝等と一緒に驅け付けて來て、お乘物を護衞し、吉野山に入つた。河内・紀伊の將士が、次ぎ〳〵とやつて來て護衞し、官軍は再び振つた。天皇は、楠正成が天子の事に斃れ、その爲めに討死したことを思召されて、正三位左近衞中將を追贈され、正行を正四位下に叙せられ、帶刀となし、遂に父正成の官職をついで、檢非違使左衞門尉に任ぜられ、河内守を兼ねしめられた。そこで行在所を吉野に建て、四方に號令をお出しなされることゝなつた。

【語釋】 其餘（菊池武重、大館氏明、江田行義、宇都宮公綱等。）○穴生（大和）○宗信（吉野吉水院の主。）○帶刀（東宮を護衞する官。）

先是、菊池武重從帝被拘、候守者懈逃歸、據菊池。帝因拜皇子懷良、爲征西將軍、赴菊池。大館氏明亦逃如伊豫、士居通治子通郷、得能通言子彈正、迎而起兵。北畠顯家弟顯信亦起兵於伊勢。而顯家討國內叛者、據靈山。明年秋、顯家欲入援行在、得

結城宗廣等兵、奉義良親王軍白河關。兵來屬者數萬人。進與尊氏子義詮相拒利根川。齋藤實永亂流先渡、全軍繼之。水激於西岸、賊兵漂溺、敗走。顯家追北、攻義詮於鎌倉、走之。

【訓譯】是より先き、菊池武重、帝に從つて拘へられ、守者の懈るを候ひ、逃れ歸り、菊池に據る。帝、因つて皇子懷良を拜し、征西將軍と爲し、菊池に赴かしむ。大館氏明も亦逃れて、伊豫に如く。土居通治の子通郷、得能通言の子彈正、迎へて兵を起す。北畠顯家の弟顯信も、亦兵を伊勢に起す。而して顯家は國內の叛者を討ち、靈山に據る。明年秋、顯家、入りて行在を扶けんと欲す。結城宗廣等の兵を得、義良親王を奉じて、白河關に軍す。兵の來り屬する者數萬人。進んで尊氏の子義詮と、利根川に相拒ぐ。齋藤實永、流を亂つて先づ渡り、全軍之に繼ぐ。水、西岸に激し、賊兵漂溺して、敗走す。顯家、北ぐるを追ひ、義詮を鎌倉に攻め、之を走らす。

【通譯】これより先き菊池武重は後醍醐天皇にお供をして京都に入り拘留せられてゐたが、番人の油斷を見すまし、逃げ歸つて、故郷の菊池に立て籠つた。そこで天皇は皇子懷良親王を征西將軍に御任命になり、菊池に赴かしめられた。大館氏明も亦逃げて、伊豫に行つた。土居通治の子の通郷と得能通言の子の彈正とが之を迎へて兵を起した。北畠顯家の弟の顯信も亦伊勢で兵を擧げた。そして顯家は、鎭守府にゐたが、國內の謀叛人どもを平定して靈山に立て籠つた。翌年秋、顯家は、大和に行つて、行在をお援けしようと思つた。丁度結城宗廣等の兵を手に入れたので、義良親王を奉じて、白川關に陣取つた。その內に追々と集つて來た兵が數萬人からになつ

た。そこで進んで尊氏の子の義詮と、利根川を間にして拒ぎ合つてゐた。すると顯家の手下の齋藤實季が、流れを横切り眞先きに渡つたので、全軍もこれに繼いで、渡つて行つた。河の水が多勢の兵士に押されて、西岸に打ち上げたので、賊兵は溺れ漂ひ、敗北して終つた。顯家は賊の逃げるのを追つかけ義詮を鎌倉に攻め詰めて之を走らせた。

靈山（磐城）

三年春、與宗良親王合兵、偕赴京師。賊兵大起擁後。顯家回戰于青野原、破之、聞尊氏遣高師泰來迎、乃轉出伊勢。師泰尾擊。顯家回戰于雲津川、破之、至南都。結城宗廣曰「避敵於行宮、不若攘賊於王城。」顯家從之。逢賊兵逆擊。顯家敗走。乃使兩親王赴行宮、自收敗兵、軍安部野。五月、高師直來襲。顯家與二十餘騎、衝圍而死。名和義高死之。宗廣走歸吉野。

三年春、宗良親王と兵を合せ、偕に京師に赴く。賊兵、大に起り、後を擁す。顯家、回つて青野原に戰ひ、之を破る。尊氏、高師泰を遣はし、來り迎ふと聞き、乃ち轉じて伊勢に出づ。師泰尾擊す。顯家回つて雲津川に戰ひ、之を破り、南都に至る。結城宗廣曰く、「敵を行宮に避くるは、賊を王城より攘ふに若かず」と。顯家、

之に從ふ。賊兵、逆へ撃つに逢ひ、顯家敗走す。乃ち兩親王をして行宮に赴かしめ、自ら敗兵を收め、安部野に軍す。五月、高師直來り襲ふ。顯家、二十餘騎と圍を衝いて死す。名和義高、之に死す。宗廣走り、吉野に歸る。

【通釋】三年春、顯家は遠江の宗良親王と兵を合はせ、一緒に京都に向つて出かけた。すると賊兵大に起つて、その後を押へた。顯家は、引き返して青野原で戰つて、之を打ち破つた。その内に尊氏が高師泰をして自分を待ち受けさせてゐると聞いたので、顯家は方向を轉じて伊勢に出た。師泰はその跡をつけて撃つた。顯家は又引き返して、雲津川で戰ひ、之を敗り、奈良に至つた。結城宗廣が曰ふのに「敵を避けて行在所に行くよりは、京都を攻めて賊を王城より追ひ拂ふ方が善いと思ひます」と。顯家は此の說に從つた。所が京都に着かぬ前、賊兵に迎へ撃たれて、顯家は敗走した。そこで義良宗良の兩親王をして、吉野の行在所にお出でを願ひ、自分は敗兵を纏めて、安部野に陣取つた。五月、高師直が襲うて來た。顯家は、二十餘騎と一緒に圍を衝き破らうとして討死して終つた。名和義高もこの時に討死した。宗廣は走つて吉野に歸つた。

【語釋】青野原（美濃）〇雲津川（伊勢）

師直遂圍顯信於男山。顯信善拒、出撃少利。賊縱火登城。城兵撃走之。已而糧竭、潰圍走河內。帝初遣廷臣將兵救顯信、又詔北國將士援之。義貞欲驟赴援。兒島高德從在軍中。說曰「前日之敗、以賊絕我糧道。今無若遣數千人據叡山、取糧北陸、而時出擾京師。是深根固蒂之策也。請貽書山徒焉」義貞從之。山徒肯之。義貞遣義助赴

之望男山火、逡巡而去。尋義貞戰死。結城宗廣請及顯家餘威未盡收東邊兵。帝令宗良親王先發、至遠江待之。遂以顯信襲兄官職、與親房及宗廣奉義良親王、海路赴任。遇颶於天龍洋、舟四散。親房抵常陸、宗廣至安濃津、顯信與義良親王抵篠島。宗廣病死。四年三月、顯信奉親王歸吉野。

【訓讀】師直、遂に顯信を男山に圍む。顯信善く拒ぎ、出で撃つて利少し。賊、火を縱ち城に登る。城兵撃つて之を走らす。已にして糧竭き、圍を潰やして河内に走る。帝、初め廷臣を遣はし、兵に將として顯信を救はしめ、又北國の將士に詔して、之を援けしむ。義貞、驟に赴き援けんと欲す。兒島高德、從つて軍中に在り。說いて曰はく「前日の敗は、賊、我が糧道を絕つを以てなり。今、數千人を遣はし叡山に據り、糧を北陸に取り、而して時に出でて京師を擾さしむるに若くはなし。是れ根を深くし、蒂を固くするの策なり。請ふ、書を山徒に貽らん」と。義貞、之に從ふ。山徒、之を背んず。義貞、義助を遣はして之に赴かしむ。男山の火を望み、逡巡して去る。尋いで義貞戰死す。結城宗廣、顯家の餘威未だ盡きざるに及んで、東邊の兵を收めんと請ふ。帝、宗良親王をして先づ發し、遠江に至りて之を待たしむ。遂に顯信を以て兄の官職を襲がしめ、親房、及び宗廣と、義良親王を奉じ、海路より任に赴かしむ。颶に天龍洋に遇ひ、舟四散し、親房は常陸に抵り、宗廣は安濃津に至り、顯信は義良親王と篠島に抵る。宗廣病んで死す。四年三月、顯信、親王を奉じて吉野に歸る。

【口語譯】師直は遂に顯信を男山に取り圍んだ。顯信は善く拒いで、時折りは城から出て賊を撃つたのだが、大し

たことはなかつた。賊は火をかけて、城に攀ぢ登つて來た。城兵は之を撃つて走らせた。その内に兵糧が無くなつたので圍を切り崩して、河内に走つた。天皇は初め朝廷の家來にお命じになつて、兵に將として顯信を救はしめられ、又北國の將士に詔を下して、之を援けしめられた。そこで、義貞は急に之を援けようと思つた。兒島高德は當時從つて義貞の軍中に居た。說いていふには「此の前に負けたのは、賊がわが兵糧を運ぶ道を絶ち切つたためであります。今數千人を派遣し比叡山に立て籠らせ、兵糧を北陸から取り寄せ、而して時々山から出て京都を騷がすのが一番宜いやうです。これは、根柢を深くし本を固くする策であります。何卒書面を比叡山の僧徒に送つて味方にするやうにして戴きたいものです」と。義貞は之に從つた。すると山徒は之を承諾した。そこで、義貞は、弟の義助を遣はして比叡山に向けた。所が男山に火が揚がつたのを望見して、(敗軍したのではないかと)尻込みして立ち去つた。尋いで、義貞は戰死した。結城宗廣は、「顯家が既に死んでもその殘りの威力はまだ殘つて居るから、それが無くならない内に東邊(奧羽)の兵士を取りまとめて置きたいものです」とお願ひ申した。天皇は、宗良親王をして、先づ出發して、遠江に至り、其處で宗廣の來るのを待ち合はしめられた。終に顯信をして兄の官職を襲いで、鎭守府將軍とならしめ、親房及び宗廣と與に、義良親王を奉じて、海上を船で任地に行かしめられた。途中天龍灘で、大風に遇ひ、船はちり〴〵になつて、親房は常陸に至り、宗廣は安濃津に至り、顯信は義良親王と篠島に着いた。かくする内に宗廣は病死した。四年三月、顯信は、義良親王を奉じて吉野に還つて來た。

語釋　前日之敗(前に比叡山で敗けたこと。)　○蔕(果物のへた。)　○天龍洋(遠江)　○安濃津・篠島(伊勢)

先是、皇太子及成良親王、皆爲尊氏所鴆殺。乃立義良爲皇太子。八月、帝獲疾大漸。乃遺詔曰、朕憾不滅國賊平天下。雖埋骨於此、魂魄常望北闕。後人其體朕志、竭力討賊。不者、非吾子孫。非吾臣屬。按劍而崩。帝既崩。群臣氣沮、欲逃散。僧宗信力言止之。已而正行與正朝、率兵二千來衛。衆情大安。於是、相與倶奉太子、拜神器、卽位。是爲後村上天皇。頒先帝遺詔於四方。

【訓讀】是より先き、皇太子及び成良親王、皆尊氏の鴆殺する所と爲り、乃ち義良を立てゝ皇太子と爲す。八月帝、疾を獲て大漸す。乃ち遺詔して曰く、「朕、國賊を滅し、天下を平げざるを憾む。骨を此に埋むと雖も、魂魄は常に北闕を望む。後人、其れ朕が志を體し、力を竭して賊を討てよ。不らざる者は、吾が子孫に非ず、吾が臣屬に非ず」と。劍を按じて崩ず。帝、既に崩ず。群臣、氣沮み、逃れ散ぜんと欲す。僧宗信力言して之を止む。已にして、正行、正朝と、兵二千を率ゐて來り衛る。衆情大に安んず。是に於て、相與に倶に太子を奉じ、神器を拜して、位に卽かしむ。是を後村上天皇と爲す。先帝の遺詔を四方に頒つ。

【大意】これより前、皇太子と成良親王のお二方は、尊氏の爲めに毒殺され給うたので、義良親王を立てゝ皇太子となされた。延元四年八月、後醍醐天皇は御病氣に罹らせ給ひ、御病勢が段々と御危篤に渡らせられた。そこで御遺言なされて仰せらるゝに「朕は國賊を滅し、天下を平定し得なかつた事を殘念に思ふ。朕は崩じて此の吉

野に骨を埋めても、朕が魂魄は常に京都の皇居を望んでゐる。後に殘れる者どもは、朕が志を忘れぬやうにし、能ふ限りの力を出して、國賊を討てよ。若しも然うしない者が有つたら、それは吾が子孫ではなく、それは吾が臣下ではないぞ」と。天皇は斯く仰せられ乍ら劍の柄に御手をかけ給ひ崩御なされた。天皇が已にお崩れなされた。多くの臣下は意氣沮喪して、散り〴〵に逃げようと思うた。僧の宗信が極力言ひ立てゝ之を止めさせた。その内に正行が正朝と兵二千人を率ゐて吉野に來り護衛の任に就いた。それで人々の心が大に落ち着いた。そこで皆と倶に皇太子義良親王を奉じて、三種の神器を拜し、御位にお卽き遊ばさるゝやうにした。これが後村上天皇と申上げる御方である。そこで先帝のお遺しなされた詔を諸方に頒布した。

【語釋】大漸（大に進む。病勢の大切になること。）○北闕（京都は吉野の北にある。闕は宮闕。京の皇居といふ義。）○後人（後嗣の義があるが此處は殘されし者共と見る。）○拜神器（行宮にての御卽位であるので諸種の大禮を行はせらるゝことが出來ぬ故、たゞ神器を御拜せられた。）

興國元年春、土居通郷・得能彈正等、奏請得一將帥。會、新田義助戰敗、與兒島高德等來詣吉野。因詔義助赴伊豫。無幾何、病死。高德等逃歸備前。五月、賊將細川賴春來攻河江。通郷・彈正推金谷經氏爲將、舟師赴救。値賊海上、戰不利。轉攻取鞆城、據之拒賊十餘日。聞賴春已陷河江、將攻世田、勸經氏救之。選死士三百、選凶日而發。與賊七千、戰於千町原、盡亡其卒、與經氏等十七騎、潰圍走備後。自是西南宮軍不

【白文】興國元年春、土居通郷・得能彈正等、一將帥を得んと奏請す。會〻新田義助戰ひ敗れ、兒島高德等と來り吉野に詣る。因つて義助に詔して伊豫に赴かしむ。幾何もなくして病んで死す。高德等逃れて備前に歸る。五月、賊將細川賴春、來つて河江を攻む。通郷、彈正、金谷經氏を推して將と爲し、舟師もて赴き救ふ。賊に海上に値ひ、戰利あらず。轉じて鞆城を攻取して、之に據り、賊を拒ぐこと十餘日。賴春、已に河江を陷れ、將に世田を攻めんとすと聞き、經氏を勸めて之を救はしむ。死士三百を選び、凶日を選んで發す。賊七千と、千町原に戰ひ、盡く其の卒を亡ひ、經氏等十七騎と、圍を潰やして備後に走る。是より西南の官軍振はず。

【口譯】興國元年春、土居通郷・得能彈正等が、旗擧げしたいから一人の將帥を得たいと、上奏御裁可をこうた。丁度其の時に新田義貞は戰爭に負けて兒島高德等と一緒に吉野にやつて來た。そこで、義助に詔して伊豫に赴かしめられた。併し程なく義助は病死した。高德等は逃れて備前に還つた。五月、賊將細川賴春が來つて、河江を攻めた。通郷・彈正は金谷經氏を推戴して大將となし、海軍を引きつれて助けに出かけた。所が賊と海上で出會ひ戰つて負けた。そこで方向を變へて鞆城を攻め取り、其處に立て籠り、賊を拒ぐこと十餘日に亘つた。賴春が旣に河江の城を落して、終に世田をも攻めようとしてゐると聞いたので、通郷・彈正は經氏に勸めて、之を救はしめた。必死の士三百人を選りぬき、わざ〳〵惡い日を擇んで出發した。賊軍七千人と千町ヶ原で戰ひ負けて、殘らず其の士卒を失つたので、通郷・彈正兩人は、經氏等十七騎と共に圍を切り崩して、備後に走つた。これからは西南方面の官軍は、其の勢が振はなくなつた。

語釋 興國（後村上天皇の年號。）○河江（伊豫）○鞆（備後）○世田・千町原（伊豫）

是歲、北畠顯信居白河、親房居小田。賊將高師冬以大兵來攻。親房請援於結城親朝。親朝、宗廣子也。宗廣臨死、遺言討賊。而親朝送款於尊氏。以故不輒援。數月、城將出降。親房走保關城。親房從子顯時保大寶城。賊陣二城間。父子數出力戰。而城且陷。親房間使告顯信、使率親朝子弟來救。親朝擁之不遣。四年春、親房手書切諭。親朝弗聽。遂降賊。親房走歸吉野。自是東北官軍不振。顯信留居陸奧。於是、四方勤王之師、所在耗散。而足利氏勢威擅天下。

訓讀 是の歲、北畠顯信、白河に居り、親房、小田に居る。賊將高師冬、大兵を以て來り攻む。親房、援を結城親朝に請ふ。親朝は、宗廣の子なり。宗廣、死に臨み、賊を討ぜんことを遺言す。而るに親朝、款を尊氏に送る。故を以て、輙く援けず。數月にして、城將出で降る。親房走り、關城を保つ。親房の從子顯時、大寶城を保つ。賊、二城の間に陣す。父子、數々出でゝ力戰す。而して城且に陷らんとす。親房、間使もて顯信に告げ、親朝の子弟を率ゐて來り救はしむ。親朝、之を擁して遣らず。四年春、親房、手書もて切諭す。親朝聽かず。遂に賊に降る。親房走つて、吉野に歸る。是より東北の官軍振はず。顯信留つて陸奧に居る。是に於て、四方勤王の

師、所在に耗散す。而して足利氏の勢威、天下に擅なり。

[illegible] 此の年、北畠顯信は白河に居り、親房は小田に居た。其處へ賊將高師冬が大軍を引きつれて攻めて來た。親房は救ひを結城親朝に請うた。親朝といふのは、宗廣の子である。宗廣が死ぬときに賊を討てよと遺言したのに、親朝は親の遺言に逆つて尊氏に內通した。そんな譯で親朝は容易に助けに來なかつた。數月して小田の城主が城を出て賊に降參した。それで親房は走つて、關城を守つた。親房の甥顯時は、大寶城を守つて居た。賊はこの二つの城の間に陣取つてゐた。親房・顯時の父子は度々城から出て力め戰つた。併し其の甲斐もなく城は將に陷落しさうになつた。親房は忍びの使者を遣はし、顯信に告げて、親朝の子弟を率ゐて救ひに來るやうにせしめようとした。親朝はこの顯信を取り押へて行かせなかつた。四年春、親房は手づから手紙を書いて懇ろに親朝を說き諭した。親朝は聽き入れなかつた。遂に賊に降參して終つた。親房は致方なく走つて、吉野に歸つた。これからは東北方面の官軍も振はなくなつた。顯信は留まつて陸奥に居た。そんな譯で四方の勤王の軍は所々方々に人數も減り、散り散りになつて終つた。そして足利氏の勢威のみが獨り天下に擅に行はれた。

[illegible] 小田・關城・大寶城（常陸）

正行在金剛山、漸保聚義故、時出兵攝津、縱火挑賊。正平二年秋、尊氏令細川顯氏將三千騎來攻、未至金剛山七里、止舍、聞正行且攻箭尾城也、欲俟其離山而絕其後、正行諜知之、以七百人行火聚落、爲向箭尾而還、伏于譽田林。敵望火起、輒趨山

下。亂レ隊疾馳、過レ林遇レ伏起、大駭敗走、退守二天王寺一。

【訓讀】正行、金剛山に在りて漸く義故を保聚し、時に兵を攝津に出し、火を縦つて賊に挑む。正平二年秋、尊氏、細川顯氏をして、三千騎に將として來り攻めしむ。未だ金剛山に至らざること七里にして、止り舍す。正行且に箭尾城を攻めんとすと聞くや、其の山を離るゝを俟つて、其の後を絶たんと欲す。正行、諜して之を知り、七百人を以て、行くゆく聚落を火き、箭尾に向ふ爲して、還り、譽田林に伏す。敵、火の起るを望み、輒ち山下に趨き、隊を亂して疾く馳せ、林を過ぐ。伏起るに遇ひ、大に駭き敗走し、退いて天王寺を守る。

【通釋】正行は金剛山に在つて次第に恩義のある者共を一所へ聚め、時折り兵を攝津に出して、火を掛けて賊に戰をケシかけた。正平二年の秋、尊氏は細川顯氏をして、兵三千騎の大將として攻め來らしめた。金剛山へもう七里といふ所に兵を止めて陣取つた。賊は、正行が箭尾城を攻めようとしてゐるといふことを聞いて、正行が金剛山を離れるのを俟つて、その歸路を絶ち切らうと思つた。正行は間者を入れて此の計畫を知り、七百人を引きつれ、行く〳〵途中の村落に火をつけ、如何にも箭尾に向ふやうな振して引き還し、譽田林に隱れてゐた。敵は火災の起るのを望見して、必定正行が金剛山を離れたものと思ひ込み、直ぐ様山下に驅け行き、われも〳〵と隊列を亂して急いで馳せ、譽田林を通り過ぎようとした。その時正行の伏兵が急に起つて、攻擊したものだから、すつかり面喰ひ敗れ走り、天王寺まで退却して其處を守つた。

【語釋】箭尾（河内）○絶二其後一（金剛山へ還る路を絶ち切ること。）○譽田林（河内）

山名時氏以六千騎來援、軍于住吉。正行曰、「先破時氏、則顯氏不戰而走」。分兵二千爲五隊、進向住吉。時氏分兵當之。正行視北軍塵起曰、「敵陣四處、而衆倍於我。我不可分兵也」。乃復合五隊爲一、疾行擊時氏麾下。時氏被創、走歸顯氏。顯氏軍亂走、過渡部、溺者無數。京畿震駭。正行援溺卒五百人、與衣甲、禮而遣之。多願留仕者。

【訓讀】山名時氏、六千騎を以て來り援ひ、住吉に軍す。正行曰く、「先づ時氏を破らば、則ち顯氏は戰はずして走らん」と。兵二千を分つて五隊と爲し、進んで住吉に向ふ。時氏、兵を分つて之に當る。正行、北軍に塵起るを觀て曰く、「敵、四處に陣して、衆、我に倍す。我れ兵を分つ可からざるなり」と。乃ち復五隊を合して一と爲し、疾く行いて時氏の麾下を擊つ。時氏、創を被り、走つて顯氏に歸す。顯氏の軍亂れ走り、渡部を過ぎて、溺るゝ者無數なり。京畿震駭す。正行、溺卒五百人を援ひ、衣甲を與へ、禮して之を遣る。留り仕へんと願ふ者多し。

【通釋】山名時氏は六千騎を引きつれて來り賊を援け、住吉に陣取つてゐた。正行が曰ふのに、「先づ時氏を打ち破つたならば、顯氏の方は怖氣づいてゐる時故、戰はずして逃げるだらう」と。兵二千を分けて五隊となし、進んで住吉に向つた。時氏の方でも兵を分けて正行の五隊に當ることゝなつた。正行は北軍に塵の起るのを凝つと視てゐたが、曰ふのに「敵は四箇所に陣して、其の軍勢は味方の倍程もゐる。これは兵を分けてはならぬ所であつた」と。そこでまた五隊を合せて一團となし、急ぎ進んで時氏の旗下を擊つた。時氏は負傷して走り、顯氏の陣へ逃げ込んだ。案の定、顯氏の軍はバタ〳〵に亂れ走り、渡部の川を通り過ぐるとき、溺死する者、數知れ

ぬ程であつた。京畿地方では、この敗報を得て、非常に駭き恐れた。正行は溺れてゐる兵卒を五百人餘りも援けやり、衣服や鎧を與へて丁寧に扱ひ歸へしてやつた。しかし正行の許に留まつて仕へたいと願ふ者が多かつた。

語釋 我不可分兵也（兵を分つのは力を分つことになり、敵の大軍に當るには微力となる。全部一團となれば力が強くなる。）

正行遂進逼京師。尊氏大懼、乃發二十餘州兵、以高師直統諸將帥、以擊正行。正行與弟正時、率諸宗族、詣行宮、因中納言藤原隆資、上言曰、「先臣正成、嘗以微力、挫強賊、以安先帝宸憂。及天下再亂、逆賊四襲、遂致命於湊川。臣時年十一。命歸河內、囑以收合餘燼、報復國讐。臣年已壯矣。而稟性羸弱、常念不及今力戰、以有待之身、罹無虞之疾、上爲不忠之臣、下爲不孝之子。而今賊渠帥大舉來犯。是眞臣效命之秋也。非臣獲彼首、則授臣首於彼。臣生死決於今日。切希得一拜天顏而行。」

訓讀 正行、遂に進んで京師に逼る。尊氏、大に懼れ、乃ち二十餘州の兵を發し、高師直を以て諸將帥を統べしめ、以て正行を擊たしむ。正行、弟正時と、諸宗族を率ゐて行宮に詣り、中納言藤原隆資に因り、上言して曰く、「先臣正成、嘗て微力を以て強賊を挫き、以て先帝の宸憂を安んず。天下再び亂れ、逆賊四襲するに及んで遂に命を湊川に致す。臣、時に年十一。命じて河內に歸らしめ、囑するに餘燼を收合し、國讐を報復するを以て

す。臣、年已に壯なり。而も稟性闇弱、常に念ふ、今に及んで力戰せず、待つあるの身を以て、虞るなきの疾に罹らば、上は不忠の臣と爲り、下は不孝の子と爲らんと。而して今、賊の渠帥、大擧して來り犯す。是れ眞に臣が命を效すの秋なり。臣、彼の首を獲るに非ずんば、則ち臣が首を彼に授けん。臣の生死、今日に決す。切に希はくは、一たび天顏を拜して行くことを得ん」と。

〔通釋〕正行は猶ほ進んで京都に迫つた。尊氏は非常に懼れ、そこで二十餘國の兵を繰り出して、高師直を總大將として諸將師を統御させ、正行を擊たしめた。正行は弟の正時と與に、諸々の一族の者共を率ゐて、假りの御宮に詣り、中納言の藤原隆資を間に入れて、天皇に申上げて曰ふのに、「先代亡父正成は、以前微々たる力を以ちまして、強賊を討ち挫き、先帝陛下の御配慮を安んじ奉りました。所が天下再び亂れて、逆賊が四方から攻め寄せるに及びまして、とう〳〵湊川にて討死仕りました。私は其の時年十一歲で御座いました。亡父が私に命じて、河内へ歸らせて、その時私に申し付けまするに、其の方は後日、殘黨を狩り集めて、國家の讐を復さなければならぬぞと。私は今は早や壯年になりました。けれども生れつき誠に弱蟲で御座いまして、いつも念ひますることは、今の内に陛下のために力め戰はぬと、若しかすると、斯樣な目當てのある大切な身をもちまして、思ひも寄らぬ病氣抔に犯されませうものなら、上は不忠の臣となり、下は不孝の子となつて終ふであらうと。所が只今、賊の總大將高師直が大兵を引きつれて攻めて參りました。是れこそ眞んとに私が生命を棄てますに好い時で御座います。私が彼れ師直の首を獲るのでありませんでしたら、私の首を彼に與へることで御座いませう。何れにしても、私の生きるか死ぬるかといふことは、今日に決まります譯で御座います。何卒御願で御座いますが、一度び陛下の玉顏を拜して行きたいものに御座います」と。

【語釋】二十餘州（四國、中國、東海、東山諸國。）○先帝（後醍醐天皇。）○再亂（足利氏の亂をさす。）○有待之身（國賊を滅さんと期してゐる身。）○無慮之疾（羸弱なれば思ひもよらぬ病にかゝる恐れがある。）

隆資入奏。帝揭簾臨視將士、前正行、勞之曰、「曩日兩捷、大殺賊勢、甚慰朕心。朕深嘉汝世忠。今賊悉銳而來。眞安危之決矣。雖然兵之進退、貴於從宜。朕以汝爲股肱。汝其自愛」正行俯伏、垂泣而出、辭訣後醍醐帝廟、題族黨百四十三人姓名於廟壁、然後上途。帝使隆資援之。

【訓讀】隆資入りて奏す。帝、簾を揭げて將士を臨視し、正行を進ましめて、之を勞ひて曰く、「曩日の兩捷、大に賊勢を殺ぎ、甚だ朕の心を慰む。朕、深く汝が世忠を嘉す。今、賊、銳を悉して來る。眞に安危の決なり。然りと雖も、兵の進退は、宜しきに從ふを貴ぶ。朕、汝を以て股肱と爲す。汝、其れ自愛せよ」と。正行俯伏し、泣を垂れて出で、後醍醐帝の廟に辭訣し、族黨百四十三人の姓名を廟壁に題し、然る後、途に上る。帝、隆資をして之を援けしむ。

【通釋】隆資は入りて陛下に此のことを言上した。後村上天皇は御簾を揭げさせ、庭前に並び伏してゐる將士を御見下ろしなされ・正行を御前近く迄進ましめ給ひ、之を勞ひて仰せらるゝには「先日の兩度の勝利で、大層賊の勢を殺ぎ、甚だ朕の心を慰さめて吳れたぞよ。朕は深く〲汝が代々の忠義を嘉賞とらせるぞ。今賊はその

精鋭を盡くして攻め來つた。まこと、安危の決まる所ぢや。けれども戰の驅け引きは、其の時々に宜しきやうにするのが大切ぢや。朕は汝を手足のやうに思うてゐるぞ。ゆめ〳〵輕率な振舞あつてはならぬ、よく自覺せよ」と。正行は此の優詔を拜し、つゝ伏したまゝ、顏も得上げず、有難涙を流して、其の場を退出し、後醍醐天皇の御廟にお暇乞ひをなし、一族郎黨百四十三人の姓名を如意輪堂の壁に書き列ね、斯くて後征伐の途に上つた。天皇は隆資をして正行を援けしめられた。

【語釋】兩捷（譽田林、天王寺兩度の戰。）○廟壁（太平記には如意輪堂の壁板に各名字を過去帳に書き連ぬ、其の奥に、返らじとかねて思へばあづさ弓なき數にいる名をぞとゞむる云々とある。故にこの廟壁は如意輪堂の壁のこと。）

明年、正月、北軍至四條畷、分爲五隊、四隊在前、左右相向、而師直中軍遙居其後、兵凡八萬騎。正行使隆資綴賊前軍、而自將三千騎、直指其中軍。賊前隊馳而遮之。正行以先鋒、擊破而過。賊隊又至、與我後軍戰。我後軍終敗走。正行不顧、以三百騎直前。賊將細川清氏・仁木頼章等、更進遮鬪。正行盡破之、乃聚其騎。馬皆重傷。乃舍馬、踞隴而餉。賊衆環視、不敢迫、開其走路、皆合於中軍。正行餉畢、起謂衆曰、必與師直決死、進衝其中堅。我兵殊死戰、無不一以當百。賊軍披靡。

【通釋】明年正月、北軍四條畷に至り、分れて五隊と爲り、四隊前に在り、左右相向ふ。而して師直の中軍、遙

に其の後に居る。兵、凡そ八萬騎。正行、隆資をして賊の前軍を綴せしめ、而して自ら三千騎に將として、直に其の中軍を指す。賊の前隊、馳せて之を遮る。正行、先鋒を以て撃破して過ぐ。賊隊又至り、我が後軍と戰ふ。我が後軍、終に敗走す。正行顧みず、三百騎を以て直に前む。賊將細川清氏・仁木頼章等、更に進んで遮り鬪ふ。正行盡く之を破り、乃ち其の騎を聚む。馬皆重傷す。乃ち馬を舍て、隴に踞して餉す。賊衆環視し、敢て迫らず、其の走路を開いて、皆中軍に合す。正行餉し畢り、起つて衆に謂つて曰く、「必ず師直と死を決せん」と。進んで其の中堅を衝く。我が兵殊死して戰ひ、一以て百に當らざるなし。賊軍披靡す。

〔通釋〕翌正平三年正月、北軍足利勢は四條畷に至り、分れて五隊となり、四隊は前に居り、左右に向ひ合つてゐた。そして師直の本隊は、ヅッとその後方に控へてゐた。その兵は凡そ八萬騎からあつた。正行は隆資をして賊の前軍四隊を牽制させ、そして自分自身は三千騎の大將となつて、一圖に賊の本隊を目指した。賊の前隊は左樣はさせじと馳せ來り、之を邪魔立てした。正行は、先鋒をつれて、この邪魔した部隊を撃ち破つて、其處を通り越した。其の内に賊の一隊が又やつて來て、我が後詰めの兵と戰つた。我が後詰めの兵が終に敗れて逃げ出した。正行はそんなことには關はず、三百騎を引きつれて、眞直ぐに本隊目がけて前進した。賊の大將細川清氏・仁木頼章等が入り交り立ち替り進んで來て邪魔立て戰つた。併し正行は盡く之を打ち破り、一と先づ部下の騎を勢揃ひした。所が馬はどれもこれも皆重傷した。そこで馬を捨てゝ、小高き田中の丘に、腰打ちかけて辨當を使つた。賊の奴原はこれを取り卷いて見物してゐて、決して迫つて來なかつたが、その内に正行のために逃げ路を開き拵へて、ゾロ〳〵皆本隊の方へ一緒になつて終つた。正行は辨當を食つて終つてから、起つて部下の軍勢に向つて曰ふに「必つと師直と勝負を決しよう」と。又進んで賊の本隊を衝いた。我が兵は死物狂ひで戰ひ、一

人が百人に當らない者はない位であつた。賊の軍は我が軍の見幕に怖えてパッと開き靡いた。

【語釋】四條畷（河内）〇四隊（伊駒山の南に一隊、飯盛山、外山、四條畷に夫々一隊。）〇賊前隊（飯盛山の兵。）〇賊隊又至（四條畷の兵。）

正行進逼師直。師直臣僞稱師直死。正行大喜、拋首于空、而手承者二。軍士有告其實者。正行投頭于地、蹴且罵曰、「唉、汝亦無雙國賊矣。」已而曰、「其勇可嘉也。」自斷袖裹首、置隴上、復進索師直。望見其幟、欲追之。正朝曰、「彼騎我步、不可及也。不若佯走誘之。」乃與殘兵五十餘人、負楯以北。師直不肯追。令其裨將以數百騎尾擊之。正行大呼返戰、追走復逼師直。相去數步、而我兵自晨至晡、三十餘合、力索、莫能起。正行注目於師直、他衆前進。敵連射之。正行身被箭如蝟。乃呼曰、「已矣。勿爲賊所獲。」與正時相刺、北向而斃。年二十二。餘兵皆自刄駢斃。

【通釋】正行、進んで師直に逼る。師直の臣、僞り師直と稱して死す。正行大に喜び、首を空に拋ち、手にて承くること二たびす。軍士、其の實を告ぐる者あり。正行、頭を地に投げ、蹴且つ罵りて曰く、「唉、汝も亦無雙の國賊なり」と。已にして曰く、「其の勇は嘉すべきなり」と。自ら袖を斷つて首を裹み、隴上に置いて、復進んで師直を索む。其の幟を望見して、之を追はんと欲す。正朝曰く、「彼は騎、我は步、及ぶ可からざるなり。佯り走

り之を誘ふに若かず」と。乃ち殘兵五十餘人と、楯を負ひ以て北ぐ。師直肯て追はず。其の裨將をして、數百騎を以て之を尾擊せしむ。正行大呼して返り戰ひ、走るを追うて復師直に逼る。相去る數歩なれども、我が兵、晨より晡に至るまで三十餘合、力索きて能く起つ莫し。正行、目を師直に注ぎ、衆を勉めて前進す。敵、之を連射す。正行、身、箭を被ること蝟の如し。乃ち呼んで曰く、「已まん。賊の獲る所と爲る勿れ」と。正時と相刺し、北向して斃る。年二十二なり。餘兵皆自刄して、駢び斃る。

通釋 正行は進んで師直に逼つて行つた。師直の臣に、吾れこそは高師直なりと虛言を吐いて死んだものがあつた。正行は大に喜び、其の首を空中へ抛りなげて、手で二度計り承けとつた。所が正行の部下の軍士が、それは眞物ではありませぬと、實を告げた者があつた。正行は怒つて其の首を地に投げつけ、足で蹴り且つ之を罵つて曰ふのに、「あゝ、汝も師直に劣らず、世に並びなき國賊であるわい」と。その內に正行は氣を取り直ほして曰ふのに、「が併し、此の男の勇氣は敵ながら褒め取らす可き値打ちがある」と。正行は自分で自の袖を斷ち切つて、その首を包み、之を小高い丘の上に置いて、再び進んで師直を捜し求めた。師直の幟を遙かに望み見たので、正行は之を追つかけようと思つた。正朝が曰ふのに、「敵は馬に乘つてゐるし、こちらは徒歩である。迚も追つつくことは出來ませぬ。それよりか、逃げる眞似して、敵を此方におびき寄せたら宜いではありませぬか。」と。そこで殘りの兵五十餘人の者と、楯を負うて北げ出した。師直は自分で之を追はうともしない。自分の副將を遣はし、數百騎を引きつれて、正行の後を追ひ擊たせた。正行は大聲に呼んで、サア來いと引返へし戰ひ、逃ぐる賊を追つかけてまた師直に逼つた。師直と相去る數歩といふ所まで接近したが、而し何しろ我が兵は朝早くから日暮れまで、のべつに三十餘度も戰ひ、もう力は盡き果て、起つことの出來る者とては無い有樣であつた。正行は

師直に目を注ぎ、部下を督勵して前進した。敵は矢を連發した。正行は其の身に矢を受くること、まるで蝟のやうであつた。そこで正行は呼ばはつて曰ふには、「もう此れまでゞある。賊に擒へられてはならぬぞ」と。斯う言ひ終つて、正時と刺しちがひ、賊の方に向つて斃れた。この時年齡二十二歳であつた。其の他の兵士も皆自殺して並び斃れた。

語釋 師直臣（上山高元といふ者。）○手承（高い所から落ちて來るものをうけるから承の字が使つてある。）○唉（恨み怒る聲。）○裨將（高師冬。）○北向而斃（死んでも首は賊の方に向ひ、賊を滅さんと志を示したのである、賊は北から攻めて來るから北向といふ。）○二十二（延元元年が十一歳であつたとすると、二十三歳であるべきである、正行の年齡に就いては異說が多く、或は二十二、二十三、二十五、二十六等の諸說がある、）

和田賢秀、正朝弟也。獨混敵卒、伺擊師直。楠氏卒湯淺者、降在賊軍、識見賢秀、從後斬之。賢秀瞋眼視湯淺。湯淺懼、後獲疾死。正朝欲還奏狀。有一賊、呼曰「忍獨亡乎」。正朝笑而返之。賊乃走。如此者數。賊數騎至、正朝遂死。於是、百四十三人、悉死之。賊軍進犯行宮、帝逃入穴生。賊縱火索之。正行弟左衛門尉正儀、出兵於石川、與高師泰相持。師直則不敢深入、引兵而去。四年、畠山國淸來代師泰。正儀益堅守。

通釋 和田賢秀は、正朝の弟なり。獨り敵卒に混じて、師直を伺擊す。楠氏の卒湯淺なる者、降つて賊軍に在り。賢秀を識見し、後より之を斬る。賢秀、眼を瞋らし湯淺を視る。湯淺懼れ、後、疾を獲て死す。正朝還り

狀を奏せんと欲す。一賊あり、呼んで曰く「獨り亡ぐるに忍びんや」と。正朝笑つて之に返す。賊乃ち走る。此くの如くすること數々なり。賊の數騎至り、正朝遂に死す。是に於て、百四十三人、悉く之に死せり。賊軍、進んで行宮を犯す。帝、逃れて穴生に入る。賊火を縱つて之を索む。正行の弟左衛門尉正儀、兵を石川に出し、高師泰と相持す。師直則ち敢て深く入らず、兵を引いて去る。四年、畠山國清、來り師泰に代る。正儀益々堅く守る。

【通釋】和田賢秀は正朝の弟である。獨り敵の兵卒の中に入り混り、師直の隙を見て擊たうと、覗らつてゐた。楠氏の方の兵卒に湯淺なる者が居つたが、それが降參して賊の軍中に居つた。その者が賢秀を見識つてゐて、後からいきなり賢秀に切りつけた。賢秀は眼をむいて瞋り、湯淺を睨みつけた。湯淺は恐くて、それが源でたうとう後に病氣に罹つて死んで終つた。正朝は行宮へ引き還へし、戰狀を逐一言上しようと思つて歸らうとした。一賊が後方から聲をかけて曰ふのに「皆討死してゐるに、獨りでようも逃げられたもんぢや」と。正朝は笑つて之に引き返した。すると賊はソラ來たと逃げ走る。正朝はそこで行宮へ歸らうとする。又追かけて來て同じやうなことを曰ふ。そんなことを數度繰り返した。その內に賊の數騎がやつて來て、正朝は遂に討死した。これで結局百四十三人は皆死んで終つたことになる。賊軍は進んで行宮を攻めた。後村上天皇は穴生にお逃げ込みになつた。賊は火を掛けて天皇を搜し索めた。正行の弟の左衛門尉正儀は石川に兵を差し向け、其處で高師泰と睨み合つてゐた。それで師直は深く侵入しようともせず、兵を引きつれて立ち去つた。四年、畠山國清がやつて來て、師泰と更代して正儀に對した。正儀は益々堅固に守つた。

【補釋】湯淺（湯淺太郎左衛門と稱した。）○一賊（阿保忠實。）○穴生（或は穴太に作る。大和）

五年、足利直義與尊氏有隙。乃來降。朝議納爲大將。國清等附之。六年、詔正儀助直義、擊尊氏京師、走之。已而直義叛去、遂走關東。尊氏欲往擊之、而恐楠氏窺後也、則使子義詮佯降、請帝歸闕。帝知其情、亦佯許之。尊氏乃東。

【訓讀】五年、足利直義、尊氏と隙あり。乃ち來り降る。朝議、納れて大將と爲す。國清等、之に附く。六年、正儀に詔して、直義を助けしめ、尊氏を京師に擊つて、之を走らす。已にして直義叛き去り、遂に關東に走る。尊氏、往いて之を擊たんと欲す。而れども楠氏、後を窺ふを恐れ、則ち子義詮をして佯り降り、帝に闕に還らんことを請はしむ。帝、其の情を知り、亦佯つて之を許す。尊氏乃ち東す。

【通釋】五年、足利直義は、尊氏と仲違ひになつた。そこで直義は降參して來た。朝廷では相談の結果彼を納れて大將とした。國清等も、之に屬いた。六年、正儀に詔して、直義を助けて、尊氏を京都に擊つて、之を走らせた。その內に、直義は叛いて去り、遂に關東に走つた。尊氏は關東へ行つて、之を擊たうと思つた。併し楠氏が後ろをねらつてゐるのが恐いので、倅の義詮をやつて降參の眞似をさせ、天皇に京都へお歸りになるようお願ひ申させた。天皇はその內情を御存知で、矢張り佯つて、之をお許しなされた。そこで尊氏は、東に向つて出かけた。

七年正月、正儀與族和田正忠等、將兵七千、奉乘輿軍于男山。兒島高德時削髮來

在吉野。奉密詔、往促東北諸將。拜宗良親王爲征東將軍、使竝來援。北畠顯能、顯信弟也。爲伊勢守。擧兵數千、先來援、自鳥羽入。正儀・正忠將五千人、夜涉桂川、至大宮。黎明、賊將細川顯氏來迎。我兵圍擊、斬其從子八郎。細川賴春繼至、巷戰。正儀接楯爲梯、升屋下射。賊兵卻。縱騎乘之。賴春馬驚而墮。正忠兵槍刺殺之。義詮遂走近江。帝使人取北朝三帝、置軍中。當是時、將軍宗良率新田氏族、擊尊氏於武藏、不利。

【訓讀】七年正月、正儀、族和田正忠等と、兵七千に將として、乘輿を奉じ、男山に軍す。兒島高德、時に削髮し、來りて吉野に在り。密詔を奉じ、往いて東北の諸將を促す。宗良親王を拜して征東將軍と爲し、竝に來り援けしむ。北畠顯能は、顯信の弟なり。伊勢守たり。兵數千を擧げて、先づ來り援け鳥羽より入る。正儀、正忠五千人に將として、夜、桂川を涉り、大宮に至る。黎明、賊將細川顯氏來り迎ふ。我が兵圍み擊ち、其の從子八郎を斬る。細川賴春、繼ぎ至り、巷戰す。正儀、楯を接して梯と爲し、屋に升つて下射す。賊兵卻く。騎を縱つて之に乘ず。賴春、馬驚いて墮つ。正忠の兵、槍もて之を刺殺す。義詮、遂に近江に走る。帝、人をして北朝の三帝を取へて、軍中に置かしむ。是の時に當り、將軍宗良、新田氏の族を率ゐ、尊氏を武藏に擊つて、利あらず。

【通釋】七年正月、正儀は、一族の和田正忠等と與に兵七千に將となり、天皇を奉じて、男山に陣取つた。兒島高德は當時、髮を剃つて坊主になつてゐたが、丁度吉野に來て居た。高德は內密の詔を承けて東北へ出かけ、

其處の諸將に兵を出すやうに催促した。又宗良親王を征東將軍に任命し、諸將と一緒に援けに來らしめられた。北畠顯能は、顯信の弟である。伊勢守となつてゐた。兵數千を引きつれ、眞先きに援けに來り、鳥羽から攻め入つた。正儀・正忠は五千人に將となつて夜、桂川を渉つて、大宮に至つた。夜あけ頃、賊將細川顯氏がやつて來て迎へ戰つた。我が兵は、之を取り圍んで擊ち、其の甥の八郎を討ち取つた。細川賴春が引き續いてやつて來て、市街戰をやつた。正儀は、楯をつなぎ合はせて、梯子を搆へ、人家の屋根に上つて、射下ろした。賊兵はそれに叶はず退却した。そこで、騎兵を縱ちやつて攻め立てた。賴春は馬が驚いた拍子に馬から落ちた。正忠の兵士が槍でつき刺して之を殺した。義詮は遂に近江に走つた。天皇は人をやつて北朝の三帝を捕へ來らせられ、之を軍中に置かれた。この時、將軍宗良親王は新田氏の一族を率ゐて、尊氏を武藏に擊たれたが、うまく行かなかつた。

【語釋】兒島高德（入道して志純といつた。）〇三帝（光嚴・光明・後光明。）

義詮得兵三萬、返陣東山。顯能三退其陣。賊軍進攻男山。帝召正儀・正忠等、拒戰。正忠年十六、入奏曰「建武以來、臣族類、大半爲此賊所殺。今日之戰、公討國賊、私復家仇。不斬其一將、不復還謁。」與正儀合兵三千、據荒坂細川清氏・土岐康貞、以六千騎仰攻。康貞有驍名、先衆而進。正忠揮薙刀斬之。乃還謁。遂與正儀拒吏科。不利。左兵

衛督藤原康長、夜襲敗賊營。而賊圍男山益密。正儀・正忠受詔還河內、聚兵夾攻。會正忠疾作暴卒。正儀未發。賊急犯行在。帝擐甲上馬、潰圍南走。賊兵追之甚急。藤原隆資以下、三百餘人死之。箭及御鎧。藤原康長力戰、得達吉野。委神鏡於路。名和長生收之而返。

訓讀 義詮、兵三萬を得、返つて東山に陣す。顯能、三たび其の陣を退く。賊軍、進んで男山を攻む。帝、正儀・正忠等を召し拒ぎ戰はしむ。正忠、年十六、入り奏して曰く、「建武以來、臣の族類、大半此の賊の殺す所と爲る。今日の戰は、公には國賊を討じ、私には家仇を復す。其の一將を斬らずんば、復還り謁せず」と。正儀と兵三千を合せ、荒坂に據る。細川淸氏・土岐康貞、六千騎を以て仰ぎ攻む。康貞、驍名あり、衆に先だちて進む。正忠、薙刀を揮つて之を斬る。乃ち還り謁し、遂に正儀と、更科に拒いで、利あらず。左兵衛督藤原康長、夜襲うて賊營を敗る。而して賊、男山を圍むこと益密なり。正儀、正忠、詔を受けて河內に還り、兵を聚めて夾み攻む。會正忠、疾作り暴に卒す。正儀未だ發せず。賊、急に行在を犯す。帝、甲を擐し馬に上り、圍を潰やして南走す。賊兵、之を追ふこと甚だ急なり。藤原隆資以下三百餘人、之に死す。箭、御鎧に及ぶ。藤原康長、力戰して、吉野に達するを得たり。神鏡を路に委す。名和長生、之を收めて返る。

通釋 義詮は、兵三萬を手に入れ、返つて東山に陣取つた。顯能は、三度まで、その陣を後方へ退けた。賊軍は進んで、男山を攻めた。天皇は正儀・正忠等をお召しになつて、拒ぎ戰はしめられた。正忠は當時十六歲であ

つたが入つて、上奏して曰ふには「建武この方、臣の一族郎黨は大概この賊の爲めに殺されました。今日の戰こそは公には國の賊を討つことになりますが、私には一家の仇を報ゆるので御座います。敵の大將一人を討ち取らない内は、二度と還つてお目通りは仕りませぬ」と。正儀と兵三千を合はせて、荒坂に立て籠つた。細川清氏、土岐康貞が六千騎を引きつれて仰ぎ攻めた。康貞は勇名の高い男で、衆に先だつて進んだ。正忠は、薙刀を揮つて康貞を討ち取つた。そこで、還つて、拜謁し、遂に正儀と一緒に更科で拒いだが、うまく行かなかつた。左兵衛督藤原康長が、夜、賊の不意を襲うてその兵營を攻め破つた。而して賊軍の男山を圍むことは一層嚴重になつた。正儀、正忠は、詔を受けて、河内に還り、兵を聚めて、賊を挾み攻めた。丁度折惡しく、正忠は病氣が起り、急に死んで終つた。正儀は、まだ出發しないでゐた。その時、賊軍は急に男山の行在所を犯して來た。後村上天皇は、鎧をお着けになり、馬に乘り、御自身圍を切り崩して、南方へ走られた。賊兵は之を嚴しく追つかけた。藤原隆資以下三百餘人が天皇をお逃がせ申す爲めに討死した。その時敵の矢が天皇の御鎧に中つた。藤原康長は力め戰ひ、やつとのことで吉野におつれ申すことが出來た。そのどさくさまぎれに、三種神器の内神鏡を路に落した。幸ひに、名和長生が、之を拾ひ取つて返つて來た。

【語釋】荒坂(河内)　更科(男山の西方。)

將軍宗良及新田・桃井氏自東北、土居・得能氏自西南、並入援。聞男山陷、皆返。是役也、賊將山名時氏有功而無賞。怒而來降。足利直冬亦降、請攻京師。詔令諸將助攻。

十一月、正儀等撃賊將佐佐木秀綱于渡部敗之。八年、六月、諸軍攻京師。正儀以弓手五百挑戰。時氏繼之、遂擊走義詮。時氏等以兵寡引還。十年、直冬・時氏復發兵擊尊氏、走之。正儀・時氏、與義詮戰于播磨、糧盡引還。

【訓譯】將軍宗良及び新田・桃井氏は東北より、土居・得能氏は西南より、並に入りて援く。男山陷ると聞き、皆返る。是の役に、賊將山名時氏、功有つて賞なし。怒つて來り降る。足利直冬も亦降り、京師を攻めんと請ふ。詔して諸將をして助け攻めしむ。十一月、正儀等、賊將佐佐木秀綱を渡部に擊つて、之を敗る。八年六月、諸軍、京師を攻む。正儀・弓手五百を以て戰を挑む。時氏、之に繼ぎ、遂に擊つて、義詮を走らす。時氏等兵寡きを以て引き還る。十年、直冬・時氏、復兵を發し尊氏を擊つて、之を走らす。正儀・時氏、義詮と播摩に戰ひ、糧盡きて引き還る。

【通譯】將軍宗良親王及び新田・桃井氏などは東北から、土居・得能氏は西南から、皆揃つて援けに來た。併し、男山が陷落したと聞いて皆返つて終つた。この戰爭で賊の隊將山名時氏は手柄を立てたが、褒美を貰はなかつた。それで怒つて降參して來た。足利直冬も亦降參し、京都を攻めたいとお願ひした。詔して、諸將をやり之を助けて京都を攻めしめられた。十一月、正儀等は、賊將佐佐木秀綱を渡部に擊つて敗つた。八年六月、諸軍、京都を攻めた。正儀は弓手五百人をつれて戰をしかけた。時氏は、その後からつゞいて遂に擊つて、義詮を走らせた。時氏等は、兵が少かつたので引きかへした。十年冬、直冬・時氏再び兵を繰り出し、尊氏を擊つて、之を走

らせた。正儀、時氏は、義詮と播摩で戰つたが、兵糧が無くなつて引き返した。

是歳、將軍宗良與仁科・足助諸族起兵。少應者。北畠顯信爲結城氏所攻、走歸吉野、遂西走、依菊池武光。武光亦武重弟也。及武重死、嗣統其衆、屢討賊黨大友・少貳氏。十三年、武光討一色直氏于筑前、大克之。大友氏時・少貳頼尙等、皆降武光。時尊氏既死。義詮遣兵助氏時・頼尙、擊武光。武光方討畠山國久于日向。氏時據高崎、絶其歸途。武光不顧、進攻國久、走之、乃還。氏時不敢要擊。

【讀方】是の歳、將軍宗良、仁科、足助の諸族と兵を起す。應ずる者少し。北畠顯信、結城氏の攻むる所となり、走つて吉野に歸り、遂に西走し、菊池武光に依る。武光も、亦武重の弟なり。武重死するに及んで、嗣いで其の衆を統べ、屢、賊黨大友・少貳氏を討つ。十三年、武光、一色直氏を筑前に討ち、大に之に克つ。大友氏時、少貳頼尙等、皆武光に降る。時に尊氏既に死す。義詮、兵を遣はし、氏時、頼尙を助け、武光を擊たしむ。武光方に畠山國久を日向に討つ。氏時、高崎に據り、其の歸途を絶つ。武光顧みず、進んで國久を攻めて、之を走らせ、乃ち還る。氏時、敢て要擊せず。

【大意】この年、將軍宗良親王は（信濃に居られた）仁科・足助の諸族と與に兵を擧げられた。併し屬く者が少かつ

た。北畠顯信は、結城氏に攻め立てられ、走つて吉野に歸り、遂に西に走つて、菊池武光にたよつた。武光も亦武重の弟である。武重が死んだので、その後を嗣いで、軍勢を統率し、度々賊黨大友・少貳氏を討つた。十三年、武光は、一色直氏を筑前に討つて、大に克つた。大友氏時・少貳賴尙などは、皆武光に降つた。當時尊氏は既に死んでゐた。義詮は、兵を派遣して、氏時・賴尙を助け、武光を擊たせた。武光は、丁度畠山國久を日向に討つて居た。氏時は、豐後の高崎に立て籠り、武光の歸途を絕ち切つた。武光は、之に頓着せず、進んで、國久を攻め之を走らせ、それから還つて來た。氏時は、之を待ち受けて擊たうとはしなかつた。

〔語釋〕高崎(豐後)

十四年、賴尙以兵六萬來攻。武光發八千人、奉將軍懷良、夾筑後河而陣。武光以銳兵先涉。賴尙卻保大原。武光夜遣子武政等、潛兵、因河水亂軍聲、以襲之、獲賴尙二子。因大戰。懷良被創。北畠顯信等死之。武光身先士卒、馬傷冑裂。斬一敵將、奪其馬與冑、復進、竟大破之。西南官軍復振。

〔訓譯〕十四年、賴尙、兵六萬を以て來り攻む。武光、八千人を發し、將軍懷良を奉じ、筑後河を夾んで陣す。武光、銳兵を以て先づ涉る。賴尙卻き、大原を保つ。武光、夜、子の武政等を遣はし、兵を潛め、河水に因りて軍聲を亂し、以て之を襲はしめ、賴尙の二子を獲たり。因つて大に戰ふ。懷良、創を被り、北畠顯信等、之に死

す。武光、身ら士卒に先だち、馬傷つき、冑裂く。一敵將を斬り、其の馬と冑とを奪ひ、復進み、竟に大に之を破る　西南の官軍復振ふ。

〔通釋〕 十四年、賴尙は、兵六萬をつれて攻めて來た。武光は八千人を繰り出し、將軍懷良親王を奉戴し、直後河を夾んで陣取つた。武光は強い兵をつれて、眞先きに河を渡つた。賴尙は退却して、大原を守つた。武光は、夜、倅の武政等を派遣し、兵を匿し、河の水音で人馬や物の具の雜音をまぎらはし、敵の不意を襲はしめ、結局賴尙の二子を捕へた。そこで、大に戰つた。懷良親王は、負傷し給ひ、北畠顯信等は討死した。武光は自ら士卒に先だち、馬は傷を受け、冑は裂けた。併し一人の敵の大將を討ち取り、その馬と、その冑を取つて又進み、竟に大に賊を打ち破つた。これより、西南の官軍は、再び盛んになつて來た。

〔語釋〕 大原（筑後）　二子（忠資、賴衡）

賊將畠山國清、建議大舉滅楠氏、以殫官軍根本、正儀與和泉守和田正武、詣行宮、奏曰、國清舉關東之甲、已至京師矣、而臣知其莫能爲也、兵道有三、曰、天時、地利、人和、明歲、大將軍星在西、而彼自東來、逆天時也、我所居、負山帶河、形勢深阻、毋論千窟之固、爾後敵五來皆敗、逆地利也、國清借公營私、爲等儕所嫉、逆人和也、三者皆逆、雖有百萬、何能爲、請從御金剛山、臣等拒石川、使別將出龍門、時出輕兵、出沒

散令使敵不知我所在。東兵慓悍、氣屈而退。退卽追之。必大克」帝從之。

訓讀 賊將畠山國淸、大擧して楠氏を滅し、以て官軍の根本を奪はんことを建議す。正儀、和泉守和田正武と、行宮に詣り、奏して曰く、「聞く、國淸、關東の甲を擧げ、已に京師に至ると。而れども臣其の能く爲す莫きを知る。兵道に三あり、曰く、天の時、地の利、人の和と。明歲、大將軍星、西に在り。而るに彼れ東より來る。天の時に違ふなり。我が居る所、山を負ひ河を帶び、形勢深阻、千窟の圍を論ずるなく、爾後、敵、五たび來り、皆敗る。地の利に違ふなり。國淸、公を借り私を營み、等儕の嫉む所と爲る。人の和に違ふなり。三者皆違ふ。百萬ありと雖も、何ぞ能く爲さん。請ふ、從つて金剛山に御し、臣等、石川に拒ぎ、別將をして龍門に出でしめ、時に輕兵を出だして、出沒散合、敵をして我が在る所を知らざらしめん。東兵慓悍なるも、氣屈して退かん。退かば卽ち之を追ふ。必ず大に克たん」と。帝、之に從ふ。

通釋 賊將畠山國淸は、大兵を擧げて、楠氏を滅して、官軍の根本を奪つて終つたらといふ建議をした。正儀は、それを聞いて、和泉守和田正武と一緒に、行宮に參り申上げていふには「聞く所によりますと、畠山國淸が關東の兵を擧げて、早や京都まで來てゐるといふことで御座います。併し國淸には何も出來るものではないと臣は存じて居ります。兵法には三つの道がありまして、それは、天の時と地の利と、人の和で御座います。來年は、大將軍星が西に位置します。從つて西に向つては何事をしても失敗に歸するので御座いますのに彼は東から西へ攻めて來て居ります。これ天の時に逆つた仕方で御座います。又味方の居ります所の形勢は後ろが山で、前に河をめぐらし、地形は山深く、谷險阻で、あの千窟の圍のことは(正成の時)申すに及ばず、その後、敵軍五度も攻

ゐましたが、いつも敗北致しました。これ程地の利を得てゐる我等を攻めるとは地の利に違つた仕方で御座います。又あの國清は公儀の名前を笠に着て、自分の利欲を營み、仲間から大層惡まれて居ります。これは人の和に違つた致し方で御座います。天の時、地の利、人の和、この三つが皆違つて居ります。よし百萬の大軍で押し寄せて來ましても、どうして何が出來るものですか。願はくは陛下にはお移り遊ばして金剛山に暫時お出ましなされ、臣等は石川を拒ぎ、別の大將をして、龍門に出でしめ、時々、身輕な兵卒を繰り出し、出たり入つたり散つたり聚まつたり、敵に我等の在りかを知らせないやうに致しませう。關東の兵はすばやくてたけ／＼しくはありますが、結局根氣が盡きて退却するで御座いませう。さうしたら早速之を追つかけます。すると、きつと大に克つことが出來ます」と。後村上天皇は、その計に從はれた。

〔語釋〕大將軍星（金星のこと。方位家は此の星のある方は塞いでゐて、これに向へば禍が起るといふ）〇龍門（紀伊）

明年、春、正儀等修平岩・箭尾・龍泉三城、益樓堞、張形勢、而自居于赤坂。義詮・國清、合兵三十萬入犯。軍于筒山、以逼楠氏、以一軍自龍門入。大納言藤原隆俊擊克之。賊更兵來攻。隆俊大敗走。帝遣將軍興良援之。興良叛應義詮、燒行宮、據銀嵩。帝令前關白藤原師基討走之。龍泉城將措疑兵而退。賊不敢迫。至五十餘日、乃攻取之、遂攻陷平岩・箭尾、合軍圍赤坂。

【讀方】明年春、正儀等、平岩・箭尾・龍泉の三城を修め、樓櫓を益し、形勢を張り、而して自ら赤坂に居る。義詮・國清、兵三十萬を合せて入り犯す。筒山に軍し、以て楠氏に逼り、一軍を以て龍門より入る。大納言藤原隆俊擊つて之に克つ。賊、兵を更へ來り攻む。隆俊、大に敗走す。帝、將軍興良を遣はし之を援けしむ。興良叛き、義詮に應じ、行宮を燒き、銀嵩に據る。帝、前關白藤原師基を討たしめ、之を走らす。龍泉の城將、疑兵を措いて退く。賊敢て迫らず。五十餘日に至り、乃ち攻めて之を取り、遂に攻めて平岩・箭尾を陷れ、軍を合せて赤坂を圍む。

【通釋】明年春、正儀等は、平岩・箭尾・龍泉の三城を修繕し、櫓や塀を築き益し、見かけを立派にして置いて、正儀自身は、赤阪に居た。義詮・國清が兵三十萬を合せて、侵入して來た。筒山に陣取つて、楠氏に押し逼り、一軍を以て龍門から攻め入つた。大納言藤原隆俊が擊つて之に勝つた。賊は新手の兵を更へて攻めて來た。隆俊は大敗して逃げた。天皇は、將軍興良親王を遣はして、之を援けしめようとされた。所が興良親王は、叛いて義詮に味方され、行宮に火をかけ、銀嵩に立て籠られた。そこで、天皇は前の關白藤原師基をして之を討たしめられ、之を走らせた。龍泉城の大將は假裝兵を城の中に置いて、退却した。だから賊は城へ迫らうとしなかつた。五十餘日たつて攻め取り、更に進み攻めて、平岩箭尾の二城をも陷れ、軍を合して赤坂を取り圍んだ。

【語釋】平岩・箭尾・龍泉(河內)　○筒山・銀嵩(大和)

正儀欲退守金剛山。正武曰「子知鼠乎。見人則竄。世將笑曰。南人抗天下、而鼠鬪而

已何不一戰以挫賊鋒。然後退爲未晩也。乃選三百人、約以暗號、夜出斫結城氏營、大戰。不克而入。令衆唱號坐作。有四敵卒雜焉。捕斬之。乃與正儀退入金剛山。賊軍引還。正儀・正武出絶渡部橋、攻譽田城。國淸復來攻。又退入山。會國淸與仁木義長相惡、賊中大騷。我兵爭起。國淸東歸。正儀攻水速城、拔之。官軍乘勝、連下諸城。義長來降。

【讀方】正儀、退いて金剛山を守らんと欲す。正武曰く、「子、鼠を知るか。人を見れば則ち竄る。世、將に笑ひて曰はんとす。南人、天下に抗して、鼠闘するのみと。何ぞ一戰し以て賊鋒を挫かざる。然る後に退くも、未だ晩からずと爲す」と。乃ち三百人を選び、約するに暗號を以てし、夜出でゝ結城氏の營を斫り、大に戰ふ。克たずして入る。衆をして號を唱へ坐作せしむ。四敵卒あり雜はる。捕へて之を斬る。乃ち正儀と退いて金剛山に入る。賊軍引きて還る。正儀、正武、出でて渡部橋を絶ち、譽田城を攻む。國淸、復來り攻む。又退いて山に入る。會國淸・仁木義長と相惡み、賊中大に騷ぐ。我が兵爭ひ起る。國淸東歸す。正儀、水速城を攻めて、之を拔く。官軍、勝に乘じ、連に諸城を下す。義長來り降る。

【通譯】正儀は退いて、金剛山を守らうとした。正武が曰ふのに「貴公は鼠を御存知ですか。人を見ると隱れます。今敵に會つて隱れると世間では、之を笑つて斯う申しませう。南朝方は、天下を相手にしてゐながら、鼠の

やうに鬪ふものであると。それよりは、なぜ一戰して、賊の鋒先を挫かないのですか。それから退却したつて遲くはありませぬ」と。そこで、三百人を選び、合言葉を約束して、夜の間に城を出で、結城氏の陣へ切り込み大に戰つた。併し克てないで、城に歸つて來た。味方の軍勢には、立ち居振舞に皆合言葉を言はせてゐた。所が敵の雜兵が四人味方に入り込んでゐた。(合言葉を知らぬから直ぐ分つた。)捕へて之を斬り殺した。そこで、正武は正儀と與に退却して金剛山に入つた。賊軍が引き上げて還らうとした。正儀正武は、城から出て渡部橋を落して譽田城を攻めた。國淸が、又攻めて來た。正儀等は又退いて金剛山に入つた。折から國淸は、仁木義長と仲違ひをしてゐたので、賊中では大にごたついてゐた。わが兵は、爭ひ起つた。國淸は形勢非と見て關東に歸つた。正儀は、水速城を攻めて、之を陷れた。官軍は勝ちに乘じて、つゞけ樣に諸城を下した。義長も降參して來た。

遺蹟　譽田·水速（河内）

帝北幸住吉、詔征東將軍宗良、發兵入援。以岐蘇早雪不果。十五年、征西將軍懷良、與菊池武光、以兵三千出宰府。少貳賴尙·大友氏時、與松浦黨謀、夾攻武光。武光縱反間、因襲松浦軍、敗之。賴尙等亦走。

訓讀　帝、北、住吉に幸し、征東將軍宗良に詔して、兵を發して入り援けしむ。岐蘇早く雪ふるを以て果さず。十五年、征西將軍懷良、菊池武光と、兵三千を以て宰府に出づ。少貳賴尙、大友氏時、松浦の黨と謀り、夾ん

で武光を攻む。武光、反間を縦ち、因つて松浦の軍を襲ひ、之を敗る。頼尚等も亦走る。

天皇は、北、住吉に行幸せられ、征東將軍宗良親王に詔して、兵を出して、援けに來るようにせられた。所が木曾は、早く雪が降るので來られないで終つた。十五年、征西將軍懷良親王は、菊池武光と與に兵三千を率ゐて、太宰府に出られた。少武頼尚・大友氏時は、松浦の黨と相談して、武光を夾み撃ちにした。武光は、まはし者を縦つて敵を欺まし、松浦の軍を襲うて敗つた。頼尚等も、亦逃げ去つた。

去歳之役、賊將赤松光範有レ功。而佐佐木道譽譖レ之、奪二其攝津守護一。國人憤怨。正儀・正武伺二知之一、九月、以二兵五百一、出二軍于天神林一。佐佐木秀詮、與二弟氏詮一、以二千餘騎一渡二神崎橋一。正儀等、使二人行呼一曰、「南軍自レ西來矣」。秀詮聞レ之、回レ馬西嚮、徑レ田、單列而行。正儀遣二輕卒三百一、夾射レ之。賊兵爭レ徑欲レ還。正儀・正武薄撃走レ之、斬二秀詮・氏詮一。溺レ水者二百餘人。正儀援レ之、給レ衣遣歸。

去歳の役、賊將赤松光範功あり。而るに佐佐木道譽之を譖し、其の攝津の守護を奪ふ。國人憤怨す。正儀、正武、之を伺ひ知る。九月、兵五百を以て、出でて天神林に軍す。佐佐木秀詮、弟氏詮と千餘騎を以て、神崎橋を渡る。正儀等、人をして行くゆく呼ばしめて曰く、「南軍西より來る」と。秀詮、之を聞き、馬を回して

西に嚮ひ、田を徑り單列して行く。正儀、輕卒三百を遣はし、夾んで之を射る。賊兵、徑を爭ひ還らんと欲す。正儀・正武、薄り撃つて之を走らせ、秀詮・氏詮を斬る。水に溺るゝ者二百餘人。正儀、之を援け、衣を給して遣歸す。

通釋 去年の戰爭で、賊將赤松光範は大分手柄を立てた。然るに、佐佐木道譽が、之を讒言して、光範の攝津の守護職を奪ひ取つた。攝津の人々は皆憤り怨んだ。正儀・正武はそれを伺ひ知つた。それで九月、兵五百を引きつれて、城を出で、天神林に陣取つた。佐佐木秀詮は、弟の氏詮と一緒に、千餘騎を引きつれて、神崎橋を渡つた。正儀等は途中人をして大聲に呼ばしめて曰ふには、「南朝の軍勢が西から來るぞ」と。秀詮は之を聞いて馬を回して西に向ひ、田を横切る時に、一列になつて進んだ。正儀は、身輕な兵卒三百を派遣して之を夾んで、射つた。賊兵は、田中の小路を爭つて、還らうとした。正儀、正武は、こゝぞと逼り撃つて、之を走らせ、秀詮氏詮を討ち取つた。水に溺れたものは二百餘人からあつた。正儀は、それを援け、衣服を支給して送り歸した。

語釋 去歳之役（義詮清氏が楠氏を赤坂に攻めたときの戰。）〇天神林・神崎橋（攝津）

細川清氏亦與道譽惡。遂來降、奏曰「義詮兵、西拒山名時氏、東拒仁木義長。臣請、乘虛復京師。」帝諮之正儀。正儀對曰「王師嘗攻京師、五得而五失。今苟欲得之、臣一人力可辨。何假清氏爲。獨病復失之耳。」行宮君臣、皆戀故都、遂令正儀與清氏共攻京師。義詮不戰而走。未幾義長敗、時氏退。而義詮軍振、欲犯行宮、絕我軍後。我軍留京

師二十六日而還、清氏戰死讃岐、四國悉叛。

[illegible] 細川清氏も亦道譽と惡し。遂に來り降り、奏して曰く、「義詮の兵、西、山名時氏を拒ぎ、東、仁木義長を拒ぐ。臣請ふ、虛に乘じて京師を復せん」と。帝、之を正儀に諮ふ。正儀對へて曰く、「王師、嘗て京師を攻め、五たび得て五たび失ふ。今、苟も之を得んと欲せば、臣一人の力にて辨ずべし。何ぞ清氏を假るを爲さん。獨復之を失はんことを病ふるのみ」と。行宮の君臣、皆故都を戀ひ、遂に正儀をして、清氏と共に京師を攻めしむ。義詮戰はずして走る。未だ幾ならずして、義長敗れ、時氏退く。而して義詮の軍振ひ、行宮を犯し我が軍の後を絕たんと欲す。我が軍京師に留ること二十六日にして還る。清氏、讃岐に戰死し、四國悉く叛す。

[illegible] 細川清氏も、亦道譽と仲が惡るかつた。遂に降參し來り、申上げて曰ふには、「義詮の兵は西は山名時氏を拒ぎ、東は仁木義長を拒いでゐます。（從つて京都は手薄であります。）私はこの隙間に乘じて、京都を回復し度いと存じます」と。天皇は之を正儀に御相談なされた。正儀は對へて申すに、「我が王師は前に京都を攻めまして、五度取つて、五度失ひました。今かりに之を得ようと思ひますれば、私一人の力で充分で御座います。何も清氏の力を借りる必要は御座いません。京都を得ますと却つて、その後之を失はないやうにする苦勞が增すばかりで御座います」と。行宮の君臣は皆、京都を慕ひ、遂に正儀をして、清氏と一緒に京都を攻めさせることになつた。義詮は戰はないで逃げて終つた。幾もなく、仁木義長は敗れ、山名時氏は退却した。そして義詮の軍勢は又盛んになつて行宮を犯して、我が軍の背後を絕ち切らうとした。それで我が軍は、京都に留まること、二十六日で、還つて來た。清氏は遂に讃岐で戰死し、四國は、皆叛いて終つた。

正儀・正武議曰、近日之勢、不可坐視。須一戰以振諸國官軍氣也。八月、以騎八百、士兵數千、軍神崎・株瀬二處。賊分兵阻水拒之。正儀等、張篝火其營、而潛兵渉三國渡、繞出賊背。賊謂北軍來援也。天明、顧視其旗、皆菊水。菊水者、楠氏號也。而大驚潰去。正儀・正武進拔赤松氏一城、火兵庫而還。

【訓讀】正儀・正武、議して曰く、「近日の勢、坐視すべからず。須らく一戰して、以て諸國の官軍の氣を振はすべきなり」と。八月、騎八百、士兵數千を以て、神崎・株瀬の二處に軍す。賊、兵を分ち、水を阻てゝ之を拒ぐ。正儀等、篝火を其の營に張り、而して兵を潛めて三國渡を渉り、繞つて賊背に出づ。賊、北軍來り援くと謂へり。天明、顧みて其の旗を視るに、皆菊水なり。菊水は、楠氏の號なり。而して大に驚き潰え去る。正儀・正武、進んで赤松氏の一城を拔き、兵庫を火いて還る。

【通釋】そこで、正儀・正武は、相談して曰ふには「此の頃の我が官軍の勢は、甚だ香ばしくなく、ぢつと見てはゐられない。是非一戰して諸國の官軍の氣勢を揚げるやうにせねばなるまい」と。八月、騎兵八百と士兵數千人を引きつれ神崎株瀬の二個處に陣取つた。賊は、兵を分けて、水を間にして之を拒いだ。正儀等は陣屋で篝火を焚いて（落ちついてゐるやうに見せかけ）そして、兵を隱して三國の渡を渉り、ぐるり迂回して敵の背後に出た。賊の方では、北軍が援けに來て呉れたのだと思つて、平氣でゐた。夜が明けて、振りかへり見ると其の旗は皆菊水であつた。菊水は楠氏の紋所である。そこで吃驚仰天して、陣を崩して逃げ去つた。正儀正武は、進ん

で赤松氏は一城を陥れ、兵庫を燒いて還つて來た。

【語釋】株瀨・三國渡（攝津）

於是、北畠顯能、與仁木義長、竝略伊勢。菊池武光略筑紫。義詮遣足利氏經、充鎭西探題。武光使弟武義・族重經將兵逆擊之。武義傷走。重經更進、斬少貳頼資。武光繼至、軍于豐後府、擊走氏經。十九年、大內弘世以周防・長門叛、降義詮。幷厚東氏邑。厚東怒、降於武光。與弘世戰豐後、走之。已而武光病卒。子武政襲肥後守。山名時氏・仁木義長亦降義詮。官軍不振。

【通釋】是に於て、北畠顯能、仁木義長と、竝に伊勢を略す。菊池武光、筑紫を略す。義詮、足利氏經を遣はし、鎭西探題に充つ。武光、弟武義、族重經をして、兵に將として之を逆へ擊たしむ。武義傷つき走る。重經更り進み、少貳頼資を斬る。武光繼ぎ至り、豐後の府に軍し、擊つて氏經を走らす。十九年、大內弘世、周防、長門を以て叛き、義詮に降り、厚東氏の邑を併はす。厚東怒り、武光に降り、弘世と豐後に戰ひ、之を走らす。已にして武光病んで卒し、子武政、肥後守を襲ぐ。山名時氏、仁木義長も亦義詮に降る。官軍振はず。

【補釋】これに勢を得て、北畠顯能は、仁木義長と、與に伊勢を平定した。菊池武光は、筑紫を平定した。義

詮は、足利氏經を遣はして、鎭西探題に充てた。武光に、弟武義・一族の重經をして、兵に將として氏經を迎へ撃たしめた。武義は負傷をして逃げた。重經が代つて進み、小貳頼資を討ち取つた。武光も繼いで來り、豐後の國府に陣取り、撃つて氏經を走らせた。十九年大内弘世は周防長門を以て叛き、義詮に降參し、厚東氏の領地を幷せ取つた。厚東は怒つて、武光に降り、弘世と豐後で戰つて之を走らせた。其の内に武光は、病氣で死んで、その子の武政が肥後守を繼いだ。山名時氏も仁木義長も亦義詮に降つた。それが爲め官軍は、又振はなくなつた。

二十三年、天皇崩、皇太子寛成即位。是爲長慶天皇。天皇建德二年、賊將細川頼之大擧入寇。和田正武率楠氏族、堅守諸城。賊軍引還。文中二年、細川氏春復入寇。大納言藤原隆俊死之。天皇讓位於皇太弟熙成。是爲後龜山天皇。天皇幼聰敏。人冀興復。而楠氏衰、國勢日削。義詮既死、子義滿嗣、勢益張。我將士多叛降北朝。紀伊諸城陷。

【訓讀】二十三年、天皇崩じ、皇太子寛成、位に卽く。是を長慶天皇と爲す。天皇の建德二年、賊將細川頼之、大擧して入寇す。和田正武、楠氏の族を率ゐて、堅く諸城を守る。賊軍引き還る。文中二年、細川氏春、復入寇す。大納言藤原隆俊、之に死す。天皇、位を皇太弟熙成に讓る。是を後龜山天皇と爲す。天皇、幼にして聰敏なり。

人、興復を冀ふ。而るに楠氏衰へ、國勢日に削らる。義詮既に死し、子義滿嗣ぎ、勢益々張る。我が將士多く叛いて、北朝に降り、紀伊の諸城陷る。

〔通釋〕二十三年に、後村上天皇は崩御せられ、皇太子寬成親王が御位に卽かれた。これが長慶天皇と申上げる天皇の建德二年に、賊將細川賴之が大擧して寇をした。和田正武は楠氏の一族を率ゐて堅く諸々の城を守つた。それで賊軍は引き上げて返つた。文中二年に、細川氏春が再び入寇した。大納言藤原隆俊は此の時討死した。天皇は御位を皇太弟熙成親王に讓られた。これが後龜山天皇と申上げる。天皇は幼少より非常にさといお方であられた。それで世間の人は南朝は此のお方によつて再興するだらうと望をかけてゐた。併し、楠氏は日に〳〵衰へ、國勢は日に〳〵削られた。反對に、北朝では、義詮は死んで終つたが、その子義滿が嗣いで、その勢は益々大きくなつて來た。又味方の將士も多く叛いて北朝に降り、紀伊の諸々の城も皆落されて終つた。

三年、關東賊兵屢攻征東將軍宗良於信濃。宗良不能拒、走歸吉野。東北無復官軍。征西將軍懷良猶依菊池氏、保守一隅。先是、明主朱元璋使使來征西府、以其書辭無禮、卻不納。明主更貽書於北朝。北朝納之、以征西府梗其往來、遣今川貞世、往攘。迺來攻。菊池武政、與其子武朝、相繼拒戰、屢克之。已而懷良與武政・武朝、前後皆病卒。西南無復官軍。

【訓讀】三年、關東の賊兵、屢征東將軍宗良を信濃に攻む。宗良拒ぐ能はず。走つて吉野に歸る。東北復官軍なし。征西將軍懷良、猶ほ菊池氏に依り、一隅を保守す。是より先き、明主朱元璋、使をして征西府に來らしむ。其の往來を梗ぐ其の書辭、禮なきを以て、卻けて納れず。明主、更に書を北朝に貽る。北朝之を納る。征西府、其の子武朝と、相繼いで拒ぎ戰ひ、屢之にを以て、今川貞世を遣はし、探題に充てゝ來り攻めしむ。菊池武政、其の子武朝と、相繼いで拒ぎ戰ひ、屢之に克つ。已にして懷良、武政、武朝と、前後皆病んで卒す。西南復官軍なし。

【通釋】三年、關東の賊兵は、度々征東將軍宗良親王を信濃に攻めた。宗良親王は之をお拒ぎ切れなかつた。それで、走つて吉野に歸られた。從つて東北地方にはもう官軍は無くなつた。征西將軍懷良親王は依然として菊池氏にたよつて居られ、西南の片隅を維持されてゐた。これより先き、明の太祖朱元璋は、使者を征西將軍府に來らしめた。（交際を求めたのである。）その書面の文句が無禮であつたので、退けて受け付けなかつた。明主は、更に書面を北朝に送つた。北朝では、之を受け入れた。征西府が明使の往き來を途中で邪魔するといふので、今川貞世を派遣して、探題職に充て、攻め來らしめた。菊池武政は、其の子の武朝と相繼いで、拒ぎ戰ひ、度々勝利を得た。其の内に懷良親王は武政・武朝と相前後して皆病氣で亡くなられた。從つて西南地方に於ても、もう官軍はなくなつて終つた。

於是義滿專圖楠氏。天授四年、遣山名氏清等入寇。楠氏族橋本正時・神宮正種等力拒、不克而退。六年、和田正武病卒。弘和二年、正儀亦卒。當是時、官軍所保、獨金剛

山、一城而已。元中九年、義滿使畠山義深將數千騎來攻金剛山、四絕糧道、城兵僅數十人、飢不能戰、賊急薄之、城兵逃走、匿十津川、自正成築城焉、凡六十年、乃爲賊兵所陷。義滿乃使大內義弘來講和議、約傳神器於北朝、則南統更立、遂許之。是年、冬、遂備法駕、發吉野、御于大覺寺、以父子禮、授神器于後小松帝。

【[illegible]】是に於て、義滿、專ら楠氏を圖る。天授四年、山名氏清等を遣はし入寇せしむ。楠氏の族楠木正時、神宮正種等力め拒ぎ、克たずして退く。六年、和田正武、病んで卒す。弘和二年、正儀も亦卒す。是の時に當りて、官軍の保つ所は獨り金剛山一城のみ。元中九年、義滿、畠山義深をして、數千騎に將として、來つて金剛山を攻めしめ、糧道を四絕す。城兵、僅に數十人なり。飢ゑて戰ふ能はず。賊、急に之に薄る。城兵逃れ走つて、十津川に匿る。正成、城を築きしより、凡そ六十年にして、乃ち賊兵の陷る所と爲る。義滿、乃ち大內義弘をして、來つて和議を講ぜしめ、約するに神器を北朝に傳ふれば、則ち兩統更立せんと。遂に之を許す。是の年、冬遂に法駕へ備へ、吉野を發し、大覺寺に御し、父子の禮を以て、神器を後小松帝に授く。

【[illegible]】かく諸方の官軍が滅んだので義滿は專ら楠氏を滅さうと圖つた。天授四年に、山名氏清等を派遣して、入寇せしめた。楠氏の一族、楠木正時や、神宮正種などが、力め拒いだが、克たないで退却した。六年には、和田正武が病歿した。弘和二年には正儀も亦歿した。この當時、官軍の維持して居る所は、たゞ金剛山の一城だけであつた。元中九年義滿は、畠山義深を遣はし數千騎に將として來つて金剛山を攻めしめ、四方の糧道を絕ち切つた。

城兵は僅かに數十人のみであつた。飢ゑて戰ふことが出來なかつた。賊は急に城に逼つた。城兵は逃げて、大和の十津川に匿れた。正成が金剛山に城を築いてから凡そ六十年で賊兵に陷れられた。そこで義滿は大内義弘を派遣して、和睦を申し込ましめ、神器を北朝にお傳へ下されば、南北兩統代る〴〵御位に立つ様にすると約束した。そこで後龜山天皇は遂に之を許された。この年の冬、遂に御鹵簿を整へて、吉野を發し給ひ、大覺寺に臨御になつて、御父子の禮式で三種の神器を後小松天皇にお傳へなされた。

【語釋】法駕（行幸の御行列。）○大覺寺（嵯峨にあり）

後七年、義弘揚兵於和泉、擊足利氏。楠正秀以兵百餘屬之。正秀者、蓋正儀子也。菊池氏・北畠氏餘孽亦來屬焉。戰敗散歸。後十三年、後小松禪位。後龜山皇子當立。足利氏乃立後小松皇子。是爲稱光帝。楠氏及北畠氏、竝訴之、欲如約。足利氏弗聽。則竝起兵。足利氏約、帝後當傳於南朝皇子。乃止兵。及稱光崩無嗣、足利氏復索北朝皇族、立之。後龜山天皇之子曰小倉者、自京師走伊勢、依北畠氏起兵。戰敗講和、歸京師、削髮入萬壽寺。

【訓讀】後七年、義弘、兵を和泉に揚げて、足利氏を擊つ。楠正秀、兵百餘を以て之に屬す。正秀は、蓋し正

儀の子なり。菊池氏、北畠氏の餘孽も亦來り屬す。戰敗れて散じ歸る。後十三年、後小松、位を禪る。後龜山の皇子當に立つべし。足利氏、乃ち後小松の皇子を立つ。是を稱光帝と爲す。楠氏及び北畠氏、並に之を訴へ、約の如くせんと欲す。足利氏聽かず。則ち並に兵を起す。足利氏約す、帝の後、當に南朝の皇子に傳ふべしと。乃ち兵を止む。稱光崩じ嗣なきに及んで、足利氏復北朝の皇族を索めて、之を立つ。後龜山天皇の子小倉と曰ふ者、京師より伊勢に走り、北畠氏に依つて兵を起す。戰敗れて和を講じ、京師に還り、髮を削つて萬壽寺に入る。

通釋 南北朝合一して後、七年目に大内義弘が、兵を和泉に擧げて、足利氏を擊つた。楠正秀は、兵百餘騎を引きつれ之に屬いた。この正秀といふのは蓋し正儀の子である。菊池氏北畠氏の餘類も亦やつて來て大内氏に屬いた。併し戰敗れ、解散して歸つた。その後十三年經つて、後小松天皇は位を讓られることゝなつた。前の約束では、南朝後龜山天皇の皇子をお立て申すべき筈である。而るに足利氏は、後小松天皇の皇子を立てた。これが稱光天皇と申上る。そこで楠氏と北畠氏とは、共にその約束不履行を訴へて約束通りにして貰はうと思つた。足利氏は背んじなかつた。だから皆兵を擧げて氣勢を示した。足利氏は、稱光天皇の後は、必ず南朝の皇子に位を傳へるやうにすると約束した。そこで、兵を止めた。併し、稱光天皇が崩ぜられて、太子が無かつたので、足利氏は再び北朝の皇族を捜し、之を立てた。後龜山天皇の御子で小倉皇子と申した方が京都から伊勢に走られ、北畠氏に依つて兵を擧げられた。併し戰敗れて和睦をして京都に歸り、髮を剃つて、萬壽寺に入られた。

語釋 後七年（後小松天皇の應永六年。）○楠正秀（小三郎、左馬頭。）○後十三年（應永十九年。）○北畠氏（政滿）

後十餘年、歲癸亥、足利氏內亂。楠二郎收南國兵、得三百人、奉萬壽寺金藏主者爲

主、分兵爲二隊、二郎自將一隊、而越智某將一隊、夜入大內、取三神器。內侍鏡爲東門衞士所奪、寶劍遺於清水寺側、獨擁神璽、據叡山中堂。足利氏管領畠山基國、遣兵來攻。二郎與越智皆戰死、金藏主自殺。二郎者、不詳其所出也。二郎殘兵、以神璽、奉後醍醐帝曾孫某、保吉野。歲戊寅、赤松氏遺臣二人、詐來仕、弑皇曾孫。從者追殺一人。其一人遂奪璽而去。

（訓讀）後十餘年、歲の癸亥、足利氏內亂あり。楠二郎、南國の兵を收め、三百人を得、萬壽寺の金藏主なる者を奉じて主と爲し、兵を分つて二隊と爲し、二郎自ら一隊に將となり、越智某一隊に將となり、夜、大內に入り、三神器を取る。內侍の鏡は、東門の衞士の奪ふ所と爲り、寶劍は、清水寺の側に遺し、獨り神璽を擁して、叡山の中堂に據る。足利氏の管領畠山基國兵を遣はし來り攻めしむ。二郎、越智と皆戰死し、金藏主自殺す。二郎は、其の出づる所を詳にせず。二郎の殘兵、神璽を以て後醍醐帝の曾孫某を奉じて、吉野を保つ。歲の戊寅、赤松氏の遺臣二人、詐つて來り仕へ、皇曾孫を弑す。從者追うて一人を殺す。其の一人は、遂に璽を奪つて去る。

（通釋）後十餘年たつてそれは癸亥の歲のこと、足利氏に內亂があつた。楠二郎なる者が南國の兵をよせ集めて、三百人を手に入れ、萬壽寺の金藏主といふ者を守り立てゝ、主となし、兵を分けて、二隊と爲し、二郎は自ら一隊の將となり、而して越智某が一隊を率ゐ、夜にまぎれて、皇居に討ち入り、三種の神器を奪ひ取つた。併

し、內侍所の御鏡は、東門の番兵に奪ひ取られ、寶劍は、清水寺の側に落し、たゞ神璽を捧持して、比叡山の根本中堂に立て籠つた。足利の管領の畠山基國が兵を遣はして、攻め來らしめた。二郎は、越智と共に戰つて皆討死し、金藏主も自殺した。二郎は楠氏の誰から出た人か判つきりしない。二郎の殘兵は、神璽を捧持し、後龜山天皇の曾孫某を奉じて、吉野を保持した。戊寅の歲に、赤松氏の遺臣二人がたばかつて來り仕へ、皇曾孫を弑した。從者が追つかけて其の一人を殺した。併しあとの一人は遂に神璽を奪つて逃げ去つて終つた。

【語釋】癸亥（花園天皇の嘉吉三年。）○楠二郎（正光）○南國（大和、紀伊など。）○內侍所（溫明殿、三種神器を安置し奉る所。後に神鏡を稱して內侍鏡といふ。）○戊寅（花園天皇長祿二年。）○遺臣二人（馬島三郎太郎、內村八郎）

先是、後村上天皇子泰成、生圓胤。爲圓滿院僧正。蓄髮更名義有。癸亥之難、楠二郎之弟某、奉義有起兵、據八幡、迎擊畠山氏兵、大破之。細川氏來攻。楠氏不利。退入紀伊、據湯淺城。歲丙寅、畠山氏將游佐來攻。楠氏又擊破之。丁卯冬、游佐復聚兵來攻。城終陷、義有遇害。楠某死之。楠氏之事終於此。毋復所覩。

【通釋】是より先き、後村上天皇の子泰成、圓胤を生む。圓滿院の僧正と爲る。髮を蓄へ名を義有と更む。癸亥の難に、楠二郎の弟某、義有を奉じて兵を起し、八幡に據り、畠山氏の兵を迎へ擊ち、大に之を破る。細川氏來り攻む。楠氏利あらず。退いて紀伊に入り、湯淺城に據る。歲の丙寅、畠山氏の將游佐、來り攻む。楠氏、

又擊つて之を破る。丁卯の冬、游佐復兵を聚めて來り攻む。城遂に陷り、義有、害に遇ひ、楠某、之に死す。楠氏の事、此に終り、復覩る所なし。

（通釋）これより先き、後村上天皇の皇子泰成親王が圓胤を生まれた。この圓胤は、大津の圓滿院の僧正となつて居られた。髮を蓄へて還俗し名を義有と改められた。癸亥の歲の騷ぎの際に、楠二郎の弟某が義有を奉じて兵を起し、八幡に立て籠つて、畠山氏の兵を迎へ擊ち、大に之を破つた。そこで細川氏が攻めて來た。楠氏は敗られて終つた。それで退却して紀伊に入り湯淺城に立て籠つた。丙寅の歲に、畠山氏の大將游佐なる者が攻めて來た。楠氏は又之を擊ち破つた。丁卯の冬、游佐がまた兵を聚めて攻め來つた。それで、城はとう〳〵陷り、義有は殺害せられ、楠某もこの戰で討死した。楠氏の事はこれで總てお終ひであつて、もう此の先きは別に知られて居らないのである。

（語釋）八幡（山城）○丙寅（永享八年）○游佐（畠山持國の家來。）○丁卯（文安四年）

名和・兒島・土居・得能氏、蓋先楠氏而亡。後楠氏而存者、菊池・北畠氏。菊池氏數世至義宗者乃亡。北畠氏十餘世至具教者乃亡。此二氏者、自楠氏衰、皆降足利氏。或曰「楠正儀亦降足利氏。蓋有深謀焉。史乘散佚、不可考信。要之、正成宗族、與後醍醐皇統相爲終始。楠氏亡而後二百餘年、權中納言源光圀、立石于湊川、題曰嗚呼忠臣

楠氏之墓。

【訓讀】名和・兒島・土居・得能氏は、蓋し楠氏に先だちて亡ぶ。楠氏に後れて存する者は、菊池、北畠氏なり。菊池氏は數世にして、義宗なる者に至つて乃ち亡ぶ。北畠氏は十餘世にして、具教なる者に至つて乃ち亡ぶ。此の二氏は楠氏衰へてより、皆足利氏に降る。或人曰く、「楠正儀も亦足利氏に降る」と。蓋し深謀有りしならん。史乘散佚して、信を考ふべからず。之を要するに、正成の宗族は、後醍醐の皇統と、終始を相爲す。楠氏亡んで後二百餘年、權中納言源光圀、石を湊川に立て、題して嗚呼忠臣楠氏之墓と曰ふ。

【通釋】名和・兒島・土居・得能の諸氏は思ふに楠氏に先だつて滅んだのである　楠氏に後れて殘つてゐたのは、菊池と北畠の二氏であつた。菊池氏は數世を經て、義宗といふ者の時になつて滅んだ。北畠氏は、十餘世を經て具教といふ者の時になつて滅んだ。此の二氏は、楠氏が愈〻衰へてからは、皆足利氏に降つた。(それで長く存續したのである。)或る人が曰ふのに「楠正儀も、亦足利氏に降參した」と。思ふにそれには深い企みがあつて降參したのであらう。何しろ其の頃の記錄は殆んど散り失せたので、實際を考へることが出來ぬ。要するに、正成の一族は、後醍醐天皇の御血筋と終始してゐる。楠氏が亡んで後、二百餘年を經て、權中納言源光圀卿は湊川に石碑を立てられ、その碑面に題して、嗚呼忠臣楠氏之墓と書き付けられた。

【語釋】深謀（日本政記卷十四弘和元年の註參照。）○源光圀（德川家康の曾孫水戸に封ぜらる）

【餘論】池田蘆洲翁曰はく、敍贊十九篇、命意行文、當に此の篇を以て壓卷と爲すべしと。本篇は外史論文中最も

著名なるもの、冒頭櫻井驛址を尋訪するにより、楠氏を追憶し、楠氏の功業を論ずる所、詩の興體のやうである。故に此の論想見二字に發端し、任字を主眼として文を行つてある。一篇の主意は後醍醐天皇が新田氏に倚られて楠氏に倚られなかつた。それが足利氏に志を得しめた所以で、若し天皇をして新田氏に任ぜられた所を以て、楠氏に任ぜられたなら、如何ぞ足利氏などに我が朝廷を蹂躪されるに至らうや。併し朝廷は楠氏に任ずることは能きなかつたが、楠氏はその子孫に至るまで一門を擧げて國家の難に殉じた。その自ら任ずる所以は實に大なるものであつて、その忠節は巍然として、千歳後までも、世道人心を維持するに足るものであるとの意である。

外史氏曰、余數往二來攝播間一、訪二所レ謂櫻井驛者一、得二之山崎路一。一小村耳。過者或不レ省二其爲一レ驛址一。蓋經二足利・織・豐數氏一、世故變移、道里驛程、隨輙改耳。余於レ是、低回不レ能レ去。顧二望金剛山嶷二立雲際一、想二見公擧レ義之秋、及其子孫據以扞二護王室一也。

訓讀法 外史氏曰く、余、數々攝播の間を往來し、所謂櫻井驛なる者を訪ひ、之を山崎路に得たり。一小村のみ。過ぐる者或は其の驛址たるを省せず。蓋し足利・織・豐數氏を經て、世故變移し、道里驛程、隨つて輙ち改まれるのみ。余是に於て、低回して去る能はず。金剛山の雲際に嶷立てるを顧望し、公の義を擧げしの秋、及び其の子孫の據つて以て、王室を扞護せしを想見するなり。

通釋 予は度々攝津・播磨の邊を往來して、所謂櫻井驛と傳へ稱せられてゐる所を尋ねて、驛の址を山崎街道筋に見つけ出した。其の驛といふのは極く小やかな一村落に過ぎない。であるから此處を通る者は、迂つかりす

る」此處が名に負ふ櫻井驛の址であることに氣が附かないのである。思ふに斯樣に成り果てたのは、畢竟足利・織田・豐臣諸氏の時代を經過する內に、世の中の有樣が悉つかり移り變り、此の邊の道路や宿場や、其の路程などの樣子も、之に隨つて改まり變つたからである。そこで予は、かくも世の中は移り變りの激しいものかと、楠公の古を忍んで感慨無量、往くこともならず、その處に須臾立ちもとほり、立ち去ることが出來なかつた。その內にフト氣づいて、遙かに、雲の際に金剛山が聳えてゐるのをふり顧り望み見て、自分はいつの間にか、楠公がアノ山に立て籠つて義兵を擧げられた時のことや、その子孫の人々が、此の山に據つて、何處までも我が皇室を守護されたこと抔を想ひ出し、追憶に耽るのであつた。

【語釋】往二來攝播間一（播は音ハ。山陽は京都に僑居してゐたので、毎年廣島へ歸省した、それで攝津・播磨の邊は度々往つたり來たりしたのである。）○山崎路（山崎街道、京より大阪に通ずる街道）○櫻井驛址（今攝津國三島郡島本村に屬す。）○道里驛程（道路の里數、宿場々々の道のり、といふ意なれども、こゝは主として、宿場の樣子、道路の樣子といふ意と見るがよい。）○嶷立（音ギヨクリツ、聳え立つこと。）○扞護（扞は難を禦ぐこと。）

【餘說】以上第一段、舊址を尋ねて往時楠氏の義擧を追懷することを敍べてある。

觀公詣行在、對天子曰、「臣而未死、賊不患不滅」。夫以一兵衛尉、而居然以天下之重自任、豈非感激値遇、以身許國哉。故能以赤手、障江河、回天日於既墜。何其壯也。

【通釋】公の行在に詣りて、天子に對ふるを觀るに、曰く、「臣にして未だ死せずば、賊の滅びざるを患へず」と。夫れ一兵衛尉を以てして、居然、天下の重きを以て自ら任ず。豈に値遇に感激し、身を以て國に許せるに非ずや。故に能く赤手を以て江河を障へ、天日を既に墜つるに回す。何ぞ其れ壯なるや。

通釈　楠公が笠置山の行在所に詣り、後醍醐天皇に、天誅時に乗ずれば何の賊か斃れざらんとお對へした時に楠公はつけ加へて申さるゝに、「臣が未だ死なぬ間は、北條氏の滅亡するのを心配するに及びませぬ。」と。さて楠公は當時その官爵は、たゞの一兵衛尉といふ微官に過ぎないが、その人が斯くもドッシリ落ちついて、天下の重任を自分一身に負ひ込まれた。これ畢竟陛下のお見出しに預かり、君臣相遇へるに感激し、それで身命を國家の爲めに捨てゝ構はぬと思はれたればこそである。だから公は能く空手で以て江河の怒濤逆捲くにも比べるべき北條の大軍を支へ、皇威の地に墜ちて、後醍醐天皇の隱岐に流され給ひしを、再び京都に還御になるやうに奮闘したのである。何んといふマア壯んなことではあるよ。

語釈　居然（其の處に安居して動かないこと。）○江河（江は楊子江、河は黄河、共に支那の大河、その流れ激しきより、假つて北條勢の盛んなことに比したのである。）○天日（後醍醐天皇に比す。）○既墜（日輪が西に没したやうに、天子隱岐に遷され給ひしを譬へいふ。）

餘論　昔時を追懷して初め楠公が行在に詣りしことより叙べ、公の身を以て國に許した壯志を論じてある。

公聚北條氏精鋭於一城之下、而使新田・足利之屬、擣其空虚、以殪其渠魁。帝之復辟、疇爵任職、宜以公爲首。而纔能與結城・名和輩比肩。其失於舉措、足以知中興之無成矣。

訓読　公、北條氏の精鋭を一城の下に聚め、而して新田・足利の屬をして、其の空虚を擣き、以て其の渠魁を

殪さしむ。帝の復辟するや、爵を酬い職に任ずる、宜しく公を以て首と爲すべし。而るに纔に能く結城・名和い輩と肩を比せしむ。其の擧措を失する、以て中興の成る無きを知るに足れり。

通釋 楠公が北條方の精鋭な軍隊を皆金剛山の城下へ聚め寄せて、之を一手に引き受け、其の留守の間に新田は鎌倉、足利は京の六波羅の空虛を衝き攻めて、高時や仲時・時益等を討ち斃すやうにせしめた。これは皆楠公の働きが有つたればこそ、それ丈けの仕事が出來たのぢや。だから後醍醐天皇が御位にお復へりになされた時、論功行賞があつたが、其の際爵が酬いられ、官職に任ぜらるゝには、宜しく楠公を以て第一となさるべきであつたのである。それであるのに實際は如何であつたか。ヤッとアノ結城や名和の人々と同じ列に置かれたではないか。マア何んといふ誤つた處置を取られたことだらう、此の一端で以て觀ても、中興の事業の出來上らなかつたのは合點することが出來る。

語釋 一城（金剛山千早城をさす。）〇空虛（皆兵が金剛山の方へ出掛つて鎌倉は空虛と曰つて宜い。そこを新田が攻めて滅した。又六波羅の方の兵も皆楠氏の方へ攻め寄せてゐた。その空虛へ足利尊氏等が攻め寄せて陷れた。）〇渠魁（大頭の高時、六波羅の仲時・時益をさす。）〇復辟（君位に復へらるゝこと）〇結城・名和（結城宗廣・名和長年。）

餘論 追慨は進んで北條討滅の時に及ぶのである。而して結局、公の爵任が、其の功勳と釣り合はなかつたことに論及してゐる。こゝが此の段の主要なるところ。

及足利氏叛、朝廷方倚新田氏爲重。公特充褊裨、供其驅使。亦以其門地有不若焉爾。然京師大捷、殆致掃殄者、非因公之策耶。嚮使帝以其所任新田氏者、以任於公、

乎、爲ㇾ至ㇾ使㆔犬羊狐鼠之賊、蹂㆓踐吾朝廷㆒哉。

訓讀 足利氏の叛するに及び、朝廷、方に新田氏に倚つて重きを爲す。公は特に褊裨に充てられ、其の驅使に供せらる。亦其の門地、若かざるあるを以てのみ。然れども、京師の大捷、殆んど掃殄を致す者は、公の策に因るに非ずや。嚮に帝をして其の新田氏に任ずる所の者を以て、以て公に任ぜしめんか、曷ぞ犬羊狐鼠の賊をして、吾が朝廷を蹂踐せしむるに至らんや。

通釋 足利が謀叛するに至つて、朝廷では新田氏に依賴なされて、大層重んぜられた。楠公はたゞ副將の位地に充てがはれ、新田に追ひ廻はされることになつた。さうなつた理由は楠公の家柄が、新田の家柄に及ばなかつたからといふに過ぎない。併し家柄は及ばぬにしても、事實は如何であつたか。アノ京都で尊氏が亂暴をした時に、之と戰ひ大勝利を得、殆んど賊徒を掃ひつくしたのは、皆楠公の計略に因つたのではなかつたか。足利が叛いた時に、後醍醐天皇が新田氏にお任かせなされた所の者を、その儘楠公に任ぜられ給うたなら、どうして〱アノ犬や羊、狐や鼠のやうな小賊、足利抔に、吾が尊き朝廷を踏み蹂られるやうなことになりませうぞ。(誠に惜しみても餘りあることぢや喃。)

語釋 爲ㇾ重(一說に重りとすると譯す。今たよりにして重ぜらるゝ意に解する。)○門地(家柄。朝廷では門地を重んぜらるゝ風があつた。)○京都大捷(此話前出)○犬狐羊鼠(足利を罵る語)

餘論 追懷は更に進んで足利の叛した時に及ぶ。そして新田に任ぜられた所を楠氏に任ぜられなかつたことを惜しむのである。以上第二段。楠公の功業を追憶して、その武功は中興第一、而して其の任用之に稱はなかつたことを論じてある。

然觀其臨死戒子、又曰「吾死、天下悉歸足利氏」。夫知天下之不可爲、而猶留其子孫、以衞天子其設心、雖古大臣、何以遠過。

【訓讀】然れども其の死に臨みて、子を戒むるを觀るに、又曰く、「吾れ死せば、天下悉く足利氏に歸せん」と。夫れ天下の爲すべからざるを知りて、而も猶ほ其の子孫を留めて、以て天子を衞らしむ、其の心を設くる、古の大臣と雖も、何を以て遠く過ぎん。

【通釋】併しそれ程の楠公も自分の計畫が行はれないで、遂に湊川で討死致されたが、その死に臨んで、（櫻井驛で）倅の正行を戒めて、又次の如うに申された。「自分が討死したら、天下皆足利の世となることであらう」と。夫れ當時、天下を如何ともすることが出來ぬと知りながらも、而もやはり自分の子孫を留め置いて、天子樣を保護させた。（其處ぢや、楠公の御心構への優れてゐる所は。何んと見上げたものではないか。）その心構へは昔の大臣と雖も、どうして〳〵これ以上に出られるものではないぞ。

【語釋】臨死（この度の戰は討死と決めてかゝつた故、そして實際に討死したから臨死といふ。）○又曰（又の字は上文、對天子曰といふのを承けて又曰としたのである。）○不可爲（取り後へしのつかぬをいふ。）

【餘論】追懷は更らに進んが、正成公歿後に及ばんとする。その前に公死に臨んで、子孫を留めて天子を護らしめた、その心構へを稱揚してあるのである。

故子孫能守其遺訓、護正統天子於彈丸黑子之地、以防四海寇賊者、及三朝五十

餘年之久シキニ、擧ゲテ二一門之肝腦ヲ一、而竭シテ二諸國家之難ニ一、至リテ二其ノ澌盡灰滅スルニ一、而後ニ足利氏始メテ得タリ二大ニ成スヲ一
其ノ志ヲ於天下ニ一。

【訓讀】故に子孫能く其の遺訓を守り、正統の天子を彈丸黑子の地に護り、以て四海の寇賊を防ぐこと、三朝五十餘年の久しきに及び、一門の肝腦を擧げて、諸を國家の難に竭し、其の澌盡灰滅するに至りて、而る後に足利氏始めて大に其の志を天下に成すを得たり。

【通釋】楠公の忠義は斯の如うであつたので、其の子孫も、能く公の遺された教訓を遵守して、御系統の正しい南朝の天子樣を彈丸や黑子の如き狹小な吉野の地に守護し奉り、そして天下の寇や賊を何處までも防禦したことは、實に三代五十餘年の久しい間に渡つたので、其の間、楠氏一門の生命は國家の難義に抛ち盡し、その子孫が一人も殘りなきに至つた後、始めて足利氏が自分の思ふことを天下に成すことが出來るやうになつたのである。そこ迄行かなければ足利とて志を成すことが出來なかつたのである。

【語釋】彈丸黑子（タマやホクロのやうに、小さいことに譬へたのである。）〇三朝（後村上・長慶・後龜山、一說に後醍醐・後村上・後龜山といへども、三朝云々の語は正行以後のことをいふのであるから後村上・長慶・後龜山三帝の代と見る。長慶天皇は御皇統譜に上らせられたのは近年のことなれども、日本外史では、私に皇統に列し奉り書き記されてゐるから、この三朝は前說に從はねばならぬ。）〇肝腦（肝臟腦髓、生命といふ意。）〇澌盡灰滅（氷の釋け盡し炭の灰となつて消滅すること。一門の盡き果てるをいふ。）

【餘論】追懷は大楠公歿後に及ぶ。その子孫がよく公の遺訓を守つて、南朝の三世を守護した功を叙べ論じてある。以上第三段。楠公歿後の用意と、その子孫の忠孝とを追懷し論じてある。

蓋朝廷不能大任楠氏、而楠氏所以自任莫以加焉。世之論中興諸將、苟視其資望大小、而不深揆其實、亦與當時之見等耳。不有楠氏、雖有三器、將安託焉、以繫四方望哉。笠置夢兆、於是益驗。而南風不競、俱傷共亡、終古莫以恤其勞。悲夫。

〔訓讀〕蓋し朝廷大に楠氏に任ずる能はずして、楠氏の自ら任ずる所以は、以て加ふる莫し。世の中興の諸將を論ずるもの、苟ほ其の資望の大小を視て、深く其の實を揆らざるは亦當時の見と等しきのみ。楠氏有らずんば、三器有りと雖も、將た安くに託して、以て四方の望を繫がんや。笠置の夢兆、是に於て、益ゝ驗あり。而るに南風競はず、俱に傷つき共に亡び、終古以て其の勞を恤む莫し。悲しいかな。

〔通釋〕思ふに朝廷で大に楠氏に任じ給ふことは出來なかつたが、楠氏自らはこれ以上更に加へ様も無き迄に自任してゐたのである。然るに世上の人で、建武中興の時の諸將を評論するのに、兎角、その門地や名望の大小を視較べて之を論じ、當時の實際の有樣を深く度らないが、そんな見方なら、これ亦建武の當時に、專ら門地名望で以て人を進退した見と同じことになつて終ふ。（極めて取るに足らない見方である。當時の實際を活眼を開いて見よ）若しも楠氏といふものがなかつたならば、假令三種の神器があつたからとて、一體如何なる人を賴んで之を捧げ奉り、天下四方の人望を繫がんとするか。（思ふに楠氏といふ者あつたればこそ、それを賴りにして此の神器に光りが加はり、天下勤王の精神を呼び起すことが出來たのであらう）して見ると笠置山で後醍醐天皇が夢お御覽遊ばされた、アノ夢の知らせは、益ゝその效驗のあつたこととなる。（公は實に朝廷を安きに置き、奉つ

た首唱であるのである。全くお夢の通りぢや。）而るに正統の南朝は御運拙く、御威勢振ひ給はず、楠氏は終に南朝と倶に傷き、南朝と共に亡んで終ひ、古來より誰れ一人として、この楠氏の勤勞を氣の毒に思ふものがないのぢや。あゝ悲しいことである。

語釋 楠氏所二以自任一、莫三以加二焉（一說に朝廷で任じなかつたが、自分で任じたのであるから、此の上ない忠義を盡したと謂ふべきだ。又引受けた精忠に至つては何人と雖も遠く及ぶ所ではない。皆加字を忠義にかけて說明したのである）○安託（勤王の士の目標にするやうに何處へ据ゑ置くかといふ意。）○笠置夢（南木の御夢。）○南風不レ競（南朝の氣勢の揚がらないことをいふ。左傳襄公八年の字句。晉人楚の師あるを聞く。師曠曰く。害あらず、吾驟北風を歌ひ、又南風を歌ふ。南風競はず、死聲多し。楚必ず功なからんとある。南風は南方の歌。南方の歌は弱くて北方の歌に及ばぬといふより假りて來て南朝の振はないことに譬へたのである。）○終古（古より、久しい間。）

餘論 近藤南州曰く明治昭代に至り、大に楠公の祠廟を湊川に起し、十三年七月、車駕臨幸し給ひ、勅して正一位を贈らる。正行の如きも亦廟を四條畷に建て、日を追うて隆盛なるに至れり。山陽翁をして知ること有らしめば、快然の思ひ有らん乎と。

以上第四段、當時楠氏の自任する所、多大であつて、又實際其の功中興第一であつたのに、後世の論者、徒らに資望の大小に因つて之を論じ、その勤勞を恤む者のないことを慨嘆する。これは抑筆を用ひたのである。次ぎに大に揚げんとする下地である。朝廷不レ能三大任二楠氏一、而楠氏所二以自任一、莫三以加二焉の十九字は本篇の主意である。

抑正閏雖レ殊、卒歸二於一一、能熙二鴻號於無窮一。使二公有一レ知、亦可二以瞑一矣。而其大節巍然、與二山河一並存、足三以維二持世道人心於萬古之下一。比二之姦雄迭起、僅傳二數百年一者一、其得失果何如哉。

〔訓讀〕抑も正閏殊なりと雖も、卒に一に歸し、能く鴻號を無窮に照む。公をして知る有らしめば、亦以て瞑すべし。而して其の大節は巍然、山河と並び存し、以て世道人心を萬古の下に維持するに足る。之を姦雄迭に起り、僅に數百年に傳ふる者に比すれば、其の得失果して如何ぞや。

〔通釋〕一體、南朝は正位、北朝は閏位で、其處に相違こそあつたが、結局、南北兩朝は合一に歸した、（合一すればこれ卽ち正統の天子と申すもので、早やそこには正・閏の問題は無いのである）斯くて萬世一系の偉大なる天皇の御尊號を千代八千代無窮の後までも輝かし廣めることの出來るやうになつた。楠公をして此の結構なる有樣を知らしめたなら、今は心を安んじて目を瞑らるゝことであらう。而して公の大忠節は、誠に高大であつて、かの山河の高大なのと並んで何時々々までも嚴存し、（誰れだつて公の大精神に觸れたなら奮然蹶起して、王に勤めるに極つてゐる。そのやうに）世道人心を萬年の後迄も維ぎ保つことが出來るのである。彼の北條・足利杯の姦惡なる輩が代る〳〵起り來り、起つたかと思ふと亡び、亡んだかと思ふと起つたりして、僅かに二三百年の間繼續したものと較べ見れば、その優劣善惡は果して何んなものぢや。（もう言はずとも知れたことぢや）

〔語釋〕正閏（正は通常の十二ヶ月、閏は通常外の閏月、この字面を借りて、正統の天子と左樣でない天子とに比べたのである。）〇歸二於一一（南北合一をいふ。後龜山天皇の後小松天皇に御位を讓られたるをいふ。）〇鴻號（鴻は大、天子の大號）〇照（ヒロムとよむ。後世迄立派な天子の御名を代々書き列ねて無窮に照め傳へることの出來るやうになつたといふ意味）〇山河（上文の金剛山と照應してゐる文字）〇世道人心（世の風教、人の行くべき正しき心構へ）

〔餘說〕以上第五段に揚筆を用ひたのである。楠氏の大功は鴻號の無窮と共に炳乎として傳はり、其の忠節は萬世の後迄も世道人心を維持するに足るものであることを言ひ、大に結尾を掉つたのである。

日本外史新釋　卷五終

日本外史新釋 卷六

新田氏正記

新田氏

【釋義】本文の主意は、新田氏は族望・足利に及ばぬとはいへ、朝廷の依賴する所となり、不運にも成功はしなかつたが、その大義を重んじた點は特筆するに値ひする。であるから當時將軍の實は新田氏に在つたのであるから、成敗などは問題にしないで其の傳を正記として記すことゝしたのである、との意。

外史氏曰、新田・足利二氏、皆出於八幡公。其門閥固不相下也。而新田氏爲嫡宗。舊志皆以足利氏承源氏之統、號曰將軍者、以成敗之跡軒輊之耳。

【訓譯】外史氏曰く、新田・足利二氏は、皆八幡公より出づ。其の門閥固より相下らざるなり。而して新田氏は嫡宗たり。舊志は皆足利氏を以て、源氏の統を承くとなし、號して將軍と曰ふは、成敗の跡を以て、之を軒輊す

ろのみ。

【通釋】外史氏が曰ふのに、新田・足利の二氏は皆源義家から出てゐる。だから二氏の家柄には勿論上下はないのである。而して新田氏は嫡流で本家筋である。然るにこれまでの歴史では、皆足利氏をば源氏の流れを受け繼いだものとして、これを將軍と名付けてゐるが、これはたゞ成功失敗の事跡の上から區別して、かやうに足利を重んじたのであつて、決して正しいやり方ではないのである。

【語釋】八幡公（八幡太郎義家）〇軒輊（輕重の義）

【餘論】以上第一段。新田と足利とを成敗の跡を見て輕重することは善くないことを叙ぶ。

然二家聲威、有優劣者、有由來矣。蓋二家之所同祖者義國。義國以八幡公之子、而謫於上野、所謂新田郡、其所食也。二子義重・義康。義康依其外家田原氏、居足利郡、終得分食其半。而義重繼有新田、又襲義國官爵。則義重之爲嫡宗明矣。

【訓讀】然れども二家の聲威、優劣あるは、由つて來る有り。蓋し二家の同じく祖とする所のものは義國なり。義國は、八幡公の子を以て、上野に謫せられ、所謂新田郡は、其の食む所なり。二子義重、義康。義康其の外家田原氏に依り、足利郡に居り、終に分つて其の半ばを食むを得たり。而して義重は繼いで新田を有ち、又義國の官爵を襲ぐ。則ち義重の嫡宗たる明なり。

【通釋】しかし新田足利の二氏の名聲威望に、かくも優劣を生じたのは、さうなる譯があるのである。思ふに新田足利二家の同じく祖先としてゐるのは義國である。義國は八幡公の子でありながら罪によつて上野に流され、所謂新田郡がその所領の土地であつた。義國の二人の子は義重・義康といつた。義康は彼の母方の家の田原氏にたよつて、足利郡に居り、終に其の半分を分けて貰ひ自分の土地とした。そして義重は、繼いで新田郡を所有し、父義國の官爵を相續したのである。して見れば義重の方が本家であることは明白なことなのである。

【餘論】以上第二段、新田氏の嫡宗なることを論じたのである。

然及源頼朝起、義重與之有隙。以大炊助終其身。子孫不過曰上野一武族。而義康、遭遇事變、頓進官爵。又與源義朝同娶於熱田。故子孫受頼朝親昵。又世結婚於北條氏、互相倚頼、著于謙倉。後醍醐帝之未起事、蓋稔聞足利氏之爲強宗也。是以及聞其倒戈、遽許寵爵。其褻玩朝廷、覬覦非望、帝有以啓之。而新田氏之功勞、遠出其上者、則待二家交訟之日。然後知之。及尊氏叛逆、乃命義貞宗族以防之。而其勢既成、不可復遏可勝歎哉。

【訓讀】然れども源頼朝起るに及んで、義重之と隙あり。大炊助を以て其の身を終る。子孫上野の一武族と曰

ふに過ぎず。而して義康は事變に遭遇し、頓に官爵を進められ、又源義朝と同じく熱田に娶る。故に子孫、頼朝の親昵を受く。又世婚を北條氏に結び、互に相倚頼し、鎌倉に著る。後醍醐帝の未だ事を起さざりしとき、蓋し足利氏の強宗たるを稔聞せり。是を以て、其の倒戈を聞くに及んで、遽に寵爵を許す。其の朝廷を褻玩し、非望を覬覦せしは、帝以て之を啓くあり。而して新田氏の功勞、遠く其上に出づること、則ち二家交訟の日を待つて然る後に之を知る。尊氏の叛逆するに及んで、乃ち義貞の宗族に命じて以て之を防がしむ。而して其の勢既に成り、復た遏むべからず。歎くに勝ふべけんや。

【通釋】しかし頼朝が起つてから、義重は、頼朝と仲が悪かつた。それで大炊助といふつまらぬ役で一生を終つた。その子孫は、上野の一武族といふに過ぎなかつた。所が一方義康の方は兵變に出食はし、急に官爵を進められ、又源義朝と同じやうに熱田大宮司の娘を娶つた。從つてその子孫も頼朝に親しみ昵まれた。又代々北條氏と縁組をして、互に助け合ひ、鎌倉では随分世間に其の家柄を知られて居た。後醍醐天皇が、まだ事を起されなかつた頃から、天皇は既に足利氏が勢力のある一族であることを熟く聞いて居られたのである。だから尊氏が鋒を倒にして北條に叛いたといふことをお聞きになつた時、急に高位高官をお與へになつたのである。して見れば尊氏が朝廷を瀆し玩び、分に非ざる望を得ようとしたその源は天皇が之を導き開いてそのやうにおさせになつたのである。そして新田氏の功勞は遠く尊氏の上にあるといふことは、新田足利雙方の訴へ爭ふ時になつて始めて知られた位である。そして尊氏が謀叛をするやうになつて、義貞の一族に命じてこれを防がしめられた。けれども既に遲く、足利の勢はもう出來上つて居て、今更ら之を止めることも出來なかつた。實に歎息に堪へぬ次第である。

【語釋】 稔聞（熟聞すること。）　○倒レ戈（北條に叛いて官に附いたことをいふ。）

【餘說】 以上第三段。その威望が後世段々と足利氏に劣つて來るに至つたことを叙ぶ。

世或謂、義貞族望不レ及二尊氏一、故不レ能二獨立一、而倚二朝廷一以爲レ重。余以爲不レ然。朝廷倚二新田氏一、非三新田氏倚二朝廷一也。新田氏將帥材武、部屬精勁、非二足利氏所一レ企及一、而數奇敗衄、終至二消亡一者、無二他故一也。天下厭二苦朝政一、而謳二歌武治一。故利二尊氏之營一レ私、而不レ便二義貞之奉一レ公。不レ得レ已而從レ之、勉强而赴レ戰。雜以二衣纓之褊裨、幾甸之召募一、掣肘牽累、動不レ如レ意。爲二之將帥一者、豈不レ難哉。

【訓讀】 世或は謂ふ、義貞の族望は、尊氏に及ばず、故に獨立する能はずして、朝廷に倚りて以て重きを爲すと。余以爲らく、然らず。朝廷、新田氏に倚る、新田氏、朝廷に倚るに非ざるなり。新田氏の將帥の材武なる、部屬の精勁なる、足利氏の企て及ぶ所に非ず。而して數奇敗衄、終に消亡するに至りしは、他の故無きなり。天下、朝政を厭苦して、武治を謳歌す。故に尊氏の私を營むを利として、義貞の公に奉ずるを便とせず。已むを得ずして之に從ひ、勉强して戰に赴く。雜ふるに衣纓の褊裨、畿甸の召募を以てし、掣肘牽累、動もすれば意の如くならず。之が將帥となる者、豈に難からざらんや。

【通釋】 世間でこんなことをいふ人がある。「義貞の家柄人望は尊氏に及ばないから獨立しては仕事は出來ない、

自然朝廷に倚つて動きをなしたのである」と。私は思ふにそれは決してさうではない。朝廷こそ新田氏に倚つてゐられたので、新田氏が朝廷に倚つたのではない。一體新田氏方の大將が材能勇武であつたこと、又新田の部下の強かつたことなどは到底足利氏の追ひつく所ではないのである。それであるのに新田氏は不運で敗れ挫け、結局亡んで終つたが、それは他に理由がある譯ではないのである。當時天下の者は朝廷の政治を倦き嫌らつてゐて、却つて武家政治の方を慕つてゐた。だから尊氏が己の利益を營んで居る遣方の方を都合の善きことにし、義貞が公の爲めに盡すのを都合が惡いとしてゐた。だから義貞に從ふ者は致方なく之に從つてゐるといふ有樣で、いやいやだが勉めて戰爭に出かけたのである。その上に義貞の軍中には公卿上りの副將だの、五畿内の急拵への兵士などが混じつてゐるし、朝廷からは小面倒臭い色々の指圖をされ、兎角思ふやうにならぬことが有り勝ちであつた。だから斯樣な軍隊の大將となるといふことはまことに六かしいことではあるまいか。

【語釋】厭苦朝政（朝廷賞を偏み、内寵が貴であつたからこれを嫌らつたのである）〇衣纓（束帶した公卿を指す。）〇掣肘・牽累（自由にさせぬこと。）

【餘論】以上第四段、足利の興つたのは單に族望のみではなく、人民が既に朝政に倦いて武治を謳歌してゐたことをいふ。

嚮使義貞亦出足利氏所爲、則介冑之族、將雲合霧集而歸之。而足利氏焉能加之。天下之事、皆可圖也。何至困踣如此哉。是其禍福利害、雖三尺童子、亦能知之。義貞寧有不知而終不改其節者、豈非以己任王家倚賴、不忍倍畔也邪。否則源氏之統、

共歸新田氏久矣。是寧可以成敗論也。

訓譯 嚮に義貞をして亦足利氏の爲す所に出でしむれば、則ち介冑の族、將に雲合霧集して之に歸せんとす。而して足利氏焉んぞ能く之に加へん。天下の事、皆圖る可きなり。何ぞ困踣すること此くの如きに至らんや。是れ其の禍福利害は、三尺の童子と雖も、亦能く之を知る。義貞寧ぞ知らざるあらん。而れども終に其の節を改めざりしは、豈に己王家の倚頼に任じ、倍畔するに忍びざるを以てにあらずや。否らざれば則ち源氏の統、其の新田氏に歸する久し。是れ寧ぞ成敗を以て論ずべけんや。

通釋 若しさきに義貞をして矢張り足利氏がやつたやうなことをやらせたならば(朝廷に反抗すること)天下の武人どもは雲霧のやうに群り集つて義貞に歸したであらう。足利氏の力でどうしてこれを壓へることが出來ようぞ。天下を取る位のことは義貞として何の造作もない事であつたのである。どうして金が崎や足羽で困苦して倒れたといふやうなことにならうや。以上のやうな譯で、如何にせば自己の福利となるか、禍害となるかは分り切つてゐて、それは七八歳の童子でもたやすく之を知ることが出來るのである。(朝廷に叛けば自己の福利を來すことが出來たといふこと)義貞程の人がどうしてその理を知らない筈はない。しかるに義貞は最後までその節義を變へなかつたのは、つまり自分は皇室の御依頼を引き受けてゐるからは、到底朝廷に叛くに忍びないと思つてゐたからではないか。もし義貞が皇室に忠義を盡さず、朝廷に叛いてゐたと假定すれば、義貞は屹度天下を取つて將軍になり、久しい前から源氏の流れは、足利に奪はれないで、新田氏に歸して終つてゐたゞらう。だから成功失敗の跡だけで論定することは到底出來ないのである。(成功したから足利が勝り失敗したから新田が劣るといふ

やうにその跡によつて論定することは不可である。）

【語釋】三尺童子（二歳半を一尺とする。だから三尺は七八歳）

【餘說】以上第五段。新田氏が足利氏のやうな遣り方をすれば、或る意味の成功はしたであらうが、それをしない所に新田氏たる所以がある。

且夫將門之有統、非必如帝室也。況足利氏之所謂將軍者、始於其第三世。如其父其祖、皆非受命於正統之朝也。受命於正統之朝、而爲將軍者、乃護良成良二親王。而非必有其實。至於中興總戎之寄、固屬義貞云。余之列敍兩家也、以此。然新田氏起義、由於護良親王。而足利氏謀逆、亦以此爲首。故附見焉。

【通釋】且つ夫れ將門の統ある、必ずしも帝室の如きに非ず。況や足利氏の所謂將軍といふ者は、其の第三世に始まる。其の父其の祖の如き、皆命を正統の朝に受くるに非ざるなり。命を正統の朝に受けて將軍と爲りし者は、乃ち護良・成良二親王なり。而れども必ずしも其の實あるに非ず。中興總戎の寄に至りては、固より義貞に屬すと云ふ。余の兩家を列敍するは、此を以てなり。然れども新田氏の義を起せしは、護良親王に由る。而して足利氏逆を謀るも、亦此を以て首と爲す。故に附見す。

【餘論】それに一體將家の傳統といふものは必ずしも皇室のやうに萬世一系と定まつたものではない。（何人でも

武力で事をなし遂げた者が將軍になれる。足利が將軍になつても別に不思議はない。まして足利氏の所謂將軍といふものは足利の第三世義滿の時に始まつたのである。義滿の父義詮、義滿の祖父尊氏の如きは將軍と謂つてゐたとて、それは皆命を正統の朝廷卽ち南朝から受けたのではないのである。正統の朝廷から命を受けて、將軍になられたのは言はずと知れた護良・成良の二親王であつたのである。けれどもこれは名ばかりで必ずしも實力があつたといふのではない。實際に建武中興の際、軍事の總管の任に當つたといふことになると、固よりそれは義貞に屬して居たのである。余が今新田足利兩氏の事をならべて述べるのはつまり之が爲めである。併し新田氏が義兵を擧げたのは、護良親王に發端してゐる。又足利氏が叛逆を謀つたのも矢張り親王を讒言することから始めてゐる。だから親王の事も新田氏に附け加へて書き記すことゝしたのである。

【評】以上第六段、新田氏は將軍の名は無いが、其の實があつたから成敗を論ぜず、正記に列したのであることをいふ。

新田氏、出於源義家。義家第三子曰義國、敍從五位下、任式部大輔。嘗入朝。途遇右大臣藤原實能。實能從者叱辟之。墮馬。義國隷士怒、焚實能宅。義國坐謫上野、生二子義重・義康。義重食新田郡、義康食足利郡。治承中、平氏失政、源氏競起。義重集兵、據寺尾城。源頼朝起於鎌倉、招之不答。及頼朝定關東、與義康子義兼等、並往歸焉。

賴朝欲娶義重女爲妾。又不肯。遂與有隙。及奏請諸源官爵、義重纔得襲父爵、任大炊助。有七子。其第二義包爲嗣。義包生義房、義房生政氏、政氏生基氏、基氏生朝氏。凡六世、皆襲邑新田。遂以爲氏。旗用白、旗號中黑。脇屋・里見・大館・堀口・鳥山・羽川・山名・桃井・一井・金谷・細谷・江田・大井田・徳川・世良田諸族、皆新田氏自出。分處上野・越後、而皆役屬於北條氏。

[illegible] 新田氏は、源の義家より出づ。義家の第三子を義國と曰ひ、從五位下に敍せられ、式部大輔に任ぜらる。嘗て入朝す。途にして右大臣藤原實能に遇ふ。實能の從者、叱して之を辟けしむ。馬より墮つ。義國の隷士怒り、實能の宅を焚く。義國、坐して上野に謫せられ、二子義重・義康を生む。義重、新田郡を食み、義康、足利郡を食む。治承中、平氏、政を失ひ、源氏競ひ起る。義重、兵を集め、寺尾城に據る。源の賴朝鎌倉より起り、之を招けども答へず。賴朝關東を定むるに及んで、義康の子義兼等と竝に行いて歸せり。賴朝義重の女を娶り妾と爲さんと欲す。肯んぜず。遂に與に隙あり。諸源の官爵を奏請するに及んで、義重纔に父の爵を襲ぐを得、大炊助に任ぜらる。七子あり、其の第二の義包を嗣となす。義包、義房を生み、義房政氏を生み、政氏基氏を生み、基氏朝氏を生む。凡そ六世、皆邑を新田に襲ぐ。遂に以て氏と爲す。旗は白を用ひ、旗號中黑なり。脇屋・里見・大館・堀口・鳥山・羽川・山名・桃井・一井・金谷・細谷・江田・大井田・徳川・世良田の諸族、皆新田

氏より出づ。分れて上野・越後に處りて皆北條氏に役屬せり。

【通釋】新田氏は源義家から出てゐる。義家の第三子を義國といひ、從五位下に敍せられ式部大輔に任ぜられた。あるとき入朝した。途中で右大臣藤原實能に出遇つた。實能のお供が叱りつけて道をよけさせた。そのはづみに馬から落ちた。義國の家來が怒つて實能の家に火をつけて焚いた。それが爲めに義國は卷きぞへで上野に流され、其處で二人の倅義重義康を生んだ。義重は新田郡を領し、義康は足利郡を領して居た。高倉天皇の治承年間平氏が政治を失くぢい、諸方から源氏が爭ひ起つた。義重も兵を集めて寺尾城に立て籠つた。源頼朝は鎌倉から之を呼び寄せたが返答しなかつた。頼朝が關東を平定してから、義重は義康の子義兼などと一緒に頼朝の處へ出かけて行つた。頼朝は義重の娘を娶つて妾にしようとした。義重は又之を斷つた。遂に兩人は仲違ひとなつた。後頼朝が諸々の源氏の者の官爵を奏上してお願ひ申したとき、義重はやつと父義國の爵を襲ぐことが出來て大炊助に任ぜられたに過ぎない。義重には七人の子があつて、その二番目の義包を後嗣とした。この義包が義房を生み、義房が政氏を生み、政氏は基氏を生み、基氏は朝氏を生んだ。凡そ六代で皆その領地新田郡を代々承け繼いでゐた。遂に郡の名を自家の氏として新田氏と稱へた。旗は白旗を用ひ、旗の紋所は中黑(⊖)であつた。脇屋・里見・大館・堀口・鳥山・羽川・山名・桃井・一井・金谷・細谷・江田・大井田・德川・世良田の諸族は皆新田氏から出てゐる。これが分れ分れて上野・越後に居り皆北條氏に從屬してゐた。

【語釋】式部大輔(式部省の次官。)〇寺尾城(上野)〇七子(義俊・義包・義範・義季・經義・義光・義佐。)

北條高時之遷ス二後醍醐天皇ヲ於隱岐ニ一也、楠氏起ス二兵ヲ于金剛山ニ一。高時遣ハシテ二關東ノ將士ヲ一攻メシムレ之ヲ。

朝氏有子、曰義貞、亦在遣中焉。已而城固不拔。東兵多逃亡。義貞召其家宰舟田義昌、語之曰、「源平相制、並護王家、自古之爲然。吾雖無似、忝列源氏冑裔。特以時勢爲北條氏所驅使、遂敵官軍、豈其本心也。吾視高時近狀、亡滅非遠。吾欲歸我國、舉義兵、上以除宸憂、下以興家聲。而非有所受命、不可。安得大塔宮令旨、則吾事成矣。」大塔宮者、帝第三子護良也。

【[illegible]】北條高時の後醍醐天皇を隱岐に遷すや、楠氏、兵を金剛山に起す。高時、關東の將士を遣はして之を攻めしむ。朝氏に子有り、義貞と曰ひ、亦遣中に在り。已にして城固くして拔けず。東兵多く逃亡す。義貞、其の家宰舟田義昌を召し、之に語げて曰く、「源平相制するも、並に王家を護るは、古より之れ然りと爲す。吾れ無似と雖も、忝なくも源氏の冑裔に列る。特に時勢を以て、北條氏の驅使する所となり、遂に官軍に敵す。豈に其れ本心ならんや。吾れ高時の近狀を視るに、亡滅遠きに非ず。吾れ我が國に歸り、義兵を舉げ、上は以て宸憂を除き、下は以て家聲を興さんと欲す。而れども命を受くる所あるに非ざれば不可なり。安くんぞ大塔宮の令旨を得ん。則ち吾が事成らん」と。大塔宮は、帝の第三子護良なり。

【[illegible]】初め北條高時が後醍醐天皇を隱岐の島へお遷しした時、楠正成は、兵を金剛山に舉げた。高時は關東の將士を派遣して、金剛山を攻めさせた。朝氏の倅に義貞といふのがあつたが、その討手の中にゐた。その內に

金剛山の城は、中々堅固で陥らない。關東の兵は逃亡するものが多い。その時、義貞は、自分の家の執事、舟田義昌を呼び寄せて、之に告げていふのに「源氏平氏が互に相抑へ合ひ、相制し合つても、要するにどちらも皇室をお護り申すことは、昔から定まつてゐて、常に然うであつたのである。自分はやくざなものであるけれども、勿體なくも源氏の家筋に列なつてゐる。たゞ時勢が時勢で、不本意乍ら北條氏の爲めに追ひ廻されて、とう〳〵官軍に敵對したのである。これはどうして私の本心であらうや。(不本意千萬なことである。)自分は高時の此の頃の樣子を熟〻察しみるに、もう亡びるのも遠くはあるまい。自分はこれから本國へ歸つて、勤王の義兵を擧げ、上は天子樣の御心配を取り除き、下は我が家の名聲を揚げたいと思ふことである。けれども君の命を受けてやらなければ可けない。何んとかして大塔宮の令旨を得たいものだ。此の令旨さへ頂戴すれば、もう占めたもので、屹度、わが計畫の事は出來上るであらう。」と。大塔宮と申すは、後醍醐天皇の第三の皇子護良親王である。

【註】無似(不肖と同じ。)○時勢(時のなりゆき。)○我國(上野國新田郷。)○大塔宮(護良親王は延暦寺の座主となられ、大塔に爲給ひし故大塔宮と申ダイタフと讀むが可い。増鏡などにはオホタフと讀んでゐるがそれは宜しくないといふことである。)

護良初疾北條氏專權、與帝密謀討滅之。敍二品、任兵部卿。充山門座主、號尊雲、居大塔。世因稱大塔宮。及謀泄、東兵來執帝。護良先諜知之、敎帝逃笠置山、而自與弟宗良將兵、邀擊破賊。已而兵潰、與宗良分路走、匿南都般若寺。笠置既陷、宗良就擒。賊遣兵圍寺。護良潛經函中而免、遂與從士九人、爲道士裝、負笈南走、至十津川、依

土豪戸野兵衞、蓄髮娶兵衞族女。賊聞之、購其頭千金。護良逃入吉野山。明年五月、起兵吉野、據寺爲城。又遣從士赤松則祐、諭其父則村起兵播磨。已而賊將二階堂貞藤等、大兵來攻。護良親戰不支、城遂陷。從士村上義光、僞稱護良死。

【讀方】護良初め北條氏權を專らにするのを疾み、帝と密に之を討滅するを謀る。二品に敍せられ、兵部卿に任ぜらる。山門の座主に充てられ、尊雲と號し、大塔に居る。世因つて大塔の宮と稱す。謀泄るゝに及び、東兵來り帝を執へんとす。護良先づ諜して之を知り、帝をして笠置山に逃れしめ、而して自ら弟宗良と兵に將として、邀へ擊つて賊を破る。已にして兵潰え、宗良と路を分つて走り、南都の般若寺に匿る。笠置陷り、宗良擒に就く。賊人を遣はして寺を圍ましむ。護良經函の中に潛んで免れ、遂に從士九人と、道士の裝を爲し、笈を負うて南走し、十津川に至る。土豪戸野兵衞に依り、髮を蓄へ兵衞の族女を娶る。賊之を聞き、其の頭を千金に購ふ。護良逃れて吉野山に入る。明年五月、兵を吉野に起し、寺に據りて城と爲す。又從士赤松則祐を遣はし、其の父則村を諭して兵を播磨に起さしむ。已にして賊將二階堂貞藤等、大兵來り攻む。護良親ら戰ひ支へず、城遂に陷る。從士村上義光、僞りて護良と稱して死せり。

【通釋】護良親王は初め北條氏が權力を擅にするのをお嫌ひなされ、後醍醐天皇とこつそり之を討ち滅さうと謀られた。そこで親王を二品に敍せられ、兵部卿に任ぜられた。延暦寺の座主に充てられ、尊雲と號し、比叡山の大塔に居られた。故に世間では大塔宮と稱へてゐた。所が謀が泄れて、關東軍が攻め寄せ、天皇を捕へようと

した。護良親王は、先づ廻はし者の手づるで之を知られ、天皇を笠置山にお逃がし申し、そして御自分は弟の宗良親王と共に大將となつて賊を迎へ擊つて、破られた。その内に親王の兵は潰えて、宗良親王と路を別々にして逃げ、奈良の般若寺にかくれられた。軈て笠置も陷落し、宗良親王は生捕にせられ給うた。賊は兵を派遣して般若寺を圍ましめた。護良親王は、御經箱の中に匿れられて免れ、遂に從者九人と山伏のいでたちをし笈を脊負つて、南に走り、十津川まで來られた。土地の豪族戶野兵衞の處をたより、髮を延ばして兵衞の一族の娘を娶られた。北條氏がそのことを聞いて護良親王の首を千金で購ひ求めた。護良親王は再び逃げられ、吉野山に入られた。翌年五月、親王は兵を吉野に起され、寺に立て籠つて之を城となされた。又從士の赤松則祐をお遣はしになり、その父則村を諭して、勤王の兵を播磨に起さしめられた。其の内に賊の大將二階堂貞藤等が大兵をつれて攻めて來た。護良親王は親ら戰はれたが、支へ切れず遂に城は陷落した。從士の村上義光は僞つて自分は護良親王だと言つて死んだ。

護良竟匿高野山谷間、指使山寇、以助楠氏、又奪賊糧餉。義貞頗知其蹤跡、而未詳所在也。故謀於義昌。義昌乃使三十人為山寇狀、而自為亡卒、鬪于山下。山上寇見之下援。義昌生得之、縱其一人、通意於護良。護良素知新田氏名族、大喜即為令與之、權用詔辭。義貞感喜出意外。

【讀方】護良竄に高野山谷の間に匿れ、山寇を指使し、以て楠氏を助け、又賊の糧餉を鈔ふ。義貞頗る其の蹤跡を知れども、未だ所在を詳にせず。故に義昌に謀る。義昌乃ち三十人をして、山寇の狀を爲さしめ、而して自ら亡卒と爲り、山下に鬪ふ。山上の寇、之を見て下り援く。義昌、之を生得し、其の一人を縱つて、意を護良に通ぜしむ。護良、素より新田氏の名族たるを知り、大に喜び、卽ち令を爲りて之を與へ、權に詔辭を用ふ。義貞、感喜意外に出づ。

【通釋】是の時に當つて、護良親王は高野山の谷間に匿れ、山賊を手先きにお使ひになり、楠氏をそれとなくお助けになり、又一方賊徒北條方の兵糧米を奪ひ取つてゐられた。義貞は、親王が此の邊にゐられるだらうと、其の行方を略ぼ知つてはゐたが、さりとて、何處にお在で遊ばすか明かにしてゐなかつた。それで如何したものかと義昌に相談に及んだ。そこで義昌は部下の三十人の兵士に、山賊の姿をさせ、そして自分は落ち延びて行く兵卒となり濟まし、山の下で鬪つた。すると山上の賊共は、此の樣を見て合棒を助けろと、山から下りて援助した。義昌はそれ等賊んものゝ、賊を生け捕りにし、その内の一人を放ち歸へし、義貞の意の在る所を護良親王に通ぜしめた。護良親王は平素から、新田氏が名高い家柄であることを御存知であるから、大層お喜びになり、早速令旨をお爲りになり、これを義貞へお與へになつたが、その令旨は、臨機の御處置で、天子の詔の體を用ひられた。義貞は意外の幸を得て感激し喜んだ。

【語釋】頗知（稍ゝ知る。ほゞ知るの意。）（蹤跡（あとかた。））（權用二詔辭一（元來令旨の體になすべきを、臨機の處置で、天皇の詔書の體を用ひられた。その文次の如し。敷レ化而理二萬國一者、明君之德也、撥レ亂而鎭二四海一者、武臣之節也、頃年北條高時輩、蔑二如朝憲一、恣振二逆威一、積惡之至、天誅已顯、爰欲レ安二宸襟一、將レ起二一擧之義兵一、叡感尤深、抽賞何疎、宜早運二征伐之策一、底レ致二靜謐之功一云々。））（出二意外一（令旨を戴くつもりだつた所が詔であつたので意外だつたのである。））

翌日、稱病東歸、與子義顯・弟脇屋義助等、謀討高時。高時未之覺也。以金剛山久不拔、官軍並起、益調發兵食。新田素多豪戸。因課六十萬錢、限以五日、縱吏卒催迫。義貞曰「奴輩亡狀、敢蹈藉我地。」遣兵捕其吏、梟首里門。高時聞而大怒、下令擊新田氏。

訓讀 翌日、病と稱して東歸し、子義顯・弟脇屋義助等と、高時を討たんと謀る。高時未だ之を覺らざるなり。金剛山久しく拔けず、官軍並び起るを以て、益ゝ兵食を調發す。新田、素より豪戸多し。因つて六十萬錢を課し、限るに五日を以てし、吏卒を縱つて催迫せしむ。義貞曰く「奴輩亡狀、敢て我が地を蹈藉す」と。兵を遣はして其の吏を捕へ、首を里門に梟す。高時聞いて大に怒り、令を下して新田氏を擊つ。

通釋 その翌日、義貞は病氣だと云ひ拵らへて、關東へ歸り、伜の義顯、弟の脇屋義助等と高時を討つ相談をした。高時はそんな事が企てられてゐることにはまだ感づかなかつた。金剛山が久しい間陷らない上に、官軍が諸方に竝び起つて來たので、益ゝ兵士や兵糧を取り立てた。新田郡にはもと〳〵物持ちの家が多かつた。そこで新田へは六十萬錢を振り當て、五日以内に差し出せよと日限を切り、役人兵卒を派して早く出せ〳〵と催促させた。義貞が曰ふのに「下郎ども、不埒千萬な、我が土地を敢て蹈み荒らしくさる」と。そこで義貞は部下の兵をやつて其の役人を引つ捕へ、首を落して村の門に梟した。高時がそれを聞いて大に怒り、命令を下して新田氏を擊つことになつた。

語釋 調發（糧食を調する、兵士を發する。調は取り立てる。發は徵發する。）

新田氏會議。或曰、「拒利根河。」或曰、「赴越後、依其宗族。」義助進而言曰、「二者、皆非計也。坐待强敵、情見形屈、則我兵內潰、一敗塗地。使人曰新田氏殺使者而誅死、死一也、寧死於王事。今雖匹馬單兵、出徇於國中、衆附則進攻鎌倉。不則戰死。孰與坐取誅殺乎。」衆以爲然、乃起兵。大館宗氏・堀口貞滿・岩松經家・里見義氏・江田行義等、百五十騎、推義貞爲將、竪旗于邑生品祠前、以擧義焉。實元弘三年五月八日也。

【訓讀】新田氏會議す。或は曰く、「利根河に拒がん」と。或は曰く、「越後に赴き、其の宗族に依らん」と。義助進んで言つて曰く、「二者、皆計に非ざるなり。坐して强敵を待ち、情見れ形屈せば、則ち我が兵、內に潰え、一敗、地に塗れ、人をして、新田氏、使者を殺して誅死すと曰はしめん。死は一なり、寧ろ王事に死せん。今、匹馬單兵と雖も、出でゝ國中に徇へ、衆附かば則ち進んで鎌倉を攻めん。不らずんば則ち戰死せん。坐して誅殺を取るに孰れぞ」と。衆以て然りと爲し、乃ち兵を起す。大館宗氏・堀口貞滿・岩松經家・里見義氏・江田行義等百五十騎、義貞を推して將と爲し、旗を邑の生品祠前に竪て、以て義を擧ぐ。實に元弘三年五月八日なり。

【通釋】新田氏では諸將が集まつて會議をした。或る者は、利根河で北條方を拒いだら如何だ」と曰ひ、或る者は、「一と先づ越後へ行つて、一族の者に賴るが宜い」と曰つた。義助が進んで曰ふのに「兩說とも善い計ではない。むつとしてゐて强い敵が攻めて來るのを待つてゐて、こちらの實情が顯はれ、形勢が惡くなると、我が兵は

が内輪から潰え、一戦で酷く敗れて終ひ、人に、アノ新田氏は北條のお使者を殺したものだから、誅罰に罹つて死んださうなと曰はれるやうになることだらう。同じ死ぬなら、一層のこと天子様のことの爲に討死したいものだ。これから、一匹の馬、一人の兵も、皆總出で國內を觸れ廻り、兵を集めて軍勢が出來たら進んで鎌倉を攻めよう。若し附くものが無いなら、潔よく討死することにしよう。ぢつとしてゐて殺されるのと何方が宜いか」と。皆のものも贊成し、そこで兵を擧げることゝなつた。大館宗氏・堀口貞滿・岩松經家・里見義氏・江田行義等の百五十騎は、義貞を推して大將となし、旗を領地內にある生品神社の前に押し立てゝ、義の爲めに奮起することゝなつた。これ實に元弘三年五月の八日であつた。

語釋 利根川（武藏上野の界。）○越後宗族（里見・鳥山・田中・大井田・羽川等。）○情見形屈（味方の手薄い内情が暴露し、自然こちらが屈した形勢になる。）

義貞拜讀詔書畢、進陣于笠懸野。比日暮、利根河側塵起、有兵至。可二千騎。衆謂、敵來矣。漸近則越後宗族來援也。義貞驚喜曰「諸君來何速。何以知吾擧義」大井田經隆伏鞍而對曰「今旦、羽黒俊賢來徇國中。是以馳至。在遠境者、明日當至」俊賢、經隆弟、善走者也。

通釋 義貞、詔書を拜讀し畢り、進んで笠懸野に陣す。日暮るゝ比・利根河の側に塵起り、兵の至るあり。二千騎可り。衆謂へらく、敵來ると。漸く近づけば、則ち越後の宗族來り援ふなり。義貞驚喜して曰く、「諸君來

ること何ぞ速なる。何を以て吾が義を擧ぐるを知る」と。大井田經隆、鞍に伏して對へて曰く、「今日、羽黒俊賢往つて國中に徇ふ。是を以て馳せ至る。遠境に在る者は、明日當に至るべし」と。俊賢は經隆の弟、善く走る者なり。

【大意】義貞は詔書を拜讀して後、進んで笠懸野に陣を張つた。日の暮れる頃、利根河の側に塵埃を起て、一團の兵がこちらへやつて來た。その人數は約二千騎ばかりであつた。義貞の方では皆、敵が攻め寄せて來たのであらうと思つた。だん／＼近づいて見ると、それは越後の一族の者が助けに來たのであつた。義貞は驚き喜んで曰ふに「隨分と速くおいで下されたことではある。自分が義兵を擧げたのを何として御存知あつたか」と。大井田經隆が鞍の上で拜伏して曰ふには「今朝、羽黒俊賢がやつて來て、國中へ觸れ廻りました。それで一日數に馳せ參じた譯で御座います。遠方の所の者は明日になれば到着致す筈に御座います」と。俊賢は經隆の弟で走ることの上手な者である。

【字解】詔書（實は護良親王の令旨、假りに詔書と記したもの）〔笠懸野（上野）〕〔今旦（雨森芳洲曰く、「太平記に、去る五日の御使とて、天狗山伏一人、越後國中を一日の間に觸れ廻りて通し候間、夜を日に繼で馳參りたりとあり、實を謂ふに似たり、豈に旦に訓へて、夕に至るの理あらんや」と

明日、越後全兵、及甲斐・信濃諸源、以五千騎至。乃合兵、進入武藏。近國將士、不期而會者、一日二萬人。軍于入間河北。高時聞義貞起事、不以爲意也。發兵十一萬、以族貞國・貞將將之、前後來擊。貞國抵河南、望見新田氏軍甚盛、乃不敢進。而義貞已亂流

而至、大戰于武藏野。兩軍皆東國驍兵、素習騎戰、地亦平曠、射戰罷、卽相馳突。凡三十餘合、乃交退。旦日、又戰于久米河。每戰鎌倉兵、死傷輒倍。高時使弟泰家以生兵數萬來援。夜抵其軍。義貞不察、侵晨又戰、不利而退。

訓讀 明日越後の全兵、及び甲斐・信濃の諸源、五千騎を以て至る。乃ち兵を合せ、進んで武藏に入る。近國の將士期せずして會する者、一日に二萬人。入間河の北に軍す。高時、義貞事を起すと聞けども、以て意と爲さず。兵十一萬を發し、族貞國・貞將を以て之に將とし、前後來り擊つ。貞國、河南に抵り、新田氏の軍甚だ盛なるを望見し、乃ち敢て進まず。而して義貞、已に流を亂つて至り、大に武藏野に戰ふ。兩軍皆東國の驍兵、素より騎戰に習ひ、地も亦平曠なり。射戰罷み、卽ち相馳突す。凡そ三十餘合、乃ち交〻退く。旦日、又久米河に戰ふ。每戰、鎌倉の兵、死傷輒ち倍す。高時、弟泰家をして、生兵數萬を以て來り援けしむ。夜、其の軍に抵る、義貞察せず、晨を侵して又戰ひ、利あらずして退く。

通釋 翌日、越後の兵全體と、甲斐・信濃の諸〻の源氏の率ゐる五千騎とがやつて來た。そこで兵士を皆一緒にして、進んで武藏に入つて行つた。近國の將士で、約束しないのに來り會する者、一日に二萬人からであつた。それが皆入間河の北に陣取つた。高時は義貞が事を起したと聞いたけれども、意に介しなかつた。兵十一萬人を繰り出し、一族の貞國・貞將を以て大將となし、義貞の前後から擊つて來た。貞國は入間河の南に來て、新田氏の軍勢が甚だ盛なのを望み見て、押しきつて進まうとしなかつた。けれどもその內に早や義貞は河を橫切り渡つ

て來て、大に武藏野で戰つた。兩軍とも皆東國の强い兵で、皆平素から馬上の戰には慣れ切つてゐるし、そこへ以て來て土地も平らかで廣い。弓矢の戰が一と渡り濟んでから、雙方馳せ突いた。肉迫戰が凡そ三十餘合もあつて、そこで兩軍とも交〻退却した。翌日又久米河で戰つた。どの戰でも、鎌倉の死傷が、義貞のそれに倍してゐた。高時は弟の泰家をして新手の兵數萬を率ゐて來り援けさせた。それが夜敵方に着いた。義貞はそんな新手の兵が敵方に增したことに氣がつかず、曉方かけて又戰ひ、勝たずして退却した。

【語釋】諸源（武田・一條・小笠原等。）○五千騎（諸源の兵數を示す。越後の全兵至る、及び諸源五千騎を以て至るといふ意。）○近國將士（下野の小山、下總の千葉等。）○入間河（武藏）○前後來擊（金澤貞將は義貞の背後から、櫻田貞國・長崎高資等が前から攻めた。）○久米河（武藏）

泰家益輕新田氏曰、「敵中必有斬致義貞者。」皆釋甲飮酒。相模人三浦義勝、心素嚮義貞、率兵六千來屬之。義貞禮而詢計焉。義勝曰、「方今天下分崩、勝敗互變。而天命所歸、終有在焉。公幸幷僕兵、可以一戰。」義貞曰、「以疲兵當新勝之衆、若何。」曰、「戰勝而將驕、卒懈者敗。泰家之謂也。敗兆已備。不足畏耳。詰朝之事、僕請爲公先焉。」且日、卷旗徐進、敵相指語曰、「嚮聞三浦氏應徵而至。是也。」俄而義貞等、翼而進、三面掩擊。泰家軍大敗、貞將一軍、與小山・千葉氏戰于鶴水、亦大敗、皆走入鎌倉。八州豪傑響應、

爭歸義貞。

訓讀 泰家益〻新田氏を輕んじて曰く、「敵中必ず斬つて義貞を致す者あらん」と。皆甲を釋き酒を飲む。相模の人三浦義勝、心素より義貞に嚮ふ。兵六千を率ゐて來りて之に屬す。義貞、禮して計を詢ふ。義勝曰く、「方今、天下分崩し、勝敗互に變ず。而も天命の歸する所、終に在る有り。公幸に僕の兵を幷せ、以て一戰す可し」と。義貞曰く、「疲兵を以て新勝の衆に當る、若何」と。曰く、「戰勝ちて、將驕り卒懈る者は敗るとは、泰家の謂なり。敗兆已に備はる。畏るるに足らざるのみ。詰朝の事、僕請ふ、公の先と爲らん」と。旦日、旗を卷き、徐に進む。敵相指語して曰く、「嚮に三浦氏、徵に應じて至ると聞く。是れなり」と。俄にして義貞等、翼して進み、三面より掩ひ擊つ。泰家の軍、大に敗れ、貞將の一軍、小山・千葉氏と鶴水に戰ひ、亦大に敗れ、皆走つて鎌倉に入る。八州の豪傑嚮應し、爭うて義貞に歸す。

通釋 泰家は益〻新田氏を輕んじて曰ふのに「敵中に屹度義貞を斬つて首を持つて來る者が有るだらう」と。皆高を括つて、鎧を脫ぎ捨てゝ、酒を飲んでゐた。相模の人、三浦義勝は平素から義貞に心を寄せてゐた。此の度の舉兵に、彼は兵六千人を率ゐて來り屬いた。義貞は之を禮遇して、計略を相談に及んだ。義勝が曰ふのに「今日天下は分れ〱になつて崩れ、勝敗何れとも定まらず、互に勝つたり負けたりして居ります。しかし天命の落ちつく所は、結局決まつて居ります。何卒公には、拙者の兵をお併せ下され、一つ戰つて御覽ぜられよ」と。義貞が曰ふには「此方は疲れた兵士、敵は新たに勝ち誇つて居る兵、此の敵に當るには如何したもので御座らう」と。義勝が曰ふのに「戰爭に勝つて、大將が驕り兵卒が怠けてゐると、結局戰に敗れて終ふといふことがあり

ますが、これは今の泰家がことで御座らう。敵が敗れる兆は充分具はつて居ります。畏るゝには足りませぬ。明朝のことは、何卒拙者が公の先陣となり申しませう」と。翌日、義勝は旗を卷いて、しづ〳〵と進んで行つた。敵の方では、指ざし語つて曰ふに「三浦氏が徵に應じて來るといふことを聞いて居つた。正しくそれだ」と。その内に急に義貞が兩翼となつて進んで來て、三方から擊つてかゝつた。泰家の軍は大負けとなり、貞將の一軍は小山・千葉氏と鶴水で戰つて、これも亦大に敗れ、皆逃げて鎌倉に入り込んだ。關八州の豪傑は響の如く應じ、爭うて義貞に附いた。

〔語釋〕新勝之衆（勝つたばかりの景氣の好い兵。）○戰勝而將驕卒懈（史記項羽本記に出づ。）○卷旗徐進（敵方の軍勢と見破られぬやうにし、如何にも徵に應じて行くが如く見せかける。）○翼而進（左右に鳥の翼のやうになつて進む。）○小山・千葉（小山秀朝。千葉貞胤。）○鶴水（武藏。鶴見とも書く。）

義貞進至關戶。兵凡十二萬騎、分爲三軍三道攻鎌倉。大館宗氏・江田行義、自極樂寺、堀口貞滿・大島守之、自巨福呂坂、義貞・義助自率諸將、自假粧坂、縱火五十餘所而進。鎌倉震駭。而北條氏見兵猶十餘萬、分拒三道。義貞・貞滿進入山內。而宗氏戰死、其兵皆卻。

〔通釋〕義貞進んで關戶に至る。兵凡そ十二萬騎、分つて三軍となし、三道より鎌倉を攻む。大館宗氏・江田行義は、極樂寺より、堀口貞滿・大島守之は、巨福呂坂より、義貞・義助、自ら諸將を率ゐて、假粧坂より、火を五

十餘所に縱つて進む。鎌倉震駭す。而して北條氏の見兵、猶ほ十餘萬あり。分つて三道を拒ぐ。義貞・貞滿、進んで山内に入る。而して宗氏戰死し、其の兵皆卻く。

通釋 義貞は進んで闕戸に至つた。その頃には兵凡そ十二萬騎から有つて、それを分けて三軍となし、三道から鎌倉を攻めることになつた。大館宗氏・江田行義は極樂寺から、堀口貞滿・大島守之は兒囊坂から、義貞・義助は自ら諸將を率ゐて假粧坂から、五十餘ケ所へ火をかけて進んで行つた。鎌倉は大に恐れ驚いたけれども北條氏の方にも有合せの人數がまだ十餘萬から有つた。それを分けて三道を拒がせることにした。義貞・貞滿は進んで山内に入り込んだ。そして大館宗氏は討死して、其の部下は皆退卻した。

語釋 闕戸（武藏）○極樂寺（相模鎌倉の西北口、極樂寺のこと。）○兒囊坂（鎌倉の東の口。）○假粧坂（鎌倉の東北の口。）○分拒三道（金澤越後將監・北條基時は假粧坂に、大佛貞直は極樂寺坂に、赤橋守時は兒囊坂に拒いだ。）○山内（鎌倉）

義貞以選兵二萬、乘夜赴之。則敵大兵據海岸、樹柵、兵艦列其南、以備傍射。義貞下馬、免冑向海、拜曰、「天子爲逆臣所遷、越在西海。臣義貞不忍坐視、提兵討賊。伏願海神眷臣忠義、退潮以開道。」因釋所佩金裝刀、投之海中。比曉、潮大退、兵艦皆漂去。義貞大喜、麾衆而進。諸軍從之、直入府中、乘風縱火。烟焰漲天。義貞縱兵鏖戰。高時擧族遂伏誅。自擧兵至此、蓋十五日矣。義貞因居鎌倉、誅餘黨、撫新附、威振關東。

【[illegible]】義貞、選兵二萬を以て、夜に乘じて之に赴く。則ち敵の大兵海岸に據り、柵を樹て、兵艦、其の前に列ない、以て傍射に備ふ。義貞馬を下り、冑を免ぎ海に向ひ、拜して曰く、「天子、逆臣の遷す所と爲り、西海に越在す。臣義貞、坐視するに忍びず、兵を提げて賊を討つ。伏して願はくは、海神、臣の忠義を容み、潮を退け以て道を開け」と。因つて佩ぶる所の金裝の刀を釋き、之を海中に投ず。曉くる比、潮、大に退き、兵艦皆漂ひ去る。義貞、大に喜び、衆を麾いて進む。諸軍、之に從ひ、直に府中に入り、風に乘じて火を縱つ。烟焰、天に漲る。義貞、兵を縱つて鏖戰す。高時族を擧げて遂に誅に伏す。兵を擧げしより此に至るまで、蓋し十五日なり。義貞因つて鎌倉に居り、餘黨を誅し、新附を撫し、威、關東に振ふ。

【[illegible]】義貞は選り拔きの兵二萬人を率ゐて、夜の暗につけ込んで進んで出た。行つて見ると敵の大兵は海岸に陣取り、柵を樹てゝそれを守り、軍艦がその南の方にヅラリと列らんで、横から射つ構へであつた。(義貞は横から射たれては思ふやうに活動が出來ぬし、潮が滿ちゐては進む道がないので) 義貞は馬から下りて、冑を免ぎ、海に向ひ拜して曰ふには「天子樣は逆臣高時の爲めに遠方へ遷され給ひ、遠く西海隱岐の島に在はします。臣義貞は此の態をヂットして視てゐられませぬので、兵を連れて賊を討つて居りまする。何卒海神に於かせられては、臣の忠義にお目をかけられ、此の海の潮を退け給ひ、我等の爲に道をお開き下されんことを、伏して願ひ奉る」と。そこで自ら佩んでゐた黄金作りの刀を脫して、之を海の中へ投げた。曉け方になつて、潮は大に退いて、軍艦は皆沖の方へ漂ひ去つて終つた。義貞は大に喜び、軍勢を指麾して進んで行つた。諸々の軍は之に從ひ、直ぐさま鎌倉へ入り込み・風に附け込んで火をかけた。烟や焰が天に漲り渡つた。義貞は兵を縱ちやつて、皆殺しにする迄は止めない勢で戰つた。かくて高時は一族誅戮せられた。義貞が兵を擧げてから此に至るまで、凡そ十

五日であつた。そこで義貞は鎌倉にゐて、北條の殘黨を誅し、新らたに降附した者を慰撫し、その威力は關東に振うた。

語釋 赴レ之（極樂寺坂に赴く。）〇越在（遠く離れて在すこと。）〇金裝刀（黄金で仕立てた佩刀、それを海神に獻ずるのである。）〇潮大退（恐らく潮の退く時を見計らひ義貞が部下を激勵する一策であらう。信長が熱田で祠官に甲を龕中で鳴らさせたり、秀吉が嚴島で百錢を投げて祝した類であらう。）〇府中（鎌倉）

先是、天子在伯耆、聞京師平、將還闕。或諫曰、雖京師平、金剛山攻兵、猶滿畿內。且諺曰、八州敵海內、鎌倉敵八州。承久之役、誅伊賀光季甚易、而與東兵鬪、乃取敗衄。今天下十得一二耳。宜暫居此、以覘東國之變。諸公卿皆然之。帝不聽而發、至兵庫、得義貞捷書。上下大喜。詔以義貞爲左馬助、義助爲兵庫助、賜使者爵。建武元年、擧族入朝。義貞叙從四位上、任左兵衞督、兼播磨守、領上野守護。義助任兵部少輔、充武者所頭人、領駿河守護。義顯領越後守護、並宿衞京師。

訓讀 是より先き、天子伯耆に在りて、京師平ぐと聞き、將に闕に還らんとす。或る人諫めて曰く、「京師平ぐと雖も、金剛山の攻兵猶ほ畿內に滿つ。且つ諺に曰く、八州海內に敵し、鎌倉八州に敵す」と。承久の役に、伊賀光季を誅するは甚だ易かりしが東兵と鬪ひて、乃ち敗衄を取る。今天下十に一二を得るのみ。宜しく暫く此

に居り、以て東國の變を視るべし」と、諸公卿皆これを然りとす。帝聽かずして發し、兵庫に至り、義貞の捷書を得。上下大に喜ぶ。詔して義貞を以て左馬助と爲し、義助を兵庫助と爲し、使者に爵を賜ふ。建武元年、族を擧げて入朝す。義貞を從四位上に叙し、左兵衛督に任じ、播磨守を兼ね、上野守護を領せしむ。義助を兵部少輔に任じ、武者所の頭人に充て、駿河守護を領せしめ、義顯には越後守護を領せしめ、並に京師に宿衛せしむ。

【通釋】これより先き、後醍醐天皇は伯耆にお在しまし、京都が既に平定したとお聞きになり、御所へお歸還なされようとした。或る人が諫めて曰ふには「京都は平定しましても金剛山を攻めてゐる寄手はまだ畿内に充ち滿ちてゐます。それに諺にも申してゐますやうに、關八州は天下に匹敵し、鎌倉は關八州に匹敵すと。(ですから鎌倉が滅べば問題はありませんが、京都が平定したとてオイソレとお歸りになるのは早過ぎます。)むかし承久の役で伊賀光季を誅したことは譯のないことでありましたが、關東と闘つて見ると直ぐに慘敗して終ひました。(京都を陷れるのは譯はないが、關東には迚も叶はぬことをいふ)今京都が平定したといつても天下を十とすればその一二を得た位のもので御座います。暫時此の伯耆にお滯りなされて、關東に變事の起るのを視ておゐでなさるのがお宜しいと思ひます」と。諸公卿も皆その說に贊成した。しかし天皇はお聽き入れにならず、出發なされ兵庫まで來られると、義貞が鎌倉に捷つた報知がお手に入つた。上も下も大喜びであつた。詔して、義貞をば左馬助となし、義助を兵庫助となし。その使者にも位階を賜はつた。かくて建武元年、義貞は、一族を全部引きつれて入朝した。義貞を從四位上に叙せられ、左兵衛督に任じ、播磨の守護をも兼ね、又上野の守護をも行はしめられた。義助を兵部少輔に任じ、武者所の頭人に充てられ、駿河の守護を行はしめられ、義顯には、越後の守護を行はしめられ、いづれも皆そのまゝ京都にゐて護衛をなさしめられた。

語釋 或諫（或人は勘解由次官光守。）○伊賀光季（當時京師の守護であつた。上皇は三浦胤義、藤原秀康に命じて誅せしめられた。）

足利尊氏者、義兼遠孫也。地望素著。佐攻京師、首蒙寵爵、官祿皆遠出新田氏之上。遂陰蓄異圖、而忌義貞及皇子護良。初帝之歸闕、護良居志貴山、近畿兵爭歸之。將率以入朝、而不果。

訓讀 足利尊氏は、義兼の遠孫なり。地望素より著はる。佐けて京師を攻め、首として寵爵を蒙り、官祿皆遠く新田氏の上に出づ。遂に陰に異圖を蓄へ、而して義貞及び皇子護良を忌む。初め帝の闕に歸るや、護良、志貴山に居り、近畿の兵、爭うて之に歸す。將に率ゐて以て入朝せんとして、果さず。

通釋 足利尊氏は義兼の遠い子孫である。その門地名望は素より世に著はれてゐた。源忠顯・赤松則村等を助けて、京都の六波羅を攻め、眞先きに立派な爵位を頂戴し、官位も俸祿も皆遙に新田氏の上に出てゐた。彼は遂に内々謀叛の計畫をなし、一方義貞と皇子護良親王とを忌み嫌らつてゐた。初め後醍醐天皇が宮闕へお歸りになつた時、護良親王は志貴山に居給ひ、畿内の兵は皆爭つて親王に附いた。それで親王は此等の兵を率ゐて、入朝せられようとしたが、それは果されなかつた。

語釋 義兼遠孫（義兼の七世の孫。）○寵爵（義貞よりも先きに從四位下左兵衛督に任ぜられ昇殿を許された。）

帝使參議藤原淸忠就言曰、「天下既定。汝將何爲。盍削髮復舊。」護良對曰、「高時雖伏

誅、餘黨未殲。宜嚴武備以絕覬覦。且陛下之德、微臣之謀、以致有今日。而足利尊氏攘爲己功。彼觀其志、有不可測者。不及其力微而除之、復生一高時也。臣聞、佛有二道。曰攝受、曰折伏。願陛下任臣以戎事。臣將爲陛下折伏焉。帝不懌。勉從之、拜爲征夷大將軍。而不許誅尊氏。

【訓讀】帝、參議藤原淸忠をして就いて言はしめて曰く、「天下既に定る。汝、將に何をか爲さんとする。盍ぞ髮を剃り舊に復せざる」と。護良對へて曰く、「高時、誅に伏すと雖も餘黨未だ殲きず。宜しく武備を嚴にし、以て覬覦を絕つべし。且つ陛下の德、微臣の謀、以て今日あるを致す。而るに足利尊氏、攘んで己の功と爲す。彼れ其の志を觀るに、測るべからざるものあり。其の力微なるに及んで之を除かざれば、復一の高時を生ぜん。臣聞く、佛に二道あり、攝受と曰ひ、折伏と曰ふと。願はくは陛下、臣に任ずるに戎事を以てせよ。臣將に陛下の爲めに折伏せんとす」と。帝懌ばず。勉めて之に從ひ、拜して征夷大將軍と爲す。而して尊氏を誅するを許さず。

【通譯】後醍醐天皇は參議の藤原淸忠をして、護良親王のところへ行つて、言はしめられて、仰せらるゝに「天下は既に平定した。其の方は何を爲ようとて、斯くは兵を集むるぞ。何故髮を剃り落して舊のやうに僧とはならぬぞ」と。護良親王は之に對へて申さるゝに「成程高時は誅に伏しましたけれども、その殘黨はまだ悉く滅んでは居りませぬ。武備を嚴重にして、彼等の覬覦の念を絕つた方が宜しいと存じます。それに一體今日陛下が京

都に御還御になり、賊徒一と先づ平定致しましたのは、全く陛下の御德と、私の謀とに因つてで御座います。而るにかの足利尊氏はその手柄を攘んで、自分の功となして居ります。どうもあの男の志を觀まするに、何を仕出かすか、測ることの出來ないところが御座います。彼の力の微弱である間に、之を取り除いて置きませぬとまた一の高時を生ずる事になりまする。私は聞いて居りますが、佛に二つの道があつて、一は攝受と曰ひ、一は折伏と申して居りまする。何卒願はくは陛下、私に軍事一切をお任かせ下さりませ。私はこれから、陛下の爲に折伏を仕り度う御座ります一と。帝は此の言葉をお聞きになつて御氣には入らなかつた。併し勉めて其の言にお從ひになり、護良親王を拜して征夷大將軍に爲された。けれども尊氏を誅することはお許しにはならなかつた。

語釋 攘（ぬすむ。他から來たのでぬすむ。孟子に隣の雞を攘むことが出てゐる。）○攝受（セフジユ、柔和忍辱の貌を現し、慈悲を以て先きとすること。）○折伏（シヤクブク、威猛忿怒の相を現はし、刑罰を以て旨とす、攝受も折伏も皆濟度の方便である。）○勉（止むを得ず勉めて。）

護良具騶從入朝、赤松則村爲先驅焉。尊氏深嫉之、乃結於帝寵姬藤原氏、陰謀排陷焉。而護良不察。輒欲除尊氏、多蓄死士、密徵兵。尊氏得其檄、上變告大將軍反、欲廢帝立其子興良爲帝。藤原氏自傍贊之。帝怒。

通釋 護良、騶從を具へて入朝し、赤松則村、先驅と爲る。尊氏深く之を嫉み、乃ち帝の寵姬藤原氏に結び、陰に排陷を謀る。而して護良察せず。輒ち尊氏を除かんと欲し、多く死士を蓄へ、密に兵を徵す。尊氏其の檄を

得て、變を上り、大將軍反し、帝を廢して、其の子興良を立て、帝と爲さんと欲すと告ぐ。藤原氏、傍より之を賛す。帝怒る。

【通釋】護良親王はお供廻りをそろへて入朝せられ、赤松則村がお先ばらひとなつた。尊氏は深く親王の爲され方を妬み憎み、そこで天皇の寵愛になつてゐる局と腹を合はせ、内々に護良親王を押しのけ、罪に陷れようと謀つた。而し親王は此のことをお氣附きにはならなかつた。何んとかして尊氏を取り除かうと思召し、多く命知らずの人を隱くまつてゐられ、こつそり兵を徴集してゐられた。尊氏はその徴兵の觸れ文を手に入れ、變事を天皇に訴へ出て、「親王は陛下を廢して、御自分の御子興良親王を立てゝ天子にされようとしてゐます」などゝ告げた。寵姬藤原氏も傍から、その事は事實で御座りませうなどゝ賛成した。天皇は御腹立ちになつた。

【語釋】藤原氏（右近衛中將公廉の女、名は廉子、三位の局。）

十月、伏甲召護良、執之、囚于宮中。護良憤怨、因所識宮人、上書曰、臣以罪蘗、敢訴冤枉。唯陛下憫察之。臣夙憤武臣專恣、釋法服、被戎衣、寧受世譏、而爲君父忘軀、在廷臣子、莫敢效力、而臣獨張空拳、以抗强敵、賊之耳目、集於臣身、購臣以萬戶、臣晝伏夜行、匿山谷、踐霜雪、殆死而復生者數焉。思運籌遂得底誅夷之績、而不圖獲罪於此、仰將訴天、日月弗照不孝之子。俯將哭地、山川弗載無禮之臣、父子義絕、乾坤共

棄。臣不敢復有望於世也。儻宥死刑、削籍歸佛、臣終身毋悔。抑申生死而晉國亂、扶蘇刑而秦世傾。聖明盍延古以鑑今焉。涕隕心惛、不終所欲言。書入。莫敢奏達者。諸從護良終始者、皆被誅、赤松則村亦褫其守護職。

【訓譯】十月、甲を伏せ護良を召し、之を執へて、宮中に囚す。護良憤怨し、識る所の宮人に因り、上書して曰く「臣、罪槩を以て、敢て寃枉を訴ふ。唯だ陛下、之を憫察せよ。臣、夙に武臣の專恣を憤り、法服を釋き、戎衣を被り、寧ろ世の譏を受くるも、而も君父の爲めに軀を忘る。在廷の臣子、敢て力を效す莫く、而して臣獨り空拳を張り以て强敵に抗す。賊の耳目、臣が身に集り、臣を購ふに萬戸を以てす。臣、晝は伏し夜行き、山谷に匿れ、霜雪を踐み、殆んど死して復生くること數〻なり。思を焦し籌を運し、遂に誅夷の績を底すを得たり。而るに圖らざりき、罪を此に獲んとは。仰いで將に天に訴へんとするも、日月、不孝の子を照さず。俯して將に地に哭せんとするも、山川、無禮の臣を載せず。父子義絶えて、乾坤共に棄つ。臣、敢て復世に望あらざるなり。儻し死刑を宥し、籍を削り佛に歸せしめば、臣、終身悔ゆる毋からん。抑も申生死して晉國亂れ、扶蘇刑せられて秦世傾く。聖明盍ぞ古を延き以て今を鑑みざる。涕隕ち心惛み、言はんと欲する所を終へず」と。書入る。敢て奏達するもの莫し。諸〻の護良に從ひて終始する者、皆誅せられ、赤松則村も亦其の守護職を褫はる。

【通釋】十月、兵を隱くして置いて、護良親王をお召し出しになり、その入朝せらるゝ所を執へて、宮中に拘留された。護良親王は大に憤り怨み、知り合ひの宮女を通して、天皇に上書して申さるゝには、「臣は囚人の身

を以ちまして、一體なら大に謹愼して差し控へる所で御座いませうが、それが無實の罪で有る以上、敢てこの無實を君に訴へ奉る次第で御座います。唯だ陛下には御憐みを垂れさせ給ひ、事情をよく御斟酌下し賜らんことを願ひ上げ奉ります。臣は早くより武臣の氣儘を憤りまして、袈裟の衣を脱ぎ棄てて、甲冑を身に着け、一層のこと世間の譏りを受けましても關はず、君父の爲めに我が身を忘れて力を盡しました次第に御座います。一體ならば、平素君の爵祿を食んでゐる朝廷の家來共は、此の際大に働らかねばなりませぬのに、誰れこそ君國の爲めに力を盡す者もなく、たゞ臣獨り空手を張つて、强い敵に當りました。賊共の耳や目は、皆臣の身に集まりまして、萬戸侯を懸けて臣を購つた程で御座います。臣は晝間は隱れ伏し、夜になると人目を忍んで行き、或は山谷の間に匿れて艱難し、或は霜や雪を踐んで辛苦し、もう此度こそは駄目だと思ひ、それでも再び生きることを得ましたやうなことが度々で御座いました。色々思を碎き苦しめ計策を運らしまして、とう／＼賊徒を誅し平げる功績を擧げることを得ました。而るにこれは亦案外千萬な事で御座いまする、此の功に對して斯くの如く臣が罪を得ませうとは。仰いで天に訴へようと致しましても、日月は此の不孝の子を照しては呉れませぬ。俯して地に向つて哭かうと致しましても、山川はこの無禮の臣を載せては呉れませぬ。親子の義は絕えて終ひ、天地ともに臣を見棄てゝ、終ひました。臣は此の上敢て復び世の中に望みは有りませぬ。もしも臣の死刑をお許し下され、皇族の籍を削つて佛門に歸することをお許し下さらば、臣は終生心殘りは御座いませぬでせう。抑々昔、唐土の晉に於きまして、かの太子申生が死にましてからは、さしもの晉國も亂るゝに至りました、また秦の扶蘇が刑せられてからは、秦の榮えし世も傾くに至りました。陛下の明智を以てして、何故、これ等昔の例をお延き遊ばして、現今を御覽なさるゝことが無いので御座いませうぞ。さても／＼殘念なことで、

渉が落ち、心がくらみ、申上げたい事は澤山に御座いまするが、十分に申上げられませぬ」と。此の上書が宮女の手によつて宮中に入つた。けれども誰れこそ、これを天皇にお屆けする者は無かつた。かくて、護良親王に從つて終始行動を一つにしてゐた所の多くの人達は皆誅せられ、赤松則村も亦その守護職を褫奪された。

語釋　罪纍（罪をうけて、纍紲に在る身。）○法服（佛法の服、つまり袈裟。法服を隠き、甲冑を身につければ破戒の僧となり、世の譏を受ける。）○耳目集（護良親王を鵜目鷹目で搜すので賊が聽き耳を立て、目を光らして親王に集める。）○購以二萬戸一（親王の首を持參する者には萬戸侯を與へるといふ懸賞づき。）○晝伏夜行（笠置山落城の後に吉野や高野を轉々なされたことをいふ。）○誅夷之績（夷は平げる。北條氏を平げられたことをさす。）○獲二罪於此一（此は以上述べた功績を承ける。これだけの功績があるのに、それに對する報償は、斯く罪を獲ることであつたのかと案外に思召さるゝのである。）○仰將レ訴レ天云々（天地に自分の立場を哭訴しようと思つても、公明な日月山川は自分を照し載せて呉れない。之を蔽ふものがあるから。斯樣な凶人に陷れられたのも畢竟この公明を蔽ふ者の爲めであらう。天地は君父と見て解する。）○不孝無禮（親王御自身を卑下して申さるゝ。）○申生死云々（晉の獻公の嫡子で、父の妾驪姬の讒言に遭うて殺された。そして驪姬の子奚齊が立つ。かくて晉國は大に亂るゝに至つた、左傳僖公四年に詳かに出てゐる。）○扶蘇刑云々（秦の始皇帝の崩じた後、丞相李斯、宦官趙高と相謀して、太子扶蘇を殺し少子の胡亥を立てた。二世皇帝である。併し政を失ひ、天下大に亂るゝに至つた。史記始皇本紀に詳かである。）○延レ古（晉・秦の古例を引いて。）○終始者（變らずに常に附きそうてゐたもの。）

十一月、勅附護良於足利直義、徙之鎌倉、穿窖于二階堂谷、幽之、縱一宮人侍焉。二年七月、北條時行作亂、襲鎌倉、直義敗走。臨走、召淵邊義博曰、「時行不足患。可患者兵部卿。宜乘此時除之」義博往窺窖中、護良方焚燭誦經。顧而蹶起曰、「汝欲殺我耶」前奪其刀。義博斫其膝、踣之、跨胸刺吭。護良縮頭嚙其鋒、鋒折。拔貳刀、刺心二。乃絕。年二十八。義博欲以首示直義、見其不瞑而含鋒、棄去。所侍宮人收葬之、將歸奏狀。

而帝已命尊氏東伐時行。尊氏遂據鎌倉、自稱將軍、奪新田氏邑在關東者、以分予將士、抗疏罪狀義貞。

【訓讀】十一月、勅して護良を足利直義に附し、之を鎌倉に徙し、窖を二階堂谷に穿つて、之を幽し、一宮人を縱して侍せしむ。二年七月、北條時行、亂を作し、鎌倉を襲ふ。直義敗走す。走るに臨み、淵邊義博を召して曰く、「時行は患ふるに足らず。患ふ可き者は兵部卿なり。宜しく此の時に乘じて之を除くべし」と。義博往いて窖中を窺ふ。護良方に燭を焚き經を誦す。顧みて蹶起して曰く、「汝我を殺さんと欲するか」と。前んで其の刀を奪はんとす。義博其の膝を斫りて、之を踣し、胸に跨り、吭を刺す。護良、頭を縮め、其の鋒を嚙む。鋒折る。貳刀を投いて、心を刺すこと二たびす。乃ち絶ゆ。年二十八なり。義博首を以て直義に示さんと欲す。其の瞑せずして鋒を含むを見て、棄て去る。侍する所の宮人、之を收葬し、將に歸つて狀を奏せんとす。而して帝已に尊氏に命じて、東、時行を伐たしむ。尊氏遂に鎌倉に據り、自ら將軍と稱し、新田氏の邑、關東に在る者を奪ひ、以て將士に分予し、抗疏して義貞を罪狀す。

【通譯】十一月、勅して護良親王を足利直義にお渡しになり、之を鎌倉へ移し、穴藏を二階堂谷に掘り造らへ、そこに親王を押込め、一人の宮女を許してお側にかしづかせた。二年七月、北條時行が亂を起して鎌倉を襲うた。直義は不意を打たれて敗れ逃げた。逃げる時に、直義は淵邊義博を召んで曰ふのに「時行などは案ずべき程の者ではない。心配すべき者は兵部卿護良親王である。よい機會だから、此の際に乘じて、之を亡き者にした方がよからう」と。義博は、そこで二階堂谷へ往つて窖の中を覗いて様子を見た。護良親王は丁度燭を焚いてお經を誦

んでゐられた。義博の覗いたを振り顧み給ひ、跳ね起きて仰せらるゝに、「汝は予を殺さうと思つてゐるな」と、前んで義博の刀を奪はうとなされた。義博は親王の膝の所を切りつけて、之を打ち仆し、親王の胸のところに打ち跨がり、吭を突き刺さんとした。護良親王は首をお縮めになり、そのきつ先きをお噛みになつた。刀のきつ先きは折れた。そこで義博は差し添へを拔いて胸を二度程突き刺した。親王は息絶えてお亡くなりなされた。その時御年齢二十八歳であつた。義博は親王の首を直義に示さうと思つた。しかし親王が目をつぶらないで、口には折れた鋒を含んでゐられるので、如何にも物凄く、そのまゝ棄てゝ去つた。御側に侍してゐた宮女が御遺骸を收めて葬り、京都へ歸つて、事情を天皇に申上げようとした。この時既に天皇は尊氏にお命じになつて、東方時行を征伐せしめられた。尊氏はとう〳〵そのまゝ鎌倉に立て籠り、自ら將軍と稱し、關東に在る新田の領分を奪ひ取つて、自分の部下の將士に分け與へ、書面を差し出して義貞の罪を數へ立てた。

註釋 二階堂谷(鎌倉) ○宮人(南の方といふ。) ○心(胸のこと。)

義貞乃上書曰、「嚮者、當天下大亂、乘輿播遷、楠正成等豪傑並起、相共勤王。而足利尊氏首鼠兩端、觀望勝敗。自非賊軍失利、蓋不肯降也。功微賞多。遂冀非望、害臣之忠義、欲詭言陷之。臣以五月八日、起兵上野。彼以其七日、佐攻六波羅。而曰臣聞京師之復、乃肯起兵、以欺罔天聽。其罪一也。臣以五月廿二日、率諸軍、誅高時。而彼之兒

子、率従士百餘人、以六月三日入鎌倉、而曰臣頼其兒子以成功。其罪二也。

【訓讀】義貞乃ち上書して曰く。「嚮に天下大に亂れ、乘輿、播遷するに當り、楠正成等の豪傑並び起り相共に王に勤む。而るに足利尊氏は首鼠兩端、勝敗を觀望す。賊軍利を失ふに非ざるよりは、蓋し肯て降らざりしならん。功微にして賞多し。遂に非望を覬ひ、臣の忠義を害し、讒言もてこれを陷れんと欲す。臣五月八日を以て兵を上野に起す。彼れ其の七日を以て、六波羅を佐け攻む。而るを臣京師の復するを聞いて、乃ち肯て兵を起すと曰ひ、以て天聽を欺罔す。其罪一なり。臣五月廿二日を以て、諸軍を率ゐて、高時を誅す。而して彼の兒子、從士百餘人を率ゐ、六月三日を以て、鎌倉に入る。而るを臣其の兒子に頼りて以て功を成すと曰ふ。其の罪二なり。

【通釋】そこで義貞は上書していふに「この前天下が大に亂れ、陛下が都を落ち給ひ、遠方へお遷り遊ばされた時に當りまして、楠正成などの豪傑どもが、並び起り、協同して王事に勤め勵みました。しかるに彼の足利尊氏は貳た股心を持つて、勝ち負けの樣子を觀て、勢のよい方へ屬くといふ態度で御座いました。もしも賊軍が負けませんでしたなら、彼は決して此方へ降參しなかつたで御座いませう。(官軍が勝つたから降參したので御座います。)彼の手柄は少いのに、御褒美だけは多く戴きました　それが增長しまして、遂に非分の望を願ひ、臣の忠義を妬んで、色々詐りの言葉で臣を罪に陷れようと思つて居ります。臣は、五月八日に兵を上野で擧げました。彼れ尊氏は、五月七日に、官軍を助けて六波羅を攻めました。(尊氏の方が一日早く御座いましたが、何分にも京都と上野で離れて居りまするから、尊氏の動靜など臣に分りやうはありませぬ。)それだのに尊氏は臣が京都の回復されて官軍の景氣が善いのを聞いて、兵を起したなどと申し立て、陛下の御耳を欺き申して居ります。こ

れが彼の罪の一つで御座います。臣は、五月二十二日に諸軍を引きつれて高時を誅戮致しました。而して彼の倅義詮が從士僅に百人餘りを率ゐて鎌倉に入りましたのは六月三日で御座います。（つまり戰爭の濟んだ後にやつて來たので御座います。）それを臣が彼の倅の力で成功したやうに申し立てゝ居ります。これ彼の罪の二で御座います。

語釋　播遷（隱岐に遷され給ひしをいふ。）○首鼠兩端（鼠は性質疑ひ多く穴を出る時首を左右に振り進んだり退いたりする所から二股のことに首鼠兩端といふ。）

彼在輦下、擅誅親王之卒。其罪三也。征夷之任、在兵部卿親王。而彼輒掠其號。其罪四也。矯稱管領、務張威福。其罪五也。中興之業、雖因天運、抑兵部卿之謀策居多。而彼百方讒構、遂抵流謫。其罪六也。陛下心㧞兵部卿之自艾。而彼修私仇、辱之牢狴。其罪七矣。直義乘亂、遂俾刃於兵部卿。大逆無道。其罪八矣。此八罪者、天地所不容。措而不論、百敗將隨而至。後噬臍無及。願陛下照鑑之、速下明詔、以誅伐尊氏兄弟。廷議疑未決。會護良侍婢至奏狀。而尊氏反迹、遂暴於天下。

通釋　彼れ輦下に在りて、擅に親王の卒を誅す。其罪三なり。征夷の任は、兵部卿親王に在り。而るに彼れ輒ち其の號を掠む。其罪四なり。矯つて管領と稱し、務めて威福を張る。其の罪五なり。中興の業は、天運に因

ると雖も、抑兵部卿の謀策多きに居る。而るに彼れ百方讒構し、遂に流謫に抵らしむ。其の罪六なり。陛下、心に兵部卿の自ら艾むるを期す。而るを彼れ私仇を修め、之を牢狴に辱しむ。其の罪七なり。直義、亂に乘じ、遂に刃を兵部卿に傅す。大逆無道。其の罪八なり。此の八罪は、天地の容れざる所、措いて論ぜざれば、百敗將に隨つて至らんとす。後臍を噬むも及ぶなけん。願はくは陛下、之を照鑒し、速に明詔を下し、以て尊氏兄弟を誅伐せよ」と。廷議疑つて未だ決せず。會〻護良の侍婢至り狀を奏す。而して尊氏の反迹、遂に天下に暴る。

【通釋】尊氏は、御膝元に居つて、自分勝手に護良親王の兵卒を殺しました。これは彼の罪の三で御座います。征夷大將軍の職任は兵部卿護良親王の御手に在りました。而るに彼は遠慮なく、その稱號を掠め取りました。これ彼の罪の四で御座います。詐つて管領と稱し、出來る限り賞罰の權を擅にして、威勢を張つて居ります。これ彼の罪の五で御座います。建武中興の大事業は勿論御運の善かつたことにもよりまするが、もと〳〵兵部卿護良親王の謀のおよろしかつたことに因る所が多いので御座います。而るに尊氏は色々手を換へ品をかへて讒言し、遂に鎌倉へ流罪といふことにまで至らしめました。これ彼の罪の六で御座います。陛下には、御心の中で護良親王が御自發的に改心遊ばされるのを御待ちなされて居られました。而るに尊氏は自分の恨みを報いん爲めに、親王を穢はしい獄屋に押し込めて、辱しめました。これ彼の罪の七で御座います。直義は、時行の亂に乘じて、遂に刃を護良親王につき刺し、宮を弑し奉りました　實に大逆無道なことで御座います。これ彼の罪の八で御座います。以上の八罪は天地の許さざるところで御座いまして、これをこのまゝにして御處分なされませぬと、多くの失敗が次ぎ〳〵と起つて來ることになるで御座いませう。後日殘念に思召すとも到底追ひつかぬことで御座います。何卒陛下には彼の罪跡を御覽遊ばされて、一刻も早く、詔をお下しなされ、尊氏兄弟を誅伐なされま

すやう、お願ひ申上まする」と。朝廷ではこの上書を疑はれ決着しなかつた。丁度その處へ護良親王に侍してゐた宮女が歸つて來て、事情を申上げた。そして愈々尊氏の謀叛の行跡も天下に隱れもないやうになつた。

【語釋】讒構（讒言して無きことをあるやうに言ひ立てること。）○自艾（艾は治むること。）○牢狴（牢も狴も獄屋。）○傳（つかさ す。）○噬臍（わが臍は噬めない、即ち及ばないこと。）

十一月、乃下詔討尊氏。徵兵六萬、陛授節刀於義貞、以總諸將。奉皇子尊良、自海道進。忠房親王以一軍、自山道進。義貞常掄精兵七千、爲中堅。而栗生顯友・篠塚伊賀・畑時能・亘忠景・由良具滋・長濱顯寬等十六騎、最精悍、善毆擊、同其徵號、進退與俱。義貞至於矢矧河。河東皆足利氏兵。義貞召顯寬視津。還報曰、津有三處。然前岸峻絕、敵攢鏃守之。不若誘敵使渡而蹙之水也。義貞從之。

【訓讀】十一月、乃ち、詔を下して尊氏を討たしむ。兵六萬を徵し、節刀を義貞に陛授し、以つて諸將を總べしむ。皇子尊良を奉じて、海道より進む。忠房親王、一軍を以て山道より進む。義貞、常に精兵七千を掄んで、中堅と爲す。而して栗生顯友・篠塚伊賀・畑時能・亘忠景・由良具滋・長濱顯寬等の十六騎、最も精悍にして、毆擊を善くし、其の徵號を同じくして、進退與に俱にす。義貞、矢矧河に至る。河東は皆足利氏の兵なり。義貞顯寬を召し津を視しむ。還り報じて曰く、「津三處あり。然れども前岸峻絕、敵、鏃を攢めて之を守る。敵を誘ひ渡らしめて、之を水に蹙むるに若かざるなり」と。義貞之に從ふ。

【通釋】そこで十一月に詔を下して、尊氏を討伐せしめられた。兵六萬人を徴發し、節刀を義貞に、御廏の階の下でお授けなされ、諸將を總統せしめられた。義貞は皇子尊良親王を奉戴して、東海道から進んで行つた。忠房親王は、別に一軍をつれて東山道から進まれた。義貞は平素強い兵七千人を選んで中堅としてゐた。そして栗生顯友・篠塚伊賀・畑時能・亘忠景・由良具滋・長濱顯寛等十六騎は一番勇氣があつて強く、弓を挽くことが上手で劍を擊つことが得意であつて、その紋所も同じやうにし、進むにも退くにも行動を倶にした。義貞は、三河の矢矧河まで來た。河の東は、皆足利の兵であつた。義貞は顯寛を呼んで渡場を見に行かせた。還つて來て報告して曰ふには「渡場は三箇所あります。しかし向ふ岸は絕壁でけはしく、而も敵兵が鏃をそろへて、之を守つて居ります。ですからこれは敵をおびき出し、河を渡らせて終つて、之を水の中へ追ひ詰める樣にしたら宜いと思ひます」と。義貞は之に從つた。

【語釋】節刀（卷一の首篇に出ゆ。）○彀擊（弓を引き劍をうつ。）

賊分兵左右渡、戰且卻、終縱萬騎、自中渡犯義貞。義貞乃以中堅迫擊破之。賊退陣鷺坂、又進擊破之。足利直義以二萬騎來援、盛兵手越河。義貞望之曰「敗卒在後、必先走。餘衆不能支也」。戰而逮夜。夜遣彍騎、循間道、薄射其後隊。後隊擾走。諸營遂大潰、走返鎌倉。尊氏大窘、欲削髮出降。未果也。義貞引降附數萬、至伊豆府、遲山道軍

者數日。賊軍復振。凡數十萬人。直義出拒箱根。

【訓讀】賊、兵を分ち、左右より渡り、戰ひ且つ卻き、遂に萬騎を縱ち、中より渡り、義貞を犯す。義貞乃ち中堅を以て、迫り撃つて之を破る。賊退いて、鷺坂に陣す。又進み撃つて之を破る。足利直義、二萬騎を以て來り援け、兵を手越河に盛にす。義貞之を望みて曰く、「敗卒後に在り。必ず先走らん。餘衆支ふる能はざるなり」と。戰つて夜に逮ぶ。夜、彍騎を遣はし、間道に循ひ、薄つて其の後隊を射しむ。後隊攪れ走る。諸營遂に大に潰え、走つて鎌倉に返る。尊氏大に窘み、髮を剃り出で降らんと欲す。未だ果さず。義貞、降附の數萬を引き、伊豆の府に至り、山道の軍を遲つこと數日。賊軍復振ふ。凡そ數十萬人。直義出でゝ箱根に拒ぐ。

【通釋】案の定、敵は兵を分け、左右の渡場から渡つて來て、戰つたが、又退卻をし、終に一萬騎を縱つて、中央の渡場から又渡つて來て、義貞を犯した。そこで義貞は中堅の軍を引きつれ、迫り撃つて之を破つた。賊は退卻して、鷺坂に陣取つた。義貞は又進み撃つて、之を破つた。足利直義は、二萬騎を率ゐて助けに來り、兵を手越河原に並べて優勢を示した。義貞は、之を望み見て曰ふのに「負けた兵卒が後方にゐる。屹度それ等の兵卒が眞つ先きに逃げ出すだらう。さうなれば他の軍勢も到底支へ切れないであらう。」と。義貞は戰つてゐる內に夜になつた。夜騎射隊を派遣して、裏道を傳つて敵に迫り、敵の後詰を射たせた。後詰は亂れて逃げ出した。他の陣營も遂に大に敗れ皆走つて、鎌倉に返つた。尊氏は大に困惑し、髮を剃つて僧となり、降參しようと思つた。併しまだ、剃らずにゐた。義貞は、降參して來た所の新附の兵數萬を率ゐて伊豆の國府に至り、東山道から來る官軍を數日間待つてゐた。その間に賊軍は、再び盛になつた。賊軍は凡そ數十萬人であつた。直義は出て來て、箱

根に拒いだ。

語釋 鷺坂・手越河（駿河）

十二月十二日、義貞令義助奉皇子向竹下、而自攻箱根、登高覽視將士、將士皆奮戰。直義兵沮靡、殆不能支。而尊氏以十餘萬出竹下。竹下官軍七千人、其隷皇子者、先進先走。義助以手兵代之、格鬪交退。其子義治年甫十三、與三騎陷賊中、撤號被髮、與賊偕退。義助還營、不見義治。復進索之、直冒賊軍。軍潰走。義治知父來救也、佯呼賊兵「盍返戰。」一賊從之。比及我軍、義治目從騎、斬其賊、歸獻義助。義助大喜、乃退息。遣鹽谷高貞等更進。高貞等叛降賊、亂射官軍。

通釋 十二月十二日、義貞、義助をして皇子を奉じ竹下に向はしめ、而して自ら箱根を攻む。高きに登り將士を覽視するに、將士皆奮戰す。直義の兵沮靡し、殆んど支ふる能はず。而して尊氏十餘萬を以て竹下に出づ。竹下の官軍七千人、其の皇子に隷する者、先づ進み先づ走る。義助、手兵を以て之に代り、格鬪して交退く。其の子義治、年甫めて十三、三騎と賊中に陷り、號を撤し髮を被り、賊と偕に退く。義助、營に還り、義治を見ず。復進んで之を索め、直に賊軍を冒す。軍潰え走る。義治、父の來り救ふを知るや、佯り賊兵を呼ぶ、「盍ぞ返り

戰はざる」と。二賊之に從ふ。我が軍に及ぶ比、義治、從騎に目して、其の賊を斬らしめ、歸つて義助に獻ず。義助大に喜び、乃ち退き息ひ、鹽谷高貞等を遣はし更に進ましむ。高貞等叛いて、賊に降り、官軍を亂射す。

【通釋】十二月十二日、義貞は、義助をして皇子尊良親王を奉じて竹下に向はしめ、自分は箱根を攻めた。高い所へ登つて、部下の將士を見下ろすと將士は、皆奮戰してゐる。直義の兵はその勢にひるんで殆んど支持することが出來ない。そして一方尊氏は、十餘萬人を率ゐて、竹下に打つて出た。竹下の官軍は七千人で、その內の親王に屬する兵が一番に進み出て一番に逃げた。義助は、手勢を率ゐて、之に代り鬪ひ合つたが、かはるがはる退卻した。義助の倅義治はその時やつと十三であつたが、三騎と一緒に賊の手中に陷つたので、旗記しをはづし、髮をうつさばいて、賊と與に退却した。義助の陣屋に還ると義治が見えない。そこで再び進んで之を搜し、いきなり賊軍に衝きかゝつた。賊軍は潰え走つた。義治は父が助けに來たことを知つて、伴つて賊兵を呼びとめ、「なぜ引き返して、戰はないのだ」と。すると二人の賊兵はその言に從つて引き返した。我が官軍のゐる所まで來た頃に義治は、その供の騎に目配ばせして、二人の賊兵を討ち取らせ、その首を歸つて父義助に獻じた。義助は非常に喜び、そこで一と先づ退卻して、休息し、鹽谷高貞等を遣つて更に進ましめた。所が高貞等は叛いて賊に降參し、あべこべに官軍を滅多矢鱈に射ちまくつた。

【語釋】竹下（駿河）

義助夜退、欲合於義貞。義貞方克直義、竢明旦進。舟田義昌在前軍、聞直義陣中傳

呼將軍捷也。乃巡視我諸營、帷幕儼在、而無復一人。走告之義貞。義貞默然。曰「是或降或逃也。吾少退、捉其逃者復戰。」乃下山而西。兵僅五百人。聞尊氏兵數十萬充牣伊豆府。栗生顯友・篠塚伊賀、據鞍顧衆曰「一騎當千、諸君之謂矣。」乃先衆而前。賊爭薄義貞。伊賀蹴而仆之、立斬九人。餘賊不敢薄。

【讀方】義助、夜退き、義貞に合せんと欲す。義貞、方に直義に克ち、明旦を竢つて進まんとす。舟田義昌、前軍に在り、直義の陣中に、將軍捷つと傳呼するを聞く。乃ち我が諸營を巡視すれば、帷幕儼に在りて、復一人なし。走つて之を義貞に告ぐ。義貞默然たり。曰く、「是れ或は降り或は逃るゝなり。吾れ少しく退き、其の逃るる者を捉めて復戰はん」と。乃ち山を下りて西す。兵僅に五百人。尊氏の兵數十萬、伊豆の府に充牣すと聞く。栗生顯友、篠塚伊賀、鞍に據り衆を顧みて曰く、「一騎當千とは諸君の謂なり」と。乃ち衆に先だちて前む。賊爭うて義貞に薄る。伊賀蹴て之を仆し、立ちどころに九人を斬る。餘賊敢て薄らず。

【通譯】義助は夜の間に退いて、義貞と一緒にならうと思つた。義貞は、丁度直義に勝つた所で、明朝を待つて進まうとしてゐた。舟田義昌は、前方の軍にゐたが、直義の陣中で將軍が勝つたと、口々に呶鳴つてゐるのを聞いた。そこで我が陣屋を見廻つてみると陣幕はきちんとしてゐるが人は一人も中に居らない。そこで走つて、之を義貞に告げた。義貞は默りこくつてゐた。やがて曰ふには「これは恐らく降參したり逃げたりした爲めであらう。自分はこれから退卻して、逃げる奴をとゞめ、もう一度戰つて見よう」と。そこで箱根山を下り西へ退卻

した。その兵は僅かに五百人であつた。所が尊氏の兵數十萬が伊豆の國府に一ぱいに充滿してゐると聞いた。すると栗生顯友・篠塚伊賀が鞍に據つて軍勢を顧みて曰ふには「一騎當千といふ言葉があるがそれは諸君の事だ」と勵ました。そこで栗生・篠塚兩人は衆に先き立つて進んで出た。賊は爭つて義貞に迫つて來た。伊賀は之を足で蹴倒し、卽座に九人を討ち取つた。其の勢に恐れて他の賊どもは、迫らうとしなかつた。

義貞行收散兵、得二千人。至天龍河、造浮橋濟軍。軍悉濟、義貞乃與義昌濟。有叛者、潛絕其絚。僕牽馬前、輒陷。義昌曰「誰援之者」。顯友重鎧沒水、兩手提人馬、達前岸。時橋陷丈餘。義貞・義昌相挈而跳、既濟。或議撤橋沮追兵。義貞曰「我且爲之。彼寧不能爲哉」。存橋而去、屯矢矧驛。兵多道亡。宇都宮公綱勸其退阻洲股。義貞從之。朝廷亦以近畿皆叛、四窺京師、急召還義貞。

訓讀 義貞行くゆく散兵を收め、二千人を得たり。天龍河に至り、浮橋を造り、軍を濟す。軍悉く濟り、義貞乃ち義昌と濟る。叛く者あり、潛に其の絚を絕つ。僕、馬を牽いて前み輒ち陷る。義昌曰く、「誰か之を援くる者ぞ」と。顯友重鎧、水に沒し、兩手に人馬を提げ、前岸に達す。時に橋陷ること丈餘。義貞・義昌相挈へて跳り、既に濟る。或人橋を撤して追兵を沮まんと議す。義貞曰く、「我れすら且つ之を爲す。彼れ寧ぞ爲す能はざらんや」と。橋を存して去り、矢矧驛に屯す。兵多く道より亡ぐ。宇都宮公綱、其の退いて洲股に阻むことを勸む。

義貞、之に從ふ。朝廷も亦近畿皆叛き、京師を四窺するを以て、急に義貞を召還せり。

通釋 義貞は途中で散らばつた兵をまとめて、二千人を得た。天龍河まで來ると舟で浮き橋を造つて軍隊を渡した。軍隊が全部渡つて終つてから、義貞は、義昌と一緒に渡つた。すると謀叛する奴が居てこつそり舟橋の綱を切つた。義貞の下僕が、馬を牽ゐて進み、うつかり水の中へ落ち込んだ。義昌が曰ふのに「誰か下僕を救ふ者はないか」と。栗生顯友が重い鎧を着たまゝ水の中へ飛び込み兩手で下僕と馬とを提げて向ふ岸に達した。その時切られた舟橋が岸から一丈餘も離れてゐた。義貞は義昌と手を取り合つて飛び越し、河を濟つて終つた。すると或人が橋を取りのけて追手を喰ひ止めてはと發議した。義貞が曰ふには「我々でさへ拵へたのである。彼がどうして出來ないといふことがあらうぞ」と。橋をそのまゝにしてそこを立ち去り、矢矧の驛に屯した。兵は途中から隨分逃げた。宇都宮公綱は、退卻して洲股で喰ひ止めてはと勸めた。義貞は之に從つた。朝廷でも、近畿地方が皆叛いて終ひ、四方から京都をねらつてゐるので、急に義貞をよび還した。

語釋 天龍河（遠江）

義貞乃還京師、部署諸將、自以萬人守大渡。義助與權中納言藤原公泰・僧文觀等、以七千人守山崎。江田行義以五千備應援。延元元年、正月、行義擊丹後賊兵于峯堂、走之。而尊氏已將數十萬抵大渡。義貞豫撤橋板、截桁不殊。樹柵水中、令兵呼于

岸曰「丹後之兵、我已殲之矣。公盍亦來決死。」賊兵怒、造筏以渡、遇柵而止。我軍亂射。賊紛擾、筏壞而溺者數百人。又令呼于橋曰「舟筏毋益。請由此來」賊千餘人爭進。桁斷、皆溺。尊氏遂休戰不進。

訓譯 義貞乃ち京師に還り、諸將を部署し、自ら萬人を以て大渡を守る。義助、權中納言藤原公泰・僧文觀等と七千人を以て山崎を守る。江田行義五千を以て應援に備ふ。延元元年正月、行義、丹後の賊兵を峯堂に擊つて、之を走らす。而して尊氏、已に數十萬に將として大渡に抵る。義貞豫め橋板を撤し、桁を截つて殊たず。柵を水中に樹て、兵をして岸に呼ばしめて曰く、「丹後の兵、我れ已に之を殲せり。公盍ぞ亦來つて死を決せざる」と。賊兵怒り、筏を造りて以つて渡り、柵に遭うて止る。我が軍亂射す。賊紛擾し、筏壞れて溺るゝ者數百人なり。又橋に呼ばしめて曰く、「舟筏益なし。請ふ、此より來れ」と。賊千餘人爭ひ進む。桁斷ち、皆溺る。尊氏遂に戰を休めて進まず。

通譯 そこで義貞は京都に還つて諸將を組み分けして自分は一萬人を率ゐて大渡を守つた。義助は、權中納言藤原公泰、僧文觀等と一緒に七千人を率ゐて山崎を守つた。江田行義は、五千人を率ゐて應援隊に備へて置いた。延元元年正月、行義は丹後の賊兵を峯堂に擊つて之を走らせた。一方尊氏は既に數十萬人の大將となつて大渡まで來た。義貞は、前以て橋板をはづし橋桁を切つて、而も切り落さずに置いた。(上に乘つかると直ぐ落ちる樣にして置いた)しがらみを川の中に立てならべ兵をして岸の上で大聲で呼ばしめて曰ふには「丹後の兵は早や之を

皆殺にして終つた。なぜ貴公等はやつて來て死を決しないのか。」と。賊兵が怒つて、筏を造つて渡つたが、しがらみに出遇つて動かなくなつた。それをわが軍で矢鏃に射かけた。賊は騒ぎ亂れ、筏もこはれ、溺死した者が數百人からゐた。そこで又橋の上で叫ばせていふに「舟も筏も何の役にも立たぬ。さあこゝから來い」と。賊千餘人我れ勝ちに橋から進んで來た。橋桁が切れて、皆水に落ちて溺死した。尊氏は遂に戰爭をやめて進まなかつた。

【語釋】大渡・山崎（山城）〇峯堂（京都の西）〇不殊（殊は分離して切り離さない）

已而賊兵二萬、來攻山崎。公泰・文觀隷士爭降賊。賊即入。義貞聞山崎軍破、賊兵指闕、則馳援義助、將與俱奉帝於叡山。賊將細川定禪將兵六萬尾之。義顯以三千騎不告而返、射戰久之。度義貞已至闕、則大呼衝敵。大友氏泰・宇都宮公綱、新降在賊中、識義顯、欲必獲之。義顯奮戰八合、被大創數十、流血淋漓。還至紫宸殿前。帝親臨勞之、遂與義貞・義助俱扈乘輿、赴叡山。

【通釋】已にして賊兵二萬、來つて山崎を攻む。公泰、文觀の隷士、爭つて賊に降り、賊即ち入る。義貞、山崎の軍破れ、賊兵闕を指すと聞き、則ち馳せて義助を援け、將に與に俱に帝を叡山に奉ぜんとす。賊將細川定禪、兵六萬に將として之に尾す。義顯、三千騎を以て、告げずして返り、射戰すること之を久しうす。義貞已に闕に至るを度り、則ち大に呼んで敵を衝く。大友氏泰、宇都宮公綱、新に降つて賊中に在り。義顯を識り、必ず之を獲

んと欲す。義顯奮戰八合・大創數十を被り、流血淋漓たり。還つて紫宸殿の前に至る。帝親ら臨んで之を勞し、遂に義貞、義助と、倶に乘輿に扈し、叡山に赴く。

【通釋】その内に賊兵が二萬人からやつて來て山崎を攻めた。公泰や文觀の部下の士は爭つて、賊に降り、賊兵は早速京都に入り込んで終つた。義貞は、山崎の軍が敗けて賊兵が御所をさして進んでゐると聞いたので驅けて、義助を援けに行き、一緒に天皇を比叡山におつれ申さうとした。賊將細川定禪が兵六萬に將となつて、その後を尾けて來た。義顯は三千騎をつれて義貞に告げないで引かへし、矢の射かけ合ひをしばらくやつてゐた。義貞が御所へ着いた頃を見計らつて義顯は大聲で呼ばはり乍ら敵中に衝き込んだ。大友氏泰・宇都宮公綱等は今は降參して、賊軍中にゐた。義顯の顏を見知つてゐて、是非之を討ち取らうとした。義顯は奮戰八回數十個所に大創をし、盛んに血潮が流れ出た。義顯は還つて紫宸殿の前まで來た。すると天皇は御自身そこへ御出ましになつて、義顯を御慰勞遊ばされ、それから義貞は義助とともに天皇のお供をして比叡山に往つた。

細川定禪來據園城寺、相持未戰。會陸奧守源顯家入援。新田氏族在東國者、相率從之。大館氏明、宗氏子也、從至近江、攻拔一城、遂來會於義貞。顯家欲休馬而後戰。氏明曰、我馬遠來。休則足重、不可輙用。不若今夜直襲園城寺、出其不意。義貞然之、卽夜出兵唐崎、黎明、與諸將將騎六萬、圍園城寺。賊自門中叢槍拒之。亘忠景奪其

十六槍、畑時能擧足、蹋門扉倒之。我軍入而縱火、走定禪、斬首七千餘級。顯家乃退。義貞亦欲收兵。舟田經政扣馬說曰、兵利在乘勢。賊兵一敗、魄褫氣沮。我因躡之、乘勝連進、可以終獲其渠魁也。義貞曰、然。卽率三萬騎追之、遇險逼擊、遇夷遙射。賊不得返戰。伏尸狼藉。餘衆走歸京師、合於尊氏軍。

（口語譯）細川定禪來つて園城寺に據り、相持して未だ戰はず。會々陸奥守源顯家入り援く。新田氏の族、東國に在る者、相率ゐて之に從ふ。大館氏明は、宗氏の子なり。從つて近江に至り、攻めて一城を拔き、遂に來つて義貞に會す。顯家、馬を休めて後戰はんと欲す。氏明曰く、「我が馬遠くより來る。休まば則ち足重く、輒く用ふべからず。今夜直に園城寺を襲ひ、其の不意に出づるには若かず」と。義貞、之を然りとし、卽夜、兵を唐崎に出だし、黎明、諸將と騎六萬に將として、園城寺を圍む。賊門中より槍を叢めて之を拒ぐ。亘忠景、其の十六槍を奪ふ。畑時能、足を擧げて、門扉を蹋み之を倒す。我が軍入りて火を縱ち、定禪を走らす。首を斬る七千餘級。顯家乃ち退く。義貞も亦兵を收めんと欲す。舟田經政、馬を控へて說いて曰く、「兵の利は勢に乘ずるに在り。賊兵一たび敗れ、魄褫はれ氣沮む。我れ因つて之を躡し、勝に乘じて連に進まば、以て終に其の渠魁を得べきなり」と。義貞曰く、「然り」と。卽ち三萬騎を率ゐて之を追ひ、險に遇へば逼り擊ち、夷に遇へば遙に射る。賊返り戰ふを得ず。伏尸狼藉たり。餘衆走つて京師に歸り、尊氏の軍に合す。

〔通釋〕賊軍の細川定禪がやつて來て園城寺に立て籠り、官軍と睨み合ひでまだ戰爭までにならなかつた。丁度そこへ陸奥守源顯家が援けに來た。新田の一族で東國に居る者が互に兵を率ゐて、之について來た。大館氏明は、宗氏の子である。矢張りついて近江まで來て、一城を攻め落し、更らに進んで義貞と會合した。顯家は、馬を休ませてから戰はうと思つた。氏明が曰ふには「我等の馬は遠方から來たので隨分疲れて居ります。若しも休まうものなら足が重くなつて、容易に役立ちますまい。今夜直く園城寺を襲撃して、敵の不意に出た方が得策でせう」と。義貞も尤ものことゝして、その夜すぐ兵を唐崎に繰り出し、夜明け方、諸將と與に、六萬騎を率ゐて園城寺を取り圍んだ。賊は門の內側から槍ぶすまを作つて、之を拒いだ。亘忠景はその槍を十六本奪ひ取つた。畑時能は、足を擧げて、門の扉を蹴り、これを押し倒した。わが軍は門內に入つて火をかけ、定禪を走らせた。首を七千餘級も斬り取つた。そこで顯家は退卻した。義貞も亦兵を取り纏めようと思つた。舟田經政が義貞の馬を抑へて說いていふには、「兵の利は勢につけ込むのに在ります。賊兵は一度負けて魂を奪はれ氣がひるんで居ります。そこを利用してこちらが後から追ひかけ、勝につけ込んでグン〳〵進んだなら、結局その大將をも討ち取ることが出來ませう」と。義貞が曰ふのに「さうだ」と。卽座に三萬騎を率ゐて、之を追つかけ、嶮岨な處に來ると敵に逼つて擊ち、平地に來ると、遠方から射ちかけた。賊は引きかへして戰ふことは出來なかつた。死骸は横はつて亂雜であつた。殘りの軍勢は走つて、京都に歸り、尊氏の軍と一緒になつた。

〔語釋〕拔二城一（六角氏賴の觀音寺城を陷れた。）〇義レ槍（槍先きを集めて突き出した所謂槍ぶすまのこと。）〇夷（平地）

義貞進上二華頂山一、望二尊氏軍一。尊氏軍充二塞京師一、不レ知二其幾千萬一也。義貞計レ以レ寡當レ衆、

不可徒戰而勝。乃令我兵略相識面者、毎五十爲伍、卷旗撤號、爲敗卒狀、混入彼軍、待戰而起。部二千騎遣之。已而兩軍接戰、六十餘合。我軍毎勝、以至日暮。所遣二千騎、在賊軍中、揚旗竝起。賊軍大驚擾亂、自相擊刺、遂大潰奔。我軍乘勝追之、短兵急接。尊氏迫蹙、欲自刃者三。義貞自桂河還、陣京師。其兵四散鹵掠、在者亦疲。賊軍返襲。不支而退。舟田義昌等戰死之。會山道兵失戰期者還至。諸將復議戰、夜下山陣。

義貞進んで華頂山に上り、尊氏の軍を望む。尊氏の軍、京師に充塞し、其の幾千萬なるを知らざるなり。義貞計るに、寡を以て衆に當るには、徒に戰ひて勝つべからず。乃ち我が兵の略面を相識る者をして、五十毎に伍と爲し、旗を卷き號を撤し、敗卒の狀を爲して、彼の軍に混入し、戰を待つて起らしめんとし、二千騎を部して之を遣はす。已にして兩軍接戰すること、六十餘合。我が軍、毎に勝ち、以て日暮に至る。遣はす所の二千騎、賊軍の中に在りて、旗を揚げて竝びに起る。賊軍大に驚き擾亂して、自ら相擊刺し、遂に大に潰え奔る。我が軍、勝に乘じて之を追ひ、短兵急に接す。尊氏迫蹙、自刃せんと欲すること三たび。義貞、桂河より還り、京師に陣す。其の兵四散鹵掠し、在る者も亦疲る。賊軍返り襲ふ。支へずして退く。舟田義昌等戰つて之に死せり。會、山道の兵、戰期を失ふ者還り至る。諸將復戰を議し、夜、山を下りて陣す。

義貞は進んで、華頂山に上り、尊氏の軍勢を望み見た。尊氏の軍勢は、京都に一杯に充ち塞がり、其の

數幾千萬あるか分らぬ位であつた。義貞は考へて見るのに、小勢で多勢に向ふのには無暗に戰つて見たとて勝てる譯のものではない。そこで味方の軍中で、ほゞ顏を見知つて居るもの同志を五十人づゝ一組として、旗を卷きしるしをはづし、敗軍の卒の樣な風をして賊軍中にまぐれ込み、戰の始まるのを待つて、不意に起らせようといふので二千騎を手分けして派遣した。その内に兩軍擊ち合ふこと六十餘度。わが軍はどの戰にも勝つて、遂に日暮時になつた。先きに派遣した二千騎は賊軍中で新田の旗を押し立てゝ一齊に起つた。賊軍は非常に驚いて亂れくづれ、同志討をして遂に潰え奔つた。わが軍は勝につけ込んで之を追ひ、刀劍で急に詰め寄せた。尊氏は追ひつめられて三度も自殺しようと思つた。義貞は桂河から引き還して、京都に陣取つた。その兵は四方へ分捕掠奪をしに出かけ、在陣の者も亦疲れて終つてゐた。その隙に賊軍は引き還して襲擊した。義貞はもちこたへないで退却した。この時舟田義昌等が戰つて討死した。丁度東山道方面の兵で箱根の戰の期日に後れた者が引き返して來た。諸將は又戰ひの相談をなし、夜山を下つて陣取つた。

【語釋】華頂山（東山）〇短兵（刀劍のこと。）〇桂河（京都の西。）〇失戰期者（上文の遲山道軍とあるのに接する。）

旦日、楠正成・源顯家分路進戰。尊氏親與顯家戰于四條。義貞・義助建旗五十旒、橫擊之、馳出其背。賊軍呼曰「中黑至矣」輙崩駭。義貞獨變服入賊中、索尊氏不獲。分兵追之。日暮乃退、還軍坂下、誘尊氏還京師、而間日襲擊之。尊氏大敗、走攝津。義貞率諸將追擊、又大敗之。尊氏狼狽航海。諸軍爭舟、而溺者數千人、委棄鎧仗海濱。二月、

乘輿還闕、義貞振旅而還。詔遷義貞左近衞中將、義助右衞門佐。時新附兵萬餘、嘗用足利氏旗號重畫者、皆墨抹其中爲中黑。淡濃可辨。京師傳以爲笑。

【通釋】旦日、楠正成、源顯家、路を分ちて進み戰ふ。尊氏親ら顯家と四條に戰ふ。義貞、義助、旗五十旒を建て、横より之を擊ち、馳せて其の背に出づ。賊軍呼んで曰く、「中黑至れり」と。輒ち崩潰す。義貞獨り服を變じて賊中に入り、尊氏を索むれども、獲ず。兵を分ちて之を追ふ。日暮乃ち退き、還つて坂本に軍し、尊氏を誘うて京師に還らしめ、而して日を間てゝ之を襲擊す。尊氏、大に敗れ、攝津に走る。義貞、諸將を率ゐて追擊し、又大に之を敗る。尊氏狼狽して海に航す。諸軍舟を爭うて溺るゝ者數千人、鎧仗を海濱に委棄せり。二月、乘輿、闕に還り、義貞、振旅して還る。詔して、義貞を左近衞中將に、義助を右衞門佐に遷す。時に新附の兵萬餘、嘗に足利氏の旗號重畫を用ふる者、皆其の中を墨抹して中黑となす。淡濃辨ず可し。京師傳へて以て笑と爲り。

【口語譯】あくる日、楠正成、源顯家など、路を分けて進み戰つた。尊氏は、自ら顯家と四條で戰つた。義貞義助は旗五十本を押し立てゝ横合から出て來て、これを擊ち走つて其の背後に廻つた。賊軍では叫んで曰ふのに「中黑が來たぞ」と。譯もなく崩れて終つた。義貞は一人、服裝を變へて賊の軍中にまぐれ込み、尊氏を搜したが見付からない。それで兵を分けて之を追つかけた。日暮方、退き返つて坂本に陣取り、尊氏をおびき寄せ、京都に還らしめ、一日置いて、不意に之を襲うた。尊氏は大に敗け、攝津に走つた。義貞は、諸將を率ゐて追擊し、

又大に之に敗つた。尊氏は、うろたへて船で海に出た。諸〻の軍勢が舟に早く乘らうとして海に落ちて溺れ死んだものが數千人からあり、それが鎧や、武器を皆海濱に置き去りにしてゐた。二月、天皇は比叡山から京都の御所にお還りなされ、義貞は軍兵をとゝのへて凱旋した。詔して義貞を左近衛中將に、義助を右衛門佐に遷された。この時、新に降附した兵士が萬餘人からあり、前に足利氏の旗記し、二つ引を用ひてゐた者が皆その眞中を墨で塗つて、中黒にした。その墨色の薄いのと濃いのとがはつきり分つた。それで京都では言ひ傳へて笑ひ種とした。

【語釋】重畫（足利の紋所二ツ引。⊜）

已而足利氏保聚西土、勢復大振。赤松則村・石橋和義、及菅茱等並起應之。三月、詔義貞管領山陽・山陰十六國西伐。會有疾。遣江田行義・大館氏明將二千騎先發。遇赤松則村兵于書寫山下、擊走之。義貞疾愈、將五萬騎出次鹿子河、并降附萬人進至斑鳩驛、且攻則村白旗城。城壁未成。則村請降。義貞喜、爲請於朝。比朝旨至、壁成。則村乃不降。義貞大怒曰、「吾寧禽之、而後前行。」合軍圍之。城險不下。義助諫之。乃分二萬人附義助進攻石橋和義。

【原文】已にして足利氏、西士を保聚し、勢復大に振ふ。赤松則村、石橋和義、及び菅業等、並び起つて之に應ず。三月、義貞に詔して、山陽・山陰、十六國を管領して西伐せしむ。會々疾あり。江田行義・大館氏明を遣はし、二千騎に將として先づ發せしむ。赤松則村の兵に書寫山下に遇ひ、擊つて之を走らす。義貞、疾癒え、五萬騎に將として、出でて鹿子河に次し、降附萬人を幷せて、進んで斑鳩驛に至り、且に則村の白旗城を攻めんとす。城壁未だ成らず。則村、降を請ふ。義貞喜び、爲めに朝に請ふ。朝旨至る比、壁成る。則村乃ち降らず。義貞大に怒りて曰く、「吾れ寧ろ之を禽にし、而る後に前み行かん」と。軍を合せて之を圍む。城、險にして下らず。義助、之を諫む。乃ち二萬人を分ちて義助に附し、進んで石橋和義を攻めしむ。

【通釋】その内に足利氏は、西國を固めて、人數を集め、その勢は再び振つた。赤松則村、石橋和義及び菅業等も一時に兵を起して尊氏に味方をした。三月、義貞に詔して山陽山陰十六國を支配し、西に下つて征伐せしめられた。折あしく義貞は病氣であつた。それで江田行義大館氏明を遣はし二千騎の大將となして先づ出發せしめた。赤松則村の兵に播磨の書寫山下で出遇ひ、擊つて之を走らせた。その内に義貞の病氣も直つたので義貞は五萬騎を率ゐて、出で、鹿子河に陣取り、そこで降參した兵士萬人を一緒にして進んで、斑鳩驛に至り、則村の立てこもつて居る白旗城を攻めようとした。しかるに白旗城は、普請中で、城壁がまだ出來上つてゐなかつた。則村は、降參を申込んで來た。義貞は喜んでわざ／＼朝廷に降參を許してもよいか願ひ出た。朝廷から返事が來る頃には恐つかり壁が出來上つて終つた。そこで則村はもう降參はしなかつた。義貞は大層怒つて曰ふには「いつその事に彼を生擒にして、それから前進しよう」と。軍を合はせて、之を取り圍んだ。城は要害で、なか／＼降參しなかつた。義助は何時までもこんなことをしてゐては詰らぬので諫めた。そこで二萬人を分けて義助に與へ

進んで石橋和義を攻めしめた。

【語釋】 書寫山・鹿子河・斑鳩・白旗（皆播磨にある。）

和義據三石、拒舟坂。義助得兒島高德郷導、乃留一軍于舟坂、而一軍銜枚縛馬舌、自間道出舟坂之背。賊顧而驚駭。義助夾擊、拔舟坂、遂攻三石城。遣江田行義、攻菅氏菩提城、遣大井田經隆孫氏經、以二千人進、據福山城。城未修。而尊氏・直義擧九國兵而來。城兵欲避之。氏經不肯。

【訓讀】 和義、三石に據り、舟坂に拒ぐ。義助、兒島高德の郷導を得、乃ち一軍を舟坂に留め、而して一軍は枚を銜み、馬舌を縛し、間道より舟坂の背に出づ。賊顧みて驚駭す。義助夾擊し舟坂を拔き、遂に三石城を攻む、江田行義を遣はして、菅氏の菩提城を攻めしめ、大井田經隆の孫氏經を遣はして、二千人を以て進み、福山城に據らしむ。城未だ修めず。而して尊氏・直義、九國の兵を擧げて來る。城兵之を避けんと欲す。氏經肯んぜず。

【通釋】 和義は、三石に立て籠つて居て、舟坂で拒いだ。義助は、兒島高德の案内を得たので一軍を元のやうに舟坂に留め置いて、一軍は箸をくはへ、馬の舌をしばりつけ、聲を出さぬやうにして、裏道から舟坂の背後に出た。賊は振り顧みて非常に驚いた。そこで、義助は夾み擊つて、舟坂を攻め落し、遂に三石城を攻めた。一方江田行義を派遣して、菅氏の菩提城を攻めしめ、大井田經隆の孫の氏經を派して、二千人を以て、進んで福山城に

立て籠らしめた。福山の城がまだ出來上らなかつた。そこへ尊氏直義は、九州の兵を擧げて進んで來た。城兵は之を避けてそこを立ち退きたがつてゐた。併し氏經は、承知しなかつた。

【語釋】菩提城（作美）

五月、直義將兵數萬圍之。氏經出擊、潰圍東走、合於義助。義助馳使告義貞。義貞答曰、敵海陸並進。卽扞陸者、則海者直犯闕矣。吾欲退屯兵庫、合捍海陸。於是、白旗・三石・菩提、三城圍皆解。義貞先至鹿子河、河水方漲。衆以敵逼於後、請將帥先濟。義貞曰、敵來則背水決戰。吾殿而濟耳。乃令創病者先濟。明日、水減。而義助・行義亦至。遂濟、至兵庫。則其兵亡者過半。

【通釋】五月、直義、兵數萬に將として之を圍む。氏經出でて擊ち、圍を潰して東走し、義助に合す。義助使を馳せて義貞に告ぐ。義貞答へて曰く、「敵、海陸並び進む。卽し陸の者を扞がば、則ち海の者、直に闕を犯さん。吾れ退いて兵庫に屯し、海陸を合せ捍がんと欲す」と。是に於て、白旗・三石・菩提、三城の圍皆解く。義貞、先づ鹿子河に至れば、河水方に漲る。衆、敵後に逼るを以て、將帥先づ濟らんと請ふ。義貞曰く、「敵來らば則ち水を背にして決戰せん。吾れ殿して濟らんのみ」と。乃ち創病の者をして先づ濟らしむ。明日、水減ず。而して義助・行

義も亦至る。遂に濟り、兵庫に至れば、則ち其の兵亡ぐる者半に過ぎたり。

通釋 五月、直義は、兵數萬に將として氏經を圍んだ。氏經は來り擊ち、圍をくづして東に走り、義助と一緒になつた。義助は使を馳せて義貞に賊軍の襲來を告げた。義貞は答へて曰ふに「敵は海と陸とから並んで來た。もし陸の者を防ぐと海の方の奴等が直ちに京都を攻めるであらう。自分は今の場合退いて兵庫に屯し、海陸兩軍を一緒に防ぎ度いと思ふ」と。そこで、白旗・三石・菩提の三城の圍は皆解いて終つた。義貞は先づ鹿子河まで來て見ると、河の水が漲つて居た。軍衆は敵軍が後から押して來るから先づ大將が第一に渡られるように請うた。義貞が曰ふのに「敵が來たら水を後にし決戰しよう。自分は一番終ひになつて渡るだけの事だ」と。そこで手負病人を第一に渡らせた。翌日、水が大分減つた。そこへ義助・行義もやつて來た。遂に河を渡つて、兵庫に到着して見ると、その兵は半分以上逃げ去つてゐた。

帝遣楠正成來援。義貞迎問曰「朝議如何」曰「吾欲召還公、奉駕叡山。不聽也」義貞曰「驅敗卒當銳師。吾知其必敗耳。顧去歲敗於關東。今復未拔一城。何以復命。吾故欲決死一戰」正成曰「進退從宜、是謂良將。公且徐計之。且前殪高時、後攘尊氏。公武多矣。衆言何足恤哉」義貞色釋。

訓讀 帝、楠正成を遣はして來り援けしむ。義貞迎へ問うて曰く、「朝議は如何ん」と。曰く、「吾れ公を召還

し駕を叡山に奉ぜんと欲す。聽かれざるなり」と。義貞曰く、「敗卒を驅りて鋭師に當る。吾れ其の必ず敗るゝを知るのみ。顧ふに、去歲、關東に敗れ、今復未だ一城を拔かず。何を以て復命せん。吾れ故に死を決し一戰せんと欲す」と。正成曰く、「進退宜しきに從ふ、是を良將と謂ふ。公几く徐ろに之を計れ。且つ前に高時を斃し、後に尊氏を攘ふ。公の武多し。衆言何ぞ恤ふるに足らんや」と。義貞色釋く。

通釋 天皇は、楠正成を派遣せられて來り援けしめられた。義貞は正成を迎へ尋ねて問ふには「朝廷の評議はどんなでしたか」と。正成は答へて曰ふのに「私は貴公を京都に呼び戻し、陛下を比叡山におつれ申さうと思ひました。併し御聞き入れにはなりません」と。義貞が曰ふのに「負けた兵士を追ひ立てゝ、新鋭の軍に向ふのです。負けることは分り切つてゐます。考へて見るに去年は關東で負け、今年になつてまだ城一つも落しません。どうして朝廷に歸つて報告を申し上げられませう。だから私は死を決して一戰爭やつて見ようと思ひます」と。正成が曰ふのに「進退ともにその宜しきに從ふのが、良將であります。まあ急がずに御考へなさい。それに貴公は、先きに高時を斃し、後に尊氏を追つ拂ひました。貴公の武功は多いのであります。人の風評などは心配する必要はありません」と。義貞はやゝ安心した。

語釋 色釋（顏色の釋くこと。）

且日、尊氏兵艦蔽海而至。而直義來自須磨、旌旗彌天。義貞令正成拒直義、令義助・氏明拒尊氏、而自居其後、相持未戰。我軍有一騎。挾弓立岸、呼曰「將軍西來、必械津

妓、置酒高會。請進一物佐酒。注箭而竢。適有鶚攫魚而擧。乃馳而射之、斷其隻翼、墮敵舟中。兩軍讙呼。尊氏使人問其名。答曰「東人或識。請投刺焉」。復發一箭、軼三百步、貫船舷。尊氏視其箭、彫於笴。曰「相摸人本間資氏」。敵中傳觀。資氏揚扇、呼曰「方今戰國、一矢可愛。願見返賜」。賊中有答射者。箭不達岸。我軍齊笑。射者慚憤、以三百人上岸。義助擊殲之。

訓讀 旦日、尊氏の兵艦、海を蔽うて至る。而して直義、須磨より來り、旌旗、天に彌る。義貞、正成をして直義を拒がしめ、義助、氏明をして尊氏を拒がしめ、而して自ら其の後に居り、相持して未だ戰はず。我が軍に一騎あり。弓を挾み岸に立ちて、呼んで曰く、「將軍西より來る。必ず津妓を載せ、置酒高會するならん。請ふ一物を進めて酒を佐けん」と。箭を注して竢つ。適〻鶚あり、魚を攫んで擧る。乃ち馳せて、之を射、其の隻翼を斷ち、敵の舟中に墮す。兩軍讙呼す。尊氏、人をして其の名を問はしむ。答へて曰く、「東人或は識らん。請ふ、刺を投ぜん」と。復一箭を發す。三百步を軼ぎ船舷を貫く。尊氏其の箭を視れば、笴に彫す。曰く「相摸の人本間資氏」と。敵中傳へ觀る。資氏、扇を揚げ、呼んで曰く、「方今戰國、一矢愛むべし。願はくば返賜せられよ」と。賊中答射する者あり。箭、岸に達せず。我が軍齊しく笑ふ。射る者慚憤し、三百人を以て岸に上る。義助擊つて之を殲す。

【通釋】翌日、尊氏の兵艦は、海を蔽ふ程多くで進んで來た。そして陸軍の直義は須磨から攻めて來て、その旗は空一ぱいになつてゐた。義貞は、正成に直義を拒がしめ、義助・氏明をして、尊氏を拒がしめ、そして自分は其の後に陣取つてぢつと持ちこたへて、まだ戰をしなかつた。その時我が軍に一騎の武者があつた。弓をわき挾み、岸に立つて呼ばはつて曰ふには「將軍は西國から攻めて來た。きつと室の津の遊女を載せて、酒盛をして居られることだらう。いゝ物を酒の肴に進ぜよう」と。矢を弓に番へて待つて居た。折よくみさごが魚を攫んで空高く舞ひあがつた。そこで驅けて行つて之を射ちとめ、その矢はみさごの片羽を射ち切り、敵の舟の中に落ちた。敵も味方も大に囃し立てた。尊氏は人をして、その名を問はせた。すると答へて曰ふには「關東の人の中には知つた人があるであらう。それでは名札を差し上げよう」と。再び矢を放つた。その矢は、三百間も飛んで、舟べりを射ち貫いた。尊氏はその矢を取つて見ると矢がらに名がほりつけてあつた。「相摸國の住人本間資氏」と。敵軍中では、この矢を次から次へ渡して見た。資氏は扇を開いて、呼ばはつていふには「此の節は戰國の世の中で、一本の矢も惜しい。どうか先つきの矢を返して下されい」と。するど賊の中で、射かへしたものがあつた。その矢は、岸に屆かなかつた。味方は一齊に之を笑つた。射たものは慚ぢ憤り、三百人を引きつれて上陸して來た。義助は、擊つて、之を皆殺しにして終つた。

【語釋】須磨（攝津）○津妓（室の津といふ港の遊女）

賊先鋒七百艘、過而東、將自西宮上。新田氏軍三萬、欲先往拒之、循岸而馳。騎者如走、舟者如追。而兵庫無人矣。賊後隊六千艘、盡上兵庫。楠正成戰歿。乃與其陸軍合、

以躡義貞。義貞曰「吾觀西宮旗幟、支賊耳。自兵庫來者、乃其渠魁。吾所願撃」。乃還、背生田林而陣、迎戰。終不利走。義貞自殿、數返撃。馬殪而徒、上丘待救。敵環射之。義貞揮二刀、截十六箭。小山田高家望見還救、授其馬而留死。初高家從軍、刈民麥。法當斬。義貞使人視其營、則鎧馬鮮而無粒粟。義貞曰「吾罪也。士不可亡。法不可亂」。乃爲償田主、而賜粟於高家。高家感愧。故死之。義貞因得脫。自丹波、以殘兵六千歸京師。上下失色。天子復幸叡山。

〔訓讀〕賊の先鋒七百艘、過ぎて東し、將に西宮より上らんとす。新田氏の軍三萬、先づ往きて之を拒がんと欲し、岸に循つて馳す。騎者走るが如く、舟者追ふが如し。而して兵庫人なし。賊の後隊六千艘、盡く兵庫に上る。楠正成戰歿す。乃ち其の陸軍と合し以て義貞を躡す。義貞曰く、「吾れ西宮の旗幟を視るに、支賊のみ。兵庫より來る者は、乃ち其の渠魁なり。吾が撃つを願ふ所なり」と。乃ち還り、生田林を背にして陣し、迎へ戰ふ。終に利あらずして走る。義貞自ら殿し、數〻返り撃つ。馬殪れて徒し、丘に上りて救を待つ。敵、之を環射す。義貞二刀を揮ひ、十六箭を截る。小山田高家望見して還り救ひ、其の馬を授けて留り死せり。初め高家軍に從ひ、民の麥を刈る。法、斬に當る。義貞、人をして其の營を視しむれば、則ち鎧馬鮮にして、粒粟なし。義貞曰く、「吾が罪なり。士亡ふ可からず。法亂る可からず」と。乃ち爲めに田主に償ひて、而して粟を高家に賜ふ。

高家慙愧す。故に之に死す。義貞因つて脱するを得たり。丹波より、殘兵六千を以て京師に歸る。上下、色を失ふ。天子復叡山に幸す。

【通釋】賊の先鋒の七百艘は、そこを通り越して、東へ進み西宮から上陸しようとした。新田氏の軍二萬は彼等が上陸せぬ前に行つて之を拒がうと思ひ、岸に沿うて馳せた。まるで騎馬で陸を馳せてゐる味方は、逃げてゐるかのやうで、舟の賊は、却つて之を追つかけてゐるやうであつた。そして兵庫の方には一人も兵が居なくなつたその隙に賊の後隊六千艘は皆兵庫に上陸して終つた。この時楠正成は討死した。そこで賊の後隊はその陸軍と一緒になつて、義貞の後を追つかけた。義貞が曰ふのに「西宮の賊の旗記しを見ると、あれは枝葉の賊に過ぎない、兵庫の方から來るのが巨魁の尊氏である。擊つてやり度く思つてゐた奴である」と。そこで引きかへして生田森を背後にして陣取り、賊軍を迎へ戰つた。とう／＼負けて逃げ出した。義貞は、自ら後押へとなり、度々引きかへして擊つた。その内に馬が倒れて徒立となり、丘へ上つて、敵の來るのを待つてゐた。敵兵は、四方からこれを射つた。義貞は兩刀を揮つて矢を十六本切り落した。小山田高家が、義貞の危險なのを望み見て、引きかへして之を救ひ、自分の馬を義貞に與へ、逃がして置いて、自分は其處に留まつて討死した。前に高家が軍に從つて戰爭に出た時、百姓の作つた麥を刈り取つたことがあつた。軍法では斬罪に相當する罪であつた。義貞は、人を遣つて彼の陣營を見させると、鎧や馬は立派に整つてゐたが、米が一粒もなかつた。義貞が曰ふのに「これは私が惡かつた。彼を殺してはならぬ。併し軍法は亂すことはならぬから」と。そこで其の麥の價を畑の持主に拂つて、その麥を高家に賜はつた。高家は、感激し且つ愧ぢ入つた。そんなことが以前あつたから、此の際義貞に代つて討死したのである。かくて義貞は、身を脱することが出來た。丹波路から殘兵六千人を率ゐて、京都に還つ

た。朝廷では君臣上下驚き恐れて、顔色をかへた。天皇は再び比叡山に行幸なされた。

【語釋】西宮（註略）

六月、尊氏入京師、使高師重等來攻。分陣三百餘所。義貞・義助以諸將拒東坂、使公卿僧徒守西坂。賊乃先攻西坂。二卿戰死。僧徒力不支、告急於義貞。義貞與紀清兩黨赴援、擠賊於谷、殺數千人。因陣于大嶽。賊又攻東坂。義助擊卻之。賊更欲攻西坂、以熊野兵五百爲前鋒。皆被黑甲、自雲母坂上。本間資氏・相馬忠重、在義貞側。瞰而笑曰「今日之事、不復煩諸君。」下百餘步、相命各射一賊。貫甲穿胄。賊不敢前。二人顧我軍曰「戰且合矣。爲吾立的。吾將習射。」我軍植畫月扇。二人相戒、勿射月。乃發。兩箭夾月。乃解箙鼓弦、自名於敵曰「盍受吾箭、試甲堅脆。」賊懼、不戰而卻。會山徒光澄叛、夜啓賊兵。紀清兩黨覺而鏖之。

【通釋】六月、尊氏、京師に入り、高師重等をして來り攻めしむ。分つて三百餘所に陣す。義貞・義助、諸將を以て東坂に拒ぎ、公卿、僧徒をして西坂を守らしむ。賊乃ち先づ西坂を攻め、二卿戰死す。僧徒力支へず、急を

義貞に告ぐ。義貞、紀清兩黨と赴き援け、賊を谷に擠し、數千人を殺す。因つて大嶽に陣す。賊又東坂を攻む。義助、擊つて之を卻く。賊更に西坂を攻めんと欲し、熊野の兵五百を以て前鋒と爲し、皆黑甲を被り、雲母坂より上る。本間資氏、相馬忠重、義貞の側に在り。瞰て笑つて曰く、「今日の事、復諸君を煩はさず」と。百餘步を下り、相命じ各〻一賊を射る。甲を貫き胄を穿つ。賊敢て前まず。二人、我が軍を顧みて曰く、「戰、且に合へり。吾が爲めに的を立てよ。吾れ將に射を習はんとす」と。我が軍畫月扇を植つ。二人相戒む、月を射る勿れと。乃ち發す。兩箭、月を夾む。乃ち箙を解き弦を鼓し、自ら敵に名のりて曰く、「盍ぞ吾が箭を受け甲の堅脆を試みざる」と。賊懼れ戰はずして卻く。會〻山徒光澄叛き、夜、賊兵を啓く。紀清兩黨、覺りて之を鏖にす。

新譯 六月、尊氏は京都に入り、高師重等をして比叡山を攻めさせた。兵を分けて三百餘ケ所に陣取つた。義貞義助は、諸將を率ゐて、東坂で之を拒ぎ、公卿僧徒をして、西坂を守らしめた。所が賊は、先づ西坂を攻めたので、公卿が二人、討死した。又僧徒も力支へ切れなくなつて、急を義貞に告げた。義貞は、紀清の兩黨と一緒になつて援けに出かけ、賊兵を谷に落し、數千人を殺した。そこで大嶽に陣取つた。賊は又東坂を攻めた。義助は擊つて、これを退けた。すると、賊は又西坂を攻めようと思ひ、熊野の兵五百を先鋒となし、皆黑絲縅の鎧を著て、雲母坂から上つて來た。本間資氏、相馬忠重の二人が義貞の傍について居た。兩人は賊の上つて來るのを見下ろして笑つていふには、「今日の、戰爭ではもう諸君に御迷惑をかけないつもりだ」と。二人は百間餘り下つてから互に申し合ひ、銘々一人づゝ賊兵を射た。資氏は賊の鎧を射ち通し、忠重は賊の胄を射ちぬいた。賊は進んで來ようとしなかつた。二人は味方をふりかへつて曰ふには「戰ひはこれから打合ひになる。自分等の爲めに的を立てゝ呉れ。吾々は、こゝで弓の稽古をしたいから」と。そこで味方では、月を畫いた扇を立てた。二人

が互に誡めて、月は射たない様にしようと。そこで二人は矢を放つた。二本の矢は、丁度月の兩側に中つて月を夾んだ。そこで、箙の矢を解きほぐして、弓弦を打ち鳴らし乍ら敵に名乘つていふには「何ぜわが箭を受けて、鎧の堅いか弱いかを試めして見ないのだ」と。賊は懼れて戰はないで退却した。折から山徒の光澄が謀叛して、夜、賊兵を導き入れた。しかし紀清の兩黨が覺つて、その賊を皆殺にした。

語釋 東坂（近江の坂本より上る道。）〇二卿（參議源忠顯、少將藤原雅忠。）〇紀清兩黨（宇都宮公綱等の兵。）〇大嶽（比叡山の中にある。）〇光澄（金輪院律師。）〇解レ箙（矢の入れてあつたのを解くこと。）

初我軍約、有レ急撞レ鐘相報。一日、有二羣猿一撞レ鐘。諸營皆警。賊兵以爲二官軍下撃一、乃大騷。官軍遂開二諸門一、一時並下、縱二火賊營一、撃大走レ之、生二擒高師重一。義貞附二山僧一、斬二梟其首一。賊兵四潰。既而又聚。官軍猶謂二賊兵寡一也、出攻レ之。尊氏挾二光嚴帝一、據二東寺一爲レ城、出二兵京師一、要二撃官軍一。官軍敗還。七月、藤原師基以二北兵三千一入援。諸將議曰「前日之戰、取二路京中一、所二以敗一也。不レ若下由二內野・礩二道一赴上レ之。」已而有二叛者一、泄二其議一。尊氏乃以二大兵一邀二撃焉。官軍復敗還。天子乃賜二邑於叡山僧徒一、以獎二激之一、令レ招二南都一。南都輒應レ之。畿內兵聞レ之、所在相聚、各請二將帥一、四塞二糧道一。賊窮困、至レ粥二鎧馬一、遂大出鹵掠。

原文　初め我が軍、急あらば鐘を撞きて相報ぜんと約す。一日、羣猿あり、鐘を撞く。諸營皆警む。賊兵以て官軍下り撃つと爲し、乃ち大に騒ぐ。官軍遂に諸門を開き、一時並び下り、火を賊營に縱ち、撃つて大に之を走らせ、高師重を生擒す。義貞、山僧に附し、斬つて其の首を梟す。賊兵四もに潰ゆ。既にして又聚まる。官軍猶ほ賊兵寡しと謂ふや、出でゝ之を攻む。尊氏、光嚴帝を挾み、東寺に據つて城と爲し、兵を京師に出だし、官軍を要撃す。官軍敗れ還る。七月、藤原師基、北兵三千を以て入り援く。諸將議して曰く、「前日の戰に、路を京中に取りしは、敗れし所以なり。内野・磧の二道より之に赴くに若かず」と。已にして叛く者あり、其の議を泄す。尊氏乃ち大兵を以て邀へ撃つ。官軍復敗れ還る。天子乃ち邑を叡山の僧徒に賜ひ、以て之を奬激し、南都を招かしむ。南都輒ち之に應ず。畿内の兵、之を聞き、所在相聚まり、各將帥を請ひ、糧道を四塞す。賊窮困し、餉馬を粥ぐに至り、遂に大に出でて鹵掠す。

通釋　はじめ我が軍では、何か急なことが起つたら、鐘を撞いて互に知らせることに約束してあつた。或る日猿の群れがやつて來て、鐘を撞いた。そこで諸々の陣營では皆警戒した。賊の兵はこれを見て、官軍が山から下りて撃つのだと思ひ大騒ぎをした。そこで官軍は、遂に諸の門を開いて、一時に並んで山を下り、火を賊營に放ち、撃つて大に之を走らせ、大將高師重を生捕つた。義貞は、師重を山僧に渡して、その首を斬つて、獄門に曝した。賊兵は四方に潰散した。其のうちに又聚まつて來た。官軍は、まだ賊兵は少いのだと思つて出かけて之を攻めた。尊氏は光嚴天皇をお連れして、東寺に立て籠つて城となし、兵を京都に出して、官軍を待ち受け撃たせた。それがために官軍は、負けて還つて來た。七月藤原師基が、北國の兵士三千人を引きつれて援けに來た。諸將は相談して曰ふのに「此の間の戰爭で負けたのは京都の町を通つたからである。今度は、西は内野、東は河

原の二た道から分れて進んだ方が宜い」と。そのうちに謀叛するものがあつて、その評議を敵に洩した。そこで尊氏は先き廻りをして、大兵で之を迎へ撃つた。それが爲め、官軍は、又負けて還つて來た。そこで天皇は比叡山の僧徒に土地を下されて勵まし、又奈良の僧兵をも招かしめられた。奈良の方でも譯なく味方になつた。畿内の兵は之を聞いてあちこちに聚まつて、各〻將帥を派遣して貰ひたいと請ひ、賊の糧道を四方から塞いだ。賊は非常に困つて鎧や馬などを賣拂ふまでになり、とう〳〵四方に出かけて大に分捕をやり出した。

語釋　東寺（京都の西南隅。）○内野（京都）

義貞於レ是議ニ出戰一、遣ニ四國兵一、列ニ炬于阿彌陀峯一、約ニ諸將帥齊進一。天子親臨レ勞レ軍、剪ニ所レ御紅裳一、分賜レ之、以爲ニ笠識一。義貞臨レ發、白曰「勝敗天也。不レ可ニ逆睹一。今日之戰、所レ不レ送ニ箭尊氏營一者、毋ニ復生還一矣」已而北白河失レ火。藤原隆資以爲ニ戰合一也、先レ期自ニ八幡一入、敗レ走。南都兵亦失レ期不レ至。

訓讀　義貞、是に於て、出戰を議し、四國の兵を遣はして、炬を阿彌陀が峰に列ねしめ、諸將帥の齊しく進まんことを約す。天子親ら臨み軍を勞し、御する所の紅裳を剪り、分つて之を賜ひ、以て笠識と爲さしむ。義貞、發するに臨み、白して曰く、「勝敗は天なり。逆め睹る可からず。今日の戰に、箭を尊氏の營に送らざる所の者は、復生きて還る毋し」と。已にして北白河、火を失ふ。藤原隆資以て戰合ふと爲し、期に先だちて八幡

より入り、敗れ走る。南都の兵も亦期を失つて至らず。

【通釋】ここで義貞は京都へ出て戰ふことに就いて評議し、四國の兵を遣はし、阿彌陀峰に松明をならべさせて勢を示し、多くの大將も同時に進むように約束した。天皇は親ら其の場に御臨みになり軍士を慰勞し給ひ、お召しになつてゐた緋の袴をお切りになり、分つて之を賜はり、これを笠のしるしとなさしめられた。義貞は出發するに當つて天皇に申し上げていふには「勝つも負けるも天運で御座います。前以て慮り知ることは出來ません。今日の戰で矢を尊氏の陣に射込まない者は二度と生きては還りません」と。其の内に北白河の民家から火が出た。藤原隆資はもう戰が始まつたと思うて約束の時よりも早く八幡から討ち入つて敗走した。奈良の僧兵どもも約束の時期を誤つてやつて來なかつた。

【語釋】阿彌陀峯・北白河（京城の東。）

義貞以二萬騎、行破賊軍、終抵東寺、執弓注矢、呼尊氏、語之曰「天下擾亂久矣。雖曰皇統之爭、抑由公與義貞而已。與其爲一身苦萬民、寧各以單騎決鬪、決雌雄。請從一箭。」箭軼門樓、入尊氏帳中。尊氏不出。時諸公卿軍、及四國兵、皆爲賊所破。賊兵悉萃於義貞。義貞返擊、奮戰破之、至五條。賊復四合。義貞額中流矢、流血被面。乃令其騎皆西其馬首、欲決死。紅笠識者八百騎、來救之、擁義貞、潰圍歸山門。於是、諸將帥

皆棄テテ守ヲ走リ歸ル。

【訓讀】義貞、二萬騎を以て、行くゆく賊軍を破り、終に東寺に抵り、弓を執り矢を注し、尊氏を呼び、之に語げて曰く、「天下擾亂すること久し。皇統の爭と曰ふと雖も、抑〻公と義貞とに由るのみ。其の一身の爲めに萬民を苦しめんよりは、寧ろ各〻單騎を以て決鬪し、雌雄を決せん。請ふ、一箭を送る」と。箭門樓を軼ぎ、尊氏の帳中に入る。尊氏出でず。時に諸公卿の軍、及び四國の兵、皆賊の破る所と爲り、賊兵悉く義貞に萃る。義貞返り擊ち、奮戰して之を破り、五條に至る。賊復四合す。義貞の額、流矢に中り、流血面に被る。乃ち其の騎をして、皆其の馬首を西せしめ、決死せんと欲す。紅笠識の者八百騎、來つて之を救ひ、義貞を擁し、圍を潰して山門に歸る。是に於て、諸將帥皆守を棄てゝ走り歸る。

【通釋】義貞は、二萬騎を率ゐて、途中賊軍を破り、終に東寺まで來て、弓を執り矢をつがへ、尊氏の名を呼んで、之に語げていふには、「隨分久しく天下が亂れてゐる。皇統の爭とはいへ、そもそも貴公と義貞との爭ひである。お互ひに、一身の爲めに、萬民を苦しめるよりは、むしろ二人で一騎打ちをして勝負を決めよう。では先づ一矢を送るぞ」と。その矢は、門の高櫓を過ぎて尊氏の居る帳の中に入つた。尊氏は、出て來なかつた。その時に諸公卿の率ゐて居た軍及び四國の兵は皆賊に破られ、賊兵は殘らず義貞に集中して來た。義貞は引きかへして擊ち、奮ひ戰つて之を破り、五條まで行つた。賊兵はまた四方から聚つた。義貞は額に流矢が中り、流るゝ血が顏にかゝつた。そこで其の騎をして皆馬の頭を西に向けさせて、討死しようとした。そこへ赤い笠じるしを付けた者八百騎がやつて來て之を救ひ、義貞を取り卷いて圍を打ち拔き比叡山に還つた。そこで諸將帥も皆守り場所を

棄てゝ走り還つて來た。

〔語釋〕 西馬首（賊の方へ向けることゝなる）

八月、足利高經・佐佐木高氏等、絕我糧食。九月、遣兵擊高氏、敗歸。我軍多逃亡。尊氏佯乞降、請帝歸闕、密使人致款。帝信而聽之。尊氏又陰招諸將。諸將多應之。十月、左衛門督藤原實世、使人來告義貞營曰、「尊氏納款、車駕赴其營。公知之乎」義貞時延見將士。得報不信。曰、「是使者謬聽耳」美濃守堀口貞滿曰、「今旦、氏明・行義、無故赴中堂。吾固怪之。請往詗焉」馳至行在、則乘輿方駕矣。

〔通釋〕 八月・足利高經・佐佐木高氏等、我が糧食を絕つ。九月、兵を遣はして高氏を擊たしめ、敗れ歸る。我が軍多く逃亡す。尊氏佯りて降を乞ひ、帝の闕に歸らんことを請ひ、密に人をして款を致さしむ。帝信じて之を聽す。尊氏又陰に諸將を招く。諸將多く之に應ず。十月、左衛門督藤原實世、人をして來り義貞の營に告げしめて曰く、「尊氏款を納れ、車駕、其の營に趣かんとす。公、之を知るか」と。義貞、時に將士を延見す。報を得て信ぜず。曰く、「是れ使者謬り聽くのみ」と。美濃守堀口貞滿曰く、「今旦、氏明・行義、故なくして中堂に赴く。吾固より之を怪しむ。請ふ、往いて詗はん」と。馳せて行在に至れば、則ち乘輿方に駕す。

【語譯】八月、足利高經・佐々木高氏等が味方の兵糧の道を絶つた。そこで九月兵を遣つて高氏を撃たせたが、敗れて歸つて來た。味方の兵士は形勢非と見て多く逃げ失せた。所が尊氏は偽つて降參を乞ひ、後醍醐天皇の京都に還られむことをお願ひし、こつそり使者を立て異心のないことを申し入れさせた。天皇は之を信用されてお許しになつた。尊氏は又、内々に義貞方の諸將を招いた。諸將も多く之に應じた。十月、左衛門督藤原實世は使者を寄こして、義貞の本陣に來て告げさせていふには「尊氏が降參を申し入れたので陛下は尊氏の陣屋にお出でにならうとしてゐる。貴公は、之を御存知か」と。義貞は、その時、將士を召して會見してゐた。この報告を得ても信用しなかつた。そして曰ふのに「これは、使者が何か聽き違へたのであらう」と。すると、美濃守堀口貞滿が曰ふのに「今朝氏明と行義とは譯なく根本中堂(行在)に出かけました。私はどうも變なのでこれを怪しんで居ります。一つ往つて、樣子を見て來ませう」と。馳せて行在に往つて見ると、今や天皇は御出かけにならうといふ所であつた。

【語釋】中堂(比叡山藥師堂のこと)

貞滿排進、攀其轅泣曰「臣聞道路之說、未知信否。今乃信矣。不審義貞有何罪、而陛下乃回其聖眷、以庇反賊邪。當元弘初、義貞奉辭伐罪、殪元兇於旬日、以除宸憂。雖古忠臣、恐不能過。自尊氏反以來、又舉族勤王、爲陛下數冒萬死。宗族死義者八千餘人。而賊勢滋熾、王師失利者、豈盡戰之罪哉。蓋天未眷聖德焉耳。今日西駕之轅、

覺不可還乎、則召義貞以下、族屬見在者、五十餘人、賜死於御前、然後發」帝撫然。

[illegible]　貞満排して進み、其の轅に攀ぢ、泣いて曰く、「臣、道路の説を聞き、未だ信否を知らず。今乃ち信なり。義貞何の罪あるを審にせずして、陛下乃ち其の聖眷を回らし、以て反賊を庇ふか。元弘の初に當り、義貞詔を奉じ罪を伐ち、元兇を旬日に殪し、以て宸憂を除く。古の忠臣と雖も、恐らくは過ぐること能はず。尊氏反せしより以來、又族を擧げて王に勤め、陛下の爲めに數々萬死を冒す。宗族、義に死するもの八千餘人。而して賊勢滋々熾にして、王師、利を失ふは、豈に盡く戰の罪ならんや。蓋し天未だ聖德を眷みざるのみ。今日西幸の轅、竟に還る可からざるか。則ち義貞以下、族屬見に在る者五十餘人を召し、死を御前に賜ひ、然る後に發せよ」と。帝憮然たり。

[illegible]　貞満は會釋して進み、その御車の轅にとりすがり、泣いて曰ふには、「私は噂を耳に致しましたが、信か僞か知りませんでした。所が只今の御様子では實際であつたので御座います。一體義貞は如何なる罪があつて斯様にこれまでの御眷顧を變へさせられ、反賊の尊氏をお庇ひなされるので御座いますか。元弘の初めの頃、義貞は大塔宮のお言葉を奉じて罪ある者を伐ち、首惡の北條高時を十日ばかりで倒し、陛下の御心配を取り除きました。昔の忠臣とてもこれ以上であり得なかつたので御座います。尊氏が謀叛をしましてからは、又一族を擧げて王事に勤め、陛下の爲めに、度々萬死の危險を冒しました。一族郎黨で義の爲めに死んだ者が八千餘人からあります。しかし、賊勢は、益々熾んになり。陛下の軍は利を失ひ、負けて終ひましたのは、あながち戰の罪ばかりで御座いませうや。思ふに天がまだ陛下の御聖德に目をかけて呉れないからで御座います。今日京都にお向

ひなされる、この御車をば還す譯にはどうしても參りませぬか。若し出來ませぬならば、義貞以下、一族郎黨で現在こゝに居るもの五十餘人をお召し下され、陛下の御前で死を賜ひ、而る後御出發なさいませ」と。天皇は暫くの間茫然としてゐられた。

【語釋】道路之說（風聞）○西駕（京都へ還られる御車。）

頃焉、義貞與義助・義顯、率三千人、入列階下。色慍而禮恭。上前義貞兄弟、慰諭之曰、當尊氏反、卿爲其同宗、乃挺歸義、支傾扶廢、終始不渝。朕深嘉之、欲仗卿宗族以鎭平四海。天運未會、兵疲勢蹙。是以權講和議、以待時焉耳。本宜謀及、而慮於漏泄、欲臨期相告。顧貞滿未之察也。然由其言、亦有所省。朕聞、越前地方多歸順者。又有前所遣將士。卿宜赴彼經略北陸、以圖恢復。以朕還京師、恐卿得賊名。今特以太子相附。卿視之猶朕。軍國之事、無小大、當由卿處分。朕已爲卿忍恥。卿亦爲朕努力」言畢垂淚。將士皆泣、莫能仰視。

【通釋】頃くありて、義貞、義助・義顯と、三千人を率ゐ、入りて階下に列す。色慍にして禮恭なり。上、義貞兄弟を前め、之を慰諭して曰く、「尊氏反するに當り、卿、其の同宗たり、乃ち挺んでて義に歸し、傾を支へ、廢

を扶け、終始渝らず。朕深く之を嘉し、卿の宗族に仗り、以て四海を鎭平せんと欲す。天運未だ會せず、兵疲れ勢蹙る。是を以て、權に和議を講じ、以て時を待つのみ。本宜しく謀及ぶべし。而れども漏泄を慮り、期に臨みて相告げんと欲す。顧ふに貞滿未だ之を察せざるなり。然れども其の言に由り、亦省みる所あり。朕聞く、越前の地方、頗に歸する者多しと。又前に遣はす所の將士あり。卿宜しく彼こに赴き、北陸を經略し、以て恢復を圖るべし。朕、京師に還るを以て、卿の賊名を得るを恐る。今特に太子を以て相附す。卿、之を視る、猶ほ朕のごとくせよ。軍國の事、小大となく、當に卿の處分に由るべし。朕已に卿の爲めに恥を忍ぶ。卿も亦朕の爲めに努力せよ」と。言畢りて涙を垂る。將士皆泣き、能く仰ぎ視るなし。

【通釋】暫くして、義貞は、義助・義顯とともに、三千人を引きつれて階の下に列んだ。その顏色には怒氣を含んで居たが、禮式は格別に恭しくして居た。天皇は義貞兄弟を近くにお召しになり、之を慰め諭して申されるには「尊氏が謀叛をした時に卿は、その同族でありながら、身をぬきん出て大義に赴き、皇室の傾いてゐるのを支へ、廢れんとするのを扶けて呉れ、始から終まで心を變へなかつた。朕は深く之を滿足に思ひ、卿の一族を恃として、天下の亂を鎭めようと思つた。併し天の運がまだ廻つて來ないで、兵士は疲れ、勢は蹙まつて終つた。だから一時假りに和議を講じて時の來るのを待つのである。元來このことを卿に相談すべきであつた。併し漏れるといけないと思つて、愈々その場になつて話さうと思つて居たのである。おもふに貞滿は朕の心を充分察して呉れないのである。だから前の樣な事を言つたのであらう。しかし貞滿の言葉に因つて、朕も亦反省するところがある。聞く所によると、越前の地方には官軍に歸するものが多いといふことである。それに先頃派遣した將士も居る。卿、越前に行つて、北陸地方を治め取り、皇運の回復を謀つたら宜いであらう。しかし、朕が京都に還

るので、卿が賊の名を得るのではないかと氣遣はれる。だから今太子を卿に預ける。卿は太子を視ること朕の如くせよ。軍國の事は大小となく卿が宜きやうに處分せよ。朕はすでに卿の爲めに耻を忍んで京都へ還るぞ。卿も亦朕の爲めに努力して吳れよ」と。そのお言葉が終ると涙をお流しになつた。居ならぶ將士は皆泣いて能く仰いで視るものもなかつた。

【語釋】所遣將士（河島維頼越前に在り。）

於是、遂令義貞奉皇太子赴越前。義貞卽夜造日吉祠、納寶刀、禱曰「神鑑吾忠義、使吾行無恙、得發兵滅賊。卽不得然、猶使子孫有再起者。」明日、奉東宮及皇子尊良北行。擧族從之。獨大館氏明・江田行義、及宇都宮公綱・本間資氏等、從乘輿入京師。尊氏囚帝及從者、殺資氏、以報兵庫・雲母坂之役。

【訓讀】是に於て、遂に義貞をして皇太子を奉じ越前に赴かしむ。義貞卽夜日吉の祠に造り、寶刀を納れ、禱つて曰く、「神吾が忠義を鑑み、吾が行をして恙無く、兵を發し、賊を滅すを得しめよ。卽し然るを得ざれば、猶ほ子孫をして再起する者有らしめよ」と。明日、東宮及び皇子尊良を奉じて北行す。族を擧げてこれに從ふ。獨り大館氏明・江田行義・及び宇都宮公綱・本間資氏等、乘輿に從つて京師に入る。尊氏、帝及び從者を囚へ、資氏を殺し、以て兵庫・雲母坂の役に報ゆ。

【[illegible]】そこで、遂に義貞をして、皇太子恒良親王を奉じて、越前に赴かしめられた。義貞はその晩日吉神社に参詣し寶刀を奉納し、禱つて曰ふには「神様には何卒吾が忠義を見そなはし、私の今度の道中をば無事に致しますやうに、そしてやがて兵を發して賊を滅ぼすことの出來ますやうにお願ひ致します。もしそれが叶ひませねばせめて、子孫に再び起つて、この意志を繼ぐもの、出ますやうにあらしめ給へ」と。翌日、太子及び尊良親王を奉じて、北國に向つた。一族全部、これに從つた。たゞ大館氏明・江田行義及び宇都宮公綱・本間資氏などは天皇に從つて京都に入つた。尊氏は天皇及び從者を拘留し、資氏を殺して、兵庫・雲母坂の二役でへこまされた怨みを報いた。

義貞以七千騎至鹽津。聞足利高經大兵塞途、轉由木芽嶺行。會大雪、士卒凍飢、燒弓箭、相抱取煖。土居・得能氏、遇賊兵自殺。千葉氏舉其衆叛、降於賊。義貞行三日、纔至敦賀。河島維頼・氣比氏治、迎入金崎。遣義顯・義助於越後、至杣山。杣山城主瓜生保厚待之。而高經詐傳詔旨討新田氏、檄至保。保信之、閉關自守。其弟僧義鑑來謁曰「臣兄愚魯、輕信賊計。雖然、苟曉是非、終歸順耳。臣願得擁戴一公子、候時乃起。」義助察其無他、遂以其子式部少輔義治託之、而引兵還金崎。兵道亡、有二百騎。

【[illegible]】義貞七千騎を以て鹽津に至る。足利高經の大兵途を塞ぐと聞き、轉じて木芽嶺より行く。大雪に會ひ、

土卒凍飢す。弓箭を燎やし、相抱いて煖を取る。土居・得能氏、賊兵に遇うて自殺す。千葉氏其の衆を擧げて叛き、賊に降る。義貞行くこと三日、纔に敦賀に至る。河島維頼・氣比氏治、迎へて金崎に入る。義顯・義助を越後に遣はし、杣山に至らしむ。杣山の城主瓜生保、厚く之を待つ。而るに高經詐りて、詔旨、新田氏を討つの檄を傳へて至る。保、之を信じ、關を閉ぢて自ら守る。其の弟僧義鑑、來り謁して曰く、「臣の兄は愚魯にして輕しく賊の計を信ず。然りと雖も、苟も是非を曉さば、終に順に歸せんのみ。臣願はくは一公子を擁戴するを得、時を候ちて乃ち起らん」と。義助、其の他なきを察し、遂に其の子式部少輔義治を以て之に託し、而して兵を引いて金崎に還る。兵、道より亡ぐ。二百騎有り。

〔通釋〕義貞は、七千騎を引きつれて鹽津まで來た。足利高經の大兵が途中で路を塞いで居ると聞いたので、路をかへて木芽嶺から往つた。丁度大雪が降つて土卒は凍え且つ飢ゑた。そこで弓矢を燃やし、互に抱き合つて煖まつた。土居・得能の兩氏は賊兵に出遇つて自殺した。千葉氏は其の部下を全部つれて叛き、賊に降つた。義貞は行くこと三日、やつと敦賀に到着した。河島維頼、氣比氏治が之を迎へて金崎に入つた。義顯・義助を越後に遣はし、杣山に至らしめた。杣山の城主瓜生保は手厚く、之を待遇した。然るに、高經は詐つて後醍醐天皇が詔を下されて義貞を討たれることになつたといふ檄文を廻して來た。保は迂つかり之を信用し、門を閉ぢて自ら守つた。その弟の僧義鑑が來て義顯に謁して、いふには、「私の兄は、性質のろまで、輕々しく賊の計を信じて終ひました。しかし、是非善惡を曉してやれば、結局官軍に歸しませう。何卒公達一人を守り立てさせて頂いて時機を見て兵を起したいと思ひます」と。義助は義鑑が異心のないことを察して、遂に其の子式部少輔義治を之にあづけ渡して置いて、兵をつれて金崎に引き返した。所が兵士は途中から隨分逃げた。結局手元に殘

つたのは二百騎であつた。

【語釋】鹽津・木芽嶺・敦賀・金崎・柚山（皆越前）○千葉氏（貞胤）○閉關（吉田氏を入れぬやうにしたこと）

會、今莊淨慶聚兵塞道。淨慶父嘗屬我軍者。義助乃令由良光氏往說之。淨慶答曰「臣去就與父異。不得不沮。願得部下一名士以藉口」光氏歸報。義顯曰「諸君從我至此。情同父子。寧我代士、莫士代我。往更告之、弗聽、則齊戰死耳」光氏往告焉。淨慶不決。光氏下馬、坐曰「將帥身係天下輕重。猶欲以身代吾輩。吾其可不致命」拔刀將自殺。淨慶感歎、遽止之曰「吾寧當罪耳」開道跪伏。義助・義顯、撫勞而過。

【通釋】會々今莊淨慶、兵を聚め道を塞ぐ。淨慶の父は、嘗て我が軍に屬せし者なり。義助乃ち由良光氏をして往いて之に說かしむ。淨慶答へて曰く、「臣の去就は父と異る。沮まざるを得ず。願はくは部下の一名士を得、以て口を藉らん」と。光氏歸り報ず。義顯曰く、「諸君、我に從ひて此に至る。情、父子に同じ。寧ろ我れ士に代るも、士をして我に代らしむる莫からん。往いて更に之に告げ、聽かざれば、則ち齊しく戰死せんのみ」と。光氏往いて告ぐ。淨慶決せず。光氏、馬を下り、坐して曰く、「將帥の身は天下の輕重に係る。猶ほ身を以て吾が輩に代らんと欲す。吾れ其れ命を致さざる可けんや」と。刀を拔き將に自殺せんとす。淨慶感歎し、遽に之を止めて

曰く、「我れ寧ろ罪に當らんのみ」。道を開いて跪伏す。義助・義顯、撫勞して過ぐ。

〔口譯〕折から今莊淨慶といふ男が、兵を聚めて道を遮つた。淨慶の父は前に味方に屬いてゐた。そこで義助は由良光氏をやつて、往いて淨慶に説かしめた。淨慶答へて曰ふのに、「私の進退は父とは別である。通行を遮ぎらない譯には行かない。(併しそれでは餘りだから通して上げても宜いから) どうか貴方の部下の一名士を得て、足利への言ひ譯としたい」と。光氏は歸つてそれを報告した。義顯がいふのに「諸君は拙者に從つて、こゝまで來た。その情は、親子も同樣である。むしろ拙者が諸君に代つても、諸君をして拙者に代らしめることはしない。もう一遍往つて淨慶に話し、もし承知しなければ致方ない。一緒に討死するまでだ」と。光氏が往つて、そのことを告げた。淨慶は心が決まらない。そこで光氏は馬から下りて、地に坐して曰ふには、「大將の一身は天下を輕くしたり、或は重くしたりする程關係の深いものである。その大將が其の身を以て吾等に代らうと思つてゐられるのである。(吾々はオメ／＼生きてはゐられぬ。) 私は命を棄てぬ譯には行かぬ。」と。さういつて刀を拔いて自殺しようとした。淨慶は感心して急に之を止めて曰ふのに「私がむしろ敵を見逃がしたといふ罪を受けよう」と。道を開けて跪き伏した。義助・義顯はねんごろに勞らつてこゝを通り過ぎた。

其兵又亡、在者僅十六騎。而聞敵以三萬騎圍金崎、欲衝圍入城。衆難之。栗生顯友出策、夜使衆解衣帶挂之樹、爲旗幟狀、以張疑兵。武田與一傷右手、約木刀于腕。顯友亡副刀、斫木爲梃、乘曉薄敵、呼曰「杣山援兵至矣」。敵駭顧。義貞因出擊走之、納義

助・義顯。於是、相與奉東宮・皇子於船、置酒奏樂、以慰藉之。

【[illegible]】其の兵又亡げ、在る者僅に十六騎。而して敵三萬騎を以て金崎を圍むと聞き、圍を衝いて城に入らんと欲す。衆、之を難かる。栗生顯友、策を出だし、夜、衆をして衣帶を解き、之を樹に挂け、旗幟の狀を爲さしめ、以て疑兵を張る。武田與一、右手を傷け、木刀を腕に約す。顯友、副刀を亡ひ、木を斫り挺と爲し、曉に乘じて敵に薄り、呼んで曰く、「杣山の援兵至る」と。敵駭き顧みる。義貞因つて出でて擊ち之を走らせ、義助・義顯を納る。是に於て、相與に東宮・皇子を船に奉じ、酒を置き樂を奏し、以て之を慰藉す。

【[illegible]】部下に又逃げるものがあつて、殘つたものは、わづかに十六騎であつた。そして、敵は三萬騎を以て金崎城を取り圍んでゐると聞いたので、その圍を衝いて城中に入らうと思つた。皆はそれを出來にくい事と思つた。栗生顯友は、計を出し、夜、部下の衆に帶や着物を脫がせて、これを木にかけ、旗や幟のやうに見せかけさせて、如何にも兵が澤山ゐるかのやうにした。武田與一は、右の手を怪我して木刀を腕にしばりつけてゐた。顯友は、差添へを無くし、木を切つて杖となし、曉に乘じて敵に迫り、大聲に呼ばはつて言ふには、「杣山から援兵が來た」と。敵は驚いてふりかへりみた。そこをつけ込んで、義貞は城から討つて出て敵兵を走らせ、義助・義顯を城中に入れた。そこで相與に、太子と尊良親王とを舟に御つれして酒宴を催し音樂を奏して慰め奉つた。

【[illegible]】藉口（口實にする。）

尊氏又遣高師泰等、將兵六萬、海陸來攻。城負山臨海。城兵拒戰、日斃千餘人。十一

月、城兵望見海上有人泅者、望城而來。至則亘忠景也。結詔書於髻、進之。蓋天皇逃於吉野、建行宮、詔義貞攻京師也。義貞等大喜。時瓜生保屬賊軍、在城下。而其諸弟起杣山、以應義貞。保將拔還、思得同志者。宇都宮泰藤・天野政貞、與保隣營。一日、有客、問二人曰「重畫中黑孰美」。泰藤曰「中黑哉。三鱗廢而重畫興。代重畫者、非中黑乎」。三鱗者、北條氏徽號也。政貞曰「然」。保聞而竊喜、寢與二人款、因告其志。二人同之。

訓讀　尊氏又高師泰等を遣はし、兵六萬に將として、海陸より來り攻めしむ。城、山を負ひ海に臨む。城兵拒ぎ戰ひ、日に千餘人を斃す。十一月、城兵、海上を望見するに、人の泅ぐ者あり、城を望んで來る。至れば則ち亘忠景なり。詔書を髻に結び、之を進む。蓋し天皇、吉野に逃れ、行宮を建て、義貞に詔して、京師を攻めしむるなり。義貞等大に喜ぶ。時に瓜生保、賊軍に屬し、城下に在り。而して其の諸弟、杣山に起り、以て義貞に應ず。保將に拔いて還らんとし、同志の者を得んと思ふ。宇都宮泰藤・天野政貞、保と營を隣る。一日客あり、二人に問うて曰く、「重畫中黑孰れか美なる」と。泰藤曰く、「中黑なる哉。三鱗廢れて重畫興る。重畫に代る者は中黑に非ずや」と。三鱗は、北條氏の徽號なり。政貞曰く、「然り」と。保聞いて竊に喜び、寢く二人と款し、因つて其の志を告ぐ。二人之に同ず。

通釋　尊氏は又高師泰を遣はし兵六萬を率ゐて、海陸兩方面から來り攻めさせた。金崎は山を後にし、前は海

に臨んでゐる。城兵は拒ぎ戰つて毎日千餘人を斃した。十一月、城兵が海上を遙かに望み見ると、泅いでこちらに來てゐる者がある。來て見るとそれは瓦忠景であつた。詔書を髻に結びつけてゐたが、それを差し出した。思ふに、それは天皇が京都から吉野にお逃げ込みになり、そこにかりの御所を建てられたので、義貞に詔して京都を攻めさせようといふのであつた。義貞等は非常に喜んだ。その時瓜生保は、賊軍中にあつて、金崎城下にゐた。そして彼の諸弟どもは杣山に兵を起して、義貞に味方をした。保も拔けて歸らうとして、誰か同志の者はないかと思つて居た。宇都宮泰藤・天野政貞は保と陣屋を隣合はせてゐた。或る日、客があつて泰藤・政貞の二人に向つて尋ねていふには「足利の紋所の二つ引と、新田の紋所の中黑とどつちが美しいだらうか」と泰藤答へて曰ふに「それは中黑である。三鱗がすたれて二つ引が興つた。この二つ引に代るのは中黑ではあるまいか」と。三鱗といふのは北條氏の紋所である。政貞も「全くさうだ」といつた。保はそれを聞いて、ひそかに喜び、追ひ〳〵に二人と懇意にし、因つて自分の志を打ち明けた。二人も之に贊成した。

時高師泰四設關、以符出入。保詐請以百五十人歸邑取蔬。吏給符如其言。保削符、改書三百人、與泰藤・政貞俱出關入杣山。義鑑、及三弟源淋・重・照、皆大喜、推義治爲將、舉旗招兵。兵聚千餘、扼守北道。師泰聞之、遣六千騎來擊。保悉焚聚落、故遺湯尾一驛、以誘敵。敵至、宿驛中。保與泰藤遣輕兵夜襲敗之。聞足利高經引兵歸國府、又

要撃破之。傍近望風、爭附義治。義治有不豫色。義鑑曰「郎君可喜而憂、何也」曰「恐金崎城守之苦焉爾」義鑑泣下。泰藤・政貞隔墻聞之曰「此子有心腸如此。吾曹曷可不出力。」

訓讀 時に高師泰、四もに關を設け、符を以て出入せしむ。保詐り百五十人を以て、邑に歸り蒭を取らんと請ふ。吏、符を給すること其の言の如くす。保、符を削り、改めて三百人と書し、泰藤・政貞と倶に關を出でゝ、杣山に入る。義鑑及び三弟源琳・重・照、皆大に喜び、義治を推して將と爲し、旗を擧げ兵を招く。兵聚るもの千餘、北道を扼守す。師泰、之を聞き、六千騎を遣はし來り擊たしむ。保、悉く聚落を焚き、故に湯尾一驛を遺し、以て敵を誘ふ。敵至り、驛中に宿す。保、泰藤と輕兵を遣はし、夜襲はしめて之を敗る。足利高經兵を引いて國府に歸ると聞き、又要擊して之を破る。傍近、風を望み、爭うて義治に附く。義治、不豫の色あり。義鑑曰く、「郎君、喜ぶべくして憂ふるは何ぞや」と。曰く、「金崎城守の苦を思ふ爾」と。義鑑泣下る。泰藤・政貞、墻を隔てゝ之を聞いて曰く、「此の子、心腸あること此くの如し。吾が曹曷ぞ力を出さゞる可けんや」と。

通釋 當時高師泰は四方に關所を拵へて、手形を以て出入りさせてゐた。保は詐つて百五十人をつれて、領地へ歸り、馬にやる豆を取つて來たいと願ひ出た。役人は手形をその言ふがまゝに與へた。保はその手形を削つて三百人と書き改め、泰藤・政貞と一緒に、關所を出て、杣山に入つた。弟義鑑及び三人の弟源琳・重・照は皆大に喜び、義治を推し立てゝ大將となし、旗を擧げて、兵士を招いた。兵士の集る者千餘人もあつて、北陸道を喰ひ

止めた。師泰は之を聞いて、六千騎を遣はして來り撃たしめた。保は悉く村を燒き、わざと湯尾の一驛だけを殘して置いて、敵を誘うた。敵がやつて來て果して湯尾の驛中に宿泊した。保は、泰藤と一緒に身輕な兵を派遣して、夜、襲うて之を敗つた。足利高經が兵をつれて國府に歸ると聞いたので、之を待ち受けて擊ち破つた。附近の者等はその風を望んで、爭つて、義治に屬いた。しかし、義治は不機嫌な樣子であつた。義鑑がいふのに、「若樣はお喜びなさるべきのに、心配さうにしておいでなさるは如何なる譯で御座いますか」と。義治がいふのに「金崎城に籠つてゐる者の苦勞を思ひ遣つてゐるからである」と。義鑑はそれを聞いて涙を落した。泰藤・政貞が墻を隔てて之を聞いて曰ふには「この方はこれほどお情け深いのである。吾等はどうして此の方のために力を出さないでなるべきか」と。

語釋 湯尾（越前）

明年、正月、推里見時成爲將、以五千騎救金崎。師泰遣兵二萬逆戰。諸將敗走、時成爲賊所圍。保・義鑑挺身赴援。其三弟欲從之。義鑑叱曰「吾兄弟皆死、誰翼式部君者」三弟乃止。時成・保・義鑑皆死、餘衆走歸杣山。保有老母。酌酒獻義治曰「兒輩不力。乃亡里見公。然使兒輩盡還、則妾心云何。今二兒致命。足慰妾心耳」將士爲之奮激。然力不能再擧。

【訓讀】明年正月、里見時成を推して將と爲し、五千騎を以て金崎を救ふ。師泰、兵二萬を遣はし逆へ戰はしむ。義鑑叱し諸將敗走し、時成、賊の圍む所となる。保・義鑑、身を挺して赴き援く。其の三弟之に從はんと欲す。義鑑叱して曰く、「吾が兄弟皆死せば、誰か式部君を翼くる者ぞ」と。三弟乃ち止む。時成・保・義鑑皆死し、餘衆走つて杣山に歸る。保、老母有り。酒を酌み義治に獻じて曰く、「兒輩力めず。乃ち里見公を亡ふ。然れども兒輩をして盡く還らしめば、則ち妾の心、何と云はん。今二兒、命を致す。妾の心を慰むにる足るのみ」と。將士、之が爲めに奮激す。然れども力再擧すること能はず。

【通釋】翌年正月に、里見時成を推して大將となし、五千騎を引きつれて、金ケ崎を救つた。師泰は、兵二萬を遣はして、それを迎へ戰はしめた。味方の諸將は敗走し、時成は賊に圍まれた。保と義鑑は、身を拔き出して援けに行つた。その三人の弟もついて行かうとした。義鑑が叱つて曰ふには「吾々兄弟が皆討死したら誰が式部殿(義治のこと)を助けるんだ」と。そこで三人の弟は行くことを止めた。時成・保・義鑑は、皆討死し、殘つた軍勢は走つて、杣山に歸つて來た。保には老母があつた。酒を酌んで義治に獻じていふには「倅どもが十分の働きを致しませなんだ。そのために里見殿を討死させたので御座います。(相濟まぬ次第で御座います。)しかし倅どもが皆生きて還つたら、妾の心は云ひ樣もない程申譯の立たぬことゝなるので御座いました。今二人が命を棄てました。これで妾の心も慰められたと申すので御座いませう」と。少しも嘆かないので、將士は之が爲めに感激して終つた。併し力足らずして、再び兵を出すことは出來なかつた。

【語釋】式部君(義治は式部少輔であつた。)

金崎城中、日望杣山援、不至。已而糧竭。義貞・義助殺所愛馬、以食士卒。將士皆勸其出赴杣山、以計夾攻。義貞・義助從之。三月、以河島維頼爲鄕導、乘夜出城、潛入杣山城。城兵大喜、日議援金崎。而賊兵乘暖來聚、至十萬騎。杣山兵僅五百人、甲馬不備、逗撓二旬。金崎兵食馬、馬盡、無可食者。賊候知之、四面齊登。城兵力竭不能戰。外城既破。由良具滋・長濱顯寛入見義顯曰「事已至此。脫東宮而留死。臣等請拒戰。君徐爲計」。率五十人出、割死尸相共食之、力拒前門。

[illegible] 金崎の城中、日に杣山の援を望めども至らず。已にして糧竭く。義貞・義助、愛する所の馬を殺し以て士卒に食はしむ。將士皆其の出でゝ杣山に赴き以て夾攻を計ることを勸む。義貞・義助、之に從ふ。三月、河島維頼を以て鄕導と爲し、夜に乘じて城を出で、潛に杣山城に入る。城兵、大に喜び、日に金崎を援くることを議す。而して賊兵、暖に乘じて來り聚り、十萬騎に至る。杣山の兵僅に五百人、甲馬備らずして、逗撓すること二旬。金崎の兵、馬を食ひ、馬盡きて、食ふ可き者無し。賊候ひて之を知り、四面より齊しく登る。城兵力竭きて戰ふ能はず。外城既に破る。由良具滋、長濱顯寛、入りて義顯に見えて曰く「事已に此に至る。東宮を脫せしめて留り死せん。臣等請ふ、拒ぎ戰はん。君、徐ろに計を爲せよ」と。五十人を率ゐて出で、死尸を割き、相共に之を食ひ、力めて前門を拒ぐ。

通釋 金崎の城の中では、日々杣山の方から援兵の來るのを待ち望んでゐたが、やつて來ない。その内に兵糧が無くなつて終つた。義貞・義助は自分等の愛してゐる馬を殺して士卒に食はせた。義貞の部下の將士共は皆義貞が此の城を出て、杣山へ行き、そして敵を挾み討ちにすることを勸めた。義貞・義助はそれに從つた。延元二年の三月、河島維頼を道案内となし、夜の間に乘じて金崎城を出で、潜かに杣山城へ入つた。杣山の城兵は大に喜び、毎日、如何にして金崎城を援けんかと相談した。そして賊兵は春で時候が暖かであるのに乘じて、集り來り十萬騎からになつた。杣山の兵は僅かに五百人で、鎧や馬も揃はないので、愚圖々々してゐること二十日程であつた。金崎の兵は馬を食ひ、その馬も既に無くなり、もう外に食ふべきものが無くなつた。賊兵はこの様子を伺ひ知つて、四方から一齊に攻め登つて來た。城兵は力竭き果てゝ、もう戰ふ勇氣はなくなつた。外側の城は既に破れて終つた。由良具滋・長濱顯寛が、内に入り義顯に會つて曰ふには「もう萬事此のやうになりました。此の上は皇太子をお逃がし申して、我々は此處に踏み留りて討死仕らん。臣等は敵を拒いで戰ひまする。君に於かれては、靜かに御自害召されませ」と。かくて五十人の部下を引き連れて城を出で、其處らに轉ろがつてゐる死骸の肉を割いで、皆でそれを食ひ、腹を拵らへて、懸命に前門を拒いだ。

語釋 來聚（金崎城に來集りまつた。）○逗撓（氣遲れがしてグズ〳〵してゐること。）

義顯謂二皇子尊良一曰「臣將種、不レ可レ不レ死。殿下與レ臣異。勿二遽自殘一。」皇子笑曰「吾視二卿死一豈可二獨生一。」因問二義顯自殺之方如何一。義顯曰「視二臣所一レ爲。」卽拔レ刀、自樹二左脇一、劃至二其右一、

奉刀於皇子而伏。皇子取刀。血滑不可握。握以衣袖、自刄而死。藤原行房・里見時義・武田與一・氣比氏治等、皆殉死之。

【訓讀】義顯、皇子尊良に謂つて曰く、「臣は將種、死せざるべからず。殿下は臣と異なれり。遽に自ら殘ふ勿れ」と。皇子笑ひて曰く、「吾れ卿の死を視て、豈に獨り生く可けんや」と。因つて義顯に自殺の方如何と問ふ。義顯曰く「臣の爲す所を視よ」と。卽ち刀を拔き、自ら左脇に樹て、劃して其の右に至り、刀を皇子に奉りて伏す。皇子刀を取る。血滑にして握るべからず。握るに衣袖を以てし、自刄して死す。藤原行房・里見時義・武田與一・氣比氏治等、皆之に殉死す。

【通釋】義顯は皇子尊良に謂つて曰ふのに「臣は武門大將の子で御座いますから、死なねばなりませぬ。殿下は臣とは違つて皇族に渡らせらるゝのです。早やまつて自害抔なされてはなりませぬぞ」と。尊良親王はお笑ひになつて仰せらるゝには「卿が死ぬるのを視て、如何して私獨りが生きてゐられようか」と。そこで義顯に自殺の仕方は何のやうにすれば宜いかとお尋ねになつた。義顯が曰ふに「臣の致しまする所を、よく〳〵御覽ぜられませ」と。早速刀を拔いて、自分で左脇腹にプツリと突き立て、一文字に右脇腹に引いて、その刀を親王の御前に捧げてツッ伏した。尊良親王はその刀をお取り上げになつた。血でヌル〳〵してゐて握ることが出來ない。そこで衣の袖を卷いてお握りになり、自害なされてお果てなされた。藤原行房・里見時義・武田與一・氣比氏治等の人々は、此の時皆殉死した。

語釋 劃（文字一に引くこと。）

氣比齊晴有膂力、善泅。舟載太子。無楫櫓。施紐于舟、執之而游。游千餘歩、至蕪木浦、託土人、使奉之杣山、而歸死于金崎。具滋・顯寛謂事畢矣、開門冒陣、進薄師泰。賊認其疲羸、覬輙殺之。凡城兵八百、降者十二人而已。其餘皆死。栗生顯友・船田經政等四人、匿岩穴免焉。太子匿蕪木浦。浦人叛、告之賊。賊取太子、問義貞兄弟所在。太子紿曰「昨自殺矣、其兵火之」賊乃押送太子於尊氏、傳義顯首、而不問義貞。

訓讀 氣比齊晴、膂力有り、善く泅ぐ。舟に太子を載す。楫櫓無し。紐を舟に施し、之を執りて游ぐ。游ぐこと千餘歩、蕪木浦に至り、土人に託し、之を杣山に奉ぜしめ、而して歸りて金崎に死す。具滋・顯寛、事畢ると謂ひ、門を開いて陣を冒し、進んで師泰に薄る。賊、其の疲羸を認め、覬れば輙ち之を殺す。凡そ城兵八百、降る者十二人のみ。其の餘は皆死す。栗生顯友、船出經政等四人、岩穴に匿れて免る。太子、蕪木浦に匿る。浦人叛き、之を賊に告ぐ。賊、太子を取り、義貞兄弟の在る所を問ふ。太子紿いて曰く、「昨自殺し、其の兵之を火く」と。賊乃ち太子を尊氏に押送し、義顯の首を傳へて、義貞を問はず。

通釋 氣比齊晴は大膂腕の力のある男で、又泅が上手であつた。舟に太子をお乘せ申した。しかし楫や櫓が無かつた。それで彼は大きな綱を舟に縛りつけ、それを持つて游いだ。彼れ此れ千餘歩も游いで、蕪木浦に着き、

其處の土着の民に太子を預け、杣山へお連れ申させることにして、自分は金崎へ歸つて討死した。前門を防いでゐた具濟、顯寛等は、（太子も既にお逃げになつたことだらうし、義顯も既に御自害なされた事だらう）、萬事濟んだことゝ思つて、今は此れまでと門を開いて敵陣を冒し、進んで師泰に迫つた。賊は具濟等二人が大層疲れ弱つてゐるのを認め、出會ひがしらに直ぐ殺して終つた。皆で城兵八百人、内降參したものは十二人に過ぎなかつた。その外は皆討死したのである。栗生顯友・船田經政等の四人は岩穴に匿れて、免れ得た。太子は蕪木浦に匿れてゐらせられた。浦の者共が太子に叛いて、賊の方へ密告した。そこで賊は太子を捕へ、義貞兄弟の在りかを訊ねた。太子は欺いて仰せらるゝには 義貞兄弟は昨日自殺をなし、其の部下の兵が死骸を燒いて終つたと。そこで賊は太子を京都の尊氏の所へ、押し込めて送り屆け、義顯の首を傳へ送つて、義貞の事は格別の吟味もしなかつた。

【語釋】 齊晴（氏治の子、大宮司太郎と稱した。）○蕪木浦（越前）○四人（他の二人は土岐阿波守賴時・矢島七郎宗榮。）○押送（護送すること。牢の乘り物で送ること。）

義貞在杣山、常欲一戰雪恥、以爲行宮聲援、間招聚義故。夏、大館氏明自京師逃伊豫、江田行義逃丹波、金谷經氏逃播磨、並起兵。義貞次子德壽在上野、聞源顯家西上、聚兵應之、欲先發攻鎌倉。及顯家至、合兵攻拔之。於是、歸義貞者頗多。尊氏聞義貞未死也、冬、遣足利高經舉北陸兵來擊。據越前府、出兵交戰。義貞遣畑時能、糾加賀兵、攻拔大聖寺城、遣義助及細谷秀國、入越前、築三砦、與高經相持。明年二月、雪釋。

義助欲益築城、逼敵、率百餘騎、相地於鯖江、遇賊將細川孝基以五百騎奄至。義助擊走之、因擧火招援。義貞來援。高經又以數千騎來、夾水而陣。我兵亂流大戰、擊破高經。高經走保足羽。賊望風解走者三十餘城。義貞因據國府。事聞京師。尊氏・直義怒曰「太子紿我至此」。遂鴆殺之。

【訓讀】義貞、杣山に在り。常に一戰して恥を雪ぎ、以て行宮の聲援を爲さんと欲し、間に義故を招聚す。夏大館氏明京師より伊豫に逃れ、江田行義丹波に逃れ、金谷經氏播摩に逃れ、並に兵を起す。義貞の次子德壽上野に在り。源顯家西上すと聞き、兵を聚めて之に應じ、先發して鎌倉を攻めんと欲す。顯家至るに及び、兵を合せ、攻めてこれを拔く。是に於いて、義貞に歸する者頗る多し。尊氏、義貞未だ死せずと聞くや、冬、足利高經を遣はし、北陸の兵を擧げ來り擊たしむ。越前の府に據り、兵を出だして、交〻戰ふ。義貞、畑時能を遣はし、加賀の兵を糾し、攻めて大聖寺の城を拔かしむ。義助及び細谷秀國を遣はし、越前に入り、三砦を築き、高經と相持せしむ。明年二月、雪釋く。義助、益〻城を築き、敵に逼らんと欲し、百餘騎を率ゐ、地を鯖江に相す。賊將細川孝基五百騎を以て奄ひ至るに遇ふ。義助擊つて之を走らせ、因つて火を擧げ援を招く。義貞來り援く。高經又數千騎を以て來り、水を夾んで陣す。我が兵、流を亂りて、大に戰ひ、擊つて高經を破る。高經走つて足羽を保つ。賊、風を望みて解走する者三十餘城。義貞因つて國府に據る。事、京師に聞ゆ。尊氏・直義怒つて曰く、「太子、我を紿きて、此に至らしむ」と。遂に之を鴆殺す。

（通釋）義貞は、杣山にゐた。常に一戰してこれまでの耻をすゝいで、遂に吉野の行宮に加勢をしようと思ひ、ひそかに義を忘れぬ古馴染を呼び聚めた。この夏、大館氏明は京都から伊豫に逃れ、江田行義は丹波に逃れ、金谷經氏は播磨に逃れ、皆兵を起した。義貞の次男の德壽は、上野に居た。源顯家が西、京都へ討ち上ると聞いたので、兵を聚めて、之に味方をし、先發して鎌倉を攻めようと思つた。顯家がやつて來てから、それと兵を合はせて攻めて鎌倉を陷れた。そんな譯で官軍が景氣がよいので義貞に歸するものも大分多くなつて來た。尊氏は、義貞がまだ死んでゐないと聞いて、冬に、足利高經を遣はして、北陸道の兵をつれて、擊つて來させた。そして越前の國府に據り兵をだして、かはる〴〵戰つた。義貞は畑時能を遣はし、加賀の兵を集め、大聖寺の城を攻め落させた。義助及び細谷秀國を遣はして越前に入り三つの壘を築いて、高經と對陣させた。翌年二月、雪が解けた。義助は、徐ゝ城を築いて、敵に逼らうと思ひ、百餘騎を引きつれ、鯖江に往つて、土地を見立てた。賊の大將細川孝基が五百餘騎を率ゐて不意にやつて來るのに出遇つた。義助は擊つて之を走らせ、烽を擧げて救ひを招いた。義貞は援けに來た。高經は、又數千騎を率ゐてやつて來り、水を中にして陣取つた。我が兵は流を渡つて、大に戰ひ、高經を擊ち破つた。高經は、走つて、足羽を固めた。樣子を見て叶はぬと知り、城を解いて走り去つた賊が三十餘城もあつた。そこで義貞は國府に立て籠つた。その事が京都に聞えた。尊氏・直義は怒つて曰ふには「太子が義貞は死んだといはれ、私を欺ましたのでこんな事になつて終つた」と。遂に之を毒殺した。

（語釋）大聖寺城（加賀）○鯖江・足羽（越前）

當是時、官軍頗振。德壽從顯家至美濃。堀口貞滿亦附之。皆願與義貞合軍以入京

師。而顯家欲下獨專二其功一、遂引レ兵囘出二南都一。時叡山僧徒又多望二義貞來一、而義貞欲三必拔二足羽一而後西上。是時、顯家敗二死和泉一、其弟顯信與二德壽等一據二男山一。帝手書諭二義貞一援二男山一。時大井田氏經等、發二越後兵一、擊二破普門・富樫二氏一。七月、進至二越前一。義貞幷二其兵一、將レ攻二高經一。而詔書適〻至。義貞感奮曰「自レ有二源平氏一、未レ聞下得二天子親書詔一者上也」。因欲三直赴二援一。用二兒島高德策一、自以二兵三千一備二高經一、以二二萬一附二義助一、至二敦賀一。聞二男山陷一、引還。

訓讀　是の時に當り、官軍頗る振ふ。德壽、顯家に從つて美濃に至る。堀口貞滿も亦之に附く。皆義貞と軍を合せ以て京師に入らんと願ふ。而して顯家獨り其の功を專にせんと欲し、遂に兵を引き囘りて南都に出づ。時に叡山の僧徒又多く義貞の來るを望む。而るに義貞必ず足羽を拔きて後に西せんと欲す。是の時、顯家・和泉に敗死し、其の弟顯信、德壽等と男山に據る。帝手書もて義貞を諭して男山を援けしむ。時に大井田氏經等越後の兵を發し、擊つて、普門・富樫二氏を破り、七月、進んで越前に至る。義貞其の兵を幷はせ、將に高經を攻めんとす。而して詔書適〻至る。義貞感奮して曰く、「源平氏有りてより、未だ天子親書の詔を得たる者を聞かざるなり」と。因つて直に赴き、援けんと欲す。兒島高德の策を用ひ、自ら兵三千を以て高經に備へ、二萬を以て義助に附し、敦賀に至る。男山陷ると聞き、引き還る。

通釋　この時、官軍は大に振つた。德壽は、顯家に從つて、美濃まで行つた。堀口貞滿も亦顯家に附いた。皆

いづれも義貞と軍勢を合はせて、京都に討ち入りたいと思つて居た。しかるに顯家は、自分一人で手柄を立てようと思ひ、遂に兵を率ゐ、回つて奈良に出た。その時、比叡山の僧徒も義貞が來るのを非常に望んでゐた。而るに義貞は必ず足羽を落してから後に、京都に上らうと思つた。この時顯家は和泉で敗れ死し、その弟の顯信は德壽等と一緒に男山に立て籠つた。天皇は御手づからお認めになつた書面を以て、義貞を諭して男山を援けしめられた。その時、大井田氏經等は越後の兵を繰り出して、普門・富樫の二氏を擊ち破り、七月進んで、越前に至つた。義貞は、その兵を一緒にして高經を攻めようとしてゐた。そこへ丁度詔書が來た。義貞は感激して奮つて曰ふには「源平二氏あつてからこの方、天子樣の御直筆の詔を頂戴したものがあつたとは聞いたことがない」と。そこで直ぐ行つて援けようと思つた。兒島高德の謀を用ひて自分は兵三千を率ゐて高經に備へ、二萬人を義助に與へ、敦賀まで行つた。義貞は男山が落ちたと聞いて引きかへした。

語釋　普門・富樫（普門藏人俊清、富樫介某、）

於是、合兵專攻高經。高經誘平泉寺僧兵、修藤島以下七寨、守之。義貞在河合城、夢己爲龍臥地、高經駭走。衆以爲吉夢。或曰「龍爲陽物。方陰而見、是凶兆也」。是月二日、義貞以諸軍攻足羽、至燈明寺前、分兵爲七隊、以當七寨。藤島兵擾動。我兵因疾攻、不能拔。義貞望見、遽以五十餘騎赴之、遇賊兵三百于田中。矢下如雨。我兵無楯。以

レ身蔽ニ義貞一。中野宗昌勸ニ義貞一獨身遁逃。義貞曰「失レ士而獨免、非ニ吾志一也」鞭レ馬且進。馬被レ箭殪。義貞欲レ起。有ニ白羽箭一、中ニ其眉間一。乃拔レ刀自刎而死。年三十八。賊未レ知ニ其何人一也。見ニ宗昌等、環レ尸自殺一、又檢レ尸得ニ錦囊書一。書辭曰「討レ賊之役、朕一ニ煩レ卿」蓋帝手書。乃知ニ其義貞一也。

【訓譯】是に於て、兵を合せて專ら高經を攻む。高經平泉寺の僧兵を誘ひ、藤島以下の七寨を修めて之を守らしむ。義貞河合城に在り。己れ龍となりて地に臥し、高經駭走すと夢む。衆以て吉夢となす。或ひと曰く「龍は陽物たり。陰に方つて見る。是れ兇兆なり」と。是の月二日、義貞、諸軍を以て足羽を攻め、燈明寺の前に至り、兵を分ちて七隊と爲し、以て七寨に當る。藤島の兵、擾動す。我が兵因りて疾く攻めしが、拔く能はず。義貞、望み見て、遽に五十餘騎を以て之に赴き、賊兵三百に田中に遇ふ。矢下ること雨の如し。我が兵楯無し。身を以て義貞を蔽ふ。中野宗昌、義貞に勸め、獨身にて遁逃せしめんとす。義貞曰く、「士を失ひて獨り免るゝは、吾が志に非ざるなり」と。馬に鞭うち且つ進む。馬、箭を被りて殪る。義貞起きんと欲す。白羽の箭有り、其の眉間に中る。乃ち刀を拔き白刎して死す。年三十八。賊未だ其の何人なるを知らず。宗昌等、尸を環り自殺するを見、又尸を檢し、錦囊の書を得たり。書辭に曰く、「賊を討つの役、朕、一に卿を煩す」と。蓋し帝の手書なり。乃ち其の義貞なるを知る。

【通譯】そこで兵を合はせて高經を攻めるのに集中した。高經は平泉寺の僧兵を誘き寄せ、藤島以下の七個の壘

を修繕して守らせた。義貞は河合城にゐた。義貞は自分が龍になつて地に臥したら、高經が吃驚して逃げ出したと夢みた。皆は吉い夢だと思つた。或人が曰ふのに「龍は陽に屬してゐる者。それが地即ち陰の所に現はれたのである。だからこれは不吉の知らせだ」と。この七月の二日に義貞は諸軍を率ゐて足羽を攻め、燈明寺の前に至つて、兵を分けて七隊となし、そして賊の七寨に當ることにした。七寨の中藤島の寨の兵が騒ぎ亂れた。そこで隙かさず我が兵は手嚴しく之を攻めたが、拔くことは出來なかつた。義貞は之を遠くから望み見て、急に五十餘騎を引きつれて其處へ出掛けて行つた所、途中で賊の兵三百人に田の中で出會つた。矢の下ることは雨のやうであつた。我が軍には楯がなかつた。それで部下の者が自分の身で義貞を庇つた。中野宗昌は義貞に勸めて、獨り身で逃げ延びさせようとした。義貞が曰ふには「部下の士を失つて、自分獨りで逃げるのは予の本志ではないのである」と。馬に鞭うち乍ら進んで行つた。義貞の馬が箭を受けて殪れた。義貞は起き上らうとした。その時である一本の白羽の矢が、義貞の眉間に中つた。そこで義貞は刀を拔いて自ら刎ねて死んだ。其の時年三十八歳であつた。賊は此の人が誰れであるか分らなかつた。宗昌等が其の尸骸を取り危いて自殺してゐるのを見、又その尸骸を檢べた所、錦の嚢に入れてある書を得た。その書の辭に「賊を討つ軍は、朕專ら卿に厄介をかけるぞよ」と書いてあつた。思ふに後醍醐天皇の御直き筆である。以上のことを總合して、それは義貞であることを知つたのである。

【史蹟】平泉寺・藤島・河合城・燈明寺（越前）

時日暮、我軍無赴援者。已而見數騎還河合也、以爲義貞、各自退還。義助還、至河合

求義貞不在。久而知實。將士惶惑、有叛者。夜將火城者三。天明、檢其兵、則二千而已。
義助乃走歸國府、使河島維頼保三峯、畑時能保湊城、瓜生照保杣山。

訓讀 時に日暮れ、我が軍赴き援くる者無し、已にして數騎河合に還るを見、以て義貞と爲し各々自ら退き還る。義助還り、河合に至り義貞を求むるに在らず。久しうして實を知る。將士惶惑し、叛く者有り。夜將に城を火かんとすること三たび。天明、其の兵を檢すれば則ち二千のみ。義助乃ち走つて國府に歸り、河島維頼をして三峯を保ち、畑時能をして湊城を保ち、瓜生照をして杣山を保たしむ。

通釋 時に日が暮れて我が軍は援けに行くものもない。その内に數騎の兵が河合の方へ還るのを見て義貞だと思ひ込み、皆銘々退却して還つて行つた。義助は還つて河合まで來て義貞をさがしたがゐなかつた。暫らくして義貞が討死したといふことが分つた。將士どもは惶れあわて、中には謀叛するものもあつた。その夜、城に火をつけようとしたこと、三度にも及んだ。夜が明けて、兵をしらべて見ると二千だけであつた。そこで義助は走つて國府に歸り、河島維頼をして三峯を固めさせ、畑時能をして湊城を固めさせ、瓜生照をして杣山を固めさせた。

語釋 三峯（越前）

照歸、遇藤原氏于淺津橋。藤原氏者、中納言行房妹、而義貞夫人也。初爲勾當内侍。
延元初、義貞夜入直、見其彈箏、心慕焉。帝聞而憐之、召義貞賜酒、因賜内侍爲妻。伉

儷甚篤。義貞之受詔北行、置之於近江。居二歲、迎致杣山。既至、聞義貞在足羽、轉赴之。途遇照照下馬、跪輿前曰、夫人安往。公已戰歿矣。夫人大慟、殆絕。歸杣山、欲執喪于義貞舊居。以敵來逼、遂歸京師。是時、義貞首、傳至京師。足利氏君臣相慶、終梟之。藤原氏聞之、卽夜削髮、遂匿西山終身。

【讀方】照歸り、藤原氏に淺津橋に遇ふ。藤原氏は中納言行房の妹にして、義貞の夫人なり。初め勾當內侍たり。延元の初め、義貞、夜入直し、其の箏を彈くを見て、心に慕ふ。帝聞いて之を憐み、義貞を召し酒を賜ひ、因つて內侍を賜ひて妻と爲さしむ。伉儷甚だ篤し。義貞の詔を受けて北行するや、之を近江に置く。居る事二歲、杣山に迎へ致す。旣に至り、義貞足羽に在りと聞き、轉じて之れに赴く。途照に遇ふ。照馬より下り、輿前に跪いて曰く「夫人安くに往く。公已に戰歿したり」と。夫人大に慟し、殆んど絕ゆ。杣山に歸り、喪を義貞の舊居に執らんと欲す。敵來り逼るを以て、遂に京師に歸る。是の時、義貞の首傳へて京師に至る。足利氏の君臣相慶し、終に之を梟す。藤原氏之を聞き、卽夜髮を削り、遂に西山に匿れて身を終れり。

【通釋】照は、杣山に歸る途中、淺津橋で藤原氏に出會つた。藤原氏といふのは、中納言行房の妹であつて、義貞の奥方である。これより先き、勾當內侍といふ女官であつた。延元の初めに義貞がある夜、とのゐした時、內侍の琴を彈くのを聞いて、心に慕つた。天皇は之をお聞きになつて不憫に思召され、義貞を召して、酒を下され、そこで內侍を賜はつて妻となさしめられた。夫婦仲が至極むつまじかつた。義貞が詔を受けて北國へ行

つたとき、内侍を近江に預け置いた。それから二年經つて杣山に呼びよせた。内侍は杣山に來て見ると義貞は足羽に居ると聞いたので、道を換へてその方へ赴いた。その途中で照に遇つたのである。照は馬から下りて、輿の前に平伏して曰ふには「奥方には何處へ御出でなされるのですか。義貞公は最早討死なされました」と。夫人は非常になげいて氣絶せむばかりであつた。それから杣山に歸り、義貞がもと住んでゐた處で喪に服さうと思つた。所が敵が詰め寄せるので遂に京都へ歸つて行つた。この時、義貞の首が京都へ屆いた。足利方の君も家來も互ひに喜び合ひ、終に之を獄門にかけた。藤原氏はそれを聞いてその晩すぐ髮を剃つて尼となり、とう〳〵西山に匿れて一生を過した。

【語釋】淺津橋（越前）○勾當内侍（内侍の長は尙侍といひ、其の次を典侍、其の次を掌侍。總稱して内侍といふ。宣傳奏請を掌るのを勾當といふ。）○伉儷（配偶の義。）

藤原氏無子。義顯・義興・義宗、皆産於東國。義顯先義貞殉難。義興妾出、故義宗代義顯爲嗣。六歲、爲左兵衛佐、兼武藏守。義興卽德壽、男山之陷、走歸吉野。帝壯其貌曰「汝興乃父家者」。因賜名義興、授右兵衛佐。義貞沒而二旬、令義興與北條時行、從皇子宗良、赴東國。遇颶相失、漂至武藏。於是、與義宗皆匿東國。

【訓譯】藤原氏、子無し。義顯、義興、義宗、皆東國に產る。義顯、義貞に先だつて難に殉ふ。義興は妾の出、故に義宗、義顯に代つて嗣と爲る。六歲、左兵衛佐となり、武藏守を兼ぬ。義興は卽ち德壽、男山の陷るや、走

つて吉野に歸る。帝、其の貌を壯として曰く「汝は乃父の家を興す者」と。因つて名を義興と賜ひ、右兵衛佐を授けらる。義貞沒して二旬、義興をして北條時行と、皇子宗良に從ひ、東國に赴かしむ。颶に遇ひて相失し、漂うて武藏に至る。是に於て、義宗と皆東國に匿る。

【通釋】藤原氏には子がなかつた。義顯・義興・義宗は、皆關東で生れたのである。義顯は義貞より先きに金崎で國難に殉じた。義興は妾腹の子であつたから、義宗が義顯に代つて後嗣となつた。年六歳で左兵衛佐となり、武藏守を兼ねてゐた。義興は、即ち德壽であつて、男山が陷落した時、走つて吉野に歸つた。天皇はその容貌を御覽になつて、如何にも壯んなりとされ、仰せられるには「お前は父の家を興すべきものである」と。そこで名を義興と賜り、右兵衛佐を授けられた。義貞が歿して後、二十日經つて、義興をして北條時行と共に皇子宗良親王について東國に行かしめられた。海で大風に遇つて互に見失ひ、漂流して武藏に到着した。そこで義宗とともに皆東國にかくれた。

義助・義治在北國。七月、義助稍收敗軍、與畑時能・由良光氏・一井氏政等、各居諸城、而會河合、以兵六千攻足羽。時能先行、夜薄城挑戰。足利高經火城而走。是歲、帝崩、後村上天皇即位。十二月、詔義助代義貞統師。義助聞先帝臨崩特眷新田氏也、方思報效焉。而尊氏發七國兵來攻。諸城悉陷、義助走美濃。獨畑時能以殘兵二十

七人、據鷹巣城。城甚險固、賊不能拔。足利高經・高師治、合兵圍之。結三十七營、互進迭攻。

【訓讀】義助・義治、北國に在り。七月、義助稍敗軍を收め、畑時能・由良光氏・一井氏政等と、各諸城を屠りて、河合に會し、兵六千を以て足羽を攻む。時能先づ行き、夜、城に薄りて戰を挑む。足利高經、城を火いて走る。是の歳、帝崩じ、後村上天皇、位に卽く。十二月、義助に詔して、義貞に代りて、師を統べしむ。義助、先帝崩ずるに臨み、特に新田氏を眷眷せりと聞くや、方に報效を思ふ。而るに尊氏七國の兵を發し來り攻む。諸城悉く陷り、義助美濃に走る。獨り畑時能、殘兵二十七人を以て鷹巣城に據る。城甚だ險固にして、賊拔くこと能はず。足利高經・高師治、兵を合せて之を圍む。三十七營を結び、互に進み迭に攻む。

【通釋】義助・義治は北國に居た。七月、義助は、だん〳〵敗軍を集めて、畑時能・由良光氏・一井氏政等と各諸城を落して賊を殺し、河合に集り、兵六千を引きつれて、足羽を攻めた。時能は先づ出かけて、夜、城に迫つて戰をしかけた。足利高經は城を焚いて逃げた。この年、後醍醐天皇は崩ぜられ、後村上天皇が位に登らせられた。その十二月に、義助に詔し、義貞に代つて、軍隊を總べさせられた。義助は、先帝が御崩御の際、特別新田氏に厚く御心をかけられて居たと聞いて、此の際、御恩に報い力を盡さむと思つた。しかるに尊氏は七國の軍勢を發して攻めて來た。諸城は皆陷つたので、義助は美濃に走つた。たゞ畑時能は、殘兵二十七人を引きつれ、鷹巣の城に立て籠つた。その城は非常に堅固で、賊は之を落すことは出來なかつた。足利高經・高師治は兵を合せて、之を取り圍んだ。三十七ケ所に陣屋を作り互に進み攻めた。

時能幼喜角觝、材武絶人。姪僧快舜善戰。僕惡八郎缺脣而有力。又畜一狗、名犬獅子。三人者、夜出襲賊。每向一營、輒使狗先往。賊有備則吠。不則搖尾還報。三人者乃斫營入、大呼奮擊。賊輒委甲走、各潛賂時能曰「願勿襲我營。」時能驍名震敵中、呼曰畑將軍。會一井氏政來入城共守。時能乃留氏政于城、而自以十六人、夜出伊地山、高經以爲平泉僧徒來援城兵也、將三千騎邀擊。時能鮮甲鐵馬、躍出曰「畑將軍在此。」高經陣動。時能馳而乘之。高經潰走。而快舜被七創、即日死。時能甲隙皆創、飛鏃沒肩、病三日死。自是北國無復官軍矣。

【通釋】時能、幼より角觝を喜み、材武人に絶す。姪の僧快舜善く戰ふ。僕惡八郎、缺脣にして力有り。又一狗を畜ひ、犬獅子と名づく。三人の者、夜出でゝ賊を襲ふ。一營に向ふ每に、輒ち狗をして先づ往かしむ。賊備有れば則ち吠ゆ。不らざれば則ち尾を搖して還り報ず。三人の者、乃ち營を斫つて入り、大に呼んで奮擊す。賊輒ち甲を委てゝ走る。各潛に時能に賂うて曰く、「願はくば我が營を襲ふこと勿れ」と。時能、驍名、敵中に震ひ、呼んで畑將軍と曰ふ。會〻一井氏政來つて城に入り共に守る。時能乃ち氏政を城に留めて、自ら十六人を以て、夜伊地山に出づ。高經以て平泉の僧徒來り、城兵を援くと爲し、三千騎に將として邀へ擊つ。時能、鮮甲鐵馬、躍

り出でて曰く、「畑將軍此に在り」と。高經の陣動く。時能馳せて之に乘ず。高經潰走す。而して快舜、七創を被り、卽日死す。時能、甲隙皆創あり。飛鏃、肩に沒し、病むこと三日にして死す。是より北國復官軍無し。

通釋 時能は幼い頃から相撲が好で材藝、武勇、人にすぐれて居た。又姪の僧快舜は、善く戰つた。部下の惡八郎は三つ口で力があつた。又一匹の犬を飼つて、犬獅子と名づけてゐた。この三人が夜出でゝ賊を不意に討つた。一つの陣屋に向ふ每に、狗を先きにやつた。賊の方で用意がしてあると吠えた。備がないと尾をふつて、還つて來て知らせた。そこで三人の者は陣屋に切り込んで、大聲に呼ばはり乍ら奮ひ擊つた。だからいつも賊は鎧を棄てゝ逃げ出した。時能に攻められると大變だから、皆各ひそかに時能に賄賂を送つて曰ふのに「どうか私の陣屋は襲はないで下されよ。」と。時能の勇名け、敵中に震ひ渡り、呼んで畑將軍といつた。丁度一井氏政がやつて來て、城に入り、ともに守つた。そこで時能は氏政を城に留め置いて、自分は十六人をつれて、夜、伊地美山に乘り出した。高經は、平泉寺の僧徒が來て城兵を救ふのだと思ひ、三千騎に將となつて迎へ擊つた。時能は事な鎧を一着に及び、鎧を着せた馬に乘り、躍り出て曰ふのに、「畑將軍はこゝに居るぞ」と。高經の陣は動搖してひるんだ。時能は馳せて敵のひるむのにつけ込んだ。高經は潰え走つた。しかるに快舜は七個所の傷を負ひ、その日に死んで終つた。時能は、鎧の隙間は皆傷ついてゐた。流れ矢の根が深く肩に埋まり、三日煩うて死んだ。これからはもう北國地方には官軍が無くなつて終つた。

語釋 惡八郎（名は猶賴。）〇伊地山（越前）〇鐵馬（鎧を着た馬。）

賊乃攻義助於根尾城。城陷。義助以族從數十人、微服投尾張氏。留十餘日、道伊賀・

伊勢、而至于行宮。帝延見、泣而勞之、詔加一級、且賞從者。藤原實世竊言曰、「是何異平維盛敗歸而加爵哉。」藤原隆資折之曰、「義助之敗、非其罪也。近日北國將士、不由大將、而取裁於南山。南山臣僚、以服微勞、而得邑於北國。將權以輕、士心以驕、而義助受其敗。豈其罪也。主上察之、乃有是命。猶秦穆勞孟明耳。子何失喩。」實世不能答。帝遂拜義助刑部卿。

【訓讀】賊乃ち義助を根尾城に攻む。城陷る。義助、族從數十人を以て、微服して尾張氏に投ず。留ること十餘日。伊賀・伊勢に道して、行宮に至る。帝延見し、泣いて之を勞し、詔して一級を加へ、且つ從者を賞す。藤原實世竊に言つて曰く、「是れ何ぞ平維盛敗れ歸つて爵を加ふるに異ならんや」と。藤原隆資之を折きて曰く、「義助の敗は其の罪に非ざるなり。近日北國の將士、大將に由らずして、裁を南山に取る。南山の臣僚、微勞に服したるを以て、邑を北國に得。將權以て輕く、士心以て驕る。而して義助、其の敗を受く。豈に其の罪ならんや。主上之を察し、乃ち是命有り。猶秦穆、孟明を勞するがごときのみ。子何ぞ喩を失ふや」と。實世答ふること能はず。帝遂に義助を刑部卿に拜す。

【通譯】そこで賊軍は義助を根尾城に攻めた。城は陷落した。義助は、一族從者數十人を連れ、目立たぬやうな服裝に變へ、尾張の熱田大宮司の家に宿つた。そこに逗留すること十餘日、伊賀伊勢に路を取つて吉野の行宮へ

行つた。天皇は召して御會ひなされ、涙を流して之を勞らはれ、詔して位一階を進められ、その上從者共をも賞せられた。藤原實世が竊に言つて曰ふには、「これは平維盛が富士川で負けて京都に還つて爵位を加へられたのと少しも違はぬ。」と。藤原隆資は之をやりこめて曰ふには、「義助が負けたのは彼の罪ではない。此の頃北國の將士共は大將の指圖によらないで、總て決裁を吉野に受けた。吉野の公卿方は少しばかりの骨折をしたとて、北國に領分を貰つてゐる。大將の權力は、その爲めに輕くなり、士卒の心は、その爲めに增長した。義助はそのやり難い敗績を引き受けたのである。どうして彼の罪であらうぞ。陛下はこの點を察せられたればこそこの度びの恩命があつたのである。それは丁度秦の穆公が、孟明を慰め賞したのと同樣なものである。貴公は何うして喩へを違へて維盛等に比べるのだ」と。實世もそれには返答することは出來なかつた。天皇は遂に義助を刑部卿に任命せられた。

【語釋】根尾城（美濃）○南山（吉野をさす。）○秦穆勞孟明（秦の穆公、孟明視に命じ鄭を伐つた。晉の襄公之を殽に敗つた。孟明は擒にせられたが、秦に放ち歸された。秦伯は己れの罪として其の官秩を復した。左傳文公三年に見ゆ。）

興國元年、三月、伊豫官軍請得將帥。朝議擬義助。而海陸皆敵。會備前人飽浦信胤應官軍、道乃開。於是、義助以兵五百發、四月、至伊豫國府、遇大館氏明。氏明初逃京師、詣行宮、得爲伊豫守護。與土居・得能氏、保守諸城。及得義助、軍益振。議者皆謂「西南可復也」。五月、義助疾作、七日而卒。將士秘喪。而賊已知之、來攻河江城。金谷經氏

統伊豫兵救之、大戰海上、會風起、我船漂去、賊船達岸、我兵欲冒風返之、經氏曰、我軍數奇至此、返不必利、唯當前至山陽、取一城據之、乃上備後、攻鞆城、拔而據之、山陽賊兵來戰、未決、聞賊將細川賴春圍氏明于世田城、經氏乃將數百人赴救、與賊兵數千戰敗、率殘兵歸備後、賴春乃以萬騎攻世田、三旬、城內食竭、氏明以下悉自殺。

【通釋】興國元年三月、伊豫の官軍、將帥を得んことを請ふ。朝議、義助を擬す。而れども海陸皆敵なり。會々備前の人飽浦信胤、官軍に應じ、道乃ち開く。是に於て、義助兵五百を以て發し、四月、伊豫の國府に至り、大館氏明に遇ふ。氏明初め京師を遁れ、行宮に詣り、伊豫の守護となるを得。土居・得能氏と、諸城を保守す。義助を得るに及び、軍容を振ふ。議する者皆謂ふ「西南復す可きなり」と。五月義助疾作り、七日にして卒す。將士喪を秘す。而れども賊已に之を知り、來つて河江城を攻む。金谷經氏、伊豫の兵を統べ、之を救ひ、大に海上に戰ふ。會々風起り、我が船漂ひ去り、賊船岸に達す。我が兵風を冒して之に返さんと欲す。經氏曰く「我が軍數奇此に至れり。返るも必ずしも利あらず。唯當に進んで山陽に至り、一城を取りて之に據るべし」と。乃ち備後に上り、鞆城を攻め、拔いて之に據る。山陽の賊兵來り戰ふ。未だ決せず。賊將細川賴春、氏明を世田城に圍むと聞き、經氏乃ち數百人に將として赴き救ひ、賊兵數千と戰ひ、敗れ、殘兵を率ゐて備後に歸る。賴春乃ち萬騎

を以て世田を攻む。三旬にして、城内食竭き、氏明以下悉く自殺す。

【通釋】興國元年の三月、伊豫の官軍が大將を下され度いと願ひ出た。朝廷の評議で義助がそれに當てがはれた。しかし海も陸も皆敵であつたので行くことが出來ぬ。丁度備前の人飽浦信胤が官軍に味方したので道が開けた。そこで義助は、兵五百人を率ゐて出立し、四月伊豫の國府に至り大館氏明に出遇つた。氏明はこれより前京都を逃れ出て吉野の行宮に行き、伊豫の守護に任命せられたのである。彼は土居・得能二氏と協力して諸城を固めてゐた。義助が來たので、その軍は益〻振つて來た。そこで、論者は皆西南の地方は回復することが出來るだらうといつて居つた。五月、義助は病氣が起つて、七日目に死んだ。將士どもは、その死をかくしてゐた。けれども賊は早くも之を知つて、河江城に攻め寄せて來た。金谷氏は伊豫の兵を從へて之を救ひ、大に海上で戰つた。折しも風が吹き起つて、味方の舟は流れ去り、賊の舟は岸に達した。味方は風に逆つて押し返さうと思つた。經氏が曰ふには「わが軍は不運で、こんな事になつて終つた。引き返へして見ても屹度負けるだらう。唯だこれから進んで山陽道に入り、一城を取つて、それに立て籠つたが善い」と。そこで備後に上陸して、鞆の城を攻め取り、それに立て籠つた。山陽の賊兵がやつて來て戰つた。しかしまだ勝負はきまらなかつた。このとき賊將細川頼春が、氏明を世田城に圍んで居ると聞いたので、經氏は數百人をつれて援けに行き、賊兵數千人と戰ひ、負けたので殘兵をつれて備後に歸つた。そこで頼春は一萬騎をつれて世田城を攻めた。三十日で城内の兵糧がなくなり、氏明以下皆自殺して終つた。

【語釋】興國（後村上天皇の年號。）○河江・世田（伊豫）

篠塚伊賀在城中、開門、提鐵梃而出、呼曰「吾新田公親兵篠塚也。盍殺我以得賞」。賊皆披靡。乃徐行而去。賊不敢追躡。至今治浦、見賊空船。獨有舟人。篠塚游而達之、跳入船、自名曰「送吾於隱岐」。手拔錨、樹桅、登船屋鼾睡。舟人畏怖、送至隱岐、以終焉。篠塚有女、仕皇太后、曰伊賀局。後嫁楠正儀。勇力類父云。

【訓讀】篠塚伊賀、城中に在り、門を開き、鐵梃を提げて出で、呼んで曰く、「吾は新田公の親兵篠塚なり。盍ぞ我を殺し以て賞を得ざる」と。賊皆披靡す。乃ち徐行して去る。賊敢て追躡せず。今治浦に至り、賊の空船を見る。獨り舟人有り。篠塚游いで之に達し、跳つて船に入り、自ら名のりて曰く、「吾を隱岐に送れ」と。手づから錨を拔き、桅を樹て、船屋に登り鼾睡す。舟人畏怖し、送つて隱岐に至り、以て終れり。篠塚女有り、皇太后に仕へ、伊賀局と曰ふ。後楠正儀に嫁ぐ。勇力、父に類すと云ふ。

【通釋】篠塚伊賀は、城中に居たが、門を開き、鐵棒を提げて出で、大聲に呼ばはつて曰ふには「吾は新田公の麾下の兵で篠塚と申す者である。何故我を殺して賞與を得ないのだ」と。賊は皆恐れ開き靡いた。そこで篠塚は靜かに歩いて立ち去つた。賊兵は押して跡をつけようともしなかつた。かくて今治の浦まで來ると、賊の棄てた舟を見つけた。たゞ船頭ばかり居た。篠塚は游いでその舟に至り、跳つて舟に乘り、自ら名乘つて曰ふには「吾を隱岐まで送れよ」と。彼は自分の手で錨を引き揚げ、帆柱を立て、やかたに上つて大いびきで眠つて終つた。船頭は恐れて隱岐に送り屆けたが、篠塚は其處で生涯を送つた。篠塚に娘があつて、皇太后に仕へて、伊賀局

といつた。後に楠正儀に嫁入つた。伊賀局も女ながら父に似て勇氣があつたといふことである。

【語釋】今治（伊豫）〇皇太后（後醍醐天皇の寵姫、藤原氏のことをいふ。）

義貞・義助既死、足利氏無復忌憚。兒島高德在備前、招新田義治於上野、謀起兵。不克。乃間入京師、欲襲尊氏。又不克。義治走、匿東國、與從兄義興・義宗、皆潛圖復父仇、窺釁未發也。正平六年、尊氏與直義有隙。使長子義詮守京師、而自東擊直義、殺之、入居鎌倉、立次子基氏、管領東國。義詮僞請降。帝許之。兒島高德與由良信阿、至自行宮、諭旨於新田氏曰、天子納義詮降、北還京師。其實乘虛行誅也。尊氏在彼。公等圖之機不可失矣。因進義宗左近衞少將。義宗乃徇東國。義貞・義助遺臣、奮起來從、得數萬人。直義故黨石堂義房・三浦高通等、又爲內應、約戰酣起刺尊氏。尊氏覺而逐之。而義宗等未知也。

【訓讀】義貞・義助、既に死し、足利氏復忌憚する無し。兒島高德、備前に在り、新田義治を上野より招き、兵を起さんと謀る。克はず。乃ち間に京師に入り、尊氏を襲はんと欲す。又克はず。義治走り、東國に匿れ、從兄

義興・義宗と、皆潜に父の仇を復さんと圖り、事を窺ひ未だ發せず。正平六年、尊氏、直義と隙有り。長子義詮をして京師を守らしめ、而して自ら東して直義を撃ちて、之を殺し、入りて鎌倉に居り、次子基氏を立て、東國を管領せしむ。義詮、僞つて降を請ふ。帝之を許す。兒島高德、由良信阿と、行宮より至り、皆を新田氏に諭して曰く、「天子、義詮の降を納れ、北京師に還る。其の實は虛に乘じて誅を行はんとするなり。尊氏使に在り。公等、之を圖れ。機失ふべからず」と。因つて義宗を左近衛少將に進む。義宗乃ち東國を徇ふ。義貞・義助の遺臣、奮起して來り從ひ、數萬人を得たり。直義の故黨石堂義房、三浦高通等、又內應を爲し、戰酣なるとき、起つて尊氏を刺さんと約す。尊氏覺りて之を遁ふ。而して義宗等未だ知らざるなり。

【[illegible]】義貞・義助がすでに死んで終つたので、足利氏はもう忌み憚るものが無くなつた。兒島高德は、備前に居り、新田義治を上野から招びよせて兵を起さうと思つてゐた。併し其れはならなかつた。そこで內々、京都に入つて、尊氏を不意討ちしようとした。これも又ならなかつた。義治は走つて、東國に隱れ、從兄の義興、義宗と皆內々父の仇を復さうと企て、隙をねらつて、まだ事を起す所まで行かなかつた。正平六年、尊氏は直義と不仲になつた。長男義詮に京都を守らせ、そして自分は東に下つて、直義を撃つて、之を殺し、鎌倉に入つて、そこに居り、二男の基氏を立て、關東を管領せしめた。その間に義詮は、僞つて、降參を申し出た。天皇は、これをお許しなされた。兒島高德は、由良信阿と行宮からやつて來て、天子の思召を新田氏に傳へ諭して曰ふには「天子様が義詮の降參をお許しなされ、北の方京都へ御還りになる。これは實は油斷を見て、義詮等を誅せられよう爲めである。併し、今尊氏は、鎌倉に居るのである。貴公等は彼を殺すことを圖つて見られよ。この善い機會を失つてはならぬ」と。因つて義宗を左近衛少將に進められた。そこで義宗は東國に觸れとなへた。義貞や義助の

元の家來どもは奮ひ起つてやつて來て從つたので、數萬人を得た。直義のもとの徒黨の石堂義房・三浦高通なども、又裏切つて戰爭最中に、尊氏を刺し殺すことを約束した。尊氏は之を覺つて石堂等を逐ひ拂つた。しかし義宗等はまだそのことを知らなかつた。

【語釋】正平（後村上天皇の年號。）

閏正月、勒兵于武藏野、義興居左、義治居右、義宗自將中軍、在其後。尊氏兵十餘萬、義興先合。義治次之。殺傷相當。敵將饗場某、率六千騎更進。義宗麾兒玉黨、擊走饗場。饗場走、入尊氏陣。尊氏陣大亂。義宗直前、指其牙旗、大呼曰「吾今日爲天下討賊、爲一家復仇」。奮擊破之、追北馳者三十餘里、至石濱。尊氏欲自殺。其兵返戰死之。尊氏得間、濟達前岸、收兵三萬、壓水而軍。而義宗騎能屬者五百人。時已昏黑、無來助者。義宗切齒而止、乃還、求義興・義治。

【通釋】閏正月、兵を武藏野に勒し、義興左に居り、義治右に居り、義宗自ら中軍に將として、其の後に在り。尊氏の兵十餘萬、義興先合ふ。義治、之に次ぐ。殺傷相當る。敵將饗場某、六千騎を率ゐて更り進む。義宗、兒玉の黨を麾し、擊つて饗場を走らす。饗場走り、尊氏の陣に入る。尊氏の陣、大に亂る。義宗直に進み、其の牙

旗を指し、大に呼んで曰く、「吾れ今日、天下の爲めに賊を討ち、一家の爲めに仇を復す」と。奮撃して之を破り北ぐるを追ひ、馳すること三十餘里、石濱に至る。尊氏自殺せんと欲す。其の兵返り戰ひ之に死す。尊氏間を得、濟りて前岸に達し、兵三萬を收め、水を壓して軍す。而して義宗の騎能く屬する者五百人。時已に昏黑にして、來り助くる者無し。義宗、切齒して止め、乃ち還り、義興・義治を求む。

【譯】閏正月、兵を武藏野で纏め、義興は左手の大將となり、義治は右手の大將となり、義宗は自ら本隊の大將となつて、後の方に控へて居た。尊氏の兵は、十餘萬もゐて、義興は眞先きに戰つた。義治はつゞいて進んだ互角の勝負であつた。敵將饗場某は、六千騎を率ゐて代つて進んで來た。義宗は、兒玉の黨に指圖をして、擊つて饗場を走らせた。饗場は走つて尊氏の陣に逃げ入つた。尊氏の陣は大に亂れた。義宗はすかさず進み、尊氏の旗を指し、大に呼ばはつて曰ふには「吾れ今日、天下の爲めには賊を擊ち、一家の爲めには仇を返へすのである」と、奮擊して尊氏の軍を敗り、逃ぐるを追ひ馳すること三十餘里、石濱まで來た。尊氏は自殺しようとした。その部下で引きかへし尊氏のために討死した者があつた。尊氏は隙を見て川を渡り、向ふ岸につき、兵三萬を集め水に臨んで陣取つた。而るに義宗の騎兵で、よくついて來た者はたゞ五百人。時はもう黄昏時で援けに來るものもなかつた。義宗は、無念だつたが、歯を喰ひしばつて引きかへし、義興・義治をさがし求めた。

【語釋】閏正月（七年閏正月。）○饗場某（名は直氏。）○石濱（武藏）

義興・義治、見白旗兵三萬北走、以爲尊氏也、合兵追之。降者屬路。二人註馬、揖之者數。其兵不顧而前、留從者僅三百。遇伏兵數千圍之、二人苦戰而出。甲冑皆破、刀刃

如鋸。身各被數創、亡百餘騎。乃議曰「我既與武藏守相失。以此寡羸將安歸也。不若遇基氏決死」衆然之、進至關戸會石堂・三浦氏以五千騎西行、并其兵襲鎌倉。基氏悉甲出拒。義興鬪於海濱、斬三騎、馳貫賊陣。左轜斷委地。乃挾刀于脇俯結之。賊群至、擊其項及背。義興不爲動、結畢應賊。賊驚走。遂與義治合、擊走基氏、仍據鎌倉。

【訓讀】義興・義治、白旗の兵三萬北走するを見て、以て尊氏と爲し、兵を合せて之を追ふ。降る者路に屬す。二人、馬を駐めて之に揖すること數たび。其の兵顧みずして進み、留り從ふ者僅に三百。伏兵數千、之を圍むに遇ひ、二人苦戰して出づ。甲冑皆破れ、刀刃、鋸の如し。身各〻數創を被り、百餘騎を亡ふ。乃ち議して曰く、「我れ既に武藏守と相失す。此寡羸を以て將に安くに歸せんとするや。基氏に遇ひ死を決するに若かず」と。衆之を然りとし、進んで關戸に至る。石堂・三浦氏、五千騎を以て西行するに會ひ、其の兵を并せ、鎌倉を襲ふ。基氏、甲を悉して出で拒ぐ。義興海濱に鬪ひ、三騎を斬り、馳せて賊陣を貫く。左轜斷ちて地に委す。乃ち刀を脇に挾み俯して之を結ぶ。賊群り至り、其の項及び背を擊つ。義興爲めに動かず。結び畢つて賊に應ず。賊驚き走る。遂に義治と合ひ、擊ちて基氏を走らせ、仍ほ鎌倉に據る。

【通釋】義興・義治は白旗を立てた兵三萬ばかりが北方に逃げるのを見て尊氏だと思ひ、兵を合はせて之を追ひかけた。降參するものが路傍につゞく程であつた。二人は、馬をとゞめて、會釋することが度々であつた。その部下の兵士はふり顧りもしないので、どん〳〵進んで、留まり從ふもの、わづかに三百人ばかりとなつた。敵の

伏兵數千に取り圍まれ、二人は苦戰して切りぬけた。鎧や兜は、皆破損し、太刀の齒は、鋸のやうになつた。身には、各數個所の手創を受け、百餘騎の兵を失つて終つた。そこで二人は相談して日ふには「我々はもう武藏守義宗とはぐれて終つた。この僅かな疲れた兵士をつれてどこへ行かうといふのだ。それよりは尊氏に遇つて、死を決した方が善い」と。部下の衆も賛成して、そこで進んで、關戸まで行つた。石堂・三浦の二氏が五千騎を引きつれて西へ行くのに出會つたので、其の兵を合はせて、鎌倉を襲つた。尊氏は有る限りの兵を出して、之を拒いだ。義興は淵邊に戰ひ三騎を斬り、馳せて賊の陣を突き通つた。その時、左の手綱が切れて地に落ちた。そこで、刀を脇に挾み、うつぶして之を結んだ。その間に賊兵が群れ來り、その首筋や背を切りつけた。義興は、少しもひるまなかつた。手綱を結び終つて賊の相手をした。賊は驚いて逃げた。遂に義治と合併して、尊氏を走らせ、なほ鎌倉に立てこもつた。

義宗時據碓氷嶺。越後・信濃兵二萬、奉皇子宗良來會。上杉憲顯等又屬焉。尊氏收兵八萬、欲復鎌倉。聞義宗軍復振、乃先攻碓氷。碓氷地負山帶川、便於據守。而義宗年少氣鋭、數出戰於平地。敵更兵交進、自午至酉。義宗終敗走、上嶺而陣。既夜、足利氏軍舉炬、布滿山澤。顧視我軍、炬如螢火。義宗驚曰「晝日所失亡、未至如此。得非有逃者。前有勁敵、後有鄕士、衆疑我退走也」乃自釋鎧卸鞍、以示不走。衆稍定。夜半、上

杉氏望見炬火數千復屬賊軍、則遽走信濃。於是、走者相踵。義宗不得獨留、比曉、退入越後。八州兵盡附尊氏、還向鎌倉。義興・義治欲迎戰決死。將士諫止。乃走信濃。義宗既歸越後、聞帝猶在行宮、欲赴援之、收兵七千、入越中。桃井・吉良・石堂・小山・宇都宮諸族皆應之、奉皇子宗良西上。途聞行宮已陷、乃解歸。

【訓読】義宗、時に碓氷嶺に據る。越後・信濃の兵二萬、皇子宗良を奉じて來り會す。上杉憲顯等又屬す。尊氏兵八萬を收め、鎌倉を復せんと欲す。義宗の軍復振ふと聞き、乃ち先碓氷を攻む。碓氷の地たる山を負ひ川を帶び、據守に便なり。而るに義宗、年少く氣鋭く、數〻出でゝ平地に戰ふ。敵、兵を更へて交〻進み、午より酉に至る。義宗終に敗走し。嶺に上りて陣す。既に夜となり、足利氏の軍、炬を擧げ、山澤に布滿す。顧みて我が軍を視れば、炬燭火の如し。義宗驚いて曰く「晝日失亡する所、未だ此くの如きに至らず。逃るゝ者有るに非ざるを得んや。前に勁敵有り、後に鄕土有り。衆、我が退走せんことを疑ふなり」と。乃ち自ら鎧を釋き鞍を卸し、是以て走らざるを示す。衆稍定る。夜半、上杉氏炬火數千、復賊軍に屬するを望見して、則ち遽に信濃に走る。是に於て走る者相踵ぐ。義宗獨り留るを得ず、曉くる比、退いて越後に入る。八州の兵盡く尊氏に附き、還りて鎌倉に向ふ。義興・義治、迎へ戰ひ死を決せんと欲す。將士諫め止む。乃ち信濃に走る。義宗既に越後に歸り、帝猶ほ行宮に在すと聞き、赴き之を援けんと欲し、兵七千を收め、越中に入る。桃井・吉良・石堂・小山・宇都宮の諸族皆之に應じ、皇子宗良を奉じて西上す。途に行宮已に陷ると聞き乃ち解いて歸る。

【通釋】義宗はその時、碓氷嶺に據つて居た。越後信濃の兵二萬が皇子宗良親王を奉じて來り會した。上杉憲顯等も、又來り屬した。尊氏は、兵八萬を集めて鎌倉を回復しようと思つた。義宗の軍が再び振ふと聞いたので、先づ碓氷を攻めた。全體碓氷の地たるや、後に山を負ひ、前に川が流れ、立て籠るには都合が善い。しかるに義宗は年が若く氣が激しいので、度々打ち出て平地で合戰した。敵は兵をかへて交る〳〵進み、正午より午後六時まで戰つた。義宗はとう〳〵敗れ走り、嶺に上つて陣取つた。かくて夜となつて足利氏の軍勢は松明を焚いて、山や澤に滿ち布いた。味方を顧みると松明の火が小さく消えかゝり、ともしびのやうであつた。義宗が嘆いて曰ふには「晝間に失つただけではこれ程少くはならない筈である。恐らくは逃げたものがあるからであらう。前には強敵が居り、後には故鄉がある。だから皆の者は余が退き逃げたと疑ひ思つたのであらう」と。そこで自ら鎧をぬぎ、鞍をおろして逃げない樣子を見せた。それで大勢のものも少しく落着いた。夜中頃に上杉氏は松明數千がまた賊軍に屬いたのを見て、あわてゝ信濃に逃げ歸つた。そこで逃げるものが次から次へ引き續いた。義宗もひとり留まる譯にも行かないので、曉け方退却して越後に入つた。そこで、八州の兵は皆尊氏に從ひ、還つて鎌倉に向つた。義興義治は迎へ戰つて死を決しようとした。將士が之を諫め止めた。そこで、信濃に走つた。義宗はすでに越後に歸つてから天皇がまだ行在に居られると聞いて、援けに行かうと思ひ、兵七千をまとめて、越中に入つた。桃井・吉良・石堂・小山・宇都宮の諸族は皆之に味方をし、皇子宗良親王を護り立て、西に上つた。途中で行在は、すでに陷落したと聞いたので、兵を解散して歸つて行つた。

【語釋】燐火（燃えぐひの火。）○鄉土（越後、信濃。）○上杉氏（憲顯）○桃井（直常）○吉良（貞光）○石堂（義房）○小山（五郎）○宇都宮（三郎）

是役也、赤松則祐亦就行宮降、請奉將軍興良。興良、故護良子也。材武類父。則祐思護良舊恩、欲擁據播磨以爲聲援。帝許之。及則祐敗叛去、興良拘於京師。但馬人本莊某奪之、與則祐戰、敗死。興良走、歸吉野。後十餘年、赤松氏範屬官軍、復奉興良爲主。已而叛、應義詮。帝遣兵、擊走氏範。興良奔南都、不知所終。人譏其辱護良也。

訓讀 是の役や、赤松則祐も亦行宮に就きて降り、將軍興良を奉ぜんと請ふ。興良は、故の護良の子なり。材武父に類す。則祐、護良の舊恩を思ひ、擁して播磨に據り、以て聲援を爲さんと欲す。帝、之を許す。則祐敗れて叛き去るに及んで、興良、京師に拘へらる。但馬の人本莊某、之を奪ひ、則祐と戰ひ、敗れ死す。興良走り、吉野に歸る。後十餘年、赤松氏範、官軍に屬し、復興良を奉じて主と爲す。已にして叛き、義詮に應ず。帝、兵を遣はし、擊つて氏範を走らす。興良、南都に奔り、終る所を知らず。人、其の護良を辱しむるを譏る。

通釋 この戰爭で赤松則祐も亦行宮に至つて降參し、將軍興良親王を守り立てたいと願ひ出た。興良親王は故の護良親王の御子であつた。材能・武勇が父君に似て居られた。則祐は護良親王の舊恩を思ひ、之を守り立てゝ播磨に立て籠り、行在に聲援をしようと思つたのである。天皇は之をお許しなされた。則祐が負けて叛き去つてからは、興良親王は京都に囚へられ給うた。但馬の人本莊某が之を奪ひ、則祐と戰つて敗れ死んだ。興良親王は走つて吉野に逃げ歸られた。其の後十餘年經つて、赤松氏範が官軍に從ひ、また興良親王を奉じて主將とした。その後氏範等は叛いて義詮に內應した。そこで天皇は兵をお遣はしになり、擊つて氏範を走らしめられた。興良

親王は、奈良に奔り、どこで死なれたか分からない。世間では興良親王が賊に加擔なされて父君の名前を辱しめられたことを譏つた。

【語釋】本莊某（平太、平三の兄弟。）

義宗與義興・義治、倶匿越後居數年。武藏・上野將士連署、來請一人、奉戴舉義。義宗・義治皆疑、不敢往。義興奮而往。足利基氏發兵來捕。國人相倶匿之。或以兵圍義興、輒潰圍逃、不可蹤跡。基氏患之。我故將竹澤良衡、與族江戸堯寬叛降基氏。基氏宰畠山國清、囑二人圖義興。乃爲獲罪亡來、索義興仕之。啗以美姬、漸得狎近。因誑之曰「鎌倉可襲」義興遣衆先往、與親信繼之。路由矢口渡。堯寬教舟人鑿舟腹而枘之、載至中流、拔枘泅去。伏兵夾河起。舟將沒。井伊直秀手掀義興。義興瞋眼曰「悔陷豎子計」割腹死。直秀與世良田・由良・大島等、皆自刃。土肥・市川等、啣刀而泅、與堯寬鬪、殺傷十餘人而死。時正平十三年十月也。基氏重賞二人。堯寬赴邑、復由矢口。天俄雷雨、顧視義興追己、墮馬、疾作死。鎌倉人又夢義興來襲也。矢口民立祠祀義興。

【[illegible]】義宗、義興・義治と、倶に越後に匿る。居ること數年、武藏・上野の將士連署し、來つて一人を請ひ、奉戴して義を擧げんとす。義宗・義治皆疑ひ、敢て往かず。義興奮つて往く。足利基氏、兵を發して來り捕ふ。我が國人相倶に之を匿す。或ひと兵を以て圍む。義興輒ち圍を潰やして逃る。蹤跡すべからず。基氏之を患ふ。我が故將竹澤良衡、族江戸堯寬と叛きて、基氏に降る。基氏の宰畠山國清、二人に囑し、義興を圖らしむ。乃ち罪を獲る爲して亡げ來り、義興を索めて之に仕へ、啗はすに美姫を以てし、漸く狎れ近づくを得。因つて之を誑して曰く、「鎌倉襲ふ可し」と。義興、衆を遣はし先づ往かしめ、親信と之に繼ぐ。路、矢口渡よりす。堯寬、舟人をして、舟腹を鑿ちて之に枘せしめ、載せて中流に至り、枘を拔き、泅ぎ去る。伏兵河を夾んで起る。舟將に沒せんとす。井伊直秀、手づから義興を掖ぐ。義興、眼を瞋らして曰く、「豎子の計に陷るを悔ゆ」と。腹を割いて死す。直秀、世良田・由良・大島等と、皆自刃す。土肥・市川等、刀を啣んで泅ぎ、堯寬と鬪ひ、十餘人を殺傷して死す。時に正平十三年十月なり。基氏重く二人を賞す。堯寬、邑に赴き、復矢口よりす。天俄に雷雨す。顧みて義興、己を追ふを覩、馬より墮ち、疾作つて死す。鎌倉の人又義興來り襲ふと夢む。矢口の民、祠を立てて義興を祀る。

【通釋】義宗は、義興・義治とともに越後にかくれてゐた。其の後數年たつて、武藏・上野の將士どもが連判で、何卒誰か一人に來て貰つて、それを守り立てて義兵を擧げたいと願ひ出た。義宗・義治は皆疑つて行くことを承知しなかつた。義興は發奮して出かけた。足利基氏は兵を繰り出して、捕へに來た。しかしその國人が相ともに之を匿した。或る人が兵を以て取り圍んだ。義興はたやすく圍を衝きくづして逃げ出した。なかなか跡をつけることも出來なかつた。基氏は之が氣にかゝつてゐた。元の味方の大將竹澤良衡は、一族の江戸堯寬とともに叛いて

基氏に降參した。そこで基氏の家令の畠山國淸は此の二人に賴み義興を殺さうとした。二人は（其の賴みを含んで）恰も罪を犯して逃げて來たやうに見せかけ、義興を搜し出して、之に仕へ、美しき女を餌としてその機嫌を取り、追々信用されて近づくことが出來た。そこで義興を欺いて曰ふには「鎌倉を不意に襲うたら如何でせう」と。そこで義興は軍勢を先きにやり、自分は、親信してゐる部下と後から續いて出發した。矢口の渡から道を取つた堯寬は、豫め船頭に申し付けて、舟の橫腹に穴をあけて、栓をさゝせて置き、その舟に義興等を載せて川の中程まで行き、その栓を拔いて船頭は泅いで去つた。この時伏兵が川の兩岸から起つた。舟は沈沒しようとした。井伊直秀は手で義興を高く指し上げた。義興は目を怒らせて曰ふには「小僧どもの計略にかゝつたのが殘念だ」と、切腹して死んで終つた。直秀は、世良田・由良・大島などとともに皆自殺した。土肥・市川などは刀を口にくはへて岸に泳ぎつき、堯寬と鬪ひ、十餘人を殺したり傷つけたりして死んだ。時に正平十三年十月であつた。基氏は重く二人の手柄を賞した。堯寬は自分の領分に行くとき再び矢口を通つた。すると空が急に變つて雷がない雨がふりだした。振りかへると義興が自分を追つかけてゐるを見、驚いて馬から落ち、それから病氣が起つて死んで終つた。鎌倉の人も、又義興が來り襲ふと夢みた。それで祟を恐れて矢口の人々は社を建てゝ義興を祀つた。

【語釋】矢口渡（武藏）○栓（栓をさすこと）○世良田（右馬助）○由良（兵庫助、新左衛門父子）○大島（周防守）○土肥（三郎左衛門）○市川（五郎）

義興既死。義宗・義治仍在越後。二十二年、足利義詮死、子義滿猶幼。明年七月、義宗・義治起兵越後・上野、與足利氏將上杉能憲戰、不克。義宗死之、義治走出羽。建德元

年正月、義治收兵、出武藏・上野、與上杉朝房戰。復不克。走匿信濃、不知所終。

削譯 義興既に死す。義宗・義治、仍ほ越後に在り。二十二年、足利義詮死し、子義滿猶ほ幼なり。明年七月義宗・義治兵を越後・上野に起し、足利氏の將上杉能憲と戰ひ、克たず。義宗之に死し、義治出羽に走る。建德元年正月、義治兵を收め、武藏・上野に出で、上杉朝房と戰ふ。復克たず。走つて信濃に匿れ、終る所を知らず。

通釋 義興は、はや死んで終つた。義宗・義治はまだ越後に居つた。正平二十二年に足利義詮が死んで、その子義滿はまだ幼少であつた。翌年七月、義宗・義治は兵を越後・上野に起し足利氏の大將上杉能憲と戰つたが、負けた。義宗は討死し、義治は出羽に逃げた。建德元年正月、義治は兵をまとめて、武藏・上野に出で、上杉朝房と戰つた。又負けた。逃げて信濃に匿れたが、その後どこで果てたか分らない。

義宗子貞方爲相模守、義治子義隆爲刑部少輔。後龜山天皇元中二年、二人竝匿信濃浪合、潛集宗族。足利氏滿管領鎌倉、遣兵鏖之。貞方・義隆脫走、入陸奧。九年、天皇納足利義滿刧和、北入京師。義滿購天下、索新田氏族。先是、小山義政據小山城、爲新田氏、爲氏滿所攻破死。義政子穉狗復起兵、據男體城。年餘、城陷、走入陸奧、依田村淸包。於是、相與擧義、推貞方・義隆爲將、軍于白河。氏滿將十一州兵、來擊。吾衆

潰、貞方・義隆復逃走。是歳、丙子也。歳癸未、義隆匿箱根山中。竹下人安藤某、告之鎌倉、來捕。義隆鬪死。歳庚寅、貞方在鎌倉、陰糾合義故。事覺、爲千葉兼胤所捕、斬于七里濱。新田宗統於是而絶。而其支族匿參河者、歳再周庚寅、而後大興。事詳于末編。

【訓讀】義宗の子貞方、相模守と爲り、義治の子、義隆刑部少輔と爲る。後龜山天皇の元中二年、二人並に信濃の浪合に匿れ、潜に宗族を集む。足利氏滿鎌倉を管領し、兵を遣はして之を鏖にす。貞方・義隆、脱走し、陸奧に入る。九年、天皇、足利義滿の劫和を納れ、北京師に入る。義滿天下に購ひて、新田氏の族を索む。是より先き、小山義政、小山城に據り、新田氏の爲めにし、氏滿の攻破する所となりて死す。義政の子穉犬、復兵を起し、男體城に據る。年餘にして、城陷り、走つて陸奧に入り、田村淸包に依る。是に於て、相與に義を擧げ、貞方・義隆を推して將と爲し、白河に軍す。氏滿十一州の兵に將として來り擊つ。吾が衆潰え、貞方・義隆復逃れ走る。是の歳丙子なり。歳の癸未、義隆、箱根山中に匿る。竹下の人安藤某、之を鎌倉に告げ、來り捕ふ。義隆鬪ひ死す。歳の庚寅、貞方、鎌倉に在り、陰に義故を糾合す。事覺れ、千葉兼胤の捕ふる所となり、七里濱に斬らる。新田の宗統、是に於て絶ゆ。而れども其の支族參河に匿るゝ者、歳再び庚寅に周りて後、大に興る。事は末編に詳なり。

【通釋】義宗の子の貞方は、相模守となり、義治の子の義隆は、刑部少輔となつた。後龜山天皇の元中二年に、二人は共に信濃の浪合にかくれて内々一族を集めてゐた。足利氏滿は、鎌倉を管領して居て、兵を遣つて之を皆

殺にした。貞方・義隆は脫走して陸奧に入つた。九年に、天皇は足利義滿の無理な和議を納れられて、北京都に入られた（南北はこれで合一した）義滿は天下に褒美をかけて、新田氏の一族をさがさせた。これより以前に小山義政は小山城に立て籠つて、新田氏の爲めに軍を起したが、氏滿に攻め破られて討死した。義政の子の穉狗は再び兵を起して、男體城に立て籠つた。一年ばかりで落城し、逃げて陸奧に入り、田村清包にたよつた。南北が合一した時、相與に、義兵を擧げ、貞方・義隆を推して、大將となし、白河に陣取つた。氏滿は十一個國の兵をつれて擊つて來た。味方は崩れ、貞方・義隆は再び逃げ去つた。この歲は丙子であつた。（後小松天皇の應永三年）その後七年目の、癸未の年に義隆は、箱根の山中に匿れて居た。竹下の人安藤某、之を鎌倉に注進したので捕り手の者が捕へに來た。義隆は、鬪つて討死した。庚寅の年、（應永十七年）貞方は、鎌倉にゐてひそかに義を忘れぬ者を集めてゐた。その事が露顯し、千葉兼胤のために捕へられ、七里ケ濱で斬られた。新田氏の本家筋はこれで絕えて終つた。しかしその分れで、參河に匿れて居たものが、次ぎの庚寅の歲がめぐつて來た時、大に興つた。これが卽ち德川氏で、その事は本書の末の方に詳しく述べてある。

語釋 建德（長慶天皇の年號。）○劫和（劫かして和睦すること。）○小山・男體（下野）○再周（百二十年經過したことになる。）

叙說 本論の大旨は義貞は戰爭には敗れたが、一意朝命を奉じて周旋し、王事に勤め、運を天に委かした。その結果自分の一生は伸びなかつたが、子孫に至つて大に運が開けた。卽ち德川の出現である。だから成敗の迹は何百年も經つて見ないと分らぬといふのである。

外史氏曰、余見義貞手記者、蓋其未擧事時、語家子弟武門法戒、淺近而已。然有言。曰「爲將者、奉上撫下、決志而行、聽運於天、勿尤人也」義貞成於元弘、而敗於延元、亦時運有可不可邪。將上之人有負之邪。

【訓讀】外史曰く、余、義貞の手記なる者を見るに、蓋し其の未だ事を擧げざる時、家の子弟に武門の法戒を語ぐるものにして、淺近のみ。然れども言へるあり。曰く、「將たる者は、上に奉じ下を撫し、志を決して行ひ、運を天に聽せ、人を尤むる勿れ」と。義貞、元弘に成りて、延元に敗るる、亦時運、可不可あるか。將上の人、之に負くあるか。

【通釋】外史氏が曰ふのに、予は義貞の手控へと稱するものを見たが、それは思ふにはまだ義兵を擧げぬ時、家の子弟達に武家の作法訓誡を語り聞かせたものであつて、其の主意は至つて淺い卑近なことに過ぎない。しかしその内に言つてある。「大將たるものは上によく事へ下の者をいたはり、志を定めて斷行し、運を天に打ちまかせて、都合よくいかなくとも人を咎めてはならぬ」と。義貞は、元弘に成功して（北條氏を亡ぼし）延元に失敗した。（足利氏に破らる）これも亦時勢の運に善いと惡いとがあつたからであるか。それとも、上に居るお方、即ち天皇が義貞に背かれ棄てられたからであるか。

【語釋】手記（義貞軍記）

【餘論】以上第一段、本論の大旨、手記を揭げて義貞が運を天に委せたことをいふ。

至叡山之事、可謂負之甚矣。帝蓋前此未曾面議事。至此亦嘗試兩端、僥倖孰成。以是待將帥。惡濟時艱哉。吾嘗咎義貞之東伐。不按兵持重、竢奥兵擾其內而後應之、懸軍長驅、一敗成賊勢。及賊西奔、則不捲甲窮追、頓兵堅城、以致賊再燃。是緩急兩失機也。然當時主聰壅蔽、國論苟媮者如此。蓋雖有善謀、難於輒行。則不可亶罪其戰也。是故爲官則敗、爲私則成。寧敗而忠義、不成而姦賊。義貞之志亦可悲矣。

【訓讀】叡山の事に至りては、之に負くこと甚だしと謂ふべし。帝蓋し此より前き、未だ曾て事を面議せず。此に至りて、亦兩端を嘗試み、孰れか成るを僥倖す。是を以て將帥を待つ。惡んぞ時艱を濟はんや。吾れ嘗て義貞の東伐を咎む。兵を按じ重きを持し、奥兵其の內を擾すを竢ちて後、之に應ぜず、懸軍長驅して、一敗賊勢を成す。賊西奔するに及んでは則ち甲を捲き窮追せず、兵を堅城に頓め、以て賊の再燃するを致す。是れ緩急兩つながら機を失ふなり。然れども當時、主聰壅蔽し、國論苟媮するもの此くの如し。蓋し善謀ありと雖も、輙く行ふに難し。則ち亶に其の戰を罪す可からざるなり。是の故に、官の爲めにすれば則ち敗れ、私の爲めにすれば則ち成る。寧ろ敗れて忠義なるも、成りて姦賊とならず。義貞の志も亦悲しむ可し。

【通釋】比叡山の一件は、義貞に背かれたことの甚しいものといふべきである　後醍醐天皇は、蓋しこれより前から萬事を義貞とまのあたりで、御相談なされるといふこともなかつた。それさへ惡いのに又比叡山で二た股

をかけられ、どつちかにうまく行けば善いと僥倖を願つてゐられた。そんな考へで將帥を扱はれたのである。どうして、時の難儀を救うことが出來ようぞ。余は嘗て義貞が東伐したことについて之を咎めたことがある。それは義貞が東の方、尊氏を討つた時に、兵を止めて、大事を取り、奥州の兵が關東を亂すのを待つて、それと一緒に相應じて攻める戰法に出ないで後詰の兵もないのに敵地に深く侵入して一敗して賊の威勢を成就させて終つた。それから、又尊氏が西九州に走つたとき、鎧を疊んで、身輕にいでたち、どこまでも追ひつめることをしないで、空しく險固な白旗城に兵をとゞめ置き、愚圖々々してゐる間に、賊勢が再び燃え上るやうに盛にして終つた。緩くすべき場合に急ぎ、急ぐ可き場合に緩くし、兩度共緩急を失ひ、機會を取り損ねて終つた。しかし、當時に於ては、內嬖が行はれ、天子の御耳が塞がれ蔽はれて居つて、朝廷の論議も叡山の一件のやうに唯だ一時の氣休めに過ぎないものだつたのである。思ふに善い計略があつたとしても容易に行はれぬことであつて、無暗にたゞ義貞の戰爭の仕方の惡い計りを罪する譯には行かぬのである。だから此の時分には官の爲めにすれば、失くぢるし、自分の爲めにすれば成功するといふ譯なのであつた。いつそ失敗しても忠義で有り度い、たとひ成功しても賊とはならぬ。それが義貞の志であつたのである。この義貞の志はあはれに氣の毒なものではある。

〔語釋〕叡山之事（後醍醐天皇は尊氏に欺かれ給ひ京都へ還へられたときの件。）〇東伐（鎌倉の尊氏を攻めたこと。）〇奥兵（北畠顯家の部下。）

〔餘論〕以上第二段、上の人が義貞に負かれ、義貞の一意王事に周旋したのを悲しんである。

吾居レ平安、毎觀二東山岡阜起伏一、指二義貞力戰處一、仰觀二叡山一、又念二其拜辭北行時一也。帝

及南遷、蓋深悔此擧、下哀痛詔而已。無及矣。噫、君臣際會難矣。可不慨歎歟。

【訓讀】吾れ平安に居り、東山岡阜の起伏を觀る毎に、義貞力戰の處を指し、仰いで叡山を觀て、又其の拜辭北行の時を念ふ。帝南遷するに及んで、蓋し深く此の擧を悔い、哀痛の詔を下せども、已に及ぶなし。噫、君臣の際會は難し。慨歎せざるべけんや。

【通釋】余は、京都に居て、東山の丘が波のやうに高く低くなつてゐるのを見る度に、義貞が力戰した場所を指し、比叡山の高いのを見上げては又義貞が御暇乞をして北國に赴いた時の事を思ひ起すのである。後醍醐天皇が南吉野に行幸せられて後、深く此の事を後悔され哀れに痛ましい詔を下されたがもう間に合はなかつた。ああ、君臣が際會して水魚のやうになることは六つかしいことである。全く嘆息しない譯には行かない。

【語釋】際會（君臣相會ふこと。）

假令義貞有霸心、當其初克鎌倉、北條氏餘燼未滅、而足利氏反跡已形。義貞以此爲請、坐鎭舊府、蓄力養威、與護良親王、東西合謀、請淸君側、朝廷不敢不聽。使尊氏或挾天子以臨我、其逆節漸長、天子終不能堪。必將引我以自援。猶後白河之近疏義仲、而遠款賴朝耳。是新田氏上計也。

【訓讀】假し義貞をして霸心あらしめば、其の初め鎌倉に克つに當りて、北條氏の餘燼未だ滅びず、而して足利

氏の反跡已に形る。義貞、此を以て請を爲し、坐して舊府を鎭し、力を蓄へ威を養ひ、護良親王と、東西謀を合せ、君側を清むるを請へば、朝廷敢て聽さずんばあらず。尊氏をして或は天子を挾み以て我に臨ましむるも、其の逆節漸く長ずれば、天子終に堪ふる能はず。必ず將に我を引き、以て自ら援けんとす。猶ほ白河の近く義仲を疎んじて、遠く賴朝に款するがごときのみ。是れ新田氏の上計なり。

（通釋）もし義貞が覇者になり度い野心があつたとしたら、（次のやうにしたら上策であつた）最初、義貞が鎌倉に克つた當時は、北條の殘黨がまだ滅んではゐなかつたし、其の上に足利の謀叛の形迹は、早や既に現はれてゐたのであつた。だから義貞はそれを將軍にして貰ふ口實にして、坐ながら鎌倉を鎭め、兵力を蓄へ、勢威を養ひ、護良親王と東西示し合はせ、君の御側の惡者を除き清めさせて貰ふやうに申出たならば、朝廷でもまさか許されない譯には行かないだらう。萬一尊氏が天子を挾んで義貞に向つたところで、その反逆の行ひがだん／＼增長すれば、天子も結局堪まらなくなられるに決まつてゐる。さうなれば屹度義貞を引き入れて御自分の援けとなされるであらう。それは恰度後白河法皇がお側の義仲を疎んぜられて、遠くの賴朝に心を寄せられたと同樣である。これが新田氏に取つて一番よい計策である。

不然、當其始授鉞、進據信濃・上野、連奧羽、俯瞰八州、扼賊之吭、而拊其背、賊形格勢禁、必不棄我以犯闕。是又其次也。及其辭叡山、則事不可爲矣。然得擁太子、進退自如、爲赴越前、而潜歸上野、勢或可達。收合舊部、奪賊巢窟、據以爲根本、進則成恢

復、退則圖翼戴。又可以展其才而得其志。計不出於此、以無根之兵奔走東西、而謀與戰皆不由己。宜其困屈無所成也。

訓譯 然らざれば、其の始め鉞を授けらるゝに當り、進んで信濃・上野に據り、之を奥羽に連ね、俯して八州を瞰、賊の吭を扼して、其の背を拊てば、賊、形格し勢禁じ、必ず我を棄てて以て鬪を犯さず。是れ又其の次なり。其の叡山を辭するに及びては、則ち事爲す可からず。然れども太子を擁するを得たれば、進退自如たり。越前に赴く爲して、潛に上野に歸れば、勢或は達すべし。舊部を收合し、賊の巣窟を奪ひ、據りて以て根本と爲し、進んでは則ち恢復を成し、退いては則ち翼戴を圖る。又以て其の才を展べて其の志を得可し。計此に出でず、無根の兵を以て、東西に奔走し、而して謀と戰と皆己に由らず。宜なり、其の困屈成る所なきや。

通釋 若しそれが出來ないとして第二段の策は、義貞が始めて節刀を授けられて足利氏を攻めた時に、進んで信濃・上野に立て籠り、奥州の北畠氏と聯合し、高い所から關八州を見下ろし、賊の喉くびに當る要處を締めて其の背を撃つたならば、賊は形が阻まれ、勢が自由でなくなり、決して、新田氏を置いて京都を侵すといふことはなかつたであらう。これは第二段の策である。又彼が比叡山で御暇をした際にはもう何うにも手はつけられなかつたのであつた。しかし太子を奉戴することが出來たのであるから、進むも退くも自分勝手に出來るのであつた。だからあの際、越前に行く様な風をして、こつそり上野に歸つたなら、勢うまく上野にとゞくことが出來たであらう。其處でもとの部下を集合して、賊の巣窟鎌倉を奪ひ、そこに立て籠つて根據地と爲し、進んでは朝廷の御威光を恢復し、退いては皇室をたすけ戴くことを謀る。さうすれば義貞はその才を十分に展べ、その志

を得ることも出來たであらう。然るに、義貞は上の三策のどれも行はず、根據のない兵を引きつれて、東西にかけ廻り、その上、謀も戰爭も皆朝廷の指揮を仰いで、自分で善い計らひを爲さなかつた。彼が困却屈伏して成功しなかつたのは道理である。

【語釋】扼吭（信濃・上野に據つて敵の吭を締めつけてゐる。）○推背（奥羽を承けていふ。）○自如（自由の義）

【餘論】以上第三段、地理を觀て感慨を起し、義貞に霸心があつたら霸を唱へることが出來たけれども、それをしなかつたから困屈した所以を敍べたのである。

雖然、奉令周旋、鋭意勤王、不暇占便利、所以爲義貞也。觀其死時、猶佩錦嚢詔書、見其報國之志、百敗不摧、至今凜有生氣、而老賊之骨、朽腐已久、十三世之室町、徒見市廛迷離、索其斷礎、不復可識矣。義貞之聽運於天、其以此邪。

【訓讀】然りと雖も、令を奉じて周旋し、意を鋭くして王に勤め、便利を占むるに暇あらず。義貞たる所以なり。其の死する時、猶ほ錦嚢の詔書を佩ぶるを觀れば、其の國に報ずるの志、百敗摧けざるを見る。今に至り凜として生氣あり。而して老賊の骨、朽腐已に久し。十三世の室町、徒に市廛迷離を見るのみ。其の斷礎を索むるに復識る可からず。義貞の運を天に聽す、其れ此を以てなるか。

【通釋】しかし乍ら、君の命令を奉じて立ち廻り、一意熱心に王事に勤め、自分に都合の善い事をする暇などはなかつた。そこが義貞の義貞たる所以であつた。義貞が死ぬる時にもなほ錦の嚢に入れた詔書を持つて居たのを見

ても、義貞の國に報ゆる志の堅固で、いくら敗けても挫けなかつた所を知ることが出來る。今日になつても、凜然として生き〳〵してゐる。而して老賊尊氏の骨はもうとつくの昔に朽ちはてて終つた。十三代つゞいた室町幕府の跡は、たゞ市街となり、塵埃だらけの場所となつて終つてゐる。その破れたる礎を搜しても、もう悉つかり分らない樣になつてゐる。義貞の手記の中に「運は天に任せよ」とあるのは、一時の榮華はこのやうになることを知つてゐて言つたのであらうか。

〔語釋〕 凜（生々した樣子をいふ。）○十三世（尊氏・義詮・義滿・義持・義教・義勝・義政・義尚・義植・義澄・義晴・義輝・義昭・）○迷離（紛亂不明の貌）

〔餘論〕 以上第四段。義貞が覇計をなさず、一意王に勤めて運を天に委せたことを叙ぶ。

余嘗謂、新田・足利之兵爭、猶朱李之於唐季。義貞忠勇勝於克用、而義興等英邁不讓存勗。存勗覆滅汴梁、而義興等不克報室町者、亦非有所牽制故歟。抑我東北形勝、同於河北太原、而新田氏不能據有也。然義貞祈山靈、以其子孫再起滅賊父猶遯佶烈祝天、願生眞主安天下也。世稱、趙藝祖應祝而生。我二百年後、代足利氏而興者、實出於新田遠裔。亦烏知非應義貞之祈哉。則天運果有復時。勝敗之數、未可以歳月較也。

[illegible]余嘗て謂ふ、新田、足利の兵爭は、猶ほ朱李の唐季に於けるがごとしと。義貞の忠勇は、克用に勝り、而して義興等の英邁は、存勗に讓らず。存勗、汴梁を覆滅し、而して義興等、室町に報ずる克はざるは、亦牽制する所あるの故に非ざるか。抑我が東北の形勝は、河北太原に同じくして、新田氏據有する能はざりしなり。然れども義貞、山靈に祈るに、其の子孫再起して賊を滅すを以てす。又猶ほ邈佶烈天に祝り、眞主を生じ、天下を安んずるを願ふがごとし。世に稱す、趙藝祖は祝に應じて生ると。我が二百年の後、足利氏に代りて興る者は、實に新田の遠裔に出づ。亦烏んぞ義貞の祈に應ずるに非ざるを知らんや。則ち天運果して復する時あり。勝敗の數、未だ歲月を以て較ずべからざるなり。

[illegible]私は以前こんなことを思つたことがある、新田足利の戰爭は、恰度朱李二氏の唐の末に於ける爭と同樣なものであると。義貞の忠勇なことは李克用以上で、そして義興等の衆に勝れてゐることは、存勗に劣つて居らない。存勗は父の遺志を繼いで梁の都の汴梁を亡ぼしたが、これに反し義興等が足利に報ゆることの出來なかつたのは、つまり朝廷の指圖が多くて、何かと自由を束縛された所爲ではあるまいか。(恐らくその所爲だ)。一體東北地方の要害堅固なことは、支那の河北太原と同じだが、新田氏は其處に立て籠ることは出來なかつたのである。しかし義貞は日吉の山神に自分の子孫が、もう一度起つて賊を滅ぼすやうに祈つた。これは又後唐の明宗が天に向つて、眞の天子が生じて天下を安んずるやうに祈つたのと變りはない。世間では、宋の太祖はこの明宗の祈に應じて生れたのだといつてゐる。わが日本でも二百年の後に足利氏に代つて興つた德川氏は、實に新田氏の遠い子孫である。これも亦義貞の祈に應じたものであつて、左樣でないとどうしていはれうか。して見れば天運は廻つて又元にかへる時があるのである。勝ち負けの定まるのはどんの詰りまで來て見ぬと分らぬので、歲月

の前後遲速で以て其の勝敗を比較長短することは出來ぬものである。（何百年も經つて見ねば定まらぬのである。）

【語釋】朱李（唐の末、朱全忠汴梁に據り、唐の昭宗を弑し位を奪つた。これが梁の太祖である。李克用は太原に據つて唐室の恢復に志し、屢く朱全忠と戰ひ、志を得ずして卒した。）○存勗（克用の子の名、年十七父の職を嗣ぐ。父の志を達し、遂に汴梁を顚覆した）○河北太原（克用の據つた所。）○邈佶烈（本と胡人、克用の養子となり、姓名を李嗣源といふ。存勗梁を滅して天子となり、唐と號したが弑に遇つたので、嗣源が位を繼いだ。これが唐の明宗である。）○趙藝祖（宋太祖のこと。藝祖とは文藝の祖といふ意で太祖のことを稱したのである。）

【餘論】以上第五段、支那の故事を引用して之を比較して義貞の功の大なる所以を明にし、結局天運が廻り來て、子孫が張大した所以を叙ぶ。

日本外史新釋卷六終

日本外史新釋　卷七

足利氏正記

足利氏上

足利氏出於源義家。義家在京師。其子義國、以事謫關東、居上野、生二子義重・義康。義康食下野足利郡、因氏焉。爲檢非違使左衞門尉。保元之亂、從源義朝於京師、衞守大內、捕平家弘、補藏人、聽昇殿。生三子義淸・義長・義兼。義兼雄偉而循謹。其二兄皆爲源義仲將、西與平氏戰水島、死之。而義兼從征夷大將軍源賴朝于鎌倉、最見親待。從擊平氏筑紫、又從擊藤原氏陸奥。陸奥再亂、義兼統諸將往討之。賴朝因定天下。奏授之上總介、使北條時政以女妻之。生義氏。

[illegible] 足利氏は、源義家より出づ。義家、京師に在り。其の子義國、事を以て關東に謫せられ、上野に居り、二子義重、義康を生む。義康、下野の足利郡を食み、因つて氏とす。撿非違使、左衛門尉となる。保元の亂に、源義朝に京師に從ひ、大内を衞守し、平家弘を捕へ、藏人に補せられ、昇殿を聽さる。三子義清・義長・義兼を生む。義兼、雄偉にして循謹。其の二兄皆源義仲の將となり、西平氏と水島に戰ひて、之に死す。而して義兼は征夷大將軍源頼朝に鎌倉に從ひ、最も親待せらる。從つて平氏を筑紫に撃ち、又從つて藤原氏を陸奧に撃つ。陸奧再び亂れ、義兼、諸將を統べ往いて之を討つ。頼朝因つて天下を定む。奏して之に上總介を授け、北條時政をして、女を以て之に妻はさしむ。義氏を生む。

[illegible] 足利氏は、源義家から出た。義家が京都に居た時であつた。その子の義國は、或る事の爲めに、關東に流されて、上野に居たが、其處で二人の子義重・義康を生んだ。この義康は下野國足利郡を領地としたので、その地名を取つて、氏とした。この義康は、撿非違使左衛門尉となつた。保元の亂の時、源義朝に從ひ御所を護衛して居たが、崇德上皇方の平家弘を捕へた事から、その功で藏人に任ぜられ、昇殿を許された。義康は三人の子義清・義長・義兼を生んだ。この義兼は身體が大きく立派で、また心立て素直で、よく身を謹む性質であつた。この義兼の二兄、義清・義長は、皆源義仲の大將となり、西國で平氏と水島に戰つて討死した。そして義兼は鎌倉に在つて征夷大將軍源頼朝に從ひ、最も親密にあしらはれてゐた。頼朝の軍に從つて、平氏を筑紫に討ち、又お供をして藤原泰衡を陸奧に撃つた。その後、大川兼任が兵を擧げたので陸奧が再び亂れたが、義兼は諸大將をつれて陸奧を征服した。そのお蔭で頼朝は天下を定める事が出來た。頼朝は奏上して、義兼に上總介を授けて貰ひ、北條時政の娘を妻にさせた。かくして義氏を生んだのである。

義氏數助北條氏、靖其家難、爲正四位下左馬頭。義氏生泰氏、泰氏生賴氏、賴氏生家時、家時生貞氏。皆居足利。旗用白、旗號重畫。細川・畠山・仁木・岩松・桃井・吉良・今川・斯波・石橋・澁川・石堂・一色諸族、皆出於足利氏。足利氏世與北條氏婚、更相倚賴。然家時・貞氏自負門地、恥立人下、思竢時滅之。

【語釋】以事（右大臣實能と仲違ひとなること。新田氏記に詳しく見えてゐる。）

【訓讀】義氏數北條氏を助け、其の家難を靖む。正四位下、左馬頭と爲る。義氏・泰氏を生み、泰氏、賴氏を生み、賴氏、家時を生み、家時、貞氏を生む。皆足利に居る。旗白を用ひ、旗號は重畫なり。細川、畠山、仁木、岩松・桃井・吉良・今川・斯波・石橋・澁川・石堂・一色の諸族、皆足利氏より出づ。足利氏、世北條氏と婚し、更相倚賴す。然れども家時・貞氏、自ら門地を負ひ、人の下に立つを恥ぢ、時を竢ちて之を滅さんと思ふ。

【通釋】義氏は、度々北條氏を助けて、その家の難儀を治めた。正四位下左馬頭となつた。義氏は泰氏を生み、泰氏は賴氏を生み、賴氏は家時を生み、家時は貞氏を生んだ。皆代々足利に居り、その旗は白旗を用ひ、その紋所は二つ引であつた。細川・畠山・仁木・岩松・桃井・吉良・今川・斯波・石橋・澁川・石堂・一色の諸族は、皆足利氏から分れて出た。足利は代々北條氏と婚姻を結び、互に力と成つて倚り合つて居た。しかし、家時・貞氏は、その家柄を鼻にかけ、人の下に立つことを恥ぢ、（北條に家來扱ひされたことを恥ぢた。）時節の來るのを待つて北條氏を滅ぼさうと思つて居た。

【語釋】靖其家難（建保の和田の變、承久の都攻め等。）

貞氏娶上杉氏、生二子。曰高氏、曰直義。高氏稱又太郎、任治部大輔。直義任兵部少輔。高氏爲嫡嗣、娶赤橋守時妹、生子千壽。赤橋北條氏族也。元弘元年、後醍醐天皇起兵、據笠置山、討北條高時。高時乃遣高氏・直義等、往攻之。高氏兄弟、時丁外憂、强起而西。城陷、乃返。

【訓讀】貞氏、上杉氏を娶り、二子を生む。高氏と曰ひ、直義と曰ふ。高氏、又太郎と稱し、治部大輔に任ぜらる。直義は兵部少輔に任ぜらる。高氏、嫡嗣と爲り、赤橋守時の妹を娶り、子千壽を生む。赤橋は北條氏の族なり。元弘元年、後醍醐天皇、兵を起し、笠置山に據り、北條高時を擊つ。高時乃ち高氏・直義等を遣はし、往いて之を攻めしむ。高氏兄弟、時に外憂に丁る。强ひて起ちて西せしむ。城陷り、乃ち返る。

【通釋】貞氏は、上杉氏を娶つて、二人の子を生んだ。長を高氏といひ、次を直義といつた。高氏は、通稱を又太郎といつて、治部大輔に任ぜられた。直義は兵部少輔に任ぜられた。高氏は跡取となり、赤橋守時の妹を妻とし、子千壽を生んだ。この赤橋といふのは、北條氏の一族である。元弘元年、後醍醐天皇は兵を起して、笠置山に立て籠られ、北條高時を討たれた。そこで高時は高氏・直義等をやつて之を攻めさせた。高氏兄弟は丁度父の喪に服してゐた。併し高時は强ひて出發して西に向はしめた。兄弟は笠置山が陷落してから關東に返つて來た。

【語釋】娶上杉氏（上杉賴重の女を娶る。）〇丁外憂（この年五月父貞氏卒す。父の喪を外憂といひ、母の喪を内憂といふ。）

二年、高時流天皇于隱岐、立光嚴帝。已而帝歸伯耆。官軍並起、攻六波羅府。府帥北條仲時・北條時益、數戰不利。高時遣高氏及名越高家赴援。高氏有疾、不欲往。強之再三。高氏大慍、乃答使者曰、「當不日發矣」。因陰謂其親信曰、「彼舊爲我家臣隸。時遷勢變、乃至僕役我。我欲以今日歸官軍以興我家。如何」。上杉憲房・細川和氏等、皆贊成之。高氏乃欲挈家行。或說高時曰、「源氏失天下兵權久矣。今日之勢、焉知其無異圖。宜質其孥、且要其誓」。高時然之、以溫言來請焉。高氏患之、謀於直義。直義曰、「公欲誅無道。神豈不右焉。要盟神所不鑒也。宜留親信護孺子。而夫人則屬赤橋氏、當無所憂。公第聽彼所言、亟成大事」。高氏從之。

訓読 二年、高時、天皇を隱岐に流し、光嚴帝を立つ。已にして帝、伯耆に歸る。官軍竝び起りて、六波羅府を攻む。府帥北條仲時・北條時益、數戰ひ利あらず。高時、高氏及び名越高家を遣はして赴き援はしむ。高氏疾あり、往くを欲せず。之を強ふる再三。高氏、大に慍り、乃ち使者に答へて曰く、「當に日ならずして發すべし」と。因つて陰に其の親信に謂つて曰く、「彼れ舊我が家の臣隸たり。時遷り勢變り、乃ち我を僕役するに至る。我れ今日を以て官軍に歸し以て我が家を興さんと欲す。如何」と。上杉憲房・細川和氏等、皆之を贊成す。高氏乃

ち家を擧げて行かんと欲す。或人、高時に說いて曰く、「源氏、天下の兵權を失ふこと久し。今日の勢、焉んぞ其の異圖なきを知らん。宜しく其の孥を質とし、且つ其の誓を要すべし」と。高時、之を然りとし、温言を以て來り請ふ。高氏、之を患ひ、直義に謀る。直義曰く「公、無道を誅せんと欲す。神豈に右けざらんや。妻孥は、神の蠲しとせざる所なり。宜しく親信を留め、孺子を護らしむべし。而して夫人は則ち赤橋氏に屬すれば、當に憂ふる所なかるべし。公は第彼の言ふ所に聽せ、亟に大事を成せ」と。高氏、之に從ふ。

通釋 二年、高時は後醍醐天皇を隱岐に流して、光嚴天皇を立てた。其の内に後醍醐天皇は隱岐から脱走なされて伯耆に歸られた。官軍が一時に起つて、六波羅の役所を攻めた。役所の頭である北條仲時・北條時益は、度々戰つて負けた。そこで、高時は高氏及び名越高家を遣はし、援けにやつた。丁度高氏は、病氣だつたので往きたがらなかつた。再三行くやうに強ひた。高氏は、非常に怒つて、開き直つて使者に答へて曰ふには「いづれ近い内に出發します」と。そこでひそかに、その親しく信用してゐる者に向つて曰ふには「あの北條氏はもと／＼我源家の家來であつた。時勢が變化したので、我を家來扱にするやうになつた。自分は今日以來官軍に屬いて、北條を倒し、我が家を興さうと思ふんだ」と。上杉憲房・細川和氏などは、皆其の相談に贊成した。そこで高氏は跡に氣懸りの無い樣に、家族を連れて行かうと思つた。すると或る人が高時に說いて曰ふには「源氏は長い間天下の兵權を失つてゐます。ですから現下の大勢からしますと、高氏に謀叛の心がないとは限られません。だから念の爲め、彼の妻子を人質に取つて置き、その上に彼に起請をお書かせなすつたら宜しいでせう」と。高時は成程と思ひ、おだやかな言葉で、その由を高氏の處へ申入れた。高氏は之を心配して、直義に相談した。直義は對へて曰ふには「兄上には無道の北條氏を誅しようと思つてゐられます。神樣が之を助けられない譯はない。無理

に書かされた起請は神様だつて潔白なものとは認められないで、從つて受け入れられないでせう。(だから呉れといふなら書いておやんなさい) 親しい信用の置ける家來を殘して千壽を護らせて置きなさい。そして、夫人は里方の赤橋氏に預けて置けば、それ程心配することもありますまい。兄上には彼の言ふなりになされ、早く大事を成就なさいませ」と。高氏は其の言に從つた。

〔語釋〕赤橋氏(高氏の妻の實家。)

高時祖道、取一白旗、授高氏曰「是自八幡公傳至右大將、而我家受之者。請以爲贐」。八幡公謂義家、右大將謂賴朝也。高氏受之、心竊喜焉。乃率直義以下宗族三十二人、兵三千而西、至參河、告謀於其故黨吉良貞義。貞義曰「臣固將言焉」。高氏意益決、抵京師。乃密使使伯耆、請降。帝素聞其家聲。則大悅、賜使者以邑、敕曰「諸國官軍、汝其帥之、以滅國賊。賊滅之後、賞當從所請」。

〔訓讀〕高時祖道し、一白旗を取り、高氏に授けて曰く、「是れ八幡公より、傳へて右大將に至り、而して我が家之を受くる者なり。請ふ、以て贐と爲さん」と。八幡公は、義家を謂ひ右大將は、賴朝を謂ふなり。高氏之を受け、心竊に喜ぶ。乃ち直義以下宗族三十二人、兵三千を率ゐて西し、參河に至り謀を其の故黨吉良貞義に告ぐ。貞義曰く「臣固より將に言はんとす」と。高氏、意益〻決し、京師に抵る。乃ち密に使を伯耆に使はし降

が請ふ。帝素より其の家聲を聞く。則ち大に悦び、使者に賜ふに邑を以てし、敕して曰く、「諸國の官軍、汝其れ之を帥ゐ、以て國賊を滅せ。賊滅ぶるの後、賞は當に請ふ所に從ふべし」と。

通釋 高時は、餞別の宴を開き、一旒の白旗を取り出して、高氏に授けて曰ふには「これは八幡公から傳へて右大將に至り、それから我が家に貰つたものである。これを餞別として遣はさう」と。八幡公とは義家のことで、右大將とは頼朝のことである。高氏は之を貰つて心ひそかに喜んだ。（源氏の寶物が返つて來たから）そこで直義以下、一族三十二人、兵士三千を引きつれて西に向ひ、參河まで來て、その舊縁の一味の吉良貞義に逢つて計畫を話した。貞義は賛成して曰ふには「私も實は其のことを申し上げようと思つて居たのです」と。高氏の心は愈く決定して京都に至つた。そこでこつそり使者を伯耆の行在へ遣つて、官軍に降參を申し込んだ。後醍醐天皇は平素から高氏の家の名聲を聞いて居られた。そこで非常にお悦びになりその使者にまで土地を賜はり、詔して仰せらるゝに、「諸國の官軍はそなたが之を指揮して、國賊北條を亡ぼせよ。賊が亡んだ後には、褒美はいくらでもそなたの望み通りにして遣はす」と。

語釋 祖道（送別の宴。）

已而名越高家後至。與官軍將源忠顯・赤松則村、戰于狐川、敗死。高氏方張宴于桂川西、指一佛舍、問其名。或答曰「勝持寺」。高氏哂曰「吾將勝而持之矣」。乃聲言往攻行在、遂上馬、行入丹波。三年四月廿七日、至篠村、建旗于八幡廟前。州人久下時重、以

二百騎先至。旗號一番字。高氏見之問故。對曰「右大將之起、臣祖重光先衆而至。右大將親書賜焉。遂以爲號」高氏大喜曰「我家之嘉兆也」

【訓讀】已にして名越高家後れ至る。官軍の將源忠顯、赤松則村と、狐川に戰ひて、敗死す。高氏方に宴を桂川の西に張り、一佛舍を指し、其の名を問ふ。或人答へて曰く、「勝持寺」と。高氏哂つて、曰く、「吾れ將に勝ちて之を持たんとす」と。乃ち往いて行在を攻むと聲言し、遂に馬に上りて、行いて丹波に入る。三年四月二十七日、篠村に至り、旗を八幡廟前に立つ。州人久下時重、二百騎を以て先至る。旗號は一番の字なり。高氏之を見て、故を問ふ。對へて曰く、「右大將の起るや、臣の祖重光、衆に先だちて至る。右大將親ら書して賜ふ。遂に以て號と爲す」と。高氏、大に喜んで曰く、「我が家の嘉兆なり」と。

【通釋】その内に名越高家が後れて京都にやつて來た。官軍の大將源忠顯・赤松則村と狐川で戰つて敗れ死んだ。この時高氏は桂川の西で酒盛をして居たが、一つの寺を指して、その寺の名を尋ねた。或る人が答へて曰ふには「あれは勝持寺と申します」と。高氏笑つて曰ふには「余は寺の名のやうに勝つて自分の物にするのである」と。そこで伯耆の行在を攻めに往くと言ひふらし、遂に馬に乘つて丹波に入つた。三年の四月二十七日に篠村に至つて、旗を八幡の社前に建てた。丹波の人久下時重は、二百騎を引き具して眞つ先きにやつて來た。その紋所は一番といふ字であつた。高氏は之を見てその譯を尋ねた。時重は對へていふには「昔右大將賴朝公の兵を起されました時、私の先祖の重光が衆に先き立つて到着しました。それで右大將は御自身でこの字を書いて下さいました。それから之を紋所としました」と。高氏は非常に喜んで曰ふには「これは我が家に取つて芽出度い前兆だ」

と。

【語釈】狐川・桂川（山城）

五月七日、高氏引兵、南攻六波羅、自祈戰勝、納一矢於廟。直義以下宗族皆倣之。矢積成堆。乃發。沿道兵皆附之、比入京師、凡五萬人、軍于神祇官址。府帥遣兵二萬來拒。我軍擊大破之、與忠顯・則村合兵圍府。細川和氏說曰「圍之者、固彼志而損我兵也。不若誘而走之。」高氏乃闕其一角。果多逃降者。府帥遂奉新帝走、死近江。高氏乃奏捷於行在。帝乃還闕、廢新主而復位。即日以高氏敍從四位下、任左兵衞督、聽昇殿。直義敍正五位下、任左馬頭、以甲士五千、扈乘輿後。

【通釈】五月七日、高氏、兵を引いて、南六波羅を攻めんとし、自ら戰勝を祈り、一矢を廟に納る。直義以下の宗族、皆之に倣ふ。矢積んで堆を成す。乃ち發す。沿道の兵皆之に附き、京師に入る比、凡そ五萬人、神祇官の址に軍す。府帥、兵二萬を遣はして來り拒ぐ。我が軍擊つて大に之を破り、忠顯・則村と、兵を合はせ府を圍む。細川和氏說いて曰く、「之を圍むは、彼の志を固くして、我が兵を損するなり。誘ひて之を走らすに若かず」と。高氏乃ち其の一角を闕く。果して逃れ降る者多し。府帥遂に新帝を奉じて走り、近江に死す。高氏乃ち捷を行在に奏す。帝乃ち闕に還り、新主を廢して位に復す。即日、高氏を以て從四位下に敍し、左兵衞督に任じ、昇殿を

聽さる。直義は正五位下に敍し、左馬頭に任ぜらる。甲士五千を以て、乘輿の後に扈す。

通釋 五月七日、高氏は兵を引きつれて南六波羅を攻めようと思ひ、自ら勝ち戰を祈り矢一本を奉納した。直義以下、一族のものも皆之に倣つて矢を奉納した。その矢が積んで堆くなつた。そこで愈々出發した。道筋の兵は皆之に附き從ひ、京都に入つた頃には五萬人からになり、神祇官の役所址に陣取つた。六波羅の府帥、仲時・時益は兵二萬を派遣して拒がせた。我が軍は擊つて大に之を打ち破り、忠顯・則村と共に合併し、六波羅を取り卷いた。細川和氏が說いていふには「六波羅を取り卷くと敵はとても逃げられぬと觀念して、死守しようと決心し、その志を固くして、却つて、我が兵を損ふものであります。それよりは、おびき出して、之を擊ち走らすに越したことはありませぬ」と。そこで高氏は一方口をあけた。果して逃げ出して降參するものが多かつた。仲時・時益はとう〳〵光嚴天皇のお供をして逃げ出し、近江で討死をした。そこで高氏は勝利を行在所に注進した。後醍醐天皇は御所にお歸りなされ、光嚴天皇を廢して位に復られた。この日、直ぐ高氏を從四位下にすゝめ、左兵衞督に任じ、昇殿を許された。直義は正五位下に敍し、左馬頭に任ぜられた。高氏等は、鎧を着た武者五千を率ゐ御乘物の後に扈從した。

語釋 神祇官（天津神、國津神を祀る官。其の址は今の二條城の西北。大內裏の時、郁芳門の南。）

於是、高氏遣細川和氏與弟賴春、將兵往定關東。先是、千壽逃歸下野、聞新田義貞起兵、往從之。義貞義重遠孫也。北條高時伏誅、鎌倉平。義貞閱源氏故器、得白旗。旗

號重畫。新田氏號中黑。故不レ可レ用。和氏聞レ之、以三其有二足利氏之號一、就而求レ之。義貞不レ與也。和氏乃大稱下高氏在二京師一得二寵遇一狀上、以搖二將士一。將士稍稍去二義貞一、就二千壽一。新田氏於レ是與二足利氏一有レ郤。而帝方寵二高氏一、進二從三位參議一、賜二御諱尊字一、改レ名二尊氏一。十二月、遣二皇子成良一鎭二鎌倉一、直義執レ權焉。建武元年、廷論二戰功一、尊氏爲レ首、管二武藏・常陸・下總守護一、直義管二遠江守護一。

譯文 是に於て、高氏、細川和氏と、弟頼春とを遣はし、兵に將として、往いて關東を定めしむ。是より先き、千壽、下野に逃れ歸り、新田義貞、兵を起すと聞き、往いて之に從ふ。北條高時、誅に伏し、鎌倉平ぐ。義貞、源氏の故器を閲し、白旗を得たり。旗號は重畫。義貞は、義重の遠孫なり。新田氏の號は中黒なり。故に用ふべからず。和氏之を聞き、其の足利氏の號あるを以て、就いて之を求む。義貞與へず。和氏乃ち大に高氏京師に在りて寵遇を得るの狀を稱し、以て將士を搖す。將士稍稍義貞を去り、千壽に就く。新田氏、是に於て、足利氏と郤あり。而して帝方に高氏を寵し、從三位參議に進め、御諱尊の字を賜ひ、名を尊氏と改めしむ。十二月、皇子成良を遣はし、鎌倉を鎭めしむ。直義、執權たり。建武元年、戰功を廷論し、尊氏を首と爲し、武藏・常陸・下總の守護を管せしめ、直義には遠江の守護を管せしむ。

通釋 そこで、高氏は、細川和氏と弟の頼春とをして、兵を率ゐ關東を定めしめた。これより以前、高氏の

子千壽は、鎌倉から逃れ出て故鄕の下野に歸り、新田義貞が兵を起したと聞いたので往つて之に屬した。義貞は義重の遠い血筋の者である。かくて、北條高時は誅せられて鎌倉は平らいだ。義貞は、源氏の古い道具を調べて見た所、白旗が一旒手に入つた。紋所は二つ引であつた。しかるに新田氏の紋所は中黑であつた。だからその儘使ふことは出來なかつた。和氏は之を聞いて、足利氏の紋所であるからとて、義貞の處へ往つて之を貰ひ受けたいと申し入れた。義貞はやらなかつた。そこで和氏は之を怒つて、高氏が京都で天子の御氣に入り、非常に待遇せられて居る有樣を大袈裟に吹聽して、將士の心を動かした。その結果將士は、だん／＼義貞を離れて千壽に附いた。そんなことで新田氏は足利氏と仲が惡くなつた。而して、天皇は高氏を寵せられ、從三位參議に進められ、御名尊治の尊の字を下され、高氏を尊氏と改めしめられた。十二月、皇子、成良親王を遣はして鎌倉を鎭めさせられた。直義はその執權となつた。建武元年此の度の戰功を朝廷で評議され、尊氏をば第一となし、武藏・常陸・下總の守護を管理せしめ、直義には遠江の守護を管理せしめられた。

時關東承大亂之後、人心未定。直義修北條氏舊政、招散亡、撫瘡痍。遠近歸心焉。而京師之政、務改其舊、徵守護地頭食邑二十分一、以修大內、又造交鈔。民不便之。朝廷臣僚、異時爲武人所輕侮者、至是、競驅役武人。武人效力於興復者、奉狀冀賞、群聚闕下。有司不能甄別。月餘乃定十餘人。而內敕已以北條氏邑、分給於妃藤原氏・皇子護良等、其餘悉散賜京官內臣歌童舞妓、六十餘州、無復遺地。當是時、朝議內

旨、相爲抵牾、往往數人同爭一邑、許食邑如故者、旋被沒收。赤松則村授播磨守護、已而褫之、僅食佐用一莊。時有綸旨翻覆之議。諸武人私相語曰「如是而不止、我輩皆奴虜矣。安得戴一將種、執天下權。」

訓讀　時に關東大亂の後を承け、人心未だ定らず。直義、北條氏の舊政を修め、散亡を招き、瘡痍を撫す。遠近、心を歸す。而して京師の政は、務めて其の舊を改め、守護、地頭の食邑二十分の一を徵し、以て大内を修め、又交鈔を造る。民、之を便とせず。朝廷の臣僚、異時、武人の輕侮する所となる者、是に至つて、競ひて武人を驅役す。武人の力を興復に效す者、狀を奉じて賞を冀ひ、闕下に群聚す。有司甄別する能はず。月餘乃ち十餘人を定む。而して內敕已に北條氏の邑を以て、分ちて妃藤原氏、皇子護良等に給し、其の餘は、悉く京官、內侍、妓童、舞妓に散賜し、六十餘州、復遺地なし。是の時に當り、朝議內旨、抵牾を相爲し、往往數人同じく一邑を爭ひ、食邑故の如きを許さるる者、旋ち沒收せらる。赤松則村、播磨の守護を授けらる。已にして之を褫はれ、僅に佐用の一莊を食む。時に綸旨翻覆の議あり。諸の武人、私に相語つて曰く、「是の如くにして止まざれば我が輩皆奴虜とならん。安んぞ一將種を戴き、天下の權を執らしむるを得ん」と。

通釋　この時、關東は大亂の後で、人の心が落ち着いてゐなかつた。直義は、北條氏の元の政治を習つて之を善くし、ちり〳〵に逃げて居たものを招び集め、負傷した者をいたはつたりした。だから遠近の者が心を寄せ、非常に人望があつた。しかるに、京都の御政治は出來るだけ、昔の制度を改變し、守護や地頭の領地の收入から

は二十分の一を取り立て、それで御所を修繕し、又紙幣を造つた。人民は却つて之を不便に思つたのである。朝廷の公卿衆でこれまで隨分武士の爲めに侮られて居た者が、朝權が恢復したものだから、競うて、武士を追ひまはしこき使つた。此の度の中興回復(北條討滅)に盡力した武士どもが、自分の立てた手柄の次第を書き立てゝ差出し、恩賞に預りたいと京都に群集して來た。多勢のことゝて役人は之を見別けることが出來なかつた。調査に一箇月餘もかゝり、やつと十餘人を定めた位のものである。所が一方には內々の御意で、とつくの昔、北條氏の領地を分けて、妃藤原氏、皇子護良親王などに下され、その殘りの土地は皆分けて、京都在住の役人や、宮中の臣下や、歌を謠ふ子供や、舞を舞ふ白拍子などに頒ち下つたので、最早殘りの土地はなくなつてゐた。(武士には土地を與へようにも、も早土地はない)この時に際して朝廷の評議と、陛下內々の御意とが矛盾をしてゐた結果、どうかすると數人で同じく一つの邑を爭つたり、又北條時代に貰つてゐた領地は、もとの通りに所有して宜いと許された者が、やがて、取り上げられたりした。赤松則村の如きは、はじめ播磨の守護を授けられた。間もなく其の職を召し上げられ、わづかに佐用といふ一個所の莊園を所領としたに過ぎない。當時陛下の御意が度々變るといふ議さへあつた。多くの武士どもはこつそりさゝやき合つていふには「こんなことが續いて止まないとすると、我等は、皆公卿の奴僕となつて終ふだらう。何んとかして一人の大將を戴いて、天下の政權を執らしめたいものぢや」と。

語釋 交鈔(紙幣のこと。) ○佐用(播磨)

尊氏ノ聲望素ヨリ著ル。衆屬ㇾ意ヲ焉ニ。皇子護良爲リ二大將軍一、心ニ深ク疾ム二尊氏ヲ一。尊氏之初メ定ムルヤ二京師ヲ一也、護

良ノ將殿良忠、不レ戢二其下一。尊氏捕二十餘人一、梟レ之。護良怒欲レ誅二尊氏一。帝不レ聽。護良耽二聲色一、又喜レ客。客多姦豪、酗而殺レ人。又私徵レ兵、圖二尊氏一。尊氏得二其徵レ兵書一、上焉、誣以二謀反一。帝乃使三人執二護良一、流二於鎌倉一。直義迎而幽レ之。

〔訓讀〕尊氏の聲望、素より著る。衆、意を屬す。皇子護良、大將軍となり、心に深く尊氏を疾む。尊氏の初め京師を定むるや、護良の將殿良忠、其の下を戢めず。尊氏、十餘人を捕へて、之を梟す。護良怒り、尊氏を誅せんと欲す。帝聽さず。護良、聲色に耽り、又客を喜む。客多く姦豪、酗して人を殺す。又私に兵を徵し、尊氏を圖る。尊氏、其の兵を徵すの書を得て、上り、誣ふるに謀反を以てす。帝乃ち人をして護良を執へしめ、鎌倉に流す。直義迎へて之を幽す。

〔通釋〕尊氏はもとその名聲人望が著れて居た。だから皆心を寄せてゐた。皇子護良親王は、征夷大將軍となられ、心中深く尊氏を憎んでゐられた。ずつと前尊氏が、京都を平定した當時、護良親王の大將の殿良忠はその部下の家來を充分取締らなかつた。大分暴れたので尊氏はその十餘人を捕へて、首を斬り、獄門に曝した。護良親王は非常にお怒りになり、尊氏を誅せられむとした。併し天皇は、之を許されなかつた。護良親王は音樂や女色に耽られ、又客を養ふことがお好きであつた。その客は大抵無賴者醉へば怒つて人を殺したりした。又親王はこつそり兵士を集められ、尊氏を亡ぼさうと謀られた。尊氏は、その兵を徵集する命令を手に入れて之を天皇に上り謀叛の企があるといつて讒言した。そこで天皇は人をして護良親王を捕へさせられ、これを鎌倉にお流しになつた。直義は之を迎へて押し込めて置いた。

語釋 酗（音ク、醉狂すること。）

是歲、北條氏餘黨、本間・澁谷作亂。直義遣兵擊夷之。二年、北條時行起兵、數攻鎌倉。直義迎擊不利。遂奉成良西走、使人陰害護良、報急京師。尊氏請自將東伐。被許。又請任征夷將軍、管領關東。不許。曰「竢事平議之」。尊氏怒、不告而發。諸武人奮躍、爭起從之。至矢矧驛、合於直義。自海道進、與時行兵、七遇七捷、遂入鎌倉。時行兵奔潰。詔敍尊氏從二位、敍義詮從五位下。義詮千壽也。又詔趣共西歸。直義說尊氏曰「朝廷與義貞、皆忌公。公免而至此、天也。何再赴虎口爲」。尊氏從之。於是、自稱征夷將軍關東管領。曰「帝所許也」。開府于源賴朝故基、賞有功、納降附、收新田氏邑在關東者、割予將士。將士爭附之。

訓讀 是の歲、北條氏の餘黨、本間、澁谷、亂を作す。直義、兵を遣はし、擊つて之を夷ぐ。二年、北條時行、兵を起し、數鎌倉を攻む。直義迎へ擊つて利あらず。遂に成良を奉じて西走し、人をして陰に護良を害せしめ、急を京師に報ず。尊氏自ら將として東伐せんと請ふ。許さる。又征夷將軍に任ぜられ・關東を管領せんと請ふ。許されず。曰く「事平ぐを竢ちて之を議せん」と。尊氏怒り、告げずして發す。諸武人奮躍し、爭ひ起つて之に

從ふ。矢刎驛に至り、直義に合ふ。海道より進み、時行の兵と、七たび遇ひ七たび捷ち、遂に鎌倉に入る。時行の兵、奔潰す。詔して、尊氏を從二位に敍し、義詮を從五位下に敍す。義詮は千壽なり。又詔して、其の西歸を趣がす。直義、尊氏に說いて曰く「朝廷、義貞と、皆公を忌む。公免れて此に至るは、天なり。何ぞ再び虎口に赴くを爲さん」と。尊氏、之に從ふ。是に於て、自ら征夷將軍、關東管領と稱す。曰く、「帝の許す所なり」と。府を源頼朝の故基に開き、有功を賞し、降附を納れ、新田氏の邑の關東に在る者を收め、將士に割予す。將士爭うて之に附く。

[illegible] この年、北條氏の殘黨、本間太郎、澁谷某などが亂を起した。直義は、兵を遣はし、撃つて之を平らげた。二年、北條時行が兵を起して度々鎌倉を攻めた。直義は迎へて之を撃つたが負けて終つた。遂に成良親王をお連れ申して、西に逃げ、人をやつて、ひそかに護良親王を殺させ、使者を京都へやつて大變を注進した。尊氏は、自ら大將となり、東、時行を討ちたいと願ひ出た。これは許された。そこで又、征夷大將軍にして戴き、關東を管理し度いと願ひ出た。これは許されなかつた。「戰が收まるのを待つて、改めて評議する」との仰せであつた。そこで尊氏は、怒つて、朝廷に默つて出發して終つた。諸々の武士どもは、勇み立つて、我も〳〵と之に從つた。矢刎驛まで來ると直義に出遇つた。東海道から進み、時行の兵と七度出遇つて、七度までも勝ち、遂に鎌倉に入つて行つた。時行の兵は潰え奔つた。そこで詔して、尊氏を從二位に敍し、その子義詮を從五位下に敍せられた。義詮は則ち千壽である。又、詔して、早く、京都に還るようにと催促せられた。直義は尊氏に說いて曰ふには「朝廷も義貞も皆兄上を忌み憎んでゐます。それを兄上が免れて、こゝまで來られたのは天運が強かつたからです。それをどうして、再び虎の口のやうな危險な所へ行つて宜いものですか」と。尊氏は此の說に從つ

た。そしてこの後は自分勝手に征夷大將軍關東管領と稱へた。これは、天子樣から許されたのだと云ひふらした。幕府を源賴朝の役所跡に建て、手柄のあつた者を賞し、降參した者を受け納れ、關東に在る新田氏の領地を取り上げ、大將侍に分け與へた。將士は我も我もと尊氏に屬いた。

語釋 使人云々（人は淵邊義博。）

京師傳言、尊氏反。帝使人往詗焉。而細川和氏齎尊氏劾新田氏書至。曰「竊當東藩之爲逆、臣尊氏以身爲倡首、奮臂一戰、決勝瞬息。義貞擧事於不得已、及聞臣定京畿、乃以討賊爲名、三戰不克。纔爲守計。臣長男義詮起下野、遠邇爭歸。義貞憑之、以得克賊。遂攘其功、敢要重賞。是國之蠧也。今臣勞苦於外、而內有讒諛之臣。是非趙高專秦、章邯降楚之謂乎。願得明詔、以誅義貞。」義貞聞之、亦收足利氏邑在其管內者、上書告護良遣害狀。時直義密徵諸道兵、西國得其檄、上之。十一月、遂詔削尊氏・直義官爵、遣皇子尊良來討。義貞爲副焉。

訓讀 京師傳言す、尊氏反すと。帝、人をして往いて詗はしむ。而して細川和氏、尊氏の新田氏を劾するの書を齎して至る。曰く、「竊に東藩の逆を爲すに當りて、臣尊氏、身を以て倡首と爲り、臂を奮ひて一戰し、勝を瞬

息に決す。義貞、事を已むを得ざるに擧げ、臣、京畿を定むるを聞くに及んで、乃ち賊を討つを以て名と爲し、三戰克たず、纔に守計を爲す。臣の長男義詮、下野に起り、遠邇爭ひ歸す。義貞、之に憑り以て賊に克つを得たり。遂に其の功を攘み、敢て重賞を要む。是れ國の蠹なり。今、臣、外に勞苦し、而して內に讒諛の臣あり。是れ趙高、秦を專にし、章邯、楚に降るの謂に非ずや。願はくは明詔を得て、以て義貞を誅せん」と。義貞、之を聞き、亦足利氏の邑、其の管內に在る者を收め、上書して護良害に遇ふの狀を告ぐ。時に直義、密に諸道の兵を徵す。西國、其の檄を得て、之を上る。十一月、遂に詔して、尊氏・直義の官爵を削奪し、皇子尊良を遣はして來り討たしむ。義貞を副と爲せり。

【通釋】京都では、尊氏が謀叛をしたと言ひ傳へた。天皇は、人をやられて樣子を見させられた。そして細川和氏は、尊氏が新田氏を彈劾した書面を持つて京都にやつて來た。その書面には次のやうに認めてあつた、「さきに北條氏が、大逆を爲したときに當りまして、臣尊氏は身を捨て、勤王の發頭人となり、臂を奮つて一合戰し、しばらくの間に勝利を定めました。しかるに、義貞は已むに已まれなくなつて兵を擧げ、臣が畿內を平らげたのを聞いてから北條討伐を申し立て、三度戰つて三度とも勝たず、やつと、籠城の計を爲してゐました。そこへ臣の長男義詮が下野に起つてからは、遠近の將士が爭ひ屬きました。義貞は之をたのみにして、北條に勝つことが出來ました。それなのに、その手柄を盜んで、自分のものとし、押し強く重賞を得ようとしました。かれのやうなものは國の害蟲で御座います。今臣は外にあつて、隨分と苦勞をしてゐるのに、內には、讒言をして君にへつらふ家來がゐます。これは恰も趙高が秦の政事を勝手にし、その爲めに章邯が楚に降參したのと同樣であります。願はくは判つきりした詔を下されて、義貞を誅戮致したいと存じます」と。義貞はこの事を聞いて、亦自分の

管内に在る足利の領地を取り上げ、上書して、護良親王が殺害せられ給ひし樣子を申上げた。此の時、直義は内々諸國の兵士を徵集した。西國で、其の召狀を手に入れて朝廷へ上つた。十一月、遂に詔して、尊氏・直義の官職爵位を取り上げられ、皇子尊良親王を遣はして、尊氏を討たしめられた。義貞はその副將となつた。

語釋 東藩（北條氏。）○瞬息（一瞬一息、一寸の間。）○趙高（秦の二世皇帝の宦官。義貞に擬したのである。）

當是時、諸國兵士赴關東者、與歸京師者、東西旁午、道路如織。直義以下將校、盡戎裝入見、請邀擊官軍。尊氏默然、良久曰、「我官位顯達、得伸宿憤、雖由微功、豈非君恩。恩可背乎。今之所以觸宸怒、曰、戕親王也。曰、徵兵也。二者、非尊氏所爲。詳訴其寃、猶得霽威。即不被許、有削髮遁世而已。諸君好自爲計。尊氏終不能西向關弓矣」作色而入。諸將愕眙。

通釋 是の時に當り、諸國の兵士、關東に赴く者と、京師に歸する者と、東西旁午し、道路織るが如し。直義以下の將校、盡く戎裝して入り見え、官軍を邀擊せんと請ふ。尊氏默然、良久しうして曰く、「我が官位顯達、宿憤を伸ぶるを得たるは、微功に由ると雖も、豈に君恩に非ずや。恩背く可けんや。今の宸怒に觸るゝ所以は、曰く、親王を戕せるなり。曰く、兵を徵するなり。二者、尊氏の爲す所に非ず。詳に、其の寃を訴へば、猶ほ威を霽すを得ん。即し許されずんば、髮を削り世を遁るゝあるのみ。諸君好く自ら計を爲せ。尊氏終に西に向ひ

弓を開く能はず」と。色を作して入る。諸將愕眙す。

【通釋】この當時、諸國の兵士どもは關東に行く者や、京都に行くものや、めい／＼思ふ方へ行くので、それが西や東と入り交り、街道の賑やかなことは、織るがやうであつた。直義以下の將校は皆戰爭の用意をして、入つて尊氏に會ひ、官軍を迎へ撃ちたいと請うた。すると尊氏は默然と言葉なく、やゝ久しくしていふには「余が官位が貴くなつて、北條にこき使はれた日頃の鬱憤を晴らすことが出來たのは、自分のわずかな手柄に由つたのであるが、やはりこれは君の御恩に由つたのではあるまいか。その恩義に對して背くことは出來ない。今の御怒に遇つたわけは、第一には護良親王を殺したことである。第二には兵士を徵集したことである。けれどもこの二つは余のした事ではない。だから詳細にこの無實を訴へたら、まだ大丈夫、御怒を解くことが出來るであらう。若しお許しが出なければ、髮を剃つて、坊主になり、浮世を逃れるまでの事ぢや。諸君はよく／＼自分で計を立てたら宜からう。尊氏はどうしても天子に向つては弓は挽けない」と。顏色をかへて內に入つた。諸將は驚いて眼を見張つた。

【語釋】勞午（戰塲に入れあがふこと。）

居二日、有來告曰「義貞至參河矣」上杉憲房・其子憲顯・細川和氏・其族賴春等、並謂直義曰「將軍所言、非無理也、然天下武士、翹足思亂。一聞將軍起、則雲合景附矣。將軍豈不辨禍福乎。今曠日彌久、使敵過要害、悔莫及焉」直義乃使諸將先發、再戰皆

敗。直義自以二萬騎赴援、亦敗。

【訓讀】居ること二日、來り告ぐるあり、曰く、「義貞、參河に至る」と。上杉憲房・其の子憲顯・細川和氏・其の族賴春等、並に直義に謂つて曰く、「將軍の言ふ所、理なきに非ざるなり。然れども天下の武士、足を翹げて亂を思ふ。一たび將軍の起るを聞かば、則ち雲合景附せん。將軍豈に禍福を辨へざらんや。今、日を曠しうし、久しきに彌り、敵をして要害を過ぎしめば、悔ゆるも及ぶ莫からん」と。直義乃ち諸將をして先づ發せしむ。再戰して皆敗る。直義自ら二萬騎を以て赴き援け、亦敗る。

【通釋】それから二日たつて、來り告ぐるものがあつて、曰ふには「義貞が參河まで來ました」と。上杉憲房と、その子の憲顯・細川和氏・その一族の賴春等は皆直義に向つて曰ふには「將軍の申されたことは皆道理に叶つたことであります。併し天下の武士は、足を立てゝ亂の起らむことを祈つて居ります。一たび、將軍が兵を起されたと聞けば彼等は雲のやうに集まつて來て、影のやうに附き從ふでせう。將軍とても斯くすれば禍となり、かくすれば福となる位のことを辨へて居られぬ筈はない。今無益に日を送つて、長い間、時を過ごし、敵をして箱根足柄などの險所を通過させたら、それこそ大變で、その時になつて後悔しても追つつきませんぞ」と。そこで直義は捨てゝ置けないから、諸將をして先づ出發せしめた。二度戰つて二度とも負けた。直義は自ら二萬騎を引きつれて援けに行き、これも亦敗れた。

【語釋】翹足（足をつま立てゝ望むこと。）

十二月、諸將還詣尊氏第。第門閉矣。衆亂敲之。有一人、出曰、「將軍逃建長寺、欲削髮。」

我曹百方止之、切髻而未剔也」將士大沮。憲房義子重能、僞作官檄十餘紙、曰「尊氏族類、罪惡深重、雖遁世晦迹、而勿得宥釋。」直義持至建長寺、泣曰「獲之敵死尸中。」尊氏熟視、大息曰「誠如是乎。則吾亦當從諸君、執弓箭、與義貞決死也。」乃釋法衣、穿錦袍而出。諸軍大喜、驩呼、皆自切髻、以亂其狀。將逃降者、四面來還、一日號三十萬。

【讀方】十二月、諸將還つて、尊氏の第に詣る。第門閉づ。衆、之を亂敲す。一人あり、出で、曰く「將軍、建長寺に逃れ、髮を削らんと欲す。我が曹、百方、之を止め、髻を切りて未だ剔せざるなり」と。將士、大に沮む。憲房の義子重能、僞りて官檄十餘紙を作りて、曰く「尊氏の族類、罪惡深重、世を逃れ迹を晦ますと雖も、宥釋を得る勿れ」と。直義、持して建長寺に至り、泣いて曰く、「之を敵の死尸中に獲たり」と。尊氏、熟視し、大息して曰く、「誠に是くの如きか。則ち吾れ亦當に諸君に從ひ、弓箭を執り、義貞と死を決すべきなり」と。乃ち法衣を釋き、錦袍を穿ちて出づ。諸軍、大に喜び驩呼し、皆自ら髻を切り、以て其の狀を亂す。將に逃れ降らんとする者、四面より來り還り、一日三十萬と號す。

【口語譯】十二月、諸將は還つて尊氏の屋敷にやつて來た。すると門が閉つて居る。皆は割れん許りに門を敲いた。一人の男が出て來ていふには「將軍は建長寺に逃げられ、髮を剃らうと思つてゐられます。我等は色々手を盡して之を止め、髻だけは切られたが、まだ剃り落してはゐられないです」と。將士どもは非常に落膽した。憲房の養子重能は、朝廷のふれ文十餘枚を贋造して、その文句に「尊氏の一族同類は、その罪惡が深く重いから、假令

坊主などになつて世を遁れ、形迹をくらましたとても、赦したりしてはならぬぞ」と書いた。直義は之を持つて建長寺へ行き、泣いて曰ふには「この ふれ文を敵の死骸の中から見出しました」と、尊氏はぢつと見てゐたが、大きな溜息を吐いていふには「ほんとうに、こんな事にまでなつてゐたのか。ようし、余も亦諸君に從つて弓箭を執り、義貞と勝負を決せねばならぬ」と。そこで法衣を脱いで錦の直垂をつけ、寺を出た。諸々の軍勢は大に喜んで歡び呼ばはり、皆めいめい髻を切つて尊氏だけが目立たぬ様にした。逃げて官軍に降參しようとした連中が、四方から還つて來て、一日の中に三十萬といふ大勢となつた。

語釋 一人（須賀公能。）○亂其狀（様子をまぎらせること。）

直義先將六萬、拒義貞于箱根。東軍稍卻。尊氏聞之、以十八萬騎、繼進。曰「拒其面不若出其背。」引兵出竹下。竹下官軍呼譟而進。赤松貞範等、爲我先鋒、望其陣曰「是京兵耳。」乃聯鋒馳下。官軍敗走。尊氏追北至伊豆府。義貞西走。乃使義詮守鎌倉、而合軍追躡之。京畿震駭。帝遽榜朝堂、能拒賊者、有重賞。無復應者。

訓讀 直義、先づ六萬に將とし、義貞を箱根に拒ぐ。東軍稍卻く。尊氏、之を聞き、十八萬騎を以て繼ぎ進む。曰く、「其の面を拒ぐは、其の背に出づるに若かず」と。兵を引いて竹下に出づ。竹下の官軍、呼譟して進む。赤松貞範等、我が先鋒となり、其の陣を望んで曰く、「是れ京兵のみ」と。乃ち鋒を聯ねて馳せ下る。官軍敗走す。

尊氏北ぐるを追うて、伊豆の府に至る。義貞西走す。乃ち義詮をして鎌倉を守らしめ、而して軍を合せて之を追躡す。京畿震駭す。帝、遽に朝堂に榜す、能く賊を拒ぐ者には、重賞あらんと。復應ずる者なし。

通釋 直義は、先づ六萬に將として義貞を箱根に拒いだ。足利方はやゝ退卻した。尊氏がそれを聞いて、十八萬騎を率ゐて後から繼ぎ進んだ。尊氏が曰ふのに「敵の正面を拒ぐよりは、その背後に出た方がよい」と。兵を引きつれ竹下に出た。竹下の官軍は太鼓を鳴らし喚き立てゝ進んで來た。赤松貞範等は味方の先鋒となつてゐたが、官軍の陣を望んで曰ふには「これは都の兵士でヘナヘナな連中に過ぎない」と。そこで鋒先をそろへて、足柄山からかけ下つた。官軍は忽ち敗れ走つた。尊氏は逃げるのを追つかけ伊豆の國府に行つた。義貞は叶はず西に走つた。そこで義詮に鎌倉を守らせて置いて、直義等と軍を合はせて、之を追ひかけた。京都地方は非常に驚きおそれた。後醍醐天皇は急に朝廷に掲示をされて申さるゝに、能く、賊を拒ぐものには重い恩賞を與へるであらうと。併し誰れとて命に應ずるものは無かつた。

語釋 竹下(駿河)　○貞範(則村の次子。)　○榜(役の札を掛けること。)

延元元年、正月、尊氏攻義貞于大渡。我軍多溺。先是、赤松則村叛、應尊氏、徇下山陽。細川和氏從弟定禪・顯氏、並在讃岐、徇下南海。至是、定禪等、與赤松範資合兵、攻山崎。尊氏聞之、遣貞範、助攻、破之。義貞顧而敗走。奉乘輿、據叡山。尊氏乃入京師。範資・貞範、皆則村子也。於是、尊氏誘園城寺、下之、遣定禪據焉、以逼叡山。會、北畠顯家舉

陸奥ノ兵、入リテ援ク行在ヲ。定禪連リニ請フ益サンコトヲ兵ヲ。尊氏不以テ爲サ意ト。旦日、定禪敗レ還ル。義貞追ヒ至リ、陣ス于東山ニ。

〔訓讀〕延元元年正月、尊氏、義貞を大渡に攻む。我が軍多く溺る。是より先き、赤松則村叛き、尊氏に應じ、山陽を徇へ下す。細川和氏の從弟定禪・顯氏、竝に讃岐に在りて、南海を徇へ下す。是に至つて、定禪等、赤松範資と兵を合せて、山崎を攻む。尊氏、之を聞き、貞範を遣はし、助け攻めしめ、之を破る。義貞顧みて敗走し、乘輿を奉じて叡山に據る。尊氏乃ち京師に入る。範資、貞範は、皆則村の子なり。是に於て、尊氏、園城寺を誘ひて、之を下し、定禪を遣はして據らしめ、以て叡山に逼る。會 北畠顯家、陸奥の兵を擧げ、入りて行在を援く、定禪、連に兵を益さんことを請ふ。尊氏以て意と爲さず。旦日、定禪破れ還る。義貞追ひ至り、東山に陣す。

〔通釋〕延元元年正月、尊氏は、義貞を大渡に攻めた。味方の軍(尊氏の軍)に溺れたものが隨分あつた。これより先き赤松則村が官軍に叛いて尊氏に味方し、布令を出して、山陽道を下した。細川和氏の從弟の定禪・顯氏の二人は、共に讃岐に居つたが、これが南海道を倡へ下した。そこで定禪等は、赤松範資と兵を合はせて、山崎を攻めた。尊氏はそれを聞いて、貞範を派遣して助け攻めさせて之を破つた。義貞は、顧みて敗走し、天皇をお連れ申して比叡山に立てこもつた。そこで尊氏は京都に入り込んだ。範資、貞範は皆則村の子である。尊氏は乃ち園城寺の僧兵を誘うて降參させ、定禪を遣はして其處に立て籠らせ、比叡山を壓迫した。折しも北畠顯家が陸奥の兵を皆つれて行在を援けに來た。定禪は切りに兵を増して貰ひたいと願うた。尊氏は一向氣にもかけなかつた。

翌日、定禪は負けて還つた。義貞は、之を追つかけ來つて東山に陣取つた。

【語釋】大渡（山城）

尊氏指語將士曰、「聞、義貞喜平地騎戰。今負山不出者、意其兵寡、使我不識兵數耳」。遣一將嘗之。不利卻。尊氏乃親進。會敵兵雜入我軍、軍遂亂走。及日暮敵亦引去。細川定禪謂其兵曰、「敗由於我。我欲一雪其恥。料敵兵皆疲。不疲者出掠。可以襲也」。以兵三百夜返、縱火其前、自後襲之。義貞果不備、敗走。定禪追撃、獲其將領數十人。尊氏復入京師。已而官軍復來攻。我軍不利。陸奥兵二萬騎、火粟田口而來。尊氏望之曰、「彼其北畠氏也。吾自當之」。進闘于四條。義貞軍大至。我軍顧之、遂敗走、止戰于桂川、鏖其一隊。官軍乃引還。尊氏復入、謬聞義貞等死、其兵逃走也、分兵要之。官軍乘虚來攻。尊氏敗走丹波。

【通釋】尊氏、指して將士に語つて曰く、「聞く、義貞は平地の騎戰を喜ぶと。今、山を負うて出でざるは、意ふに其の兵寡く、我をして兵數を識らざらしむるのみ」と。一將を遣はして之を嘗みしむ。利あらずして卻く。尊氏乃ち親ら進む。會ゝ敵兵我が軍に雜入し、軍遂に亂れ走る。日暮に及んで、敵も亦引き去れり。細川定禪、其

の兵に謂つて曰く、「敗は我に由る。我れ一たび其の恥を雪がんと欲す。料るに敵兵皆疲る。疲れざる者は出で掠む。以て襲ふ可きなり」と。兵三百を以て、夜返り、火を其の前に縱ち、後へより之を襲ふ。義貞果して備へず敗走す。定禪追撃し、其の將領數十人を獲。尊氏復京師に入る。已にして官軍、復來り攻む。我が軍利あらず。陸奧の兵二萬騎、粟田口を火いて來る。尊氏、之を望んで曰く、「彼は其れ北畠氏ならん。吾れ自ら之に當らん」と。進んで四條に鬪ふ。義貞の軍大に至る。我が軍、之を顧み、遂に敗れ走り、止つて桂川に戰ひ、其の一隊を鏖にす。官軍乃ち引き還る。尊氏復入り、謬つて義貞等死し、其の兵逃れ走ると聞くや、兵を分ちて之を要す。官軍、虛に乘じ來り攻む。尊氏敗れて丹波に走る。

通釋 尊氏は之を指して將士に語つて曰ふには「聞けば義貞は平地の戰爭が好きだといふことだ。その男が今山を後にして出て來ないのは、恐らく兵が少いので、得意の平地の戰が出來ないから、あゝしてゐるので、味方に兵數を知らせないやうにする策に過ぎない」と。一人の大將を遣はして其の兵數の多寡をためして見させた。併し負けて退卻した。そこで尊氏自身で進んで往つた。敵の兵が味方の中に交つて居た爲めに遂に軍を亂して逃げた。日暮れになつて、敵も亦引き揚げた。細川定禪が部下の兵に向つて曰ふには「今度の敗軍は我から起つたのである。自分は一たびこの耻をすゝがうと思つてゐる。敵兵は、皆疲れてゐるに違ひない。疲れてゐない者は分捕りに出かけてゐる。この際に不意討ちをしたらよいのだ」と。兵三百を引きつれ、夜、引きかへし、火を敵前に放ち、後方から之を襲うた。義貞は案の定、備へがしてなかつたので敗れ走つた。定禪は追撃して、その大將分を數十人討ち取つた。斯くして尊氏は再び京都に入つた。其の內に官軍はまた攻めて來た。うまく行かないで味方は敗北した。所が陸奧の兵二萬騎が粟田口に火をかけて攻め寄せた。尊氏はこれを望んで曰ふには、「あ

れは大抵北畠の兵だらう。余自身で之に向はう」と。進んで四條で戰つた。義貞の軍は、多勢で押しかけて來た。味方は之を顧みて、遂に敗れ走つたが、又ふみ止つて桂川で一戰し、その一隊を皆殺にした。そこで官軍は引き揚げた。尊氏は、又京都に入つたが義貞等が討死し、その部下は逃走したと聞いたので、兵を分けて其の敗兵を待ち受けた。所が其の隙に官軍がつけ込んで攻めて來た。尊氏は敗れて、丹波に走つた。

【語釋】雜入（略ぼ面を知る者五十人毎に組として、敗卒の狀をなして敵中に入らしめた。）○粟田口（京都の東）○義貞等死云云（楠氏流男の計略。）

二月、尊氏赴兵庫。熊野道有者、在軍中。與廢主臣僚相識。尊氏召而謂之曰「吾之數敗、非戰之罪也。以吾負賊名焉爾。吾始欲擁立一皇胤、以其悉在叡山、不可如何。吾意廢帝抑鬱、不得志久矣。汝安爲我得其詔旨。吾將使兩主爭位、以成吾事也」道有諾而去。

【通釋】二月、尊氏、兵庫に赴く。熊野道有なる者、軍中に在り。廢主の臣僚と相識る。尊氏召して之に謂つて曰く、「吾の數敗れたるは、戰の罪にあらざるなり。吾れ賊名を負ふを以てのみ。吾れ始め一皇胤を擁立せんと欲す。其の悉く叡山に在るを以て、如何ともす可からず。吾れ意ふに、廢帝は抑鬱、志を得ざること久し。汝安んぞ我が爲めに其の詔旨を得ん。吾れ將に兩主をして位を爭はしめ以て吾が事を成さんとす」と。道有、諾して去る。

【通釋】二月、尊氏は兵庫に赴いた。熊野道有といふものが、軍中に居た。光嚴天皇の家來と知り合つてゐた。尊氏、道有を呼んで曰ふには「余が度々敗けたのは戰爭の仕方の惡かつた爲めではない。余が國賊といふ名を受けてゐるからである。余ははじめ皇族お一方を守り立てようと思つてゐた。所がどなたも皆比叡山に居られたからどうすることも出來なかつたのである。思ふに光嚴天皇は久しい間御心が伸びず、塞がつて思ふまゝにならないでゐられる。お前は余の爲めに行つて、その詔を戴いて來ては吳れまいか。余は後醍醐天皇と光嚴天皇とをして位を爭はれるやうに仕掛け、余が賊と言はれぬやうにして、自分の望み通りに成就させたいと思つてゐる」と。道有は承知して立ち去つた。

【語釋】廢主（光嚴天皇。）○熊野道有（熊野別當四郎法橋。）

赤松則村請尊氏入保摩耶城。或曰「是失天下之望也。今見兵猶足以取京師。乃屬兵於直義東上、戰于豐嶋敗還。會大友貞宗・大內弘世等以兵艦來援。迎擊官軍于湊川、又大敗。則村又說尊氏曰「師不可用、公宜留諸將于中國及南海、而身赴鎭西、以圖再擧。」尊氏從之、與書則村、呼之爲父、以深結納之。於是、尊氏與直義、乘貞宗舟而西。諸將士多降義貞。義貞頗驕怠、耽溺女色、不復窮追尊氏。尊氏得達赤間關。

【訓讀】赤松則村、尊氏に、入りて摩耶城を保たんことを請ふ。或人曰く、「是れ天下の望を失ふなり。今、見兵

猶ほ以て京師を取るに足る」と。乃ち兵を直義に屬して東上せしめ、豐島に戰ひて、敗れ還る。會〻大友貞宗、大内弘世等、兵艦を以て來り援く。官軍を湊川に迎へ擊ち、又大に敗る。則村又尊氏に說いて曰く、「師用ふべからず。公宜しく諸將を中國及び南海に留め、身、鎭西に赴き以て再擧を圖るべし」と。尊氏、之に從ひ、書を則村に與へ、之を呼んで父と稱し、以て深く之に結納す。是に於て、尊氏、直義と、貞宗の舶に乘りて西す。諸將士多く義貞に降る。義貞頗る驕怠、女色に耽溺し、復尊氏を窮追せず。尊氏、赤間關に達するを得たり。

〔通釋〕 赤松則村は、尊氏に摩耶城を保持したいと請うた。或る人が曰ふには「それは天下の人望を失ふ仕方である。現在ゐる兵で京都を取り返へすには十分である」と。そこで、兵を直義に附けて東に上らしめた。官軍と豐島で戰つて、敗れ還つた。丁度そこへ大友貞宗、大内弘世等が兵艦を率ゐて援けに來た。そこで官軍を湊川に迎へ擊つたが、又大に敗れた。則村は又尊氏に說いて曰ふには「かう敗けては兵士を用ふることは出來ません。戰爭を止めて貴公は諸將を中國及び南海に留め置き、御自身九州に行かれて再度の旗揚げを圖られた方が宜しいと思ひます」と。尊氏は、之に從ひ、書を則村に與へ、之を呼んで、父といひ、深く其の心に結びついた。そこで、尊氏は、直義と一緒に貞宗の舶に乘つて、西に行つた。諸將士は、多く義貞に降參した。義貞は隨分驕つて怠惰し、女色に耽り溺れ、尊氏を追ひつめようともしなかつた。そこで尊氏は赤間關に無事達することが出來た。

〔語釋〕 摩耶城・豐島（注）

三月、菊池武敏起兵應官軍、攻殺少貳貞經。貞經遺囑其子頼尚曰、「吾爲三浦義明

也。汝體吾志、愼仕將軍。賴尙引兵迎尊氏。尊氏問貞經死否。賴尙恐沮軍氣也、答曰「訛傳耳」。因導至宗像氏。會〻武敏來攻。尊氏上香椎祠、以望其軍、可四五萬騎。而顧我兵、僅五百人。鎧馬不具。曰「吾死矣」。乃進陣赤坂、遣直義先進。賴尙曰「彼鬪士不過三百。其餘聞將軍至、皆將降也」。進戰于鞴濱。仁木義長・細川顯氏等、奮搏敵兵、剝鎧奪馬而進。會〻北風起、沙石皆走、敵兵沮卻。直義憑風縱擊、追至博多。武敏以全軍返戰。直義自慮不支、馳使尊氏、截衣袖遣之、爲訣。曰「公亟走長門。直義將留死於此」。尊氏得報曰「吾弟如死、吾何生爲」。親將赴援。松浦氏・神田氏、謂大兵至矣、舉其衆來降。合擊大破武敏軍、追至太宰府。於是聞貞經定死、尊氏・直義爲之舉哀。

訓讀 三月、菊池武敏、兵を起して、官軍に應じ、少貳貞經を攻殺す。貞經、其の子賴尙に遺囑して曰く、「吾れ三浦義明とならん。汝、吾が志を體し、愼んで將軍に仕へよと。」賴尙、兵を引いて尊氏を迎ふ。尊氏、貞經死せるや否やを問ふ。賴尙、軍氣を沮むを恐るるや、答へて曰く、「訛傳のみ」と。因つて導いて宗像氏に至る。會〻武敏來り攻む。尊氏、香椎祠に上り以て其の軍を望めば、四五萬騎可り。而して我が兵を顧みるに、僅に五百人のみ。鎧馬具はらず。曰く、「吾れ死せん」と。乃ち陣を赤坂に進め、直義を遣はし先づ進ましむ。賴尙曰

く、「彼の鬪士は三百に過ぎず。其の餘は、將軍の至るを聞きて、皆將に降らんとす」と。進んで鞴濱に戰ふ。仁木義長・細川顯氏等、敵兵を衝搏し、鎧を剝ぎ馬を奪つて進む。會〻北風起り、沙石皆走り、敵兵沮み卻く。直義、風に憑つて縱擊し、追ひて博多に至る。武敏、全軍を以て返り戰ふ。直義自ら支へざるを慮り、使を尊氏に馳せ、衣袖を截つて之を遺り、訣を爲す。曰く、「公、亟に長門に走れ。直義將に留りて此に死せんとす」と。尊氏報を得て曰く、「吾が弟如し死せば、吾れ何ぞ生くるを爲さん」と。親ら將として赴き援く。松浦氏・神田氏、大兵至ると謂ひ、其の衆を擧げて來り降る。合擊して大に武敏の軍を破り、追ひて太宰府に至る。是に於て、貞經定めて死するを聞き、尊氏・直義、之が爲に哀を擧ぐ。

【通釋】三月、菊池武敏は兵を起して官軍に味方し、少貳貞經を攻め殺した。貞經は、死ぬる時、其の子の賴尚に遺言して曰ふには「吾は三浦義明のやうに、こゝで討死をする。お前は吾が志を忘れず、よく愼んで、將軍に仕へよ」と。賴尚は兵を導きつれて、尊氏を迎へた。尊氏は貞經が死んだかどうかを尋ねた。賴尚は軍の士氣が沮喪するのを恐れ、答へて曰ふには「それは噂に過ぎませぬ」と。そこで案內して、宗像氏の處へ往つた。丁度そこへ武敏が攻めて來た。尊氏は香椎神社に上つて、その軍勢を望むと、四五萬騎ばかりもゐた。そして、味方を顧みると、たつた五百人であつた。加之鎧や馬も十分に備はつて居ない。尊氏が曰ふのに「こんどこそは討死だ」と。そこで、陣を赤坂まで進め、直義を遣つて、先きに進ましめた。賴尚が曰ふのに「敵中でほんとうに戰ふ者は三百人に過ぎません。その外の者は將軍がお出でになつたことを聞けば皆降參するでありませう」と。進んで鞴濱で戰つた。仁木義長・細川顯氏等勇氣を奮つて敵兵と組討ちをし、鎧を剝ぎ取り、馬を奪ひ取つて進んだ。丁度其の時北風が吹き出して濱の眞砂や石が吹き飛ばされ、敵兵は氣が後れて退却した。直義は風を利用

して兵を縱つて擊ち、博多まで追つかけて行つた。武敏は、全軍をつれて引き返して戰つた。此のとき直義は、とても敵を支へることは出來ないと思ひ、使者を尊氏の陣に遣はし、衣物の袖を切つて、形見に贈り、別れをなした。そして曰ふには「兄上は早く長門に御逃げなさい。直義は、こゝでふみ留まつて討死しませう」と。尊氏はその報を得て曰ふには「弟が死ねば自分はどうして生きて居られよう」と。親ら大將となつて援けに行つた。すると松浦氏、神田氏は大兵が來たと思ひ、その部下を全部つれて降參して來た。その軍を一緒にして擊つて大に武敏の軍を破り、追うて、太宰府まで來た。そこで貞經が、眞實に死んだことを聞いて、尊氏・直義はそれが爲めに追悼會を催した。

〔語釋〕三浦義明（義明が子義澄等に賴朝を援させた話は源氏記に詳かである。）〇宗像氏（筑前宗像神社大宮司政弼。）

尊氏乃遣一色賴行・仁木義長、攻陷菊池・八代諸城、鎭西皆服。而中國南海諸將又並起應之。義長兄賴章、與久下時重等據丹波、赤松則村據播磨、石橋和義據備前。於是、義貞攻則村白旗城。城壁未成。則村詐遣之書曰「元弘之初、臣數挫强賊、而賞出於降虜下。故背此嚮彼。豈其志也。願得州守護、以圖報效。」義貞喜、爲請詔旨。往反旬餘、詔至、而壁成。則村還詔書、不受曰「守護已獲之於將軍矣。何以此翻覆綸旨爲。」義貞大恚、合兵六萬圍則村、使弟義助攻石橋和義。和義・則村、皆堅守不下。遣使告

急ヲ於尊氏ニ

【訓讀】尊氏乃ち一色賴行・仁木義長を遣はし、菊池、八代の諸城を攻陷せしめ、鎭西皆服す。而して中國、南海の諸將、又並び起つて之に應ず。義長の兄賴章、久下時重等と、丹波に據り、赤松則村、播磨に據り、石橋和義、備前に據る。是に於て、義貞、則村の白旗城を攻む。城壁未だ成らず。則村詐つて之に書を遺つて曰く、「元弘の初め、臣數〻強族を挫く。而して賞降虜の下に出づ。故に此に背き彼に嚮ふ、豈に其の志ならんや。願はくは州の守護を得て、以て報效を圖らん」と。義貞喜び、爲めに詔旨を請ふ。往反旬餘。詔至り而して壁成る。則村、詔書を還し、受けずして曰く、「守護已に之を將軍に獲たり。何ぞ此の綸旨を以てするを爲さん」と。義貞、大に恚り、兵六萬を合せて、則村を圍み、弟義助をして石橋和義を攻めしむ。和義・則村、皆堅く守つて下らず。使を遣はして急を尊氏に告げしむ。

【通釋】そこで尊氏は一色賴行・仁木義長を遣はし、菊地・八代の諸城を攻め落させ、鎭西は、皆足利に服した。その上に中國南海の諸將が肩を揃へて起り、尊氏に味方した。義長の兄賴章は久下時重等と與に丹波に立て籠り、赤松則村は播磨に立て籠り、石橋和義は備前に立て籠つた。そこで義貞は則村を白旗城に攻めた。所が城の壁がまだ出來上つてゐなかつた。則村は乃ち詐つて義貞に書面を送つて曰ふのに「元弘の初に當つて、臣は王事に勵み、度々北條氏を打ち挫いた。それであるのに恩賞は降參した虜よりも惡かつたのであります。それが不平で朝廷に背いて足利に屬いたのです。けれどもこれは臣のほんとうの志ではありませぬ。何卒播磨の守護職に御任命下され、それから御恩報じを致したいもので御座います」と。義貞は喜んで彼の爲めに詔を請ひにやつた。使

者が往復する間が十日餘りかゝつた。詔書がとゞいた時には、もう城壁はすつかり出來上つてゐた。そこで則村は詔書をつき還して受取らないで曰ふには「守護職はもう將軍から貰ひ受けました。こんな當てにならぬ『詔』は要りません」と。義貞は非常に怒り兵六萬人を合はせて則村を取り圍み、別に弟の義助をして、石橋和義を攻めしめた。和義も則村も皆堅固に守つて中々降參しない。使者を遣はして急を尊氏に知らせた。

五月、尊氏使頼行・義長守鎭西、而率諸軍、發太宰府、至嚴島、會僧賢俊奉廢帝書至。尊氏大喜、令諸將立錦旗。遠近競附、兵艦凡七千餘艘、進至鞆津、以少貳頼尚策、附二十萬人於直義、上陸拔福山。義貞遽釋圍而走。備前・丹波・美作官軍、望風解去。尊氏至室津。赤松則村出圍迎謁、收敵所遺旗幟百餘于城下、以獻尊氏。視其旗號、多故部屬。曰「避害焉耳。今將來歸。」已而來降者果多。而陸軍亦會、夾擊楠氏兵于兵庫。應之、合軍擊義貞。義貞走歸、復奉乘輿據叡山。法皇・廢帝・廢帝弟豐仁親王皆託疾不從。往依尊氏。尊氏據東寺爲城、六月、遣軍仰攻叡山。不利。義貞追入京師。尊氏伏兵于街巷、而出羸兵、且戰且卻、誘敵入京中。伏起大戰。義貞敗走。又聞義貞計夾攻也、乃遣兵邀擊走之。義貞誘興福寺僧徒、令畿內南海兵絶我糧道。乃遣細川定禪・

今川範國、擊二走南海ノ兵一。

【訓讀】五月、尊氏、賴行・義長をして、鎭西を守らしめ、而して諸軍を率ゐて太宰府を發し、嚴島に至る。會々僧賢俊、廢帝の書を奉じて至る。尊氏、大に喜び、諸將をして錦旗を立てしむ。遠近競ひ附き、兵凡て七千餘艘、進んで鞆津に至る。少貳賴尙の策を以て、二十萬人を直義に附し、陸に上り福山を拔かしむ。義貞遽に圍を釋いて走る。備前・丹波・美作の官軍、風を望んで解き去る。尊氏、室津に至る。赤松則村、圍を出で、迎謁し、敵の遺す所の旗幟百餘を城下に收め、以て尊氏に獻ず。其の旗號を視るに、故の部屬多し。曰く、「害を避くるのみ。今將に來り歸せんとす」と。已にして來り降る者果して多し。而して陸軍も亦會し、楠氏の兵を兵庫に夾擊し、之を鏖にし、軍を合せて義貞を擊つ。義貞走り歸り、復乘輿を奉じて叡山に據る。法皇・廢帝・廢帝の弟豐仁親王、皆疾に託して從はず。往いて尊氏に依る。尊氏、東寺に據り城と爲す。六月、軍を遣はし仰いで叡山を攻め、利あらず。義貞追うて京師に入る。尊氏、兵を街巷に伏せて、羸兵を出だし、且つ戰ひ且つ卻き、敵を誘うて京中に入る。伏起り、大に戰ふ。義貞敗れ走る。又義貞夾攻を計ると聞くや、乃ち兵を遣はし邀擊し、之を走らす。義貞、興福寺の僧徒を誘ひ、畿內・南海の兵をして、我が糧道を絕たしむ。乃ち細川定禪・今川範國を遣はし、擊つて南海の兵を走らす。

【通釋】五月、尊氏は賴行・義長をして九州を守らしめ、自分は諸軍を率ゐて、太宰府を出發し、嚴島まで來た。丁度其處の僧賢俊が光嚴天皇の書を持つてやつて來た。尊氏は非常に喜んで諸將に錦の御旗を立てさせた。そこで遠近の者が先きを爭うて屬き、軍艦は凡そ七千餘艘もあり、進んで、鞆津まで來た。少貳賴尙の計略で二十

萬人を直義に附け、上陸して、福山城を攻め落させた。義貞は叶はぬと見て、白旗城の圍を解いて走つた。備前・丹波・美作の官軍は皆この形勢を望んで解散し去つた。尊氏はやがて室津に來た。赤松則村は包圍から出て迎へ會し、敵が置き去りにした旗や幟を百餘も城下から拾ひ集め、尊氏に獻じた。尊氏はその紋所を見ると元自分の部下であつた者が多かつた。曰ふのに「これ等は害を避ける爲めに一時官軍に降參したのである。その内に降參して來るだらう」と。案の定降參して來るものが多かつた。そして直義の陸軍も來り會し、楠正成の兵を湊川に夾み撃ちして之を皆殺しにし、軍を一緒にして、義貞を撃つた。義貞は走つて、京都にかへり、再び天皇を奉じて、比叡山に立てこもつた。しかし後伏見法皇や光嚴天皇やその弟の豐仁親王は皆病氣だと申されて從はれなかつた。そして尊氏の處へ往かれてそれに依られた。尊氏は、東寺に立て籠つて城とした。六月には軍を遣はし、下から比叡山を攻め上つたが敗けた。義貞は之を追ひかけて、京都に入つた。尊氏は町中に兵を隱して置いて、弱い兵士を出して戰ひ乍ら退卻させ、敵をおびき寄せて、京都の町へ入らせた。伏兵が起つて大に戰うた。併し義貞は敗れ走つた。又義貞が夾み撃たうと計畫してゐると聞いたので兵を遣はして之を迎へ撃つて走らせた。義貞は奈良の興福寺の僧兵を誘ひ、一方では畿內、南海の兵士をして、足利の兵糧の道を絕たしめた。そこで尊氏は細川定禪・今川範國を派遣して、南海の兵を撃つて走らせた。

（語釋）鞆津・福山（備後）○室津（播磨）○東寺（京都の西南。）

七月、義貞以數不得志、計四面來攻。藤原隆資先至、攻南門。我兵盡北出拒義貞。獨高師直與弟師泰在焉。出戰而敗。敵焚門樓。城內惶擾。尊氏方誦經自若。土岐賴氏

侍坐。曰「惡源太如在、於拒之何有」。惡源太者、其子賴直也。適賴直入見。賴氏喜問曰「北面之戰未乎」。曰「不知也。適在三條、望東寺煙揚、乃還耳」。師直曰「敵至南門、煩公出拒」。賴直諾而出。尊氏呼返之、賜之寶刀。賴直拜而受之、自北門出於敵左、下馬而射。敵兵亂潰。乃上馬、騎而馳之、手斫六人。師直等復出援擊、遂走隆資。而義貞已至北門、請與尊氏各獨身決鬪。尊氏奮然起曰「亟開門。吾非敢敵官家。獨欲與義貞決耳」。上杉重能諫曰「彼窮而出於此。將軍何自輕也」。會土岐賴遠破大宮敵、乘勝踵義貞軍。後義貞大敗、傷其左眉、走歸叡山。足利氏於是議奉廢帝復位。棄以元弘事以爲不祥也。八月、乃立豐仁親王、是爲光明帝。號用建武。後改曆應。尊氏爲權大納言、直義爲左馬頭。

【譯】七月、義貞、數〻志を得ざるを以て、四面より來り攻めんと謀る。藤原隆資先づ至り、南門を攻む。我が兵盡く北に出で、義貞を拒ぐ。獨り高師直、弟師泰と在り。出で戰つて敗る。敵、門樓を焚く。城内恟擾す。尊氏方に經を誦して自若たり。土岐賴氏侍坐す。曰く、「惡源太如し在らば、之を拒ぐに於て何かあらん」と。惡源太とは、其の子賴直なり。適〻賴直入つて見ゆ。賴氏喜び、問うて曰く、「北面の戰未だしや」と。曰く、「知ら

ざるなり。適〻三條に在り、東寺の煙揚るを望み、乃ち還るのみ」と。師直曰く、「敵、南門に至る。公の出でゝ拒ぐを煩さん」と。賴直諾して出づ。尊氏之を呼び返し、之に寶刀を賜ふ。賴直拜して之を受け、北門より敵の左に出で、馬より下つて射る。敵兵亂れ潰ゆ。乃ち馬に上り、騎して之に馳せ、手づから六人を斫る。師直等復出でゝ援け擊ち、遂に隆資を走らす。而して義貞已に北門に至り、尊氏と各〻獨身決鬪せんと請ふ。尊氏奮然、起つて曰く、「亟に門を開け。吾れ敢て官家に敵するに非ず。獨義貞と決せんと欲するのみ」と。上杉重能諫めて曰く、「彼れ窮して此に出づ。將軍何ぞ自ら輕んずるや」と。會〻土岐賴遠・大宮の敵を破り、勝に乘じて義貞の軍後に踵る。義貞、大に敗れ、其の左眉を傷つき、走つて叡山に歸る。足利氏、是に於て、廢帝を奉じ位に復するを議す。衆、元弘の事を以て以爲へらく、不祥なりと。八月、乃ち豐仁親王を立つ。是を光明帝と爲す。號は建武を用ふ。後、曆應と改む。尊氏、權大納言と爲り、直義、左馬頭と爲る。

通譯 七月、義貞は度々失敗して思ふやうに行かなかつたので、こんどは四方から攻めようと計つた。藤原隆資が先づやつて來て東寺の南門を攻めた。丁度味方の兵は皆北に出で、義貞を拒いでゐた。たゞ高師直とその弟の師泰とだけが、南門に居つた。出で來り戰つたが敗けた。義貞の軍は門の物見を燒き拂つた。城内では、恐れて大分混雜した。尊氏は丁度經をよんでゐて平氣であつた。土岐賴氏はその傍に坐つて居た。賴氏がいふのに「惡源太が若し居つてくれゝばこれ位のものを拒ぐのは何でもないのであります」と。惡源太といふのは賴氏の子賴直の事である。そこへ賴直が入つて來て尊氏に面會した。賴氏は喜んで問うて曰ふには「北面の戰爭はまだやつて居らぬか」と。賴直曰ふのには「存じません。丁度私は三條に居りますと東寺の方に煙が上つたのを見たものですから、何か起つたのではないかと還つて來たので御座います」と。師直が曰ふのに「敵は南門に寄せて來た。

御苦勞だが貴公は出て之を拒いで吳れ」と。賴直は承知して出て行つた。尊氏は之を呼び返して寶刀を與へた。賴直は拜して之を貰ひ受け、北門から敵の左の方へ打つて出で馬から下りて矢を射かけた。敵は亂れ潰えた。そこで賴直は馬に乘つて馳せ行つて手づから六人を斬つた。師直等も又出て來て賴直を援けるために敵を擊ち、遂に隆資を走らせた。そして一方義貞は早くも北門に寄せて來て、尊氏と勝負を決めたいと申し込んで來た。尊氏は、奮然起つて曰ふには「早く門を開けよ。余は天朝に敵對するものではない。たゞ義貞と勝負を決めたいと思ふだけである」と。上杉重能が諫めて曰ふには「義貞はどうにも仕方がなくなり、こんな事を申し込んで來たのであります。將軍はなぜ大切な御身を輕んぜられるのでありますか」と。丁度土岐賴遠が大宮通りの敵を破り、勝つた勢に乘じて、義貞の軍の後部から擊ちかけて來た。義貞は大に敗れ、その左の眉を負傷し、比叡山に逃げ歸つた。そこで足利氏は廢帝光嚴天皇を奉戴して、もう一度位にお卽けしようと相談した。皆の者は元弘の時に光嚴天皇は一度廢せられた御方なのであるから緣起が惡いと曰つた。そこで八月に豐仁親王を立てた。これが光明天皇である。年號は建武といふ元のまゝを使用してゐた。後に曆應と改めた。かくて尊氏は權大納言となり、直義は左馬頭となつた。

語釋　北面戰（北方より攻めて來た義貞の兵との戰。）

九月、議以利啗興福寺、令足利高經以越前兵、小笠原貞宗以信濃兵、並絕東北糧道、又令佐佐木高氏援貞宗、擊新田義助兵、走之。山門援絕食竭。於是尊氏陰獻誓

書焉。曰、「臣初被讒獲罪、削髮待命。而義貞・義助假公義、修私怨、以至於此。陛下苟諒臣志、迴駕來還、則當歸政朝廷、諸廷臣安堵如故。」帝遽納之。義貞聞而弗懌。帝使義貞奉太子赴越前、而命駕還闕。直義將兵迎之、乃爲新主請劍璽。帝傳僞器。乃褫文臣官爵、執武臣、寘帝于花山院、請其詔下越前。足利高經因幷州兵、圍義貞于金崎。又遣高師泰助攻之。既而帝逃走、不知所之。內外驚騷。尊氏曰、「是吉祥善事也。使帝猶在、監護無期。亦不可襲承久・元弘之爲。而今乃如是。豈非善事乎。度其必在畿內。任其所底、而徐圖之可也。」

訓讀 九月、議して利を以て興福寺に啗はせ、足利高經をして、越前の兵を以て、小笠原貞宗をして、信濃の兵を以て、並に東北の糧道を絕たしむ。又佐佐木高氏をして、貞宗を援けしめ、新田義助の兵を擊つて、之を走らす。山門、援絕え食竭く。是に於て、尊氏、陰に誓書を獻ず。曰く、「臣初め讒を被り罪を獲、髮を削り命を待てり。而して義貞・義助、公義を假り、私怨を修め、以て此に至れり。陛下苟も臣が志を諒とし、駕を廻し來り還らば、則ち當に政を朝廷に歸し、諸廷臣、安堵故の如くなるべし」と。帝遽に之を納る。義貞聞いて懌ばず。帝、義貞をして、太子を奉じ越前に赴かしめ、而して駕を命じ闕に還る。直義、兵に將として之を迎へ、乃ち新主の爲めに劍璽を請ふ。帝、僞器を傳ふ。乃ち文臣の官爵を褫ひ、武臣を執へ、帝を花山院に寘き、其の詔

が請うて越前に下す。足利高經因つて州兵を幷せ、義貞を金崎に圍む。又高師泰を遣はし、助けて之を攻めしむ。隙にして帝逃れ走り、之く所を知らず。内外驚き騷ぐ。尊氏曰く、「是れ吉祥善事なり。帝をして猶ほ在らしめば、監護、期なからん。亦承久・元弘の爲を襲ぐ可からず。而るに今乃ち是くの如し。豈に善事に非ずや。度るに其れ必ず畿内に在らん。其の底る所に任せて、徐に之を圖らば、可ならん」と。

[illegible] 九月、評議して、利を餌にして興福寺を抱き込み、足利高經をして越前の兵を率ゐ、小笠原貞宗をして、信濃の兵を率ゐ、皆東北（官軍）の糧道を絶たしめた。又佐佐木高氏をして貞宗を援けさせ、新田義助の兵を撃つて、之を走らせた。比叡山ではもはや援けるものもなく兵糧も無くなつた。そこで尊氏はひそかに密書を後醍醐天皇に獻じた。曰ふには、「臣は、はじめ讒言を受けまして罪を獲、頭を丸めてお指圖を待つて居りました。そして義貞・義助は大義名分を看板にして、私家の遺恨を霽らさうとしまして、とう〳〵今日のやうな事になりました。陛下、苟くも臣の志を御推察下さいまして、御乘物をお廻しなされ、京都へ御還り下さらば、政權を奉還し、諸々の廷臣は以前の通りに致しませう」と。後醍醐天皇は御熟考されることもなく、直ぐ樣其の言を納れられた。義貞は之を聞いて不滿足であつた。天皇は義貞をして皇太子を守り立て、越前に赴かしめ、そして乘物を命ぜられ、京都に還られた。直義は兵に將として之を迎へ、そこで新主光明天皇の爲めに、劍璽を授けられん事をお願ひした。天皇は贋の劍璽をお傳へなされた。そこで足利氏は、文官の官爵をはぎ取り、武官を捕へ、天皇を花山院に留置し、義貞追討の詔が越前に下されんことをお願ひした。そこで足利高經は越前の兵を倂はせ、義貞を金崎城に取り圍んだ。又高師泰を派遣して之を助け攻めさせた。其の内に後醍醐天皇は逃げ出されて何處へ行かれたか、分らなくなつた。内も外も驚き騷いだ。尊氏が曰ふには「これは目出たい善い事である。天皇が依然とし

て其處に居られたならば、いつまでも限りなく、番をしてゐなければならん。それに承久・元弘の時のやうに島流しにすることも出來ない。（人望がなくなるから）所が今こんな事になつた。なんと善い事ではないか。推測するに天皇は屹度畿內に居られるだらう。行きたい處へ行かせて置いて、追々に之を圖つたら宜いだらう」と。

語釋 修私怨（私の意趣を返すこと。）○寘（幽囚す）○花山院（離宮の名。）○承久・元弘之爲（承久は北條義時が三上皇を流したこと、元弘は北條高時が後醍醐天皇を遷したこと。爲は仕業の意。）

二年、瓜生保自杣山援金崎。師泰令今川賴國逆擊、破而殺之。金崎益困。義貞出走杣山。或說師泰曰、「間城兵不浴馬。得非糧竭食馬也。」於是、師泰・高經凌城齊登。城兵果飢羸、不能戰。皆自殺。太子就虜、後遭害。時帝在吉野、建行宮焉。自是天下稱京師曰北朝、吉野曰南朝。

訓讀 二年、瓜生保、杣山より金崎を援く。師泰、今川賴國をして逆へ擊たしめ、破つて之を殺す。金崎益々困しむ。義貞出でゝ杣山に走る。或人、師泰に說いて曰く、「間城兵馬を浴せず。糧竭きて馬を食ふに非ざるを得んや」と。是に於て、師泰、高經、城を凌ぎ齊しく登る。城兵、果して飢羸し、戰ふ能はず。皆自殺す。太子、虜に就き、後、害に遭ふ。時に帝、吉野に在り、行宮を建つ。是より天下京師を稱して北朝と曰ひ、吉野を南朝と曰ふ。

通釋 二年、瓜生保は杣山から金崎を援けた。師泰は、今川賴國をして之を迎へ擊たせ、破つて之を殺した。金崎は愈々苦しんだ。義貞は城から出て杣山に逃げた。或る人が師泰に說いて曰ふには「此の頃、城兵は馬を洗は

ないやうだ。兵糧が無くなつて馬でも食つてゐるのではないだらうか」と。そこで師泰・高經は城を乘り越し、一齊に登つて行つた。案の定、城兵は飢え疲れて戰ふことも出來ない。皆自殺してゐた。太子は虜にせられ、後に尊氏のために殺され給うた。當時は後醍醐天皇は吉野に居られ、行宮を建てられた。これからは世の中の人、京都を稱して北朝といひ、吉野を南朝といつた。

語釋 踰レ城（城を攻め、乘り越すこと。）

義貞復起二柚山一。高經拒レ之。義貞少子義興、與二北畠顯家一、起二兵關東一。義詮在二鎌倉一。遣二細川和氏、上杉憲顯等一、拒二利根川一。敗還。冬、顯家以二十餘萬騎一逼二鎌倉一。鎌倉兵可二一萬一。諸將欲レ避二匿安房上總間一。義詮時十一歲。叱二諸將一曰、「勝敗、兵之常也。卽怖レ敵、不レ若レ不レ將。義詮在レ此、望レ衆而逃、天下謂レ之何。我兵雖レ寡、猶可二一戰一。不レ免則死。免乃避匿、尾レ敵而西、與二家君一夾二擊之一耳」。諸將皆奮。分レ兵爲レ四、逆戰不レ克。奉二義詮一逃匿。顯家等西上。諸將乃起、尾レ之。

通釋 義貞、復、柚山に起る。高經、之を拒ぐ。義貞の少子義興、北畠顯家と、兵を關東に起す。義詮、鎌倉に在り。細川和氏、上杉憲顯等を遣はし、利根川に拒がしむ。敗れ還る。冬、顯家、十餘萬騎を以て鎌倉に逼る。鎌倉の兵一萬可り。諸將、安房、上總の間に避匿せんと欲す。義詮、時に十一歲、諸將を叱して曰く、「勝敗は兵

の常なり。即し敵を怖るれば、將たらざるに若かず。義詮、此に在り。衆を望んで逃るれば、天下、之を何と謂はん。我が兵寡しと雖も、猶ほ一戰すべし。免れずば則ち死せん。免るれば乃ち避匿し、敵に尾して西し、家君と之を夾み撃たんのみ」と。諸將皆奮ふ。兵を分つて四と爲し、逆戰して克たず。義詮を奉じて逃れ匿る。顯家等西上す。諸將乃ち起り之に尾す。

【通釋】義貞は、再び杣山に起つた。高經は之を拒いだ。義貞の少子義興は、北畠顯家と一緒に兵を關東に起した。當時義詮は鎌倉に居た。細川和氏・上杉憲顯等を遣はして、利根川に拒がせた。併し負けて還つて來た。冬、顯家は、十餘萬騎を率ゐて、鎌倉に逼つて來た。鎌倉の兵は一萬ばかりであつた。鎌倉の諸將は、安房、上總の邊に匿れようと思つた。義詮は、その時十一歳であつたが、諸將を叱りつけて曰ふには「勝ち負けは戰爭の常である。もし敵を怖れる位ならば、大將にならぬ方が善いのである。義詮がこゝに居る。然るに敵の軍勢を望んで逃げ出したとなると、天下の人は何といふであらう。我が兵は、少いけれども、もう一合戰は出來る。免れぬなら討死するばかりだ。もし免かれることが出來れば、避け匿れ、敵の後をつけて西に上り、父上と之を挾み討ちにするばかりのことだ」と。諸將はこの言葉で皆發奮した。兵を分けて四隊となし、迎へ戰つたが、克てなかつた。由つて諸將は義詮をつれて逃げ匿れた。顯家等は京都へ上つた。そこで諸將は、その後をつけて行つた。

明年正月、至美濃。土岐頼遠・桃井直常、與顯家戰、復不克。顯家焚掠而進。京師諸將議拒宇治・勢多。高師泰曰、「自古未有拒於此而克者也。何者、攻者勢伸於千里之外、

拒者力縮於咫尺之内焉爾。不若邀撃之畿外。尊氏曰、「善。」附師泰以萬人、赴美濃、背黒血川而陣。顯家避之、取路伊勢。二月、師泰追撃之雲津、破之。顯家入南都、將攻京師。高師直薦桃井直常往撃。直常與兄直信、受命即發、奮撃走顯家。顯家弟顯信、收敗軍、據男山。諸將視直常不獲賞、無赴攻者。師直助直常攻之、不能下。四月、師直聞顯家在和泉、慮其與楠氏合也、分兵而南、撃殺之阿部野。五月、帝遙命義貞救男山。義貞與高經相持、使義助以二萬騎赴山門。七月、尊氏急召還師直。師直夜遣諜、燒男山積聚。顯信遂棄守走、義助望火退去。

【譯】明年正月、美濃に至る。土岐頼遠・桃井直常、顯家と戰ひ、復克たず。顯家、焚掠して進む。京師の諸將、宇治・勢多に拒がんと議す。高師泰曰く、「古より未だ此に拒いで克ちたる者あらず。何となれば、攻むる者は勢、千里の外に伸び、拒ぐ者は力、咫尺の内に縮まるのみ。之を畿外に邀へ撃つに若かず」と。尊氏曰く、「善し」と。師泰に附するに萬人を以てし、美濃に赴き、黒血川を背にして陣す。顯家、之を避け、路を伊勢に取る。二月、師泰、之を雲津に追撃し、之を破る。顯家、南都に入り、將に京師を攻めんとす。高師直、桃井直常を薦め、往いて撃たしむ。直常、兄直信と、命を受け即ち發し、奮撃して顯家を走らす。顯家の弟顯信、敗軍を收めて、男山に據る。諸將、直常の賞を獲ざるを視て、赴き攻むるものなし。師直、直常を助けて之を攻め、下す

能はず。四月、師直、顯家、和泉に在りと聞き、其の楠氏と合するを慮るや、兵を分つて南し、之を阿部野に擊殺す。五月、帝、遂に義貞に命じ男山を救はしむ。義貞、高經と相持し、義助をして、二萬騎を以て山門に赴かしむ。七月、尊氏、急に師直を召還す。師直、夜、諜を遣はし、男山の積聚を燒く。顯信、遂に守を棄て、走り、義助、火を望んで退去す。

通釋 明年の正月に顯家は美濃まで來た。土岐賴遠・桃井直常は顯家と戰つて、また克てなかつた。顯家は人家に火をかけ、物を掠め取つて進んだ。京都の足利方の諸將は宇治・勢多で拒がうと相談をした。高師泰が曰ふのに「むかしから此處で拒いで勝つたものはない。なぜかといへば攻めるものの勢は遠くから來た元氣で、ぐん〳〵何處までも伸びて行くから強いが、拒ぐ方は狹い所に縮められて氣力が弱つて來る。だから之を畿內の外に迎へて擊つた方が善い」と。尊氏は「成程善し」と曰つた。師泰に萬人を與へて美濃に行かせ、黑血川を後ろにして陣取つた。顯家は、之をさけて、路を伊勢路に取つた。二月、師泰は雲津で追ひ擊つて、之を破つた。顯家は奈良に入り京都を攻めようとしてゐた。高師直は桃井直常を推薦して擊たせにやつた。直常は兄の直信と共に命令を受けて、直ちに出發し、奮擊して顯家を打ち散らした。顯家の弟の顯信は敗軍をまとめて男山に立て籠つた。諸將は直常が戰功あるのに、御褒美を貰はなかつたのを見て、誰れも援けに行く者はなかつた。そこで師直は直常を助けて、顯信を攻めたが下すことは出來なかつた。四月、師直は顯家が和泉に居るのを聞いて楠氏と合併するのを恐れ、男山を攻めてゐた兵士を分けて、南に行き、顯家を阿部野で擊ち殺した。五月、後醍醐天皇は遂に越前の義貞に命じ、男山を救はしめられた。義貞は高經とにらみ合ひの狀態で、自身行く譯に行かぬので、義助をして二萬騎を率ゐて比叡山に赴かしめた。七月尊氏は急に師直を呼び還した。師直はある夜、しのびの者

を遣はし、男山に積んであつた兵糧を燒かしめた。顯信はとう〳〵守を棄てゝ逃げ出し、義助は比叡山からその火を見て引きかへし却いた。

語釋 積聚（積み蓄へた兵糧。）○黑血川（美濃）○雲津（伊勢）

於是、義貞・義助合三萬騎、攻高經足羽城。城兵不滿三百。高經曰、「守不可克。走不可達。寧守而死焉。」城主朝倉廣景贊之。乃修塹壘、屬之藤島。平泉僧徒來告曰、「叡山與我爭藤島。今公附之於我、則願效力焉。」高經許之。新田氏兵攻藤島、僧兵力拒。高經使細川孝基・鹿草公相以三百人救之。途與敵兵遇。敵楯亂射、斃其一將。氏家重國持其首歸。高經視之曰、「何肖左中將之酷也。果然則左眉當有箭瘢。」命洗面。瘢視。驗其尸、齎帝詔書。驗其二刀、鏤曰鬼切・鬼丸。乃知其義貞也。收尸葬之、獻首於尊氏。徇梟獄門。北朝於是陞尊氏正二位、任征夷大將軍。四年、遣諸將援高經、走新田義助、殺細川時能。北陸盡平。義助走美濃。土岐賴遠攻走之。興國元年、義助病、卒於伊豫。細川賴春攻拔諸城、悉殺其族黨。於是、官軍諸將大半死亡。其將士相率來降。而尊氏之業、終如初志。

【訓讀】是に於て、義貞、義助、三萬騎を合せて、高經を足羽城に攻む。城兵、三百に滿たず。高經曰く、「守るも克つべからず。走るも達すべからず。寧ろ守つて死せん」と。城主朝倉廣景、之を贊く。乃ち塹壘を修めて、之を藤島に屬す。平泉の僧徒來り告げて曰く、「叡山我と藤島を爭ふ。今、公、之を我に附せば、則ち願はくは力を效さん」と。高經、之を許す。新田氏の兵、藤島を攻む。僧兵力め拒ぐ。高經、細川孝基、鹿草公相をして、三百人を以て之を救はしむ。途に敵兵と遇ふ。楯を蔽うて亂射し、其の一將を斃す。氏家重國其の首を持つて歸る。高經、之を視て曰く、「何ぞ左中將に肖たるの酷だしきや。果して然らば、則ち左眉當に箭瘢あるべし」と。命じて面を洗はしむ。瘢覩ゆ。其の尸を驗するに、帝の詔書を齎らす。其の二刀を驗するに鏤んで鬼切・鬼丸と曰ふ。乃ち其の義貞なるを知る。尸を收めて之を葬り、首を尊氏に獻ず。徇へて獄門に梟す。北朝、是に於て尊氏を正二位に陞せ、征夷大將軍に任ず。四年、諸將を遣はし、高經を援け、新田義助を走らせ、畑時能を殺す。北陸盡く平ぐ。義助美濃に走る。土岐頼遠、攻めて之を走らす。興國元年、義助病んで、伊豫に卒す。細川頼春、攻めて諸城を拔き、悉く其の族黨を殺す。是に於て、官軍の諸將、大半死亡し、其の將士相率ゐて來り降る。而して尊氏の業、終に初志の如し。

【通釋】そこで義貞・義助は三萬騎を合はせて、高經を足羽城に攻めた。城兵は、三百にも足りない程僅かなものであつた。高經が曰ふには「守つて見た所で勝つめどはない。逃げた所で目的地に達することも出來ぬ。いつそのこと守つて討死しよう」と。城主の朝倉廣景は贊成した。そこで濠や城壁を修繕して、これを藤島城に連續せしめた。すると平泉の僧徒が來て告げて曰ふには「比叡山は、藤島を取らうとして、我々と爭つてゐます。今貴公がこの藤島を我が寺領に下さるなら、力を盡して御加勢仕らう」と。高經は之を許した。新田氏の兵は藤

島を攻め立てた。僧兵は力を盡して之を拒いだ。高經は細川孝基、鹿草公相をして、三百人を率ゐて、之を救はしめた。途中で敵兵に出くはした。楯に身をかくして散々に射つて、その一將を射倒した。氏家・重國はその首を持つて歸つて來た。高經は之を視て曰ふのに「隨分と義貞に似て居るではないか。果してこれが義貞だとすれば、左の眉に箭創の痕がある筈である」と。命じて顏を洗はしめた。その創痕が見えて來た。又その死骸を檢査して見ると、後醍醐天皇の詔書を持つてゐた。その二刀を調べて見ると、鬼切・鬼丸といふ銘が入つてゐた。そこで愈々義貞なることが分明した。死骸を取り片附けて、之を葬り、首を尊氏に獻じた。獄門にかけてとなへ示した。是に於て、北朝では功によつて尊氏を正二位に昇せ、征夷大將軍に任ぜられた。四年、諸將を派遣して高經を援けて、新田義助を走らせ、畑時能を殺した。かくて北陸道は皆平定した。義助は美濃に走つた。土岐賴遠、攻めて、之を走らせた。興國元年、義助は病氣にかゝつて伊豫で死んだ。細川賴春はそこをつけ込んで攻めて諸城を陷れ、悉くその一族郎黨を殺した。かくて官軍の諸將は大かた死亡し、官軍の將士は相率ゐて降參して來た。そして、尊氏の仕事はとう〳〵初め家を興さうといつたその希望通りになつた。

【語釋】藤島・平泉（前述）○左中將（義貞）○足羽（前述）○詔書（討賊之事、一類事といふ詔書。）○鬼切・鬼丸（源家傳來の寶刀）

尊氏使直義與高師直並執政。謂之曰、「吾慕右大將之信賞必罰、而憾其多疑刻刑也。汝副我意、勿猜且吝於功臣焉。」宿仇勁敵、降輒納之。當是時、氏族最富貴者四十三人、割地賞功。徵發軍糧、雖朝貴之邑不避也。至朝貴務學東人言貌、以計免侮謾、

初尊氏之立光明帝、時人爲之語曰、「王無一戰之功、而受帝位於將軍。」光嚴上皇嘗出行。途遇土岐頼遠。前驅叱下馬。曰「院也」。頼遠時被酒。怒曰「院邪、犬邪、誰能下我者。」環射其輿而去。蓋院・犬國音相近也。直義聞之、誅殺頼遠、使姪頼康承家。時人復相謂曰「院且下之。卽遇將軍、當手行邪。」

【[illegible]】尊氏、直義と高師直とをして、並に政を執らしむ。之に謂つて曰く、「吾れ右大將の信賞必罰を慕ふ。而して其の多疑刻刑を憾む。汝、我が意に副ひ、功臣に猜且つ吝なる勿れ。宿仇勁敵も、降らば輒ち之を納れよ」と。是の時に當り、氏族最も富貴の者四十三人、地を割き功を賞す。軍糧を徵發し、朝貴の邑と雖も、避けざるなり。朝貴、務めて東人の言貌を學び、以て侮謾を免れんと計るに至る。初め尊氏の光明帝を立つるや、時人、之が爲めに語つて曰く、「王、一戰の功なくして、帝位を將軍に受く」と。光嚴上皇、嘗て出で行く。途に土岐頼遠に遇ふ。前驅、叱して馬より下す。曰く、「院なり」と。頼遠、時に酒を被る。怒つて曰く、「院か、犬か、誰か能く我を下す者ぞ」と。其の輿を環射して去れり。蓋し院、犬、國音相近ければなり。直義、之を聞き、頼遠を誅殺し、姪頼康をして家を承けしむ。時人、復相謂つて曰く、「院すら且つ之を下す。卽し將軍に遇はば、當に手行すべきか」と。

【通釋】尊氏は直義と高師直との二人に政を執らせた。尊氏は二人に向つて曰ふのに「余は頼朝が嘗て賞すべきものには賞し、罰すべきものは必ず罰した仕方を慕つて居る。しかしその疑ひ深くて、きびしい刑を行つた

ことを遺憾に思つてゐる。汝等はこの余の考へに叶ふやうにして、手柄のあるものに對して、そねんだり、賞を惜んだりせぬやうにしろ。又昔からの仇でも又手強い敵でも、降參したらいつでも納れてやれよ」と。この當時、足利の一族で、最も富貴であつたものは、四十三人あつたが、地を與へなくとも宜いやうなもの、、信賞の主意から、矢張り土地を割いて、其の功を賞した。兵糧を取り立てるには公卿衆の領地とても遠慮しなかつた。武家の勢が盛なので、公卿衆が關東武士の言語や樣子を眞似をし、世間から侮られるのを免れようと計るに至つた。はじめ、尊氏が光明天皇を立てた時、當時の人々はこれを評判して曰ふには「親王は一度も戰爭の手柄なくして天子の御位を將軍から貰はれた」と。（世人が將軍を天子以上に見て上下の分が顚倒してゐることを知り得る）又光嚴上皇が嘗てお出かけになつたことがある。途中で土岐賴遠に出遇はれた。上皇の先きぶれの者が叱つて賴遠を馬から下ろさせようとした。曰ふのに「院で御在すぞ」と。賴遠は少々酒を飲んで醉つて居た。怒つて曰ふのに「院か、犬かしらんが、誰が乃公を馬から下ろすことが出來るぞ」と。上皇のお乘物をぐる〱（それは犬逐物ででもあるやうに）廻りながら射ちかけて立ち去つた。思ふに院と犬とは日本語の音で近いから、そんなに云つて辱しめたのである。直義は之を聞いて賴遠を誅し、その姪の賴康に家を嗣がせた。當時の人々互に云ひ合つて曰ふには「院でさへ馬から下ろされるのであるならば、もし將軍に遇つたら逆に手ででも歩かなきあなるまいか」と。

【語釋】右大將（賴朝をさす。）○手行（逆立ちをして歩くこと。院に對して下馬するとなれば、院よりももつと勢のある將軍に會つたら手行でもしければなるまい。將軍の勢の强きことをいふ。）

天下方服足利氏恩威、稍屬無事。而連年飢疫多災異。僧疎石進說曰、「是先帝憤怒所致、宜興寺以修冥福」。時帝既崩行宮、後村上天皇卽位。故稱先帝也。尊氏・直義以

爲ㇾ然、興二寺于龜山殿址一。自二興國一至二正平一七歳乃成。名曰二天龍一。以二疎石一爲ㇾ主、親臨慶ㇾ之、大設二法會一。又爲ㇾ文祭二先帝一、叙二其舊恩一。

訓讀 天下、方に足利氏の恩威に服し、稍無事に屬す。而して連年、飢疫、災異多し。僧疎石進み說いて曰く、「是れ先帝憤怒の致す所、宜しく寺を興し、以て冥福を修むべし」と。時に帝既に行宮に崩じ、後村上天皇位に卽く。故に先帝と稱するなり。尊氏、直義、以て然りと爲し、寺を龜山殿の址に興す。興國より正平に至り、七歳乃ち成る。名づけて天龍と曰ふ。疎石を以て主と爲し、親ら臨んで之を慶し、大に法會を設く。又文を爲り先帝を祭り、其の舊恩を叙す。

通釋 この時天下は足利氏の恩と威力とに服し、やゝ無事であつた。けれども年年飢饉とか、流行病とか、天災地變が多かつた。僧の疎石が進み、尊氏に說いて曰ふには「これは先帝の御怒りに由るのであるから、寺を建て、先帝の御冥福を祈られたら宜いでせう」と。その時、後醍醐天皇は、すでに吉野の行宮で崩御なされ、後村上天皇が御位にお卽きなされてゐた。だから先帝といつたのである。尊氏、直義は慥かに左樣だと思ひ、寺を龜山殿の跡に建てた。興國から正平に至るまで、七年がゝりで出來上つた。名づけて天龍寺といつた。疎石を其處の住持となし、尊氏自身、其の寺に出かけて、御供養をし、大に法要を營んだ。又文を作つて、先帝を祭り、その舊恩を感謝する意を叙べた。

語釋 天龍寺（嵯峨に在る。）

然行宮臣、及新田・楠・北畠・菊池氏遺孽、伏匿諸國者、欲必報足利氏。興國三年、高師直從弟師冬、攻北畠親房於陸奧。四年、親房走歸行宮。新田義治匿京師、謀襲尊氏、不成。正平三年正月、楠正行起兵河內。遣細川顯氏・山名時氏、戰于攝津、敗還。更遣高師直、率諸將擊之。四年、師直與正行戰四條畷。縣某擊其前、武田信氏擊其後、佐佐木高氏等繼之、大破正行。正行決前、將士散走。上山高元者、以常服從在師直麾下。會正行突入、高元急取師直副甲、左右叱止之。師直曰、非也。彼能代我死者、我何惜一甲焉。高元感激、僞稱師直死。師直因得免。竟斃正行、進焚行宮、使師泰築壘于石川、以攻楠正儀。是歲、北朝太子受禪。是爲崇光帝。

【譯】然れども行宮の臣、及び新田・楠・北畠・菊池氏の遺孽、諸國に伏匿する者、必ず足利氏に報いんと欲す。興國三年、高師直の從弟師冬、北畠親房を陸奧に攻む。四年、親房走つて行宮に歸る。新田義治、京師に匿れ、尊氏を襲はんと謀り、成らず。正平三年正月、楠正行、兵を河內に起す。細川顯氏・山名時氏を遣はし、攝津に戰ひ敗れ還る。更に高師直を遣はし、諸將を率ゐて之を擊たしむ。四年、師直、正行と四條畷に戰ふ。縣某、其の前を擊ち、武田信氏其の後を擊ち、佐佐木高氏等、之に繼ぎ、大に正行を破る。正行決し前み、將士散

走す。上山高元といふ者、常服を以て從ひ、師直の麾下に在り。正行の突入するに會つて、高元、急に師直の副甲を取る。左右、叱して之を止む。師直曰く、「叱れ。彼れ能く我に代つて死する者、我れ何ぞ一甲を惜しまん」と。高元感激し、僞り師直と稱して、死す。師直因つて免るゝを得たり。竟に正行を斃し、進んで行宮を焚き、師泰をして、壘を石川に築き、以て楠正儀を攻めしむ。是の歲、北朝の太子、禪を受く。是を崇光帝と爲す。

通釋　しかし、吉野行宮の臣や新田・楠・北畠・菊池等の殘黨で諸國にかくれてゐる者等が、必ず足利に報いようと思つて居た。興國三年高師直の從弟師冬は、北畠親房を陸奧に攻めた。四年、親房は走つて行宮に歸つた。新田義治は京師にかくれ、尊氏を襲はうと計畫したが成功しなかつた。正平三年正月楠正行が兵を河内に起した。そこで細川顯氏・山名時氏を遣はして攝津に戰はしめたが負けて還つて來た。更に高師直を遣はし、諸將を率ゐて、之を擊たせた。四年、師直は正行と四條畷で戰つた。縣某は正行の前軍を擊ち、武田信氏はその後軍を擊ち、佐佐木高氏等は之につゞき、大に正行を破つた。正行は死を決して進んだので足利方の將士どもは散り〴〵に逃げうせた。上山高元といふものが平常着で從軍し、師直の旗下にゐた。正行が突進して來たので高元は急いで師直の控への鎧を取り出した。左右の者が叱つて之を止めた。師直が曰ふのに「叱るな、余に代つて死んで呉れる男だもの、鎧の一領ぐらゐを何で惜まうや」と。高元は其の言葉に感激し、僞つて師直だと曰つて討死した。師直はその爲めに危い所を免れることが出來た。結局正行を斃し、進んで吉野の行宮を燒き、師泰をして壘を石川に築いて楠正儀を攻めさせた。この年北朝の皇太子が御位の禪を受られ、御卽位された。これが崇光天皇である。

語釋　縣某（下野守）○副甲（着代への鎧。）○石川（河内）

師直兄弟、屢立功專横。時方大亂、親王公卿多流離者。師直乃略其子女爲妾、妾有數十。嘗讒殺鹽冶高貞、欲奪其妻。師泰嘗興別第、發菅原氏墳墓。聞參議菅原在登出怨言、密使人刺之。世莫敢言。上杉重能・畠山直宗、嫉其權勢、計輔直義以排之。直義方學禪於疎石。疎石弟子妙吉、最所崇信、人爭事之。獨師直兄弟輕侮之。重能・直宗因結妙吉。妙吉從容說直義曰、自古家之安危、由宰之賢否。君獨不聞趙高離間骨肉乎。公速誅師直、代以上杉・畠山、以輔郎君。郎君謂直義幼子也。直義又養尊氏庶長子直冬、任左兵衞佐。於是、出爲中國探題、居鞆津、按驗守吏功罪、而二高過惡益著。

【訓讀】師直兄弟、屢功を立てゝ專横なり。時方に大亂、親王・公卿、流離する者多し。師直乃ち其の子女を略して妾と爲す。妾數十あり。嘗て鹽冶高貞を讒殺し、其の妻を奪はんと欲す。師泰嘗て別第を興し、菅原氏の墳墓を發く。參議菅原在登、怨言を出だすと聞き、密に人をして之を刺さしむ。世敢て言ふものなし。上杉重能・畠山直宗、其の權勢を嫉み、直義を輔け以て之を排せんと計る。直義、方に禪を疎石に學ぶ。疎石の弟子妙吉は、最も崇信する所なり。人爭うて之に事ふ。獨り師直兄弟、之を輕侮す。重能・直宗、因つて妙吉に結ぶ。妙吉、

從容として直義に說いて曰く、「古より家の安危は、宰の賢否に由る。君獨り趙高、骨肉を離間せしを聞かざるか。公、速に師直を誅し、代ふるに上杉・畠山を以てし、以て郎君を輔けしめよ」と。郎君とは、直義の幼子を謂ふなり。直義、又尊氏の庶長子直冬を養ひ、左兵衛佐に任ぜらる。是に於て、出でゝ中國探題となり、鞆津に居り、守吏の功罪を按檢す。而して二高の過惡益著る。

通釋　師直の兄弟は度々功を立てたので大分專橫になつた。その頃は世の中が大亂であつたので、親王や公卿で流浪してゐらるゝものが大分あつた。そこで師直はそれ等の若い姫をかすめ取つて妾とした。その妾が數十人からあつた。又嘗て鹽冶高貞を讒言して殺し、その妻を奪ひ取らうと思つた。師泰が嘗て別邸を建てるのに、菅原氏の墓を發いたことがある。その後裔の參議菅原在登が怨みがましい事をいつたと聞いて、ひそかに人をやつて在登を刺し殺させた。世間で何とも之についていふものは無かつた。上杉重能・畠山直宗は師直の權力威勢を嫉んで直義を助けて、之を押しのけようと計畫した。直義は丁度その頃禪を疎石に學んでゐた。疎石の弟子の妙吉は世間から最も崇められ尊ばれて居た。人は爭つて妙吉に事へた。たゞ師直兄弟は之を輕蔑してゐた。そこで重能直宗は妙吉に結びついた。妙吉はゆつたりとして、直義に說いて曰ふには「昔から一家の安危はその家を切り盛りする家老の賢なると否とに關係するものであります。あなたは彼の秦の趙高が扶蘇・胡亥の兄弟の間を離間して、秦を亡した話をお聞きになつたことはありませんか君は早く師直を誅し、その代りに上杉・畠山を引きあげて若君を佐けるやうになさいませ」と。若君とは直義の幼子をいふのである。直義は又尊氏の妾腹の長子直冬を養子にして左兵衛佐に任ぜられてゐた。この時出でゝ中國の探題となり、鞆津にゐて、その地を守る役人どもの功や罪を吟味することになつた。そして一方高師直・師泰二人の罪過は益々顯著になつて來た。

〔語釋〕趙高離間（秦の始皇帝殂し、趙高謀めて少子の胡亥を立て、太子扶蘇に死に至らしめた故事。）

八月、直義與重能・直宗・及栗飯原清胤・齋藤利康等謀、伏甲而召師直。師直至直義三條第。清胤意中變、目師直使去。師直覺、輒起出。其夜清胤與利康、就告其謀師直。乃聚族黨自衞、召師泰於石川、乃使畠山國清代守而還。直義聞之、使人逆說之曰、「我欲以子代乃兄。」師泰曰、「剪枝及根。尊意可知。臣將面答之。」率騎三千卒七千、人持一梃、即日入京師。師直令赤松則村扼杉舟二坂以備直冬。尊氏驚使使召直義。直義入尊氏東洞院第。其兵稍稍去、歸師直。留者不滿千人。

〔通釋〕八月、直義、重能・直宗、及び栗飯原清胤・齋藤利康等と謀り、甲を伏せて師直を召す。師直、直義の三條の第に至る。清胤の意、中ごろ變じ、師直を目して去らしむ。師直覺り、輒ち起つて出づ。其の夜、清胤、利康と就いて其の謀を告ぐ。師直乃ち族黨を聚めて自ら衞り、師泰を石川に召し、乃ち畠山國清をして代り守らしめて還る。直義、之を聞き、人をして之を逆說せしめて曰く、「我れ子を以て乃兄に代らしめんと欲す」と。師泰曰く、「枝を剪り根に及ぶ。尊意知るべし。臣將に之に面答せんとす」と。騎三千、卒七千を率ゐ、人ごとに一梃を持たしめ、即日、京師に入る。師直赤松則村をして、杉・舟の二坂を扼し、以て直冬に備へしむ。尊氏驚き、使をして直義を召さしむ。直義、尊氏の東洞院の第に入る。其の兵稍稍去り、師直に歸し留る者千人に滿た

す。

〔通釋〕八月、直義は、重能・直宗及び飯粟原清胤・齋藤利康等と相談して、兵を伏せて置いて、師直を召した。師直は直義の三條の屋敷へ來た。清胤が中途で變心し、師直に目くばせして、立ち去らせた。師直はその心を悟つて直ぐ其處を立ち去つた。その夜清胤は、利康と一緒に師直の所に往つて其の謀を密告した。そこで師直は一族徒黨を集めて、自ら身を守り、師泰を石川から呼び返したので、師泰は畠山國清をして代つて石川を守らせて置いて、京都へ還つて來た。直義、このことを聞いて人をやつて師泰を途中で迎へて說かしめて曰ふには「余は貴公を貴公の兄に代つて執政に取り立てようと思つてゐるのだ」と。師泰が曰ふのに「先づ枝を切つてから、根まで切らふといふ（つまり我が家を亡ぼさうといふ）貴方の御心はよく分つてゐます。臣は一應お目にかゝつて御返答しようと思つてゐます」と。騎兵三千、歩卒七千を率ゐ、めいめいに一つづゝの楯を持たせて、その日すぐ京都に入つた。師直は赤松則村に言ひつけて、杉坂と舟坂とを喰ひ止めて、直冬が救助に入京するのに備へしめた。尊氏は驚いて使をやつて直義を召させた。直義は尊氏の東洞院の屋敷に入つた。足利の兵士はだん〲に立ち去り、師直に從ひ留まつたものは千人に足らぬ位であつた。

旦日、二高以兵數萬來圍之。尊氏使人出責問之。答曰、「欲執讒人耳。」麾兵逼攻。尊氏怒、欲親出戰。直義扼之曰、「且聽其所言。」何遽與家僕爭。尊氏從之。師直乃解圍而去、遣兵捕妙吉。弗獲。流重能・直宗於越前、召義詮執政、以其弟基氏代居鎌倉。師冬與

上杉憲顯輔焉。擯直義、居錦小路第。人莫敢往。獨僧玄慧時問之而已。尊削髮以堅二高之意。二高密使人殺重能・直宗及直冬。直冬逃於肥後。少貳頼尚以女妻之。三角某起兵于石見、以應直冬。五年、二高往擊之。會土岐頼明叛。尊氏乃召還師直、佐義詮擊頼明、虜之。義詮任參議、兼左近衞中將。師泰攻拔石見五城、終圍三角、未能下。而鎭西悉附直冬。師直勸尊氏親征、以示嚮背。尊氏從之。

【通釋】旦日、二高、兵數萬を以て來つて之を圍む。尊氏、人をして出でゝ之を責問せしむ。答へて曰く、「讒人を執へんと欲するのみ」と。兵を麾いて逼り攻む。尊氏怒り、親ら出で戰はんと欲す。直義、之を扼めて曰く、「且く其の言ふ所を聽け。何遽ぞ家僕と爭はん」と。尊氏、之に從ふ。師直乃ち圍を解いて去り、兵を遣はし妙吉を捕へしむ。獲ず。重能、直宗を越前に流し、義詮を召して政を執らしめ、其の弟基氏を以て、代つて鎌倉に居らしむ。師冬、上杉憲顯と輔く。直義を擯けて、錦小路の第に居らしむ。人敢て行くものなし。獨り僧玄慧時に之を問ふのみ。尊、髮を削り以て二高の意を堅くす。二高、密に人をして、重能・直宗、及び直冬を殺さしむ。直冬、肥後に逃る。少貳頼尚、女を以て之に妻はす。三角某、兵を石見に起し、以て直冬に應ず。五年、二高往いて之を擊つ。會ゝ土岐頼明叛く。尊氏乃ち師直を召還し、義詮を助けて、頼明を擊たしめ之を虜にす。義詮、參議に任ぜられ、左近衞中將を兼ぬ。師泰、攻めて石見の五城を拔き、終に三角を圍む。未だ下す能はず。而して鎭西悉く直冬に附く。師直、尊氏に親征し、以て嚮背を示さんことを勸む。尊氏、之に從ふ。

【通釋】 翌日、師直・師泰は兵數萬を率ゐ、やつて來て尊氏の邸を取り圍んだ。そこで尊氏は人をやつてなぜそんな事をするか責め問はせた。師直・師泰は答へて曰ふには「讒言する者共を捕へたいと思つてやるだけの事であります」と。兵を指圖して攻めよせた。尊氏は怒つて自身出て戰はうとした。直義は之を引きとめ曰ふには「しばらく彼等の言ふなりになさい。どうして家來などと爭ひませうや」と。尊氏は之に從つた。そこで（師直等の言ひ分を聞くことになつたから）師直は圍を解いて引き去り、一方兵を派して妙吉を捕へさせた。併し捕へられなかつた。そこで重能、直宗を越前に流し、義詮を鎌倉から呼び戻して政治を執らしめ、その弟の基氏をして代つて鎌倉に居らしめた。師冬と上杉憲顯とで之を輔佐した。直義を退けて、錦小路の屋敷に居らせた。これからは誰も直義の所へ往くものはなく、ひとり僧の玄慧が時々訪問する位のものであつた。尋いで直義は頭を丸めて二度と政治に關係せぬ意志表示をして、師直・師泰を安心させた。師直・師泰は内々人をやつて重能・直宗及び直冬を殺さしめようとした。所が直冬は肥後に逃げて終つた。少貳頼尙は娘を直冬に妻はせた。三角某は兵を石見に起して直冬に味方した。五年、師直、師泰は直冬を征伐に行つた。其の時丁度土岐頼明が謀叛をした。そこで尊氏は師直を呼び戻して、義詮を輔佐して頼明を擊たせ、之を虜にした。義詮は參議に任ぜられ、左近衞中將を兼ねた。師泰は石見の五ケ城を攻め落し、とう〳〵三角を取り圍んだ。併しそれを下すことは出來なかつた。而るに鎭西は悉く直冬に屬いた。師直は尊氏に、親ら征伐に出かけて、いづれに背きいづれを助けるかの方向を示すやうに勸めた。尊氏は之に從つた。

【語釋】 二高（師直と師泰。）○讒人（直宗・重能）

師直又欲殺直義而行。直義即夜出奔南都。不內、走倚越智某、終降於南朝。石堂義房・其子頼房・畠山國淸・上杉顯能皆降焉。顯能、重能子也。明年、直義入據男山。桃井直常素怨師直不賞己也。以越中兵入、據叡山、約攻義詮。義詮西奔。遇尊氏・師直還自備前、合兵擊直常、走之。而將士多叛。旦日、義詮走丹波、尊氏・師直走播磨。

【讀方】師直、又直義を殺して往かんと欲す。直義、即夜、南都に出奔す、内れられず。走つて越智某に倚り、終に南朝に降る。石堂義房・其の子頼房・畠山國淸・上杉顯能・皆降る。顯能は重能の子なり。明年、直義、入つて男山に據る。桃井直常、素より師直の己を賞せざるを怨む。越中の兵を以て入り、叡山に據り、約して義詮を攻む。義詮西奔す。尊氏、師直の備前より還るに遇ひ、兵を合せて直常を擊つて之を走らす。而して將士多く叛く。旦日、義詮、丹波に走り、尊氏、師直、播磨に走る。

【通釋】師直は又直義を殺して行かうと思つた。直義はその晩すぐ奈良に出奔した。併し、受け入れられなかつた。走つて、越智某にたより、遂に南朝に降參した。石堂義房・其の子頼房・畠山國淸・上杉顯能等も皆南朝に降參した。顯能は重能の倅である。その翌年直義は京へ攻め込み、男山に立て籠つた。桃井直常は師直が自分に賞與を與れなかつたのを平素から怨んで居た。だから越中の兵を率ゐて京へ入り、比叡山に立て籠り直義と約して義詮を攻めた。義詮は西に奔つた。尊氏は師直が備前から還つて來るのに出遇つたので、兵を合せて直常を擊つて之を走らせた。しかし將士は多く叛いて直義についた。あくる日義詮は丹波に走り、尊氏、師直は播磨に走つた。

直義遣頼房來攻尊氏。會師泰至自石見。尊氏幷其兵、逆擊頼房。時赤松則村已死、子則祐保白旗城、不出。直義又遣國淸、援頼房、戰于御影濱。尊氏大敗、入松岡城。城狹隘、兵士塡咽。師直逐雜卒、出之。衆怒而散。將士亦出亡、在者僅五百人。尊氏・師直釋甲、且自殺。訣飮至夜半。會亡將饗場氏直敲門來報。曰「臣潛就國淸謀媾。國淸曰、錦小路公固願之矣。因出示男山來書。書辭信然。」尊氏喜、挺身歸京師。二高不知所出。欲削髮降。藥師寺公義勸其戰死。不聽。

訓讀　直義、頼房を遣はし來つて尊氏を攻めしむ。師泰の石見より至るに會ふ。尊氏、其の兵を幷せて、頼房を逆へ擊つ。時に赤松則村已に死し、子則祐、白旗城を保つて出でず。直義、又國淸を遣はし、頼房を援けしめ、御影濱に戰ふ。尊氏大に敗れ、松岡城に入る。城、狹隘にして、兵士塡咽す。師直、雜卒を逐うて、之を出す。衆怒つて散ず。將士も亦出亡し、在る者僅に五百人。尊氏・師直、甲を釋き、且に自殺せんとす。訣飮して夜半に至る。會〻亡將饗場氏直、門を敲いて來り報ず。曰く、「臣、潛に國淸に就いて媾を謀る。國淸曰く、錦小路公固より之を願へりと。因つて男山の來書を出し示す。書辭、信に然り」と。尊氏喜び、身を挺して京師に歸る。二高、出づる所を知らず。髮を削り降らんと欲す。藥師寺公義、其の戰死を勸む。聽かず。

通釋　直義は頼房を遣はして尊氏を攻めさせた。其の時師泰は召されて石見から還つて來た所であつた。尊氏

は其の兵を合はせ頼房を迎へ撃つた。當時赤松則村はもう死んで終ひ、その倅の則祐が、白旗城を保持して出て來なかつた。直義は又國清を遣はし頼房を援けさせ、御影濱で戰つた。尊氏は大に敗れ、松岡城に入つた。所がその城は狹くて、兵士が一ぱいに滿ち塞がつた。師直は雜兵を逐ひ立て、城を出させた。皆々怒つて散り去つた。將士も亦逃げ出し、殘つてゐた者はわづかに五百人であつた。尊氏・師直は鎧を脫いで自殺しようとした。最後の別れの酒宴をして夜中になつた。丁度この時逃げた大將饗場氏直が門を敲いて報告した。曰ふのに「私は內々國清の處へ往つて、和睦の相談をしました。國清がいふのに錦小路殿（卽ち直義のこと）ももとより願つてゐられる所であるとの事であります。そこで國清は男山から來た直義殿の手紙を見せました。その手紙の文句も實際その通りでありました」と。そこで尊氏は非常に喜び、獨り拔け出して京都にかへつた。師直、師泰は如何してよいか分らなかつた。困つた揚句、髪を剃つて降參しようと思つた。藥師寺公義は討死を勸めた。併し聞き入れなかつた。

【語釋】御影濱・松岡城（攝津）〇錦小路八二（直義は錦小路に居たからいふ。）

二高欲奔四國、聞細川顯氏擧四國應直義、則欲航海東投師冬。會甲斐人來告上杉憲顯、與義子能憲、起上野應直義、擊師冬。師冬終走甲斐、爲諏訪氏所攻殺。二高愕然。遂削髮、被笠蔽面東走、欲追及尊氏。上杉顯能兵。故遮其間、使不相及。比濟武庫川、三浦某叱師直曰「何物比丘、敢爾蔽面。」奪笠視面曰「是也。」雜刀斫之。師泰望見

欲走。吉江某槍刺之。師直子師夏等皆被殺。於是、尊氏自播磨、義詮自丹波、直義自男山、皆入京師、置酒會宴。然寡語而罷。

【訓讀】二高、四國に奔らんと欲す。細川顯氏四國を擧げて直義に應ずと聞き、則ち海に航して、東、師冬に投ぜんと欲す。會ゝ甲斐の人來つて、上杉憲顯、義子能憲と、上野に起り、直義に應じて、師冬を撃ち、師冬終に甲斐に走り、諏訪氏の攻殺する所と爲ると告ぐ。二高愕然たり。遂に髮を削り、笠を被り、面を蔽うて東走し、追うて尊氏に及ばんと欲す。上杉顯能の兵、故に其の間を遮つて、相及ばざらしむ。武庫川を濟る比、三浦某師直を叱して曰く、「何物の比丘ぞ。敢て爾く面を蔽ふ」と。笠を奪ひ面を覩て曰く、「是なり」と。薙刀もて之を斫る。師泰望み見て走らんと欲す。吉江某、槍もて之を刺す。師直の子師夏等、皆殺さる。是に於て、尊氏は播磨より、義詮は丹波より、直義は男山より、皆京師に入り、置酒會宴す。然れども語寡くして罷む。

【通釋】師直・師泰は四國に逃げようと思つた。細川顯氏が四國の兵を擧げて直義に應じたと聞いたので海を渡つて東の方師冬の處へ行かうと思つた。丁度そこへ甲斐の人が來て告げて曰ふのに、「上杉憲顯が養子の能憲と上野に起り、直義の味方となつて師冬を討ち、師冬は遂に甲斐に逃げ、諏訪の下宮の神主に攻め殺された」と。師直・師泰は非常に驚いた。とう〳〵髮を剃り編笠をかぶつて顏をかくし、東に逃げて尊氏に追ひ付かうと思つた。上杉顯能の兵はわざと其の間を邪魔して、尊氏に追ひつかれぬやうにした。二人が、武庫川を渡る時、三浦某が師直を叱りつけて曰ふには「どんな坊主だ、そんなにやたら顏をかくしてゐるのは」と。笠を取つて顏を覗き込み曰ふには「たしかにこれだ」と。薙刀で斬り殺した。師泰は遙に之を望み見て逃げようとした。すると吉江某が

槍で以て突き殺した。師直の子師夏等も皆殺された。そこで尊氏は播摩から、義詮は丹波から、直義は男山から皆夫々京都に入り、酒宴を催した。併し心が打ち解けぬので碌々ものも曰はずに解散した。

語釋 師冬（師直の從弟。）○諏訪氏（諏訪下宮の神官、諏訪隆種。）○三浦某（八郎左衞門。）○比丘（梵語にて僧といふこと。）○吉江某（吉江時宜）

直義素飭情要譽。多歸之者。上杉顯能以擅殺師直爲尊氏所逐。而畠山・石堂・桃井氏、乘勢驕肆。與仁木・細川・土岐・佐佐木氏、相惡。時訛言、每夜有勒兵於郊者。二黨交爲警備。少納言藤原有範以儒學爲直義所親信、以太公望自比。說直義曰、「參議淫亂、軼於商紂。公修周文之德、誰不嚮服。」直義意益驕。七月、直常・義房又說曰「聞仁木賴章等、各歸其國、赤松則祐與南朝通。皆以將軍父子意而圖公也。公宜速赴北國、連臣邑越中・甲斐以自固。」直義遽出奔。將士率從之、京師空虛。義詮大懼、且抵尊氏第、請備其返襲。尊氏曰「有命在天。何足虞也。」吟嘯自如。八月、聞直義在敦賀、以萬人赴討。九月、直義兵六萬來陣八相山。迭有勝敗。細川顯氏・畠山國淸、勸直義媾和。不聽。二人怒降尊氏。

【訓讀】直義、素より情を飾しみ、譽を要む。之に歸する者多し。上杉顯能、擅に師直を殺せしを以て、尊氏の逐ふ所となる。而して畠山・石堂・桃井氏、勢に乘じて驕肆なり。仁木・細川・土岐・佐佐木氏と相惡む。時に訛言す、毎夜兵を郊に勒する者ありと。二黨、交々警備を爲す。少納言藤原有範、儒學を以て直義の親信する所となり、太公望を以て自ら比す。直義に說いて曰く、「參義淫亂、商紂に軼ぐ。公、周文の德を修めば、誰か嚮服せざらん」と。直義意益々驕る。七月、直常・義房、又說いて曰く、「聞く、仁木頼章等、各々其の國に歸り、赤松則祐、南朝と通ず。皆將軍父子の意を以て公を圖る。公、宜しく速に北國に赴き、臣の邑越中・甲斐を連ね、以て自ら固むべし」と。直義、遽に出奔す。將士率ゐて之に從ひ、京師空虛なり。義詮大に懼れ、且に尊氏の第に抵り、其の返襲に備へんと請ふ。尊氏曰く「命を有するは天に在り。何ぞ虞るに足らんや」と。吟嘯して自如たり。八月、直義、敦賀にありと聞き、萬人を以て赴き討つ。九月、直義の兵六萬、來つて八相山に陣す。迭に勝敗有り。細川顯氏・畠山國淸、直義に勸めて和を媾ぜしむ。聽かず。二人怒つて、尊氏に降る。

【通釋】直義は平素から内情を現はさぬやうに表面を繕ひ、評判を取らうとした。之に付くものが多かつた。上杉顯能は一存で師直を殺したといふので、尊氏に逐はれて終つた。そして畠山・石堂・桃井の諸氏は、勢につけ上つて、驕り我儘であつた。仁木・細川・土岐・佐佐木の諸氏と仲が惡かつた。當時毎夜郊外で兵士を勢揃ひするものがあると根もないことを云ふものがあつた。この二つの徒黨は互に警戒をしてゐた。少納言藤原有範は、儒學が出來るので、直義に親しまれ信用されて居たが、太公望を以て自ら比べてゐた。直義に說いて曰ふには、「義詮は淫亂で殷の紂王以上であります。貴公が周の文王の德を修めらるゝならば、天下の者で心服しないものがありませうや」と。直義は心益々驕つて來た。七月、直常・義房も又直義に說いて曰ふには「聞けば仁木頼章等は

各々本國へかへり、赤松則祐は南朝と内通してゐるさうです。これ等は皆將軍御父子の御意を受けて、貴公を滅ばさうがためであります。ですから貴公は早く北國に行かれ、私の領地の越中甲斐を合はせて堅固になさいませ」と。そこで直義は急に京都より出奔した。將士も皆之に附き從ひ、京都は空虚になつた。義詮は非常にびく〳〵して、あくる朝尊氏の屋敷へ往つて、直義が引き返して不意討ちするといけないから用心して置きませうといつた。尊氏はいふのに「運命は天に在るのである。そんなに心配するには及ばぬ」と。詩を吟じて平日と少しも變らなかつた。八月になつて、尊氏は、直義が敦賀に居ると聞いて、萬人をつれて討ちに出かけた。九月、直義の兵六萬が來つて八相山に陣取つた。互に勝ち負けがあつた。細川顯氏・畠山國淸は直義に仲直りをするやう勸めた。尊氏は承知しなかつた。それで二人は怒つて尊氏に降參した。

【語釋】畠山（國淸）○石堂（義房）○桃井（直常）○仁木（頼章）○細川（頼春）○土岐（頼康）○佐々木（高氏）○太公望（呂尚、周文王の師、周の先君太公の望む所であつた人故太公望と號した。）○參議（義詮をさす。）○八相山（近江）

十月、直義自越前走、赴鎌倉。尊氏患之、乃因赤松氏請和南朝、留義詮守京師、而自將東伐遠江以東盡附直義。尊氏以三千人保薩埵山。直義陣伊豆府、遣上杉憲顯・石堂義房等、將數十萬、迎擊尊氏。十二月、宇都宮氏綱、發下野兵應尊氏、遇桃井直常于利根川、戰而克之、進至足柄山麓炬火彌野。直義兵望見輒潰。仁木義長以三

百騎追撃、至伊豆。憲顯走信濃、直義與義房匿于北條。尊氏遣義長等、執直義入鎌倉。基氏切救解之。不聽。基氏出奔安房。尊氏使人召還之。無幾直義暴卒。尊氏留鎭關東。

訓讀 十月、直義、越前より走り、鎌倉に赴く。尊氏之を患ひ、乃ち赤松氏に因り、和を南朝に請ひ、義詮を留めて京師を守らしめ、而して自ら將として東伐す。遠江以東、盡く直義に附く。尊氏、三千人を以て薩埵山を保つ。直義伊豆の府に陣し、上杉憲顯・石堂義房等を遣はし、數十萬に將として、尊氏を迎へ撃たしむ。十二月、宇都宮氏綱・下野の兵を發し、尊氏に應じ、桃井直常に利根川に遇ひ、戰つて之に克ち、進んで足柄山の麓に至る。炬火、野に彌る。直義の兵、望見して輒ち潰ゆ。仁木義長、三百騎を以て追撃し、伊豆に至る。憲顯、信濃に走り、直義・義房と、北條に匿る。尊氏・義長等を遣はし、直義を執へしめ、鎌倉に入る。基氏、切に之を救解す。聽かず。基氏、安房に出奔す。尊氏、人をして之を召還せしむ。幾もなくして、直義、暴に卒す。尊氏、留つて關東を鎭む。

通釋 十月、直義は越前から逃げて、鎌倉へ往つた。尊氏は之を心配し、そこで赤松氏に頼んで南朝に和睦を願ひ出で、義詮を留めて京都を守らせて置き、自分は大將となつて、東方に討つて出た。遠江より以東は全部直義に屬いた。尊氏は三千人を率ゐて薩埵山を維持した。直義は伊豆の國府に陣取り、上杉憲顯・石堂義房等を派遣し、數十萬の兵を率ゐて、尊氏を迎へ擊たせた。十二月に宇都宮氏綱は下野の兵を繰り出して尊氏に味方をし、

桃井直常に利根川で出會ひ、戰つて之に勝ち、進んで足柄山の麓まで來た。その松明の火が野一面にひろがり渡つてゐた。直義の兵は之を望見して崩れて終つた。仁木義長は三百騎をつれて、之を追擊し、伊豆まで來た。憲顯は信濃に走り、直義は義房と一緒に北條に匿れた。そこで尊氏は義長等を遣はし、直義を捕へさせ、鎌倉に入つた。基氏は一生懸命に直義を救ふ爲めに辯解した。尊氏は承知しなかつた。基氏は安房に出奔した。尊氏は人を遣つて之を呼び還らせた。其の後間もなく、直義は急に死んで終つた。尊氏は鎌倉に留まつて關東を鎭めて居た。

七年二月、楠氏・北畠氏、以兵數千人、奉帝襲京師。細川顯氏敗走、細川頼春死之。義詮與百餘人至勢多橋、橋已斷。欲自殺。會我某泅至前岸、取舟濟之、依佐佐木・土岐氏。北朝二上皇、一帝皆被虜。新田義興・義治、亦奉宗良親王、起兵東國、來攻鎌倉。稱十餘萬。諸將以兵寡、復議避之安房・上總。尊氏曰「關東諸國、聞我逃鎌倉、則必率歸於敵。不如逆擊也」。乃使基氏留守、而自將五百騎發、行收兵至武藏、得數萬騎。饗場氏直爲先鋒、與義興弟義宗戰。其兵皆少壯、銳進、敗走、入尊氏軍。尊氏軍亂、遂大敗、走至石濱。近士二十餘騎返戰、死之。仁木義長伏兵擊義興等、大破之。

【訓譯】七年二月、楠氏・北畠氏、兵數千人を以て、帝を奉じ京師を襲ふ。細川顯氏、敗走し、細川賴春、之に死す。義詮百餘人と、勢多橋に至れば、橋已に斷つ。自殺せんと欲す。曾我某、泅いで前岸に至り、舟を取つて之を濟し、佐佐木・土岐氏に依る。北朝の二上皇、一帝、皆虜へらる。新田義興・義治も、亦宗良親王を奉じ、兵を東國に起し、來つて鎌倉を攻む。十餘萬と稱す。諸將、兵寡きを以て、復之を安房、上總に避けんと議す。尊氏曰く、「關東の諸國、我れ鎌倉を逃ぐと聞かば、則ち必ず率ゐて敵に歸せん。逆へ擊つに如かざるなり」と。乃ち基氏をして留守せしめ、而して自ら五百騎に將として發し、行くゆく兵を收め武藏に至り、數萬騎を得たり饗場氏直、先鋒と爲り、義興の弟義宗と戰ふ。其の兵皆少壯、銳進して敗走し、尊氏の軍に入る。尊氏の軍亂れ、遂に大に敗れ、走つて石濱に至る。近士二十餘騎返り戰つて、之に死す。仁木義長、兵を伏せて義興等を擊ち、大に之を破る。

【通譯】七年二月、楠氏、北畠氏は兵數千人を率ゐ、後村上天皇を奉戴して、京都を不意討ちした。細川顯氏は敗走し、細川賴春は之に討死した。義詮は百餘人と共に勢多の橋まで來ると、橋はもう落されて居た。渡るに渡れず自殺しようと思つた。曾我左衞門が泅いで向ふ岸へ行き、舟を取つて來て之を渡し、佐佐木・土岐氏の處へ逃げ込み、之にたよつた。此の時、北朝の二上皇、一帝は皆擒にせられ給うた。又新田義興・義治も亦宗良親王を奉戴して、兵を東國に擧げ、鎌倉に攻め寄せた。その兵十餘萬と稱せられた。足利の諸將は兵が少いから敵鋒を安房、上總に避けようと相談した。尊氏が曰ふには「關東の諸國の者が、余が鎌倉を逃げ出したと聞いたら、屹度相率ゐて敵に屬くことであらう。それよりは敵を迎へ擊つに越したことはない」と。そこで基氏に鎌倉の留守番をさせ、自分は五百騎に將となりて出發し、途中兵を集め、武藏に行つた頃には數萬騎を得た。饗場氏直は

先鋒となり義興の弟義宗と戰つた。その部下の兵は皆年若く、勢にまかせて矢鋒に進んで敗れ走り、尊氏の陣へ逃げ込んで來た。それがために尊氏の陣は亂れ、遂に大に敗れ走つて石濱まで來た。愈々急な場合になつたので、近習の士二十餘騎は引きかへして戰ひ、討死した。仁木義長は兵を伏せて、義興等を擊つて大に之を破つた。

【語釋】曾我某（左衞門）〇佐々木氏（高氏、近江を領す。）〇土岐氏（賴康、美濃を領す。）〇二上皇（光嚴光明）〇一帝（崇光天皇）〇石濱（武藏）

初、石堂義房・三浦高通叛、爲內應、約戰酣起刺尊氏。義房語之其子義基。義基告之尊氏。義房・高通出奔。於是與義興合七千人、反襲鎌倉。基氏出戰、不克。走歸尊氏于石濱。諸將士稍稍來集、凡八萬餘人。而上杉憲顯自信濃叛、附義宗、合二萬騎、陣碓氷。尊氏曰「先破來者、寡者自走。」進攻義宗、走之。義興等亦散走。京畿將士聞尊氏捷、則率歸義詮。義詮得兵三萬、入京師。官軍退、保男山。三月、義詮與細川顯氏・赤松則祐會、絕官軍糧道、圍男山數日。會山名時氏、與子師義、亦率山陰兵來助、攻奪淀口。四月、諸將齊進、攻北畠顯能于園殿、楠正儀于更科、破之。五月、終陷男山。帝南走。

【通釋】初め石堂義房・三浦高通叛き、內應を爲す。戰酣にして、起つて尊氏を刺さんと約す。義房之を其の子義基に語る。義基、之を尊氏に告ぐ。義房・高通、出奔す。是に於て、義興と七千人を合せ、反つて鎌倉を

襲ふ。基氏出で、戰ひ、克たず。走つて尊氏に石濱に歸す。諸將士、稍稍來り集り、凡そ八萬餘人なり。而して上杉憲顯、信濃より叛き、義宗に附き、二萬騎を合せて、碓氷に陣す。尊氏曰く、「先づ衆き者を破らば、寡き者自ら走らん」と。進んで義宗を攻め、之を走らす。義興等も亦散走す。京畿の將士、尊氏の捷を聞き、則ち率ゐて義詮に歸す。義詮、兵三萬を得て、京師に入る。官軍退き、男山を保つ。三月、義詮、細川顯氏、赤松則祐と會し、官軍の糧道を絕ち、男山を圍むこと數日。山名時氏、子師義と、亦山陰の兵を率ゐて來り助くるに會ひ、攻めて淀口を奪ふ。四月、諸將齊しく進み、北畠顯能を園殿に、楠正儀を更科に攻めて、之を破る。五月、終に男山を陷る。帝、南走す。

【通釋】はじめ石堂義房、三浦高通は足利に叛いて、內々義興に味方した。それで戰の最中に尊氏を刺し殺さうと約束をした。義房はその事を倅の義基に話した。義基は之を尊氏に告げた。曝れたので義房・高通は出奔した。そこで兩人は義興と兵七千人を合はせ、引き返し鎌倉を襲うた。基氏は出て戰つたが負けた。逃げて石濱にゐた尊氏に合併した。その中に諸將士はだん〳〵に來り集まり、凡そ八萬人となつた。そして、上杉憲顯は信濃で叛き義宗に從ひ、二萬騎を合はせて碓氷に陣取つた。尊氏が曰ふのに「先づ人數の多い方を破れば自然小勢の方は逃げ去るだらう」と。進んで義宗を攻めて之を走らせた。義興等も亦逃げ散つた。京畿の將士は尊氏の勝利を聞いて、相率ゐて義詮に屬いた。義詮は兵三萬を得て、京都に入り込んだ。それが爲めに官軍は退いて、男山を保持することゝなつた。三月、義詮は、細川顯氏・赤松則祐と會し、官軍の兵糧の道を絕ち、男山を取り圍むこと數日に及んだ。丁度そこへ山名時氏が其の倅師義と一緒に、山陰の兵をつれて義詮を助けにやつて來たので、大に勢を得、淀口を攻めて之を奪ひ取つた。四月に顯氏等の諸將は同時に進み、北畠顯能を園殿に、楠正儀

を更科に攻めて、之を破つた。五月とう〳〵男山を陥れた。それが為め後村上天皇は南に走られた。

【語釋】碓氷（上野）○淀口・園殿（山城）○更科（河内）

八月、義詮立崇光太弟。初光明之立也、後醍醐天皇以僞器授之。二月之亂、其器又毀。於是公卿議無劍璽而卽位不可。關白藤原良基曰「尊氏爲劍、良基爲璽。何不可。」遂立。是爲後光嚴院。

【通釋】八月、義詮、崇光の太弟を立つ。初め光明の立つや、後醍醐天皇、僞器を以て之に授く。二月の亂に、其の器又毀る。是に於て、公卿、劍璽なくして位に卽くの不可なるを議す。關白藤原良基曰く、「尊氏、劍と爲り良基、璽と爲る。何ぞ不可ならん」と。遂に立つ。是を後光嚴院と爲す。

【意譯】八月、義詮は崇光天皇の皇太弟を立てた。初め光明天皇が位につかれた時、後醍醐天皇は贋の神器を之に授けられた。この年二月の亂の時、その贋の神器がこはれて終つた。そこで公卿衆は劍璽が無いのに卽位なされることは可けないと論議した。關白藤原良基が曰ふのに「尊氏が劍となり、良基が璽となる。何が可けないことがあらう」と。遂に卽位せられた。これが後光嚴院と申上げたお方である。

【語釋】二月之亂（官軍が京都を攻め、北朝の天子を擒にした亂）

當是時、政在於義詮。義詮寵佐佐木道譽。道譽卽高氏、信綱五世孫也。初勸尊氏滅

北條氏、數〻困新田氏。及直義・直冬叛、不為變志。屢〻拯義詮之危。以故寵幸用事。子秀綱・弟氏頼等、皆被親信。山名時氏負功、欲得邑於若狹、使子師義就道譽請之。曰「將軍所約也」。道譽方宴、不顧。師義立至日暮。乃忿曰「我寧須汝乎」。馳歸伯耆、與時氏俱應官軍。吉良滿貞・石堂頼房、嘗黨直義。赤松氏範・與兄則祐惡。皆起應之。八年六月、同時入京師。義詮移北帝于叡山、而自陣鴨河東。道譽先敗。細川清氏獨止戰。義詮召還之。已而山徒又通欵於敵。義詮走近江。新田氏餘黨堀口貞祐、率土寇要擊。秀綱死之。行至鹽津、土寇復起、兵潰。清氏下馬、負北帝、東走、達垂氷。尊氏已定關東、留基氏鎭之、佐以畠山國清、而西與義詮遇、與共入京師。而時氏兵日逃亡、走歸伯耆。於是時氏乃曰「衆之不歸我、我知其由也」。乃索直冬。直冬自直義死、匿于長門。時氏擁戴之。歸者果多。足利高經・桃井直常、皆來送欵。

訓讀　是の時に當り、政、義詮に在り。義詮、佐佐木道譽を寵す。道譽は卽ち高氏にして信綱五世の孫なり。初め尊氏に勸め、北條氏を滅し、數〻新田氏を困しむ。直義・直冬、叛くに及び、爲めに志を變ぜず。屢〻義

詮の邑を拆ふ。故を以て、寵幸せられて事を用ふ。子秀綱、弟氏賴等、皆親信せらる。山名時氏、功を負み、邑を若狹に得んと欲し、子師義をして、道譽に就て之を請はしむ。曰く、「將軍の約する所なり」と。道譽、方に宴し、顧みず。師義立つて日暮に至る。乃ち忿つて曰く、「我れ寧に汝を須たんや」と。馳せて伯耆に歸り、時氏と俱に官軍に應ず。吉良滿貞、石堂賴房、嘗て直義に黨す。赤松氏範、兄則祐と惡し。皆起つて之を應ず。八年六月、同時に京師に入る。義詮北帝を叡山に移し、而して自ら鴨河の東に陣す。道譽先づ敗る。細川清氏獨り止り戰ふ。義詮召して之を還す。已にして山徒、又款を敵に通ず。義詮近江に走る。新田氏の餘黨、堀口貞祐、士寇を率ゐて要擊す。秀綱、之に死す。行いて鹽津に至る。士寇、復起り、兵潰ゆ。清氏馬を下り、北帝を負ひ東走し、垂水に達す。尊氏已に關東を定め、基氏を留めて之を鎭めしめ、佐くるに畠山國清を以てし、而して西義詮と遇ひ、與に共に京師に入る。而して時氏の兵、日に逃亡し、走つて伯耆に歸る。時氏乃ち曰く、「衆の我に歸せざる、我れ其の由を知るなり」と。乃ち直冬を索む。直冬、直義の死せしより、長門に匿る。是に於て、時氏之を擁戴す。歸する者果して多し。足利高經・桃井直常、皆來つて款を送る。

【通釋】この當時、政治は皆義詮がやつてゐた。義詮は佐々木道譽を寵して居た。道譽とは卽ち高氏で、信綱五代の孫である。初め彼は尊氏に勸めて北條氏を亡し、又度々新田氏を苦しめた。直義・直冬の叛いた時も、義詮の爲めに少しも志を變へなかつた。度々義詮の危險を救つた。そんな譯で隨分氣に入つて、政治を執り行つて居た。その子の秀綱・弟氏賴なども皆義詮に親しまれ信用せられた。山名時氏は自分の手柄を鼻にかけ、若狹に土地を貰はうと思ひ、倅の師義をやつて道譽の處へ往き、之を願はせた。曰ふには「將軍がお約束なされたのですから」と、道譽は丁度酒盛をしてゐたので相手にしなかつた。師義は立つて返事を待ち、日暮になつた。そ

こで怒つて曰ふには「誰れがお前に賴むものか」と。馳せて伯耆に歸り、父の時氏とと　に足利に叛いて官軍に屬いた。吉良滿貞・石堂賴房は以前直義に組してゐた。赤松氏範は兄の則祐と仲が惡かつた。皆起つて時氏に味方した。八年六月、時氏・滿貞・賴房・氏範等同時に京都へ攻め込んだ。義詮は北朝の後光明天皇を叡山に移し奉り、そして自分は鴨河の東に陣取つた。道譽は眞先きに負けた。細川清氏は獨り踏み留まつて戰つた。義詮は之を呼び戻した。その中に叡山の坊主が又敵に味方をした。それがため義詮は近江に逃げた。新田氏の殘黨堀口貞祐は土民一揆をつれて、待ち受けて之を擊つた。秀綱はこの時討死した。義詮は鹽津まで行つた。すると又一揆が起つて味方の兵士は潰えて終つた。清氏は馬から下り、後光明天皇を背負うて東に逃げ、垂水についた。この時尊氏は早や關東を平定し、基氏を留めて之を鎭めさせ、畠山國清をして之を輔佐せしめ、そして自分は西に上つて義詮と會ひ、一緒に京都に攻め入つた。一方時氏の兵士が每日逃亡するので、時氏は伯耆に歸つて行つた。その時時氏が曰ふのに「軍勢が我に從はない譯はよく分つてゐる」と。そこで直冬をさがし求めた。直冬は直義の死んだ後は長門に匿れて居つた。そんな譯で(將種の推戴の必要があつたので)時氏は直冬を守り立てることになつた。果して附き從ふ者が多かつた。足利高經・桃井直常なども皆來て好みを通じた。

【語釋】道譽(高氏落髮の後の稱。)○鹽津(近江)○垂水(美濃)○其由(人心が歸服しない譯。即ち家柄の大將を推戴しないから兵士が屬かなかつたのである。)

高經之克新田義貞也、得其二刀。尊氏欲取之。曰「源氏之寶也。宜傳之宗家。」高經靳之、紿曰「繆託於長崎道場、罹災矣。」取他刀二、燒而獻之。尊氏怒、擯斥高經。高經怨望、

終歸直冬。九年冬、直冬等並起、東攻京師。義詮與道譽出拒播磨。明年正月、直冬・時氏自丹波入。仁木賴章新爲執事、不敢要擊。尊氏奉駕走近江。六角氏賴・仁木義長等來援之。而細川賴之以四國兵入援。賴之、賴春子也。於是義詮陣于神南山。時氏・師義與楠氏兵還攻神南山。諸將拒戰大敗。師義視四日旗號曰「彼非道譽乎。」麾卒逼擊。赤松則祐侍義詮、呼騎兵助之、憑高馳下。師義被傷走。尊氏在叡山、聞神南之捷、進陣東山、遣義長・清氏與高經・直常戰。終攻直冬于東寺。義詮軍山崎、賴章軍嵐山、絕其糧道。直冬遂走界浦、卜戰于八幡廟。巫曰「神意不右抗父者。」諸將乃解去。尊氏迎駕歸京師。三上皇亦至自吉野。

【通釋】高經の新田義貞に克つや、其の二刀を得たり。尊氏、之を取らんと欲す。曰く「源氏の寶なり。宜しく之を宗家に傳ふべし」と。高經、之を靳み、紿いて曰く「嚮に長崎道場に託し、災に罹れり」と。他の刀二つを取り、饒いて之を獻ず。尊氏怒り、高經を擯斥す。高經、怨望し、終に直冬に歸せり。九年冬、直冬等並び起り、東京師を攻む。義詮、道譽と出でて播磨に拒ぐ。明年正月、直冬・時氏、丹波より入る。仁木賴章、新に執事となり、敢て要擊せず。尊氏、駕を奉じて近江に走る。六角氏賴、仁木義長等、來り之を援く。而して細川賴

之、四國の兵を以て入りて援く。賴之は賴春の子なり。是に於て、義詮・神南山に陣す。時氏、師義・楠氏の兵と、還つて神南山を攻む。諸將拒ぎ戰ひ、大に敗る。師義、四目の旗號を覩て曰く「彼は道譽に非ざるか」と。卒を麾いて逼り擊つ。赤松則祐、義詮に侍し、騎兵を呼び之を勗め、高きに憑り馳せ下る。師義傷を被りて走る。尊氏叡山に在り。神南の捷を聞き、進んで東山に陣し、義長・淸氏を遣はし、高經・直常と戰はしめ、終に直冬を東寺に攻む。義詮、山崎に軍し、賴章、嵐山に軍し、其の糧道を絕つ。直冬、遂に界浦に走り、戰を八幡廟に卜す。巫曰く、「神意、父に抗する者を右けず」と。諸將乃ち解き去る。尊氏、駕を迎へ、京師に歸り、三上皇も亦吉野より至る。

通釋 高經が新田義貞に克つたとき、義貞のさしてゐた鬼切・鬼丸の二口の刀を手に入れた。尊氏は之を取り上げようと思つた。そこで曰ふのに「それは源氏の寶物である。本家に傳へるべきものである」と。高經は之を惜しみ、欺いて曰ふには「此の間長崎の寺に預けて置いた所、火事に遇つて燒けました」と。外の刀二口を燒いて之を獻上した。尊氏はそれを怒つて、それからは高經を排斥した。高經は之を怨み、とうとう直冬に附いた。九年の冬、直冬等は共に兵を擧げ、東の方京都に攻め上つた。義詮は道譽と與に播磨に之を拒いだ。明年正月、直冬・時氏は丹波から攻め入つた。この時、仁木賴章は足利の執事に新たに就任したが、之を待ち受けて擊たうとしなかつた。尊氏は後光明天皇をおつれ申して近江に走つた。六角氏賴、仁木義長等が之を援けに來た。又細川賴之は四國の兵を率ゐて援けに來た。この賴之といふのは賴春の子である。そこで義詮は、神南山に陣取つた時氏・師義は楠氏の兵と一緒に京都から引きかへして、神南山に攻め寄せた。足利の諸將け拒ぎ戰つて、大に敗れた。師義は四ツ目の旗記しを見て曰ふのに「あれは道譽ではないか」と。士卒を指圖して詰め寄せて行つた。

この時、赤松則祐は義詮の傍に居たが、騎兵を呼んで之を激勵し、高き處から馳せ下つて敵を衝いた。師義は負傷して敗走した。尊氏は其の時叡山に居た。神南山で勝つたことを聞いて、進んで東山に陣取り、義長、清氏を遣はして高經・直常と戰はせ、終に直冬を東寺に攻めた。義詮は山崎に陣取り、賴章は嵐山に陣取り、直冬の軍の糧道を絕ち切つた。直冬は遂に界浦に逃げ、途中八幡宮で御鬮を引いて、戰爭の吉凶を卜つて見た。神主が曰ふには「神のお心では、父に反抗する不孝者はお助けにならない」と。そこで諸將は皆兵を解いて立ち去つた。尊氏は後光明天皇をお迎へして、京都に歸り、又三上皇も折から吉野より歸京なされた。

語釋 長崎道場（長崎は越前、道場は佛寺をいふ。）〇神南山（攝津）〇四目（□□□□）〇三上皇（光嚴、光明、崇光）

十三年四月、尊氏患癰薨。年五十四。北朝贈從一位左大臣、以義詮襲征夷大將軍、基氏爲左馬頭。官軍乘足利氏之喪、所在並起。鎭西探題一色直氏、爲菊池武光所敗。義詮遣細川繁氏代之。道病死。少貳賴尙・大友氏時、數擊武光。而新田義興謀襲鎌倉。基氏使畠山國清誘殺義興、親觀兵於入間河。關東大伏。

訓讀 十三年四月、尊氏、癰を患ひ薨ず。年五十四。北朝、從一位、左大臣を贈り、義詮を以て征夷大將軍を襲がしめ、基氏を左馬頭と爲す。官軍足利氏の喪に乘じ、所在並び起る。鎭西探題一色直氏、菊池武光の敗る所と爲る。義詮、細川繁氏を遣はし之に代らしむ。道に病死す。少貳賴尙・大友氏時、數と武光を擊つ。而して新田

義興、鎌倉を襲はんと謀る。基氏、畠山國清をして義興を誘殺せしめ、親ら兵を入間河に觀す。關東、大に伏す。

【通釋】十三年四月、尊氏は癰といふ腫物が出來て死んだ。年は五十四、北朝では從一位左大臣を贈られ、義詮に征夷大將軍の職を繼がせ、基氏を左馬頭とせられた。官軍は足利の不幸につけ込んで、諸方で一時に兵を起した。鎭西探題一色直氏は菊池武光に敗られた。義詮は細川繁氏を遣つて之に代らせた。併し赴任の途中で病死した。少貳頼尚・大友氏時は、度々武光を擊つた。又一方では新田義興が鎌倉を襲はうと企てゝゐた。基氏は畠山國清をして義興を誘ひ出して殺させ、親ら入間川で兵を並べて武威を示し耀やかした。關東の者共は恐れて大に服從した。

【語釋】誘殺（矢口渡のこと。新田記に詳である。）○觀レ兵（兵威を示す。）

國清說二基氏一曰、「故將軍捐レ世、天下疑二兩公之相忌一也。臣請得レ將レ兵南定二吉野一、以解二新將軍之意一。」基氏然レ之、發二八州兵一、附二國清一西上。十四年冬、國清入二京師一。明年正月、義詮率二諸將一出二軍尼崎一、國清進二軍筒山一、使二弟義深別攻二龍門一。敗跡。又使二弟義熙代攻一、拔レ之。赤松氏範約爲二內應一、不レ成來奔。諸將亦拔二三城一、遂攻二楠氏赤坂一、走レ之。楠氏奉レ帝匿二金剛山一。五月、義詮凱旋。

【通釋】國清、基氏に說いて曰く、「故將軍世を捐てゝ、天下兩公の相忌むを疑へり。臣請ふ、兵に將として南吉

野を定め、以て新將軍の意を解くを得ん」と。基氏之を然りとし、八州の兵を發し、國清に附し西上せしむ。十四年冬、國清、京師に入る。明年正月、義詮、諸將を率ゐて、出で、尼崎に軍し、國清進んで筒山に軍し、弟義深をして、別に龍門を攻めしむ。敗れ歸る。又弟義熙をして代り攻めしめ、之を拔く。赤松氏範、內應を爲さんと約して、成らずして來奔す。諸將も亦三城を拔き、遂に楠氏を赤坂に攻め、之を走らす。楠氏、帝を奉じ金剛山に匿る。五月、義詮、凱旋す。

通釋 國清は基氏に說いて曰ふには「故將軍尊氏公が死なれたので天下の者共はあなた方御兄弟が仲違ひをなしてゐられるのではないかと疑つてゐます。私は兵に將として南、吉野を平定し、そして義詮公の疑を解くやうにし度いものです」と。基氏も尤もだと思ひ、關東八州の兵を繰り出し、國清に與へて西に上らしめた。十四年の冬、國清は京都に入つた。明年正月、義詮は諸將を率ゐて、出で、尼崎に陣取り、國清は進んで筒山に陣取り、弟の義深をして、別に龍門を攻めさせた。負けて歸つて來た。又弟の義熙をして、代つて攻めさせ龍門を落した。赤松氏範は裏切る約束をしたのであつたが、成功しないで逃げ來つた。諸將も亦三城を攻め落し、更らに楠氏を赤坂に攻めて追ひ散らした。楠氏は後村上天皇を奉じて金剛山に匿れた。五月に義詮は凱旋した。

語釋 兩公（義詮、基氏。）○筒山（大和）○龍門（紀伊）○三城（平岩、矢尾、龍泉。）

國清之入京師、視仁木義長專橫、深嫉之、乃密謂諸將曰、是役、實圖義長也。彼日陣西宮、未嘗進戰、聞敗則喜、聞捷則憂。吾請從諸公誅姦臣。時細川清氏等素與義長

有隙、亦同之。七月、楠氏出兵攝津。國清・清氏卽赴之、議返擊義長。義長聞之、遣子弟拒諸路、而自以兵守義詮。佐佐木道譽夜潛自側門入、見義詮曰、「諸將所圖、而將軍右之何也。然諸將意亦不可測也。今臣與義長、議事於外。將軍以其間出逃西山。」義詮乃稱疾作、就寢。義長罷出。會道譽來。與語、至夜半。道譽去。義長入臥內白事。無答者。乃大索之、不得。其兵潰散。遂走歸伊勢。官軍乘弊並起。衆歸罪於國清。國清懼、東歸路經義長邑、僅免而歸。義長使弟義住與石堂賴房、陣葛木山。義詮令六角氏賴・土岐直氏擊降義住、遂討義長。義長遂降官軍。

【訓譯】國清の京師に入るや、仁木義長の專橫を視、深く之を嫉み、乃ち密に諸將に謂つて曰く、「是の役、實は義長を圖るなり。彼れ日に西宮に陣し、未だ嘗て進み戰はず。敗を聞けば則ち喜び、捷を聞けば則ち憂ふ。吾れ請ふ、諸公に從つて姦臣を誅せん」と。時に細川清氏等、素より義長と隙あり、亦之に同ず。七月、楠氏、兵を攝津に出す。國清、清氏、卽ち之に赴き、義長を返り擊たんと議す。義長之を聞き、子弟を遣はし諸路を拒がしめ、而して自ら兵を以て義詮を守る。佐佐木道譽、夜、潛に側門より入り、義詮に見えて曰く、「諸將の圖る所にして、將軍、之を右くるは、何ぞや。然れども諸將の意も亦測るべからざるなり。今臣、義長と事を外に議せん。將軍、其の間を以て、出でゝ西山に逃れよ」と。義詮乃ち疾作ると稱し、寢に就く。義長罷め出づ。會ゝ道譽來

る。與に語り、夜半に至る。道譽去る。義長、臥内に入り事を白す。答ふる者なし。乃ち大に之を索むれども得ず。其の兵潰散す。遂に走り伊勢に歸る。官軍、弊に乘じて竝び起る。衆、罪を國清に歸す。國清懼れて、東歸す。路に義長の邑を經、僅に免れて歸れり。義長、弟義住と石堂賴房とをして、葛木山に陣せしむ。義詮、六角氏賴、土岐直氏をして、擊つて義住を降さしめ、遂に義長を討ず。義長、遂に官軍に降る。

【通釋】國清が京都に入つてから、仁木義長の專橫な有樣を見て深く之を惡み、そこで内々諸將に向つて曰ふには「今度の戰爭は實は義長を殺すためなのである。彼はさきに西宮に陣し、一度として進み戰はうとしなかつた味方の敗軍を聞けば喜び、勝つたと聞けば心配した。余はどうかして諸君に從つてこの姦臣を誅したいものだ」と。當時、細川清氏等は前から義長と仲が惡かつたので、矢張り此の謀に贊成した。七月、楠氏は兵を攝津に出した。國清、清氏は直ちに之にかけつけたが、義長を返り擊つことを相談した。義長はこれを聞いて若い者を遣はして、方々の路を拒がしめ、そして、自分は兵を率ゐて義詮を守護した。佐佐木道譽は夜、こつそり小門から入つて義詮に會つて曰ふのに「諸將が謀つて殺さうとするものを、貴方が助けられるとは何事でありますか。しかし諸將の心もどんな考へを持つてゐるかわかりません。今私は義長と外で相談事を致します。貴方はその間にこゝから出て、西山にお逃げなさい」と。そこで義詮は病氣が起つたといつて寢床に就いた。義長は其處から罷めて出て行つた。丁度道譽がそこへやつて來た。義長は之と話してゐる内に夜中になつた。道譽は歸つて行つた。義長は義詮の寢所に入つて、事を報告した。返事をするものもなかつた。そこで大にさがして見たが見當らなかつた。義長の兵は將軍が居なくなつたことを知つて潰え散つた。義長は遂に走つて、伊勢に歸つた。官軍は此の破綻に付け込んで再び起つた。そこで軍衆は國清が惡いからこんなことになつたとて罪を國清に歸した。國

清は懼れて東に歸つて行つた。途中義長の領地を通り危なかつたがやつと免れて鎌倉に歸つた。義長は弟の義住をして石堂賴房と與に葛木山に陣取らせた。義詮は六角氏賴、土岐直氏をして、擊つて義住を降參させ、それから續いて義長を征伐した。義長はとう〳〵官軍に降參した。

語釋　日（往日の意。）〇葛木山（近江）

十六年、山名氏遙應義長、攻取美作、楠氏攻取攝津、殺佐佐木秀詮。秀詮道譽孫也。初赤松範資爲攝津守護、傳之子光範。道譽譖而奪之、又欲奪加賀於富樫氏、予之於其婿斯波氏。因細川清氏廷爭之、乃止。清氏和氏子也。時爲執事。赤松則祐亦娶道譽女。清氏欲得則祐管內一邑、以賞其戰士。道譽不許。清氏嘗設宴、請義詮。道譽更爲高會請焉。義詮顧如佐佐木氏。以故兩家相惡。清氏冠其子于八幡祠、命名八幡。源氏故事也。義詮猜之。

訓讀　十六年、山名氏、遙に義長に應じ、攻めて美作を取り、楠氏、攻めて攝津を取り、佐佐木秀詮を殺す。秀詮は、道譽の孫なり。初め赤松範資、攝津の守護となり、之を子光範に傳ふ。道譽、譖して之を奪ひ、又加賀を富樫氏より奪ひ、之を其の婿斯波氏に予へんと欲す。細川清氏、之を廷爭せしに因つて、乃ち止む。清氏は、

和氏の子なり。時に執事たり。赤松則祐も亦、道譽の女を娶れり。清氏、則祐の管内の一邑を得、以て其の戰士に賞せんと欲す。道譽許さず。清氏嘗て宴を設け、義詮を請ず。道譽、更に高會を爲して請ず。義詮、顧つて佐佐木氏に如く。故を以て、兩家相惡し。清氏、其の子を八幡祠に冠し、名を八幡と命ず。源氏の故事なり。義詮、之を猜む。

【通釋】十六年、山名氏は遂に義長に味方して美作を攻め取り、楠氏は攝津を攻め取り、佐々木秀詮を殺した。秀詮は道譽の孫である。はじめ赤松範資は攝津の守護となつたが、その職を其の子光範に傳へた。道譽は讒言してその職を奪ひ、又加賀の富樫氏よりもその守護職を取り上げ、之を其の婿の斯波氏に與へようと思つた。細川清氏が集會の席上でそれはいけないと言ひ爭つたのでやつと止めになつた。この清氏は和氏の子である。當時執事であつた。赤松則祐も亦道譽の娘を嫁にしてゐた。清氏は則祐の地内の一邑を貰つて部下の戰士に賞として與へようと思つた。道譽は許さなかつた。清氏はある時、宴會を設けて義詮を迎へることにした。所が道譽は同じ日にもつと盛大な饗宴を設けて義詮を迎へた。義詮は清氏の所へ行く可きを反つて佐々木の方へ往つた。こんな事から佐々木、細川の兩家は仲違ひになつた。清氏は其の子を八幡宮で元服させ、名を八幡とつけた。これは源氏の先例に從つたのである。義詮は自分の家を乘り取る心ではないかとこれをそねみ憎んだ。

【語釋】山名氏（時氏）（富樫氏）（高家が死んで其の子が幼かつたので奪らうとしたのである。）（八幡祠）（男山）

會、有僧善禱者。自鎌倉來、一日、造佐佐木氏、從容語次、及清氏託願書之事。道譽索觀其書、不復返、與明日、袖適伊勢氏、請上義詮。伊勢足利氏之司傳宣者也。伊勢觀

其書呪義詮・基氏而自代之也。伊勢心疑之、未上也。義詮偶有疾。道譽入而視之。問曰、「見清氏書邪」。義詮曰、「未也」。召伊勢而上之。義詮因檢八幡祠、又得清氏願書。與前書同。於是陰謀誅之。後數日、清氏詣天龍寺、多率甲士。義詮以爲謀泄、夜遽走新熊野、撤橋而守。清氏大驚、使人訴其寃、不答。乃歸其邑若狹、留弟將氏、以明無異志。不聽。十月、義詮遣兵討清氏。清氏南走、因石堂頼房降官軍。

訓讀 會〻僧の善く禱るもの有り。鎌倉より來り、一日、佐佐木氏に造り、從容として、語次、清氏、願書を託するの事に及ぶ。道譽、其の書を索觀し、復返し與へず。明日、袖にして伊勢氏に適き、義詮に上らんと請ふ。伊勢は、足利氏の傳宣を司る者なり。伊勢、其の書を視るに、義詮、基氏を呪して自ら之に代らんとするなり。伊勢心に之を疑ひ、未だ上らず。義詮偶〻疾あり、道譽入りて之を視る。問うて曰く、「清氏の書を見たるか」と。義詮曰く、「未だし」と。伊勢を召して之を上らしむ。義詮、因つて八幡祠を檢し、又清氏の願書を得たり。前書と同じ。是に於て、陰に之を誅せんと謀る。後數日、清氏、天龍寺に詣で、多く甲士を率ゆ。義詮以て謀泄ると爲し、夜、遽に新熊野に走り橋を撤して守る。清氏、大に驚き、人をして其の寃を訴へしむ。答へず。乃ち其の邑若狹に歸り、弟將氏を留め、以て異志なきを明にす。聽かず。十月、義詮兵を遣はし清氏を討つ。清氏南走し、石堂頼房に因つて官軍に降る。

【[illegible]】丁度この時、祈禱の上手な坊主で志一といふ者がゐた。鎌倉から來て、ある日、佐々木氏を訪ね、ゆる／＼と話してゐたが、其の序に清氏が祈禱の願文をあづけた事に話が及んだ。道譽はその願文を借して貰つて見て、返さうともしなかつた。その翌日、其の願文を袂に入れて伊勢貞行の所に往き、之を義詮に差上るやうに賴み込んだ。伊勢氏は足利將軍へ取次ぐことを司る役人であつた。貞行は其の願文を見ると義詮・基氏を祈り殺して、清氏自身之に代つて將軍になりたいといふことが認めてあつたのである。貞行はよもやそんなことはあるまい、これは清氏を陷れる計略と思つて疑ひ、おいそれと義詮に此の書を上らなかつた。義詮はふと病氣になつた。道譽は入りて之を見舞つた。そして之に問うて曰ふには、「清氏の願文を御覽になりましたか」と。義詮が曰ふには「まだだ」と。貞行を召して之を上らせた。そこで義詮は八幡宮を調べさせた所、矢張り清氏の願文を手に入れることが出來た。較べて見ると前の願文と同じであつた。そこで、こつそり之を誅しようと謀つた。後五六日たつて清氏は天龍寺に參詣したが、その時、鎧武者を多勢つれて往つた。義詮はさては謀が泄れたのではないかと思ひ夜、急に新熊野へ逃げ、橋を切り外して守つた。清氏は非常に驚き、人をやつて無實を申立てさせた。それには義詮は答へなかつた。そこで清氏は自分の領地の若狹へ歸り、弟の將氏を殘し置き叛心のないことを明かにした。併し義詮は承知しなかつた。十月、義詮は兵を遣はして清氏を討たしめた。清氏は南に逃げ石堂賴房にたよつて、官軍に降參した。

【[illegible]】新熊野（京都の東。）

畠山國清亦叛。基氏國清之西也、關東將士多亡歸者。國清盡收其邑。將士連署、訴

之基氏。基氏誚國清。國清懼走伊豆、弟義深走信濃、並起兵應官軍。清氏奏「足利氏兵、東拒義長、西拒時氏。臣請乘其虛、克復京師。」詔許之。十二月、清氏・賴房等北上。諸將不敢邀擊。義詮與道譽挾北帝、走近江。義詮子春王猶幼。爲從者所抱、走南禪寺。僧良芳匿之衣被中、送致赤松則祐。則祐奉之白旗城、而引兵入援。遣弟氏範襲行宮。姬範實與足利高經等、從義詮於近江。凡一萬餘騎、而無附清氏者。十七年正月、清氏遁去。義詮乃歸京師。初道譽將走。洒掃其第、大壺貯酒、留二僧、誡曰「來者犒之。」已而楠正儀來。僧迎犒之。清氏欲毀其第。正儀不肯。留鎧刀、謝而去。時人稱「道譽老手、博得正儀鎧刀。」傳以爲笑。

訓讀　畠山國清も亦基氏に叛く。國清の西するや、關東の將士、亡げ歸る者多し。國清盡く其の邑を收む。將士、連署し、之を基氏に訴ふ。基氏、國清を誚む。國清懼れ、伊豆に走り、弟義深、信濃に走り、並に兵を起して官軍に應ず。清氏奏すらく、「足利氏の兵、東に義長を拒ぎ、西に時氏を拒ぐ。臣請ふ、其の虛に乘じて京師を克復せん」と。詔して之を許す。十二月、清氏・賴房等、北上す。諸將敢て邀へ擊たず。義詮、道譽と北帝を挾みて、近江に走る。義詮の子春王、猶ほ幼なり。從者の抱く所と爲り、南禪寺に走る。僧良芳、之を衣被中

に陷し、赤松則祐に送致す。則祐之を白旗城に奉じ、而して兵を引いて入援く。弟氏範を遣はし、行宮を衞はしむ。姪範實、足利高經等と、義詮に近江に從ふ。凡て一萬餘騎、而して清氏に附く者なし。十七年正月、清氏遁れ去る。義詮乃ち京師に歸る。初め道譽將に走らんとす。其の第を酒掃し、大壺に酒を貯へ、二僧を留め誡めて曰く、「來る者に之を犒へ」と。已にして楠正儀來る。僧迎へ之を犒ふ。清氏其の第を燬たんと欲す。正儀肯んぜず。鎧刀を留め謝して去る。時人稱す、「道譽の老手、正儀の鎧刀を博得す」と。傳へ以て笑ひと爲す。

〔譯〕畠山國清も亦基氏に叛いた。前に國清が（南朝を亡ぼすとて）西上した時、關東の將士は逃げて歸つたものが多かつた。國清は皆その者等の領地を取り上げた。そこで將士等は名を書き連ねて之を基氏に訴へた。基氏は國清を責め叱つた。國清は懼れて、伊豆に走り、弟の義深は信濃に走り、何れも兵を擧げて官軍に味方した。清氏は南朝の天皇に奏上して「足利氏の兵は東に義長を拒ぎ、西は時氏を拒いで居ります。私は其の空虛の所に付け込み、京都を取り戻しませう」といつた。詔して之を許された。十二月、清氏、頼房は北上した。足利の諸將は押して之を遮へ擊つこともしなかつた。義詮は道譽と一緒に北朝の天皇をおつれ申して、近江に逃げた。義詮の子の春王はまだ幼なかつた。從者に抱かれて、南禪寺に逃げた。僧の良芳といふ者が之を夜具の中にかくし、其の後赤松則祐の所に送り屆けた。則祐は白旗城にて之を守り立て、そして兵をつれて京都を援けた。別に弟氏範を遣はして、吉野の假御所を衞はせた。又姪の範實は足利高經等と義詮に從つて近江に往つた。その兵は全部で一萬餘騎、そして清氏に屬くものとてはなかつた。十七年正月に清氏は逃げ去つた。そこで義詮は京都にかへつた。はじめ道譽は義詮に供をして近江に走らうとした。その時自分の屋敷を掃除し又水を打ち、大きな壺に酒を入れ、二人の僧を留め置いて注意して曰ふには「もし來たものがあつたら、この酒でねぎらつてやれ」と。

その内に楠正儀がやつて來た。僧は之を迎へて御馳走した。清氏はその屋敷を壞さうと思つた。正儀は承知しなかつた。正儀は鎧と太刀を殘し禮をいつて立ち去つた。當時の人は言つた、「道譽の老功な手段で、正儀の鎧と太刀とを巧くせしめたものだ」と。そのやうに言ひ傳へて笑ひ話にした。

語釋 春王（後の義滿。）○博得（酒を賭けて鎧刀を得る。）

清氏走讃岐、圖再擧。山名師義出兵爲援。義詮令細川頼之擊清氏、今川貞世擊師義。師義糧盡而走。清氏與弟氏春等、據白峰、官軍將中院氏、據西長尾。遠近競起、應之。頼之方在備中。七月、航歸歌津、先遣其母、說清氏曰「公蒙讒而逃。僕亮其心。雖然、自棄舊勳、割離親戚。公亦何忍也。今苟改圖、則聽公自新、邑土如故。僕爲公保之」清氏問答累日。中國兵追附頼之、城壘全成。乃絕清氏、召其將新開直行曰「彼主我客、客利速戰。汝向長尾、使彼分兵、而潛歸與吾夾攻清氏」清氏慓悍、獨身輕出。一戰可擒。直行乃以兵五百行、縱火向長尾。

訓讀 清氏、讃岐に走り、再擧を圖る。山名師義、兵を出して援を爲す。義詮、細川頼之をして、清氏を擊ち今川貞世をして、師義を擊たしむ。師義糧盡きて走る。清氏、弟氏春等と、白峰に據り、官軍の將中院氏、西長

尾に據る。遠近競ひ起り之に應ず。賴之、方に備中に在り。七月、航して歌津に歸り、先づ其の母を遣はし、清氏に說かしめて曰く、「公、讒を蒙りて逃る。僕、其の心を亮とす。然りと雖も、自ら舊勳を棄て、親戚を割離す公亦何ぞ忍ぶや。今、苟も圖を改めば、則ち公の自新を聽され、邑土、故の如くならん。僕、公の爲めに之を保す」と。清氏、問答、日を累ぬ。中國の兵追つて賴之に附き、城壘全く成る。乃ち清氏と絕ち、其の將新開直行を召して曰く、「彼は主、我は客、客は速戰に利あり。汝、長尾に向ひ、彼をして兵を分たしめ、而して潛に歸りて吾と清氏を夾攻せよ。清氏慓悍、獨身輕出せん。一戰、擒にすべし」と。直行、乃ち兵五百を以て、行くゆく火を縱ち長尾に向ふ。

【口語譯】清氏は讃岐に逃げ、再び旗揚げをしようと圖つた。山名師義は兵を繰り出して、應援した。義詮は細川賴之をして清氏を撃たせ、今川貞世をして師義を撃たせた。師義は兵糧が無くなつて逃げた。清氏は弟の氏春等と白峰に立て籠り、官軍の大將中院定忠は西長尾に立て籠つた。遠近の者競ひ起つて、之に味方をした。その時、賴之は備中に居た。七月船で歌津にかへり、先づ其の母親を遣つて、清氏に說かせて曰ふには「貴公は讒言を蒙つて逃げられました。私は其の心持を善く知つて居ります。しかし乍らこれまでの手柄を自分から棄て、終ひ、又親類と緣を切つて、そのやうに別れておいでになる。貴公はよくも我慢が出來ることでは御座います。今假りに思案をかへられるならば貴公の改心を認められて領土も以前の通りにして貰へるでせう。私が貴公の爲めに乾度此の點は保證します」と。清氏はそんなことでとや角と問答して日を過してゐた。中國の兵も追々跡を追つかけて賴之に附き從ひ、城の壘も全く出來上つた。そこで賴之は清氏と手を切り、その將新開直行を召して曰ふには「清氏は守り手、我は攻め手である。攻め手は速く戰つた方が都合が善いのだ。汝は長尾に向ひ、清

氏をしてその方へ兵を分けるやうにさせて、それが出來たらそつと歸つて來て、吾と連合して清氏を夾み討ちにしよう。さうすれば、清氏は氣が短い男だから、獨り身で輕々しく討つて出ることであらう。一戰で以て彼を擒にすることが出來る」と。そこで直行は言ひつけ通りに兵五百をつれ、途中火を放け乍ら長尾に向つた。

〔語釋〕白峯（讃岐）〇西長尾・歌津（讃岐）

清氏曰「長尾陷、則敵出我背。不可不救」遣氏春以千餘騎赴救。直行射戰至暮、列炬而潛還、黎明、與賴之攻白峰、呼譟挑戰。清氏輕甲馳出。馬負箭殪、與兩騎搏而死。氏春覺直行去、追之。途望白峰、皆賴之旗幟矣。乃走和泉長尾不攻而陷、四國盡定。而國清・義深・又降於基氏。基氏將誅之。國清西走、降官軍。不許。終餓死。義深脫走、後降義詮。於是、降者相踵。大內弘世久屬官軍、略取周防・長門。乃擧二國來降。十九年、山名時氏・仁木義長・石堂賴房・吉良滿貞等皆降。義詮皆宥其罪。

〔通釋〕清氏曰く、「長尾陷らば、卽ち敵は我が背に出でん。救はざるべからず」と。氏春を遣はし、千餘騎を以て赴き救はしむ。直行、射戰して暮に至り、炬を列ねて潛に還り、黎明、賴之と白峰を攻め、呼譟して戰を挑む。清氏、輕甲にて馳せ出づ。馬、箭を負ひて殪れ、兩騎と搏して死す。氏春、直行の去るを覺り、之を追ふ。

途に白峰を望めば、皆頼之の旗幟なり。乃ち和泉に走る。長尾攻めずして陥り、四國盡く定る。而して國清・義深、又基氏に降る。基氏、將に之を誅せんとす。國清西走し、官軍に降る。許されず。終に餓死す。義深、脱走し、後、義詮に降る。是に於て、降者相踵ぐ。大内弘世、久しく官軍に屬し、周防・長門を略取す。乃ち、國を擧げて來り降る。十九年、山名時氏、仁木義長、石堂頼房、吉良滿貞等、皆降る。義詮、皆其の罪を宥す。

【通釋】清氏が曰ふのに「長尾が陥落すると敵は味方の後へ廻つて出るであらう。だから極力長尾を救はなければならぬ」と。氏春を遣り千餘騎を率ゐて長尾を援けに行かせた。直行は日暮まで矢いくさをなして、如何にも軍勢の居るやうに松明だけをつけて置いてこつそり還り、夜明けに頼之とともに白峰を攻め、大聲に鬨を作てゝ戰を仕掛けた。清氏は輕い鎧を着けて驅け出た。所が馬が矢に中つて倒れ、敵の二騎と組討をして討死した。氏春は直行が援兵を置いて去つたことを覺つて後を追ひかけた。途中で白峰を望むと皆頼之の旗や幟ばかりであつた。そこで、和泉に逃げ走つた。斯くて長尾は攻めないで陥落し、四國は皆平定して終つた。そして國清・義深も亦基氏に降參した。基氏は二人を殺さうとした。それ故、國清は西に逃げて官軍に降參した。併し許されなかつた。とうとう餓死した。義深は脱走して後に義詮に降參した。こゝに於て降參する者が次ぎ次ぎと相繼いだ。大内弘世は長い間官軍に從ひ周防・長門を攻め取つてゐた。これも二ケ國を擧げて降參して來た。十九年、山名時氏・仁木義長・石堂頼房・吉良滿貞なども皆降參した。義詮は皆其れ等の罪を赦してやつた。

【語釋】兩騎（[illegible]）

基氏亦思上杉憲顯之育己也、招之信濃、授以越後守護、逐舊守護清禪可、禪可拒

憲顯。不克、走下野。已而基氏召憲顯於鎌倉。禪可又要擊之。基氏怒、自將討之、大戰于苦林、破之。禪可遁走。乃以憲顯執事、以代畠山國淸。

【訓讀】基氏も亦、上杉憲顯の己を育てたるを思ふや、之を信濃より招き、授くるに越後の守護を以てし、舊の守護淸禪可を逭ふ。禪可、憲顯を拒ぐ。克たずして、下野に走る。已にして基氏、憲顯を鎌倉に召す。禪可、又之を要擊す。基氏怒り、自ら將として之を討ち、大に苦林に戰ひ、之を破る。禪可遁れ走る。乃ち憲顯を以て執事とし、以て畠山國淸に代ふ。

【通釋】基氏は、亦上杉憲顯が自分を育てゝ呉れたことを思ひ、信濃へ逃げてゐたのを呼び戻し、越後の守護職を授け與へ、もとの守護淸禪可を追ひ拂つた。禪可は憲顯を拒んで入れなかつた。併し結局敗けて下野に逃げた。其の內基氏は憲顯を鎌倉に呼び寄せた。禪可は又之を途中で待ち受けて攻擊した。基氏は怒つて自ら大將となつて之を討ち、大に苦林で戰つて之を破つた。禪可は逃げ走つた。そこで憲顯を執事となし、畠山國淸と更代させた。

【語釋】苦林（武藏）

細川淸氏之敗、衆推斯波氏因代執事焉。氏因、高經之子、道譽之婿也。高經短氏因、薦後妻之子義將執事、而己決之。高經及覩北條氏之盛時、衆期其治平。已而所爲、多失人望。

初、尊氏・直義賦文武邑入五十分一、充軍興費。高經倍之、如建武故事。衆怨之。義詮造坊門第、課諸將助工。赤松則祐功緩。高經罰奪其邑一所。造五條橋、道譽董役、徵京師戸租。久而不成。高經捐私金立成之。後高經宴諸將於幕府、道譽乃託事不會。而私張伎樂于大原。高經啣之。會道譽不納賦二歳。因奪其攝津守護。道譽終與則祐等共譖高經。義詮卽密徵兵備之。高經入見訴冤。義詮慰解、遣歸越前。二十一年十月、遣山名時氏・畠山義深等攻高經父子。二十二年七月、高經病死。義將降。高經既死、義詮欲以道譽執事。基氏薦細川頼之代之、更稱執事曰管領。

【通釋】細川清氏の敗るゝや、衆、斯波氏因を推して、代つて執事たらしむ。氏因は高經の子、道譽の婿なり。高經、氏因を短とし、後妻の子義將を薦めて執事とし、而して己之を決す。高經、北條氏の盛時を視るに及べり。衆、其の治平を期す。已にして爲す所多く人望を失ふ。初め尊氏・直義、文武の邑入五十分の一を賦し、軍興の費に充つ。高經、之を倍して、建武の故事の如くす。衆、之を怨む。義詮、坊門の第を造り、諸將に課して工を助けしむ。赤松則祐、功緩なり。高經、罰して其の邑一所を奪ふ。五條橋を造るとき、道譽役を董し、京師の戸租を徵す。久しうして成らず。高經、私金を捐てゝ立どころに之を成す。後、高經、諸將を幕府に宴す。道譽乃ち事に託して會せず。而して私に伎樂を大原に張る。高經、之を啣む。會ゝ道譽、賦を納れざること二歳。因

つて其の攝津の守護を奪ふ。道譽、終に則祐等と共に高經を譖る。義詮、卽ち密に兵を徵して之に備ふ。高經、入つて見え、寃を訴ふ。義詮、慰解し、越前に遣歸す。二十一年十月、山名時氏・畠山義深等を遣はし、高經父子を攻めしむ。二十二年七月、高經、病死し、義將降る。高經、既に死す。義詮、道譽を以て執事となさんと欲す。基氏、細川賴之を薦めて之に代へ、執事を更め稱して管領と曰ふ。

通釋 細川清氏が敗けた時に足利の家來衆は皆斯波氏因を推薦して代つて執事とならしめた。氏因は足利高經の子で道譽の婿である。所が高經は氏因の短所を言ひ立て、後妻の子の義將を推薦して執事となし、而して萬事の處分は自分で取り裁いてゐた。高經は若い頃北條氏の盛なことを見て知つてゐた。皆々は彼が善く天下を治め平かにすることを期待してゐた。其の內に高經のやることが期待に反し、非常に人望を失つて終つた。はじめ尊氏・直義の頃には公卿・武家の領地の上り高の五十分の一を取り立て、戰爭その他軍事の費用に充てゝゐた。それを高經はその二倍も取り立て、建武の頃のやうな遣り方をした。皆は之を怨んだ。義詮が坊門(姉小路の屋敷)の屋敷を造るときに諸將に割り振つて工事を手傳はせた。赤松則祐はその工事に手間取つた。高經は罪としてその領地一個所を取り上げた。又五條橋を造るとき、道譽が普請の奉行となり、其の費用を得るため、京都の戶別割を取り立てた。大分長い間かゝつたが出來なかつた。高經は手元の金を出して卽座に出來上らせた。その後高經は諸將を幕府に呼んで御馳走をした。道譽は用事に事よせて來會しなかつた。そして私に女樂を大原で盛んに行つた。高經はこの事を胸に含んで道譽を怨んで居た。折しも道譽は租稅を收めないこと二年にもなつてゐた。そこで罰として道譽の攝津守護職を取り上げた。道譽は終に則祐等と一緒になつて高經を讒言した。義詮は早速ひそかに兵士を徵集して亂に備へた。高經は入つて義詮に會ひ無實を訴へた。義詮は慰めて越前にやり歸した。

二十一年十月、山名時氏・畠山義深等を派遣して高經親子を攻めさせた。二十二年七月、高經は病死し、子の義將は降參した。高經はもう早や死んで終つた。義詮は道譽をば執事としようと思つた。基氏は細川賴之を推薦して之に代へ執事の稱號を改めて管領といふことになつた。

【語釋】建武故事（建武元年、諸國の地頭の歲入二十分の一を徵發した。）○私金（私有の金。）○大原（京都の東。）

十二月、義詮有疾。使幼子春王監政。是爲義滿。義詮遂薨。義詮、官至正二位大納言。是歲夏、基氏亦病卒。基氏、官至從三位左兵衛督。基氏材武。爲義詮鎭關東。使不失尊氏舊業。時論惜之。其子金王嗣立。是爲氏滿。

【讀方】十二月、義詮、疾有り。幼子春王をして政を監せしむ。是を義滿と爲す。義詮、遂に薨ず。義詮、官正二位、大納言に至る。是の歲夏、基氏も亦病んで卒す。基氏、官、從三位左兵衛督に至る。基氏、材武あり。義詮の爲めに關東を鎭め、尊氏の舊業を失はざらしむ。時論、之を惜む。其の子金王、嗣いで立つ。是を氏滿と爲す。

【通釋】十二月、義詮は病氣に罹つた。幼子春王をして政治を監督させた。これが義滿である。かくて義詮はとうとう死んだ。義詮は官、正二位大納言まで昇つた。この年の夏、基氏も亦病氣で死んだ。基氏は官、從三位左兵衛督に至つた。基氏は材能武術に勝れてゐた。義詮の爲めに關東を鎭め、尊氏のやつた事業を失はない樣にした。基氏が死んだので當時の人々は皆之を惜んだ。その子の金王が嗣いで立つた。これが氏滿である。

義滿立。甫十歲。細川頼之爲管領焉。初義詮臨終、撫義滿、謂頼之曰、「予汝一子。」又指頼之、謂義滿曰、「予汝一父。」頼之既以遺託輔幼主。内外望治。乃擇方正之士、文武備具者、侍其左右、又擇滑稽者數人、削髮、穿大袴、佩長刀、大鞶、目以童坊、出入府中、爲將士弄客。將士中有便佞者、頼之輒使其所善衆呼之、曰有髮童坊、以斬辱之、更相懲戒。士風大革。頼之又作五箴、授將士曰、「毋偏愛憎。毋修恩仇。毋枉是非。毋僥倖。毋私隱。」又使今川・小笠原・伊勢三氏草將府禮式。檢尊氏・義詮所下文書、其出於高氏・佐佐木氏宣達者、漸收奪之。世稱、基氏善知人、義詮善任人云。基氏臨終、亦託氏滿於上杉憲顯曰、「謹奉京師約束、莫或倍畔。」氏滿少於義滿一歲。憲顯盡心輔翼、關東倚安焉。

訓讀 義滿立つ。甫めて十歲なり。細川頼之管領と爲る。初め義詮、終に臨み、義滿を撫して、頼之に謂って曰く、「汝に一子を予ふ」と。又頼之を指し、義滿に謂って曰く、「汝に一父を予ふ」と。頼之、既に遺託を以て幼主を輔く。内外、治を望めり。乃ち方正の士、文武備具する者を擇んで、其の左右に侍せしめ、又滑稽者數人を擇び、髮を削り、大袴を穿ち、長刀を佩び、大鞶せしめ、目するに童坊を以てし、府中に出入せしめ、將士の弄

客となす。將士の中に便佞者あれば、頼之輒ち其の善くする所の衆をして之を呼ばしめて、有髮童坊と曰ひ、以て之を靳辱し、更ゝ相懲戒す。士風大に革る。頼之、又五箴を作り、將士に授けて曰く、「愛憎に偏する毋れ。恩仇を修むる毋れ。是非を狂ぐる毋れ。僥倖する毋れ。私慝する毋れ」と。又今川・小笠原・伊勢の三氏をして將府の禮式を草せしむ。尊氏・義詮の下す所の文書を檢し、其の高氏佐佐木氏の言達に出づる者は、漸く收めて之を燬ふ。世、基氏、善く人を知り、義詮、善く人を任ずと稱せりといふ。基氏、終に臨み、亦氏滿を上杉憲顯に託して曰く、「謹んで京師の約束を奉じ、或は倍畔する莫れ」と。氏滿、義滿より少きこと一歳なり、憲顯、心を盡して輔翼し、關東、倚安せり。

[通釋] 義滿が次いで立つた。やつと十歳であつた。細川頼之が管領となつた。はじめ義詮は死める時に義滿の背を撫で、頼之に向つて言ふには「そなたに一子を與へるぞ」と。又頼之を指し乍ら義滿に向ひ言ふには「そなたに一人の父を與へるぞ」と。頼之はすでに遺言で依託され、幼主をたすけることゝなつた。内外の者は皆太平の治を望んで居た。そこで頼之は品行方正の侍で文武備はれるものを擇んで義滿の左右に侍らしめ、又おどける御機嫌取り數人を擇び、髮をそらせて大きな袴をはき、長い刀をさし、大きな頭巾を冠り、童坊と名づけて、幕府に出入りさせ、將士の玩弄物となした。將士の中に口さきの巧い者が居ると、頼之はその將士と心安い者どもに言ひつけ、多勢で「髮のある童坊」と曰はせて之を辱かしめ、互ひに懲らし戒めた。それがため士風は大に革まつた。頼之は五個條の訓戒の辭を作つて、將士に授けて曰ふのに、「愛憎に片よつてはならぬ。恩仇に報いてはならぬ。是を非とし、非を是として枉げてはならぬ。僥倖を欲してはならぬ。惡事をしたものを愿すやうな事があつてはならぬ」と。又今川貞世・小笠原長秀・伊勢滿貞の三人をして將軍府の禮式を作らせた。尊氏・義詮の

下した文書を取りしらべ、その中で高師直・佐々木道譽が取扱つたものは不始末があるので、それ等はだんだんに之を取り上げさせた。（賴之は基氏の推薦で執權となり、又義詮は其の子を託したので）世人は基氏は善く人物を知り、義詮は善く人を任じたものだといつた。基氏も死ぬ時にやはり氏滿を上杉憲顯に託して曰ふには「謹んで室町の規則を遵奉し、之に背くやうな事があつてはならぬ」と。氏滿は義滿より一歲若かつた。憲顯は心を盡して、之を助け、それが爲めに關東一帶は、たよりにして安心してゐた。

語釋 童坊（子供坊主の意。）〇修恩仇（修は治、恩のあるものを護り仇を報いること。）

二十三年、義滿冠。賴之爲賓焉。義滿遂襲征夷大將軍。是歲、上杉憲顯病卒。義子能憲代爲執事。先是有平一揆者、叛據河越。憲顯奉氏滿討滅之。宇都宮氏叛。又擊平之。及能憲代執事、新田義宗等起兵。能憲與弟憲春、擊獲義宗。

訓讀 二十三年、義滿冠す。賴之、賓と爲る。義滿、遂に征夷大將軍を襲ぐ。是の歲、上杉憲顯病んで卒す。義子能憲、代つて執事と爲る。是より先き、平一揆といふ者あり、叛いて河越に據る。憲顯、氏滿を奉じ之を討滅す。宇都宮氏叛く。又擊つて之を平ぐ。能憲代つて執事たるに及び、新田義宗等、兵を起す。能憲、弟憲春と、擊つて義宗を獲たり。

通釋 二十三年、義滿は元服した。賴之が烏帽子親となつた。義滿は遂に征夷大將軍職を繼いだ。この年上杉憲顯は病氣で死んだ。養子の能憲が代つて執事となつた。これより先き平一揆といふものがあつて、叛いて河越

に立て籠つた。憲顯は氏滿を守り立て、之を討ち滅した。又宇都宮氏が叛いた。又之を擊つて平げた。能憲が代つて執事となるに及んで、新田義宗等が兵を起した。能憲は弟の憲春とともに討つて義宗を殺した。

建德二年、菊池武敏、起兵肥後、賴之以今川貞世爲鎭西探題、令大內義弘助焉、以備之。又命弟賴元、助南朝降將、以攻吉野。文中元年、北朝太子受禪、是爲後圓融帝。二年、遣細川氏春攻吉野、獲藤原隆俊。是歲、直冬自石見來降。義滿起第于室町、稱花御所、造四足門。天授四年、徙居焉。

【讀方】建德二年、菊池武敏、兵を肥後に起す。賴之、今川貞世を以て鎭西探題と爲し、大內義弘をして助けしめ、以て之に備ふ。又弟賴元に命じ、南朝の降將を助け、以て吉野を攻めしむ。文中元年、北朝の太子、禪を受く、是を後圓融帝と爲す。二年、細川氏春を遣はし、吉野を攻めしめ、藤原隆俊を獲たり。是の歲、直冬、石見より來り降る。義滿、第を室町に起し、花御所と稱し、四足門を造る。天授四年、徙り居る。

【通釋】建德二年、菊池武敏が兵を肥後に起した。賴之は今川貞世を鎭西探題となし、大內義弘をして之を助けさせ、之に備へた。又弟の賴元に命じて南朝から降參して來た大將を助けて、吉野を攻めさせた。文中元年、北朝の太子が禪を受けられ、御卽位なされた。これが後圓融天皇である。二年、細川氏春を遣はして吉野を攻めさせ、藤原隆俊を討ち取つた。この年、直冬は石見から降參して來た。義滿は室町に屋敷を建築し、花の御所

と稱へ、四足門を造つた。天授四年に出來上つて其處へ移つた。

【語釋】建德・文中（長慶天皇の年號。）〇花御所（御所は皇居の稱。僭稱したのである。）〇四足門（これも皇居の門に擬した。）〇天授（後龜山天皇の年號。）

五年、義滿出軍于東大寺、遣山名義理・山名氏清、南侵、拔土丸城、益召兵於近江・美濃。美濃土岐康行叛。因又召兵於鎌倉討之。是時、憲春爲鎌倉執事。遣其弟憲方、將兵而西。會康行降。乃止。而氏滿聞將士多怨望義滿者也、竊有異謀。謀寖泄。義滿召還南師、潛賜手書於憲春、諫氏滿。氏滿弗聽。憲春憂懣、自殺。氏滿驚悔、謀遂解、以憲方爲執事。

【訓讀】五年、義滿、軍を東大寺に出し、山名義理・山名氏清を遣はして南侵せしめ、土丸城を拔き、益〻兵を近江・美濃に召す。美濃の土岐康行叛す。因つて又兵を鎌倉に召して之を討たしむ。是の時、憲春、鎌倉の執事爲り。其の弟憲方を遣はし、兵に將として西せしむ。會〻康行降る。乃ち止む。而して氏滿、將士の義滿を怨望する者多しと聞くや、竊に異謀あり。謀寖く泄る。義滿、南師を召還し、潛に手書を憲春に賜ひ、氏滿を諫めしむ。氏滿聽かず。憲春、憂懣して自殺す。氏滿、驚悔し、謀遂に解け、憲方を以て執事と爲す。

【通釋】五年、義滿は軍勢を東大寺に繰り出し、山名義理・山名氏清を遣はして、南を侵さしめ、土丸城を陷れ、益〻兵を近江・美濃に召集した。美濃の土岐康行が謀叛をした。そこで又兵を鎌倉に集めて之を討たせた。この

時、憲春は鎌倉の執事であつた。その弟の憲方を遣はし、兵に將として西へ行かせた。折から康行が降參して來た。そこで其の儘止めになつた。しかし、氏滿は將士の中に義滿を怨んで居るものが隨分あると聞いて、ひそかに謀叛の野心を持つてゐた。その謀がだん〳〵泄れて來た。故に、義滿は南方へやつた軍勢を呼び返し、ひそかに自筆の手紙を憲春に與へて、氏滿を諫めさせた。氏滿は聞き入れなかつた。故に憲春はそれを心配し、怒つて自殺して終つた。氏滿は吃驚して之を悔い、その逆謀も遂に中止することとなり、憲春が死んだ跡を承けて憲方を以て執事とした。

〔語釋〕土丸（和泉）

上杉・細川二氏久執權於東西。義滿漸長、頗忌賴之。近臣從而惡之。四月、義滿集兵於幕府、遣使者就賴之第、罷職就國。以斯波義將代爲管領。賴之即日上途、尋削髮、號常久作詩曰「人生五十愧無功。花木春過夏已中。滿室蒼蠅掃難去。起尋禪榻臥清風。」已而義滿思其勳勞、命總管南海焉。

〔通釋〕上杉・細川の二氏、久しく權を東西に執る。義滿漸く長じ、頗る賴之を忌む。近臣從つて之を惡す。四月、義滿兵を幕府に集め、使者を遣はし、賴之の第に就き、職を罷め、國に就かしむ。斯波義將を以て代つて管領と爲す。賴之、即日、途に上り、尋いで髮を削り、常久と號す。詩を作つて曰く、「人生五十功なきを愧づ。花

木春過ぎて夏已に中なり。滿室の蒼蠅掃へども去り難し。起つて禪榻を尋ねて淸風に臥す」と。已にして義滿、其の勳勞を思ひ、命じて南海を總管せしむ。

【通釋】上杉・細川の二氏は長い間東と西で執權となつて居た。義滿がだん〳〵大人になり、可成り賴之を嫌つて來るやうになつた。從つて近侍の家來も賴之を惡ざまに言つた。四月、義滿は兵を幕府に集めて置いて（賴之を恐れたから）使者を遣はし、賴之の屋敷へ往かせ、管領の職を罷めて領分に還るやうにと言はせた。そして斯波義將を以て之に代つて管領たらしめた。賴之はその日すぐ出發し、尋いで髮を削つて坊主となり、常久と號した。詩を作つて次の意味のことを歌つた。「われは人と生れ五十にもなつたが、何等功勞の無いのを愧とする。今や花さく木々も春がすぎて夏も半ばになつた。蒼蠅が增えて部屋に一ぱいでいくら掃つて見ても中々逃げない。あまり五月蠅いから起つて禪の腰掛けに腰を下ろして淸い風に吹かれた」と。（自分は浮世のうるさい榮辱を忘れて出家したといふ意）其の中に義滿は賴之の功勞を思ひ、命じて南海道を總轄管理せしめた。

【語釋】花木春過夏已中（義滿の成長したのに譬へたのである。）〇蒼蠅（小人に譬へたのである。）

六年、山名氏淸大破二官軍于南海一。弘和元年、又大破レ之。南海盡定。獨吉野隷二南朝一而已。是歲、北朝太子受レ禪。是爲二後小松帝一。三年、帝幸二室町第一。元中四年、帝冠。義滿理レ髮、攝政藤原良基加レ冠。以爲二恆例一。良基歷二仕六朝一、中立自全、最與二義滿一親善。五年義滿遊二紀伊及駿河一。圖二東南一也。六年、又欲レ圖二西海一、遊二嚴島一、召二見賴之一、命レ具レ舟赴二鎭西一。遇レ風

而還。至讃岐。乃屛人與語。久之。頼之感涕而出。義滿遂歸京師。

【訓讀】 六年、山名氏清大に官軍を南海に破る。弘和元年、又大に之を破る。南海盡く定まる。獨り吉野、南朝に隷するのみ。是の歳、北朝の太子、禪を受く、是を後小松帝と爲す。三年、帝、室町の第に幸す。元中四年、帝、冠す。義滿、髮を理め、攝政藤原良基、冠を加ふ。以て恆例と爲す。良基、六朝に歴仕し、中立自ら全く、最も義滿と親善なり。五年、義滿紀伊及び駿河に遊ぶ。東南を圖るなり。六年、又西海を圖らんと欲し、嚴島に遊び、頼之を召見し、命じて舟を具して鎭西に赴く。風に遇つて還り、讃岐に至る。乃ち人を屛け與に語る。久しうして、頼之感涕して出づ。義滿、遂に京師に歸る。

【通釋】 六年、山名氏清は大に官軍を南海に撃ち破つた。弘和元年に又大に官軍を破つた。南海はこれですつかり北朝方に平定された。たゞ吉野が南朝に屬するのみであつた。この年北朝の太子が禪を受けて位に即かれた。これが後小松天皇である。三年、天皇は義滿の室町の屋敷に行幸された。元中四年天皇は元服せられた。義滿は髮を取り上げ、攝政良基が烏帽子親となり、冠をお加へ申した。この後之を例とするやうになつた。良基は六代の君に事へ、一黨一派に偏せず、自分を全うし、最も義滿と仲がよかつた。五年、義滿は、紀伊及び駿河に遊んだ。それはたゞ遊びに行つたのではなく、東の新田南の吉野を圖る爲めであつた。六年、又西海を圖らうと思つて、嚴島に遊び、頼之を呼び寄せて會見し、命じて船の用意をして九州に向つて出かけた。風に遇つて引きかへし、讃岐まで行つた。そこで人拂ひをして頼之と話した。大分經つてから頼之は感涙を流し乍ら出て來た。義滿は遂に京都へ歸つた。

【語釋】弘和・元中（後龜山天皇の年號。）　○六朝（光嚴・光明・崇光・後光嚴・後圓融・後小松。）

當是時、四方漸定、諸宿將、如赤松則祐・佐佐木道譽、前後死亡、其嗣皆孱、獨山名氏聲威甚熾。初山名時氏叛、略取五州。降。因爲其守護焉。八子、師義・義理・時義・氏清・氏冬・義數・高義・氏重、皆顯於世、富最諸將。世相語曰「欲大其家、莫善於叛。」及義理・氏清又攻取南海、凡山名氏所管跨十州。世呼曰六分一氏。謂六分海內而有其一也。義滿惡之、常陰計誅鋤之。時義承師義後。其二子時熙・氏幸、分襲但馬・伯耆守護。師義子滿幸寢譖之、欲奪其國。七年、義滿命氏清與滿幸赴討時熙・氏幸。氏清臨發請曰、「彼降而可赦、則臣先諭之使來。不必赴討也。」義滿曰、「降不赦也。」乃往、擊走之。義滿因分賜二州於氏清・滿幸。又令細川賴之討平備中。八年春、召賴之京師、以其養子賴元爲管領。而賴之決事焉。會時熙・氏幸來訴冤。義滿欲許之。

【訓讀】是の時に當り、四方漸く定り、諸宿將、赤松則祐、佐佐木道譽の如き、前後死亡し、其の嗣皆孱く、獨り山名氏の聲威甚だ熾なり。初め山名時氏叛し、五州を略取せり。降る。因つて其の守護と爲す。八子、師義・

義理・時義・氏淸・氏冬・義數・高義・氏重、皆世に顯れ、富、諸將に最たり。世相語つて曰く、「其の家を大にせんと欲せば、叛するより善きは莫し」と。義理・氏淸、又攻めて南海を取るに及び、凡て山名氏の管する所十州に跨る。世、呼んで六分一氏と曰ふ。海內を六分して、其の一を有するを謂ふなり。義滿、之を惡み、常に陰に之を誅鋤せんと謀る。時義、師義の後を承く。其の二子時熙・氏幸、分つて但馬・伯耆の守護を襲ぐ。師義の子滿幸、寖く之を譖り、其の國を奪はんと欲す。七年、義滿、氏淸に命じて滿幸と赴き、時熙・氏幸を討たしむ。氏淸發するに臨み、請うて曰く、「彼れ降つて赦す可くんば則ち臣先づ之を諭して來らしめん。必ずしも赴き討たざるなり」と。義滿曰く、「降るも赦さゞるなり」と。乃ち往き擊つて之を走らす。義滿、因つて二州を氏淸・滿幸に分賜す。又細川賴之をして備中を討平せしむ。八年春、賴之を京師に召し、其の養子賴元を以て管領と爲す。而して賴之、事を決す。會ゝ時熙・氏幸、來つて宥を訴ふ。義滿、之を許さんと欲す。

通釋 當時四方はやつと平定し、多くの古參の大將赤松則祐・佐佐木道譽の如き連中が前後して死亡し、その相續人は皆弱蟲揃ひであつたが、たゞ山名氏の家聲威望だけは非常に盛であつた。初め山名時氏は謀叛して（尊氏に）五州を掠め取つた。所が後に降參したので、五州の守護としてやつた。時氏の八人の子、師義・義理・時義・氏淸・氏冬・義數・高義・氏重等は皆世にあらはれ、その富は諸將の中で第一であつた。世間では互に噂して曰ふのに「自分の家を大きくしようと思へば、謀叛をするのが一番だ」と。義理・氏淸が又攻めて南海を取つてからは、山名氏の領するところは皆で十個國に跨つた。世間では之を六分一氏といつた。それは日本六十餘州を六分して其の一を所有してゐたからである。義滿は之を憎んでいつもひそかに之を根こそぎ亡ぼさうと謀つて居た。時義が師義の後を承けついだ。その二子時熙・氏幸は土地を分けて貰ひ、但馬・伯耆の守護職を繼いだ。

所が師義の子の滿幸は不平で、だん〳〵之を讒言し、其の國を奪はうと思つた。七年、義滿は氏淸に命じて滿幸と一緒になつて時熙・氏幸を討たしめた。氏淸は出發するに當り、請うて曰ふには「彼等が降參せば赦してやる御考へなら私は征伐に行く前に諭して降參するやうにします。若しさうだとすれば必ずしも征伐に行くにも當らないのでありますが如何致しませうか」と。義滿は「降參しても決して赦さないのだ」と。そこで出かけて擊つて之を走らせたので、義滿は但馬、伯耆を氏淸・滿幸に分けてやつた。又細川賴之をして備中を討ち平らげさせた。八年春、賴之を京都に呼び寄せ、その養子の賴元を管領とした。そして事實は賴之が萬事を取り裁いてゐた。丁度そこへ時熙・氏幸がやつて來て、無實を訴へ出た。義滿は之を許してやらうと思つた。

語釋　五州（丹波・丹後・因幡・伯耆・美作。）〇十州（前の五州の外に和泉・山城・紀伊・若狹・但馬・隱岐。）〇莫善於叛（謀叛して五州を取り、降參して結局それを自分のものにしたから斯くいふのである。）

十月、氏淸請義滿於宇治別第、觀紅樹。先期一夕、氏淸發和泉北上、將覘具也。滿幸邀之淀、告曰「如聞幕議復時熙・氏幸舊領、詰朝之會、將面命之也。公宜稱疾辭會。」氏淸怒曰「何與去歲言相反也。被經侮如此、何拜趨之爲。」乃使人要義滿於途曰「臣俄獲疾、不能迎候。」義滿已至宇治、廻駕而歸。一行驚異。滿幸娶氏淸女、尤見親愛、所言皆聽。自在京師、而總管四州。管內有上皇邑。奪而幷之。義滿數下敎還納。滿幸偕迎上皇使、而陰誡邑人逐之。義滿大怒、命滿幸罷就國。曰「汝宿衞無益。宜去據汝國。」十

一月、滿幸歸丹後、京師指目快之。

【訓讀】十月、氏清、義滿を宇治の別第に請じて紅樹を觀る。期に先だつ一夕、氏清、和泉を發して北上し、將に具を視んとす。滿幸、之を淀に邀へ、告げて曰く、「聞くが如くんば、幕議、時熙・氏幸の舊領を復し、詰朝の會、將に面のあたり之を命ぜんとすと。公宜しく疾と稱して會を辭すべし」と。氏清怒つて曰く、「何ぞ去歲の言と相反するや。輕侮せらるゝ此くの如くんば、何ぞ拜趨するをこれ爲さん」と。乃ち人をして義滿を途に要せしめて曰く、「臣、俄に疾を獲、迎候する能はず」と。義滿已に宇治に至り、駕を廻らして歸る。一行驚異す。滿幸、氏清の女を娶る。尤も親愛せられ、言ふ所皆聽かる。自ら京師に在つて、四州を總管す。管内に上皇の邑あり。奪つて之を幷す。義滿、數〻敎を下して還納せしむ。滿幸伴つて上皇の使を迎へて、陰に邑人を誡めて之を逐はしむ。義滿、大に怒り、滿幸に命じ罷めて國に就かしむ。曰く、「汝、宿衞するも益なし。宜しく去つて汝の國に據るべし」と。十一月、滿幸丹後に歸る。京師、指目して之を快とす。

【通釋】十月、氏清は義滿を宇治の別邸に招待して、紅葉見物の宴會を開くことになつた。その前の夜、氏清は和泉を出發して北上し、饗應の支度を見屆けようとした。滿幸は之を淀に迎へ告げて曰ふには、「聞く所によりますと、幕府の評議では時熙・氏幸の舊領地を返してやるとのことで、明日の宴會で直にあなたに返すよう命ぜられるさうです。あなたは病氣と言ひ立てて宴會をお斷りになられた方が宜しいでせう」と。氏清は怒つて曰ふのに「それは又去年の言葉と隨分相反したことではないか。そんなに迄輕蔑されてゐる以上、どうして出むかへなどするものか」と、そこで人をやつて義滿を途中で待ちうけさせて曰はせるには、「私は急に病氣になりました

ので、御出迎ひ致し兼ねます」と。義滿は既に宇治まで行つてゐたが、致方なく乘物を廻して京都に歸つた。一行の者は驚いて不審に思つた。この滿幸は氏清の娘を娶つてゐたのである。特別に愛され、何でも言ふことは皆聽かれてゐた。滿幸は京都に居て、四個國を總管して居た。彼の管內に後圓融上皇の領地があつた。彼はそれを奪つて自分のものとした。義滿は度々敎書を下して返還せしめようとした。滿幸はわざと上皇のお使を迎へて置いて、一方ひそかに領地の人民に言ひつけ、之を逐ひ拂はせた。義滿は非常に怒り、滿幸に命じて職を罷めて國にかへらせた。そして曰には「お前は京都で勤番して居ても無益だ。領分に返つて引込んで居た方が宜からう」と。十一月、滿幸は丹後に還つた。京都の人は皆指さし目して氣持よがつた。

語釋　去歲言（降るも許さずといつた言葉。）〇四州（丹後・伯耆・出雲・隱岐。）〇敎書（命令書。）

滿幸慚恚、潛往二界城一、說二氏清一曰「近日之政、公謂二之何一。去歲使三吾曹討二時熙・氏幸一、而今歲赦レ之、將三反討二吾曹一。是非三剪レ枝絕二根之計一乎。今闔族戮レ力、以擧二大事一、在レ京諸將、誰能敵レ我。苟得レ取二京師一、附者必多。如二土岐・富樫諸族一、方懷二怨望一。必先レ衆來屬。公速揚レ兵、以除二細川氏一爲レ辭、事無レ不レ成矣」。氏清素有二異志一。自負二材武一。土岐康行之叛也、義滿即討二平之一。氏清聞而笑曰「康行易レ與耳。至レ如二乃公一自不レ然也」。於レ是、遂納二滿幸言一、合レ謀約レ期而別。各自集レ兵、欲レ夾二攻幕府一。幕府未二之覺一也。議曰「氏清亡狀、不レ可レ不二譴責一。而事端於

復邑、邑不果復、則是予奪、聽於下也。於是、果復時熙・氏幸之邑、遂議討氏清、氏清聞之、故使使謝前日之罪者再三。義滿徵誓書宥之、事卒解。

【譯文】滿幸慚恚し、潛に界城に往き、氏清に說いて曰く、「近日の政、公、之を何と謂ふ。去歲、吾曹をして時熙、氏幸を討たしめ、而して今歲之を赦し、將に反つて吾曹を討たんとす。是れ枝を剪り、根を絕つの計に非ずや。今闔族力を戮せ、以て大事を擧げば、在京の諸將、誰か能く我に敵せん。苟も京師を取るを得ば、附く者必ず多からん。土岐・富樫の諸族の如き、方に怨望を懷けり。必ず衆に先だつて來り屬せん。公速に兵を揚げ、細川氏を除くを以て辭と爲さば、事成らざるなけん」と。氏清素より異志あり。自ら材武を負む。土岐康行の叛くや、義滿卽ち之を討平す。氏清聞き笑つて曰く、「康行は與し易きのみ。乃公の如きに至つては、自ら然らざるなり」と。是に於て遂に滿幸の言を納れ、謀を合せ、期を約して別れ、各〻自ら兵を集め、幕府を夾攻せんと欲す。幕府、未だ之を覺らず。議して曰く、「氏清の亡狀、譴責せざる可からず。而して事は復邑に端す。邑復するを果さゞれば、則ち是れ予奪、下に聽くなり」と。是に於て、果して時熙・氏幸の邑を復し、遂に氏清を討たんと議す。氏清之を聞き、故に使をして前日の罪を謝せしむること再三。義滿、誓書を徵し、之を宥し、事、卒に解く。

【通釋】滿幸は憤り怒り、ひそかに堺城に往つて、氏清に說いて曰ふには「此頃の政事をあなたは何と思はれますか。去年、我々をして、時熙、氏幸を討たしめたのに今年は之を赦し、それ所か却て我々を討たうとしてゐます。これは枝を切り根を絕やし、我々の一族を滅す計略ではありますまいか。今我が一族の者殘らず力を合はせ

て謀叛の旗揚げをすれば、在京の諸將の內、誰がよく我々にかなふ者がありませう。若し京都を取ることが出來れば、味方に附くものは屹度多いことでありませう。土岐や富樫の諸族の如きも現に將軍に對して怨みを抱いてゐます。屹度眞先きに立つてやつて來て屬くでせう。あなたは急いで兵を擧げ管領細川氏を除くといふことを口實になされば成功しないことはありません。屹度成功します」と。氏清は元來謀叛の心を持つて居たのである。その上自分の材能、武藝を鼻にかけてゐた。土岐康行が謀叛した時、義滿は卽座に之を討ち平らげたことがある。氏清は其の時之を聞いて笑つて、「康行などは譯はないさ。乃公のやうな者になると、なか〳〵さうは行かないのだ」と言つた程である。こゝに於て、遂に滿幸の言葉を納れて謀叛することゝなり、謀を示し合せ、期日を約束して別れ、めい〳〵兵を集めて幕府を夾み討ちにしようと思つた。幕府では一向之を覺らなかつた。評議して曰ふには「氏清の宇治一件の無禮な振舞は譴責せねばならない。しかしこの事たるや、時熙・氏幸の舊領を元のやうにするといふことから端を發したのである。若し最初の考へ通りに舊領を元々通りにしてやるといふことにしなければ予奪のことが下の言ふなりになつたこととなる。(卽 氏清のいふなりになつた形となる。)甚だ幕府の威嚴の落ちることになる」と。そこで評議通りに時熙、氏幸の邑を元のやうにしてやり、遂に氏清を討つことを相談した。氏清は之を聞いてわざと再三、使を差し出し、前日宇治一件の罪を詫びさせた。義滿は誓書を出させて之を赦し、この事は結局落着した。

十二月、丹後人上變、告滿幸反。幕府未信。畠山基國將遊佐某、又自河內告氏清大修戰具將發。基國義深子也。已而氏冬出奔男山、義理又擧紀伊兵北嚮京師大擾。

義滿以書諭義理。義理不聽。於是、義滿乃親臨古山滿藤第、會諸將議戰、以觀其嚮背。諸將皆至。聚議不決。或曰「審聽彼輩所訴、以舍之、必無事矣」義滿曰「氏清蓄異志日久。今日之舉、非必有所訴。卽今日舍之、明日復反。吾聞、彼輕易諸君、曰、幕府諸將、誰能敵我。吾爲諸君恥之。不可不誅也。意彼必謂我據東山・叡岳也。吾乃親出陣東寺、而諸君盛兵於內野。彼見內野軍、必來衝焉。則鼓螺相應、夾而擊之、可一戰而殲也」衆皆然之。一色詮範進曰「臣敢獻異議。夫元帥在後、諸將前進、是戰之宜也。前議、反之。且東寺・內野、地勢隔絕、難於策應。不如諸將陣內野、屯一隊于東寺、而以臣第爲牙營。則彼必悉銳、赴我中軍。其雋可獲也。彼卽自東洞院北上乎、則諸將迭出、要之街巷中、東寺兵尾擊其後、可以鏖之」義滿曰「善」

【訓讀】十二月、丹後の人、變を上り、滿幸反すと告ぐ。幕府、未だ信ぜず。畠山基國の將遊佐某、又河内より、氏清大に戰具を修めて將に發せんとすと告ぐ。基國は、義深の子なり。已にして氏冬、男山に出奔し、義理又紀伊の兵を擧げ北に嚮ふ。京師大に擾る。義滿、書を以て義理を諭す。義理聽かず。是に於て、義滿乃ち親ら古山滿藤の第に臨み、諸將を會し戰を議し、以て其の嚮背を視る。諸將皆至る。聚議決せず。或ひと曰く、「審

に彼の輩の訴ふる所を聽き以て之を舍さば、必ず事なからん」と。義滿曰く、「氏清、異志を蓄ふること日久し。今日の擧、必ずしも訴ふる所あるに非ず。卽し今日、之を舍さば、明日、復反せん。吾れ聞く、彼れ諸君を輕易して曰く、幕府の諸將誰か能く我に敵せんと。吾れ諸君の爲めに之を恥づ。誅せざるべからざるなり。意ふに、彼れ必ず我れ東山叡岳に據ると謂はん。吾れ乃ち親ら出で、東寺に陣せん。而して諸君は兵を內野に盛にせよ。彼れ內野の軍を見ば、必ず來り衝かん。則ち鼓螺相應じ、夾んで之を擊たば、一戰して殲すべきなり」と。衆、皆之を然りとす。一色詮範進んで曰く、「臣敢て異議を獻ぜん。夫れ元帥、後に在り、諸將、前に進む、是れ戰の宜しきなり。前議は之に反す。且つ東寺、內野、地勢隔絕策應に難し。如かず、諸將、內野に陣し、一隊を東寺に屯し、而して臣の第を以て牙營と爲さんには。則ち彼れ必ず鋭を盡し、我が中軍に赴かん。其の雋獲べきなり。彼れ卽し東洞院より北上せんか、則ち諸將迭に出で、之を街巷中に要し、東寺の兵、其の後を尾擊せば、以て之を鏖にすべし」と。義滿曰く、「善し」と。

【通譯】十二月、丹後の人が變事を注進し、滿幸が謀叛したと告げた。幕府ではまだ之を信じなかつた。畠山基國の大將遊佐河內守が又河內から報告して曰ふのに「氏清が大層武器の手入れをして戰爭の支度をなし、今や出發しようとしてゐます」と。この基國は義深の子である。その中に氏冬は男山に出奔し、又義理も紀伊の兵を起し、皆、北、京都に向つて進發した。その爲めに京都は大騷ぎであつた。義滿は書面を以て義理を諭して見た。義理は承服しなかつた。そこで義滿は親ら古山滿藤の屋敷に出かけ、諸將を集めて戰爭の評定をなすこと〻なし、諸將の屬くかどうか其の氣心を見ようとした。諸將は皆集つて來た。色々議論が出て決まらなかつた。或る人が曰ふのに「よく彼等の訴へる所を聞いて、之を赦してやればきつと無事に片附く」と。義滿が曰ふのに「氏清が

謀叛心を持つて居るのはづつと以前からのことである。今日の企とても別に訴へる所がある譯ではない。もし今日之を許さば、明日復謀叛するだらう。聞く所によると彼奴は諸君を輕んじ馬鹿にし、幕府の諸將で誰か能く俺に敵する者ぞ、などゝ言つてゐるさうだ。余は諸君の爲めに之を恥ぢてゐる。どうしても誅しなければならぬ。思ふに彼は屹度余が東山か或は比叡山に立て籠ると思つて居るであらう。併しそれに反し余は親ら出でゝ東寺に陣取る。そして諸君は兵を内野に張つて盛にせよ。彼は内野の軍を見て必ずその方へ來て衝くだらう。其の時太鼓法螺を鳴らし合つて夾み擊つたら一戰して殘らず滅すことが出來る」と。皆の者はいかにもさうだと思つた。一色詮範が進んで曰ふには「私は敢て別の考へを申し上げます。總大將が後方に居て、諸將が前方に進むことは戰爭に於ては宜い方法であります、所が今の御議論は之に反對です。それに東寺と内野とは土地が離れて居て、謀を示し合はせるに都合が惡う御座います。それよりも、諸將は内野に陣取り、一隊を東寺に屯し、そして私の屋敷を本陣となされたら宜いでせう。さうすれば彼はきつと強い兵を皆つれて我が中軍に向つて來るでせう。從つて彼等の大將氏清を討ち取ることが出來ます。又彼が若し東洞院より京都に向つて來れば、諸將がかはるがはる出で之を町中に待ち受け、東寺の兵が其の後からつけて擊てば皆殺にすることが出來ます」と。義滿は「善し」といつた。

語釋 内野（京都の北。）○臣第（堀川にあつた。）○雋（勝れた者。）○中軍（本隊）

明旦、遣今川泰範・六角滿高、以八百騎據東寺、而自與弟滿詮率三千騎、出陣于詮

範堀川第。烏帽直垂、帶刀而不甲。討家僕之禮也。諸將皆偏甲、以次而前。細川賴之・細川賴元・畠山基國・赤松義則、備其西北、佐佐木高詮・斯波義重・備其西南、以大內義弘爲先鋒。兵凡五千餘、環內野而陣。

訓讀 明早、今川泰範、六角滿高を遣はし、八百騎を以て東寺に據らしめ、而して自ら弟滿詮と、三千騎を率ゐ、出でゝ詮範の堀川の第に陣す。烏帽直垂にて、刀を帶びて甲せず。家僕を討つの禮なり。諸將皆偏甲し、次を以て前む。細川賴之　細川賴元・畠山基國・赤松義則、其の西北に備へ、佐佐木高詮・斯波義重、其の西南に備へ、大內義弘を以て先鋒と爲す。兵凡そ五千餘、內野を環つて陣す。

通釋 明朝早く義滿は今川泰範・六角滿高を遣はし、八百騎をつれて、東寺に立て籠らせ、そして自分は弟の滿詮と三千騎を率ゐ、出でゝ一色詮範の堀川の屋敷に陣取つた。義滿は烏帽子・直垂で刀をさし、鎧は着てゐなかつた。これは、家來を討つ時の仕方である。（氏淸は家來である）諸將も皆小具足で順序を追うて進んだ。細川賴之・細川賴元・畠山基國・赤松義則はその西北方面に備へ、佐佐木高詮・斯波義重はその西南方面に備へ、大內義弘を以て先鋒となした。その兵凡そ五千あまりで內野をぐるり取り卷いて陣取つた。

語釋 烏帽直垂（平常服である。）〇偏甲（略服で、小手・すね當・陣羽織・烏帽等をつけ、本式の甲冑はつけない。）

初氏淸・滿幸、期是月二十七日入京師。而遊佐某塞河內岳山、以要氏淸兵。兵後期

二日、至男山。氏清在男山。召其宰小林時直、謂曰吾爲新田氏支族、即代足利氏、誰爲不可。吾得爲將軍、以汝執事。時直流涕曰臣欲諫止此擧、而久被疏斥、乃今日得見耳。今諸將之富、誰如君家者。背恩擧事、神豈右之。即獲克乎、諸將安能爲我下。臣惑嚮背焉。獨有前死而已。若夫執事職、則命之他人。氏清退、囑義數曰時直意色甚決、汝與之耦、無使浪死。義數意亦欲速死。唯唯而退。滿幸臣大足某、亦諫滿幸。滿幸不聽。即夜、氏清以二千騎、浮橋濟淀、使氏冬以三百騎、遶鳥羽路會軍、而滿幸千餘騎、濟梅津、欲自後應之。已而滿幸夜迷失道。氏冬軍又無鄉導、徑沛中、相驚而退。

【通釋】初め氏清、滿幸、是の月二十七日に京師に入らんと期す。而るに遊佐某、河内の岳山に塞し、以て氏清の兵を要す。兵、期に後るゝこと二日、男山に至る。氏清、男山に在り。其の宰小林時直を召し、謂つて曰く、「吾は新田氏の支族たり。即ち足利氏に代るも、誰か不可と爲さん。吾れ將軍たるを得ば、汝を以て執事とせん」と。時直流涕して曰く、「臣、此の擧を諫止せんと欲し、而れども久しく疏斥せられ、乃ち今日見ゆるを得たるのみ。今諸將の富、誰か君の家に如く者ぞ。恩に背き事を擧ぐ、神豈に之を右けんや。即し克つを獲んか、諸將安んぞ能く我が下たらん。臣、嚮背に惑ふ。獨り前み死するあるのみ。夫の執事の職の若きは、則ち之を他人に命ぜよ」と。氏清退き、義數に囑して曰く、「時直、意色甚だ決す。汝、之と耦し、浪死せしむるなかれ」と。義

數の意も亦速に死せんと欲す。唯唯として退く。滿幸の臣大足某も、亦滿幸を諫む。滿幸聽かず。卽夜、氏清二千騎を以て、浮橋もて淀を濟り、氏冬をして三百騎を以て、鳥羽路を遶り、軍に會せしめ、而して滿幸の千餘騎、梅津を濟り、後より之に應ぜんと欲す。已にして滿幸、夜、迷うて道を失ふ。氏冬の軍、又鄕導なく、淖中を徑り、相叢いて退く。

通釋　はじめ、氏清、滿幸は、この月の二十七日に京都に討ち入る約束であつた。しかるに遊佐河內守が河內の岳山に寨を拵へ、氏清の兵を待ち受け遮つた。その爲めに、氏清の兵は期日に後れること二日卽ち二十九日に男山に到着した。かくて氏清は男山に據つて居た。その時その家老の小林時直を呼んで謂つて曰ふには、「余は新田氏の分家筋である。足利氏に取つて代つても、誰も反對するものはあるまい。余がもし將軍となることが出來たら、お前を執事にしてやらう」と。時直涙を流して曰ふには「私は今回のこのお企を御意見申し上げようと思つて居ましたが、何しろ長い間疎んじ退けられて居ましたので、申し上げる機會がなく、今日やつと御目にかゝることが出來ました。今諸將の中で君のやうに裕福な人は外にはありません。しかるに、それ程にして貰つた恩に背いて謀叛をなされる、神が何うして之を助けられませうや。又もし勝ち得たとした所で諸將がどうして我が山名氏の下に屬きませうや。私は如何に自分を處置したら善いのか迷つて終ひます。今は唯だ進んで討死するまでです。執事の職は折角ですが、どうぞ外の人にお命じ下さい」と。氏清は退いて義數に賴んで曰ふには「時直の意氣込を見ると討死と覺悟を極めて居るやうだ。お前は之と組み合ひとなつて、側を離れぬやうにして犬死をさせぬやうに氣をつけて吳れ」と。義數も亦、心中早く討死したいと思つて居た。たゞはいくと云つて退いた。滿幸の家來、大足次郎左衞門も亦滿幸を諫めた。滿幸も之を聽き入れなかつた。その夜すぐ氏清は二千騎を

引きつれ、船橋を拵へて淀川を渡り、氏冬をして三百騎を率ゐて、鳥羽街道から回つて軍に會せしめ、又滿幸の千餘騎は梅津を渡つて、後から之に應援しようとした。其の中に滿幸は暗夜で道に迷うた。又氏冬の軍には案内者がゐなかつたので泥田の中に踏み込み、そこを通り過ぎようとして、互に敵かと思ひ相驚いて退却した。

【語釋】支族（分家のこと。新田義重の第三子義範が始めて山名氏を稱し、氏淸はその九世の孫である。）○義數（氏淸の弟。）○梅津（京都の西。）

氏淸待報不至。乃遣義數・時直先進呼譟逼義弘。義弘陣大宮。謂其兵曰「我曹數樹功於鎭西、至戰上國、今日爲始。汝等勗之」縱射手二百、而三百騎下馬、栢進接戰數合、死傷相當。義數・時直顧馳義滿軍。義弘曰「使敵隻騎過我營而北、我之罪也」走而遮之、手揮薙刀、斬時直。義數得間北馳、踰垣而墜、爲牙兵所獲。義弘馳赴中軍、上言曰「臣殊死戰。而氏淸大兵繼至。請賜援兵」將軍喪臣、誰繼臣者」義滿視其鎧馬朱殷、壯之、手賜佩刀曰「更以此一戰」因麾義則赴援。滿幸至梅津、聞大宮戰已酣、則疾進、與賴之・基國戰。高詮來援、擊土屋黨殲之、斬大足。而基國等兵不利。義滿親赴援之、大呼曰「盍速梟豎子」諸將爭進。滿幸遂敗走。

【訓讀】氏淸、報を待つも至らず。乃ち義數時直を遣はし先づ進み、呼譟して義弘に逼らしむ。義弘、大宮に陣す。其の兵に謂つて曰く、「我曹、數〻功を鎭西に樹つ。上國に戰ふに至つては、今日を始と爲す。汝等、之を勗めよ」と。射手二百を縱ち、而して三百騎、馬より下り、楯もて進み、接戰數合、死傷相當る。義數・時直、顧みて義滿の軍に馳す。義弘曰く、「敵の隻騎をして、我が營を過ぎて北せしむれば、我の罪なり」と。走つて之を遮り、手に薙刀を揮ひ、時直を斬る。義數、間を得て北に馳せ、垣を踰えて墜ち、牙兵の獲る所と爲る。義弘馳せて中軍に赴き、上言して曰く、「臣、殊死して戰ふ。而るに氏淸の大兵繼ぎ至る。請ふ、援兵を賜へ。將軍臣を喪はば、誰か臣に繼ぐ者ぞ」と。義滿、其の鎧馬の朱殷を視て、之を壯とし、手づから佩刀を賜うて曰く、「更に此を以て一戰せよ」と。因つて義則を麾き赴き援けしむ。滿幸、梅津に至り、大宮の戰、已に酣なりと聞き、則ち疾く進み、賴之・基國と戰ふ。高詮來り援け、土屋の黨を擊ち、之を殲し、大足を斬る。而して基國等の兵、利あらず。義滿、親ら赴き、之を援け、大に呼んで曰く、「盍ぞ速に豎子を梟せざる」と。諸將爭ひ進む。滿幸、遂に敗走せり。

【通釋】氏淸は滿幸・氏冬が約束の場所へ着いた知らせを待つて居たが、とうとう來なかつた。そこで義數・時直を遣はして眞先きに進ませ、呼ばはり噪いで足利の先鋒大内義弘に逼らせた。義弘は大宮に陣取つてゐた。彼はその部下の兵士に向つていふには、「我々は從來度々手柄を九州で立てた。上方で戰爭するのは今日が始めてである。お前等もしつかりやつて呉れよ」と。射手二百を縱ちやり、一方には三百騎が馬から下り、楯を以て進み打ち合ふこと數度、兩軍の死傷は互角であつた。義數・時直は顧みて義滿の陣に驅け込んだ。義弘が曰ふのに、「敵の一騎たりとも我が陣を通過して北へやるやうなことがあつたら、それこそわが落度であるぞ」と。走つて兩

入を遮り、手づから薙刀を揮つて時直を斬つた。義數はその隙に北に馳せ、垣を踰えようとして下に落ちて旗下の兵に生捕りにせられた。義弘は馳せて本陣に赴き、義滿に言上するには「私は死にもの狂ひで戰つて居ります。所が氏清の大軍が次ぎ〳〵とやつて來て居ります。どうか援兵を送つて下さい。將軍が私を見殺しになさいますと、誰が私に繼いで私程に戰ひませうや」と。義滿は、その鎧や馬が血みどろになつて居るのを見て、勇壯なりとし、手づから腰にさしてゐた刀を與へ、曰ふのに「もう一遍この刀で戰へよ」と。そこで義則を指圖して援けにやつた。滿幸は梅津に着いたが、その時大宮の戰爭が今眞最中であると聞いたので、急いで進み、賴之・基國と戰つた。高詮は援けに來り、土屋の黨を討つて之を皆殺にし、大足を斬つた。そして基國等の兵はうまく行かないで負けて終つた。義滿は自分で之を援け大に呼ばはつて曰ふには「なぜ速く小倅を討ち取つて獄門にかけぬか」と。これに勵まされた諸將はわれも〳〵と爭ひ進んだ。滿幸はとう〳〵敗けて逃げた。

[illegible] 踰垣（本陣の垣を越えたのである。）○朱殷（シユアン。血に染みあかきこと。）○土屋黨（大足次郎左衞門・弼平藏・米原平太等の組。）

義數・滿幸既敗、敗卒走、報之於氏清。氏清乃與氏冬合而進。義則逆戰。其弟滿則死之。山名時熙以事端起自己也、力戰當氏清、悉亡其兵、走歸於義弘。義弘・義則交馳使、乞援於義滿。義滿顧左右、無可遣者。詮範以軍吏在麾下。自請而往。勝敗未決。於是、義滿建牙旗而進。氏清兵望見曰「將軍至矣」乃潰奔。詮範與子滿範、注目氏清、前

囮、遂斬之、及其義兒辰房。辰房氏重子也。氏清首至麾下。義滿顧謂衆曰「諸君視謀反逆者、終如何也」時十二月晦日也。明年正月、割山名氏地賞諸將。賜和泉・紀伊於義弘、隱岐・出雲於高詮、美作於義則、丹波於賴元、山城於基國。賜詮範以今富莊。義則、則祐子、高詮道譽曾孫也。時北朝年號明德。謂之明德之役。

訓譯 義數・滿幸、既に敗る。敗卒走り之を氏清に報ず。氏清乃ち氏冬と合して進む。義則逆へ戰ふ。其の弟滿則之に死す。山名時熙、事端の己より起るを以て、力戰して氏清に當り、悉く其の兵を亡ひ、走つて義弘に歸す。義弘・義則、交〻使を馳せ、援を義滿に乞ふ。義滿、左右を顧みるに、遣る可き者なし。詮範、軍吏を以て麾下に在り。自ら請ひて往く。勝敗未だ決せず。是に於て、義滿、牙旗を建てゝ進む。氏清の兵、望見して曰く、「將軍至れり」と。乃ち潰え奔る。詮範、子の滿範と氏清に注目して、前み鬪ひ、遂に之を斬り、其の義兒辰房に及ぶ。辰房は、氏重の子なり。氏清の首、麾下に至る。義滿、顧みて衆に謂つて曰く、「諸君、反逆を謀る者を視る。終に如何ん」と。時に十二月晦日なり。明年正月、山名氏の地を割いて、諸將を賞す。和泉・紀伊を義弘に、隱岐・出雲を高詮に、美作を義則に、丹波を賴元に、山城を基國に賜ふ。詮範に賜ふに、今富莊を以てす。義則は、則祐の子、高詮は道譽の曾孫なり。時に北朝の年號は明德なり。之を明德の役と謂ふ。

通釋 義數・滿幸はすでに敗れた。その敗けた卒は、走つて、このことを氏清に報告した。そこで氏清は、氏冬と合して進んだ。義則は迎へ戰つた。その弟の滿則はこの時に討死した。山名時熙は、今度の戰爭は自分か

ら起つたのであるから、つとめ戰つて、氏淸に向つたが、皆其の兵を無くして、走つて義弘の陣へ逃げ込んだ。義弘、義則は、かはるがはる使を馳せて、救ひを義滿に乞うた。義滿は左右を見廻したが、派遣すべき者はもう居なかつた。詮範は軍吏となつて、旗下にゐた。自分から願ひ出でゝ出かけた。併し勝負はまだ決まらなかつた。そこで義滿は、大將の旗を推し立てゝ進んだ。氏淸の兵は、之を望み見て曰ふのに、「將軍が來た」と。そこで崩れ逃げた。詮範は其の子の滿範と與に氏淸に目をつけ、進み鬪つて、遂に之を斬り、其の義子の辰房をも斬つた。辰房は氏重、（氏淸の弟）の子である。かくて氏淸の首が義滿の旗下に送り屆けられた。義滿は顧みて多勢の者にていふには「諸君、謀叛をした者は結局如何なるかは御覽の通りだ」と。時に十二月の晦日であつた。翌年正月向つ山名氏の領地を分けて諸將を賞した。和泉、紀伊を義弘に、隱岐・出雲を高詮に、美作を義則に、丹波を賴元に、山城を基國に、それぞれ與へ遣はした。詮範には今富の莊を與へた。義則は則祐の子で、高詮は道譽の曾孫である。時に北朝の年號は明德といつた。それでこの戰を明德の役といふのである。

語釋　今富莊（若狹）

滿幸之走也、有詬而止之者、爲不聞而逃。二月、歸伯耆、使其將鹽冶師高守出雲。高詮將吏來誘以利、師高答曰、「山名氏所以至此者、失義於足利氏也。吾亦不欲失義於山名氏。吾父分自與吾異、將出應命。幸善視之。」乃諭其父出降、送至城下、既訣而自殺。曰、「吾不忍與父鬪。」城乃陷。其兵走、報滿幸。滿幸聞氏冬在因幡、又走歸之。氏冬

素有降志欲迎撃滿幸以藉口。滿幸終削髮逃鎭西。後氏淸五歲而被獲誅。

〔訓讀〕滿幸の走るや、詬めて之を止むる者あり。聞かざる爲して逃る。二月、伯耆に歸り、其の將鹽冶師高をして出雲を守らしむ。高詮の將吏、來り誘ふに利を以てす。師高答へて曰く「山名氏の此に至れる所以は、義を足利氏に失へばなり。吾れ亦義を山名氏に失ふを欲せず。吾が父は、分自ら吾と異なり、將に出でゝ命に應ぜんとす。幸に善く之を視よ」と。乃ち其の父に諭して出で降らしめ、從つて城下に至る。既に訣れて自殺す。曰く、「吾れ父と鬪ふに忍びず」と。城乃ち陷る。其の兵走り、滿幸に報ず。滿幸、氏冬の因幡に在るを聞き、又走り、之に歸す。氏冬、素より降志あり。滿幸を迎へ撃ち、以て口を藉らんと欲す。滿幸終に髮を削つて鎭西に逃る。氏淸に後るゝこと五歲にして、獲誅せらる。

〔通釋〕滿幸が逃げ出した時に、後から惡口を言つて逃げるのを止めようとしたものがあつた。滿幸は聞かない風をして逃げた。二月、伯耆にかへり、その將鹽冶師高をして、出雲を守らしめた。高詮の隊將、役人が來て利益を以て師高を降參させようと勸めて見た。師高は之に答へて曰ふに、「山名氏がこんな事になつたのは、足利氏に對して義理を失つたからであります。しかし私は、山名氏に對して義理を失ひたくはありません。吾が親父は、元來佐々木氏に事へて居たので、山名氏との間柄が私とは違つてゐますから、親父ならば御命令を承諾致しませう。何卒親父に善くお目をかけてやつて下さい」と。そこで、師高は其の父に諭して、降參させ、之を送つて城下まで行つた。父に永の別れをしてから彼は自殺して終つた。曰ふのに、「自分は父とは戰ふに忍びない」と。かくてその城は陷つて終つた。その兵が走つて、滿幸に報告した。滿幸は、氏冬が因幡に居ると聞いたので又其

處に逃げ込んだ。氏冬は、もとから降參し度い意志があつた。そこで滿幸を迎へ擊つて、申譯にしようと思つた。滿幸はとう／＼髮を剃つて九州に逃げた。氏清より後るゝこと五年目につかまへられて殺された。

氏清有二子。滿氏・時淸。初以父命逃、欲歸滿幸、而不相遇。亦削髮南走、欲見其母。母慍不見、伏刃死。二子走歸義理。義理乞降。義滿不許。令義弘之國。紀伊人盡附義弘。義理航海逃。氏冬乞降、陳其初無叛志。特許之。於是事卽定。三月、義滿欲率諸將賀捷于男山。細川賴之疾篤。義滿止行、使賴元問其所欲言。賴之對曰、近者山名氏族、動蔑敎令。臣常憂之。今旣獲焉。天下誰復爲復將軍之患者。臣可以瞑也。乃卒。義滿親臨其喪、垂泣送之、爲手寫佛經、又設法會于內野、弔陣亡將士。初氏滿聞氏淸叛、發兵將西上爲其黨援。聞其敗死、乃止。

【譯】氏清、二子あり。滿氏・時淸。初め父の命を以て逃れ、滿幸に歸せんと欲して、相遇はず。亦髮を削り南走し、其の母を見んと欲す。母慍つて見ず、刃に伏して死す。二子走り、義理に歸す。義理降を乞ふ。義滿許さず。義弘をして國に之かしむ。紀伊の人、盡く義弘に附く。義理、海に航して逃る。氏冬、降を乞ひ、其の初めより叛志なきを陳ぶ。特に之を許す。是に於て、事卽ち定る。三月、義滿諸將を率ゐて捷を男山に賀せんと欲

す。細川頼之、疾篤し。義滿行を止め、頼元をして其の言はんと欲する所を問はしむ。頼之、對へて曰く、「近ごろ山名氏の族、動もすれば敎令を蔑にす。臣、常に之を憂ふ。今既に獲らる。天下誰か復將軍の患を爲す者ぞ。臣以て瞑す可きなり」と。乃ち卒す。義滿親ら其の喪に臨み、泣を垂れて之を送り、爲めに佛經を手寫し、又法會を内野に設け、陣亡の將士を弔ふ。初め氏滿、氏清叛すと聞き、兵を發し、將に西上して其の黨援を爲さんとす。其の敗死を聞き、乃ち止む。

通釋 氏清には二人の子があつた。滿氏、時清といつた。はじめ、父の命令で逃げて、滿幸の處に行かうと思つたが、しかし滿幸に廻り會へなかつた。彼も亦髮を剃つて南に走り、其の母に遇はうと思つた。母は臆病者として怒つて遇はないで、刃に伏して自殺して終つた。二人の子は仕方なく走つて紀伊の義理の處に歸した。義理は降參を願ひ出た。義滿はそれを許さなかつた。そして新たに紀伊の領主となつた義弘をして國に就かせることにした。紀伊の人は皆義弘に附いた。それで義理は紀伊にゐられず船で逃げのびた。氏冬は降參を願ひ、初めから謀叛の志の無かつたことを述べた。そこで、特別に之を許してやつた。そんな譯で事件はすつかり落着した。三月・義滿は諸將を引きつれて、男山に參詣し、勝ち祝ひをしようと思つた。丁度細川頼之の病氣が重態に陷つた。義滿は男山に行くのを中止して、頼元に言ひ付け、言ひ遺し度いことを問はせた。頼之は答へて曰ふのに、「近頃山名氏の一族は、どうかすると將軍の命令を輕蔑しました。私は平生之を心配して居りました。併し今は早や山名氏も滅びました。今後は將軍の患をなす者はもう御座いません。私は安心して死ねます」と。さう言つて息を引き取つた。義滿は自らその葬儀に臨み、涙を流して之を送り、頼之の爲めに自らお經を寫し、又法要を内野で營んで陣歿した將士をも弔つた。初め氏滿は氏清が謀叛したと聞いたので、兵を繰り出し、京都に上つ

て加勢しようとした。併し氏淸が負けて死んだと聞いたので其の儘になつた。

先是、新田氏餘黨小山義政、殺宇都宮基綱。氏滿遣上杉憲方、攻降義政。義政復叛。氏滿自將擊殺之。其孤犍狗又起兵於陸奥。復攻殺之。其黨田村則義・小田五郎者、亦起兵。遣上杉朝宗、擊夷之。獲新田氏遺孽二人、送京師斬之。義滿乃加封氏滿、以陸奥・出羽。今川貞世等、亦擊平少貳冬資等。於是、四方大定。獨楠氏遺孽、保守大和・河内之間、以爲吉野藩蔽。義滿使畠山義深・大内義弘圖之。義深盡拔楠氏城壘。吉野孤立。

【書下讀】是より先き、新田氏の餘黨小山義政、宇都宮基綱を殺す。氏滿、上杉憲方を遣はし、攻めて義政を降す。義政復叛く。氏滿自ら將として擊つて之を殺す。其の孤犍狗、又兵を陸奥に起す。復攻めて之を殺す。其の黨田村則義・小田五郎といふ者、亦兵を起す。上杉朝宗を遣はし、擊つて之を夷ぐ。新田氏の遺孽二人を獲て、京師に送り、之を斬る。義滿乃ち氏滿に加封するに、陸奥・出羽を以てす。今川貞世等も、亦擊つて少貳冬資等を平ぐ。是に於て、四方大に定る。獨り楠氏の遺孽、大和・河内の間を保守し、以て吉野の藩蔽を爲す。義滿、畠山義深・大内義弘をして、之を圖らしむ。義深盡く楠氏の城壘を拔く。吉野、孤立す。

【通釋】これより先き、新田氏の餘黨の小山義政は宇都宮基綱を殺した。そこで關東管領足利氏滿は上杉憲方を遣はし攻めて義政を降參させた。義政は其の後また叛いた。故に氏滿は自分で大將となつて擊つて之を殺した。其の孤子の稚犬が又兵を陸奥に起した。再び攻めて之を殺した。その黨の田村則義・小田五郎といふ者が、亦兵を起した。上杉朝宗を遣はし、擊つて之を平らげた。新田氏の子孫で生き殘つてゐる二人の者を捕へ、京都に送つて斬つた。そこで義滿は氏滿に陸奥・出羽を加增してやつた。今川貞世等も亦少貳冬資等を擊つて之を平らげた。かくて四方が大體平定した。たゞ楠氏の子孫が大和・河内の邊を維持して、吉野の垣となり、南朝を保護してゐた。義滿は畠山義深・大内義弘をして之を圖らしめた。義深は全部楠氏の城や壘を攻め落した。かくて吉野は孤立の狀態となつた。

【語釋】楠氏遺孽（正勝、正元等。）

義弘乃以義滿意、奏請南朝、講和弭兵、駕還京師、授器於北朝、則自今以後、兩統更立、猶北條氏時。帝許之、乘輿北還。義滿以北朝意、欲用來降禮。帝欲用禪讓禮。物議洶洶。六角滿高謂義滿曰、器在彼。彼乃眞天皇矣。君第聽之。滿高、義滿弟、爲六角氏賴子者也。義滿乃迎駕、御于大覺寺。閏十月五日、後小松天皇受神器於後龜山天皇。後龜山、卽後醍醐皇孫也。自後醍醐南遷、凡五十有七年。而北朝五帝、改元者、自

暦應至明德十有七。天下以足利氏故、概奉其正朔。至是、與南朝合、物情翕服焉。

【訓讀】義弘乃ち義滿の意を以て、南朝に奏請す。「和を講じ兵を弭め、鸞、京師に還り、器を北朝に授くれば、則ち今より以後、兩統更立すること猶ほ、北條氏の時のごとくせん」と。帝、之を許し、乘輿、北に還る。義滿、北朝の意を以て、禾降の禮を用ひんと欲す。帝、禪讓の禮を用ひんと欲す。物議洶洶たり。六角滿高、義滿に謂つて曰く、「器、彼に在り。彼は乃ち眞の天皇なり。君、第之を聽せ」と。滿高は、義滿の弟、六角氏賴の子と爲れる者なり。義滿乃ち鸞を迎へ、大覺寺に御す。閏十月五日、後小松天皇、神器を後龜山天皇に受く。後龜山は、卽ち後醍醐の皇孫なり。後醍醐、南遷せしより、凡そ五十有七年。而して北朝五帝、改元する者、暦應より明德に至る十有七。天下、足利氏の故を以て、概ね其の正朔を奉ず。是に至り、南朝と合し、物情翕服せり。

【通釋】そこで義弘は義滿の内意を南朝に申上げてお願ひする所があつた。それは和睦をして戰爭を止め、陛下は京都にお歸り遊ばされ、三種の神器を北朝にお授け下さるならば、以後は南北交互に天位にお登りになるやうに致しまして、それは丁度北條の時代のやうに致しませうと申し出た。後龜山天皇は之をお許しなされ、北、京都へ御歸りなされた。義滿は北朝の内意で南朝から降參されるやうな形式にしようと思つた。後龜山天皇は禪讓の禮を用ゐられようとなされた。世上の噂が大分騷々しかつた。六角滿高は義滿に謂つて曰ふには「神器は先き樣に在るのです。何と申すも先き樣は眞の天皇で在られます。あなたはたゞ先き樣の申されるまゝになさいませ」と。この滿高は義滿の弟で、六角氏賴の養子になつてゐた人である。そこで義滿はその言葉を容れて、鸞を迎へ、大覺寺に入御をさせ申した。閏十月五日、北朝の後小松天皇は神器を南朝の後龜山天皇からお承けなされた。

後亀山天皇は卽ち後醍醐天皇の皇孫に渡らせられる。後醍醐天皇が南、吉野に遷られ給うてから、凡そ五十七年であつた。その間、北朝は五帝相繼ぎ給ひ、年號は暦應より明德に至るまで十七度改められた。天下は足利氏に勢力があつたので、大抵北朝の年號を用ゐてゐた。こゝに至つて南朝と合併し、天下の人心は一層足利氏に服するやうになつた。

語釋 ○禪讓禮（父が子に御位を讓られる禮式。）○五帝（光明、崇光、後光嚴、後圓融、後小松。）○十有七（暦應・康永・貞和・觀應・文和・延文・康安・貞治・應安・永和・康暦・永德・至德・嘉慶・康應・明德・以上で十六回。明德を改めて應永となされたから結局改元さるゝこと十七度となる。）

後小松天皇應永元年、義滿請讓征夷大將軍於長子義持。二年、義滿削髮、號道義、營北山別業、使諸將助役、起金閣。四年、徙焉。義持居室町第。而內外之事、取決於北山。十一月、氏滿卒。子滿兼襲關東管領。

訓讀 後小松天皇の應永元年、義滿、請うて征夷大將軍を長子義持に讓る。二年、義滿、髮を削り、道義と號し、北山の別業を營み、諸將をして役を助けしめ、金閣を起す。四年、徙る。義持は室町の第に居る。而して內外の事、決を北山に取る。十一月、氏滿、卒す。子滿兼、關東の管領を襲ぐ。

通釋 後小松天皇の應永元年、義滿はお願ひ申して、征夷大將軍の職を長子の義持に讓つた。二年に義滿は髮を削つて道義と號し、北山の別邸を建て、諸將をして工事を助けさせ、金閣を作つた。四年、其處に引き移つた。義持は室町の屋敷にゐた。併し內外の事件は皆北山の義滿によつて決められてゐた。十一月、氏滿が死んだ。其

の子滿兼が關東管領の職を繼いだ。

當是時、足利氏威及外國。朝鮮數遣使者鄭夢周等、造今川貞世、請修鄰好。是歲、使者遂來京師。義滿令大內義弘接待之。義弘嘗說貞世曰、「方今之勢、弱者被誅、強者免禍。公盍與我及大友氏連兵以自強。」貞世不聽。義弘反與斯波義時等、俱譖貞世。義滿乃更貞世約束。九國皆危疑。菊池・大村氏並起兵。義弘擊平之。兵力益強。陰與滿兼合謀、東西相援、以圖義滿。六年、滿兼密招貞世。貞世封其書上義滿。義滿召義弘。義弘不來。十月、義弘遂帥周防・長門諸國兵、至界城。土岐詮直起美濃、京極某起近江、山名氏淸二子起丹後、並應義弘。而滿兼亦出陣武藏府、宣言援義滿。義滿於是急召貞世曰、「吾愧見公也。」時幕府兵寡。土岐賴益・六角滿高等、往討美濃・近江。在者皆不堪戰。義弘曰、「氏淸唯攻京師、自疲兵馬。所以敗也。」因爲守計、修塹壘、起樓櫓、自巡視曰、「雖有百萬衆、不能拔已。」

是の時に當り足利氏の威、外國に及ぶ。朝鮮、數〻使者鄭夢周等を遣はし、今川貞世に造り、鄰好を修

めんと請ふ。是の歳、使者、遂に京師に來る。義滿、大内義弘をして之を接待せしむ。義弘嘗て貞世に說いて曰く、「方今の勢、弱者は誅せられ、强者は禍を免る。公盍ぞ我れ及び大友氏と、兵を連ね、以て自强せざる」と。貞世聽かず。義弘、反つて斯波義時等と、倶に貞世を譖す。義滿乃ち貞世の約束を更む。九國皆危疑す。菊池・大村氏、並に兵を起す。義弘擊つて之を平ぐ。兵力益〻强し。陰に滿兼と謀を合せ、東西相援け、以て義滿を圖る。六年、滿兼、密に貞世を招く。貞世、其の書を封じて、義滿に上る。義滿、義弘を召す。義弘來らず。十月、義弘、遂に周防・長門・諸國の兵を帥ゐて、界城に至る。土岐詮直は美濃に起り、京極某は近江に起り、山名氏淸の二子は丹波に起り、並に義弘に應ず。而して滿兼も亦出でゝ武藏の府に陣し、義滿を援くと宣言す。義滿是に於て急に貞世を召して曰く、「吾れ公を見るを愧づるなり」と。時に幕府、兵寡し。土岐賴益・六角滿高等往いて美濃・近江を討つ。在る者皆戰に堪へず。義弘曰く、「氏淸は唯だ京師を攻め、自ら兵馬を疲らす。敗れし所以なり」と。因つて守計を爲し、塹壘を修め、樓櫓を起し、自ら巡視して曰く、「百萬の衆ありと雖も、拔く能はざるのみ」と。

【通釋】この當時、足利氏の威は外國にまでも及んだ。朝鮮は度々使者鄭夢周等を派遣し、鎭西探題今川貞世の處に來らしめ、隣國の好誼を結び度いと申し出た。この歳遂にその使者は京都にやつて來た。義滿は大内義弘をして之を接待せしめた。義弘は嘗て貞世に說いて曰ふのに、「方今の形勢では弱い者は誅せられ、强い者は禍を免れることが出來るのです。貴公は何故私と大友氏との兵を連合して自强の策を講じられませんか」と。貞世は之を承知しなかつた。義弘は却つて斯波義時等とぐるになつて貞世を讒言した。そこで義滿は貞世が嘗て條陳した色々の掟を變改した。それが爲め九州は皆危ぶみ疑ふやうになつた。菊池・大村の兩氏は並に兵を起した。義

弘は討つて之を平らげた。從つて其の兵力は益々強くなつて來た。窃に鎌倉管領滿兼と謀を示し合はせ、東西相援け、義滿を滅さうと計畫した。六年、滿兼は窃に貞世を招いた。貞世は其の書を開かず、その儘義滿に上つた。そこで義滿は義弘を呼び出した。併し義弘は來なかつた。十月義弘は遂に周防・長門・諸國の兵を率ゐて界城まで來た。土岐詮直は美濃に起り、京極五郎左衛門は近江に起り、山名氏清の二子は丹波に起り、皆義弘に味方した。そして滿兼も亦出でゝ武藏の國府に陣取り、故らに義滿を助けるのだと宣言した。そこで義滿は急に貞世を呼び寄せて曰ふのに「余は貴公に會はせる顏がない」と。當時幕府には兵士の數が少かつた。土岐賴益・六角滿高等は、美濃・近江を討ちに出かけてゐた。だから京都に殘つてゐた連中は戰爭には役に立たない者計りであつた。義弘が曰ふのに「氏清は一圖に京都を攻め立てたから、自ら兵や馬を疲らせて終つた。それが爲めに敗北したのである」と。そこで彼は守備の方策を立て、堀や城壁を修繕し、二階や物見櫓を作り、自ら見廻つて曰ふには「百萬の軍勢を以て攻めても、到底落すことは出來ないのだ」と。

【語釋】貞世約束（前に貞世が九州で行ふ法規を定めて義滿に願つて許しを得たもの、それを義滿が怒つて皆變改したのである。）

義滿先遣僧中津、請起兵之由。義弘對曰、「吾自十六歲在鎭西、大小二十八戰、夷氏滿、靖南朝、功勞匪尠。昨年之役、介弟又沒。而幕下不恤其孤也。且聞有削國之議、密令少貳・菊池謀我。而頻頻召我。我不能無疑。吾已與鎌倉公約、將入諫幕下虐政也。」中津歸報。義滿笑曰、「奴輩自負其強、不知乃公實使然焉。」乃自率管領以下諸將出

陣東寺、遂進至男山。近畿將士來集者三萬餘騎。以細川賴元等十一將將之、往攻界城。城甚堅固。義滿令諸將息戰築長圍、至十二月。乃縱火四面而進。樓櫓皆倒。大戰良久。義弘走出、誤入管領畠山基國軍。基國子滿家與鬪、斬之。義滿乃賜紀伊於滿家。賴元子滿元有功。賜之和泉。謂之應永之役。

訓讀 義滿、先づ僧中津を遣はし、兵を起すの由を詰らしむ。義弘對へて曰く、「吾れ十六歲より、鎭西に在り大小二十八戰、氏淸を夷げ、南朝と媾じ、功勞尠きに匪ず。昨年の役、介弟又沒す。而るに幕下、其の孤を恤まざるなり。且つ國を削るの議あり、密に少貳・菊池をして、我を誅せしむと聞く。而して頻頻、我を召す。我れ疑なき能はず。吾れ已に鎌倉公と約し、將に入つて、幕下の虐政を諫めんとするなり」と。中津歸り報ず。義滿笑つて曰く、「奴輩自ら其の强を負み、乃公、實に然らしむるを知らず」と。乃ち自ら管領以下の諸將を率ゐ、出で、東寺に陣し、遂に進んで男山に至る。近畿の將士來り集る者三萬餘騎。細川賴元等の十一將を以て之に將とし、往いて界城を攻めしむ。城甚だ堅固なり。義滿諸將をして、戰を息め、長圍を築かしめ、十二月に至る。乃ち火を四面に縱つて進む。樓櫓皆倒る。大に戰ふこと良久し。義弘走り出で、誤つて管領畠山基國の軍に入る。基國の子滿家、與に鬪ひ之を斬る。義滿乃ち紀伊を滿家に賜ふ。賴元の子滿元、功有り。之に和泉を賜ふ。之を應永の役と謂ふ。

通釋 義滿先づ僧の中津を遣つて、何故に兵を起したかと、責め問はせた。義弘は對へて曰ふのに、「私は十六

歳の時から九州にゐて、大小二十八回も戰爭をなし、氏淸を平らげ、南朝と和を結ぶやうにし、その功勞は少くないのであります。去年菊池・大村を討つた時、大事な弟は討死しました。而るに將軍は其の孤子に不憫の情をかけて下されなかつた。それさへあるに聞けば私の領地を削られるといふ話で、又ひそかに少貳・菊池に命じて私を誅せしめようとされてゐると聞き及びました。そして度々私をお呼び出しになりました。私は不審に思はない譯に行きません。私は既に鎌倉殿と約束し、京都に入り、將軍の暴政をお諫めしようと思つてゐるのであります」と。中津は歸つて來て報告した。義滿は笑つて曰ふのに「彼奴は自分の強いことを鼻にかけ、仰山なことを申し居るが、實は皆乃公がそのやうにしてやつたのに、それを知らないでゐる、酷い奴だ」と。そこで自ら管領以下の諸將を率ゐ、出張つて東寺に陣取り、遂に進んで男山まで行つた。畿内地方の將士集り來るもの、三萬餘騎からあつた。細川賴元等十一人の大將をして、夫々之に將たらしめ、往つて堺城を攻めさせた。城は甚だ堅固であつた。義滿は諸將をして戰を止め、長圍ひを築かしめたが、その内に十二月になつた。そこで火を四方につけて進んだ。二階や物見は皆倒れた。可なり長い間、大合戰をした。義弘は走り出で、間違つて管領畠山基國の陣中に入り込んだ。基國の子の滿家は鬪つて之を斬つた。そこで義滿は紀伊を滿家に與へた。賴元の子滿元も功勞があつた。之には和泉を與へた。之を應永の役といふのである。

【語釋】介弟（介は大の意、左傳の字面。）○幕下（將軍をさす。）○其孤（弟の孤。）○管領（畠山基國。）○長圍（城をぐるり取卷き氣長に兵糧攻めにすること。）

土岐詮直等皆平グ。初メ詮直之舅ヲ曰フ康行ト。康行ハ者賴康ノ子也。天授中、襲グ美濃ノ守護ヲ。其ノ弟

滿貞在京師、欲奪兄職、譖曰「詮直謀反、康行助之」。義滿遣滿貞及從弟賴益、往討降之、宥康行、逐詮直、以故詮直遂死於叛。

訓讀 土岐詮直等・皆平ぐ。初め詮直の舅を康行と曰ふ。康行は賴康の子なり。天授中、美濃の守護を襲ぐ。其の弟滿貞京師に在り、兄の職を奪はんと欲し、譖して曰く、「詮直・反を謀り、康行、之を助く」と。義滿、滿貞、及び從弟賴益を遣はし、往き討つて之を降さしめ、康行を宥し、詮直を逐ふ。故を以て、詮直遂に叛に死せり。

通釋 土岐詮直等も皆平定された。はじめ詮直の母方の叔父に當るものに康行といふのがあつた。この康行は賴康の子である。彼は天授年間に美濃の守護職を繼いだ。所が其の弟の滿貞は京都にゐて兄の職を奪取らうと思ひ、讒言して曰ふには・「詮直は叛を謀り、康行は之を助けてゐます」と。そこで義滿は滿貞及び從弟の賴益を遣はし、往つて之を討つて降參させ、一方康行を赦して、詮直を追放した。そんな譯で、詮直は遂に謀叛人の名を受けて死んだのであつた。

近畿既平。滿兼乃引兵、還鎌倉。義滿諜知其謀。或因間貞世曰「貞世子弟留守遠江者與謀焉。彼曩被命、不即來者以此」。貞世懼、走歸遠江。義滿怒、欲討貞世以及滿兼。滿兼執事上杉朝宗百方講和。義滿乃賜滿兼以足利莊。凡與謀者、皆釋不問。貞世

退居藤澤。上杉憲定使人謂貞世曰、「子之退居、適足以招疑耳」。貞世乃歸遠江。憲定憲方子也。已而義滿思其功勞、召至京師、待之如初。踰歲而卒。貞世頗涉書史、著書譏切時政。往往有中云。初貞世父範國仕尊氏、爲駿河・遠江守護。命貞世襲領。貞世不受。使兄範氏領駿河、襲至姪氏家・姪孫泰範。及義滿時、乃割駿河數郡、加賜貞世。泰範意貞世所請、與義弘俱譖之。至是、義滿終令貞世養子仲秋襲領遠江、如細川賴元故事。七年、大內義弘子持盛來降。以其嘗諫父宥之、削其封之半。

【新釋】近畿既に平ぐ。滿兼、乃ち兵を引き鎌倉に還る。義滿、諜して其の謀を知る。或人因つて貞世を間して曰く、「貞世の子弟、遠江に留守する者、謀に與る。彼れ嚢に命を被り、卽ち來らざりしは、此れを以てなりと。」貞世懼れ、走りて遠江に歸る。義滿怒り、貞世を討ち、以て滿兼に及ばんと欲す。滿兼の執事上杉朝宗、百方講和す。義滿乃ち滿兼に賜ふに、足利莊を以てす。凡そ謀に與る者、皆釋して問はず。貞世退きて藤澤に居る。上杉憲定、人をして貞世に謂はしめて曰く、「子の退去は、適ゝ以て疑を招くに足るのみ」と。貞世乃ち遠江に歸る。憲定は、憲方の子なり。已にして義滿、其の功勞を思ひ、召して京師に至らしめ、之を待すること初めの如し。歲を踰えて卒す。貞世頗る書史に渉り、書を著し、時政を譏切す。往往中るありと云ふ。初め貞世の父範國尊氏に仕へ、駿河・遠江の守護と爲り、貞世に命じて襲領せしむ。貞世受けずして、兄範氏をして駿河を領せし

め、襲いで姪氏家、姪孫泰範に至る。義滿の時に及んで、乃ち駿河の數郡を割き、貞世に加賜す。泰範貞世の請ふ所と意ひ、義弘と倶に之を譖す。是に至つて、義滿終に貞世の養子仲秋をして、襲いで遠江を領せしむること、細川賴元の故事の如くす。七年、大内義弘の子持盛來り降る。其の嘗て父を諫めしを以て之を宥し、其の封の半を削る。

【通釋】畿内は既に平らいだ。そこで滿兼は兵をつれて鎌倉に歸つた。義滿は間者によつて、其の「謀」を搜り知つた。或る人がそれを利用して、今川貞世を讒言して曰ふのに「貞世の子弟で遠江に留守をしてゐる者は、滿兼の謀叛に加つてゐました。彼が前に君の命令を受け乍ら、早速來なかつたのは、こんなことからであります」と。貞世はこの讒言に懼れをなして遠江に馳せ歸つた。義滿は怒つて貞世を征伐し、それから進んで滿兼をも討たうと思つた。滿兼の執事の上杉朝宗は色々手を盡して和睦を計つた。そこで義滿は滿兼に足利の莊を與へて、總て此の「謀」に加つた者は皆赦免して問題としなかつた。貞世は退いて藤澤にゐた。上杉憲定は人をやつて貞世に言はしめて曰ふには「君が退いて藤澤に居ることは却つて疑ひを招くもとであります」と。そこで貞世は遠江に歸つた。この憲定といふ男は、憲方の子である。その内に義滿は貞世の功勞を思ひ、京都に呼び寄せて、そして以前のやうに待遇してやつた。併し貞世はその年を越えて遂に病死した。貞世は隨分書物を讀んでゐて、書物を著し、當時の政治を痛く非難した。往々にして道理に中つてゐたといふことである。初め貞世の父範國は、尊氏に事へ、駿河・遠江の守護となつてゐたが、貞世に命じてそれを相續せしめた。所が貞世は自分は貰はないで、兄の範氏に駿河を領せしめ、繼いで姪の氏家、その子泰範に傳へた。義滿の時になつて、駿河の數郡を分けて、貞世に加へ與へた。所が泰範は、是れは必定貞世が願ひ出たからであると疑ひ・大内義弘と與に貞世を讒言した。

今や貞世が死んだので、義滿は終に貞世の養子仲秋をして遠江を相續せしめるやうにして、嘗て細川賴元が兄の後を承けた例に從つた。七年、大内義弘の子の持盛が降參して來た。持盛は父の謀叛を諫めたことがあるので、之を赦し、その代り半地を減らした。

【語釋】知其謀（表面幕府を助けると宣言し實は義弘を惡んだといふ謀を知つたのである。）○留守遠江（貞世が九州に探題をしてゐたので、遠江は子弟が留守してゐた。）○姪孫泰藤（姪の生んだ孫といふ義で卽ち姪の子になる。泰藤は實は氏家の弟、氏家に子が無かつたので弟を子としたのである。）○仲秋（貞世の實弟、養つて子とした。）○賴元故事（賴之子なく弟賴元を子として封を襲がせた故事。）

義滿性豪侈、而數平亂逆、志益驕、待將帥甚倨。朝臣往來其家者、或以家隷遇之。其削髮之歲、適叡山、儀准法皇御幸。又喜土木、創寶幢・相國諸禪寺、定爲五山、置僧錄司。僧中津・妙葩・祖阿・周信等、皆見厚遇。先是、我西南不逞之徒、侵擾外國。義詮時、元主令韓人來請爲戢之。元亡、明興。明主元璋亦數託僧來請。八年五月、義滿私遣祖阿、通好於明。參議菅原秀長草書。書辭甚恭。九年、明主使僧道彝齎書及冠服、封義滿爲日本國王。義滿受之。至足利氏中世、使聘往來、皆以王稱。

【通釋】義滿、性豪侈、而して數〻亂逆を平げ、志益〻驕り、將帥を待つこと甚だ倨る。朝臣其の家に往來する者、或は家隷を以て之を遇す。其の髮を削るの歲、叡山に適く。儀、法皇の御幸に准ず。又土木を喜び、寶幢・相

國の諸禪寺を創め、定めて五山と爲し、僧錄司を置く。僧中津・妙葩・祖阿・周信等皆厚遇せらる。是より先き我が西南不逞の徒、外國を侵擾せり。義詮の時、元主、韓人をして來り、爲めに之を戢めんことを請はしむ。元亡び、明興る。明主元璋も亦數〻僧に託し來り請ふ。八年五月、義滿、私に祖阿を遣はし、好を明に通ず。參議菅原秀長、書を草す。書辭甚だ恭し。九年、明主、僧道彝をして、書及び冠服を齎し、義滿を封じ、日本國王爲らしむ。義滿、之を受く。足利氏中世に至り、使聘往來、皆王を以て稱す。

【通釋】義滿は生れつき奢侈贅澤で、度々叛亂を平定して、その志は愈々增長し、部下の大將を扱ふにも大層橫柄であつた。朝廷の公卿衆でも其の家に往き來する者は、家來と同樣に扱ふ事もあつた程である。彼は髮を剃つた年に（應永二年）叡山に往つた。その儀式は法皇の御幸になぞらへた。又建築が好きで、寶幢・相國などの禪寺を建立し、定めて五山となし、僧錄司といふ役人を置いた。僧の中津・妙葩・祖阿・周信などは皆手厚く待遇せられた。これより先き、我が西南地方の不平の者共が、外國を侵し亂してゐた。義詮の時、元の天子が朝鮮人をして日本に來させ、之が取締りを嚴重にして貰ひ度いと請はしめた。その內に元は滅び、明が興つた。明主朱元璋も亦度々僧に依賴して來り請はしめた。八年五月に義滿は勅許も請はず、勝手に祖阿を遣はして明と交際を結ばせた。參議菅原秀長がその書面の下書きをした。その文言は甚だ丁寧であつた。九年、明主は僧道彝をして書面及び明の冠と衣服とを持參させ、義滿を封じて日本國王とならしめた。義滿は之を受け容れた。足利氏の中世に至るまで、日本と明とは使者が往き來して、皆足利を王と稱した。

【語釋】五山（靈龜山天龍寺・萬年山相國寺・東四山建仁寺・惠日山東福寺・萬壽寺。萬壽寺は京中にあつたから山號は無い。）〇僧錄司（僧徒取締りの役人。）〇中津（絕海と號し、詩文に工であつた。）〇周信（義堂と號し詩文に工であつた。）

義滿又多內嬖、生少子義嗣、愛之、欲廢義持、未果。先是、帝再幸室町第。十五年三月、請幸北山。義滿自被法服、携義嗣奉迎。拜義嗣爲五位左馬頭、遷四位少將。四月、冠于宮中。儀准親王。自是嫡庶不相善。識者譏之。然尊氏・義詮之世、諸將狃恩、叛服無常。自氏清・義弘伏誅、無不畏服者。世稱、「義滿生歲戊戌。字皆從戈。故能以戈戟平天下也」。

【訓讀】義滿又內嬖多し。少子義嗣を生み之を愛し、義持を廢せんと欲す。未だ果さず。是より先き、帝再び室町の第に幸す。十五年三月、北山に幸せられんことを請ふ。義滿自ら法服を被り、義嗣を携へて奉迎す。義嗣を拜して、五位左馬頭と爲し、四位少將に遷さる。四月、宮中に冠す。儀、親王に准ず。是より嫡庶相善からず。識者、之を譏る。然れども尊氏・義詮の世は、諸將、恩に狃れ、叛服常なし。氏清・義弘、誅に伏せしより、畏服せざる者なし。世に稱す、「義滿の生歲は戊戌なり。字、皆戈に從ふ。故に能く戈戟を以て天下を平ぐ」と。

【通釋】義滿には又お氣に入りの妾が多かつた。末つ子の義嗣を生んでからは之を鍾愛し、後嗣の義持を廢しようと思つた。併しまだそれは仕遂げなかつた。これより前、天皇が二度までも室町の屋敷に行幸遊ばされた。十五年三月、義滿は北山の別邸、金閣に行幸せられんことを願ひ出た。義滿自ら僧衣を纏ひ、義嗣をつれてお出迎ひをした。義嗣を叙して正五位左馬頭になされ、次いで又四位少將に昇進せしめられた。翌四月、宮中で義嗣

の元服の式を擧げた。その儀式は親王になぞらへた。これから後、惣領(義持)と妾腹の息子(義嗣)との仲が惡くなつた。見識ある人は皆義滿を譏つた。併し尊氏・義詮の頃には諸將が皆恩惠に附け上つて、叛いたり、服從したりして、一向に定まりがなかつた。所が義滿の時に山名氏清 大內義弘が誅戮せられてからといふものは、畏れ服しない者は無くなつた。世間で噂してゐたが、義滿の生れ歲は戊戌である。戊も戌もその文字は皆戈といふ字に從つてゐる。だから義滿は戈で以て天下を平定したのであると曰つてゐた。

【語釋】再幸(弘和三年、應永二年。)

日本外史新釋 卷七終

日本外史新釋 卷八

足利氏正記

足利氏中

五月、義滿薨。義滿初敍從五位下、任左馬頭、累遷從一位左大臣、兼右近衞大將・右馬寮御監、終至太政大臣、准三宮。初久我氏爲源氏長者、充淳和奬學兩院別當。至義滿時、乃屬之於足利氏。終足利氏之世、其官爵敍任、例槪如此。而至太政大臣者、止於義滿。義滿之薨、詔贈太上皇號。義持惶懼、辭不受。明主謚義滿、曰恭獻王。義持受之。明年六月、滿兼卒。初氏滿至從三位、左兵衞督、而滿兼以從四位下、左兵衞佐、終。遂以爲例。

【原文】五月、義滿薨ず。義滿、初め從五位下に敍せられ、左馬頭に任ぜられ、從一位、左大臣に累遷し、右近衞大將、右馬寮の御監を兼ね、終に太政大臣に至り、三宮に准ぜらる。初め久我氏、源氏長者と爲り、淳和奬學兩院の別當に充つ。義滿の時に至り、乃ち之を足利氏に屬す。足利氏の世を終るまで、其の官爵敍任、例として槪ね此くの如し。而して太政大臣に至る者は、義滿に止る。義滿の薨ずるや、詔して太上皇の號を贈らる。義持惶懼し、辭して受けず。明主義滿に諡し、恭獻王と曰ふ。義持、之を受く。明年六月、滿兼卒す。初め氏滿、從三位左兵衞督に至り、而して滿兼、從四位下左兵衞佐を以て終る。終に以て例と爲る。

【通釋】五月、義滿は歿した。義滿は初め從五位下に敍せられ、左馬頭に任ぜられ、從一位左大臣に累進し、右近衞大將、右馬寮御監をも兼ね、終には太政大臣にまでなり、三宮に准じた待遇をされた。初め久我氏は源氏の長者となり、淳和奬學兩院の別當職に任ぜられてゐた。義滿の時になつて、この二つの別當職を足利氏に附けられることになつた。足利氏の最後まで代々將軍に任ぜられた者の官爵敍任は大抵例として義滿のやうにされた。併し太政大臣になつたものは義滿だけであつた。義滿が薨じた時、詔して太上皇の尊號が贈られた　其の嗣子義持は餘り勿體ないので恐れて之を辭し頂戴しなかつた。明の天子は義滿に諡して恭獻王といつた。義持は之を受けた。翌年（應永十六年）六月、鎌倉の滿兼が死んだ。初め氏滿は從三位左兵衞督にまでなつたが、滿兼は從四位下左兵衞佐で一生を終つた。以後鎌倉管領の官爵敍任はこれが例となつた。

【語釋】五月（應永十五年五月。）○准三宮（太皇太后、皇太后、皇后の三宮に准ぜられること。）○久我氏（村上天皇の皇子具平親王の子孫。）○長者（その同姓のものを指圖して、皇室に事ふる役目、奬學院の別當職が之に任じた。）○淳和奬學兩院別當（淳和院は淳和天皇の宮で皇后下氏は建て丶學となされた。奬學院は在原業平が建てた。皆源氏の子弟を教ふる所その別當は源氏公卿の筆頭に任ぜられた。中古以來別當職のみ存した。崇德天皇以來この職は久我氏の專有であつたが、この時足利氏に奪はれた譯である。）○太上皇（太上皇の尊號は天皇御退位の後に申上げる稱である。それを臣に賜らるゝに至つたことは驕臣の跋扈に起因するのである。）○明主（太宗、名は棣、卽ち永樂帝のこと。）

滿兼二子、持氏・持仲。持氏爲嗣。先是、宇都宮氏廣爲亂。斯波持詮爲陸奥探題、擊斬之、獻首鎌倉。滿兼賜持詮以氏廣邑、以賞之。伊達政宗作亂。滿兼遣執事上杉氏憲、擊平之。十八年飛驒國司藤原尹綱兵起。義持遣京極高數、擊平之。十九年、帝讓位於皇太子。是爲稱光帝。諸南朝遺臣、請立後龜山後如約。足利氏議立南朝皇胤者、非我家之志也。終不聽其請。於是、諸國兵起。二十年、伊達氏・懸田氏、起於陸奥。持氏令畠山國詮攻之。二十一年、北畠氏・關氏、起於伊勢。義持令土岐賴益攻之。明年皆平。

訓讀 滿兼の二子、持氏、持仲。持氏、嗣と爲る。是より先き、宇都宮氏廣、亂を爲す。斯波持詮、陸奥の探題と爲り、擊つて之を斬り、首を鎌倉に獻ず。滿兼・持詮に賜ふに氏廣の邑を以てし、以て之を賞す。伊達政宗亂を作す。滿兼・執事上杉氏憲を遣はし、擊つて之を平げしむ。十八年、飛驒國司藤原尹綱の兵起る。義持、京極高數を遣はし、擊つて之を平げしむ。十九年、帝位を皇太子に讓る。是を稱光帝と爲す。諸南朝の遺臣、後龜山の後を立つること、約の如くせんと請ふ。足利氏議す、「南朝の皇胤を立つるは、我が家の志に非ざるなり」と。終に其の請を聽かず。是に於て、諸國の兵起る。二十年、伊達氏・懸田氏、陸奥に起る。持氏、畠山國詮をして之を攻めしむ。二十一年、北畠氏・關氏、伊勢に起る。義持、土岐賴益をして之を攻めしむ。明年、皆平ぐ。

【通釋】滿兼には二人の子持氏・持仲といふのがあつた。持氏が跡目となつた。これより以前宇都宮氏廣が亂を爲した。斯波持詮は、陸奥の探題であつたが、擊つて之を斬り、その首を鎌倉に獻じた。滿兼は持詮に氏廣の領地を與へて其の功を賞した。次いで伊達政宗が亂を爲した。滿兼は執事上杉氏憲を派遣して擊つて之を平らげさせた。十八年、飛驒國司藤原尹綱の兵が騷いだ。義持は京極高數を派遣して擊つて之を平らげさせた。十九年、後小松天皇は位を皇太子に讓られた。これが稱光天皇である。多くの南朝の遺臣等は、後龜山天皇の後を約束通りに立て、貰ひたいと願うた。足利氏では評議して、「南朝の皇胤を立てることは、わが足利家の志でない」といふことになつた。とうとう、その願を聞き入れなかつた。かく約束が違つたので諸國の兵が騷ぎ出した。二十年、伊達氏、懸田氏は陸奥に起つた。持氏は畠山國詮をやつて、之を攻めさせた。二十一年、北畠氏・關氏は伊勢に起つた。義持は土岐頼益をして之を攻めさせた。翌年（二十二年）これ等は皆平らいだ。

【語釋】氏廣（下野に亂を起す）一（）如約（約は兩統更立の約）

當此之時、關東兵力倍於京師、而天子廢立、公卿易置、則京師專之、威權無比。世俗呼曰公方。初義滿定幕府官政、武衛・細川・畠山氏、更爲管領、謂之三管。山名・一色・京極・赤松氏、更爲侍所別當、謂之四職。武衛、即斯波氏、京極、即佐佐木氏也。武田・小笠原氏、更司弓馬禮式。吉良・今川・澁川氏、更爲武者頭。伊勢氏、爲奏者、謂之七頭。關東

亦擬之、自稱曰公方。故上杉憲房之後、世〻居鎌倉山內。憲房兄重顯。其後世〻居扇谷。稱兩上杉。更〻爲管領。而故氏滿弟滿直管陸奧・出羽。號曰三管。千葉・小山・長沼・結城・佐竹・小田・那須・宇都宮八族、曰八館。

【訓譯】此の時に當り、關東の兵力、京師に倍す。而して天子の廢立、公卿の易置は、則ち京師、之を專にし、威權、比なし。世俗呼んで公方と曰ふ。初め義滿、幕府の官政を定む。武衞・細川・畠山氏、更〻管領と爲る。之を三管と謂ふ。山名・一色・京極・赤松氏。更〻侍所の別當と爲る。之を四職と謂ふ。武衞は、卽ち斯波氏、京極は、卽ち佐佐木氏なり。武田・小笠原氏、更〻弓馬、禮式を司り、吉良・今川・澁川氏、更〻武者頭と爲り、伊勢氏・奏者と爲る。之を七頭と謂ふ。關東も亦、之に擬し、自ら稱して公方と曰ふ。故の上杉憲房の後、世〻鎌倉の山内に居る。憲房の兄は重顯なり。其の後、世〻扇谷に居る。兩上杉と稱す。更〻管領と爲る。而して故の氏滿の弟滿直、陸奧・出羽を管す。號して三管と曰ふ。千葉・小山・長沼・結城・佐竹・小田・那須・宇都宮の八族を、八館と曰ふ。

【通釋】この當時、關東管領の兵力は京都の將軍に倍してゐた。そして天子を廢したり立てたり、公卿の官職を置き易へたりすることは京都の將軍が勝手にやつてゐて、將軍の威權は比べものもない位であつた。世間では將軍のことを公方と曰つてゐた。初め義滿は幕府の官政を制定した。武衞・細川・畠山の三氏がかはる〴〵管領となつた。之を三管領といつた。山名・一色・京極・赤松の四氏はかはる〴〵侍所の別當となつた。之を四職とい

つた。武衛といふのは卽ち斯波氏で、京極は卽ち佐佐木氏である。この外、武田、小笠原の兩氏はかはる／＼弓馬禮式のことを掌り、兩吉良・今川・澁川の諸氏はかはる／＼武者頭となり、伊勢氏は奏者となつた。これを合せて七頭といつた。關東の方でも亦之にならつて自ら公方と稱した。故の上杉憲房の子孫が代々鎌倉の山内に居つた。憲房の兄は重顯である。その子孫は代々扇谷に居つた。之を兩上杉といつてゐた。これがかはる／＼管領となつた。そして故の氏滿の弟滿直は陸奥出羽を支配してゐた。これを合はせて三管領といつた。千葉・小山・長沼・結城・佐竹・小田・那須・宇都宮の八族を八館といつた。

【語釋】公方（元來將軍をさしていふ。）○武衛（斯波義將以來、代々右兵衛佐に任ぜらる。故に斯波氏を武衛といつた。）○京極（佐々木氏の邸は京極にあつたから京極氏といつた）

當持氏之時、上杉氏憲執事。持氏與之有隙。氏憲辭職、以上杉憲基代之。憲基憲定子、憲房玄孫也。氏憲、重顯玄孫也。持氏叔父曰滿隆、頗有聲望、養姪滿仲、爲子。氏憲說滿隆曰「公方耽溺酒色、不可統師。而憲基爲政、又有偏私。匡邪靖難、非君而誰。君若舉事、臣請輔之」。乃矯義持敎令、密招將士。將士競附。二十三年十二月、氏憲將兵、奉滿隆・滿仲、以圍持氏。持氏大驚、遽騎馬而走、入憲基佐介第。憲基令族氏定拒之。衆寡不敵。持氏夜出西走。從士多爲追兵所殺。至藤澤道場、氏定自刃。憲基奔越後。

【通釋】持氏の時に當り、上杉氏憲事を執る。持氏、之と隙あり。氏憲、職を辭し、上杉憲基を以て之に代ふ。

憲基は、憲定の子、憲房の玄孫なり。氏憲は、重顯の玄孫なり。持氏の叔父を滿隆と曰ふ。頗る聲望あり。姪滿仲を養ひ、子と爲す。氏憲、滿隆に說いて曰く、「公方、酒色に耽溺し、師を統ぶ可からず。而して憲基、政を爲し、又偏私あり。邪を匡し、難を靖んずるは、君に非ずして誰ぞ。君若し事を擧げば、臣、請ふ。之を輔けん」と。乃ち義持の敎令と矯り、密に將士を招く。將士競ひ附く。二十三年十二月、氏憲、兵に將として、滿隆・滿仲を奉じ、以て持氏を圍む。持氏、大に驚き、遽に馬に騎つて走り、憲基の佐介の第に入る。憲基、族氏定をして之を拒がしむ。衆寡、敵せず。持氏、夜出でゝ西に走る。從士、多く追兵の殺す所と爲る。藤澤の道場に至り、氏定、自刃す。憲基、越後に奔る。

通釋 持氏の時に當つては上杉氏憲が政務を執つて居た。持氏は之と不仲であつた。そこで氏憲は辭職したので上杉憲基を以て之に代へた。憲基は憲定の子で憲房の玄孫である。氏憲は重顯の玄孫である。持氏の叔父は滿隆といつた。大層世間の評判が善かつた。姪の滿仲を養つて子としてゐた。氏憲は滿隆に說いて曰ふには「公方（持氏）は酒や女に耽り溺れてゐますから、あれでは軍勢を統轄すること抔は到底出來ません。そして憲基が政治をしてゐますが、この男が又依怙贔屓の沙汰ばかりやつてゐます。今日に當つて邪なものを匡止し、世の難儀を靜めるのには貴方でなくて外に誰がありませう。貴方が若し事をお擧げなさるならば、私は及ばず乍ら御助力致しませう」と。そこで義持の命令だといつて詐り、ひそかに將士を招集した。將士は爭つて之に附いた。二十三年十二月、氏憲は兵に將として滿隆、滿仲を守り立て、持氏を取り圍んだ。持氏は非常に驚き慌て、馬に乘つて逃げ、憲基の佐介の屋敷に逃げ込んだ。憲基は、一族の氏定をして氏憲を拒がしめた。併し多勢に無勢で到底敵はなかつた。持氏は夜出でゝ西に走つた。お供の者は多く追手に殺された。藤澤の寺まで來たが、氏定はそこ

で自殺した。憲基は越後に奔つた。

【語釋】滿隆（氏滿の第三子。）○滿仲（持氏の弟。）○佐介（鎌倉の地名。）○藤澤（相模）○道場（佛寺。遊行寺といふ。）

諸敗軍聞持氏在伊豆國淸寺、皆來集焉。狩野介某、黨於氏憲、來攻破之。持氏走駿河、依今川範忠、告急於京師。京師方流言。大納言義嗣以不得立、竊懷觖望、與氏憲通謀、欲伐義持。義持迫義嗣、使削髮、幽之于相國寺、下敎關東將士、令救持氏。憲基起兵越後、江戸氏・豐島氏・二階堂氏、竝起兵武藏、以討氏憲。氏憲遣兵攻之、敗歸。氏憲壻岩松持國、起兵上野、以應氏憲。二十四年正月、氏憲與持國夾攻武藏、勝而卒之。既而持國驕恣。將士離心。氏憲終敗歸。而附持氏者日衆。持氏乃以今川氏・大森氏・葛山氏兵攻鎌倉、復之。滿隆・滿仲・氏憲、及氏憲宰長尾氏春等、皆自殺于雪下僧舍。持國聚殘兵、與持氏將舞木宮内戰、兵敗被擒。明年、義嗣暴卒。

【通釋】諸敗軍、持氏、伊豆の國淸寺に在りと聞き、皆來り集る。狩野介某、氏憲に黨し、來り攻めて之を破る。持氏、駿河に走り、今川範忠に依り、急を京師に告ぐ。京師、方に流言す。「大納言義嗣立つを得ざるを以て、竊

に觖望を懷き、氏憲と謀を通じ、義持を伐たんと欲す」と。義持、義嗣に迫り髮を削らしめ、之を相國寺に幽し、敎を關東の將士に下し、持氏を救はしむ。憲基、兵を越後に起し、江戸氏・豐島氏・二階堂氏、並に兵を武藏に起し、以て氏憲を討つ。氏憲、兵を遣はして之を攻め、敗れ歸る。氏憲の壻岩松持國、兵を上野に起し、以て氏憲に應ず。二十四年正月、氏憲、持國と、武藏を夾み攻め、勝つて之を平ぐ。既にして持國驕恣なり。將士離心す。氏憲、終に敗れ歸る。而して持氏に附く者日に衆し。持氏乃ち今川氏・大森氏・葛山氏の兵を以て、鎌倉を攻め、之を復す。滿隆・滿仲・氏憲、及び氏憲の宰長尾氏春等、皆雪の下の僧舍に自殺す。持國、殘兵を聚め、持氏の將舞木宮内と戰ひ、兵敗れ擒にせらる。明年、義嗣、暴に卒す。

〔通釋〕敗北した諸軍は持氏が伊豆の國淸寺に居ると聞いたので、皆そこに集まつて來た。すると狩野介某は氏憲に味方して攻め來り之を打ち破つた。持氏は駿河に逃げ、今川範忠にたより此の度の大變を京都の將軍に知らせた。京都では言ひふらして曰ふに「大納言義嗣は立つて將軍となることが出來ないので、ひそかに怨み心を抱き、氏憲と示し合はせて、義持を伐たうと思つてゐるのだ」と。そこで義持は義嗣に迫つて髮を剃らせ、之を相國寺に押し込め、一方命令を關東の將士に下して持氏を援けさせた。そこで、憲基は兵を越後に起し、江戸氏・豐島氏・二階堂氏などは皆兵を武藏に起して氏憲を討つた。氏憲は兵を遣はして之を攻めたが、敗れて歸つて來た。氏憲の壻岩松持國は兵を上野に起して、氏憲に味方した。二十四年正月、氏憲は持國と與に、武藏を夾み擊ち、勝つて諸氏を平らげた。その內に持國は心驕り我儘になつて來た。將士は皆愛想を盡かした。結局、氏憲は負けて歸つて來た。一方持氏に附くものは日增しに多くなつて來た。そこで持氏は今川氏・大森氏・葛山氏の兵を率ゐて鎌倉を攻め、之を取り戻した。滿隆・滿仲・氏憲、及び氏憲の家宰長尾氏春等は皆雪下の寺で自殺した。

持國は殘兵を集めて、持氏の大將舞木宮内と戰ひ敗けて擒にせられた。翌年、義嗣も急に死んで終つた。

〔註〕觖望（望む所に滿たぬをいふ。）〇雪下（鎌倉）〇暴卒（義持に殺された。）

二十九年、佐竹某叛持氏。持氏與戰于比企谷、斬之。小栗滿重・宇都宮持綱、又叛據結城。持氏令上杉氏・小山氏擊之。明年、持氏自將攻結城、拔之、斬滿重・持綱。京師援軍至駿河、聞事平而歸。持氏凱旋、至武藏府。聞義持庇故氏憲孤子某也、怨之有畔心。欲移兵西上。三十一年三月、義持遣僧服西堂、至武藏、諭持氏弭兵。持氏不聽。西堂往來辯說、請義持、持氏約爲父子。至九月、和成。持氏乃歸鎌倉。義持性婾惰、時會京畿無事、以游宴爲事。使三管四職更治具招請。先是一歲、讓軍職於長子義量、而自削髮、稱道詮。

〔譯〕二十九年、佐竹某、持氏に叛く。持氏、與に比企谷に戰ひ、之を斬る。小栗滿重・宇都宮持綱、又叛きて結城に據る。持氏、上杉氏・小山氏をして之を擊たしむ。明年、持氏自ら將として、結城を攻めて之を拔き、滿重・持綱を斬る。京師の援軍、駿河に至り、事平ぐと聞いて歸る。持氏、凱旋し、武藏の府に至る。義持、故の氏憲の孤子某を庇ふと聞くや、之を怨んで畔心あり。兵を移して西上せんと欲す。三十一年三月、義持、僧服西

堂を遣はし、武藏に至り、持氏を諭して兵を弭めしむ。持氏聽かず。西堂、往來辯說し、義持・持氏に請ひ、約して父子と爲らしむ。九月に至り、和成り、持氏乃ち鎌倉に歸る。義持、性、媮惰、時に會〻京畿無事なり。游宴を以て事と爲し、三管四職をして更〻治具して招請せしむ。是より先き一歲、軍職を長子義量に讓り、而して自ら髮を剃り道詮と稱す。

【通釋】二十九年、佐竹某が持氏に叛いた。持氏は比企谷で戰つて、之を斬つた。小栗滿重・宇都宮持綱が又叛いて、結城に立て籠つた。持氏は上杉氏・小山氏をして之を擊たしめた。翌年持氏は自ら大將となつて、結城を攻めて、之を陷れ、滿重、持綱を斬つた。京都からの援兵は駿河まで來たが、既に平定したと聞いたので、引き返へした。かくて持氏は凱旋して、武藏の國府まで來た。義持が故の叛臣氏憲の孤子某を庇つてゐると聞いたので、之を怨んで謀叛の心を起した。そこでその傭兵を起して西、京都に攻め上らうと思つた。三十一年三月義持は服西堂といふ僧を派遣し、武藏に至り、持氏を諭して兵を止めさせようとした。持氏は承知しなかつた。西堂は武藏と京都とを往來して說いた結果、義持・持氏兩人に賴んで約して親子となつて貰つた。九月になつて、和睦が出來上つたので、持氏は鎌倉に歸つた。義持は生れつき誠に無性者で折しも京畿地方は太平であつたので日々游山宴會を仕事となし、三管領・四職の者どもに更代で御馳走をして招待させた。これより一年前・將軍職を長男義量に讓り、自分は髮を剃り落して道詮と稱してゐた。

【語釋】佐竹某（常陸）○比企谷（相模）○孤子某（實秋、教朝。）○服西堂（一說昭西堂に作る。總福寺の僧。）

三十二年、義量卒。義持再聽政、寵赤松持貞。持貞貞範孫也。初貞範弟則祐、以功領

播磨・備前・美作、以傳於子義則。三十四年、義則卒。四子、則友・滿祐・祐之・義雅。則友夭、滿祐爲嗣、襲領三州。義持欲削其所領予之持貞。滿祐怒、自焚其第、奔歸播磨。義持遣細川持元・山名滿熙往撃之。諸將多與滿祐連姻、不欲往。十月、連署訴持貞亡狀。義持不得已、令持貞自裁、而赦滿祐、歸京師。

【讀方】三十二年、義量卒す。義持再び政を聽き、赤松持貞を寵す。持貞は、貞範の孫なり。初め貞範の弟則祐、功を以て播磨・備前・美作を領し、以て子義則に傳ふ。三十四年、義則卒す。四子則友・滿祐・祐之・義雅あり。則友、夭し、滿祐、嗣と爲り、襲いで三州を領す。義持、其の領する所を削り、之を持貞に予へんと欲す。滿祐怒り、自ら其の第を焚き、奔つて播磨に歸る。義持、細川持元・山名滿熙を遣はし、往いて之を撃たしむ。諸將多く滿祐と連姻し、往くを欲せず。十月、連署して持貞の亡狀を訴ふ。義持、已むを得ず、持貞をして自裁せしめ、而して滿祐を赦し、京師に歸らしむ。

【通釋】三十二年、義量は歿した。義持は再び政治を執り行ひ、大府赤松持貞を可愛がつた。持貞は貞範の孫である。初め貞範の弟の則祐は、尊氏・義詮を助けた手柄で、播磨・備前・美作を領有し、之を子の義則に傳へた。三十四年、義則は死んだ。四人の子があつて、則友・滿祐・祐之・義雅といつた。則友は若死をし、次男の滿祐が跡取りとなり、その三個國を領有することゝなつた。所が義持は滿祐の領地を削つて、之を持貞に與へようと思つた。滿祐は怒つて、自分で屋敷に火をかけ、奔つて播磨に歸つた。義持は細川持元・山名滿熙を遣はし

て往いて之を撃たしめることにした。諸將多くは滿祐と緣つゞきになつてゐるので、皆行くことを好まなかつた。十月、連判狀を差し出して、持貞の不始末を訴へ出た。義持は止むを得ず、持貞を自殺せしめ、滿祐を赦して京都に歸らしめた。

〔語釋〕三州（播磨・備前・美作）

義持疾作、正長元年正月薨。至內大臣・右近衞大將・從一位。初義持有六弟。懲義嗣之禍、皆以爲僧。及義持疾篤、無嗣子。幕議或欲擇其一人爲嗣。或屬意於持氏。持氏亦冀立。管領畠山滿家建議「不若質之神也」。自赴石淸水祠、鬮之、得義圓。義圓者、義持第三弟、爲青蓮院僧正。於是蓄髮。及義持薨、入室町、爲喪主。三月、敍爵、以其髮猶短、裹頭以見諸將。更名義宣、後更義敎。

〔訓讀〕義持、疾作り、正長元年正月、薨ず。內大臣、右近衞大將、從一位に至れり。初め義持、六弟あり。義嗣の禍に懲り、皆以て僧と爲す。義持、疾篤きに及び、嗣子なし。幕議、或は其の一人を擇び、嗣と爲さんと欲す。或は意を持氏に屬す。持氏も亦立つを冀ふ。管領畠山滿家、建議すらく、「之を神に質すに若かざるなり」と。自ら石淸水祠に赴き、之を鬮し、義圓を得たり。義圓とは、義持の第三弟にして、青蓮院の僧正たり。是に於て髮を蓄ふ。義持薨ずるに及び、室町に入り喪主と爲る。三月、爵に敍せられ、其の髮猶ほ短きを以て、頭を裹

み、以て諸將を見る。名を義宣と更め、後義敎と更む。

〔通釋〕義持は病氣が出て、正長元年正月に歿した。その役は內大臣、右近衛大將にまで昇り、位は從一位になつた。初め義持には六人の弟があつた。義嗣が野心を起したといふ嫌疑から之を殺したりした事件に懲りてゐたので、義持は弟を皆坊主にして終つた。義持の病氣が惡くなつた時、猶ほ跡取りはなかつたのである。幕府の評議では坊主になつた弟の內一人を擇んで跡取りとしようとした。中には持氏に心を寄せてゐる者もあつた。持氏も亦將軍になりたがつてゐた。しかるに管領畠山滿家は建議して曰ふには「これは神樣にお伺ひを立てるのが一番だ」と。自分で石清水の八幡宮に行つて鬮を引いて見たところが、義圓がよいといふことであつた。義圓といふのは義持の第三番目の弟で、當時靑蓮院の僧正となつてゐた。そこで義圓は髮を延ばして還俗した。義持が歿すると、室町の屋敷に入つて喪主となつた。三月、爵を賜り、まだ髮が延びないので頭を包んで諸將に面會した。名を義宣と改め、後又義敎と改めた。

〔語釋〕正長（稱光天皇の年號。）○六弟（義嗣・義圓・法尊・尊滿・義承・隆・義昭の七弟の內義昭を略く。）○石清水（男山八幡宮。）○僧正（僧官の長。僧正・僧都・律師・法印・法眼・法橋の順である。）○敍爵（從五位下左馬頭。）

七月稱光帝崩。義敎迎崇光帝曾孫於伏見立之。初崇光南遷、後光嚴以太弟卽位。崇光還居伏見、欲立其子榮仁、囑之於細川賴之。賴之不奉詔、立後圓融、以至於帝。伏見氏日微。上皇憫之、下宣以榮仁子貞成爲無品親王。中外皆稱有如宮車晏駕

親王必立也。帝聞之弗懌。貞成削髪以示意焉。貞成子曰彦仁。及帝有疾、上皇與義敎決議、令管領滿家迎彦仁立之。是爲後花園帝。後龜山皇子冀立而不得。怒奔伊勢。明年、北畠氏・越智氏竝起兵。義敎令土岐持數攻北畠氏、破之、以皇子歸、寘之嵯峨。令畠山持國攻越智氏於高鳥城、未能下。

訓讀 七月、稱光帝、崩ず。義敎、崇光帝の曾孫を伏見に迎へ、之を立つ。初め崇光、南遷するや、後光嚴、太弟を以て位に卽く。崇光還つて伏見に居り、其の子榮仁を立てんと欲し、之を細川頼之に囑す。頼之、詔を奉ぜず後圓融を立てて、以て帝に至れり。伏見氏、日に微なり。上皇之を憫み、宣を下し、榮仁の子貞成を以て無品親王と爲す。中外皆稱す、「宮車晏駕する如きあらば、親王必ず立たん」と。帝、之を聽きて懌ばず。貞成、髪を削り、以て意を示せり。貞成の子を彦仁と曰ふ。帝、疾あるに及び、上皇、義敎と決議し、管領滿家をして彦仁を迎へしめ、之を立つ。是を後花園帝と爲す。後龜山の皇子、立つを冀ひて得ず。怒りて伊勢に奔る。明年、北畠氏・越智氏、竝に兵を起す。義敎、土岐持數をして、北畠氏を攻めしめ、之を破り、皇子を以て歸り、之を嵯峨に寘く。畠山持國をして、越智氏を高鳥城に攻めしめ、未だ下す能はず。

通釋 七月、稱光天皇が崩ぜられた。義敎は崇光天皇の曾孫を伏見からお迎へして、之を立てた。初め崇光天皇が南軍に捕へられ給うた時、後光嚴天皇は皇太弟で以て御位に卽かせられた。所がその後、崇光天皇は吉野から還御になり、伏見に居らせられたが、其の御子榮仁親王をお立てにならうと思召し、之を細川頼之にお頼みに

なつた。賴之は、詔を奉じないで、後光嚴天皇の皇子後圓融天皇をお立て申し、次いで後小松天皇から稱光天皇と相傳へたのである。かくて伏見の崇光天皇の御血筋は日増しに衰へた。そこで後小松上皇は之をお憫みになり、院宣を下され、榮仁親王の御子の貞成を無品親王となされた。宮中宮外では「もし天子が崩御になれば、貞成親王が屹度御卽位なされるのだらう」と評判した。稱光天皇は之をお聞きになつて、御機嫌が惡かつた。貞成親王は髮を剃つて野心のない意志表示をなされた。貞成親王の御子に彥仁といふ御方があつた。稱光天皇が御病氣に罹られた時、後小松上皇は義敎とお謀りになつて、お世嗣と定められ、管領畠山滿家をして彥仁親王を迎へしめ、御位にお卽かせなされた。これが後花園天皇である。この時も南朝後龜山天皇の皇子は御位に立つことを希望されたが叶はなかつた。皇子はお怒りになつて伊勢に走られた。翌年、北畠氏、越智氏など元の南朝の臣が並に兵を起した。義敎は土岐持數をして北畠氏を攻めさせ、之を破つて皇子を捕へ、京都に歸り、之を嵯峨に置いた。又畠山持國をして、越智氏を高鳥城に攻めさせ、まだ下す所まで行かなかつた。

【語釋】崇光還（正平九年、吉野より還らる。）○伏見氏（崇光天皇伏見に居られ、伏見殿と稱す。）○無品親王（親王の位を品といふ。親王の宣下があつて未だ位階を賜らないのが無品親王である。）○宮車晏駕（天子の崩御をいふ。晏は晚いといふこと。天子崩御遊されても、臣子の情として忍びず。そのお出ましのないのを崩御故と思ひなすに堪へないから晚くお出ましになるといつたのでつまり崩御の意である。）○後龜山皇子（小倉宮。）○高鳥城（大和）

是歲、改元永享。朝議謂正長之號、於王室・將家、皆爲凶也。而持氏慍不得爲將軍、猶私用正長。曰、吾何屈於還俗將軍乎。義敎亦自知天下多不服己者、銳意爲政、待諸

將、不假辭色、軍國之事、多所釐革。二年、徙鎭西豪傑、以充京師。又欲圖東南、三年、遊伊勢及紀伊、四年、遊駿河、館今川範政、宣言觀岳。是時、越智氏猶據高鳥城。城固不拔者數歲。義敎益〻遣兵攻之。義敎學武技、從小笠原政康受射。

訓讀 是の歲、永亨と改元す。朝議謂ふ、「正長の號は、王室・將家に於て、皆凶と爲す」と。而るに持氏、將軍となるを得ざるを慍り、猶ほ私に正長を用ふ。曰く、「吾れ何ぞ還俗將軍に屈せんや」と。義敎も亦自ら天下に己に服せざる者多きを知り、銳意政を爲す。諸將を待つに辭色を假さず。軍國の事、釐革する所多し。二年、鎭西の豪傑を徙し、以て京師に充つ。又東南を圖らんと欲し、三年、伊勢及び紀伊に遊び、四年、駿河に遊び、今川範政に館し、岳を觀んと宣言す。是の時、越智氏、猶ほ高鳥城に據る。城固くして拔けざること數歲なり。義敎、益〻兵を遣はし之を攻む。義敎、武技を學び、小笠原政康に從ひ、射を受く。

通釋 この歲年號を永亨と改めた。朝廷の評議では「正長といふ年號は、皇室に取つても武家に取つても皆縁起が惡いのである」と。而るに持氏は將軍になれなかつたのを怒つて、依然として私に正長の年號を用ひてゐた。曰ふのに「余は、どうして還俗將軍などに屈することが出來ようぞ」と。義敎も亦天下に、自分に服從しないものが多いことを知つて、一生懸命に政治に勵んだ。諸將に對しても言葉を厲しくし顏色を嚴格にして、少しも斟酌しなかつた。軍國の事務も治め改めることが多かつた。二年鎭西の豪傑を移して京都に置いた。又東南（關東と南朝の遺臣）を圖らうと思つてゐたので、三年には伊勢や紀伊に遊び、四年には駿河に出かけて今川範政の家

に泊り、富士山を見物しに來たのだと宣言した。この時越智氏は依然として高鳥城に立て籠つてゐた。その城は堅固で數年間も陷らなかつた。義敎は益々兵を派遣して、之を攻め立てた。義敎は武藝を學び小笠原政康に就いて射術を稽古して貰つてゐた。

【語釋】爲凶（正月に義持薨じ、七月に稱光天皇崩御せられたから。）○還俗將軍（義敎は還俗して將軍となつたから。）○不假辭色（言語顏色を嚴しくして少しも用捨せぬこと。）

八年、政康與村上賴淸鬪于信濃。賴淸輒敗、乞援於鎌倉。持氏欲援之。憲基子憲實爲執事。諫曰、「彼非我管國也。何關我事哉。且我援賴淸、則將軍必援政康。是以兄弟之邦、開天下之爭也。」持氏憚憲實權力、勉從之。上杉憲直・一色直兼、有寵於持氏。因間憲實。明年四月、持氏令憲直・直兼託援賴淸、徵兵於武藏、欲誅憲實。府下騷擾、兵士大集於山內。持氏懼、自往山內、面諭憲實、歸罪於憲直、逐之。憲直逃入藤澤寺。事輒釋。

【通釋】八年、政康、村上賴淸と、信濃に鬪ふ。賴淸輒ち敗れ、援を鎌倉に乞ふ。持氏、之を援けんと欲す。憲基の子憲實、執事たり。諫めて曰く、「彼は我が管國に非ず。何ぞ我が事に關せんや。且つ我れ賴淸を援けば、則ち將軍必ず政康を援けん。是れ兄弟の邦を以て、天下の爭を開くなり」と。持氏、憲實の權力を憚り、勉めて

之に從ふ。上杉憲直、一色直兼、持氏に寵あり。因つて憲實を間す。明年四月、持氏、憲直・直兼をして、頼清を援くるに託し、兵を武藏に徴さしめ、憲實を誅せんと欲す。府下騒擾し。兵士、大に山内に集る。持氏懼れ、自ら山内に往き、面のあたり憲實を諭し、罪を憲直に歸し、之を逐ふ。憲直逃れて藤澤寺に入る。事輒ち釋く。

【通釋】八年、小笠原政康は村上頼清と信濃で闘つた。頼清は譯もなく負けて援を鎌倉に乞うた。持氏は之を援けようと思つた。憲基の子の憲實は當時執事となつてゐた。彼は諫めて曰ふのに「頼清は我が管轄内の國の者ではありません。何とて我が鎌倉に關係がありませうや。それに我々が頼清を援けますと、將軍は屹度、政康を援けるでせう。それでは兄弟の國同志が天下の爭亂を開始することゝなり、甚だ以て宜しく御座いません」と。持氏は憲實の權力を憚つて厭ではあつたが、之に從つた。上杉憲直・一色直兼は持氏に寵せられて居た。この諫止したことを利用して憲實を持氏に讒言した。翌年四月、持氏は憲直・直兼をして頼清を援けるといふ口實にして、兵を武藏に集めさせ、憲實を誅しようと思つた。鎌倉府中大騒ぎして、兵士は隨分山内の上杉氏に集まつて來た。持氏は懼れて自ら山内に行き面前で憲實を諭し、罪を皆憲直になすりつけて、逐つ拂つた。憲直は逃げて藤澤寺に入り込んだ。これで今度の一件は譯もなく片附いた。

【語釋】兄弟之邦（京都と鎌倉。）〇山内（憲實の第。）〇藤澤寺（上文の藤澤道場のこと。）

十年持氏冠其子賢王、欲行禮于鶴岡祠、如遠祖義家故事。憲實又爭曰「冠子室町、受將軍偏諱禮也。自先公至公三世、以爲恆焉。今君乃變之、不可。」持氏曰「還俗將軍、

何足以冠吾子哉。冠吾子者、非今上、則伏見龜山二王而已。遂冠祠前、命名義久。諸將皆入賀之。獨憲實稱疾、不入賀。持氏怒、欲發兵攻憲實。憲實乃奔上野、據平井城。明日、持氏卽遣一色時永、將兵往討憲實。遂留三浦時高、輔義久守鎌倉、而自將出陣武藏府。

【訓讀】十年、持氏、其の子賢王に冠し、禮を鶴岡祠に行ひ、遠祖義家の故事の如くせんと欲す。憲實又爭つて曰く、「室町に冠し、將軍の偏諱を受くるは禮なり。先公より公に至るまで三世、以て恆と爲せり。今、君乃ち之を變ずるは、不可なり」と。持氏曰く、「還俗將軍、何ぞ以て吾が子に冠するに足らんや。吾が子に冠する者は、今上に非ざれば、則ち伏見龜山の二王のみ」と。遂に祠前に冠し、名を義久と命ず。諸將皆入つて之を賀す。獨り憲實、疾と稱して入り賀せず。持氏怒り、兵を發して憲實を攻めんと欲す。憲實乃ち上野に奔り、平井城に據る。明日、持氏卽ち一色時永を遣はし、兵に將として往いて憲實を討たしむ。遂に三浦時高を留め、義久を輔け鎌倉を守らしめ、而して自ら將として出で、武藏の府に陣す。

【通釋】十年、持氏はその子賢王を元服させるとき、鶴岡の八幡宮で儀式を行ひ、先祖義家の舊例のやうにしようと思つた。憲實は又反對して曰ふには「室町の屋敷で元服をして、將軍の名乘の一字を貰ふのが、昔からの禮式であります。先代からあなたに至るまで、三代の間、それが常例となつてゐます。それを今あなたがお變へなさるは宜しくありません」と。持氏が曰ふのに「還俗將軍などでは、吾が子に元服させるには不足である。吾が

子に元服をさせるに足るものは、今の天子でなければ、伏見龜山の二皇族より外にはない」と。遂に鶴岡八幡宮の前で元服し、名も義久と付けた。諸將は皆公方の屋形に往つて御祝を述べた。たゞ憲實だけが病氣だといつて祝ひに來なかつた。持氏は怒つて兵を繰り出して、憲實を攻めようと思つた。そこで憲實は上野に奔り、平井城に立て籠つた。翌日持氏は早速一色時永を派遣し、兵に將として、往いて憲實を討たしめた。とう〳〵持氏は三浦時高を留め、義久を助け鎌倉を守らせて置き、自分は大將となつて、武藏の國府に出かけて、そこに陣取つた。

語釋　義家故事（義家は男山八幡祠前で冠した。）〇三世（滿兼、氏滿の二代は義滿の滿を貰ひ、持氏は義持の持の字を貰つた。）〇伏見（崇光天皇の裔、貞常親王。）〇龜山（後龜山天皇の皇子小倉宮。）

憲實告急於義敎。義敎奏請討持氏一行詔、副以敎書、使故上杉氏憲二子持房・敎朝齎之、以徇東北三道。東海・東山兵、從持房、自箱根進、北陸兵、從敎朝、直赴平井、合於憲實而南下、陣于分陪。持氏分兵拒之。九月、持房等、與持氏兵戰于箱根、不利。又戰于早川尻、破之、進逼鎌倉。十月、三浦時高叛持氏、攻義久。義久與祖叔父滿貞、走匿扇谷。梁田某・名塚某、力戰死之。其他將士皆率歸憲實。持氏窮蹙。十一月、持氏遂剃髮乞降。憲實使長尾芳傳徙持氏于永安寺、置兵監守、迫憲直・直兼使自殺、盡殺其從士、自與關東將士連署、請義敎宥持氏死。使者十餘反。義敎竟弗聽。

[illegible] 憲實、急を義教に告ぐ。義教、奏して持氏を討ずる一行の 詔 を請ひ、副ふるに教書を以てし、故の上杉氏憲の二子持房・教朝をして、之を齎し、以て東北三道を徇へしむ。東海・東山の兵は、持房に從ひ、箱根より進み、北陸の兵は、教朝に從ひ、直に平井に赴き、憲實に合して南下し、分陪に陣す。持氏兵を分ち之を拒ぐ。九月、持房等、持氏の兵と箱根に戰ひ、利あらず。又早川尻に戰ひ、之を破り、進んで鎌倉に逼る。十月、三浦時高、持氏に叛き、義久を攻む。義久、祖叔父、滿貞と、走つて扇谷に匿る。梁田某・名塚某、力戰して之に死す。其の他の將士、皆率ね憲實に歸す。持氏窮蹙す。十一月、持氏、遂に髮を剃り降を乞ふ。憲實、長尾芳傳をして、持氏を永安寺に徙さしめ、兵を置いて監守し、憲直・直兼に迫りて自殺せしめ、盡く其の從士を殺し、自ら關東の將士と連署し、義教に、持氏の死を宥さんことを請ふ。使者、十餘反す。義教、竟に聽さず。

通釋 憲實は急を京都の義教に告げた。義教は天皇に申上げて、持氏征伐の一くだりの 詔 を願ひ受け、それに將軍の下文を添へ、故の上杉氏憲の二子持房、教朝二人に之を持たせて、東北の三道に觸れ廻らせた。東海、東山の兵は持房に從ひ、箱根から進み出で、北陸の兵は教朝に從つて、直接平井に赴き、憲實と一緒になつて、南方鎌倉に攻め下り、分陪河原に陣取つた。持氏は兵を分けて、この二面から攻め來る敵を防いだ。九月、持房等は持氏の兵と箱根で戰ひ、うまく行かなかつた。又早川尻で戰つて之を敗り、進んで、鎌倉に攻め寄せた。十月、三浦時高は持氏に叛いて、義久を攻めた。義久は大叔父の滿貞と一緒に逃げて扇谷に隱れた。家來の梁田某・名塚某は力限り奮鬪して討死した。その他の將士は大抵憲實に屬いた。持氏はどうにも動きのとれぬことになつた。十一月、持氏は遂に髮を削つて降參を乞うた。憲實は長尾芳傳をして、持氏を永安寺に移し、兵を附けて見張をさせ、憲直・直兼に迫つて、自殺せしめ、その供の家來どもは皆殺して終ひ、自ら關東の將士と連判狀を差

し出して義教に向つて、持氏の死を宥されむことを願ひ出た。使者は、十餘度往つたり來たりした。義教はどうしても許さなかつた。

語釋 東北三道（東海・東山・北陸。）〇分陪（武藏）〇早川尻（相模）〇扇谷（鎌倉）〇永安寺（相模）

十一年正月、憲實以義教令遣兵、令諸軍圍永安寺。持氏縱火寺塔、與其妻倶自殺。義久・滿貞皆死。持氏少子二人、曰春王・安王。皆髫齔。爲乳母長尾氏所挈、遁走日光山。義教遣使鎌倉、勞諸將、以憲實管領東國。憲實恐負殺君之名也、自往永安寺、伏謝于持氏影前、抽刀將自殺。爲從者所止、不果。乃削髮退居國清寺、使弟清方與教朝同行管領事、四索持氏餘黨。

訓讀 十一年正月、憲實、義教の令を以て兵を遣はし、諸軍をして永安寺を圍ましむ。持氏、火を寺塔に縱ち、其の妻と倶に自殺す。義久・滿貞、皆死す。持氏の少子二人、春王、安王と曰ふ。皆髫齔なり。乳母長尾氏の挈ぐる所と爲り、遁れて日光山に走る。義教使を鎌倉に遣はし、諸將を勞ひ、憲實を以て、東國を管領せしむ。憲實、君を殺すの名を負ふを恐るゝや、自ら永安寺に往き、持氏の影前に伏謝し、刀を抽き將に自殺せんとす。從者の止むる所と爲り、果さず。乃ち髮を削り、退いて國清寺に居り、弟清方をして、教朝と同じく管領の事を行はしめ、持氏の餘黨を四索す。

【通釋】十一年正月、憲實は義教の命令により、兵を遣はし、諸軍をして永安寺を圍ませた。持氏は寺の塔に火をかけ、其の妻と倶に自殺した。義久・滿貞も皆死んだ。持氏の末つ子の二人は春王・安王といつた。いづれも七八歳であつた。乳母長尾氏に携へられ、遁げて下野の日光山に走つた。義教は使者を鎌倉に遣はし、諸將を慰勞し憲實をして東國を管領せしめた。憲實は主人殺しの惡名を負ふのを恐れて、自ら永安寺に行き、持氏の肖像の前に伏して謝罪し、刀を拔いて自殺しようとした。從者に止められて爲とげなかつた。そこで髪を剃り隱退して國清寺に居り、弟の清方をして教朝と一緒に管領の事務を行はせ、持氏の殘黨を四方にさがさせた。

【語釋】髫齔（髫は小兒の垂髪、齔は毀齒。小兒七八歳の頃齒が拔け變る時幼齒が毀れるそれをいふ。つまり幼少の義である。）（日光山（下野））

十二年正月、春王・安王潛遣使、諭結城氏朝曰、請假子之力、撃上杉氏、以復父仇。氏朝謂其將士曰「吾被佐公恩眷、而不能救其死。今兩郎君託我以大事。是武人之榮也。吾其可不出力、生死以之」。乃令其子光久迎致二孤、因大聚宗族、修結城・古河二城、分兵守之。持氏遺臣、一色・野田・大井・吉見諸族、竝起應之。事聞京師。義教授旗於持房、赴鎌倉、再發東國兵、以助清方。七月、清方將諸軍、圍結城。氏朝力拒、數破上杉氏軍。義教益發兵、又起憲實視師。憲實辭。弗聽。憲實乃率東北三道兵、攻氏朝。氏朝他勵士卒、嬰城固守。憲實等不能拔也。

【訓讀】十二年正月、春王・安王、潛に使を遣はし、結城氏朝を諭して曰く、「請ふ、子の力を假り、上杉氏を擊ち、以て父の仇を復せん」と。氏朝、其の將士に謂つて曰く、「吾れ佐公の恩眷を被り、而して其の死を救ふ能はず。今兩郎君我に託するに大事を以てす。是れ武人の榮なり。吾れ其れ力を出し、生死之を以てせざる可けんや」と。乃ち其の子光久をして、二孤を迎致せしめ、因つて大に宗族を聚め、結城、古河の二城を修め、兵を分つて之を守る。持氏の遺臣、一色・野田・大井・吉見の諸族、並び起つて之に應ず。事、京師に聞ゆ。義教旗を持房に授け、鎌倉に赴き、再び東國の兵を發し、以て清方を助けしむ。七月、清方、諸軍に將とし、結城を圍む。氏朝力め拒ぎ、數ゝ上杉氏の軍を破る。義教、益ゝ兵を發し、又憲實を起して師を視しむ。憲實辭す。聽さず。憲實乃ち東北三道の兵を率ゐて、氏朝を攻む。氏朝、士卒を勉勵し、城に嬰りて固守す。憲實等拔く能はず。

【通釋】十二年正月、春王・安王はこつそり使を遣はして、結城氏朝に諭さしめて曰ふには、「何卒そなたの力を借り、上杉氏を擊つて父の仇を報いたいものである」と。氏朝は部下の將士に謂つて曰ふには、「自分は左兵衛佐殿から大層御恩顧を受けたが、その最期を救ふことが出來なかつた。今二人の若君は余に復仇の大事を御賴みになつた。これは武士として名譽な事ぢや。余は力を出し、生きても死んでも、復仇をしないで置かれようか」と。そこで其の子光久をして、二人の孤子を迎へにやり、因つて大に一族の者を集め、結城・古河の二城を修繕させ兵を分けてそれ〴〵之を守つた。持氏の家來で生き殘つてゐた者、一色・野田・大井・吉見の諸族も並び起つて之に味方をした。其の事が京都に聞えた義教は旗を持房に授け、鎌倉に行き、もう一度東國の兵を繰り出して清方を援けさせることにした。七月、清方は諸軍の大將となつて結城を取り圍んだ。氏朝は力め拒ぎ、度々上杉氏の軍を破つた。義教は益ゝ兵を繰り出し、又憲實を無理に引き出して軍隊を監督せしめた。憲實は辭退した。併

し許さなかつた。そこで憲實は東北三道の兵を率ゐて氏朝を攻めた。氏朝は士卒を勵まし、城に立て籠つて固く守つた。憲實等は容易に陥れることは出來なかつた。

【語釋】佐公（持氏は左兵衛佐であつた。）○古河（下總）

當是時、越智氏城已陷。而北畠氏復起兵。義敎使人就講和焉。曰「吾定關東、然後剪滅之。」義敎季弟爲僧、曰義昭。後龜山皇子在嵯峨大覺寺者。義昭與之親善。於是、義昭說皇子曰「東西兵亂。皇子欲復舊業、是時爲可。北畠氏雖既和、聞皇子起、必復起兵。土岐・一色等、皆怨將軍。其來附必矣。」又密使人約菊池・大村諸族、起兵、遙爲聲援。菊池答曰「結城不下二歳者、天下必動搖。可以乘而起也。」義昭乃閉門蓄髮。義敎怪其久不出、廉問知實。乃遣兵且捕之。義昭逃亡、不知所之。乃圖其形索諸國、購以千金。嘉吉元年三月、義敎詣伊勢神祠。疑北畠氏匿義昭、親詗察之也。

【通釋】是の時に當り、越智氏、城已に陥る。而して北畠氏、復兵を起す。義敎、人をして、就いて和を講せしむ。曰く「吾れ關東を定め、然る後に之を剪滅せん」と。義敎の季弟、僧と爲り、義昭と曰ふ。後龜山の皇子嵯峨の大覺寺に在る者あり。義昭、之と親善なり。是に於て、義昭皇子に說いて曰く、「東西兵亂あり。皇子、舊業

を復せんと欲せば、是の時を可と爲す。北畠氏、既に和すと雖も、皇子の起つを聞かば、必ず復兵を起さん。土岐・一色等皆將軍を怨む。其の來り附くや必せり」と。又密に人をして、菊池・大村の諸族に約し、兵を起し遙に聲援を爲さしむ。菊池答へて曰く、「結城下らざること二歳ならば、天下必ず動搖せん。以て乘じて起つ可きなり」と。義昭乃ち門を閉ぢ髮を蓄ふ。義敎、其の久しく出でざるを怪しみ、廉問して實を知る。乃ち兵を遣はし且に之を捕へんとす。義昭、逃亡して、之く所を知らず。乃ち其の形を圖して諸國に索め、購ふに千金を以てす。嘉吉元年三月、義敎、伊勢の神祠に詣づ。北畠氏の義昭を匿すを疑ひ、親ら之を詗察せしなり。

通釋 この時には、越智氏の高鳥城はすでに陷つて終つてゐた。しかし、北畠氏はまた兵を擧げた。義敎は人を遣つて和を講ぜしめた。義敎が曰ふのに、「關東を平定して置いてから後、北畠氏を討ち絶やしてやるんだ」と。義敎の末の弟が坊主になつて義昭といつてゐた。その時、後龜山天皇の皇子で嵯峨の大覺寺に居られた御方が有つた。義昭は之と仲が善かつた。そこで義昭は皇子に說いて曰ふには、「此の頃は東も西も兵亂が起つてゐます。皇子が若し南朝の舊業を再興しようと思召すなら、今がよい機で御座います。北畠氏はすでに足利氏と和睦をしましたが、皇子が兵を擧げられたと聞けば、屹度また兵を起すことで御座いませう。土岐・一色なども皆將軍を怨んで居ります。皇子に味方するに疑はありません」と。又こつそり人を遣つて、九州の菊池・大村の諸族と約束して兵を擧げ、遙に加勢をさせるやうにした。菊池は答へて曰ふに、「若し結城が今後二年も陷落しなければ天下は屹度動搖するに違ひない。その時に乘じて兵を起したが宜いのである」と。そこで義昭は門を閉ぢて外部との交際を絶ち、髮を蓄へて還俗の準備をした。義敎は彼が長い間出て來ないのを怪み、調査して其の實を知つた。そこで兵を遣つて之を捕へようとした。義昭は逃げて、何處へ往つたか分らなくなつた。因つてその肖像を

續いて、それによつて諸國に捜し索め、千兩の懸賞附きで購ひ求めた。嘉吉元年三月、義教は伊勢の大神宮に參詣した。これは北畠氏が義昭を匿してゐるのではないかと疑ひ、自分で之を探つて見る爲めであつた。

【語釋】後龜山皇子（小倉宮。）〇廉問（察問、しらべること。）〇嘉吉（後花園天皇の年號。）

四月、結城・古河、皆陷、氏朝父子戰死、城兵悉死之、以脫二孤。二孤逃走、爲上杉氏兵所獲。獨持氏季子永壽王、走信濃。氏朝季子成朝、走常陸。上杉氏兵檻二孤而西。五月、薩摩人亦獲義昭首而東、先至京師。首壞敗不可辨。義教召義昭所昵童子、視之。童子曰、果僧正則其二齒缺矣。驗之、果然。義教大喜、乃遣使者迎二孤、戮于途。遇之垂水。護將長尾某、乃入道傍佛寺、進浴二孤。二孤亦知其意、正坐受刃。春王年十三、安王年十一。首至京師。義教召其乳母、問持氏子猶在乎。乳母不答。嚙舌而死。

【通釋】四月、結城・古河、皆陷り、氏朝父子、戰死し、城兵悉く之に死し、以て二孤を脫す。二孤逃れ走り上杉氏の兵の獲る所と爲る。獨り持氏の季子永壽王は、信濃に走り、氏朝の季子成朝は、常陸に走る。上杉氏の兵二孤を檻して西す。五月、薩摩の人も、亦義昭の首を獲て東し、先づ京師に至る。首壞敗して辨ずべからず。義教、義昭の昵くる所の童子を召して、之を視しむ。童子曰く「果して僧正なれば、則ち其の二齒缺く」と。之を驗するに、果して然り。義教、大に喜び、乃ち使者を遣はし、二孤を迎へ、途に戮せしむ。之に垂水に遇ふ。護

將長尾某、乃ち道傍の佛寺に入り、浴を二孤に進む。二孤も亦其の意を知り、正坐して刃を受く。春王、年十三、安王、年十一。首京師に至る。義敎、其の乳母を召して、持氏の子猶ほ在るかと問ふ。乳母答へず。舌を嚙んで死す。

【通釋】四月、結城・古河の城が皆陷落し、氏朝父子は討死し、城兵も悉く戰死して、春王・安王を落ち延びさせた。春王・安王は逃げることは逃げたが、上杉氏の兵に捕へられた。たゞ持氏の末子の永壽王だけは信濃に逃げ、氏朝の末子の成朝は常陸に走つた。上杉氏の兵は春王・安王を網乘物に入れて、京都に上つた。五月、薩摩の人も義昭の首を獲て東に上り、首の方が先きに京都に着いた。その首は腐つて見分けがつかなかつた。義敎は義昭が可愛がつてゐた小姓を呼び出して之を視せた。その小姓がいふのに「これが果して僧正で在すなら、齒が二枚缺けて居る筈です」と。檢べて見ると果してその通りであつた。義敎は非常に喜び、そこで使者を遣つて、春王・安王を出迎へ、途中で殺させた。その使者は春王・安王と垂水で出遇つた。そこで、護衞の大將長尾某は道ばたの寺に入り、春王・安王に行水をさせた。春王・安王も亦行水するのは殺されるのであることを知つて、きちんと坐つて刃を受けた。この時、春王は十三歲、安王は十一歲であつた。その首が京都に着いた。義敎は春王・安王の乳母を呼び出して持氏の子はこの外にまだあるかと問うた。乳母は何んとも返事しなかつた。自分で自分の舌を嚙み切つて死んで終つた。

【語釋】上杉氏兵（長尾豐景）〇垂氷（美濃）〇長尾某（卽ち豐景）〇佛寺（金蓮寺）

初尊氏與直義謀曰「義詮不武、難以寄重任。宜令基氏領關東以鎭護之。」乃立基氏

輔義詮曰「子子孫孫、相輔勿相背也」然義滿・義持、皆有滅鎌倉之志。至義教乃能成之云。基氏之家既敗、而義詮之家亦自是亂矣。

【訓讀】初め尊氏、直義と謀つて曰く、「義詮は不武、以て重任を寄せ難し。宜しく基氏をして、關東を領し、以て之を鎭護せしむべし」と。乃ち基氏を立てて義詮を輔けしむ。曰く、「子子孫孫相輔け、相背く勿れ」と。然れども、義滿、義持、皆鎌倉を滅すの志あり。義教に至り乃ち能く之を成すと云ふ。基氏の家既に敗れ、而して義詮の家も亦是より亂る。

【通釋】初め尊氏は直義と相談して曰ふには「義詮は勇武でないから、到底將軍の重職をまかすことは難かしい。これは基氏をして關東を領有させて之を鎭め護らせた方が宜い」と。そこで基氏を立てゝ關東管領となし、義詮を助けさせた。その時次のやうに申し渡した。「子子孫孫まで兩家互に輔け合つて決して相背いてはならぬぞ」と。然し、義滿・義持は皆鎌倉を滅さうといふ意志があつた。かくて義教の時になつて遂に之を成就したといふのである。基氏の家はすでに敗れたが、義詮の家もこれから亂れて來た。

義教爲人猜暴、以盛氣馭下。既滅關東、意益驕、自謂爲父祖所不能爲、天下無復足畏者。先是、義教襲職而三歲、侍女三人、有罪賜死。赤松滿祐女與焉。或曰「滿祐怨望、有異心」義教聞而囚之。滿祐逃奔播磨、遣兵攻之。滿祐力窮、削髮出降、宥之。其七歲

遣二一色義貫・土岐持頼一、攻二越智氏一。義敎嬖姬小辨者、其家與二一色氏一有レ怨。因讒二義貫通二欵越智氏一。義敎卽命二武田信榮一、就二軍中一誅二義貫一、夷二其族一。又疑二持頼一、命二細川持常一殺レ之。諸將士人人自危。而滿祐最疑懼。滿祐之與二持貞一爭也、及二持貞死一、遂幷二其邑一。持貞兄子貞村、幼喪レ父、邑除。義敎見二其美姿容一、收爲二近侍一、甚寵レ之。曰「家兄庇二其庶一。吾則庇二其嫡一。自有レ別也。」因疏二斥滿祐一。滿祐形貌矮陋。義敎戲呼レ之、曰二三尺入道一。滿祐嘗侍レ宴、醉舞。謠曰「軀短勿レ侮。三國之主。」義敎愈々憎レ之。義敎畜レ猴。每二滿祐入一、輒使三人放レ猴爬二其面一。滿祐拔レ刀、斬レ之、心深怨二義敎一。而不レ形二顏色一。

【訓讀】義敎、人と爲り猜暴なり。盛氣を以て下を馭す。既に關東を滅し、意益々驕り、自ら謂へらく、父祖の爲す能はざる所を爲す。天下復畏るゝに足る者無しと。是より先き、義敎、職を襲いでより三歲、侍女三人、罪有つて死を賜ふ。赤松滿祐の女與る。或人曰く、「滿祐、怨望し、異心有り」と。義敎聞いて之を囚へんとす。滿祐逃れて播磨に奔る。兵を遣はし之を攻めしむ。滿祐力窮り、髮を削り出で降る。之を宥す。其の七歲、一色義貫、土岐持頼を遣はし、越智氏を攻めしむ。義敎の嬖姬小辨といふ者、其の家、一色氏と怨有り。因つて義貫欵を越智氏に通ずと讒す。義敎、卽ち武田信榮に命じ、軍中に就いて義貫を誅し、其の族を夷げしむ。又、持頼

を疑ひ、細川持常に命じ之を殺さしむ。諸將士、人人、自ら危む。而して滿祐最も疑懼す。滿祐の持貞と爭ふや持貞死するに及びて、遂に其の邑を幷す。持貞の兄の子貞村、幼にして父を喪ひ、邑除かる。義教、其の美姿容を見、收めて近侍と爲し、甚だ之を寵す。曰く「家兄は其の庶を庇ふ。吾は則ち其の嫡を庇ふ。自ら別有るなり」と。因つて滿祐を疏斥す。滿祐、形貌矮陋。義教、戯に之を呼んで、三尺入道と曰ふ。滿祐、嘗て宴に侍し、醉うて舞ふ。諷ひて曰く、「軀短くとも侮る勿れ。三國の主なり」と。義教、愈〻之を惡む。義教、猿を畜ふ。滿祐入る毎に、輒ち人をして猿を放ち、其の面を爬かしむ。滿祐、刀を拔き之を斬り、心に深く義教を怨む。而れども顏色に形さず。

【通釋】義教の人柄は誠に疑ひ深く、氣が暴々しく、きかぬ氣で臣下を追ひ廻した。すでに關東の持氏を滅してからは心愈〻驕り自ら思ふには父祖がやれなかつたことを爲出來したのである。天下にもう畏るべきものは外に無いと。これより前、義教が將軍職を繼いで三年目の頃である、腰元三人が惡い事をして自殺を命ぜられた。赤松滿祐の娘もその内の仲間であつた。或る人がいふのに「滿祐は娘の死から君を怨んでゐて、謀叛心を持つてゐる」と。義教は之を聞いて、滿祐を囚へようとした。滿祐は逃げて播磨に奔つた。義教は兵を遣つて之を攻めさせた。滿祐は力盡き髮を剃り落して降參して來た。義教は之を赦した。又將軍職を繼いでから七年目のこと、一色義貫、土岐持賴を遣はして越智氏の高取城を攻めさせた。所が義教の寵してゐる美人に小辨といふものがゐたが、その家は一色氏に對して怨みを持つてゐた。この女が一色が越智を攻めてゐるのを利用して、義貫が越智氏と內通して居ると讒言した。義教は早速武田信榮に命じ陣中で義貫を誅せしめ、其の一族を全部殺させた。又持賴をも疑ひ細川持常に命じて、之を殺させた。諸將士は銘々自分の身を不安に思つた。中でも滿祐は最も疑ひ懼

れてゐた。以前、滿祐は同族の持貞と爭つた時、持貞が自殺したので、遂に其の領地を併せ有して終つた。持貞の兄の子の貞村は幼い頃から父を亡くし、それが爲めに知行を無くして終つた。義教は貞村の美しい容貌を見て氣に入り、召し出してお小姓となし大層之を寵愛した。義教が曰ふのに「兄義持は分家筋の持貞を庇つたが、余け本家筋の貞村を愛するので、自ら其の間に區別がある。」と。（兄はそれがために騷ぎを起したが、自分のやることは道理に合つてゐるから差支へない）そこで滿祐を疎んじ斥けた。滿祐はその姿容丈低く、風采も揚らなかつた。義教は戲れに之を呼んで三尺入道と曰つた。「滿祐はある時、宴會に侍つて醉拂つて舞をやつた。謠つて曰ふのに「丈は低くても馬鹿にするな。これでも三國の領主樣だ」と。義教は愈々之を憎んだ。義教は猿を飼つてゐた。滿祐が幕府に來る毎に、いつも人をして猿を放して滿祐の顏を引つ搔かせた。滿祐は刀を拔いて猿を斬り、心に深く義教を怨んだ。しかし決して顏には出さなかつた。

【語釋】三歳（後花園天皇永享三年）　○七歳（永享七年）　○與持貞爭（上文應永三十四年の所に詳である。）　○三尺入道（身長の低いのを嘲弄したのである。）　○三國之主（備前・播磨・美作の主）

時幕府多レ怪。有レ狐、夜鳴二屋上一。宿直者或闘二空室中一、見レ有二偶人數十一。爲二鷄飼一。鷄飼者、散樂曲名也。忽而不レ見。義教略不レ加レ意。貞村已壯。寵レ之不レ衰。遂欲下割二滿祐邑一予上レ之、將レ就二其第一諭一レ意。從容謂二滿祐一曰「聞二汝園之鳧乳一矣。可二一觀一否。」滿祐佯喜請レ期。期二六月廿四日一。滿祐從子曰二教祐一、爲二幕府近臣一。微聞二削レ邑之議一、以告二滿祐一。滿祐大恚。於レ是、召二長子

教康・家臣渥美等、議曰「吾宗積功於將家。將家遇我、亡狀非一。我伏受其制、何所底止。吾欲先發行大事。汝等爲我努力」。教康等贊之。

〔譯讀〕時に幕府、怪多し。狐あり、夜、屋上に鳴く。宿直の者、或とき空室中を闚ふに、偶人數十あり、鵜飼を爲すを見る。鵜飼とは、散樂の曲名なり。忽にして見えず。義教、略〻意に加へず。貞村已に壯なり。之を寵すること衰へず。遂に滿祐の邑を割き、之に予へんと欲し、將に其の第に就いて意を諭さんとす。從容として滿祐に謂つて曰く、「汝が園の鳧、乳すと聞く。一たび觀るべきや否や」と。滿祐僞り喜び、期を請ふ。六月二十四日を期す。滿祐の從子を教祐と曰ふ。幕府の近臣たり。微に邑を削るの議を聞き、以て滿祐に告ぐ。滿祐、大に恚る。是に於て、長子教康・家臣渥美等を召し、議して曰く、「吾が宗、功を將家に積む。將家、我を遇するに、亡狀一に非ず。我れ伏して其の制を受くれば、何ぞ底止する所あらんや。吾れ先づ發して大事を行はんと欲す。汝等我が爲めに努力せよ」と。教康等、之を贊す。

〔通釋〕その頃、幕府に奇怪な事が多かつた。狐が夜屋根の上で鳴いたこともある。又宿直した者が或る時空いた部屋の中をのぞいて見ると、其處に數十の人形がゐて、それが鵜飼をやつて居たのを見たこともある。鵜飼とは能の曲名である。それが又直ぐ見えなくなつたといふことである。義教はそれ程氣にもかけなかつた。貞村はその內に成長して壯年になつた。之を寵することは元の通りで、些つとも衰へなかつた。遂に滿祐の土地を割いて之に與へようと思ひ、滿祐の屋敷へ往つて內意を傳へ納得させようとした。そこで靜かに滿祐に向つて曰ふには「その方の園內の鴨が子を生んだといふことだ。一度觀に往つても善いかどうぢや」と。滿祐はわざと喜ばし

げにして、何日おいで下さるか期日を乞うた。六月二十四日といふ約束をした。滿祐の甥に教祐といふのがゐた。幕府の近侍の臣であつた。ちらりと滿祐の領邑が割かれるのだといふ話を耳に挾んだので、之を滿祐に告げた。滿祐は非常に怒つた。そこで長子教康、家臣渥美某などを呼び寄せ、相談していふには、吾が一族は將軍家の爲めに隨分功を積んだ。然るに將軍家は我を待遇すること實に無法で、一度や二度ではない。將軍の言ひなりに成つてはい〳〵と言つて居れば、この先き何んなことになるか限りのないことである。余は先づこちらから兵を出して大事を行ふと思ふ。お前等は我が爲めに力を盡して吳れよ」と。教康等は之を贊成した。

【語釋】散樂（猿樂、又は田樂といふ。正樂でないから散樂といつた。俗に狂言といふもの。）○鳧乳（鴨が子を生んだこと。）○底止（至り止る。）

乃伏甲三百于第中、而請義教。義教卽往、置隨兵于門外、獨與朝貴諸將入、置酒高會、觀散樂。樂至鵜飼。時已薄暮、第中有呼曰「廐馬逸矣」因急關門。門關而甲發。義教將起。教康・教祐耦進、執其左右手、伏之曰「今日之事、公自取之」渥美自屏後出、揮刀斬其首。一座拔刀起。起者輒見殺。相殺者、又數十人。斯波義廉・大內持世、被創、越垣而逃。隨兵皆潰。滿祐既弑義教、欲待府兵來討戰死。而諸將士悉聚幕府、惶惑不知所出。旦日滿祐乃以三百騎出京師、至攝津中島邑、葬義教首于崇禪寺、而西歸播磨、據白旗城。自是、幕府以鵜飼爲凶、不列樂府也。義教官、至左大臣、右近衞大將、從

一位。薨年四十八。七月、持世創劇、卒。

【訓讀】乃ち甲三百を第中に伏せ、而して義教を請ず。義教、卽ち往き、隨兵を門外に置き、獨り朝貴諸將と入り、置酒高會し、散樂を觀る。樂、鵜飼に至る。時已に薄暮、第中呼ぶあり、曰く、「厩馬逸す」と。因つて急に門を闔ざす。門闔ぢて甲發す。義教將に起たんとす。致康・致祐、耦進し、其の左右の手を執り、之を伏せて曰く「今日の事、公自ら之を取る」と。渥美、屏後より出で、刀を揮ひ、其の首を斬る。一座、刀を拔いて起つ。起つ者輒ち殺さる。相殺す者又數十人。斯波義廉・大内持世、創を被り、垣を越えて逃る。隨兵皆潰ゆ。滿祐、既に義教を弑し、府兵の來り討つを待ち、戰ひ死せんと欲す。而るに諸將士、悉く幕府に聚り、惶惑して出づる所を知らず。他日、滿祐乃ち三百騎を以て、京師を出で、攝津の中島邑に至り、義教の首を崇禪寺に葬り、而して西播磨に歸り、白旗城に據る。是より幕府、鵜飼を以て凶と爲し、樂府に列せず。義教、官、左大臣、右近衞大將、從一位に至る。薨ずる年四十八。七月、持世、創劇しくして、卒す。

【通釋】そこで鎧武者三百人を屋敷の中に隱して置いて、義教を招請した。義教は早速出かけ、お供の兵士を門外に置き、たゞ公卿や諸將と一緒に屋敷に入り、大層な御馳走で酒宴を開き、能を見物してゐた。能の番數も進んで鵜飼の番になつた。その時は既に日暮れ時であつたが、屋敷の中で厩の馬が逃げたと呼ばはるものがあつた。そこで急に門をしめた。門がしまると鎧武者が一時に繰り出した。義教は座から起たうとした。致康・致祐は左右からならび進んで、義教の手を執らへ、之を捻ぢ伏せて曰ふのに、「今日あなたが殺されるのは、あなた自身で招かれた譯だ」と。渥美が衝立の後から飛び出して、刀を揮つて義教の首を落した。一座の面々は刀を拔いて起

ち上つた。起ち上つたものはすぐ殺された。又同士討ちで死んだものも數十人からあつた。斯波義康・大内持世は創を受けたが、塀を乗り越して逃げ出した。お供の兵士も皆崩れて終つた。滿祐は既に義敎を殺したので、幕府の兵の來るのを待つて討死しようと決心してゐた。而るに諸將士は全部幕府に集まつたけれども惶てふためいてどうして宜いのか分らなかつた。そこであくる日滿祐は三百騎を引きつれて、京都を出で、攝津の中島村に至り、義敎の首を崇禪寺に葬り、西播磨に歸り白旗城に立て籠つた。これからは幕府では鵜飼を緣起の悪いものとなし、能の番組の中に決して加へなかつた。義敎は官左大臣、右近衛大將、從一位にまで成つた。死んだ年は四十八歲である。七月、持世は手負ひが重くなつて死んで終つた。

八月、畠山持國滿家子也、與管領細川持之等議、立義敎子義勝爲嗣。甫八歲。天子詔義勝討滿祐。乃遣細川持常・赤松貞村・武田信貫自播磨、山名持豐・山名敎之・山名敎淸自美作。兵凡五萬人。滿祐聞貞村來、大喜曰、豎子來吾所願也。乃遣兵逆擊于盤坂、大敗之。持常與滿祐有姻。自以一軍居前、故逗撓不進。

【訓譯】八月、畠山持國は、滿家の子なり、管領細川持之等と議し、義敎の子義勝を立てゝ嗣と爲す。甫めて八歲。天子、義勝に、詔して滿祐を討たしむ。乃ち細川持常・赤松貞村・武田信貫を遣はし播磨よりせしめ、山名持豐・山名敎之・山名敎淸は美作よりせしむ。兵凡そ五萬人。滿祐、貞村の來ると聞き、大に喜んで曰く、「豎

子の來るは、吾の願ふ所なり」と。乃ち兵を遣はし、蟹坂に迎へ撃ち、大に之を敗る。持常は滿祐と姻あり。自ら一軍を以て前に居り、故に逗撓して進まず。

【通釋】八月、滿家の子の畠山持國は管領の細川持之等と相談して、義教の子義勝を立てゝ、跡目とした。その時やつと八歳であつた。天皇は義勝に詔して滿祐を討たしめられた。そこで細川持常・赤松貞村・武田信賢を遣はして播磨より進ましめ、山名持豐・山名教之・山名教清をして美作より進ましめた。その兵は皆で五萬人であつた。滿祐は貞村が攻めに來ると聞いて大に喜んで曰ふには「小僧が來るのは願つたり叶つたりだ」と。そこで兵を遣はし、蟹坂に迎へ撃つて、大に之を敗つた。持常は滿祐と緣續きであつた。自ら一軍を率ゐて前に居り、わざと愚圖ついて進まうともしなかつた。

【語釋】蟹坂（播磨）

九月、持豐進至法華山。山太險。滿祐兵扼守其隘、懸巨材而蔟。持豐患之、夜使士兵數千人持一炬、上其傍山。滿祐兵謂我冐嶮而入也、走而拒之。守隘之兵減。持豐則收牛數百頭、縛藁爲人、跨牛背、驅赴敵軍。精兵數百、鼓譟從之、曉自隘口進。滿祐兵以藁人爲敵、悉發其懸材。牛死而兵入。滿祐兵驚潰。持豐進入播磨、連陷諸砦、先衆至白旗城。城兵逃降略盡。滿祐與渥美等皆自殺。乃以三國分賜持豐等。持豐、時熙

孫也。教康走北畠氏不納而死。教祐走少貳嘉頼。嘉頼納之。大内教世、持盛孫也。奉命撃破之。嘉頼・教祐、竝走對馬。乃賞賜嘉頼邑於教世。自明徳應永二役、山名・大内氏皆微、至是復興。

訓讀 九月、持豊進みて法華山に至る。山太だ險なり。滿祐の兵、其の險を扼守し、巨材を懸けて竢つ。持豊之を患へ、夜、土兵數千人をして、一炬を持ち、其の傍山に上らしむ。滿祐の兵、我れ嶮を冒して入ると謂ふや、走つて、之を拒ぐ。險を守るの兵減ず。持豊則ち牛數百頭を收め、藁を縛し、人と爲し、牛背に跨らせ、驅つて敵軍に赴かしめ、精兵數百、鼓譟して之に從ひ、曉に隘口より進む。滿祐の兵、藁人を以て敵と爲し、悉く其の懸材を發す。牛死して兵入り、滿祐の兵、驚き潰ゆ。持豊進んで播磨に入り、連に諸砦を陷れ、衆に先だつて白旗城に至る。城兵、逃れ降り略ゝ盡く。滿祐、渥美等と皆自殺す。乃ち三國を以て持豊等に分賜す。持豊は、時熙の孫なり。教康は北畠氏に走り、納れられずして死す。教祐は少貳嘉頼に走る。嘉頼、之を納る。大内教世は持盛の孫なり。命を奉じて之を撃破す。嘉頼・教祐、竝に對馬に走る。乃ち嘉頼の邑を教世に賞賜す。明徳・應永の二役より、山名・大内氏、皆微なりしも、是に至りて復興る。

通釋 九月、持豊は進んで法華山まで來た。山は大層險しかつた。滿祐の兵はその狹い處を抑へ守り、大きな材木を吊り下げて待つてゐた。持豊は之を患ひ、夜、土地の農兵數千に銘々一本づゝの松明を持たせて、その側の山に上らしめた。滿祐の兵は山名の勢が險阻を冒して攻め入つたと思ひ、走つて之を拒いだ。それが爲めに狹

い處を守つてゐた兵が大分減つた。持豐は數百頭の牛を徴收し、藁を縛りつけて人の形となし、それを牛の背に跨らせ、敵軍中に追ひやつて、その後から精兵數百が大鼓を鳴らし噪ぎ立て、從ひ、曉方その狹い入口から進んだ。滿祐の兵は藁人形を敵だと思ひ込み、全部吊した材木を落した。牛は死んだが兵士は後から攻め入り、それが爲めに滿祐の兵は驚き潰えて終つた。持豐は進んで播磨に入り、次ぎ〳〵と諸方の砦を攻め落し、衆に先き立つて白旗城に押し寄せた。城兵は或は逃れ降り、大概ゐなくなつて終つた。滿祐は渥美等と與に皆自殺した。そこで滿祐の領地、播磨・備前・美作の三國を持豐等に分け賜つた。この持豐は時熙の孫である。教康は北畠氏に走り、納れられないで死んで終つた。教祐は少貳嘉賴の處へ逃げ込んだ。嘉賴は之を納れた。大內教世は持盛の孫である。命を奉じて之を擊ち破つた。嘉賴・教祐は二人とも對馬に走つた。そこで嘉賴の土地を教世に賞賜された。明德・應永の二役後、山名・大內は皆衰へてゐたが、こゝに至つて再び盛になつて來た。

【語釋】明德・應永（ともに後小松天皇の年號）

三年、義勝卒。義勝幼喜騎馬、卒墮馬死。官止於四位左中將。義勝母、卽小辨、讒殺一色義貫者。世稱義貫爲祟云。畠山持國爲管領。議立義勝同母弟義成。甫八歲。後改名義政。

【通釋】三年、義勝卒す。義勝、幼より馬に騎るを喜み、卒に馬より墮ちて死す。官は四位左中將に止る。義勝

の母は、即ち小辨にして、一色義貫を讒殺せし者なり。世、義貫祟を爲すと稱すと云ふ。畠山持國、管領たり。議して義勝の同母弟義成を立つ。甫めて八歲。後、名を義政と改む。

【通釋】三年、義勝は歿した。義勝は幼き時分から馬に乗ることが好きで、とう〳〵馬から落ちて死んだ。その官は四位左中將に止まつた。義勝の母は即ち小辨であつて、一色義貫を讒言して殺した女である。世間では義勝の變死は義貫の祟りであるといつた。畠山持國が管領となつた。相談の結果、義勝の同母弟義成を立てゝ將軍とした。この時やつと八歲であつた。これが後、名を義政と改めた。

文安二年、關東將士相與共請、立故持氏子永壽、爲鎌倉主、以故憲實子龍稱執事。永壽初走信濃、依母黨大井持光。上杉氏不之知也。憲實既削髮、又與攻結城、心甚愧之。及結城陷、則以其二子爲僧、携而西奔、以自晦匿。猶有一子、在伊豆。是爲龍稱。自持氏亡、關東不靖。長尾昌賢建議、欲立持氏胤子以慰藉衆心。乃索獲永壽、請之京師。京師議許之、賜永壽名成氏、賜龍稱名憲忠。既而結城成朝來自陸奧、仕成氏。成氏與之謀、欲修怨於上杉氏。寶德二年、謀泄、成氏走江島。憲忠追戰于海濱。將士和解之、奉成氏歸鎌倉。事纔得釋。而京師比年多虞、南國兵乘隙並起。赤松敎祐在

朝鮮鬨亂而還、欲復其家、發覺被誅。

【讀下】文安二年、關東の將士、相與共に請ひ、故の持氏の子永壽を立て、鎌倉の主と爲し、故の憲實の子龍穉を以て執事とす。永壽、初め信濃に走り、母黨大井持光に依る。上杉氏之を知らざるなり。憲實既に髮を剃り、又結城を攻めたるに與り、心に甚だ之を愧づ。結城陷るに及び、則ち其の二子を以て僧と爲し、携へて西奔し以て自ら晦匿す。猶ほ一子あり、伊豆に在り。是れ龍穉なり。持氏亡びしより、關東靖からず。長尾昌賢、建議し、持氏の胤子を立て、以て衆心を慰藉せんと欲す。乃ち永壽を索め獲、之を京師に請ふ。京師、議して之を許し、永壽に名を成氏と賜ひ、龍穉に名を憲忠と賜ふ。既にして結城成朝、陸奧より來り、成氏に仕ふ。成氏之と謀り、怨を上杉氏に修めんと欲す。寶德二年、謀泄れ、成氏、江島に走る。憲忠追うて海濱に戰ふ。將士、之を和解し、成氏を奉じて鎌倉に歸り、事纔に釋くを得たり。而して京師、比年、虞多く、南國の兵、隙に乘じて並び起る。赤松教祐、朝鮮に在り。亂を聞いて還り、其の家を復せんと欲し、發覺して誅せらる。

【通釋】文安二年、關東の將士は相共に請うて故の持氏の子永壽を立て、鎌倉の關東管領となし、故の憲實の子の龍穉を以て執事とした。永壽は初め信濃に走り、母の一族大井持光の所にたよつた。上杉氏は之を知らなかつた。憲實はすでに髮を剃り落したが又結城を攻める事に關係して、心中甚だ之を愧ぢてゐた。結城が落ちてから二人の倅を坊主となし、之をつれて西に奔り、自ら世間から跡を晦ました。もう一人子供があつたが、それは伊豆に居た。これが龍穉である。持氏が滅んでからは關東は兎角穩やかでなかつた。長尾昌賢は建議して、持氏の後胤を立て、關東管領となし、それで人々の心を慰めようと思つた。斯くして詮索して永壽を見出し、之を管領

にして貰ひ度いと京都の將軍家に請うた。將軍家では評議して之を許し永壽に名を成氏と賜はり、龍稱には名を憲忠と賜はつた。その內に結城成朝が陸奧から來て成氏に仕へた。成氏は之と相談して上杉氏に返報をしようと思つた。寶德二年その謀が泄れ、成氏は江島に走つた。憲忠は追つかけて海濱で戰つた。將士が仲に入つて之をなだめ、成氏をつれて鎌倉に歸り、この事件はやつともつれが解けた。しかし京都では每年變事が打ち續き南方諸國の兵はその隙に乘じて並び起つた。赤松敎祐は朝鮮に居た。亂が起つたと聞いて、日本に歸り、其の家を再興しようと思ひ、露顯して誅せられた。

語釋　文安（後花園天皇の年號。）○心祜愧之（前に君を弑し、今其君の子を滅したから心中に愧ちた。）○二子（德丹、周清。）○寶德（後花園天皇の年號。）○海濱（七里ケ濱）

初、赤松氏亡、畠山持國謂、功臣之後不當絕也。欲令故滿則子則重奉祀。曰、滿則死明德之役、而則重不與嘉吉之逆。是宜立也。赤松氏遺臣因擁則重起播磨。山名持豐聞之曰、吾樹功受封。賊黨敢欲奪之。乃將兵發但馬、擊殺則重。持國不平。持國父子擁立三將軍、官至從三位、頗驕恣。其朝政府、或乘篾輿、從騎士。其下亦多犯法者。藤原兼良・藤原房嗣、皆冀關白、交賂於持國。其威權如此。而持豐與之抗衡。持豐剛愎曰、宗全。以女妻細川勝元。勝元、滿元孫也。勝元自父持元・伯父持之、與畠山氏更爲管領。以故深結持豐、以傾持國。持國無子。養姪政長爲嫡嗣、任尾張守。已而生男

義就、爲右衛門佐。持國愛之、欲廢政長。其家長游佐某、數〻擊南兵有功。持國因命游佐輔義就。游佐同僚神保某、嫉游佐權勢、欲立政長而排游佐。乃敎政長、自託於持豐・勝元。

【訓讀】初め赤松氏の亡ぶや、畠山持國謂へらく、「功臣の後絕つべからざるなり」と。故の滿則の子則重をして祀を奉ぜしめんと欲す。曰く、「滿則は明德の役に死し、而して則重は嘉吉の逆に與らず。是れ宜しく立つべきなり」と。赤松氏の遺臣、因つて則重を擁して播磨に起る。山名持豐、之を聞いて曰く、「吾れ功を樹て封を受く。賊黨敢て之を奪はんと欲す」と。乃ち兵に將として但馬を發し、則重を擊ち殺す。持國、不平なり。持國父子、三將軍を擁立し、官、從三位に至り、頗る驕恣なり。其の政府に朝する、或は箯輿に乘り、騎士を從ふ。其の下も亦法を犯す者多し。藤原兼良、藤原房嗣、皆關白を覬ひ、交〻持國に賂ふ。其の威權此くの如し。而して持豐、之と抗衡す。持豐髮を剃り、宗全と曰ふ。女を以て細川勝元に妻はす。勝元は滿元の孫なり。勝元、父持元・伯父持之より畠山氏と、更〻管領と爲る。故を以て、深く持豐に結び、以て持國を傾く。持國子なし。姪政長を養ひ嫡嗣と爲し、尾張守に任ぜらる。已にして男義就を生み、右衛門佐と爲る。持國、之を愛して、政長を廢せんと欲す。其の家長游佐某、數〻南兵を擊ちて功あり。持國因つて游佐に命じ義就を輔けしむ。游佐の同僚神保某、游佐の權勢を嫉み、政長を立て、游佐を排せんと欲す。乃ち政長に敎へて、自ら持豐・勝元に託せしむ。

【口譯】初め赤松氏が亡んだ時、畠山持國が思ふのに「功臣の子孫は絕やしてはならぬ」と。故の滿則の子の則重をして、家を繼がせ、先祖の祭祀をさせようと思つた。曰ふのに「滿則は明德の役に討死し、そして則重は嘉

吉の逆謀には關係してゐなかつた。これは宜しく跡を立つべきである」と、赤松氏の遺臣はそれをきつかけに則重を守り立てゝ播磨に起つた。山名持豐は之を聞いて曰ふのに「余は功を建てゝ播磨に土地を貰つた。賊黨共は敢てそれを奪はうと思つてゐるのだ」と。そこで兵を但馬から繰り出して則重を擊ち殺した。持國は之に對しては心穩やかでなかつた。持國親子は三代の將軍を擁立し、其官位も昇進して、從三位までになり、隨分驕り我儘であつた。幕府に出勤するにも、時には網代の輿に乘つて騎士を供に從へることもあつた。その部下の者も主人を笠にきて法度を犯すものが多かつた。藤原兼良・藤原房嗣は二人とも關白になりたくて、かはるがはる持國に賄賂を贈つた。持國の威權はそれ程盛んであつたのである。そして山名持豐は持國と張り合つて互に讓らなかつた。持豐は髮を剃つて宗全といつた。娘を細川勝元に妻はせた。勝元は滿元の孫である。勝元は父持元・伯父持之の時より畠山氏と交代で管領となつてゐた。そんな關係から深く持豐と結托して持國を傾け倒さうとした。持國には子がなかつた。姪の政長を養つて跡取となし、尾張守に任ぜられた。その内に義就といふ男子が生れ右衞門佐になつた。持國はこの義就を愛し自然政長を廢しようと思ふに至つた。畠山氏の家令の游佐某は度々南朝の兵を擊つて手柄を立てた。持國はその游佐に命じて義就を輔けしめた。游佐の同僚の神保某は游佐の權威を妬み、政長を立てゝ游佐を押し退けようと思つた。そこで政長に敎へて、持豐・勝元の二人に身の振り方を賴み込ませた。

語釋 明德之役（山名氏清の亂。）○嘉吉之亂（赤松滿祐が義敎を弑した事變。）○父子擁二立三將軍一（持國の父の滿家は義敎を立て、持國は義勝・義政を立てた。）○家長（家臣の長）○游佐某（國佐といふ。）○神保某（長誠といふ。）

享德三年四月、持國請二義政一立二義就一、欲レ誅二政長一。政長走匿二於勝元家一、使三神保等依二持

豐。八月、畠山氏將士、率屬政長、京師大騷。幕府召諸將自衞。獨持豐・勝元不往。其夜有人縱火於持國第。持國奔入伯父滿則第。義就奔依山名教之。教之不納。則入游佐家。游佐家又火。終奔河內。持國遂匿建仁寺。於是勝元攜政長、入謁幕府、白義政曰、「近日之事、臣僕礒谷所爲也」。九月、誅礒谷以謝。而政長竟得立焉。遣兵擁持國而歸。踰歲、持國卒。

【讀方】享德三年四月、持國、義政に請ひ義就を立て、政長を誅せんと欲す。政長走り勝元の家に匿れ、神保等なして持豐に依らしむ。八月、畠山氏の將士率ね政長に屬し、京師、大に騷ぐ。幕府諸將を召して自ら衞る。獨り持豐・勝元往かず。其の夜、人あり、火を持國の第に縱つ。持國は奔り伯父滿則の第に入り、義就は奔り、山名教之に依る。教之、納れず。則ち游佐の家に入る。游佐の家又火く。終に河內に奔る。持國遂に建仁寺に匿る。是に於て、勝元、政長を携へ、入つて幕府に謁し、義政に白して曰く、「近日の事、臣の僕礒谷の爲す所なり」と。九月、礒谷を誅し以て謝す。而して政長、竟に立つを得たり。兵を遣はし持國を擁して歸らしむ。歳を踰えて、持國卒す。

【通釋】享德三年四月、持國は義政に請うて義就を立て、政長を殺さうと思つた。政長は走つて勝元の家に匿れ神保等をなして持豐に依らしめた。八月、畠山氏の將士は大抵政長に屬き京都は大騷ぎとなつた。幕府では諸將を召して自ら衞つた。たゞ持豐と勝元だけは往かなかつた。その夜、持國の屋敷に火をつけた

者があつた。持國は走つて伯父滿則の屋敷に入り、義就は奔つて山名敎之にたよつた。所が敎之は之を入れなかつた。そこで家來游佐の家に入つた。游佐の家も亦燒けた。それでとう／＼河内に奔つた。持國は遂に建仁寺に隱れた。そこで勝元は政長をつれて幕府に出で義政に會つて申し上げていふには、「この頃の放火の一件は私の下僕の磯谷なるものが致しましたので御座います」と。九月、磯谷を誅して謝罪をした。そして政長は結局畠山の跡目となることが出來た。兵を遣はし持國をつれて歸らせた。その翌年に持國は死んだ。

義政聞焚持國第者、持豐所爲也、十一月、召諸將、命誅持豐、勝元俄拔其衆、赴東山。擧族從之、幕府兵寡。勝元乃爲請赦持豐。持豐又謝、獻誓書。事輙釋。乃罷持豐之國。細川成之、乘間請錄赤松氏之裔。義政許之。成之、持常子也。康正元年夏、召赤松敎祐弟則尙、賜之播磨。持豐怒、逆擊則尙殺之。因怒曰「則尙之立、勝元何不沮止之。乃欲使之刲刃婦翁腹邪」勝元無子。養持豐子爲嗣。已而生子。則廢之。持豐因是恨勝元也。無幾何、持豐被赦歸京師、勢威益熾。持豐長身赭面。人呼曰赭入道。

【訓讀】義政、持國の第を焚くは、持豐の爲す所なりと聞くや、十一月、諸將を召し、命じて持豐を誅せしむ。勝元、俄に其の衆を拔き、東山に赴く。擧族之に從ひ、幕府、兵寡し。勝元乃ち爲めに持豐を赦さんことを請ふ。持豐、又謝して、誓書を獻ず。事輙ち釋く。乃ち持豐を罷め國に之かしむ。細川成之間に乘じて赤松氏の裔を錄

せんと請ふ。義政、之を許す。成之は、持常の子なり。康正元年夏、赤松教祐の弟則尚を召し、之に播磨を賜ふ。持豐怒り、則尚を逆へ擊つて之を殺す。因つて怒つて曰く、「則尚の立つ、勝元何ぞ之を沮止せざる。乃ち之をして刃を婦翁の腹に剚さしめんと欲するや」と。勝元、子なし。持豐の子を養つて嗣と爲す。已にして子を生む。則ち之を廢す。持豐是に因つて勝元を恨む。幾何もなく、持豐赦されて京師に歸り、勢威益〻熾なり。持豐、長身赭面なり。人呼んで赭入道と曰ふ。

【通釋】義政は持國の屋敷を燒いたのは實は山名持豐の所業であると聞き、十一月、諸將を召し命じて持豐を誅せしめようとした。勝元は急に部下を引きつれて東山に赴いた。一族全部之に從ひ、幕府には兵が少かつた。そこで勝元は爲めに持豐を赦されむことを請うた。持豐は又詫誓文を獻じて謝まつた。これで事は譯なく濟んだ。そこで持豐を罷めさせて、その領地但馬に歸らせた。細川成之は持豐のゐない間に付け込み、赤松氏の後裔を取り立て、貰ひたいと願ひ出た。義政は之を許した。成之は持常の子である。康正元年夏、赤松教祐の弟の則尚を召して、之に播磨を賜はつた。持豐は怒つて則尚が領地に行くのを逆へ擊つて、之を殺した。そこで怒つて曰ふには「則尚が立つのを勝元は何故邪魔立てしなかつたか。却て則尚をして刃を舅の腹に刺させようといふのか」と、（勝元は持豐の婿）勝元は子がなかつた。持豐の子を養つて跡目とした。その內に子を生んだ。それで養子を廢めて終つた。そんなことで持豐は勝元を恨んだ。間もなく持豐は罪を赦されて京都にかへり、その威勢は益〻盛であつた。持豐は丈高く、赤ら顏であつた。それで人はあか入道と呼んでゐた。

【語釋】拔二其衆一（其の衆を引きつれ行くこと。）○康正（後花園天皇の年號。）○剚（刺し込むこと。）○婦翁（勝元の妻は持豐の女だから勝元から見れば持豐は婦翁。）○持豐子（是豐）○

生子（子は倘順）

時赤松氏遺臣所在伏匿、憚持豐不敢有爲。有石見者焉。仕内大臣藤原實量。常思復赤松氏。從容語實量以其志。曰「細川氏・山名氏、内有釁隙。臣以爲以此時、附細川氏、則志或成矣」。因出示尊氏與則村書。實量視書、歎曰「其祖爲將軍之父、其孫爲將軍之仇。仇讎之責、汝何以償」。石見曰「今將軍立之歲、南人犯闕奪璽。璽今在吉野。臣請往收復之」。乃令舊僚中村某等往吉野、佯仕南朝皇子。長祿元年、中村終得殺南朝皇子取璽還獻。義政議賞其功。勝元贊之、賜邑於赤松政則。政則父性存、義雅子也。於滿祐爲姪。嘉吉之變、猶幼。依建仁寺僧龍澤而免。後生政則。甫五歲。於是、賜加賀之半。持豐怒、使刺客刺殺石見。

訓讀 時に赤松氏の遺臣、所在に伏匿し、持豐を憚り敢て爲すあらず。石見といふ者あり。内大臣藤原實量に仕ふ。常に赤松氏を復せんと思ふ。從容として、實量に語るに其の志を以てす。曰く、「細川氏・山名氏、内に釁隙あり。臣以爲へらく、此の時を以て細川氏に附かば、則ち志或は成らん」と。因つて尊氏の則村に與へし書を出し示す。實量、書を視て歎じて曰く、「其の祖は將軍の父と爲り、其の孫は將軍の仇と爲る。仇讎の責、汝、

何を以て償ふ」と。石見曰く、「今將軍立つの歳、南人、闕を犯し璽を奪ひ、璽今吉野に在り。臣請ふ、往いて之を收復せん」と。乃ち舊僚中村某等をして吉野に往き、佯つて南朝の皇子に仕へしむ。長祿元年、中村、終に南朝の皇子を殺し、璽を取り還獻するを得たり。義政、議して其の功を賞す。勝元、之を賛し、邑を赤松政則に賜ふ。政則の父性存は、義雅の子なり。滿祐に於て姪たり。嘉吉の變には猶ほ幼なり。建仁寺の僧龍澤に依つて免る。後政則を生む。甫めて五歳。是に於て加賀の半を賜ふ。持豐怒り、刺客をして石見を刺殺せしむ。

（通釋）時に赤松氏の遺臣は諸方に隱れてゐたが、持豐を恐れて敢て事を起さなかつた。石見といふものがゐた。內大臣藤原實量に仕へてゐた。これがいつも赤松氏を再興しようと思つてゐた。ある時ゆつたりと實量に其の志を語つた。そして曰ふには「細川氏・山名氏は內輪であり乍ら不和であります。私はこの時をはづさず、細川氏に附いたなら、平生の志が或は成就するかも知れないと思つてゐます」と。そこで昔尊氏が則村に與へた書面を出して見せた。實量はその書を見て歎息して曰ふには「その先祖は將軍の親となり、その子孫は將軍の仇となつた。義敎を殺した責をお前はどうして償はうといふのだ」と。石見が答へて曰ふには「今の將軍が職に就かれた年に南朝の者が皇居に攻め入り、三種の神器の御璽を奪ひ、今は吉野にあります。私は行つて之を取り返しませう」と。そこで昔の同僚の中村某等をして吉野に往き、佯つて南朝の皇子に仕へさせた。長祿元年、中村は終に南朝の皇子を殺し、御璽を取り返して、皇室にお還へし申すことが出來た。義政は議して其の功を賞した。勝元は之を賛成し、領地を赤松政則に賜はつた。政則の父の性存は義雅の子であつた。滿祐に對しては甥であつた。嘉吉の變の時にはまだ幼かつた。建仁寺の僧の龍澤に依つて難を免れた。それが後に政則を生んだのである。政則はこの時（領地を賜はつた時）やつと五歳であつた。かくて加賀の半分を賜はつたのである。持豐は赤松氏の再

興を怒り、刺客をやつて右見を刺し殺させた。

【語釋】尊氏與二則村一書（尊氏九州へ走る時に與へし書。書中則村を父と稱してゐる。）○其祖（則村）○其孫（祐滿）○將軍之仇（義教を弑せしをいふ。）○南朝皇子（後醍醐天皇の曾孫某。一說に小倉宮の孫の尊秀王と。）○長祿（後花園天皇の年號。）

當二是時一、三管領細川氏獨盛、四職山名氏獨盛。而伊勢氏權勢甲二於七頭一。先レ是、斯波義將・義重・義淳・義繼、父子相襲、享德中、義繼夭。無レ子。以二族義敏一爲レ嗣。義敏者、義將弟義種之曾孫也。斯波氏家有二三老一。曰二甲斐・織田・朝倉一。三老常不レ喜二義敏一。相共竊罵レ之曰「新主人何無二禮於舊家臣一也」。因二伊勢貞親一請レ廢レ之。貞親娶二甲斐氏一。則右レ之、爲請二義政一。義政欲二兩和二解之一。三老不レ肯。乃諭二義敏一、讓二其子松王一而自退。

【訓讀】是の時に當り、三管領は、細川氏獨り盛にして、四職は、山名氏獨り盛なり。而して伊勢氏の權勢、七頭に甲たり。是より先き、斯波義將・義重・義淳・義繼、父子相襲ぎ、享德中、義繼、夭す。子なし。族義敏を以て嗣と爲す。義敏は、義將の弟義種の曾孫なり。斯波氏の家に三老あり。甲斐・織田・朝倉と曰ふ。三老、常に義敏を喜ばず。相共に竊に之を罵つて曰く、「新主人何ぞ舊家臣に無禮なる」と。伊勢貞親に因つて之を廢せんと請ふ。貞親は甲斐氏に娶る。則ち之を右けて、爲めに義政に請ふ。義政、兩ながら之を和解せんと欲す。三老、肯ぜず。乃ち義敏に諭し、其の子松王に讓つて自ら退かしむ。

〔通釋〕この當時、三管領では細川氏だけが盛で、四職では山名氏だけが盛であつた。そして伊勢氏の權勢は七頭中で第一であつた。これより先き、斯波義將・義重・義淳・義繼は父子相ついで來たが享德中、義繼が若死をした。それで子が無かつた。同族の義敏を以て跡目とした。義敏は義將の弟義種の曾孫である。もと〳〵斯波氏の家には家老が三人あつた。甲斐・織田・朝倉といつた。この三家老はいつも義敏を好まなかつた。三家老は相共にひそかに之を罵つて曰ふには「こんどの新主人は、新米の癖に舊家臣に對して無禮なのは、どうしたといふのだ」と。伊勢貞親に賴んで義敏を廢したいと請うた。貞親は甲斐氏から嫁を貰つてゐた。故に之を助け、彼等三人の爲めに義政に請うた。義政は兩方を和解させようと思つた。けれども三家老は承知しなかつた。仕方がなく義敏に諭してその子の松王に跡を讓つて隱居させた。

三年、義敏致仕。貞親乃請立義廉。許之。義廉者、義種之孫也。義敏失望、走依大內教弘。伊勢氏世掌出納、甚有權。而至義政時尤甚。義政妻曰富子、藤原重政女也。有寵、所言莫不聽從。內謁公行、號令牴牾。而伊勢氏專權於中間、義政獨事遊宴而已。義政喜奢侈、髙倉第障子、一間直二萬錢。其他稱之。以故徵賦什倍前代。前代借畿內富商之金、率一歲不過數次。至義政時、則一月或八九次。故事每將府有大儀、課諸將助其費、率十歲一舉。義政五歲九舉。天下凋弊。近江士人熊谷某好學。密上書幕府、

極諫義政。義政怒曰「其言則然。而非其人矣」命貞親奪熊谷邑、逐之。

【訓譯】三年、義敏、致仕す。貞親乃ち義廉を立てんと請ふ。之を許す。義廉は義種の孫なり。義敏望を失ひ、走つて大内教弘に依る。伊勢氏、世出納を掌り、甚だ權あり。而して義政の時に至り尤も甚だし。義政の妻を富子と曰ふ。藤原重政の女なり。寵あり、言ふ所、聽從せざるなし。内謁公行し、號令牴牾す。而して伊勢氏權を中間に專にし、義政は獨り遊宴を事とするのみ。義政、奢侈を喜び、高倉第の障子、一間の直二萬錢なり。其の他之に稱へり。故を以て、征賦前代に什倍す。前代、畿内富商の金を借ること、率ね一歲に數次に過ぎず。義政の時に至つては、則ち一月に或は八九次なり。故事に將府、大儀ある毎に、諸將に課して其の費を助けしむ。率ね十歲に一舉、義政は五歲に九舉なり。天下凋弊す。近江の士人熊谷某學を好む。密に幕府に上書して、義政を極諫す。義政怒つて曰く、「其の言は則ち然り。而れども其の人に非ず」と。貞親に命じて熊谷の邑を奪ひ、之を逐はしむ。

【通釋】三年、義敏は官職を辭した。そこで、貞親は義廉を立てたいと願ひ出た。之を許した。この義廉は義種の孫である。義敏は自分の子が相續出來なかつたので、大に失望し、走つて大内教弘の處にたよつた。伊勢氏は、代々會計のことを掌り、大層權力があつた。そして義政の時に至つて、殊に甚だしくなつた。義政の妻は富子といつた。藤原重政の娘である。隨分可愛がられて、何を言つても、義政は皆その言ひなりに從つてゐた。奧向の請願が大びらに行はれ、政府の號令もまち／＼になつてゐた。そして、伊勢氏は政府と奧向との中間に在つて、權力を擅にし、義政はたゞ遊覽。酒宴ばかりをやつてゐた　義政は贅澤を好み、その高倉の屋敷の障

子は、一間の價二萬錢もした。その他は之に準じて、皆高價なものばかりであつた。そんな譯で、租税は前代の十倍も取り立てゝゐた。前の時代には畿內の豪商から錢を借りたのは、大抵一年に五六回に過ぎなかつた。義政の時になると一個月の內に八九回にも及んだことがある位である。又故例として幕府に何か大儀式の行はれる時には、いつも諸將に割りあてゝその費用を助けさせた。併し大抵十年に一度位のものであつたが、義政は五年に九回も大儀式をやつた。それが爲め天下の者はすつかり衰へて終つた。近江の士の熊谷某といふ者は、學問を好み道理に通じてゐた。ひそかに幕府に上書して義政を手酷しく諫言した。義政は怒つて曰ふには「その言ふことは道理千萬だ。併しそんな事を言ふ身分ではない」と。伊勢貞親に命じて熊谷の領地を沒收し、熊谷を放逐せしめた。

語釋　走依（周防に走り、大內氏に依る。）○一間（六尺）○熊谷某（左衛門尉）

先是、畠山政長・義就、相鬩河內。義政兩赦之入京師。寛正元年九月、義政命貞親逐義就。義就曰「吾顧無罪。將軍豈信讒乎」乃奔河內。義政令政長攻之、陷若江城。細川勝元請援政長。三年、勝元令族成之爲假管領、將二十餘州兵赴援。義就以數百人據嶽山・金胎寺二城、擊卻京軍。而金胎寺竟陷。四年三月、京軍圍嶽山。山名是豐以備後兵先登、與義就戰、七勝七敗、城兵疲而卻。是豐曰「我宗全子也。不拔城不已」城

兵不敢出。義就揮刀、身先士卒。是豐曰「義就勇士、眞吾敵也」。戰至日暮、乃交解。四月、嶽山陷。義就欲自殺。湯淺二郎代死。義就脫走入高野。政長攻之。又走吉野。政長凱旋。是豐歸、語父以義就勇。持豐心奇之。

【訓讀】是より先き、畠山政長・義就、河内に相鬩ぐ。義政、兩つながら之を赦し、京師に入らしむ。寛正元年九月、義政、貞親に命じて義就を逐はしむ。義就曰く、「吾れ顧ふに罪なし。將軍豈に讒を信ずるか」と。乃ち河内に奔る。義政、政長をして之を攻めしめ、若江城を陷る。細川勝元、政長を援けんと請ふ。三年、勝元、族成之をして假の管領と爲し、二十餘州の兵に將として赴き援けしむ。義就數百人を以て、嶽山、金胎寺の二城に據り、擊つて京軍を卻く。而して金胎寺、竟に陷る。四年三月、京軍嶽山を圍む。山名是豐、備後の兵を以て先登し、義就と戰ひ、七勝七敗、城兵疲れて卻く。是豐曰く、「我は宗全の子なり。城を拔かずんば已まず」と。城兵敢て出でず。義就、刀を揮ひ、身、士卒に先だつ。是豐曰く、「義就は勇士、眞に吾が敵なり」と。戰ひて日暮に至り、乃ち交〻解く。四月、嶽山陷る。義就、自殺せんと欲す。湯淺二郎代り死す。義就脫走して、高野に入る。政長、之を攻む。又吉野に走る。政長、凱旋す。是豐歸り、父に語るに義就の勇を以てす。持豐、心に之を奇とす。

【通解】これより先き、畠山政長・義就の兩人が、河内でいがみ合つてゐた。義政は兩人とも赦して、京都に還らせた。寛正元年九月、義政は貞親に命じて、義就を逐はしめた。義就は曰ふのに「私はどう考へて見ても罪はない。將軍は讒言を信ぜられたのではあるまいか」と。そこで河内に走つた。義政は政長をして之を攻めさせ、

若江城を陥れた。細川勝元は政長を援けたいと申出た。三年勝元は一族の成之をして假の管領とならしめ、二十餘ケ國の兵士に將として赴き援けしめた。義就は數百人を率ゐて嶽山・金胎寺の二城に立て籠り、京都の軍を討ち退けた。併し金胎寺は遂に陥落した。四年三月、京軍は嶽山を取り圍んだ。このとき山名是豐は備後の兵をつれて先登し、義就と戰ひ、七度勝ち、七度敗け、宜い勝負であつたが、城兵はすつかり疲れて退卻した。是豐が曰ふのに、「我は宗全の子である。城を落さなければ止まない」と。城兵は出て來ようとしなかつた。義就は刀を揮つて自ら士卒に先き立つて出て來た。是豐が曰ふのに「義就は勇士でほんとに俺のいゝ相手だ」と。日暮まで戰つたが決がつかず雙方共互に退卻した。四月、嶽山も陥落した。義就は自殺しようと思つた。湯淺二郎なるものが身代りに死んだ。義就は逃れ走り高野山に入つた。政長は之を追つかけ攻めた。そこで義就は又吉野に逃げかくれた。かくて政長は凱旋した。是豐は國に歸つて父に義就の武勇を話した。持豐は心中義就は見所のある男だと思つた。

【語釋】寛正（後花園天皇の年號）〇若江城・嶽山・金胎寺（河内）〇高野（紀伊）

五年、皇太子受禪、是爲後土御門帝。義政亦倦政、欲辭職。而歲三十未有子也。弟義尋、削髮爲淨土寺門主。義政欲讓職於義尋。義尋固辭曰「近日人情、反覆可畏」。義政使人言曰「予豈有所顧慮邪。吾如他日擧男、就襁褓、卽爲僧耳。必不子廢也。子第速

來代我。義尋乃蓄髮、徙今出川第、更名義視。將士赴謁。勝元執事焉。已而義政殊無讓職之意。六年十一月、富子生男義尙。內外慶賀。富子不忍以爲僧也。日夜啼泣、願立爲嗣、欲得一强援。念諸將有威力者、曰「無若赭入道者」。密作書、囑持豐曰「欲立孺子。而義視業已爲嗣、勝元輔之。不可撼也。願公爲吾圖之」。持豐素恨勝元。欲立義尙而己執事焉也。乃許諾之。因請赦義就入京師、以援己。

【訓讀】五年、皇太子、禪を受く。是を後土御門帝と爲す。義政も亦政に倦み、職を辭せんと欲す。而して歲三十、未だ子あらず。弟義尋、髮を削り淨土寺の門主たり。義政、職を義尋に讓らんと欲す。義尋固辭して曰く、「近日の人情、反服畏るべし」と。義政、人をして言はしめて曰く、「子、豈に顧慮する所あらんや。吾れ如し他日男を擧げば、襁褓に就いて卽ち僧と爲さんのみ。必ず子を廢せず。子、第速に來り我に代れ」と。義尋乃ち髮を蓄へ、今出川の第に徙り、名を義視と更む。將士赴き謁す。勝元執事たり。已にして義政、殊に職を讓るの意なし。六年十一月、富子、男義尙を生む。內外、慶賀す。富子以て僧と爲すに忍びざるなり。日夜、啼泣し、立てゝ嗣と爲さんと願ひ、一强援を得んと欲す。諸將の威力あるものを念うて、曰く、「赭入道に若く者なし」と。密に書を作り、持豐に囑して曰く、「孺子を立てんと欲す。而れども義視、業已に嗣と爲り、勝元、之を輔く。撼すべからざるなり。願はくは公、吾が爲めに之を圖れ」と。持豐、素より勝元を恨む。義尙を立てゝ、己、執事たらんと欲す。乃ち之を許諾す。因つて請うて義就を赦し京師に入れ、以て己を援けしむ。

【通釋】五年、皇太子が御位のお禪りを受けられた。これが後土御門天皇と申し上げる。義政も亦政治に倦んで將軍職を辭めようと思つて居た。併し年三十にも成つてまだ子がない。弟の義尋は髮を剃つて淨土寺の門主になつてゐた。義政は將軍職を義尋に讓らうと思つた。義尋は固く辭して曰ふのに、「この頃の人情を見ると變心者が多くて迚も心配です」と。義政は人をやつて義尋に言はしめて曰ふには、「そなたは何もそんなに遠慮思案せんでも宜い。余がもし後日男の子でも設けるやうだつたら、むつきの中から坊主にしよう。決してそなたを廢することはしない。早く來て余に代つて將軍になれよ」と。そこで義尋は髮を延ばして還俗し、今出川の屋敷に移り名を義視と改めた。將士は義視の處へお目通りに出た。勝元がその執事となつた。所が兎角する内に義政は絕えて將軍職を讓る心がなくなつた。六年十一月、夫人富子は男の子義尙を生んだ。府中府外、皆御慶びに出た。富子はむつきの中から之を坊主にするは忍びなかつた。晝夜泣いて世嗣にして貰ひたいと願ひ、誰れか有力な後援者を得たいと思つた。諸將の中で威力のあるものは誰だらうと考へた末、曰ふには「さうだ、あか入道に越した者はない」と。そこでこつそり書面を作り、持豐に賴んで曰ふには「義尙を跡取りにしたいと思ひます。併し義視が旣に世嗣と決まつて、勝元がそれを輔佐してゐます。容易に變へることも出來ません。何卒そなたの分別で妾のために圖つて下さい」と。持豐は平素勝元を恨んでゐた。義尙を立てゝ自分がその執事にならうと思つた。そこで之を承諾した。因つて義政に願うて義就を赦して京都に還らせ、自分の援けにした。

【語釋】淨土寺（山城）○門主（門跡の法主。）○今出川（京都市中）

持豐又以女許嫁斯波義廉。時義敏在周防。其妹爲伊勢貞親妾、有寵。其子松王爲

僧貞藎弟子。於是、妾與貞藎、日請復義敏。貞親遂以教旨召義敏、入京師、禁義廉朝從、收其第宅。義廉走告之持豐。持豐大怒、欲自往其第以拒公使。家臣垣屋・太田垣等交諫曰「以私姻背公命、其若之何。君盍以其適武衞者轉適公方乎。是轉禍爲福也。君不聽臣等、臣等當薙髮染衣往高野・粉川而已。不忍視君及禍也。」

【訓讀】持豐、又女を以て斯波義廉に許嫁す。時に義敏、周防に在り。其の妹、伊勢貞親の妾と爲り、寵あり。其の子松王、僧貞藎の弟子たり。是に於て、妾と貞藎と、日に義敏を復せんと請ふ。貞親、遂に教旨を以て義敏を召して、京師に入れ、義廉の朝從を禁じ、其の第宅を收む。義廉走り、之を持豐に告ぐ。持豐、大に怒り、自ら其の第に往き以て公使を拒がんと欲す。家臣垣屋、太田垣等、交々諫めて曰く、「私姻を以て公命に背く、其れ之を若何。君盍ぞ其の武衞に適く者を以て、轉じて公方に適かざるか。是れ禍を轉じて福と爲すなり。君臣等に聽かずんば、臣等、當に髮を薙り、衣を染め、高野・粉川に往くべきのみ。君が禍に及ぶを視るに忍びざるなり」と。

【近代譯】持豐は、又娘を斯波義廉の許嫁とした。當時斯波の舊主義敏は周防に居た。義敏の妹は伊勢貞親の妾となつて寵せられてゐた。又義敏の子の松王は僧の貞藎の弟子になつてゐた。こゝに於て妾と貞藎とは毎日義敏を斯波の家督に直すように貞親に賴んだ。貞親は遂に將軍の命令で義敏を召して京都に還らせ、義廉の出仕從行を差し止め、その屋敷を沒收した。義廉は走つて、之を持豐に告げた。持豐は非常に怒つて、自身で義廉の屋敷

へ往き将軍の上使が屋敷受取りに来るのを拒がうと思つた。家臣の垣屋・太田垣等がかはるがはる諫めて曰ふには「個人的縁故の爲めに幕府の命令に背かれますのは如何なものでせう。君は何故この斯波氏に盡すために集つた者を引きつれ、轉じて將軍の方に盡されませぬか。さうなされば、禍を轉じて幸福となすもので御座います。君が若し私どもの言ふことをお聞き入れにならぬならば、私どもは髪を剃り墨染の衣に着換へ、高野か粉川へ往くばかりで御座います。君が禍に罹られるのを見ては居られません」と。

【語釋】貞蓋（鹿苑寺の僧。）○粉川（紀伊）

持豐笑曰、「吾加箭於奴輩、何不可之有。赤松滿祐之弑普光公也、細川・六角・武田諸人、往者如雲。大敗於盤坂、踏跙不進。然而自但馬口入、一戰梟逆賊首、以報將軍仇者、誰乎。然未幾何、召賊餘孽、奪我功田予之。吾聞父讎不與共戴天。田夫野人、猶知此義。今不疾父讎、而疾報讎者、欲奪此以予彼。如此公方眞可賴也。饒令吾背公命、而若輩謹慎以納媚焉。何必高野・粉川之之」。因拂衣而入、大聲罵曰、「大姓有可罰者。當告管領、諮諸將、以決其議。貞親一豎子、敢進退三職、欲使武衛之家亦踵畠山氏之禍。禍敗之至、眞不可測。今日在彼、明日在我。我必往、與義廉共生死耳」。

【訓讀】持豐笑つて曰く、「吾れ箭を奴輩に加ふる、何の不可か之れあらん。赤松滿祐の普光公を弑するや、細川・六角・武田の諸人、往く者雲の如し。大に蟹坂に敗れ、跲跙して進まず。然り而して但馬口より入り、一戰、逆賊の首を梟し、以て將軍の仇を報いし者は誰ぞ。然るに未だ幾何ならず、賊の餘孽を召し、我が功田を奪つて之に予ふ。吾れ聞く、父の讎は與共に天を戴かずと。田夫野人も、猶ほ此の義を知る。今、父の讎を疾まず、而して讎を報いし者を疾み、此を奪ひ以て彼に予へんと欲す。此くの如きの公方、眞に賴む可きなり。儻令吾れ公命に背くも、而も若が輩、謹愼し以て媚を納れよ。何ぞ必ずしも高野・粉川に之れ之かん」と。因つて衣を拂つて入り、大聲罵つて曰く、「大姓の罰すべき者あり。當に管領に告げ、諸將に諮り、以て其の議を決すべし。貞親は一豎子、敢て三職を進退し、武衞の家をして、亦畠山氏の禍を踵がしめんと欲す。禍敗の至る、眞に測るべからず。今日は彼に在り、明日は我に在らん。我れ必ず往き、義廉と生死を共にせんのみ」と。

【通釋】持豐が笑つて曰ふのに、「乃公が野郎共に矢を射ち付けるに何の不都合があらう。赤松滿祐が普光院殿(義敎)を殺した時、雲のやうに多勢で細川・六角・武田の諸人が征伐に出かけた。所が蟹坂で大敗し、跡しざりをして進めなかつた。然るにこの時但馬口から攻め入り、一戰して逆賊の首を獄門に曝し、將軍の仇を報いたものは、そも〳〵誰であつたか(言はずと知れたこの乃公である)。然るに間もなく賊の血統の者を召し出して我が功田を奪つて之に與へた。父の讎は同じ天の下には生きて居られぬものであると乃公は聞いてゐる。田夫野人でもこの道理は心得てゐる。それを將軍は父の仇(義敎の仇赤松氏)を惡まないで却つて仇を報いたもの、(持豐自らさす)を惡み、我が領地を奪つて彼に與へようとして居る。こんな公方樣だから大層賴みになる。(賴みになるといつて、賴みにならぬことを當てこすつたのである)よしんば乃公が幕府の命に背いて罪を得ても、貴樣たちはこ

の公方様に謹愼してよく媚び諂へよ。何も高野・粉川へ行くには及ぶまい」と。そこで衣を拂つて内に入り、大聲で罵つて曰ふには「大家に罰すべきものがある。管領に告げ、諸將と相談して之を決議すべきである。貞親は一個の小僧の辯に敢て三職の者を進めたり退けたりして、斯波氏の家に亦畠山の禍の貳の舞をさせようとしてゐる。どんな禍がやつて來るかまことに分つたものでない。今日は斯波の身の上でも、明日は我が家のことになるだらう。乃公はこれから出かけて、義廉と生死を共にする計りだ」と。

【語釋】餘孽（剛重・剛倚をさす。）○父讎不與共戴天（禮記中の語。）○拂衣而入（立腹して奥へ入る様を衣を拂ふといつたのである。）○三職（三管、武衛は三管の一である。）○踵畠山氏之禍（畠山政長、義就の相爭ひの跡を又ついで爭さしむること。）

於是、山名氏家臣、咸決意修兵。京師訛言「今出川氏亦右義廉」義視懼、乃走入勝元第。有人告貞親曰「細川・山名、奉命來討」四月、貞親東奔伊勢、義敏北奔越前。諸將連署請誅貞親曰「貞親不伏誅、則群臣不復能朝從」義政不得已聽之、使人諭解義視。

【通釋】是に於て、山名氏の家臣、咸、意を決して兵を修む。京師訛言す、「今出川氏も亦義廉を右く」と。義視懼れ、乃ち走り勝元の第に入る。人あり、貞親に告げて曰く、「細川、山名、命を奉じて來り討つ」と。四月、貞親、東伊勢に奔り、義敏は北越前に奔る。諸將、連署して、貞親を誅せんと請ふ。曰く、「貞親、誅に伏せすんば、則ち群臣、復朝從する能はず」と。義政已むを得ず、之を聽し、人をして義視を諭解せしむ。

【通釋】そこで山名氏の家來共は皆決心して兵を整へた。京都では出鱈目な噂を立てゝいふには「今出川氏（義視）も、亦義廉を助けるさうだ」と。義視は懼れて勝元の屋敷に逃げ込んだ。貞親に告げるものがあつて曰ふには、「細川・山名の兩氏が幕府の命令で攻めに來るさうです」と。四月、貞親は東、伊勢に走り、義敏は北、越前に走つた。諸將は連判狀を出して貞親を誅せむことを願ひ出た。貞親が誅せられない以上は我々群臣はもう出仕從行することは出來ません」と。義政は止むを得ず之を許し、又人をやつて義視を諭して和解させた。

【語釋】諭解（嫌疑のないことを諭したのである。）

於是、持豐復請赦義就。義政許之。持豐喜、使使報義就。義就在熊野、得報卽發、九月、入河內。政長部將守若江城。怖棄城走。義就盡定河內。十一月、入京師、謁幕府、徑詣謝持豐、極歡而出。或夜書義就門曰「右衞門佐、拜戴二物。御所之盃・山名之足」義就謂、勝元・政長之黨所爲也。明年、改元應仁。故事、每歲首、管領以下、更饗將軍。是時、政長爲管領。正月二日、政長治具、請義政。義政不往。政長驚曰「吾勤仕異等、饒使不蒙褒賞、何遽至被疎斥。蓋宗全・義就讒言所致也」義就聞之、大喜曰「彼已爲將軍所疎斥。當往驅逐之。」政長家宰神保長誠、請政長修守備。

【書下し】是に於て、持豐、復義就を赦さんと請ふ。義政、之を許す。持豐喜び、使をして義就に報せしむ。義就、熊野に在り、報を得て卽ち發し、九月、河內に入る。政長の部將、若江城を守る。怖れ城を棄てゝ走る。義就、盡く河內を定む。十一月、京師に入り、幕府に謁し、徑に詣つて持豐に謝し、歡を極めて出づ。或る人、夜義就の門に書して曰く、「右衞門佐、二物を拜戴す。御所の盃、山名の足」と。義就謂へらく、勝元・政長の黨の爲す所なりと。明年、元を應仁と改む。故事に、歲首每に、管領以下、更〻將軍を饗す。是の時、政長管領たり。正月二日、政長、具を治めて、義政を請ず。義政往かず。政長驚いて曰く、「吾れ勤仕異等、饒使、豪貴を憚らざるも、何遽ぞ、疎斥せらるゝに至らん。蓋し宗全・義就の讒言の致す所なり」と。義就、之を聞き、大に喜んで曰く、「彼れ已に將軍の疎斥する所と爲る。當に往いて之を驅逐すべし」と。政長の家宰、神保長誠、政長に請うて守備を修む。

【口語譯】そこで、持豐は又義就を赦して貰ひ度いと願ひ出た。義政は之を許した。持豐は喜んで使をやつて義就に報告させた。その時義就は熊野にゐたがその報告を得て、早速出發し、九月に河內に入つた。政長の部將が若江城を守つて居た。それが恐れをなして城を棄てゝ走つた。義就は全部河內を平定した。十一月、京都に入つて將軍にお目通りし、直ちに持豐の家に行つて、お禮を敘べ、歡びを盡して出て來た。或る人、夜、義就の家の門に落書して曰ふのに、「右衞門佐（義就）は二つの物を拜領した。それは將軍家の御盃と山名の足とだ」と。義就は思ふのに、これは必定勝元・政長の同類の所爲だらう。翌年、年號を應仁と改めた。昔からの常例として年始には每年、管領以下の重職の者はかはる〴〵將軍を饗應することになつてゐた。この時政長が管領であつた。正月二日、政長は御馳走の支度をして義政を招請した。所が義政は往かなかつた。政長は驚いて曰ふには、「自分は

他の者に比べれば飛び抜けてよく勤め働いてゐるが、褒美を貰はぬまでも、疎んじ斥けられる程のことをした覺えはない。これは必定、宗全・義就の讒言からであらう」と。義就は之を聞いて大に喜んで曰ふには、「彼れ政長はすでに將軍に疎んじ斥けられてゐる。これはこつちから往つて逐つ拂ふべきだ」と。政長の家令の神保長誠は政長に賴んで守備を嚴重にすることゝした。

語釋 部將（遊佐長直）○山名之足（山名の足もとに立つたからいふ。）

十五日、持豐饗義政畢、聚義就・義廉等諸將、圍幕府、而請曰「義就既被赦。當移住本第。而勝元右政長、以梗公命。請詰問之」義政乃遣使問勝元。勝元曰「臣將自往答矣」使者還報。幕府戒嚴。兵聚細川氏者可一萬。義就等亦聚兵於幕府。義政出令曰「政長・義就獨身決戰、諸將毋得援」持豐怒曰「三日請之、一朝失之、如何」義就曰「獨身決戰、吾所願已。且日僕當以手兵赴攻。諸君傍觀勝敗何如」於是、諸將皆奉令。勝元弗肯。義政令細川教春往諭勝元曰「不奉令者叛也」勝元歎息久之、乃答曰「賴春死國難、賴之輔幼主、以至於臣六七世。未嘗倍叛也。今寧背友誼、不忍被叛名。當謹奉令耳」

【訓讀】十五日、持豐、義政を饗し畢り、義就・義廉等の諸將を聚め、幕府を圍み、而して請うて曰く、義就既に赦さる。當に本第に移住すべし。而るに勝元、政長を右け、以て公命を梗ぐ。請ふ、之を詰問せん」と。義政乃ち使を遣はし勝元に問はしむ。勝元曰く、「臣、將に自ら往き答へんとす」と。使者還り報ず。幕府、戒嚴す。兵、細川氏に聚る者一萬可りなり。義就等も亦兵を幕府に聚む。義政、令を出して曰く、「政長・義就獨身決戰し、諸將援くるを得る毋れ」と。持豐怒つて曰く、「三日、之を請うて、一朝之を失ふは、如何と」。義就曰く、「獨身決戰するは、吾が願ふ所のみ。旦日、僕、當に手兵を以て赴き攻むべし。諸君、勝敗如何を傍觀せよ」と。是に於て諸將、皆令を奉ず。勝元肯んぜず。義政、細川教春をして、往いて勝元を諭さしめて曰く、「令を奉ぜざるものは叛なり」と。勝元歎息すること之を久しうして、乃ち答へて曰く、「賴春國難に死し、賴之幼主を輔け、以て臣に至るまで六七世。未だ嘗て倍叛せざるなり。今寧ろ友誼に背くも、叛名を被るに忍びず。當に謹んで令を奉ずべきのみ」と。

【通釋】十五日、持豐は義政に御馳走して終つてから、義就・義廉等の諸將を聚め、幕府を圍んで強請していふには「義就はすでに赦されました。當然本邸に移り住むべきで御座います。然るに勝元は政長を助けて將軍の命令を邪魔立て致します。願はくば其の罪を責め問はせて頂きたいと思ひます」と。そこで義政は使を遣つて勝元に問はしめた。勝元が曰ふのに、「私、自身出頭して御返事を申し上げます」と。使者は還つてそのことを報告した。幕府では嚴しく用心した。この時細川氏に聚まつた兵は一萬ばかりもあつた。義就等も亦兵を幕府に聚めた。義政は命令を出して曰ふのに、「政長義就の二人は單獨に勝負をして、諸將は之を援けてはならぬ」と。持豐は怒つていふのに「三日もかゝつて願つたことが一朝にして叶はぬことになるとは、あまりの事である」と。義就は曰

ふのに「ひとりで勝負を付けるは願ふところであります。あす私は手勢をつれて攻め立てます。諸君は勝負を側で見て下さい」と。そこで諸將は皆義政の命令を守ることにした。(援助せぬこととした) 勝元は之には不承知であつた。義政は細川教春をして勝元のところに往つて諭さしめて曰ふには「將軍の命を奉じないものは謀叛人となる」と。勝元は久しい間歎息してゐたが、曰ふには「私の先祖の頼春は國家の難に討死し、頼之は幼主義滿公を輔け、つゞいて私に至るまで六七代經つた。未だ一度として謀叛したことなどはない。今むしろ朋友の誼に背いても、謀叛の名を受けるには堪へられぬ。謹んで命を遵奉致しませう」と。

【語釋】失レ之(請うた目的を失つたこと。)

長誠聞レ之、謂二政長一曰「右京大夫已不レ援レ我。我孤立矣。義就自二幕府一來。諸將豈無下潛援レ之者上。本第平夷、不レ可二拒守一。爲レ今之計者、宜下據二上御靈林一、南負二相國寺一、西依中大夫第上戰。卽不レ利、大夫豈坐視乎。且大夫家老安富元綱與レ臣親善。卽使二大夫不一レ援、而元綱必來也」。政長然レ之、乃燒二其第一、以二六千人一出。從士以爲レ奔也。行ゝ道亡、比レ至二御靈林一、裁二千人而已。義就曰「兵利レ在レ乘レ勝。是不レ可レ失矣」。十八日、侵レ晨赴レ之。時方雪、兵凍不二輒前一。政長兵亂射、斃二數百人一。而義廉等潛來助二義就一。政長苦戰。細川氏闔レ門、不二敢出援一。長誠使三

人言元綱曰、自旦戰至暮、我兵疲矣、不敢望援兵、特請惠一尊酒、將與主公訣飲自裁、元綱不答、政長夜縱火祠宇、穿林而逃、義就入、視宇下有三屍、曰、尾張守死矣、乃凱旋、持豐大喜、散遣其兵、世嗤勝元不援政長也、謠曰、細川宜改洲股川、害尾張者、是此川、勝元愧之、閉門不出、叔父持賢數激怒之、

長誠、之を聞き、政長に謂つて曰く、「右京大夫、已に我を援けず。我れ孤立す。義就、幕府より來る。諸將豈に潛に之を援くる者なからんや。本第は平夷、拒ぎ守るべからず。今の計を爲すに、宜しく上御靈林に據り、南、相國寺を負ひ、西、大夫の第に依るべし。戰即し利あらずんば、大夫豈に坐視せんや。且つ大夫の家老安富元綱、臣と親善なり。即し大夫をして援けざらしむるも、而も元綱は必ず來らん」と。政長、之を然りとし、乃ち其の第を燒き、六千人を以て出づ。從士以爲へらく、棄るなりと。行くゆく道より亡げ、御靈林に至る比、拔に二千人のみ。義就曰く、「兵の利は勝に乘ずるに在り。是れ失ふ可からず」と。十八日、晨を侵して之に赴く。時、方に雪ふり、兵凍えて輙く前まず。政長の兵、亂射し、數百人を斃す。而して義廉等、潛に來り義就を助く。政長、苦戰す。細川氏門を閉し、敢て出で援けず。長誠、人をして元綱に言はしめて曰く、「旦より戰ひ暮に至る。我が兵疲る。敢て援兵を望まず。特に請ふ、一尊酒を惠め。將に主公と訣飲して自裁せんとす」と。元綱答へず。政長、夜、火を祠宇に縱ち、林を穿つて逃る。義就入り、宇下に三屍あるを視て曰く、「尾張守死す」と。乃ち凱旋す。持豐大に喜び、其の兵を散遣す。世、勝元の政長を援けざるを嗤ふ。謠つて曰く、「細川は宜しく洲股川と改むべし。

尾張を害する者は是れ此川なり」と。勝元、之を愧ぢ、門を閉ぢて出でず。叔父持賢、數〻之を激怒す。

【通釋】長誠は之を聞いて、政長に謂つて曰ふには、「右京大夫(勝元)はすでに我々を援けぬと決まりました。味方は一本立であります。それに義就は幕府から押し寄せて來ます。諸將の内でこつそり彼を助けるものが無いとも限りません。この屋敷は平地で、拒ぎ守るにはよろしくありません。今の場合最もよい謀は、上御靈の林に立て籠り、南に相國寺を負ひ、西は右京大夫の屋敷にたよるやうに陣取つたが宜しいのです。戰がもし負けとなれば右京大夫も默つて見て居られますまい。それに大夫の家老の安富元綱は私と仲が善いのです。もし大夫が援けられぬとしても、元綱は屹度助けに來ますでせう」と。政長もさうだと思ひ、そこで、その屋敷を燒き六千人をつれて出かけた。從士の者共は逃げるのだなと思つた。それで途中で追々逃亡し、御靈林に着いた頃にはわずかに二千人だけであつた。義就がいふのに「兵の利は勝つた勢に附け込むに在るのである。この機を失つてはならぬ」と。十八日曉方かけて出發した。其の時雪が降り、兵卒は凍えて容易に進むことが出來ない。政長の兵は滅茶うちに射ちかけて數百人を斃した。而して、義廉等は、こつそり來て義就を助けた。政長は隨分苦戰した。細川氏は門を閉め切つて援けに來ようともしない。長誠は人をして元綱に言はしめて曰ふには「朝から戰つて晩になつた。わが兵士は疲れて終つた。援兵を出して呉れと無理には申さぬ。たゞ一樽の酒を惠んで貰ひ度い。これから主人と最後の酒宴を催し、自殺しようと思ふのだ」と。元綱は返答をしなかつた。政長は夜、御社に火をかけ、林を通りぬけて逃げた。義就は攻め込み、社の軒下に三個の死體があるのを見て曰く、「尾張守(政長)はもう死んだのである」と。そこで凱旋した。持豐は大層喜んでその兵士を解散した。世間では勝元が政長を援けなかつたのをあざ笑つた。次の意味の歌を作つていふのに「細川は今後洲股川と改めたらよいだらう。尾張(政長)を

害するのは此の川である」と。勝元は之を愧ぢ、門をしめて出なかつた。叔父の持賢は度々その腑甲斐なさを責めて勝元を激怒させた。

【語釋】上御靈林（京城の東北偶。相國寺の背後にある。）〇祠宇（御靈の社殿。）〇洲股川（美濃にある。出水して常に尾張を害した。細川が尾張守を助けないで害したことに喩したのである。）

時勝元第在東、持豐第在西。以夾室町府。義視往來二人間、和解之。勝元陽服從之。持豐意益驕、不復設備。勝元窺之、潛發兵諸國。勝元自發其所管攝津・丹後・土佐・讚岐之兵、族政之以阿波・參河、師春以備中、元春以和泉、政春以淡路、斯波義敏以越中、畠山政長以紀伊・河內、京極持淸以隱岐・出雲・飛驒・近江、赤松政則以播磨・備前・美作、武田國信以安藝・若狹、並屬勝元。兵凡十六萬餘人。議曰、「幕府門前有一色義直第、與西陣相接、而爲之守。我今遣一將、陣實相院、以隔絕之、則義直必怖而走。我可以取幕府也。

【通釋】時に勝元の第は東に在り。持豐の第は西に在り。以て室町府を夾む。義視、二人の間を往來し、之を和解す。勝元、陽り之に服從す。持豐、意益驕り、復備を設けず。勝元、之を窺ひ、潛に兵を諸國に發す。勝元、自ら其の管する所の攝津・丹後・土佐・讚岐の兵を發す。族政之は、阿波・參河を以て、師春は備中を以て、

元春は、和泉を以て、政春は淡路を以て、斯波義敏は、越中を以て、畠山政長は紀伊・河内を以て、京極持淸は、隱岐・出雲・飛騨・近江を以て、赤松政則は、播磨・備前・美作を以て、武田國信は・安藝・若狭を以て、並に勝元に屬す。兵凡そ十六萬餘人なり。議して曰く、「幕府の門前に一色義直の第あり。西陣と相接して之が爲めに守る。我れ今一將を遣はし、實相院に陣し、以て之を隔絶すれば、則ち義直必ず怖れて走らん。我れ以て幕府を取るべきなり」と。

【通釋】當時勝元の屋敷は東の方に在つた。持豐の屋敷は西の方に在つた。室町の幕府を夾んでゐた。義視は細川・山名二人の間を往來し、之を和解させた。勝元は伴つて之に從つた。持豐はいゝ氣になつて心益々驕り、格別備を嚴重に設けなかつた。勝元は之を窺ひ、こつそりと兵を諸國に起した。勝元は自身その支配下の攝津・丹後・土佐・讃岐の兵を繰り出した。一族の政之は阿波・參河を以て、師春は備中を以て、元春は和泉を以て、政春は淡路を以て、斯波義敏は越中を以て、畠山政長は紀伊・河内を以て、京極持淸は隱岐・出雲・飛騨・近江を以て、赤松政則は播磨・備前・美作を以て、武田國信は安藝・若狭を以て、それ〲皆勝元に屬いた。その兵は皆で十六萬餘人であつた。評議して曰ふには、「幕府の門前に一色義直の屋敷がある。西陣（山名の屋敷）とつゞいてゐて、山名の爲めに守つて居る。われは一人の大將を遣はして實相院に陣取り、その連絡を斷ち切つて終へば屹度義直は怖れて逃げるだらう。さうなれば將軍を捕へてこちらへつれて來ることが出來る」と。

【語釋】隔絶（義直の邸と西陣との通路を斷ち切つたのである）〇取幕府（將軍家を味方に取込むこと。）

五月二十四日、遣二武田國信等一陣焉。義直果走。勝元乃入二幕府一、請二將軍牙旗一、樹二之四

足門、又迎義視置府中、令將士屯諸街巷、以討持豐。持豐聞之曰「悔爲豎子所先。」於是、亦發兵。持豐自發其所管但馬・播磨・因幡之兵。族教之、以伯耆・備前、教清、以美作・石見、斯波義廉、以越前・尾張・遠江、畠山義就、以大和・河内・紀伊、畠山義統、以能登、六角高頼、以近江、一色義直、以丹波・伊勢・土佐、土岐成頼、以美濃、竝屬持豐。兵凡十一萬餘人。山名是豐、與勝元約爲父子。以故獨屬東陣。西陣遣垣屋攻實相院、遣太田垣守東面前壘。京師人民、負擔奔竄。

【譯文】五月二十四日、武田國信等を遣はし陣せしむ。義直果して走る。勝元乃ち幕府に入り、將軍の牙旗を請うて、之を四足門に樹て、又義視を迎へて、府中に置き、將士をして諸街巷に屯せしめ、以て持豐を討つ。持豐之を聞いて曰く「豎子の先んずる所と爲るを悔ゆ」と。是に於て、亦兵を發す。持豐自ら其の管する所の但馬・播磨・因幡の兵を發す。族教之は、伯耆・備前を以て、教清は、美作・石見を以て、斯波義廉は、越前・尾張・遠江を以て、畠山義就は、大和・河内・紀伊を以て、畠山義統は能登を以て、六角高頼は、近江を以て、一色義直は、丹波・伊勢・土佐を以て、土岐成頼は美濃を以て、並に持豐に屬す。兵凡そ十一萬餘人なり。山名是豐は勝元と約して父子と爲る故を以て獨り東陣に屬す。西陣・垣屋を遣はし、實相院を攻め、太田垣を遣はし東面の前壘を守らしむ。京師の人民、負擔奔竄す。

【通釋】五月二十四日、武田國信等を遣はして實相院に陣取らせた。義直は案の定逃げ出した。そこで勝元は幕府に入り將軍の大旗を請ひ受けて、之を四足門に立て、又義視を迎へて幕府の内に居て貰ひ、將士をして各町々に屯營せしめて、持豐を討つた。持豐は之を聞いて曰ふのに「彼奴に先手を打たれたのが殘念だ」と。そこで持豐も亦兵を繰り出した。持豐は自分の支配下の但馬・播磨・因幡の兵を繰り出した。一族の教之は伯耆・備前を以て、教清は美作・石見を以て、斯波義廉は越前・尾張・遠江を以て、畠山義就は大和・河内・紀伊を以て、畠山義統は能登を以て、六角高頼は近江を以て、一色義直は丹波・伊勢・土佐を以て、土岐成頼は美濃を以て、各々皆持豐に屬した。その兵は皆で十一萬人であつた。持豐の子の山名是豐は、勝元と親子の約束をしてゐた。そんな譯で彼だけは東陣（細川）に屬した。西陣は垣屋某を遣はして實相院を攻めさせ、太田垣某を遣はして東面の壘を守らせた。京都の人民は荷物を負うて皆逃げ出した。

【語釋】四足門（將軍付の正門。義滿が作つた。）〇義統（一に義純に作る。）

後二日、細川氏兵攻前壘、發火箭、燒而走之。持豐遣義廉・教之、攻師春大宮第。師春乞援於勝元。勝元乃遣持清、將萬人過戻橋、未陣。義廉將鹿草・朝倉等、呼譟薄之。持清兵卻、遂大奔、爭橋而墮者數千人。政則曰「備中守孤軍嬰壁。不援之者、非士也」。勒三百騎、自猪熊巷赴援、擊走義廉兵、拔師春、入政之村雲第。山名氏兵躡之、縱火第

外ニ戰フ、煙焔ノ中ニ如キ此クノ者兩晝夜、伏屍塡ニ塞ス街衢ニ。

【讀方】後二日、細川氏の兵、前壘を攻め、火箭を發ち、燒いて之を走らす。持豐・義廉・敎之を遣はして、師春の大宮の第を攻めしむ。師春、援を勝元に乞ふ。勝元乃ち持清を遣はし、萬人に將として戾橋を過ぎ、未だ陣せず。義廉の將鹿草・朝倉等、呼譟して之に薄る　持清の兵御き、遂に大に奔り、橋を爭つて墮つる者數千人なり。政則曰く「備中守、孤軍、壁に嬰る。之を援けざるものは　士に非ざるなり」と。三百騎を勒し、豬熊谷より赴き援け、擊つて義廉の兵を走らせ、師春を拔き、政之の村雲の第に入る。山名氏の兵、之を躡し、火を第外に縱ち、煙焔の中に戰ふ。此くの如き者兩晝夜、伏屍、街衢に塡塞す。

【通釋】後二日目に細川氏の兵は前方の壘を攻め、火矢を發つて燒き、敵兵を走らせた。持豐は義廉・敎之を遣はして、細川師春の大宮の屋敷を攻めさせた。師春は援を勝元に頼んだ。そこで勝元は持清を派遣し、萬人に將として戾橋を通つて行かせたが、持清はまだ陣取る所まで行かなかつた。その時、義廉の大將鹿草・朝倉などが叫び立つて持清に迫つた。持清の兵は退き、とう〳〵潰えて奔り、戾橋を早く渡らうと思つて、水の中に落ちたものが數千人もあつた。政則が曰ふのに「備中守（師春）は孤立の軍をつれて城に立てこもつてゐる。之を援けないものは武士ではない」と。三百騎を纏めて豬熊小路から援けに行き、擊つて義廉の兵を走らせ、師春を助け出し、政之の村雲の屋敷に入り込んだ。山名氏の兵はその後をつけて追ひかけ、火を屋敷の外につけ、烟や焔の中で戰つた。こんなことを二晝夜もやつたので、死骸が町中一ぱいになつた。

【語釋】戾橋（一條にある。）〇豬熊・村雲（町の名。）

六月、東西陣交解而退。東陣據相國寺、西陣據武衞氏、相持未戰。西陣兵漸加。大内政弘素黨西陣。與河野氏合兵三萬來援。東陣遣政則拒之於攝津、遣政國・國信攻武衞壘。欲及政弘未至拔之。迭攻二十日、未能拔。而政弘已至、擊政則。政則走、至五條。不得入。乃東走岩倉山。西陣望見其炬火、遣兵三道要擊、皆敗卻。政則經神樂岡、自御靈口入東陣。東陣流言、將軍近臣有通欵西陣者。常泄密謀。所以取敗。

訓讀 六月、東西の陣、交〻解いて退く。東陣は相國寺に據り、西陣は武衞氏に據り、相持して未だ戰はず。西陣の兵漸く加る。大内政弘、素より西陣に黨す。河野氏と兵三萬を合せて來り援く。東陣・政則を遣はして之を攝津に拒がしめ、政國・國信を遣はして武衞の壘を攻めしめ、政弘、未だ至らざるに及んで之を拔かんと欲す。迭に攻むること二十日、未だ拔く能はず。而して政弘已に至り、政則を擊つ。政則走り、五條に至り、入るを得ず。乃ち東岩倉山に走る。西陣其の炬火を望見し、兵を遣はして三道より要擊し、皆敗れ卻く。政則、神樂岡を經て、御靈口より東陣に入る。東陣、流言す。「將軍の近臣に欵を西陣に通ずる者あり。常に密謀を泄す。敗を取る所以なり」と。

通釋 六月、東西兩陣は互に備を解いて退卻した。東陣は相國寺に據り、西陣は斯波氏の屋敷に立て籠り、持ち合つて戰はないでゐた。その内に西陣の方はだん〳〵兵が增して來た。大内政弘は平素から西陣に味方してゐ

た。河野氏と兵三萬を合せて援けに來た。東陣は政則を遣はして之を攝津に拒がせ、政國・國信を遣はして、斯波の輩を攻めさせ、政弘の來ない間に之を攻め落さうと思つた。互ひに攻め合ふこと二十日にもなつたが、まだ陥れることは出來なかつた。一方政弘は、早や到着して政則を擊つた。政則は走つて五條まで來たが京都に入ることが出來ない。そこで東方岩倉山に逃げ込んだ。山名氏はその松明を望み見て兵を遣はして、三方の道から要擊したが、皆敗れて退卻した。政則は神樂岡を通過して御靈口から東陣に入つた。この時、東陣であらぬ噂をたてたが、それは「將軍の近臣の中に西陣に内通するものがゐる、常に内密の謀をもらしてゐる。だから敗けるのである」と。

語釋　神樂岡（京城の東）

八月、勝元與家臣議、以甲六千扼守諸門、使教春請逐番衆十二人。義政聽之。近臣皆怒曰「上意所注在西。西勝則笑、東勝則顰、何獨吾儕。吾儕選於衆中、特受放逐之命、亦足以死矣」。爭結束將鬪。當是時、勝元迎上皇・天皇于幕府。政長特敍三位、護輿至門。門中喧騷、輿止門外者自午至亥。藤原公春・吉良義信、以義政旨諭近臣。近臣乃出奔西陣。而輿乃入。蓋勝元計義政如不右己、則挾天子以戰也。

通釋　八月、勝元家臣と議し、甲六千を以て諸門を扼守し、教春をして、請うて番衆十二人を逐はしむ。義政

之を聽す。近臣皆怒つて曰く、「上意の注する所は西に在り。西勝てば則ち笑ひ、東勝てば則ち顰むるは、何ぞ獨り吾が儕のみならんや。吾が儕、衆中より選ばれ、特に放逐の命を受く。亦以て死するに足る」と。爭つて結束し將に鬪はんとす。是の時に當り、勝元、上皇・天皇を幕府に迎ふ。政長、特に三位に敍せられ、輿を護つて門に至る。門中、喧騷し、輿、門外に止ること、午より亥に至る。藤原公春・吉良義信、義政の旨を以て近臣を諭す。近臣乃ち西陣に出奔し、而して輿乃ち入る。蓋し勝元、義政如し己を右けざれば、則ち天子を挾み以て戰はんと計るなり。

通釋 八月、勝元は家來と相談して鎧武者六千人を率ゐて幕府の諸門を抑へ守り、教春をして義政に番衆十二人を逐ひ出したいと賴み込んだ。義政は之を許した。義政の近臣は皆怒つて曰ふのに、「將軍の心の向つてゐるところは西方である。西が勝てば喜んで笑ひ、東が勝てば心配して眉をひそめるのは獨り吾々ばかりではない。(將軍もさうなのだ)吾々だけが大勢の中から選ばれて特に放逐さるゝ命令を受けた。こんな恥を掻いたからは生命を捨てゝかゝるに充分だ」と。爭つて身支度をして、將に打つて出ようとした。この時に當り、勝元は上皇、天皇を幕府にお迎へした。政長は特旨を以て三位に敍せられ、御輿を護衞して門まで來た。門內が右の始末で、大騷動をやつてゐたので、御輿は門外に止められ、午の刻から亥の刻まで約十時間もそのまゝにして置かれた。藤原公春・吉良義信は義政の指圖で、近臣を諭した。そこで近臣は西陣に逃げ込み、一方御輿はやつと門內に入つた。思ふに勝元は義政がもしも自分を助けない場合には、天子を挾んで戰はうといふ計畫であつたから、斯く駕をお迎へしたのである。

語釋 番衆(勤番の近習。)○上皇(後花園上皇。)○天皇(後土御門天皇。)○自午至亥(正午より夜十時迄。)

持豐亦計擁下京之敵、以出敵東面、取三寶院・相國寺、以塞御靈口也。九月、令義就・政弘・成頼・高頼・義直赴攻。五將臨發、誓持豐曰、此行不取相國寺者、無復生還。乃各將萬人、攻三寶院。武田國信弟基綱、與其父信賢、以二千人守之。力拒終日、兵皆散亡。基綱獨開院門偏扉、以身當敵。敵不敢逼。畠山氏驍卒野老源三有膂力。挺進搏之。基綱叱曰、試受吾刀。乃擊其冑、刀折。基綱大號奔逸。莫敢遏者。源三頭碎死。西陣兵既取三寶院、進攻淨華院、逐守將京極持清、焚近衛・鷹司以下三十七第、遂向相國寺。勝元令安富元綱等三千騎守相國寺、別出兵於一條。而寺僧陰通款於西陣、舉火爲應。扞一條者、駭顧引還。西陣五將追至寺門。元綱兄弟以手兵拒總門、與政弘・成頼確鬪七合、殺傷大當。自晨至昏。西陣兵終不能入。已而東門失守、西陣兵坌入。元綱兄弟咄嗟馳之、箭洞胸死。政弘・成頼既取相國寺、收所獲首級、載之以車八輛、以送致西陣、因屯相國寺址。

持豐も亦、下京の敵を擁ひ、以て敵の東面に出で、三寶院・相國寺を取りて、以て御靈口を塞がんと計

る。九月、義就・政弘・成頼・高頼・義直をして赴き攻めしむ。五將、發するに臨み、持豐に誓つて曰く、「此の行相國寺を取らずんば、復生き還ること無からん」と。乃ち各萬人に將として、三寶院を攻む。武田國信の弟基綱、其の父信賢と二千人を以て之を守る。力め拒ぐこと終日、兵皆散亡す。基綱獨り院門の偏扉を開き、身を以て敵に當る。敵敢て逼らず。畠山氏の驍卒、野老源三、膂力あり。挺進して之を搏す。基綱叱して曰く、「試に吾が刀を受けよ」と。乃ち其の冑を擊つ。刀折る。基綱大に號んで奔逸す。敢て遏むる者なし。源三、頭碎けて死す。西陣の兵既に三寶院を取り、進んで淨華院を攻め、守將京極持清を逐ひ、近衞・鷹司以下の三十七第を焚き、遂に相國寺に向ふ。勝元、安富元綱等三千騎をして、相國寺を守らしめ、別に兵を一條に出す。而して寺僧、陰に欵を西陣に通じ、火を擧げて應を爲す。一條に扞ぐ者、駭き顧みて引き還る。西陣の五將、追うて寺門に至る。元綱兄弟、手兵を以て總門を拒ぎ、政弘・成頼と確鬪すること七合、殺傷大に當り、晨より昏に至る。西陣の兵、終に入る能はず。已にして東門、守を失ひ、西陣の兵、坌入す。元綱兄弟、咄嗟、之に馳せ、箭、腕を洞いて死す。政弘・成頼、既に相國寺を取り、獲る所の首級を收め、之を載するに、車八輛を以てし、以て西陣に送致し、因つて相國寺の趾に屯す。

【通譯】持豐も亦下京の敵を追ひ拂ひ、敵の東面に出で、三寶院・相國寺を取り、そして御靈口を塞いで終はう、(細川方を閉ぢ込める策略)と計つた。九月、義就・政弘・成頼・高頼・義直をして、赴き攻めしめた。この五將は出發するに當つて持豐に誓つて曰ふのに「こん度の戰で相國寺が取らなければ、もう二度と生きて還りませんから」と。そこで各一萬人に將として三寶院を攻めた。武田國信の弟基綱は、其の父の信賢と二千人を率ゐて、三寶院を守つて居た。一日中力を盡して防いだが、その兵士は皆散り〴〵に逃げ去つた。基綱はひとり三寶

院の門の片扉を開けて、自ら身を以て敵に當つた。敵は懼れて近よらうとするものもなかつた。畠山氏の勇敢なる卒の野老源三といふ男は大膂力があつた。ひとり挺んで進み、基綱に搏つてかゝつた。基綱は叱つて曰ふには「試に余が刀を受けて見ろ」と。そこで其の冑を擊つた。刀は二つに折れた。基綱は大聲を揚げて走り遁れた。誰こそ之を邪魔立てして止めるものとてなかつた。源三は冑を打たれ頭が碎けて死んだ。西陣の兵は、すでに三寶院を取り、進んで淨華院を攻め、守將京極持清を逐つ拂ひ、近衞・鷹司以下の三十七個所の屋敷を燒き更に相國寺に向つた。勝元は安富元綱等三千騎をして、相國寺を守らしめ、別に兵を一條にくり出した。所が寺僧に内々西陣に裏切り通ずる者があつて、火を擧げて西陣に内應をした。一條に防いでゐたものは、火が上つたので驚き顧みて引き還した。西陣の五將（義就・政弘・成頼・高頼・義直）は追ひかけて寺門まで來た。元綱兄弟は手勢をつれて總門を拒ぎ、政弘・成頼と根かぎり戰ふこと七度、殺傷は互角で朝から晩までかゝつた。西陣の兵はとう〳〵門内に入ることは出來なかつた。その内に東門は固めを失ひ、西陣の兵は集つて入り込んで來た。元綱兄弟は揚聲して之に馳せ向ひ、矢が胸板を貫いて死んで終つた。政弘・成頼すでに相國寺を取り、討ち取つた首を收め、八幡の車に載せて西陣に送り込み、因つて相國寺に屯した。

語釋　坌入（大勢で一時に入ること。）

政之來謁勝元曰「敵屯相國寺。我猶釜中魚也。急遣一將擊走之」勝元曰「吾亦思此。而諸將士各有所守、與敵相拒。不可拔足。誰赴援者」秋庭某進曰「畠山公其人也」勝

元曰「然」召政長、語之故、曰「事急矣。煩公一行。果勝、則當今忠勳、誰出公右者」政長對曰「僕雖無似、辱受此命。不敢不往。顧御靈林之役、多亡士卒、在者僅二千而已。若之何」勝元有慚色。政之乃令其部將東勝某援政長。政長於是出四足門。觀者相語曰「以此寡兵、恐不能克」政長據鞍而言曰「諸君勿憂。政長往焉。雖有百萬敵、保能破之。即得克乎、今日之事、僕專任其功。諸君幸證之」

訓讀 政之來り勝元に謂つて曰く、「敵は相國寺に屯す。我は猶ほ釜中の魚の如きなり。急に一將を遣はし撃つて之を走らせん」と。勝元曰く、「吾も亦此を思ふ。而れども諸將士、各〻守る所あつて、敵と相拒ぐ。足を拔くべからず。誰か赴き援くるものぞ」と。秋庭某進んで曰く、「畠山公其の人なり」と。勝元曰く、「然り」と。政長を召して、之に故を語げて曰く、「事急なり。公の一行を煩さん。果して勝たば、則ち當今の忠勳、誰か公の右に出づる者ぞ」と。政長對へて曰く、「僕、無似と雖も、辱なく、此の命を受く。敢て往かずんばあらず。顧ふに御靈林の役、多く士卒を亡ひ、在る者僅に二千のみ。之を若何せん」と。勝元、慚色あり。政之、乃ち其の部將東勝某をして政長を援けしむ。政長、是に於て、四足門を出づ。觀る者相語つて曰く、「此の寡兵を以ては恐らくは克つ能はざらん」と。政長、鞍に據つて言つて曰く、「諸君憂ふる勿れ。政長往く。百萬の敵ありと雖も、能く之を破るを保す。即し克つを得んか、今日の事、僕專ら其の功に任ぜん。諸君、幸に之を證せよ」と。

【通釋】政之はやつて來て勝元に向つて曰ふには「敵は相國寺に屯してゐます。私共は釜の中の魚のやうなものです。急に一將を遣はし擊つて之を退けませう」と。勝元はいふのに「乃公もその事を考へてゐた。併し諸將士はめい／＼守る所があつて敵を相拒いでゐる。他へ行く譯にも行かない。誰か行つて援けるものはないか」と秋庭某なる者進んで曰ふのに「畠山公こそ恰好であります」と。勝元もさうだと曰つた。政長を呼んでこれに譯を話して曰ふには「事は迫まつてゐる。御苦勞だが貴公の一と戰を願ひ度い。もし豫定通りに勝てば今度の忠勳は貴公が一番で、外に誰が貴公の上に出ることが出來ようぞ」と。政長對へて曰ふには、「私は不束な者では御座いますが、辱なくも、此の命令を受けました。行かない譯には參りません。併し考へて見ると、さきに御靈の林の戰で多くの士卒を失ひ、今殘つてゐる者は僅かに二千に過ぎません。どうしたら宜いでせう」と。勝元は愧ぢて顏色を赤くした。そこで政之は部下の大將東勝某をして政長を援けさせた。是に於て政長は四足門を出た。觀る者互に語り合つて曰ふには、「こんな少い兵では恐らく克つことは出來まい」と。政長は鞍に腰を卸して言つていふには「諸君心配するな。この政長が往くのである。假令百萬の敵でも請け合つて破つて見せる。もし克つことが出來たら、今日の事は僕ひとりで其の功を丸取りする。（他人に功を奪はれるといけないから）諸君その時の證人になつて呉れよ」と。

【語釋】投足（自分の持ち場を棄てゝ、他の處へ移ること。）○秋庭某（元高）○御靈林之役（義就との戰。）○慚色（助けなかつたのを慚づる顏色。）

乃進望敵陣、指問其候騎曰「彼山門前者爲誰」曰「成頼」「山門後者誰」曰「義直」「其南者誰」曰「衞門佐氏」神保長誠說政長曰「敵兵衆盛如彼。君厚集其兵、合力衝突之、彼必

縱兵圍我。我可以破其一面也。政長從之、乃蒙楯而前、比薄敵、乃捨楯、直衝門前陣。陣大潰、卻入門後。門後兵沓蹙、不能揮槍。義就謂其將甲斐莊某曰、彼其尾張守也。我前軍槍鋒不整。必敗。亟勒隊。吾將代進。言未畢、門後兵大敗奔、壓義就軍。軍不得戰而退。東陣復取相國寺。政長名震兩陣間。於是、兩陣皆戰疲、交綏、以相國寺爲界高壘浚塹、爲持久計。

訓讀 乃ち進み敵陣を望み、指して其の候騎に問うて曰く、「彼の山門前の者は誰と爲す」と。曰く、「成頼」と「山門後の者は誰ぞ。」曰く、「義直」と「其の南の者は誰ぞ。」曰く、「衞門佐氏」と。神保長誠、政長に説いて曰く、「敵兵の衆盛なること彼の如し。君厚く其の兵を集め、力を合せて之を衝突せば、彼れ必ず兵を縱つて我を圍まん。我れ以て其の一面を破るべきなり」と。政長、之に從ひ、乃ち楯を蒙つて前み、敵に薄る比、乃ち楯を捨て、直に門前の陣を衝く。陣、大に潰え、卻いて門後に入る。門後の兵、沓蹙し槍を揮ふ能はず。義就其の將甲斐莊某に謂つて曰く、「彼は其れ尾張守ならん。我が前軍、槍鋒整はず。必ず敗れん。亟に隊を勒せよ。吾れ將に代り進まんとす」と。言未だ畢らざるに、門後の兵、大に敗れ奔り、義就の軍を壓す。軍、戰ふことを得ずして退く。東陣、復相國寺を取る。政長の名、兩陣の間に震ふ。是に於て、兩陣皆戰ひ疲れ、交綏し、相國寺を以て界となし、壘を高くし、塹を浚くして、持久の計を爲す。

【通釋】そこで政長は進んで敵陣を望み、指して部下の斥候の騎兵に問うて曰ふには「あの山門の前に居る男は誰だらうか」と。答へて曰ふに、「成頼です」と。「山門の後に居る者は誰だ」「義直です」「その南にゐる者は誰だ」「衛門佐殿(義就)です」と答へた。神保長誠が政長に説いて曰ふには「敵は多勢で、その盛なことは御覧の通りです。君は兵を一と所にかためて厚くし、力を合はせて衝きかゝつて行かれゝば、彼は必ず兵を放つて我を圍むでせう。さうなれば敵の一面を破ることが出來ます」と。政長は之に從ひ、そこで楯をかぶつて進み、敵に接近した頃、楯を棄てゝいきなり門前の陣を衝いた。陣は非常に崩れ、退卻して門の後の陣に入つた。門後の陣も重なり、込み合ひ、槍を揮ふことが出來ない。義就はその將甲斐莊某に向つていふには、「あれは尾張守であらう。我が前軍では槍の穗先が揃つて居らぬ。乾度負けるだらう。早く隊伍を整へよ。乃公は代つて進まうとしてゐるのだ」と。其の言葉が終らぬ内に門後の兵は大に敗れ走り、義就の陣に押して來た。義就の軍は戰ふことも出來ないで退卻した。東陣は再び相國寺を取り返した。政長の驍名は敵味方の間に響いた。そこで兩陣は皆戰爭に疲れ互に退卻し、相國寺を以て界となし、壘を高く築き、堀を深く掘り、持久戰の計畫をなした。

【語釋】甲斐莊某(正定)　○尾張守(政長)

當是時、伊勢貞親在鈴鹿關。聞京師亂、乃歸依勝元。勝元以其不善持豐、欲置爲己黨、爲請復其舊職、以伺察府中應敵者。義視素惡貞親。恐其離間兄弟、意自不安。竊謀逃奔、遂間行、至北畠教親營、與俱奔伊勢。二年四月、義政以書招還之。義視狐疑

不應。勝元・政長・政則等、連署請之。乃還。九月、入幕府。會有蜚語、勝元謀廢立。義政疑懼。勝元聞之、乃陰計走義視於西陣。十一月、令武田信賢擁義視冒雨上叡山。持豐聞之喜、遣兵迎之、奉于武衛氏。時義視爲正二位權大納言。十二月、詔削其官爵。大納言藤原敎忠等七人、留在禁内。遂奔西陣。亦削其籍。勝元復爲管領。政則爲侍所司。政則家老浦上某、爲所司代。自是兩陣、如將軍兄弟爭者。

〔訓讀〕是の時に當り、伊勢貞親鈴鹿の關に在り。京師の亂を聞き、乃ち歸つて勝元に依る。勝元、其の持豐に善からざるを以て、置いて己の黨と爲さんと欲し、爲めに其の舊職を復し、以て府中の敵に應ずる者を伺察せしめんと請ふ。義視、素より貞親を惡む。其の兄弟を離間せんことを恐れ、意自ら安んぜず。竊に逃奔を謀り、遂に間行して北畠敎親の營に至り、與に俱に伊勢に奔る。二年四月、義政書を以て之を招還す。義視、狐疑して應ぜず。勝元・政長・政則等、連署して之を請ふ。乃ち還る。九月、幕府に入る。會〻蜚語あり、勝元廢立を謀ると。義政、疑懼す。勝元、之を聞き、乃ち陰に義視を西陣に走らせんと計る。十一月、武田信賢をして、義視を擁し、雨を冒して叡山に上らしむ。持豐、之を聞き喜び、兵を遣はし之を迎へ、武衛氏に奉ず。時に義視、正二位權大納言たり。十二月、詔して其の官爵を削る。大納言藤原敎忠等七人、留つて禁内に在り。遂に西陣に奔る。亦其の籍を削らる。勝元、亦管領と爲る。政則、侍所司と爲る。政則の家老浦上某、所司代と爲る。是より兩

陣、將軍兄弟の爭ふものゝ如し。

【通釋】この當時、伊勢貞親は鈴鹿の間にゐた。京都が亂れてゐると聞いたので歸つて來て勝元にたよつた。勝元は貞親が持豐と仲の惡いのを知つてゐるから、留め置いて自分の味方にしようと思ひ、彼の爲めに願ひ出てその舊職を取り戻し、幕府の中で敵に內應するものに對して氣をつけさせたいと請うた。義視は元來貞親を惡んでゐる。彼が又兄弟の間（義政・義視）を邪魔しやせぬかと恐れ不安を感じた。そこでひそかに逃げ出さうと謀り、遂に忍び出て、北畠教親の陣屋に行き、其處から一緒に教親の領地の伊勢に出奔した。二年四月、義政は書面をやつて之をよび還した。義視は疑つて之に應じなかつた。勝元・政長・政則等が連判狀を出して歸つて貰ひ度いと請うた。だから還つて來た。九月、義視は幕府に入つた。折からあらぬ噂を言ひふらすものがあつて「勝元が義政を廢めて、義視を立てようと計つてゐる」と。義政は疑ひ懼れた。勝元は之を聞いて、ひそかに義視を西陣に遁れさせようと計つた。十一月、武田信賢をして義視を連れて雨を冒し比叡山に登らしめた。持豐は之を聞いて喜び兵を遣つて之を迎へ、斯波氏の屋敷に入れた。時に義視は正二位權大納言であつた。十二月、詔して義視の官爵を削り除いた。大納言藤原教忠等七人は留つて御所にゐた。とうとうこれも西陣に逃げ込んだ。そこで又それ等七人の名前を名簿から削り除いた。勝元は再び管領となつた。政則は侍所司となつた。政則の家老の浦上某は所司代となつた。これからは兩陣の對抗が恰も將軍兄弟で爭つてゐるやうな姿になつて終つた。（義政は東陣に義視は西陣にゐたから）

【字解】鈴鹿（伊勢）○詔削二其官爵一（東陣には天子と將軍とを奉じてゐるから西陣側へ行くものは叛者とする。だから官爵を削つたり出來る譯。）○侍所司（將軍家を衞り、又盜賊を捕縛する役目、司は長官。）○浦上某（則宗）○所司代（侍所司の代人。）

文明元年三月、勝元遣部下兵、夜縱火西陣、入至持豐營。持豐提薙刀出、親戰庭中。從兵四集、殺安富某等十餘人。餘兵走歸。四月、義政分予丹後于信賢・政國二人、遣吏入國。山名氏吏拒戰、迭有勝敗。五月、多賀忠高率近江兵、入援東陣。聞西陣黨六角龜壽起近江、則引還。勝元乃令國信城北白川、屬之叡山、以通近江商賈。又令是豐城天王山、塞西陣糧道。持豐令義就屯勝龍寺拒之。又令政弘城狛野、以其家臣二尾某留守焉。二尾叛應東陣。會少貳嘉頼子敎頼歸自對馬、謀復其國。西陲大亂。政弘走、歸周防。西陣失勢。赤松氏將中村某、亦略播磨・備前・美作、盡復其國。

【訓讀】文明元年三月、勝元、部下の兵を遣はし、夜、火を西陣に縱ち、入つて持豐の營に至らしむ。持豐、薙刀を提げて出で、親ら庭中に戰ふ。從兵、四集し、安富某等十餘人を殺す。餘兵走り歸る。四月、義政、丹後を信賢・政國二人に分予し、吏を遣はして國に入らしむ。山名氏の吏、拒ぎ戰ひ、迭に勝敗あり。五月、多賀忠高、近江の兵を率ゐ、入つて東陣を援く。西陣の黨六角龜壽、近江に起ると聞き、則ち引き還る。勝元乃ち國信をして北白川に城かしめ、之を叡山に屬し、以て近江の商賈を通ず。又是豐をして天王山に城かしめ、西陣の糧道を塞がしむ。持豐、義就をして勝龍寺に屯せしめ、之を拒がしむ。又政弘をして狛野に城かしめ、其の家臣二尾某

を以て留守せしむ。二尾叛きて、東陣に應ず。會〻少貳嘉賴の子教賴、對馬より歸り、其の國を復せんと謀る。西陲大に亂る。政弘走り、周防に歸る。西陣、勢を失ふ。赤松氏の將中村某、亦播磨・備前・美作を略して、盡く其の國を復す。

〔通釋〕 文明元年三月、勝元は部下の兵を遣はし、夜、火を西陣につけさせ、持豐の陣營に攻め入らせた。持豐は薙刀を提げて出で、自ら庭の中で戰つた。持豐の從兵が四方から集まつて來て、勝元の部將安富某等十餘人を殺した。殘兵は逃げ歸つて來た。四月、義政は丹後を、信賢・政國の二人に分け與へ、役人を遣はして丹後に行かせた。山名氏の役人が拒ぎ戰ひ、互に勝つたり負けたりした。五月、多賀忠高は近江の兵を率ゐて京都に來り、東陣を助けた。西陣の徒黨の六角龜壽が近江に兵を擧げたと聞いて、忠高は則ち引き還した。そこで勝元は國信をして城を北白河に築かせ、之を叡山に附屬させて、近江の商人の往來の出來るやうにした。又是豐をして天王山に城を築かせ、西陣の兵糧運搬の道を塞がしめた。持豐は義就をして勝龍寺に屯せしめ、之を防がしめた。又政弘をして狛野に城を築かせ、その家來の二尾某をして留守をさせた。然るにこの二尾は叛いて、東陣に味方した。此の時少貳嘉賴の子の教賴が對馬から九州に歸つて來て、その舊領を取り戻さうと謀つた。それが爲め西のはては大に亂れた。本國が危いので大内政弘は走つて周防に歸つた。それがため西陣は勢をなくした。又赤松氏の將中村某も亦播磨・備前・美作を掠め取り、悉く赤松氏の舊領を取り返した。

〔語釋〕 文明（後土御門天皇の年號。）○安富某（紀四郎）○勝龍寺・狛野（京都の西方。）○二尾某（加賀守）○謀レ復二其國一（筑前に入り舊領地を復しようと謀つた。）○西陲（九州をさす。）○歸二周防一（九州に近いので、戰亂の波及を恐れて歸つたのである。）○中村某（八郎）

二年十二月、上皇崩于幕府。三年正月、葬上皇。葬儀不備。義政徒步奉送。四年、勝元以將軍旨說畠山義統。義統降。義政賜之越中・能登、以通北國糧道。西陣益失勢、逃降相屬。五年三月、持豐病卒。西陣猶不解去。勝元欲乘喪擊之。五月、勝元亦病卒。子政元嗣。勝元與持豐構難、未決勝敗而死。然政權終歸細川氏。

【訓讀】二年十二月、上皇、幕府に崩ず。三年正月、上皇を葬る。葬儀備らず。義政、徒步して奉送す。四年、勝元、將軍の旨を以て、畠山義統に說く。義統降る。義政、之に越中・能登を賜ひ、以て北國の糧道を通ず。西陣益〻勢を失ひ、逃降相屬す。五年三月、持豐病んで卒す。西陣猶ほ解き去らず。勝元、喪に乘じて之を擊たんと欲す。五月、勝元も亦病んで卒す。子政元嗣ぐ。勝元、持豐と難を構へ、未だ勝敗を決せずして死す。然れども政權は終に細川氏に歸す。

【通釋】二年十二月、後花園上皇は幕府で崩御遊ばされた。三年正月、上皇を葬つた。戰亂中のこととて儀式も備らなかつた。義政は徒步で之を御送り申し上げた。四年、勝元は將軍の思召で降參するやうに畠山義統に說いた。それで義統は降參した。義政は義統に越中・能登を與へて北國から來る兵糧の道を通じた。西陣は段々勢が衰へ逃げるもの、降參するものが引き續いだ。五年三月、持豐は病氣で死んだ。西陣はそれでも兵を解かなかつた。勝元は其の喪に乘じて之を討たうとした。五月、勝元も病氣で死んだ。子の政元が跡を嗣いだ。勝元は持豐と戰を起し勝負が決まらぬ中に死んで終つた譯である。併し政權はつゞまる所、細川氏に歸することゝなつた。

日本外史新釋　卷八終

日本外史新釋　卷九

足利氏正記

足利氏下

兩陣皆喪首領、猶屹然相對。十二月、義政讓軍職於義尙。甫九歲。畠山政長爲管領、七日而辭、以族義統代之。賞降東陣功也。九年十一月、西陣諸將各解歸國。義視往依土岐氏。東陣亦解。自應仁元年至此、凡十有一歲。兩陣兵士交出焚掠。文武第宅、蕩爲荒野。關白兼良以下諸公卿、散走四方、或遭戕害。歷朝典籍、概羅兵燹。而義政宴詠自若。發使者赴朝鮮、求勘合印信、以購海外珍寶。十一年、遂退居東山、起銀閣、以擬義滿金閣。不以爭亂加意。諸國强臣、往往乘亂奪國。葬上皇之歲、斯波氏家臣

甲斐某弑其君、奪越前、以應西陣。朝倉敏景誅殺甲斐。義政賜之越前。於是、織田氏乃奪尾張。義政不問也。自是天下武人、不復朝足利氏。山名氏、及其黨與諸將、散在諸國、往往漸就衰滅。而細川氏與上杉氏、張於東西者、如故。

【譯文】兩陣皆首領を喪ひ、猶ほ屹然として相對す。十二月、義政、軍職を義尚に讓る。甫めて九歲。畠山政長、管領と爲り、七日にして辭し、族義統を以て之に代らしむ。東陣に降りし功を賞するなり。九年十一月、西陣の諸將、各〻解いて國に歸る。義視往いて土岐氏に依る。東陣も亦解く。應仁元年より此に至るまで、凡そ十有一歲。兩陣の兵士、交〻出でて焚掠し、文武の第宅、蕩として荒野となる。關白兼良以下の諸公卿、四方に散走し、或は戕害に遭ひ、歷朝の典籍、概ね兵燹に罹る。而して義政は、宴嬉自若たり。使者を發して朝鮮に赴かしめ、勘合の印信を求め、以て海外の珍寶を購ふ。十一年、遂に退いて東山に居り、銀閣を起し、以て義滿の金閣に擬し、爭亂を以て意に加へず。諸國の強臣、往往、亂に乘じて國を奪ふ。上皇を葬るの歲、斯波氏の家臣甲斐某、其の君を弑し、越前を奪ひ、以て西陣に應ず。朝倉敏景、甲斐を誅殺す。義政、之に越前を賜ふ。是に於て、織田氏乃ち尾張を奪ふ。義政問はず。是より天下の武人、復足利氏に朝せず。山名氏、及び其の黨與の諸將、諸國に散在するもの、往往、漸く衰滅に就く。而して細川氏と上杉氏と、東西に張ること故の如し。

【通釋】東西兩陣共その總大將に死なれて終つたが依然としてきつと睨み合つて居た。文明八年十二月、義政は將軍職を義尚に讓つた。その時義尚はやつと九歲であつた。畠山政長が管領となり、七日目に辭職して同族の義

統を以て代らしめた。これは東陣に降參した手柄を賞する意味であつた。九年十一月、西陣の諸將は各々兵を解いて其の國に歸つた。それがため義視は土岐氏の處に往つて世話に成つた。東陣も亦自然解散した。應仁元年からこれまですべて十一年間である。兩陣の兵士はかはる〴〵出でゝ放火掠奪をやつたので、公卿や武家の屋敷は全部壞廢して荒野原となつた。關白兼良以下の公卿衆は四方に逃げ匿れ、中には殺されたものもあり、御歴代の大事な書物は大抵燒けて無くなつた。而るに義政は相變らず酒盛や詩歌を詠じて平然たるものであつた。使者をやつて朝鮮に行かせ、明國發行の勘合の割符を求め、外國との交通の保證を得て置いて、外國の珍らしい寶器を買ひ取つたりした。十一年、遂に退去して東山に居り、銀閣を建てゝ義滿の金閣になぞらへ、世の中の戰亂などはちつとも氣にかけなかつた。諸國の強い家來どもは、往々戰亂に乘じて主人の國を奪ふものなども出た。上皇を葬つた年(文明二年)斯波氏の家來甲斐某は其の主君を弑して越前を奪ひ、西陣に味方をした。朝倉敏景は甲斐を殺した。それで義政は之に越前を與へた。そこでこれを切つかけに同じ斯波氏の家來織田氏は尾張を奪つた。義政は問題にしないで放つて置いた。これからは天下の武人は、もう足利を馬鹿にして御機嫌伺ひに出るものもなくなつた。山名氏及びその一味の諸將で諸國に散らばつてゐた者も、追々衰微して滅びるものも出て來た。併し細川氏(京都)と上杉氏(鎌倉)とは東西に威張つてゐたことは以前の通りであつた。

語釋　首領(頭目。持豐・勝元をさす。)○依土岐氏(美濃の土岐成賴の河手城。)○蕩(ひろ〴〵の意。)○勘合印信(貿易するのに明國承諾の證とする印鑑。)○甲斐某(刑部左衞門。)

上杉憲忠之與成氏和也、義政亦使使者諭解之。而君臣猶相嫌隙。後四歲、成氏與結城成朝謀、伏力士於門側、而召憲忠。憲忠至、入門。力士擊殺之。上杉氏族皆怒、叛

成氏。明年、長尾昌賢請京師、立憲忠弟房顯爲管領。與扇谷上杉定正、共攻成氏、轉戰武藏・相模間。房顯築壘于五十子。兵結不解者三歲矣。房顯・定正請京師曰「願得戴一將種、以討成氏。」義政乃使其弟削髮爲香嚴院主者蓄髮、命名政知、遣之關東。關東將士多歸心於成氏、少附政知者。於是、政知留在伊豆堀越。房顯既卒、子顯定嗣。顯定與定正奉政知、數攻成氏。成氏走據古河城。城負常陸、右下野、左下總・千葉・小山・結城・宇都宮諸族、爲之羽翼。顯定・定正、攻之。十一歲而陷。成氏奔千葉。後七歲、與上杉氏媾、得復古河。請和義政。義政聽之。實文明十年也。

上杉憲忠の成氏と和するや、義政も亦、使者をして之を諭解せしむ。而れども君臣、猶ほ相嫌隙す。後四歲、成氏、結城成朝と謀り、力士を門側に伏せて、憲忠を召す。憲忠至り、門に入る。力士、之を擊ち殺す。上杉氏の族、皆怒り、成氏に叛く。明年、長尾昌賢、京師に請ひ、憲忠の弟房顯を立てゝ管領と爲す。扇谷の上杉定正と共に、成氏を攻め、武藏・相模の間に轉戰す。房顯、壘を五十子に築く。兵結んで解けざること三歲。房顯・定正、京師に請うて曰く「願はくは一將種を戴き以て成氏を討つを得ん」と。義政乃ち其の弟の髮を削り香嚴院の主と爲れる者をして、髮を蓄へしめ、名を政知と命じ、之を關東に遣はす。關東の將士、多く心を成氏に歸し、政知に附く者少し。是に於て、政知、留つて伊豆の堀越に在り。房顯既に卒し、子顯定嗣ぐ。顯定・定正

と政知を奉じて、數〻成氏を攻む。成氏走つて、古河城に據る。城は常陸を負ひ、下野を右にし、下總を左にす。千葉・小山・結城・宇都宮の諸族、之が羽翼たり。顯定・定正、之を攻む。十一歳にして陷り、成氏、千葉に奔る。後七歳、上杉氏と媾じ、古河を復することを得、和を義政に請ふ。義政、之を聽す。實に文明十年なり。

〔通釋〕上杉憲忠が成氏と和睦をしたので、義政も亦使者を立てて之を諭しなだめしめた。併し成氏と憲忠との間柄は依然として疑ひ合つて、仲が惡かつた。其の後四年目に、成氏は結城成朝と相談して、力士を門の傍に匿して置いて、憲忠を呼び寄せた。憲忠はやつて來て門を入つた。すると力士が出て來て之を擊ち殺した。上杉氏の一族は皆怒つて成氏に叛いた。翌年、長尾昌賢は京都の將軍に願うて、憲忠の弟房顯を立て、管領とした。そして扇谷の上杉定正と一緒になつて成氏を攻め、武藏・相摸の邊であちこちと戰つた。房顯は壘を五十子に築いた。戰のやまないこと三年にも及んだ。房顯、定正は京都に願つて曰ふには「何卒一人の大將筋の方を君に戴いて成氏を討ちたいものです」と。そこで義政は自分の弟で坊主になつてゐる香嚴院の住職だつた者に髮を延ばさせ、名を政知と命じて關東に遣はした。併し關東の將士は心を成氏に寄せるものが多く、政知に附く者は少かつた。そんな次第で政知は伊豆の堀越に留つてゐた。房顯は、すでに死んで終ひその子の顯定が相續した。顯定は定正と共に政知を守り立て、度々成氏を攻めた。成氏は走つて古河城に立て籠つた。この古河城は常陸を後ろにし、下野を右(北に當る)にし、下總を左(南に當る)にしてゐる。その上千葉・小山・結城・宇都宮などの諸族が之を輔佐してゐた。顯定・定正は之を攻めた。十一年たつてやつと陷落し、成氏は千葉に走つた。その後七年目に成氏は上杉氏と和睦し古河を取り戻すことが出來、又和を義政に請うた。義政も之を許した。實に文明十年であつた。

【語釋】五十子（上野）〇將種（將軍家の血統。）〇文明（後土御門天皇の年號）

顯定於是在上野平井、管領八州。八州推稱山内公。扇谷上杉定正在相摸大場。其臣太田持資有才畧。削髮稱道灌。道灌精築城之術。築江戸・河越二城、居焉。與父道眞協心、大播恩威。八州將士、漸背山内歸扇谷。顯定患之、數擊定正、不得志。顯定陰計除道灌以斷定正手足。乃縱反間、盛稱道灌材武得士心、非爲定正下者。定正稍忌之。十八年、定正招道灌賜酒、酒酣命浴、使人槍刺殺之。子資安與道眞、共降顯定。顯定大喜曰、定正陷我計中。不足復圖。長享元年、將兵發平井、擊定正。定正遣使古河、乞援於成氏。成氏使子政氏將兵援定正、討顯定。

【通釋】顯定、是に於て、上野の平井に在つて、八州を管領す。八州、推して山内公と稱す。扇谷の上杉定正は、相摸の大場に在り。其の臣太田持資、才略あり。髮を削り。道灌と稱す。道灌は築城の術に精し。江戸・河越の二城を築いて居る。父道眞と心を協せて、大に恩威を播く。八州の將士、漸く山内に背き扇谷に歸す。顯定之を患へ、數く定正を擊ち、志を得ず。顯定、陰に道灌を除き、以て定正の手足を斷たんと計り、乃ち反間を縱ち、盛に道灌の材武にして士心を得、定正の下と爲る者に非ざるを稱す。定正、稍く之を忌む。十八年、定正、道灌を

招き酒を賜ひ、酒酣にして浴を命じ、人をして槍もて之を刺殺せしむ。子資安、道眞と、共に顯定に降る。顯定、大に喜んで曰く、「定正、我が計中に陷る。復圖るに足らず」と。長亨元年、兵に將として平井を發し、定正を撃つ。定正、使を古河に遣はし、援を成氏に乞ふ。成氏、子政氏をして、兵に將として定正を援ひ、顯定を討たしむ。

通釋 そこで顯定は上野の平井に居て關八州を管領した。八州の者は顯定を尊んで、山内公といつた。扇谷の上杉定正は相摸の大場に居た。その家臣の太田持資は才能謀略があつた。髮を剃り落して道灌と曰つた。道灌は城を築くことに精しかつた。江戸と河越の二城を築いてそこにゐた。父の道眞と心を合はせて、大に恩惠威勢を敷き施した。八州の將士はいつの間にか山内に叛いて扇谷の定正に屬いた。山内の顯定はこの事を心配し、度々定正を撃つたが思ふやうにならなかつた。顯定はひそかに道灌を除き、定正の手足のやうに助けになるものを斷たうと計り、そこでまはし者をやつて「道灌は才智武藝があり、將士の心を得てゐて定正の家來となるべき男ではない」と盛に言ひはやさしめた。定正はだん〳〵道灌を惡むやうになつて來た。十八年、定正は道灌を招き、酒を馳走し、酒宴半ばに入浴をさせ、人をして槍で以て道灌を刺し殺させた。道灌の子の資安は道眞と共に顯定に降參した。顯定は大層喜んで曰ふには「定正は我が計略にかゝつた。もう譯なくやつつけられる」と。長亨元年兵を率ゐて平井を發し定正を撃つた。定正は使を古河に遣はし援を成氏に乞うた。成氏は子政氏をして兵に將として定正を援け、顯定を討たしめた。

語釋 不レ足二復圖一（不足は易しの意。また圖り易し。）○長亨（後土御門天皇の年號。）

是年九月、義尚自將討六角高頼。以其背命不來也。十月、高頼逃甲賀山。義尚留陣鈎里。義尚幼喜文學。與藤原兼良、問答政事。兼良爲錄其語、曰樵談治要。又習騎射。在鈎里踰年、講左氏春秋于幕中。曰「吾不滅此賊、不復還京師」延德元年三月、疾作、薨于陣中。官至內大臣右近衞大將從一位。薨年二十五。內外惜之。義尚晚更名義熙。義熙無子。義政召義視於美濃、養其子義材爲嗣。義材後更名義尹、終更義植。二年正月、義政薨。官至左大臣右近衞大將從一位。准三宮。明年、義視薨于京師。政知卒于伊豆。

〔譯〕是の年九月、義尚自ら將として六角高頼を討つ。其の命に背いて來らざるを以てなり。十月、高頼、甲賀山に逃る。義尚、留り鈎里に陣す。義尚、幼より文學を喜み、藤原兼良と政事を問答す。兼良、爲めに其の語を錄し、樵談治要と曰ふ。又騎射に習ふ。鈎里に在つて年を踰え、左氏春秋を幕中に講ず。曰く、「吾れ此の賊を滅さずんば、復京師に還らず」と。延德元年三月、疾作り、陣中に薨ず。官、內大臣、右近衞大將、從一位に至れり。薨ずる年二十五。內外、之を惜しむ。義尚、晚に名を義熙と更む。義熙、子なし。義政、義視を美濃より召し、其の子義材を養つて嗣と爲す。義材、後に名を義尹と更め、終に義植と更む。二年正月、義政、薨ず。官、左大臣、右近衞大將、從一位に至り、三宮に准ぜらる。明年、義視、京師に薨ず。政知、伊豆に卒す。

通釋　この年九月、義尙は自ら大將となつて、六角高賴を討つた。それは高賴が將軍の命に背いて京都に來なかつたことからである。十月、高賴は甲賀山に逃げた。義尙は留つて鈎里に陣取つた。義尙は幼少の頃から文學が好きで藤原兼良と政治上の問答をしたことがあつた。兼良は義尙の爲めに、その問答の言葉を書き取り、樵談治要といふ書物にした。又義尙は馬に乘つて弓を射ることにもなれて居た。鈎里に居つて歲を越したが、陣中で春秋左氏傳の講議をした。義尙が曰ふのに「自分はこの賊を亡ぼさなければ二度と京都には還つて行かない」と。延德元年三月、病氣が起つて陣中で歿した。その官は內大臣、右近衞大將、從一位まで昇つた。死んだ年は二十五であつた。幕府の內外皆其の死を惜しんだ。義尙は死ぬ前に名を義煕と改めた。この義煕には子がなかつた。義政は義視を美濃から召し寄せ、その子義材を養つて跡目とした。義材後に名を義尹と改め。終に義植と改めた。二年正月、義政は歿した。その官は左大臣、右近衞大將、從一位まで昇り、三宮に准ぜられた。翌年、義視も京都で亡くなり、政知は伊豆で死んだ。

語釋　甲賀山・鈎里（近江）○延德（後土御門天皇の年號。）○樵談治要（書名。一卷　神を敬ふべきこと、佛法を尊ぶべきこと等八個條のことを記してある。治要と名付け八個條のことを記したのは八幡大菩薩の加護で大八島を治める計要といふ義で、樵談とは樵夫も王道を談ずるといふ所から名付けたのである。）○春秋左氏傳（書名。三十卷。孔子の魯の春秋の傳で左氏が著したものだから左氏傳といふ。）

政知有子、曰茶茶。政知愛後妻子義通、疎茶茶、茶茶怨望、遂弑政知。義通走、依今川氏親。氏親遣其將伊勢長氏誅茶茶。長氏遂取伊豆、遂窺相摸。是時上杉定正方克顯定、居鉢形城、兵威頗振、不復敬成氏。小田原城主大森實賴以書諫之曰「扇谷支

庶也。所以能抗山内者、太田道灌之力也。今既喪道灌、兵力衰削。而偶克勁敵、眞僥倖耳。乃輕蔑君長、重喪將士之心、禍至無日矣。定正弗能悛。長氏遣使、通好於扇谷氏、與今川氏俱助定正、以撃顯定。兩上杉氏終自是衰矣。

〔訓讀〕政知、子有り、茶茶と曰ふ。政知、後妻の子義通を愛し、茶茶を疎んず。茶茶、怨望して、遂に政知を弑す。義通走つて、今川氏親に依る。氏親、其の將伊勢長氏を遣はして茶茶を誅せしむ。長氏、遂に伊豆を取り、遂に相摸を窺ふ。是の時、上杉定正、方に顯定に克ち、鉢形城に居りて、兵威頗る振ひ、復成氏を敬せず。小田原城主大森實賴、書を以て之を諫めて曰く、「扇谷は支庶なり。能く山内に抗する所以は、太田道灌の力なり。今既に道灌を喪つて、兵力衰削す。而して偶〻勁敵に克ちしは、眞に僥倖のみ。乃ち君長を輕蔑し、重ねて將士の心を喪はゞ、禍の至る、日無からん」と。定正悛むる能はず。長氏、使を遣はし、好を扇谷氏に通じ、今川氏と俱に定正を助け以て顯定を撃つ。兩上杉氏、終に是より衰ふ。

〔通釋〕政知に茶茶といふ子があつた。政知は後妻の生んだ子の義通を愛して、茶茶を疎々しくした。茶茶は怨んでとう〳〵父政知を弑した。義通は逃げて今川氏親にたよつた。氏親はその大將伊勢長氏を遣はして茶茶を殺させた。長氏はとう〳〵伊豆を取り、更に進んで相摸をねらつてゐた。この時上杉定正は折から顯定に勝つて鉢形城に居り、兵勢威力が可成り振つて居たので、もう成氏を尊敬しなくなつた。小田原城主大森實賴は書面を以て定正を諫めて曰ふには「扇谷は分家筋であります。本家の山内家とよく張り合ふことの出來たのは太田道灌の

お蔭であります。所がもう道灌を失ひ、兵力衰へ削られて終つてゐます。それであるのに、計らずも强敵顯定に勝てたのは、ほんとにこぼれ幸であります。これを却つて君長の成氏を輕蔑し、その上に將士の人望を失ふやうなことをしたら、禍は日ならず直ちに來るでせう―と。定正は心を改めることが出來なかつた。長氏は使を遣はして扇谷氏と款を通じ、今川氏と共に定正を助けて顯定を撃つた。兩上杉氏は終にこれから衰へ出したのである。

【語釋】伊勢長氏（即ち北條早雲）〇鉢形城（武藏）〇支庶（次男・三男の家筋。）

義通之走二今川氏一、今川氏護二送之於京師一。細川政元爲二管領一。請二義植一寓二義通於天龍寺一。將三行爲二僧也一。義植既襲レ職。近國諸士盡來賀レ之。獨六角高頼不レ至。義植曰「吾將レ繼二義父之志一也」。明應元年九月、義植親將討二高頼一、攻二拔觀音寺城一。高頼復逃二甲賀山一。義植凱旋。當二是時一、畠山政長爲二管領一。政長以二宿將一負二其威望一、輕二侮諸將一。諸將不レ平。畠山義豊、義就子也。訴二政長驕横一、據二譽田城一擧レ兵。

【口語譯】義通の今川氏に走るや、今川氏、之を京師に護送す。細川政元、管領たり。義植に請ひ、義通を天龍寺に寓せしむ。將に行くゆく僧と爲さんとす。義植既に職を襲ぐ。近國の諸士、盡く來り之を賀す。獨り六角高頼至らず。義植曰く、「吾れ將に義父の志を繼がんとするなり」と。明應元年九月、義植自ら將として高頼を討

ち、觀音寺城を攻め拔く。高賴、復甲賀山に逃る。義植凱旋す。是の時に當つて、畠山政長、管領たり。政長、宿將を以て其の威望を負ひ、諸將を輕侮す。諸將平ならず。畠山義豐は、義就の子なり。政長の驕橫を訴へ、譽田城に據つて兵を擧ぐ。

【通釋】義通が今川氏に走りたよつた時、今川氏は之を京都へ護送した。細川政元は當時管領であつた。將軍義植に賴んで義通を天龍寺に寓居させた。將來僧侶にしようとしたのである。義植は其の頃すでに將軍職を繼いでゐた。近國の諸士が皆やつて來て祝つた。たゞ六角高賴だけが來なかつた。義植が曰ふには「余は養父義尚の遺志を繼いで、之を攻め滅さうと思ふのだ」と。明應元年九月、義植親ら大將となつて高賴を討ち、觀音寺城を攻め落した。高賴はまた甲賀山に逃げ込んだ。義植は凱旋した。この當時、畠山政長が管領となつてゐた。政長は昔からの大將であつたので、その威力衆望を鼻にかけ、諸將を輕蔑してゐた。諸將は彼に不平を持つてゐた。畠山義豐は義就の子である。政長の驕り氣儘なことを申し立て、譽田城に立てこもつて兵を擧げた。

【字解】義父之志（義尚が六角氏を滅すこと。義尚は其の志を果さないで陣歿した。）（一）明應（後土御門天皇の年號。）（一）譽田城（河內）

二年三月、政長奉義植、討之。四月、義植陣于正覺寺、數攻譽田、不能下。義豐知細川政元與政長爭權相忌也、陰遣使、說細川氏家老三好之長之長子之慶、勸政元援義豐、合兵圍正覺寺。義植脫走。政長子尙長走紀伊。政長曰「吾可以死也」與其臣丹下某等訣飮、自殺。政元歸京師、議將軍繼嗣、前關白藤原政基、與故政知有姻。因說

政元曰「義通在天龍寺、未削髮。當立。」政元然之、乃會諸將言曰、「東山公嘗約養堀越氏之子矣。今將軍黨於政長、自亂國家。不可以統師。」諸將莫敢異議。乃立義通。甫十五。更名義高、後更義澄。

訓讀 二年三月、政長、義植を奉じて之を討つ。四月、義植正覺寺に陣し、數〻譽田を攻めて、下す能はず。義豐、細川政元の、政長と權を爭ひ相忌むを知るや、陰に使を遣はして、細川氏の家老三好之長に說かしむ。之長の子之慶、政元に勸め、義豐を援けしめ、兵を合せて正覺寺を圍む。義植脫走す。政長の子尙長は紀伊に走る。政長曰く「吾れ以て死すべきなり」と。其の臣丹下某等と訣飮して、自殺す。政元、京師に歸り、將軍の繼嗣を議す。前の關白藤原政基、故の政知と姻あり。因つて政元に說いて曰く、「義、天龍寺に在り、未だ髮を剃らず。當に立つべし」と。政元、之を然りとし、乃ち諸將を會し、言つて曰く、「東山公、嘗て堀越氏の子を養はんと約せり。今將軍は政長に黨して、自ら國家を亂す。以て師を統ぶべからず」と。諸將敢て異議するなし。乃ち義通を立つ。甫めて十五。名を義高と更め、後、義澄と更む。

通釋 二年三月、政長は義植を守り立てゝ義豐を討つた。四月義植は正覺寺に陣取り、度々譽田を攻めたが下すことは出來なかつた。義豐は細川政元が政長と權力を爭つて互に憎み合つてゐることを知つたので、ひそかに使を遣はして細川氏の家老三好之長に說かしめた。之長の子の之慶は政元に勸め、義豐を援けさせ、連合して正覺寺を取り圍んだ。義植は圍から脫けて逃げた。政長の子尙長は紀伊に逃げた。政長が曰ふのに「これで乃公は

死んでもいゝ」と。家來の丹下某と最後の酒宴を催して自殺した。政元は京都に還り、將軍の跡目は誰にするか相談した。前の關白藤原政基は故の政知と縁つゞきであつた。それ故、政元に説いて曰ふには「義通は天龍寺に居つて、まだ髮を剃り落してゐない。將軍に立つべきである」と。政元も尤もだと思ひ、そこで諸將を集めて言つていふには「さきに東山公義政殿は前から堀越氏の子を養子にすることを約束せられてゐた。それを今の將軍は政長に組んで、自分から國家を亂した。これでは軍兵を統べることは出來ない」と。諸將も敢て異議をいふ者もなかつた。そこで義通を立てゝ將軍とした。年はやつと十五であつた。名を義高と改めたが、後に又義澄と改めた。

〔語釋〕正覺寺（河内）〇政元（勝元の子）〇有レ姻（政知の妻は政基の女。）〇東山公（義政が銀閣を東山に造つて其處にゐたから之を東山殿といつた。）〇堀越氏（政知は伊豆の北條に居り、堀越御所といつた。）〇今將軍（義植）

閏月、政元聞義植匿在筒井、尚長在高屋、遣兵攻之、捕義植、幽于家臣物部氏、禁人出入、縱一僧侍焉。六月、義植逃出、奔越中、終赴周防、依大内政弘。政弘卒。子義興計起兵復義植。政元養子高國、以事怨政元、叛通大内氏。於是、細川氏分黨、京畿大擾。兩上杉氏亦鬪於關東、概無虛歲。六年、成氏卒、子政氏嗣。政氏與定正子朝良、數攻顯定。已而和之。當是時、海内武人迭相爭奪。不復知有天子、將軍。

訓讀 閏月、政元、義植は匿れて筒井に在り、尙長は高屋に在りと聞き、兵を遣はし之を攻め、義植を捕へて家臣物部氏に幽し、人の出入を禁じ、一僧を縱して侍せしむ。六月、義植逃れ出で、越中に奔り、終に周防に赴きて、大内政弘に依る。政弘、卒す。子義興、兵を起して義植を復せんと計る。政元の養子高國、事を以て政元を怨み、叛いて、大内氏に通ず。是に於て、細川氏、黨を分ち、京畿、大に擾る。兩上杉氏も亦、關東に鬪ひ、概ね虛歲なし。六年、成氏、卒し、子政氏嗣ぐ。政氏、定正の子朝良と、數〻顯定を攻む。已にして之と和す。是の時に當り、海内の武人、迭に相爭奪し、復、天子、將軍あるを知らず。

通釋 閏月に政元は義植が筒井に匿れて居り、尙長が高屋に匿れて居ると聞いたので、兵を遣はし之を攻めて義植を捕へ、家來の物部氏の家に押し込め、人の出入りを禁じ、一人の僧だけ許して之に侍せしめた。六月、義植は逃れ出で、越中に出奔し、遂に周防に赴いて大内政弘にたよつた。政弘は間もなく死んだ。其の子義興は兵を起して義植を將軍に復職せしめようと計つた。政元の養子の高國は或る事で政元を怨み、叛いて大内氏に内通した。そこで細川氏は二た派に分れ、京都は大層騷ぎ亂れた。兩上杉氏も亦關東で鬪つてゐて、大抵戰爭しない年はなかつた。六年成氏は死んで其の子の政氏が相續した。政氏は定正の子の朝良と與に度々顯定を攻めた。其の内に顯定と和睦した。この時に當つて、海内の武人どもは互に奪ひ合ひ、てんで天子や將軍のあることを知らないといふ有樣であつた。

語釋 筒井(山和)　○高屋(河内)

九年九月、帝崩。置二柩於黑戶一四十餘日乃葬。十一月、太子卽レ位。是爲二後柏原天皇一。天

皇。文龜元年、義澄・義植、各自聚兵。義澄奏請削義植官爵。永正元年、政氏與子高基有郤、構兵。初政氏有三子、高基・義明・基頼。政氏欲廢高基。高基擧兵攻政氏、上杉顯定和解之、使政氏退老。高基立。義明奔陸奥、基頼奔下野。是時、伊勢氏勢漸强大。兩上杉氏連和以拒之。三年、顯定弟房義、爲其臣長尾爲景所殺。

【讀方】九年九月、帝、崩ず。柩を黒戸に置くこと、四十餘日にして乃ち葬る。十一月、太子、位に即く。是を後柏原天皇と爲す。天皇の文龜元年、義澄、義植、各自、兵を聚む。義澄、奏して、義植の官爵を削らんと請ふ。永正元年、政氏、子高基と郤あり、兵を構ふ。初め政氏、三子あり、高基・義明・基頼。政氏、高基を廢せんと欲す。高基、兵を擧げて政氏を攻む。上杉顯定之を和解し、政氏をして退老せしむ。高基立つ。義明、陸奥に奔り、基頼、下野に奔る。是の時、伊勢氏、勢漸く强大なり。兩上杉氏、連和し以て之を拒ぐ。三年、顯定の弟房義、其の臣長尾爲景の殺す所と爲る。

【通釋】九年九月、後土御門天皇が崩御遊ばされた。お痛はしや御柩を黒戸に置きざりにして、四十餘日もたつて、やつとお葬り申し上げた。十一月、皇太子が御卽位なされた。これが後柏原天皇と申し上げる。後柏原天皇の文龜元年、義澄、義植は各〻自分で兵を聚めた。義澄は天皇に申し上げて義植の官爵を削られんことをお願ひした。永正元年政氏は倅の高基と仲違ひとなり、兵を結んで戰つた。はじめ政氏に三人の子があつて、高基・義明・基頼といつた。政氏は高基を廢しようと思つた。それで高基は兵を擧げて、政氏を攻めた。上杉顯定が仲に

人つて和解し、政氏をして隱居せしめた。そして高基が立つた。そこで義明は陸奧に出奔し、基頼は下野に走つた。この時、伊勢氏の勢がだん／＼强大となつた。兩上杉氏は連合和睦して之を拒いだ。三年、顯定の弟房義はその家來の長尾爲景のために殺された。

【語釋】置柩於黑戶（黑戶は宮の名。天下が亂れてゐたので葬禮を行ふことが出來ないで、靈柩は四十日も黑戶に奉安された。）○長尾爲景（上杉謙信の父）

四年、細川政元爲賊所殺。三好長輝誅其賊。政元素好鬼神說、不近婦人。以故無子。養藤原政基子澄之、又養族政春子高國。皆不中意。更養族元勝子澄元。初賴之之後、世爲管領、曰上館。二弟詮春・滿之、世領讚岐・阿波、曰下館。猶關東有兩上杉氏。政春、詮春之後也。元勝、滿之之後也。澄元猶幼、在阿波。三好之慶子長輝輔之。藥師寺與次・香西又六、竝爲政元家宰。議曰「管領言行無常。不能久也。澄元爲嗣、長輝執權則我輩不能不出其下。不若速行大事。擁立澄之。」乃賂政元近士福井・戶倉等、伺察政元。

【訓讀】四年、細川政元、賊の殺す所と爲る。三好長輝、其の賊を誅す。政元、素より鬼神の說を好み、婦人を近づけず。故を以て子なし。藤原政基の子澄之を養ひ、又族政春の子高國を養ふ。皆意に中らず。更に族元勝の

子澄元を養ふ。初め賴之の後、世管領と爲り、上館と曰ふ。二弟詮春・滿之、世讚岐・阿波を領し、下館と曰ふ。猶ほ關東に兩上杉氏あるがごとし。政春は、詮春の後なり。元勝は、滿之の後なり。澄元、猶ほ幼にして、阿波に在り。三好之慶の子長輝、之を輔く。藥師寺與次・香西又六、並に政元の家宰たり。議して曰く、「管領の言行、常なし。久しき能はざるなり。澄元、嗣と爲り、長輝、權を執らば、則ち我が輩其の下に出でざる能はず。速に大事を行ひ、澄之を擁立するに若かず」と。乃ち政元の近士福井・戸倉等に賂ひ、政元を伺察す。

【通釋】四年、細川政元は賊の爲めに殺された。家來の三好長輝が其の賊を誅した。政元は平素好んで鬼神を信心したので女を近づけなかつた。そのために子供はなかつた。藤原政基の子澄之を養ひ、又同族政春の子高國を養つた。二人共皆氣に入らなかつた。更に同族元勝の子澄元を養つた。最初賴之の子孫は代々管領となり、上館といつてゐた。二弟詮春・滿之は代々讚岐・阿波を支配し、下館といつてゐた。それは恰も關東に兩上杉があるが樣であつた。政春といふのはこの詮春の後である。元勝はこの滿之の後である。澄之はなほ幼なかつたので阿波に居つた。三好之慶の子の長輝が之を輔佐してゐた。藥師寺與次・香西又六は共に政元の家令であつた。彼等が相談していふには「管領の言ふことや行ひはチト變である。この分では其の役を長くつとめることは出來ない。かくて澄元が跡を取り、長輝が權を執るやうなことになると、自然我等は其の下積にならない譯には行かない。それよりは早く大事を行つて、政元を弑し、澄之を守り立てた方が宜い」と。そこで政元の近侍の士福井戸倉などに金をやつて、政元の樣子を伺はせた。

【語釋】不レ能レ久也（久しく世にあることは出來ない。）

是年六月、政元齋戒、夜入浴室。戸倉就而刃之。近士波波伯部走救、亦爲所刃、不殊。奔阿波。香西等乃迎澄之於丹波立之。義澄不能制。七月、三好長輝發兵、擁澄元入京師。香西、城嵐山據之、出兵拒百百橋。波波伯部爲長輝先鋒、遇戸倉鬪而斬之。澄之與香西・藥師寺、皆死。長輝請義澄、以澄元爲管領、而自執政事。後削髮稱希雲。希雲之先、曰小笠原長清。長清子長房爲阿波守護、自信濃徙焉、居三好郷。及細川氏領四國、屬部下爲重臣。至是始著。而細川氏始衰矣。

【訓譯】是の年六月、政元、齋戒せんとして、夜、浴室に入る。戸倉、就いて之を刃す。近士波波伯部走り救ひ、亦刃する所と爲り、殊せず。阿波に奔る。香西等乃ち澄之を丹波より迎へて、之を立つ。義澄、制する能はず。七月、三好長輝、兵を發し、澄元を擁して京師に入る。香西、嵐山に城き、之に據り、兵を出して百百橋に拒ぐ。波波伯部、長輝の先鋒と爲り、戸倉に遇ひ、鬪つて之を斬る。澄之、香西・藥師寺と皆死す。長輝、義澄に請ひ、澄元を以て管領と爲し、而して自ら政事を執る。後、髪を削つて希雲と稱す。希雲の先は、小笠原長清と曰ふ。長清の子長房、阿波の守護と爲り、信濃より徙り、三好郷に居る。細川氏の四國を領するに及び、部下に屬して重臣と爲る。是に至つて、始めて著る。而して細川氏、始めて衰ふ。

【通釋】この年六月、政元は物忌みで體を潔めようと思ひ、夜、湯殿に入つた。戸倉はその場に行つて之を殺し

た。近侍の士波波伯部なる者がかけ出して之を助けようとし、亦戸倉の爲めに斬られたが、とゞめは刺されなかつた。かくて波々伯部は阿波に逃げた。そこで香西等は澄之を丹波から迎へて立てた。義澄は之を止めることは出來なかつた。七月、三好長輝は兵を繰り出し、澄元を守り立てゝ京都に攻め込んだ。香西は嵐山に城を築いて立て籠り、兵を出して百百橋を拒いだ。波波伯部は長輝の先鋒となつて戸倉と出合ひ、鬪つて之を斬つた。澄之は香西・藥師寺等と共に皆討死した。そこで長輝は義澄に賴んで、澄元を管領となし、そして自ら政事を執つた。後に髮を剃つて、希雲と稱した。希雲の先祖は小笠原長淸といつた。長淸の子の長房は阿波の守護となり、信濃から移つて三好郷に居た。細川氏が四國を領地とした時にその部下となり重臣となつた。こんどの一件で始めて世間に名が顯はれた。一方細川氏はこれから衰へ出した。

【語釋】 百々橋（京都）　三好郷（阿波）

大内義興聞變、擧山陰・山陽・西海兵、奉義植而東。細川高國亦擧兵應之。義澄懼、與書高國講和。高國不聽。五年三月、義澄奔近江、依六角定頼。澄元與長輝、奔阿波。四月、義植・義興至界浦。先是、畠山尙長、與其臣木澤某等、攻殺畠山義豐、數與政元戰。至是、以兵來屬義植。義植・義興入京師。長輝出兵攝津、與六角氏兵、夾攻京師。大敗、自殺于知恩寺。六月、詔奪義澄官爵、還予之義植。義植以義興爲管領。六年十月、夜

有盜入幕府、欲刺義植。義植拔刀、手斬四人、身又被九創。謂義澄所使也。於是、遣兵索義澄於近江、弗獲。七年、義植自將攻六角定頼、敗歸。是年六月、上杉顯定討長尾爲景、欲爲房義復仇、戰于信濃高梨、敗死。顯定無子。養政氏子顯實、又養憲實子憲總、及其死、諸家臣逐顯實、立憲總爲管領。

訓讀 大内義興、變を聞き、山陰・山陽・西海の兵を擧げ、義植を奉じて東す。細川高國も亦、兵を擧げて之に應ず。義澄懼れ、書を高國に與へて和を講ず。高國聽かず。五年三月、義澄、近江に奔つて、六角定頼に依る。澄元、長輝と阿波に奔る。四月、義植・義興、界浦に至る。是より先き、畠山尚長、其の臣木澤某等と、畠山義豐を攻め殺し、數々政元と戰ふ。是に至り、兵を以て來つて義植に屬す。義植・義興、京師に入る。長輝、兵を攝津に出し、六角氏の兵と京師を夾攻す。大に敗れて、知恩寺に自殺す。六月、詔して、義澄の官爵を奪ひ、之を義植に還予す。義植、義興を以て管領と爲す。六年十月、夜、盜あり、幕府に入り、義植を刺さんと欲す。義植刀を拔き、手づから四人を斬り、身又九創を被る。義澄の使むる所なりと謂ふ。是に於て、兵を遣はして、義澄を近江に索むれども、獲ず。七年、義植自ら將として六角定頼を攻め、敗れ歸る。是の年六月、上杉顯定、長尾爲景を討ち、房義の爲めに仇に復せんと欲し、信濃の高梨に戰つて、敗れ死す。顯定、子なし。政氏の子顯實を養ひ、又憲實の子憲總を養ふ。其の死するに及び、諸家臣、顯實を逐ひ、憲總を立てゝ管領と爲す。

通釋 大内義興は細川の事變を聞いて、山陰・山陽・西海の兵を全部つれ、義植を守り立てゝ東に向つた。細川

高國も亦兵を擧げて之に加勢した。義澄は懼れ、書面を高國にやつて和睦を結ばうとした。高國は肯き入れなかつた。五年三月、義澄は近江に走つて六角定頼にたよつた。澄元は長輝と一緒に阿波に奔つた。四月、義植・義興は界浦まで來た。これより先き、畠山尙長はその家來木澤某等と畠山義豐を攻め殺し、度々政元と戰つた。大内が旗を擧げたので、兵をつれて義植に屬いた。義植・義興は京都に入つた。長輝は兵を攝津に出し、近江の六角氏の兵と連合して京都を夾み討ちにした。長輝は大敗して知恩寺で自殺した。六月、詔して義澄の官爵を奪ひ、之を義植に還し與へた。義植は義興を管領とした。六年十月のある晩、賊が幕府に入り込み義植を刺さうとした。義植は刀を拔いて、手づから四人を斬り倒し、義植自身も亦九ケ所に傷を負うた。これは義澄のやらせた仕業であるといふことである。そこで兵を遣はして義澄を近江に索めたがつかまらなかつた。七年、義植は自ら大將となつて、六角定頼を攻め、負けて歸つて來た。この年六月、上杉顯定は長尾爲景を討ち、房義の爲めに仇を返へさうと思ひ、信濃の高梨で戰つて負けて死んだ。顯定には子がなかつた。それ故政氏の子の顯實を養ひ、又憲實の子の憲總を養つた。顯定が死ぬる時に、多くの家來は顯實を逐つ拂ひ、憲總を立て、管領とした。

【語釋】尙長（政長の子、前に紀伊に走つた者）

八月、細川政賢將南海・東國兵入攻義植。政賢持賢孫也。義植以大内義興策避之丹波。誘政賢入京師。已而聚兵南歸、與政賢戰于船岡山、大敗之。奏義興功、敍從三位。如畠山政長・赤松政則故事。是月、義澄薨于近江嶽山。官至參議從三位。有二子、

長曰義晴、季曰義維。託義晴於赤松義村、託義維於細川澄元。義村、政則子也。十年、義植復攻六角氏、敗歸。十五年、大内義興西歸周防。以久居京師費用不支也。細川高國代爲管領、專政。

訓讀　八月、細川政賢、南海・東國の兵に將として、入つて義植を攻む。政賢は、持賢の孫なり。義植、大内義興の策を以て、之を丹波に避け、政賢を誘ひて京師に入る。已にして兵を聚め南歸し、政賢と船岡山に戰つて、大に之を敗る。義興の功を奏して從三位に敍す。畠山政長、赤松政則の故事の如し。是の月、義澄、近江の嶽山に薨ず。官、參議、從三位に至る。二子あり、長を義晴と曰ひ、季を義維と曰ふ。義晴を赤松義村に託し、義維を細川澄元に託す。義村は、政則の子なり。十年、義植、復六角氏を攻め、敗れ歸る。十五年、大内義興、西周防に歸る。久しく京師に居り、費用支へざるを以てなり。細川高國代つて管領と爲り、政を專にす。

通釋　八月、細川政賢は南海、東國の兵をつれて京都に入り、義植を攻めた。政賢は持賢の孫である。義植は大内義興の謀に從ひ、敵鋒を丹波に避け、政賢を京都におびき入れた。其の内に兵を聚めて、南、京都にかへり、政賢と船岡山で戰つて大に敗つた。そこで義興の功を申上げて、從三位に敍した。これは異數の敍位だが、畠山政長・赤松政則の前例に從つたのである。此の月、義澄は近江の嶽山で歿した。その官は參議、從三位にまで至つた。義澄に二人の子があつて、長を義晴といひ、末の子を義維といつた。義晴を赤松義村に頼み、義維を細川澄元に頼み、それぞれあづけて置いた。この義村は政則の子である。十年、義植はまた六角氏を攻め、負けて

歸つて來た。十五年、大内義興は西、周防に歸つた。長い間京都に居て入費が要つて遣り切れぬから歸つたのである。そこで細川高國が代つて管領となり、政治を氣儘にやつてゐた。

【語釋】船岡山（京都の北）

十七年正月、澄元聞義興去、則與三好元長發兵至攝津。元長長輝孫也。高國敗走近江。五月、高國與六角定頼合兵入京師。元長大敗、被虜。澄元走播磨、遂歸阿波、病卒。元長逃歸阿波。高國益專橫。義植厭之、欲以畠山尚長子植長代爲管領。高國聞怒。大永元年三月、義植爲高國所逼、出奔淡路。後二歳薨。官至權大納言從二位。高國迎義晴於播磨、詔奪義植職、予之義晴。依高國請也。

【通釋】十七年正月、澄元、義興の去れるを聞き、則ち三好元長と、兵を發し攝津に至る。元長は、長輝の孫なり。高國敗れて、近江に走る。五月、高國、六角定頼と兵を合せて、京師に入る。元長、大に敗れて、虜へらる。澄元、播磨に走り、遂に阿波に歸り、病んで卒す。元長、阿波に逃げ歸る。高國益〻專橫なり。義植、之を厭ひ、畠山尚長の子植長を以て代つて管領と爲さんと欲す。高國聞いて怒る。大永元年三月、義植、高國の逼る所と爲り、淡路に出奔す。後二歳にして薨ず。官、權大納言、從二位に至る。高國、義晴を播磨より迎ふ。詔して義植の職を奪ひ、之を義晴に予ふ。高國の請に依れるなり。

【通釋】十七年正月、澄元は義興が京都を去つたと聞いたので、三好元長と兵を繰り出して攝津まで來た。この元長は長輝の孫である。高國は負けて近江に走つた。五月、高國は六角定頼と兵を連合して京都に攻め込んだ。元長は大敗して、虜にせられた。澄元は播磨に逃げ出し、遂に阿波に歸つて病死した。元長も阿波に逃げ歸つた。これから高國は段々増長して我儘になつた。義稙は之を嫌ひ、畠山尙長の子植長を代つて管領にしようと思つた。高國はそれを聞いて怒つた。大永元年三月、義植は高國に無理に押しつけられて淡路に出奔した。其の後二年たつて義植は死んだ。その官は權大納言從二位まで昇つた。高國は義晴を播磨から迎へた。詔して義植の職を取り上げ、之を義晴に與へられた。これは高國の願ひによつたのである。

【語釋】大永（後柏原天皇の年號）

是ノ年、朝廷始メテ行フ二即位ノ禮ヲ一。本願寺ノ僧獻ズ二其ノ資ヲ一。因ツテ勅シテ以テレ僧ヲ准ズ二門跡ニ一。六年、帝崩ズ。太子即クレ位ニ。是ヲ爲ス二後奈良天皇ト一。

【訓讀】是の年、朝廷、始めて即位の禮を行ふ。本願寺の僧、其の資を獻ず。因つて勅して僧を以て門跡に准ず。六年、帝、崩ず。太子、位に即く。是を後奈良天皇と爲す。

【通釋】この年、後柏原天皇は朝廷で始めて即位の儀式を行はれた。本願寺の僧がその儀式に必要な資金を差し上げた。そこで詔して僧を門跡の格に准ぜられた。六年に後柏原天皇は崩御遊ばされた。皇太子が御即位なされた。これを御奈良天皇と申し上げる。

【語釋】本願寺僧（本願寺の僧光兼當時大阪にゐて黄金一萬兩を獻じた。）〇准二門跡一（仁和寺の法親王に准じた。）

高國信讒、殺其臣香西光重。京師亂。義晴奔坂下、遂赴近江朽木、依佐佐木植綱。三好元長在阿波、聞之、乃奉澄元子聰明五郎、擧兵入京師。高國乞援於近江・若狹・越前諸將。朝倉孝景來援高國。七年二月、元長至京師。高國陣桂川東、孝景陣鳥羽。元長爲三軍、與高國夾水而陣。上軍濟上流、下軍濟下流。高國陣左右顧而動。元長則以中軍爲圓陣、亂中流、衝高國陣。陣合以圍之。上軍下軍皆濟、內外夾擊。高國大敗、棄旗走。元長軍追之、部伍頗亂。孝景乃橫擊、破元長。元長走歸阿波。三月、元長大擧至界浦、連下諸城。獨伊丹未下。高國遣兵救之、自陣東寺。畠山義宣、義豐子也。起兵應三好氏、與丹波香西氏、皆約攻高國。高國度不可支、乃講和。元長佯聽之。

高國、讒を信じ、其の臣香西光重を殺す。京師亂る。義晴、坂下に奔り、遂に近江の朽木に赴いて、佐佐木植綱に依る。三好元長、阿波に在つて之を聞き、乃ち澄元の子聰明五郎を奉じ、兵を擧げて京師に入る。高國、援を近江・若狹・越前の諸將に乞ふ。朝倉孝景、來つて高國を援く。七年二月、元長、京師に至る。高國、桂川の東に陣し、孝景、鳥羽に陣す。元長、三軍と爲して、高國と水を夾んで陣す。上軍は上流を濟り、下軍は下流を濟る。高國の陣、左右に顧みて動く。元長則ち中軍を以て圓陣と爲し、中流を亂つて、高國の陣を衝く。

陣合ひ以て之を圍む。上軍、下軍、皆濟り、内外夾撃す。高國、大に敗れ、旗を棄てゝ走る。元長の軍、之を追ふ。部伍頗る亂る。孝景乃ち横撃して、元長を破る。元長走つて阿波に歸る。三月、元長、大擧して界浦に至り、連に諸城を下す。獨り伊丹未だ下らず。高國、兵を遣はして之を救ひ、自ら東寺に陣す。畠山義宣は、義豐の子なり。兵を起して三好氏に應じ、丹波の香西氏と、皆高國を攻めんと約す。高國、支ふ可からざるを度り、乃ち和を講ず。元長、佯つて之を聽す。

【通釋】高國は讒言を信じ、その家來の香西光重を殺した。その爲めに京都は又亂れた。義晴は坂下に逃げ、それから近江の朽木に行き、佐々木植綱にたよつた。三好元長は阿波にゐて、この話を聞き、そこで澄元の子の聰明五郎を守り立て、兵を起して京都に攻め入つた。高國は助力を近江・若狹・越前の諸將に乞うた。越前の朝倉孝景は來て、高國を援けた。七年二月元長は京都にやつて來た。高國は桂川の東に陣取り、孝景は鳥羽に陣取つた。元長は三隊に分けて、高國と桂川を間にして陣取つた。元長の上軍は上手から渉り、下軍は下手から渡つた。高國の陣は左右を顧みて動搖を來した。そこで元長は中軍を圓陣となし、中流を渡つて直ちに高國の陣を衝いた。高國の陣は合して元長の中軍を取り圍んだ。その内に上軍下軍が皆渡つて内外から夾み討ちにした。高國は大敗して旗を棄てゝ逃げた。元長の軍は之を追つかけた。隊伍が可成り亂れた。そこで孝景は横合ひから撃つて出て元長を破つた。元長は走つて阿波に歸つた。三月、元長は大擧して界浦にやつて來て、次ぎ〳〵と諸城を下した。たゞ伊丹だけが降らなかつた。高國は、兵を遣はして之を救ひ自ら東寺に陣取つた。畠山義宣は義豐の子である。兵を起して三好氏に味方し、丹波の香西氏と連合して、皆高國を攻めようと約束した。高國は支へ切れないと思ひ、そこで、和睦を申し入れた。元長は佯つて之を許した。

語釋　坂下（近江）〇內外（內は中軍、外は上軍下軍。）〇伊丹（攝津）

享祿元年、諸援高國者、皆解歸國。元長乃欲攻高國。高國大懼、出奔、歷抵北畠・六角・朝倉・尼子氏。皆弗納。終往備前、依浦上村宗。村宗方殺其君赤松義村、欲列爲諸侯。如朝倉氏比也。乃與高國相結託。時元長加冠於聰明五郎、名曰晴元。居於界城。元長輔佐之。元長叔父政長、稱宗三、嫉元長專權、與晴元所寵木澤長政・柳本彈正相結、俱譖元長。長政畠山義宣家臣也。柳本香西氏族也。二年、柳本攻伊丹。元長與伊丹城將有姻。欲援之。柳本奔牧方。晴元令柳本將兵攻陷伊丹。元長怨望、自歸阿波。高國聞元長不在、乃發兵攻晴元。晴元意悔。召元長自援。十一月、高國與村宗合兵、來攻晴元。赤松氏遺臣不服村宗者、擁赤松晴政、通款於晴元。四年春、元長發兵助晴元。六月、大戰于天王寺側、殺村宗。走高國。高國走尼崎、匿于染戶甕中。元長兵索獲、殺之。播磨力人島村奮戰死。

通釋　享祿元年、諸々の高國を援けし者、皆解いて國に歸る。元長乃ち高國を攻めんと欲す。高國、大に懼れ

て、出奔し、北畠、六角、朝倉、尼子氏に歷抵す。皆納れず。終に備前に往き、浦上村宗に依る。村宗、方に其の君赤松義村を殺し、列つて諸侯と爲ること、朝倉氏の比の如くならんと欲す。即ち高國と相結託す。時に元長聰明五郎に加冠し、名づけて晴元と曰ふ。界城に居り、元長、之を輔佐す。元長の叔父政長、宗三と稱す。元長の專權を嫉み、晴元寵する所の木澤長政・柳本彈正と相結んで、倶に元長を譖す。長政は、畠山義宣の家臣なり。柳本は、香西氏の族なり。二年、柳本、伊丹を攻む。元長、伊丹の城將と姻あり。之を援けんと欲す。柳本、牧方に奔る。晴元、柳本をして、兵に將として、伊丹を攻陷せしむ。元長、怨望し、自ら阿波に歸る。高國、元長の在らざるを聞き、乃ち兵を發して晴元を攻む。晴元、意悔ゆ。元長を召して、自ら援く。十一月、高國、村宗と兵を合せ、來つて晴元を攻む。赤松氏の遺臣、村宗に服せざるもの、赤松晴政を擁して、欵を晴元に通ず。四年春、元長、兵を發して晴元を助く。六月、大に天王寺の側に戰ひ、村宗を殺し、高國を走らす。高國、尼崎に走り、染戸の甕中に匿る。元長の兵、索め獲て、之を殺す。播磨の力人島村、奮戰して死す。

【通釋】享祿元年、高國を援けてゐた多くの者等は皆解散して國へ歸つた。そこで元長は高國を攻めようと思つた。高國は大に懼れて出奔し、北畠・六角・朝倉・尼子と順々にたよつて行つた。併しどこでも皆受け入れなかつた。結局備前に往つて浦上村宗にたよつた。村宗は丁度その時、その君赤松義村を殺してゐたが、自分も朝倉氏と同樣に諸侯の列に加はりたいと思つた。そこで高國と結びついた。此の時、元長は聰明五郎に元服させ、名を晴元とつけた。界城に居て元長が之を輔佐してゐた。元長の叔父政長は宗三といつてゐた。これが元長の我儘を惡み、晴元の寵臣木澤長政・柳本彈正などと結托して、倶に元長を讒言した。長政は畠山義宣の家來であつた。柳本は香西氏の一族である。二年、柳本は伊丹を攻めた。元長は伊丹の城將と姻戚關係があつた。だから之を援けようと

思つた。柳本は、牧方に走つた。晴元は柳本をして兵をつれて伊丹を攻め落させた。元長はひどく怨んで勝手に阿波に歸つた。高國は元長が居ないと聞いたので、兵を發して晴元を攻めた。晴元は心中後悔した。元長を呼んで自分の援けとした。十一月、高國は村宗と兵を合せ、來つて晴元を攻めた。赤松氏の遺臣の中で村宗に從はぬ者は赤松晴政を守り立て、好みを晴元に通じた。四年春、元長は兵を繰り出して、晴元を助けた。六月、大に天王寺の近所で戰ひ、村宗を殺し、高國を走らせた。高國は尼ケ崎に逃げ、染物屋の藍甕の中に匿れた。元長の兵は之を索し出して殺した。播磨の力持の島村なる者は奮戰して討死した。

【語釋】朝倉氏比（朝倉氏は元來斯波氏の家來である。文明中に越前を奪ひ、義政に認められて諸侯となつた、村宗もそれに傚はんとした。）〇城將（伊丹彌三郎。）〇牧方（河内）

天文元年正月、元長殺柳本子某于京師、以報伊丹之怨。晴元大怒。元長削髮謝之、稱海雲。晴元意猶不釋。密使三好宗三・木澤長政圖之。晴元族持隆諫曰、彼有大功。殺之不義。弗聽。遂遣宗三・長政、誘本願寺僧徒、圍海雲于顯本寺。海雲使其妻携子長慶逃阿波、而自殺。長政終弑其君義宣。二年、本願寺僧徒、與晴元有郤。攻取界城。晴元奔淡路。木澤長政誘京師法華徒、攻復界城。四月、晴元率阿波兵、歸助長政。僧徒城大阪、據之。晴元攻之、不能拔。和弭兵。乃入京師、迎義晴於朽木、自爲管領。

【通釋】天文元年正月、元長、柳本の子某を京師に殺し、以て伊丹の怨に報ゆ。晴元、大に怒る。元長、髮を削り

つて之を謝し、海雲と稱す。晴元、意猶ほ釋けず。密に三好宗三・木澤長政をして之を圖らしむ。晴元の族持隆、諫めて曰く、「彼れ大功あり。之を殺すは不義なり」と。聽かず。遂に宗三、長政を遣はして、本願寺の僧徒を誘ひ、海雲を顯本寺に圍む。海雲、其の妻をして、子長慶を携へ阿波に逃れしめて、自殺す。長政終に其の君義宣を弑す。二年、本願寺の僧徒、晴元と郤あり。界城を攻め取る。晴元、淡路に奔る。木澤長政、京師の法華の徒を誘つて、界城を攻復す。四月、晴元、阿波の兵を率ゐ、歸つて長政を助く。僧徒、大阪に城いて之に據る。晴元、之を攻めて、拔く能はず。和して兵を弭め、乃ち京師に入り、義晴を朽木に迎へ、自ら管領と爲る。

【通釋】天文元年正月、元長は柳本の倅某を京都で殺して、伊丹で受けた怨を返した。晴元は非常に怒つた。そこで元長は髮を剃つて謝り、海雲と稱した。併し晴元は心中なか〳〵打ち解けなかつた。內密に三好宗三・木澤長政をして海雲を殺す計畫をさせた。晴元の一族の持隆が諫めて曰ふには「海雲は大功を立てました。それを殺すのは不義です」と。併し晴元は肯き入れなかつた。遂に宗三・長政を遣つて、本願寺の僧徒を引き込み、海雲を顯本寺に取り圍ましめた。海雲は其の妻をして倅の長慶を連れて阿波に逃げさせ、自分は自殺した。長政は遂に其の君の義宣を殺した。二年本願寺の僧徒は晴元と仲違ひとなつた。僧徒は界城を攻め取つた。それで晴元は淡路に逃げた。木澤長政は京都の法華宗の一揆を引き込み、界城を攻めて取り戻した。四月、晴元は阿波の兵をつれ、還つて長政を助けた。僧徒は大阪に城を築いて其處に立て籠つた。晴元は之を攻めたが陷れることは出來なかつた。和睦をして戰をやめ、そこで京都に入り、義晴を朽木から迎へて自分は管領となつた。

【語釋】天文（後奈良天皇の年號）○顯本寺（泉和）○其君義宣（長政は初め義宣に事へ、後に晴元に事へた。）

義晴之在朽木也、高基自古河使使來請冠其子受將軍偏諱如故事。因命曰晴氏。上杉憲總已死、子憲寬爲管領、與伊勢氏綱爭武藏。高基爲晴氏娶氏綱女、欲假其力以報宿仇。高基弟義明在陸奧享祿中、上總守護武田豐三與原氏鬪。千葉氏援原氏、豐三不克。豐三乃迎義明爲主。遠近爭附之。遂攻滅原氏。義明居于御弓、稱御弓御所。常思定關東以興其氏舊業。高基意害之、勸伊勢氏滅御弓。七年、伊勢氏大舉、來攻義明。義明與弟基賴、將兵迎之、義明馳突。敵軍皆靡。乃留俟後騎、中飛箭死。基賴復走下野。伊勢氏盡幷其地。十四年、上杉憲政與上杉朝定、合兵攻伊勢氏。憲政、憲寬子、朝定、朝興子也。於是憲政・朝定竝遣使乞援於晴氏。晴氏遲疑其臣交勸往乃往、與兩上杉氏俱圍河越踰歲。伊勢氏康、大破兩上杉氏軍。晴氏逃歸古河。

〔譯〕義晴の朽木に在るや、高基、古河より使をして來つて、其の子に冠し、將軍の偏諱を受くること、故事の如くせんと請はしむ。因つて命じて晴氏と曰ふ。上杉憲總已に死し、子憲寬、管領と爲り、伊勢氏綱と武藏を爭ふ。高基、晴氏の爲めに氏綱の女を娶り、其の力を假り、以て宿仇を報いんと欲す。高基の弟義明、陸奧に在り、享祿中、上總の守護武田豐三、原氏と鬪ふ。千葉氏、原氏を援く。豐三克たず。豐三乃ち義明を迎へて主

と爲す。遠近爭つて之に附く。遂に原氏を攻滅す。義明、御弓に居り、御弓の御所と稱す。常に關東を定め、以て基氏の舊業を興さんと思ふ。高基、意に之を害とし、伊勢氏に勸めて御弓を滅さしむ。七年、伊勢氏、大擧し來つて義明を攻む。義明、弟基頼と、兵に將として之を迎ふ。義明、馳突す。敵軍皆靡く。乃ち留つて後騎を俟つ。飛箭に中つて死す。基頼、復下野に走る。伊勢氏盡く其の地を幷す。十四年、上杉憲政、上杉朝定と、兵を合せて伊勢氏を攻む。憲政は、憲寛の子、朝定は、朝興の子なり。是に於て、憲政、朝定、並に使を遣はして、援を晴氏に乞ふ。晴氏、遲疑す。其の臣交〻往くことを勸む。乃ち往いて、兩上杉氏と、倶に河越を圍み、歳を踰ゆ。伊勢氏康、大に兩上杉氏の軍を破る。晴氏逃れて古河に歸る。

【通釋】義晴が朽木にゐた頃、高基は古河から使者を立てゝその倅に元服させますから昔からの仕來りのやうに將軍のお名前の一字を下されたいと申し出て來た。そこで晴の一字を與へて晴氏の名づけた。當時上杉憲總はすでに死んで、其の子憲寛が管領となり、伊勢氏綱と武藏を取らうと爭つて居た。高基は晴氏の爲めに氏綱の娘を貰ひ、其の力を借りて昔の仇上杉氏に怨を報いようと思つた。高基の弟の義明は陸奧にゐた。享祿年間上總の守護武田豐三は原氏と鬪つた。千葉氏は原氏を援けた。豐三は克てなかつた。そこで豐三は陸奧の義明を迎へて主人とした。遠近の者が爭つて之に屬いた。とう〳〵原氏を攻め滅ぼした。義明は御弓に居て御弓御所と稱してゐた。常に關東を定めて、基氏の昔の事業を興さうと思つてゐた。高基は心中之を害とし、伊勢氏に勸めて、御弓を滅ぼさせようとした。七年、伊勢氏は大擧して義明を攻めて來た。義明は弟の基頼と共に兵に將として之を迎へた。義明は馳せて敵陣に突き進んだ。敵軍は皆開き靡いた。そこで義明は留つて後から來る騎兵を待つてゐた。その時、飛んで來た流れ矢に中つて死んだ。基頼はまた下野に逃げた。かくて伊勢氏は全部其の地を併は

せ取つた。十四年、上杉憲政は、上杉朝定と連合して伊勢氏を攻めた。憲政は憲房の子で朝定は朝興の子である。そこで憲政・朝定兩人共使を遣はして援助を晴氏に乞うた。晴氏は疑ひ惑ひ愚圖々々してゐた。晴氏の家來はかはる〳〵出かけるやうに勸めた。そこで出かけて兩上杉氏と一緒に河越を取り圍み、その年を越した。所が伊勢氏康が上杉氏の軍を破つた。だから晴氏は逃げて古河に還つた。

【語釋】宿仇（事實が伊勢氏を敵として以來の仇がある。）○享祿（後奈良天皇の年號）○御弓（下總）○圍河越（北條綱成を圍んだのである。）

十五年、義晴欲冠其子。時京畿騷擾、不可行禮。乃携赴坂下、冠于日吉祠官家、命名義藤。遂改義輝、讓之軍職。六角高賴爲假管領、賓之。當是時、細川晴元在京師。玉井某擁故細川高國養子氏綱、游佐長教擁故畠山稙長弟政國、並起于攝津・河内、與大阪僧徒、連兵北郷晴元、遣三好宗三等拒戰。不克。乃召三好長慶。長慶時年十九。掌細川持隆兵、有勇名。以父故怨晴元、不輒應命。其弟之虎諫之。乃航海至兵庫、入越水城。宗三迎之、合兵擊氏綱・政國、迭有勝敗。宗三嘗讒殺元長。至是又讒長慶。長慶怨之。

【語釋】十五年、義晴、其の子に冠せんと欲す。時に京畿騷擾し、禮を行ふべからず。乃ち携へて坂下に赴き、

日吉の祠官の家に冠し、名を義藤と命ず。遂に義輝と改め、之に軍職を讓る。六角高頼、假管領と爲り、之に賓たり。是の時に當り、細川晴元、京師に在り。玉井某は故の細川高國の養子氏綱を擁し、游佐長教は故の畠山植長の弟政國を擁して、並に攝津、河内に起り、大阪の僧徒と、兵を連ねて北に鄕ふ。晴元、三好宗三等を遣はして、拒ぎ戰はしむ。克たず。乃ち三好長慶を召す。長慶、時に年十九。細川持隆の兵を掌り、勇名あり。父の故を以て晴元を怨み、輒ち命に應ぜず。其の弟之虎、之を諫む。乃ち海に航して兵庫に至り、越水城に入る。宗三之を迎へ、兵を合せて、氏綱、政國を擊つ。迭に勝敗あり。宗三、嘗て元長を讒殺す。是に至つて、又長慶を讒す。長慶、之を怨む。

【通釋】十五年、義晴は其の子に元服させようと思つた。當時京畿は亂れてゐて禮など行ふことは出來ない。そこで其の子を連れて坂下に行き、日吉神社の神官のうちで元服させ、名を義藤とつけた。後遂に義輝と改めさせ、將軍職を讓つた。六角高頼は假の管領となり、元服の式の時の烏帽子親になつた。この當時、細川晴元は京都に居た。玉井某は故の細川高國の養子氏綱を守り立て、游佐長教は故の畠山植長の弟政國を守り立て皆攝津河内に起り、大阪の本願寺僧徒と兵を連ね合せて、北、京都に對抗した。晴元は三好宗三等を遣はして之を拒がしめた。併し克たなかつた。そこで三好長慶を召し出した。長慶はこの時、年十九であつた。細川持隆の兵を預り、武勇の名が高かつた。父海雲の一件から晴元を怨んでゐたので、おいそれとは命に應じなかつた。その弟の之虎が之を諫めた。そこで海を渡つて、兵庫に至り、越水城に入つた。宗三は、之を迎へ、兵を合せて、氏綱・政國を擊つた。互に勝ち負けがあつた。宗三は嘗て、元長(海雲)を讒言して殺した。是に於て又長慶を讒言した。長慶は之を怨んだ。

【語釋】假管領（管領するには必ず管領でなければならぬ。だから定頼を假の管領にしたのである。更に高貴とあるは定頼の事。）○父故（長慶の父元長は晴元に攻められ顯本寺で自殺した事。）（○越水城 …）

十八年、長慶與游佐長教連和、以攻宗三于一藏城。宗三乞援於晴元。晴元發京師、入榎南城。六角定頼與晴元有姻。出兵助之。長慶曰「吾以義榮爲將軍、氏綱爲管領、何患之有」義榮者、義維子也。六月、長慶與其弟十河一存、攻拔榎南。宗三走、死江口。晴元走坂下。十九年三月、晴元聞長慶且來襲也、城于如意岳、以奉義晴。義晴病薨于穴太山中。義晴官、至權大納言右近衛大將從三位。晴元・定頼奉義輝徙寶泉寺。十一月、長慶入京師、陣阿彌陀峯、分兵屯三井寺、縱火大津。義輝又徙朽木。晴元陣志賀。二十年正月、晴元迎擊長慶兵、大敗。

【通釋】十八年、長慶、游佐長教と連和し、以て宗三を一藏城に攻む。宗三、援を晴元に乞ふ。晴元、京師を發し、榎南城に入る。六角定頼、晴元と姻あり。兵を出して之を助く。長慶曰く、「吾れ義榮を以て將軍と爲し、氏綱を管領と爲さば、何の患か之れあらん」と。義榮は、義維の子なり。六月、長慶、其の弟十河一存と、榎南を攻め拔く。宗三走つて、江口に死す。晴元、坂下に走る。十九年三月、晴元、長慶、且に來襲せんとすと聞くや、如意嶽に城きて、以て義晴を奉ぜんとす。義晴病んで、穴太の山中に薨ず。義晴、官、權大納言右近衛大

將、從三位に至る。晴元、定賴、義輝を奉じて寶泉寺に從る。十一月、長慶、京師に入り、阿彌陀峯に陣し、兵を分つて三井寺に屯し、火を大津に縱つ。義輝、又朽木に從り、晴元、志賀に陣す。二十年正月、晴元、長慶の兵を迎へ擊つて、大敗す。

【通釋】十八年、長慶は游佐長敎と連合和睦して宗三を一藏城に攻めた。宗三は援助を晴元に乞うた。晴元は京都を出て榎南城に入つた。六角定賴は晴元と姻戚關係にあつた。故に兵を出して晴元を助けた。長慶が曰ふのに「余は義榮を將軍となし、氏綱を管領にすれば何も心配する所はない」と。義榮とは義維の子である。六月、長慶は其の弟十河一存と共に榎南を攻め落した。宗三は逃げて江口で死んだ。晴元は坂下に逃げた。十九年三月、晴元は長慶が來襲しようとしてゐると聞いたので、如意嶽に城を築いて、義晴を迎へて奉戴しようとした。所が義晴は病氣して穴太の山中で歿した。義晴はその官は權大納言、右近衞大將從三位にまで昇つた。晴元・定賴は義輝を迎へて、寶泉寺に移つた。十一月、長慶は京都に入り、阿彌陀峯に陣取り、兵を分けて三井寺に屯し、火を大津にかけた。義輝は又朽木に移り、晴元は志賀に陣取つた。二十年正月、晴元は長慶の兵を迎へ擊つて大敗した。

【語釋】一藏・榎南・江口（攝津）○穴太（近江）○寶泉寺（穴太といふ名が不吉だから寶泉寺へ移つた。）○阿彌陀峯（京都の東方。）

二十一年、六角定賴使其子義賢抵長慶講和。曰、「將軍遜於公、越在畿外數年。公武多矣。不亟講和、恐天下有議公者也。」長慶曰、「臣不敢犯將軍。特怨右京大夫右宗三

耳。今宗三既死、使大夫削髮、立氏綱代之、以及大夫子信良、則臣請謹戢兵矣。和議即成。晴元削髮奔丹波。二月、義輝携信良歸京師。長慶入謁于相國寺、立氏綱爲管領、置信良于越水城。其實質之也。於是、三好氏代細川氏、領京畿諸政、留家臣松永久秀、護幕府、而引兵南歸阿波。久秀、西岡賈人、以慧黠爲長慶所親任。

【訓讀】二十一年、六角定頼、其の子義賢をして、長慶に抵り和を講ぜしむ。曰く、「將軍、公に遜り、畿外に越在すること數年。公の武多し。亟に和を講ぜずんば、恐らくは天下、公を議する者あらん」と。長慶曰く、「臣敢て將軍を犯さず。特右京大夫、宗三を右くるを怨むのみ。今、宗三既に死す。大夫をして髮を削り、氏綱を立てゝ之に代らせ、以て大夫の子信良に及ばしめば、則ち臣請ふ、謹んで兵を戢めん」と。和議即ち成る。晴元、髮を削つて丹波に奔る。二月、義輝、信良を携へて京師に歸る。長慶入つて相國寺に謁す。氏綱を立てゝ管領と爲し、信良を越水城に置く。其の實は之を質とするなり。是に於て、三好氏、細川氏に代つて、京畿の諸政を領す。家臣松永久秀を留め幕府を護らしめ、而して兵を引き南阿波に歸る。久秀は、西岡の賈人、慧黠を以て、長慶の親任する所と爲る。

【通釋】二十一年、六角定頼は其の子義賢をして長慶の所に行つて和睦を結ばしめた。曰ふのに「將軍義輝はあなたに追はれて數年間も京畿の外に遠く離れて居られます。あなたは度々武勇を振はれて、それは大したものです。併し宜い加減の所で早く和睦をなさらぬと、天下の者があなたの事を兎やかう言ふようになりませうぞ」と。

長慶は之に答へて曰ふには「私は決して將軍を犯した譯ではありません。唯だ右京大夫殿(晴元)が宗三を助けたのを怨んで爲ただけの事です。もう宗三は死んで終ひました。右京大夫殿に髪を剃つて貰ひ、氏綱を立てゝ之に代らせ管領となし、その後に右京大夫殿の子の信良に讓られるやうにして下さりさへすれば、私は謹んで戰を罷めませう」と。早速和睦が出來た。晴元は髪を剃つて、丹波に奔つた。二月、將軍義輝は信良をつれて、京都に歸つた。長慶は相國寺に入つて將軍に御目通りした。氏綱を立てゝ管領となし、信良を越水城に置いた。その實は人質としたのである。そこで三好氏は細川氏に代つて、京畿地方の諸〻の政治をやることゝなつた。長慶は家臣松永久秀を留め、幕府を衞らせ、そして自分は兵士をつれて南方、阿波に歸つた。久秀は西岡の商人でわる賢しいので、長慶に親まれ信用せられて居つた。

語釋　逐於公(長慶に逐はれたことをいふ)　○西岡(京都の西)

先是、伊勢氏康攻上杉憲政平井城。陷。八州將士、捕憲政子龍穉、以降氏康。山内上杉氏、於是終滅。先是、扇谷上杉氏、亦爲氏康所滅。憲政奔越後、依長尾景虎、盡以其姓氏官號授之。景虎、爲景子也。長尾氏、於是冒上杉氏、因管領關東。晴氏請和於氏康、立伊勢氏所生子義氏、而自老。氏康置義氏于鎌倉、後請京師、任爲左馬頭。

訓譯　是より先き、伊勢氏康、上杉憲政を平井に攻む。城陷る。八州の將士、憲政の子龍穉を捕へ、以て氏康に降る。山内の上杉氏、是に於て、終に滅ぶ。是より先き、扇谷の上杉氏も、亦氏康の滅す所と爲る。憲政、越後

に奔り、長尾景虎に依り、盡く其の姓氏、官號を以て之に授く。景虎は、爲景の子なり。長尾氏、是に於て、上杉氏を冒し、因つて關東を管領す。晴氏、和を氏康に請ひ、伊勢氏生む所の子義氏を立てて、自ら老す。氏康、義氏を鎌倉に置く。後京師に請ひ、任ぜられて左馬頭と爲る。

【通釋】これより先き、伊勢氏康は、上杉憲政を平井城にせめた。城は遂に落ちた。八州の將士は憲政の子龍稚を捕へて、氏康に降參した。山内の上杉氏はこれで結局滅んで終つた。これより以前扇谷の上杉氏も亦氏康の爲めに滅ぼされた。憲政は越後に出奔し、長尾景虎にたより、全部自分の姓氏・官爵を景虎に讓つて終つた。景虎は、爲景の子である。長尾氏はこれから上杉氏を名乘り、因つて關東を管領することになつた。晴氏は和議を氏康に請ひ、其の伊勢氏が生んだ子の義氏を立て、自分は隱居をした。氏康はこの義氏を鎌倉に置いた。そして後に京都（將軍）に請うて左馬頭に任ぜられるやうにした。

【語釋】平井（上野）〇長尾景虎（上杉謙信のこと。）〇姓氏（上杉氏。）〇官號（管領）

廿二年五月、三好實休弑其君持隆、奪其妻。實休、卽之虎也。義輝苦三好氏專恣、召還晴元。晴元糾合舊臣、入禁。三好氏第宅、長慶聞之大怒。八月、長慶率兵二萬、入京師、將攻義輝堀川第。義輝・晴元復奔近江、長慶移軍攻丹波、陷諸城、又攻播磨、弘治元年、播磨皆降。三年、帝崩、太子立。是爲正親町天皇。

【讀下】二十二年五月、三好實休、其の君持隆を弑して、其の妻を奪ふ。實休は、卽ち之虎なり。義輝、三好氏

の專恣に苦しみ、晴元を召還す。晴元、舊臣を糾合し、入つて三好氏の第宅を焚く。長慶、之を聞いて、大に怒る。八月、長慶、兵二萬を率ゐて、京師に入り、將に義輝を堀川の第に攻めんとす。義輝、晴元、復近江に奔る。長慶、軍を移して丹波を攻め、諸城を陷れ、又播磨を攻む。弘治元年、播磨皆降る。三年、帝崩じ、太子立つ。是を正親町天皇と爲す。

【通釋】二十二年五月、三好實休は、其の君細川持隆を弑して、その妻を奪つた。實休とは卽ち之虎（長慶の弟）のことである。將軍義輝は、三好氏の氣儘勝手なのに閉口して晴元を呼び戻した。晴元は舊臣を呼び集めて、京都に入り、三好氏の邸宅を燒き拂つた。長慶は（阿波にゐた）之を聞いて非常に怒つた。八月、長慶は兵二萬を率ゐて京都に入り、義輝を堀川の邸に攻めようとした。そこで義輝・晴元はまた近江に出奔した。長慶は軍勢を移して丹波を攻めて諸々の城を陷れ、又播磨をも攻めた。弘治元年、播磨は全部降參した。三年後奈良天皇は崩御せられ、皇太子が位につかれた。是が正親町天皇と申し上る。

永祿元年五月、義輝・晴元陣坂下、出兵北白川、與長慶兵戰。將士死者百餘人。六角義賢來援。復講和。十一月、義輝歸京師。長慶入謁。因晴元于芥川城。踰歲卒。氏綱在淀城。後五歲卒。當是時、細川・上杉二家俱瀕衰亡。而三好氏・長尾氏代之、並興。三年、長尾景虎來京師。三好長慶導謁義輝。義輝班景虎于長慶之上。景虎密啓義輝曰、「長慶輕蔑將軍。臣請擊殺之、以除將軍患也。」義輝危而不許。四年三月、長慶饗義輝

于其ノ子義長ノ新第ニ。松永久秀董ス其ノ事ヲ。

【訓讀】永祿元年五月、義輝・晴元、坂本に陣し、兵を北白川に出し、長慶の兵と戰ふ。將士の死する者百餘人。六角義賢來り援く。復和を講ず。十一月、義輝、京師に歸る。長慶、入謁す。晴元を芥川城に囚ふ。歲を踰えて卒す。氏綱、淀城に在り。後五歲、卒す。是の時に當り、細川・上杉の二家、倶に衰亡に瀕す。而して三好氏、長尾氏、之に代つて、並び興る。三年、長尾景虎、京師に來る。三好長慶、導いて義輝に謁せしむ。義輝、景虎を長慶の上に班す。景虎、密に義輝に啓して曰く、「長慶、將軍を輕蔑す。臣請ふ、之を撃殺し、以て將軍の患を除かん」と。義輝危ふんで許さず。四年三月、長慶、義輝を其の子義長の新第に饗す。松永久秀、其の事を董す。

【通譯】永祿元年五月、義輝・晴元は坂下に陣取り、北白川に兵を繰り出し、長慶の兵と戰つた。將軍方の將士で討死したものが百餘人もあつた。六角義賢が援けに來た。そこでまた和睦を結ぶことゝなつた。十一月、義輝は京都に歸つた。長慶は入つてお目通りした。晴元を芥川城に幽囚した。併し勝元はその歲を越すと死んで終つた。氏綱は淀城に居た。これは後五年目に死んだ。この當時、細川・上杉の二家は共に衰亡に近づいてゐた。それに代つて三好氏、長尾氏が肩を並べて興つた。三年、長尾景虎は京都に來た。三好長慶が案內して義輝にお目にかゝらせた。義輝は景虎を長慶の上座に坐らせた。景虎はひそかに義輝に申して曰ふには「長慶は將軍を輕蔑してゐます。私はどうか、之を撃ち殺して將軍の御心配を取り除きたいもので御座います」と。義輝は、あぶなく思つて、許さなかつた。四年三月、長慶は、義輝を招いて其の子義長の新屋敷で饗應した。松永久秀が饗應係になつて其の事を取り計らつた。

【語釋】永祿（正親町天皇の年號）○北白川（京都の北）○芥川（攝津）

五年三月、三好實休與畠山高政戰于久米田、敗死。高政、政國子也。初高政助長慶、有功。已而與六角義賢、謀滅三好氏、連年構兵。及獲實休、兵益振。長慶使子義長・弟冬康・叔父康長・政康、與松永久秀等、攻高政、取高屋城。時長慶老病、恍惚不知人。委政於久秀。久秀忌義長才望、陰計除之。六年八月、久秀遂毒殺義長、以十河一存子義繼、代爲長慶嫡嗣。七年五月、又讒冬康於長慶。長慶召冬康於飯盛城、殺之。

【訓讀】五年三月、三好實休、畠山高政と久米田に戰つて、敗死す。高政は、政國の子なり。初め高政、長慶を助けて功有り。已にして六角義賢と、三好氏を滅さんと謀り、連年、兵を構ふ。實休を獲るに及び、兵益〻振ふ。長慶、子義長・弟冬康・叔父康長・政康をして、松永久秀等と、高政を攻めしめて、高屋城を取る。時に長慶老いて病み、恍惚として人を知らず。政を久秀に委ぬ。久秀、義長の才望を忌み、陰に之を除かんと計る。六年八月、久秀、遂に義長を芥川に毒殺し、十河一存の子義繼を以て、代つて長慶の嫡嗣と爲す。七年五月、又冬康を長慶に讒す。長慶、冬康を飯盛城より召して、之を殺す。

【通釋】五年三月、三好實休は畠山高政と久米田といふ所で戰つて敗れて死んだ。高政は政國の子である。初め

高政は長慶を助けて、手柄を立てたことがあつた。其の內に六角義賢と共同して三好氏を滅ぼさうと謀り、每年引きつゞき戰爭してゐた。こん度實休を討ち取つたので、其の兵は益〻振ひ盛となつた。長慶は子の義長、弟の冬康・叔父の康長・政康をして家臣松永久秀等と一緒に高政を攻めしめ、高屋城を乘り取つた。時に長慶は老耄でぼんやりして人を見ても見わけがつかない位であつた。政治は一切久秀に委かしてゐた。久秀は義長の才智名望を忌み、內々之を除かうと計つてゐた。六年八月、久秀は遂に義長を芥川で毒殺し、十河一存の子義繼をば代つて長慶の跡目とした。七年五月、久秀は、又冬康を長慶に讒言した。長慶は冬康を飯盛城から召し寄せて、之を殺した。

七月、長慶死。政康・康長、及岩成左通、稱三好三黨。久秀與之謀、秘喪、又謀廢義輝立義榮。義榮冀望將軍、數示意於長慶。長慶弗肯。是年冬、義輝修二條武衞第、課畿內、特税攝津戶金貳分。物情囂然。義榮乃以其情告三黨。三黨與久秀議而肯之。八年四月、義輝已徙新第。門扉未成。三黨相謂曰、「時不可失也。」五月、三黨與久秀及其子久通等、率千餘人、人佩一竹枝爲號、宣言詣淸水寺、以入京師。又謀紓其備而逼之也、僞奉訴狀、因幕府近臣進士晴舍、納之義輝。義輝母慶壽謂義輝曰、「劫而訴者、師直・宗全故事爾。今亦當且聽其請、以計無事。」晴舍往復再三。而賊已傳幕府、自四面

閑而入一府中大驚。宿直者、一色秋成・上野輝清・高師宣・彦部晴直・細川隆是・武田信景・杉原晴盛等三十餘人、聯鋒突出、肉薄與賊闘、斬數十人。晴舍曰「悔爲賊誑、使君疑我」乃自刃而死。

訓讀　七月、長慶死す。政康・康長、及び岩成左通を三好の三黨と稱す。久秀、之と謀つて喪を秘し、又義輝を廢し、義榮を立てんと謀る。義榮、將軍を冀望し、數〻意を長慶に示す。長慶肯んぜず。是の年冬、義輝、二條武衞の第を修め、畿内に課し、特に攝津の戸ごとに金貳分を稅す。物情囂然たり。義榮乃ち其の情を以て三黨に告ぐ。三黨、久秀と議して之を肯ふ。八年四月、義輝已に新第に徙り、門扉未だ成らず。三黨相謂つて曰く、「時失ふ可からず」と。五月、三黨、久秀及び其の子久通等と千餘人を率ゐ、人ごとに一竹枝を佩びて號と爲し、清水寺に詣づと宣言し、以て京師に入る。又其の備を紓めしめて之に逼らんと謀り、佯つて訴狀を奉じ、幕府の近臣進士晴舍に因つて、之を義輝に納る。義輝の母慶壽、義輝に謂つて曰く、「劫して訴ふるは師直・宗全の故事のみ。今亦當に且く其の請を聽して、以て無事を計るべし」と。晴舍、往復再三す。而して賊已に幕府に傳り四面より閑して入る。一府中、大に驚く。宿直の者、一色秋成・上野輝清・高師宣・彦部晴直、細川隆是、武田信景、杉原晴盛等三十餘人、鋒を聯ねて突出し、肉薄して賊と闘ひ、數十人を斬る。晴舍曰く、「悔ゆらくは賊に誑され、君をして我を疑はしむ」と。乃ち自刃して死す。

通釋　七月、長慶は死んだ。當時、政康・康長及び岩成左通を三好家の三人衆といつてゐた。久秀はこの三人

衆と相談して、長慶の死を隠匿し、又義輝を廢して、義榮を立てようと計畫した。義榮は將軍になりたがり、度々その心持を長慶に打ち明けた。併し長慶は承知しなかつた。この年の冬、義輝は、二條の斯波氏の邸宅を修繕し金が要るので畿内に税を課し、特に攝津では家毎に金貳分の課税をした。世間では物議をかもして騷ぎ立てた。そこで義榮は此の機をはづさず其の將軍になり度い心を三人衆に告げた。三人衆は久秀と相談して之を承知した。八年四月、義輝は新しい邸宅に移つたことは移つたが、門の扉がまだ出來上つてゐなかつた。三人衆は互に謂つて曰ふには、「この時機を失つてはならぬ」と。五月、三人衆は久秀及び其の子の久通等と共に千餘人を引きつれ、人ごとに銘々一本の竹の枝をさして目標となし、清水寺に參詣するのだと曰ひふらして京都に入り込んだ。又幕府の警備をゆるめさせて置いて、之に迫らうといふ計畫で、わざと訴訟の書面を持參して、幕府の近臣進士晴舍に頼み、之を義輝に差出した。義輝の母の慶壽は義輝に謂つて曰ふのに「兵力を用ひておどしつけて訴へる遣り方は、師直や宗全が以前やり居つた手です。今の場合もやはり、一先づ其の願ひを許してやつて事の起らぬやうにしたら宜いでせう」と。晴舍が取り次いで、往つたり來たり二三度した。その内に早や賊は幕府に押し迫り、四方から喊の聲をあげて攻め込んだ。幕府の中の者どもは皆大に驚いた。宿直してゐた一色秋成・上野輝清、高師宣・彦部晴直・細川隆是・武田信景・杉原晴盛等三十餘人の者は切先き揃へて突き出で、敵に近づき迫つて闘ひ、數十人を斬り殺した。進士晴舍が曰ふのに「賊に欺まされて、主君が私を疑はれるやうな破目になつたのは誠に殘念である」と。そこで進士は自殺して死んだ。

〔語釋〕師直宗全故事（師直が足利直義を尊氏に讒へ、宗全が伊勢貞親を義政に讒へた前例。）

當是時、府兵在京師者、聞變聚于三樹里。或曰「速救之。」或曰「衆寡不敵、救毋益也」治部藤通共弟福阿彌、與沼田某奮曰「吾有死而已。」提槍馳至府門、呼曰「吾欲與將軍共死。願使得入。」賊不許。乃佩竹枝、混賊而入。則義輝方會衆訣飮。憫三人者、欲使脫去、曰「汝出招不來者。」三人者辭曰「命之他人。」義輝爲絶命辭、書之姬人衣袖。曰「足利氏運命窮於此矣。」出傳家寶刀十餘口、更取出鬪。刀皆缺折。因發庫、盡散其珍寶于庭。賊爭攫之。義輝與三十餘人、從而蹂躪之、殺傷過當。而我兵終皆死之。義輝猶奮戰。賊不敢逼。賊池田某、自扉陰跳出、刈義輝足踣之。賊堆集、仆障於其上、攢槍弑之。遂殺其姬。脫夫人近衞氏。慶壽大慟曰「將軍死矣。老婦何生爲。」縱火自燒殺。池田傷目于障、後終盲爲癈人、行乞于市。京師人指以爲弑逆之報也。

【訓讀】是の時に當り、府兵、京師に在る者、變を聞いて、三樹里に聚る。或は曰く、「速に之を救はん」と。或は曰く、「衆寡、敵せず、救ふも益なきなり」と。治部藤通、其の弟福阿彌は沼田某と、奮つて曰く、「吾れ死有るのみ」と。槍を提げて馳せて府門に至り、呼んで曰く、「吾れ將軍と共に死せんと欲す。願はくは入るを得しめよ」と。賊許さず。乃ち竹枝を佩び、賊に混じて入る。則ち義輝、方に衆を會して訣飮す。三人の者を憫んで

脱去せしめんと欲し、曰く、「汝出でゝ來らざる者を招け」と。三人の者辭して曰く、「之を他人に命ぜよ」と。義輝、絕命の辭を爲り、之を姫人の衣袖に書す。曰く、「足利氏の運命、此に窮る」と。傳家の寶刀十餘口を出し、更〻取り出でて鬪ふ。刀皆缺折す。因つて庫を發き、盡く其の珍寶を庭に散す。賊爭つて之を攫む。義輝、三十餘人と、從つて之を蹂躪し、殺傷過當なり。而して我が兵、終に皆之に死す。義輝、猶ほ奮戰す。賊敢て逼らず。賊池田某、扉陰より跳り出でゝ、義輝の足を刈つて之を踣す。賊、堆集し、障を其の上に仆し、槍を攢めて之を弑す。遂に其の姫を殺し、夫人近衞氏を脫す。慶壽、大に慟して曰く、「將軍死せり。老婦何ぞ生くるを爲さん」と。火を縱つて自ら燒殺す。池田、目を障に傷き、後終に盲して癈人と爲り、行くゆく市に乞ふ。京師の人、指して以て弑逆の報と爲す。

通釋 この時、幕府の兵で京都にゐた者どもは騷動を聞きつけて三木木に聚つて來た。或る者は早く行つて救はうではないかと曰つた。或る者は人數が違つてゐて、味方は寡く敵は大勢だから救つても駄目だと曰つた。治部藤通、その弟の輔阿彌の兩人は沼田某と共に奮つて曰ふのに「自分等は討死するより外にないのだ」と。槍を提げて幕府の門まで來て、大聲で叫んで曰ふのに「吾等は將軍と一緖に死に度いのだ。どうか中へ入れて貰ひ度いものだ」と。賊は許さなかつた。そこで竹の枝をさして賊の中にまじつて門內に入り込んだ。義輝は丁度多勢の者を集めて最後の別れの酒宴をしてゐた。義輝はこの三人をあはれんで逃がしてやらうと思つていふには「お前達は外に出て此處へ集つて來ないものを招んで來て吳れ」と。三人は斷つて曰ふには「それは他の人に命じて下さい」と。義輝は辭世の歌を作りそれを愛する妾の袖に書きつけた。そして曰ふには「足利氏の運命も此れでお終ひだ」と。家に傳へた寶刀十餘口を出し、かはる〲取り換へて戰つた。刀の刄が皆こぼれたり折れたりし

た。そこで庫をあけて皆その珍らしい寶物を庭にまき散らした。賊は爭つて、之をつかみ取らうとした。義輝は三十餘人の者と、そこをつけ込んで踏みにじり、敵を殺したり、傷つけたことは相當の數以上であつた。そして味方の兵はとう／＼皆討死して終つた。義輝はそれでもまだ奮戰した。賊は義輝に近づかうとしなかつた。賊の池田某なる者が扉の陰から跳り出て、義輝の足を横に切つて之を倒した。賊はかさなり集り、障子を義輝の上に倒し槍先きを集めて蜂の巣のやうに突き刺し、之を弑した。遂に義輝の愛する妾をも殺し、夫人近衞氏だけは逃がしてやつた。義輝の母の慶壽は非常に嘆き、あられもなく泣いて曰ふには「將軍は死んで終ひました。この上年とつた妾がどうして生きてゐられませう」と。火をつけて自ら燒け死んだ。池田は義輝を弑した時、障子で目を怪我をし、後にとう／＼盲人となり、片輪者となつて町を乞食して歩いた。京都の人は指して、將軍を弑した罰が當つたのだといつてゐた。

語釋 治部藤通（細川治部藤通のこと。）○佩竹枝（目じるしにする爲めに竹枝を身に佩んだのである。）○不來者（三樹里にゐる兵。）○絶命辭（五月雨は露か涙かほとゝぎすわが名をあげよ雲の上まで。）○姬人（小侍從。）○刈（横ざまに切ること。）

於是、三黨擁義繼據高屋城、以迎義榮。六月、義榮發阿波、至攝津。十二月、入普門寺城。敍爵任官。三黨專功有得色。義繼惡之。十年三月、義繼逃歸於久秀。久秀據多門城、與畠山高政、合兵攻康長。康長陣東大寺。十月、久秀焚而走之。義輝薨年三十、官至參議從四位下。

【訓讀】是に於て、三黨、義繼を擁し、高屋城に據り、以て義榮を迎ふ。六月、義榮、阿波を發し、攝津に至り、十二月、普門寺城に入る。爵を敍し官に任ぜらる。三黨、功を專にして得色あり。義繼、之を惡む。十年三月、義繼逃れて、久秀に歸す。久秀、多門城に據り、畠山高政と兵を合せて、康長を攻む。康長、東大寺に陣す。十月久秀、焚いて之を走らす。義輝、薨ずるとき、年三十、官は參議從四位下に至る。

【通釋】そこで三人衆は義繼を護り高屋城に立て籠り、義榮を迎へた。六月、義榮は阿波を出發し、攝津に至り、十二月、普門城に入り込んだ。義榮は從五位下に敍せられ、左馬頭に任ぜられた。三人衆は手柄を獨専して得意の顏色があつた。義繼は之を惡んだ。十年三月、義繼は逃げて久秀の處に行つた。久秀は多門城に立て籠り、畠山高政と連合して康長を攻めてゐた。康長は奈良の東大寺に陣取つてゐた。十月、久秀は燒き討をやつて康長を走らせた。義輝の薨じた時は年三十で、官は參議、從四位下に昇つてゐた。

【語釋】普門寺城（攝津）〇多門城（大和）

初義輝有二弟一、曰覺慶、爲南都一乘院主。曰周暠、習禪于鹿苑寺。義輝之被弑也、賊使平田某詐誘周暠曰、公來、將奉以爲將軍也。周暠信之、往渡夷川、平田自後斫殺周暠。從人四散、獨小四郎者甫十六、拔刀與平田鬪而斬之。賊又遣兵守覺慶、斥其從者。獨細川藤孝給仕焉。藤孝故賴之弟賴有九世胤也。父曰元常。養大和守三

淵宗薫子。是爲藤孝。或傳、藤孝義澄遺腹子、爲宗薫所育者也。長多材能。覺慶與之密謀、乃以其策、佯稱疾徵醫。藤孝進醫米田宗賢。宗賢宿直數日。託覺慶疾瘳、夜賜酒於守兵。守兵皆醉臥。宗賢乃扶覺慶奔近江。遇險、輒負覺慶而過。頃焉、藤孝又至。徑甲賀山、至矢島、館于和田秀盛家。賊守者既覺、四追之。不度其冒險、以故不能獲也。上野清信・和田惟政等十餘人聞覺慶在矢島、來從之。覺慶養髮更名義昭。

〔訓讀〕初め義輝、二弟あり。曰く、覺慶、南部一乘院の主と爲る。曰く、周暠、禪を鹿苑寺に習ふ。義輝の弑せらるゝや、賊、平田某をして、詐つて周暠を誘はしめて曰く、「公來れ。將に奉じて以て將軍と爲さんとす」と。周暠、之を信じ、往いて夷川を渡るとき、平田、後より周暠を斫殺す。從人、四散し、獨り小四郎といふ者、甫めて十六、刀を拔いて平田と鬭つて之を斬る。賊、又兵を遣はして覺慶を守らしめ、其の從者を斥け、獨り細川藤孝を縱して給仕せしむ。藤孝は、故の賴之の弟賴有九世の胤なり。父を元常と曰ふ。大和守三淵宗薫の子を養ふ。是を藤孝と爲す。或は傳ふ、藤孝は義澄の遺腹の子にして、宗薫の育する所と爲れる者なりと。長じて材能多し。覺慶、之と密に謀り、乃ち其の策を以て佯つて疾と稱して、醫を徵す。藤孝、醫米田宗賢を進む。宗賢、宿直すること數日。覺慶の疾瘳ゆるに託して、夜、酒を守兵に賜ふ。守兵、皆醉臥す。宗賢乃ち覺慶を扶けて、近江に奔る。險に遇へば、輒ち覺慶を負ひて過ぐ。頃くにして、藤孝又至る。甲賀山を徑し、矢島に至り、和田秀盛の家に館す。賊の守る者既に覺り、四もに之を追ふ。其の險を冒すを度らず。故を以て獲る能はず。上野清

信、和田惟政等十餘人、覺慶・矢島に在りと聞き、來つて之に從ふ。覺慶・髮を養ひ、名を義昭と更む。

【通釋】初め義輝に二人の弟があつた。一人は覺慶といひ奈良の一乘院の住持となつてゐた。一人は周暠といつて、これは禪を鹿苑寺に習つてゐた。義輝が弑せられた時、賊は、平田某に言ひつけて、欺して周暠をおびき出させて曰ふには「貴公、御出で下さい。奉戴して將軍と致しませう」と。周暠は之を信じ、出かけて、東川を渡るとき、平田は後から周暠を斬り殺した。周暠のお供の者は逃げ散つたが、たゞ小四郎といふ、やつと十六になつたばかりの者が、刀を拔いて平田と鬪ひ平田を斬り殺した。又賊は兵を遣つて覺慶を見張りさせ、その供の者を退け、たゞ細川藤孝だけを許して、給仕をさせた。この藤孝は故の賴之の弟賴有の九代の孫である。父は元常といつた。元常は大和守三淵宗薰の子を養子にした。これが藤孝である。或は傳へていふに、藤孝は將軍義澄の忘れ形見で、宗薰に養はれた者だと。藤孝は成長して材能が多かつた。覺慶は藤孝と內々相談して、その謀を用ひ、僞つて病氣だと言ひ、醫者を呼ばせた。藤孝は米田宗賢といふ醫者を進めた。宗賢は看病のため宿直することと數日。覺慶の病氣が癒つたといふことにかこつけ、夜、酒を番兵に下し與へた。番兵等は皆醉ひつぶれて橫になつて終つた。そこで宗賢は覺慶をたすけて近江に逃げた。險阻な處へ來ると、いつも覺慶を負ぶつて通つた。暫らくすると藤孝も又やつて來た。三人は甲賀山を通つて矢島に至り、和田秀盛の家に宿つた。賊の番兵は氣が附いた時はもう遲くて、四方へ手配りして追つかけた。まさか甲賀山の險を越さうとは思はなかつた。だから捕へることは出來なかつた。上野清信・和田惟政等十餘人は覺慶が矢島に居ると聞いたので皆行つて之に從つた。覺慶は髮を延ばし、名を義昭と改めた。

【語釋】鹿苑寺（今の金閣寺。）○平田某（和泉）○矢島（近江）

明年、使藤孝就六角義賢議事。義賢與其子義弼不善、國內騷擾。以故辭不奉命。已而久秀等、聞義昭在近江、使義弼圖義昭。義昭覺之、乃與藤孝等十餘人、夜航湖走若狹、依武田義統。義統義昭妹壻也。以國小辭。乃赴越前、依朝倉義景。義景奉之于敦賀。敦賀有寇。又徙一乘谷。義昭知義景不足託大事、訪察近國諸將、欲得一人焉。莫若織田信長者。先是、美濃士岐氏、爲家臣藤齋某所簒。織田信長、以尾張兵克今川氏、幷參河・遠江、終誅殺齋藤、幷美濃、威名四聞。十一年六月、義昭潛遣藤孝・淸信、就信長諭意。信長大喜、迎義昭。

【訓讀】明年、藤孝をして、六角義賢に就いて事を議せしむ。義賢、其の子義弼と善からずして、國內騷擾す。故を以て辭して命を奉ぜず。已にして久秀等、義昭、近江に在りと聞き、義弼をして義昭を圖らしむ。義昭、之を覺り、乃ち藤孝等十餘人と、夜、湖に航して若狹に走り、武田義統に依る。義統は、義昭の妹壻なり。國小なるを以て辭す。乃ち越前に赴き、朝倉義景に依る。義景、之を敦賀に奉ず。敦賀に寇あり。又一乘谷に徙す。義昭、義景の大事を託するに足らざるを知り、近國の諸將を訪察して、一人を得んと欲す。織田信長に若く者なし。是より先き、美濃の土岐氏、家臣齋藤某の簒ふ所と爲る。織田信長、尾張の兵を以て今川氏に克ち、參河、遠江を幷せ、終に齋藤を誅殺して、美濃を合せ、威名、四もに聞ゆ。十一年六月、義昭、潛に藤孝、淸信を遣は

して、信長に就いて意を諭さしむ。信長、大に喜んで、義昭を迎ふ。

【通釋】翌年、義昭は藤孝を六角義賢の所へやつて、萬事相談させた。所が義賢は其の子義弼と仲が惡かつたので國內が騷がしかつた。そんな譯で義賢は辭退して、義昭の命を受けなかつた。その內に久秀等が、義昭が近江に居ると聞いたので、義弼をやつて義昭を殺させようとした。義昭は之を覺つたので、藤孝等十餘人と夜琵琶湖を渡つて若狹に逃げ、武田義統にたよつた。この義統は義昭の妹婿である。所が餘り國が小さいので、不安だから其處を辭去した。こんどは越前に往つて朝倉義景にたよつた。義景は義昭等を敦賀につれて行つた。丁度その時敦賀に寇があつた。危險だから又之を一乘谷（本城）に移した。義昭は義景といふ男では迚も大事を賴むに足らないと分つたので、近くの國の諸將を訪ね調べて、誰か助けになる者を一人得たいと思つた。それは織田信長に及ぶ者はなかつた。これより先き、美濃の土岐氏は家臣の齋藤某の爲めに國を奪はれた。織田信長は尾張の兵をつれて、今川氏に勝ち、參河・遠江を併呑して終に齋藤を誅し、美濃をも合せ取り、その強い名前が四方に聞えてゐた。十一年六月、義昭は潛に藤孝・清信の兩人を信長の所へ遣つて意中を傳へて諭させた。信長は非常に喜んで、義昭を迎へた。

【語釋】一乘谷（越前）　〇齋藤某（秀龍）

義昭乃發越前。義景固請止之。不肯。七月、至美濃入岐阜城、與信長議西上、使使諭六角義賢。義賢弗聽。八月、義昭與信長將兵、攻義賢走之、終入京師。九月、攻攝津・河

内義榮已患癰薨。義榮官、至左馬頭。當是時、三黨或奔或降。義繼・久秀爭媚事信長。信長分畿内地予之。藤孝・惟政等皆拜邑。十月、詔以義昭爲征夷大將軍。義昭褒信長成功、賜重畫徽號、呼曰父。用尊氏遇赤松則村故事也。義昭以京師兵燹、假居細川氏綱舊宅、遂徙本國寺。十二年正月、三黨伺信長不在京師、乃聚萬餘人、圍本國寺。野村越中等善拒。攝津・河内諸將入援。伊丹親興擊賊、破走之。義昭乃徙居二條城。元龜元年、義昭與信長合兵、擊三好餘黨于攝津、不利。六角・朝倉・淺井氏竝起、襲信長于大津。義昭下敎和解之。三年六月、游佐長敎弑其君畠山昭高。昭高、高政弟、長敎所立也。織田氏討長敎誅之。三好義繼・松永久秀、後皆爲信長所誅。

【訓讀】義昭乃ち越前を發す。義景固く請うて之を止む。肯んぜず。七月、美濃に至り、岐阜城に入り、信長と西上を議し、使をして六角義賢を諭さしむ。義賢聽かず。八月、義昭・信長と、兵に將として、義賢を攻めて之を走らせ、終に京師に入る。九月、攝津・河内を攻む。義榮、已に癰を患つて薨ず。義榮、官、左馬頭に至る。是の時に當り、三黨、或は奔り、或は降る。義繼、久秀爭つて信長に媚事す。信長畿内の地を分つて、之に予ふ。藤孝・惟政等、皆邑を拜す。十月、詔して、義昭を以て征夷大將軍と爲す。義昭、信長の成功を褒し、重畫の

徽章を賜ひ、呼んで父と曰ふ。尊氏の赤松則村を遇せし故事を用ふるなり。義昭、京師の兵燹を以て、假に細川氏綱の舊宅に居り、遂に本國寺に徙る。十二年正月、三黨、信長の京師に在らざるを伺ひ、乃ち萬餘人を聚めて、本國寺を圍む。野村越中等善く拒ぐ。攝津・河內の諸將入り援く。伊丹親興、賊を擊ち破つて之を走らす。義昭乃ち二條城に徙り居る。元龜元年、義昭、信長と兵を合せて、三好の餘黨を攝津に擊ち、利あらず。六角・朝倉・淺井氏並び起つて、信長を大津に遮す。義昭、敎を下して之を和解す。三年六月、遊佐長敎、其の君畠山昭高を弑す。昭高は高政の弟にして、長敎の立つる所なり。織田氏、長敎を討つて、之を誅す。三好義繼・松永久秀、後皆信長の誅する所と爲る。

【通釋】そこで義昭は越前を出發した。義景は固く止るやうに請うた。義昭は承知しなかつた。七月、義昭は美濃に至り、岐阜城に入り、信長と京都へ上ることについて相談し、使をやつて六角義賢を諭さしめた。義賢は承知しなかつた。八月、義昭は信長と共に兵に將として義賢を攻めて之を走らせ、終に京都に入つた。九月、攝津河內を攻めた。義榮はもうその時には腫物に罹つて死んで終つてゐた。義榮は官、左馬頭に進んでゐた。この時三人衆は或は逃げ或は降參した。義繼・久秀は競爭で信長の御機嫌を取つた。信長は畿內の地を分けて彼等に與へた。藤孝・惟政等も皆土地を貰つた。十月、詔して義昭を征夷大將軍とした。義昭は信長の成功を褒めて足利の定紋二つ引の紋所を賜ひ、信長を呼んで父といつた。これは尊氏が赤松則村を待遇した前例によつたのである。義昭は京都が戰亂で火事に罹つたので、一時細川氏綱の舊宅に居り、遂に本國寺に移つた。十二年正月、三人衆は信長が京都に居ないのをねらつて、そこで萬餘人を聚め、本國寺を取り圍んだ。野村越中等は善く拒いだ。攝津・河內の諸將が京都に來て義昭を援けた。伊丹親興は賊を擊ち破つて之を走らせた。そこで義昭は二條城に移

つた。元龜元年義昭は信長と兵を合併して三好の殘黨を攝津に擊ち、うまく行かなかつた。六角・朝倉・淺井の諸氏は一時に起つて信長を大津に攻めつめた。義昭は命令を下して之を和解させた。三年六月、游佐長教は其の君畠山昭高を弑した。昭高は高政の弟で長教が立てた者である。織田氏は長教を討ち、之を誅した。三好義繼・松永久秀も後に皆信長のために誅せられた。

語釋 二條城（この時信長が新築した。）○元龜（正親町天皇の年號。）

信長大樹恩威、故擧義昭短、以示上下。義昭憤懣、欲除信長。引上杉景虎、及關東諸將以自援。天正元年二月、寨于石山・堅田、起兵討信長、爲信長所攻破、佯和而罷。七月、義昭令三淵某、及廷臣二人守二條、而自據宇治槇島。信長將兵來攻。細川藤孝迎降之。信長攻下二條。三淵死之。三淵、藤孝弟也。信長遂攻破槇島、使其將羽柴秀吉徙義昭于河内若江。織田氏於是遂代足利氏。

通釋 信長、大に恩威を樹て、故に義昭の短を擧げ、以て上下に示す。義昭、憤懣し、信長を除かんと欲す。上杉景虎、及び關東の諸將を引き、以て自ら援く。天正元年二月、石山・堅田に寨し、兵を起して信長を討ち、信長の攻破する所と爲る。佯り和して罷む。七月、義昭、三淵某、及び廷臣二人をして、二條を守らしめ、而して自ら宇治の槇島に據る。信長、兵に將として來り攻む。細川藤孝迎へて之に降る。信長、二條を攻め下す。三

淵、之に死す。三淵は、藤孝の弟なり。信長遂に槇島を攻破し、其の將羽柴秀吉をして、義昭を河内の若江に徙さしむ。織田氏、是に於て、遂に足利氏に代る。

【通釋】信長は大に恩義を施し、威光を示し、故意に義昭の缺點を擧げて、上下の者に發表した。義昭は憤り不平で信長を除かうと思つた。そこで義昭は上杉景虎や關東の諸將を引き込んで、自分の援けとした。天正元年二月、石山・堅田に壘を築き、兵を起して、信長を討ち、却て信長の爲めに攻め破られた。そこで作つて和睦を結んで戰爭を罷めた。七月、義昭は、三淵某及び朝廷の臣二人をして、二條城を守らせ、そして自分は宇治の槇島に立て籠つた。信長は兵に將となり、來り攻めた。細川藤孝は迎へて之に降參した。信長は二條城を攻め下した。三淵は此の時討死した。三淵は藤孝の弟である。信長は遂に槇島を攻め破り、其の將羽柴秀吉をして義昭を河内の若江に移させた。こんな譯で織田氏は遂に足利氏に代つて天下を治めることになつた。

【語釋】天正（正親町天皇の年號。）○石山・堅田（近江）○廷臣二人（參議藤原永相、右中弁藤原輝資。）○槇島（山城）

義昭後流寓和泉・紀伊・播磨、終依毛利氏、居鞆津。信長遣秀吉、攻毛利氏、自將繼之。途爲其下所弑、而羽柴氏遂代織田氏。十三年、秀吉自冀爲征夷大將軍。故事、征夷大將軍、非源氏不可拜。秀吉因是、欲冒足利氏、請義昭曰、「公養吾爲子、吾封公以大國、安富尊榮以終其身也。如何。」義昭賤之。斥而不許。曰、「吾雖命窮矣、猶八幡公・等持

公之苗胤也。計二安逸一而汙二祖先一、吾則恥レ之。」秀吉不レ能レ强焉。十六年義昭削レ髮。慶長二年八月、義昭薨。官至二權大納言從三位一。及レ此、詔贈二准三宮一。義氏亦卒二于關東一。卒而無後者九歲。

訓譯 義昭、後、和泉、紀伊、播磨に流寓し、終に毛利氏に依り、鞆津に居る。信長、秀吉を遣はして、毛利氏を攻めしめ、自ら將として之に繼ぐ。途に其の下の弑する所と爲り、而して羽柴氏遂に織田氏に代る。十三年秀吉自ら征夷大將軍と爲らんと冀ふ。故事に、征夷大將軍は源氏に非ずんば拜すべからず。秀吉、是に因って足利氏を冒さんと欲し、義昭に請うて曰く、「公吾を養つて子と爲さば、吾れ公を封ずるに大國を以てし、安富尊榮以て其の身を終へしめん。如何」と。義昭之を疑しみ、斥けて許さず。曰く、「吾れ命窮ると雖も、猶ほ八幡公・等持公の苗胤なり。安逸を計つて祖先を汙すは、吾れ則ち之を恥づ」と。秀吉强ふる能はず。十六年、義昭髮を削る。慶長二年八月、義昭薨ず。官、權大納言從三位に至る。此に及んで、詔して准三宮を贈らる。義氏も亦關東に卒す。卒して後なきこと九歲。

通釋 義昭は、その後、和泉・紀伊・播磨をさまよひ歩いたが、遂に毛利氏にたより鞆津に居た。信長は秀吉を遣はし・毛利氏を攻めさせ、自分も大將となつてその後を繼いだ。所がその途中、京都でその家來の明智光秀のために弑せられたので、羽柴氏が遂に織田氏に代つた。十三年、秀吉は、自ら征夷大將軍になりたいと願つた。前例では征夷大將軍は源氏の人でなければ任命することは出來なかつた。それがために秀吉は足利氏を名乘らう

と思ひ、義昭に頼んで曰ふのに「貴公が私を養子にして下さらば、私は貴公を大國の領主にして、安樂に家富み位高く、子孫繁榮して一生送るやうにして差し上げませう。如何ですか」と。義昭は之を賤しんで謝絶して許さなかつた。曰ふのに「余は運命が窮まつた。けれどもこれでも八幡公(義家)や等持院(尊氏)の子孫である。自分の安逸を計つて、先祖を汚す(秀吉のやうな氏素性の分らぬ者を養子にすれば先祖を汚す)ことは耻かしく思ふ所である」と。秀吉も無理に頼むことも出來なかつた。十六年、義昭は髪を剃つた。慶長二年八月、義昭は死んだ。その官は權大納言、從三位まで昇つた。愈々亡くなつたので、詔して准三宮を贈られた。義氏も亦關東で死んだ。死んでから後、九年間、後繼者がなかつた。

語釋　慶長(後陽成天皇の年號)

羽柴氏東伐、求足利氏後、得基頼孫國朝、立爲義氏之後、居下野喜連川、給五千石。呼喜連川公方。義榮之後居阿波平島、呼平島公方。初義榮之父義維、爲義植所養、生義榮及義助。義助生義種。義種以後世賓于阿波。此兩家與細川・上杉二氏、皆存至今。其居平島者、世稱又太郎、仍尊氏故事也。居喜連川者、世任左兵衛督、仍直義・基氏故事也。而喜連川在足利氏故國、及徳川氏定天下、特以賓禮遇之。

通釋　羽柴氏東伐し、足利氏の後を求め、基頼の孫國朝を得、立てゝ義氏の後と爲し、下野の喜連川に居らし

めて、五千石を給す。喜連川公方と呼ぶ。義榮の後、阿波の平島に居る。平島公方と呼ぶ。初め義榮の父義維、義植の養ふ所と爲り、義榮及び義助を生む。義助、義種を生む。義種以後、世阿波に賓たり。此の兩家、細川、上杉二氏と、皆存して今に至る。其の平島に居る者、世又太郎と稱す。尊氏の故事に仍るなり。喜連川に居る者世左兵衞督に任ぜらる。直義、基氏の故事に仍るなり。而して喜連川は、足利氏の故國に在り。徳川氏天下を定むるに及んで、特に賓禮を以て之を遇す。

【通釋】羽柴氏は東方を征伐したとき、足利氏の子孫をさがし求め、基頼の孫國朝を得たので、立てゝ義氏の跡目として、下野の喜連川に居らせて五千石を支給した。喜連川公方と言つてゐた。義榮の子孫は阿波の平島にゐた。これを平島公方といつてゐた。初め義榮の父義維は、義植に養はれ、義榮及び義助を生んだ。義助は義種を生んだ。義種以後は代々阿波の蜂須賀の賓客となつて厄介になつてゐた。この兩家は、細川・上杉の二家と共に皆今日まで存して居る。この平島に居る者は代々又太郎といつた　これは尊氏の前例によつたのである。喜連川に居る者は代々左兵衞督に任ぜられた。これは直義・基氏の前例によつたのである。そして喜連川は足利氏の本國の下野に在る。だから徳川氏が天下を平定してからも、特に賓客として之を待遇した。

【餘論】本論には、足利時代の亂れたのは、濫賞の結果臣下の跋扈を來したからで、足利氏は元來名實共に併せ有しようとして、濫賞もしたのであるが、終に名實兩方とも失つて終つたといふことを敍べてあるのである。

外史氏曰、源氏者、攘二王土一以捜二王臣一者也。足利氏者、奪二王土一以役二王臣一者也。故論二足

利氏之罪、浮於源氏。而源氏再傳而亡、足利氏乃得延之十三世者、蓋源氏剪除宗族、孤立自斃。而足利氏封建子弟舊臣、足以相維持。故不遽滅焉耳。然其封建也、不知制本末輕重之勢。是以纔能僞定一時、而反者如蝟毛而起。至其中葉以後、天下禽奔獸遁、而不可復制也。

【訓讀】外史氏曰く、源氏は、王土を攘み、以て王臣を攘く者なり。足利氏は、王土を奪ひ、以て王臣を役する者なり。故に足利氏の罪を論ずれば、源氏に浮ぐ。而して源氏は再傳して亡び、足利氏は乃ち之を十三世に延くを得たるは、蓋し源氏は宗族を剪除し、孤立自ら斃る。而して足利氏は子弟舊臣を封建し、以て相維持するに足る。故に遽に滅びざるのみ。然れども其の封建するや、本末輕重の勢を制するを知らず。是を以て、纔に能く一時を僞定すれども、而も反者蝟毛の如くにして起る。其の中葉以後に至つては、天下禽奔獸遁し、而して復制すべからざるなり。

【大意】外史氏が曰ふのに、源頼朝は天子の土地を盗んで、皇室の臣、大江・三善等を手先に引き寄せた者である。足利氏は天子の土地を無理に奪ひ取つて、帝室の臣を我が臣同様にこき使つた者である。だから足利氏の罪を論ずれば、源氏以上に惡い所がある。しかるに源氏は頼家・實朝と傳へて亡んだのに、足利氏は却て十三世までも續いたのは、思ふに源氏は一族の者を除き絕やし、一本立ちとなつて自ら斃れたのである。而して足利氏は子弟や舊臣を諸侯に封じたから、家をつなぎ保つことが出來たのである。だから足利は急には亡びなかつたの

である。併し足利が諸侯を任じたやり方は非常に拙劣で、本（足利）を重くし、末（子弟舊臣）を輕くして、本末の勢を亂さぬやうにせねばならぬことに心づかなかつた。だからわづかに一時の間に合はせに、天下を平定することは出來たやうなものゝ、驟て謀叛人が蝟の毛のやうに群り起つて、足利氏に敵するやうになつた。かくてその中世義政の頃より後になつては、天下は亂れて、謀叛人は鳥や獸のやうに逃げ廻つて、どうにも制御せられぬやうになつて終つた。

語釋 摟（無理に引きつけて取ること。摟も摟も皆孟子の字面。）○十三世（尊氏・義詮・義滿・義持・義量・義敎・義勝・義政・義尙・義植・義澄・義晴・義輝・義昭の十四世であるが、義量は早世したので一代として數へないのである。）○封建（土地を與へて諸侯にすること。）○子弟（其氏を鎌倉に封じたやうなこと。）○僞定（表面のみを無理に定めること。）

夫源氏將士、其强驁桀黠、不減足利氏時也。而奔走馳驅、無一人彎弓東向者、何哉。無他。其力微弱易制、而進退易置之權、常在於我也。至於足利氏、與之以士地之饒、授之以人民之富。其勢足以爲亂。而又襲之子孫、牢不可拔。豈可莫以預防其變哉。然而漫然割與、動使一姓得踞三四州。甚者、居天下六分之一、而莫之能制。至於其封鎌倉、與室町如二君焉。遂致其子孫猜疑相圖、而終之鎌倉爲上杉氏所覆、室町爲細川氏所弱。皆所謂尾大不掉、末大必折者也。

【訓讀】夫れ源氏の將士、其の强鷙桀黠、足利氏の時に減ぜざるなり。而れども奔走馳驅、一人の弓を彎き東に向ふ者なきは何ぞや。他なし。其の力微弱にして制し易く、而して進退易置の權、常に我に在ればなり。足利氏に至つては、之に與ふるに土地の饒を以てし、之に授くるに人民の富を以てす。其の勢以て亂を爲すに足る。而して又之を子孫に襲がしめ、牢として拔くべからず。豈に以て預め其の變を防ぐ莫かるべけんや。然り而して渦然割與し、動もすれば一姓をして三四州に踞するを得しむ。甚しきは天下六分の一に居る。而して之を能く制するなし。其の鎌倉に封ずるに至つては、室町と二君の如し。遂に其の子孫猜疑相鬩るを致す。而して之を終るに、鎌倉は上杉氏の覆す所と爲り、室町は細川氏の弱むる所と爲る。皆所謂尾大掉はず、末大必ず折るる者なり。

【通釋】夫れ源氏の將士が惡る强く且惡かしこかつたことは、決して足利氏の將士以下ではなかつた。けれども源氏の將士は皆源氏の爲めに、かけ廻り骨を折り、一人として弓を引いて鎌倉の源家に對して謀叛をしなかつたのは何故であるか これは他に理由がある譯ではない。彼等將士は力が微弱で、容易に押さへ付けることが出來たからで、又人を任免したり置き易へたりする權力が、いつも源氏の手中に在つたからである。足利氏となると、その臣下に對して非常に豐かに土地を與へ、澤山に人民を授けてやつた。だから臣下の勢は、謀叛をするに十分であつたのである。加之、この勢力を子孫に相續させて、拔くことの出來ないやうに堅く固めて終つたのである。して見れば足利は前以て彼等が變亂をするのに對して備へなければならなかつたのである。それにも拘らず、足利氏は無頓着に考へもなく土地を割き與へ、ともすれば（細川・赤松等の如く）一家の者に三四ケ國に跨る土地を所有せしめた。甚しき者は山名氏のやうに天下の六分の一を所有せしめた。而も足利は之を制御することは出

來なかつた。基氏を鎌倉の管領にしたことに至つては、室町と竝んで、まるで二君のやうな形にしたのである。その爲めに兩家の子孫はとう〳〵猜み疑ひ、互に相傾けようと謀るやうになつた。そして、どゞの詰りは鎌倉は上杉氏の爲めに覆へされ、室町は細川氏の爲めに弱められて終つた。どちらも古への所謂尾が大き過ぎて掉ふことが出來ず、枝が大き過ぎると必ず折れるといつた言葉に相當してゐる。

語釋 饒（土地の十分なこと。）○富（人の多きこと。）○室町（京都の將軍家。）○猜疑相鬪（義教・持氏が互に鬪ぎ合つた類をさす。）○尾大不掉云々（左傳昭公十一年の字句。）

然其爲之者、有故焉。彼其計奪王家中興之業。故濫賞侈封、務充其欲、不復計其後。以苟取天下。天下已集矣、而不可裁抑。一有所問、裂眦而起、無足怪者。充彼之欲、以濟我之私。彼知我私、而以其功邀於我。我何以制之哉。蓋足利氏以土地人民餌天下之豪俊、而不能掣之。幷其餌而失之。亦可哀矣。故彼急於取天下、而爲苟且攫竊之計者、未有不貽禍於子孫者。足利氏宗族君臣、更相屠戮、十三世之久、而殆無寧日者、豈非由其簒奪之報也哉。後之爲人臣者、亦可以知懼矣。

訓讀 然れども其の之を爲すは、故あり。彼れ其の王家中興の業を奪はんことを計る。故に濫賞侈封、務めて其の欲に充て、復其の後を計らず。以て苟も天下を取れり。天下已に集れり。而して裁抑すべからず。一たび問

ふ所あれば、眦を裂いて起ちしは怪しむに足るものなし。彼の欲を充てて、以て我の私を濟す。彼れ我が私を知り、而して其の功を以て我に邀む。我れ何を以て之を制せんや。蓋し足利氏は、土地、人民を以て、天下の豪傑に餌し、而して之を擊する能はず。其の餌を幷せて之を失ふ。亦哀むべし。故に彼の天下を取るに急にして、而して苟且攫竊の計を爲す者は、未だ禍を子孫に貽さゞる者あらず。足利氏の宗族、君臣、更々相屠戮し、十三世の久しき、而も殆ど寧日なきは、豈に其の簒奪の報に由るに非ずや。後の人臣たるもの亦以て懼るるを知るべし。

【通釋】併し、足利氏がこんな事をしたのは、譯のあることである。彼れ足利氏は後醍醐天皇中興の事業を自分に奪つて終はうと計つた。だから無暗に賞を與へ、分不相應な土地を與へて將士の利慾の心を滿足させ、後々の事までも計らなかつたのである。だから一時は天下を取るには取つたのである。かくて天下は既に平定した。併しその將士等は中々強くて制御することは出來なかつた。一度でも何か彼等の落ち度を責問すると、彼等はすぐ眥を裂いて怒り、足利氏に對して事を舉げたが、それは決して不思議ではないことなのである。足利氏は將士等の慾心を充たして置いて、自分の慾を成就したのである。將士どもは足利氏の私心を知つて居て、自分等の手柄を以て恩賞を足利氏に求めたのである。足利氏たるもの、痛い所を握られてゐるのであるから、どうして、之を制御することが出來ようぞ。思ふに足利氏は土地と人民とを餌にして天下の豪傑を釣つたのであるが、併しこの魚を引き上げることが出來なかつたのである。絲が切れて、魚も餌も一緒に無くなつて終つたのである。考へれば亦哀れ千萬な事ではある。だから彼れ足利氏が急いで天下を取らうと思つて、一時的に攫み取る計をやつたのは、結局禍の根を子孫に殘したことゝなるのである。だから足利氏の一族君臣がかはる〳〵屠り合ひ殺し合ひ、十三代の長い間殆んど一日として安穩な日の無かつたのは、彼が中興の大業を盗み奪つた報ではあるまいか、（全く

その罪惡の報である）後世の人臣たるもの、懼れつゝしむ所を知らなければならない。

【語釋】集（成就する意。）○宗族（直義、直冬、持氏、氏清の類。）○君臣（師直兄弟、赤松大內の亂の如き類。）

【餘論】以上第一段、源氏と足利氏との得失を比較して、結局足利の失敗したのは、功を急いで、家來に濫賞侈封したるに因ることを敍ぶ。

或曰、將家禮制、概成於義滿之時。而有可憾者。夫行天子事、而謂之將軍。已爲不稱。而爲之下者、受封將家、而班爵王朝。又爲不順。使義滿有學有術、參酌古今、創立官爵、己下天子一等、除王朝公卿之外、天下萬姓盡爲其臣、豈不善哉。

【訓讀】或人曰く、「將家の禮制は、概ね義滿の時に成る。而して憾むべきことあり。夫れ天子の事を行ひ、而して之を將軍と謂ふ。已に不稱と爲す。而して之が下たる者、封を將家に受け、而して爵を王朝に班す。又不順と爲す。義滿をして、學あり、術あり、古今を參酌し、官爵を創立せしめ、己天子に下る一等、王朝の公卿を除くの外、天下萬姓、盡く其の臣と爲らば、豈に善からずや」と。

【通釋】新井白石が曰ふのに「武家の禮式制度は大概義滿の時に出來上つた。併し、その中に遺憾に思ふふしがある。それ、天子の行ふべき事を行つて、而かも之を將軍と稱してゐた。そのことからして既に其の實に合はぬことである。そしてその臣たるものは土地を將軍家から貰ひ、官爵を皇室から頂戴するのである。これも筋道の

合はぬことである。義滿にして學問もあり腕前もあつて、古今の禮式制度を參考して取り入れ、筋道に合ふ官爵を制定し、自分は天子より下ること一等となし、朝廷の公卿は別として、天下の萬民は悉く自分の家來となるやうにすれば、名と實と相叶ひ、なんと善いではないか」と。

語釋 不稱（名と實とが相合はぬ。）

外史氏曰、噫、是助足利氏爲虐者也。夫天下有名有實。昔我王家統馭海內、食租衣稅、而以爵秩酬功勞。當是時、名實之權、竝在朝廷。及於其後、有盜其名而敗者。平將門是也。有竊其實而成者。源賴朝是也。有欲幷有其名實而兩失之者。則足利氏是也。夫將門未定八州、而先擬帝皇。天誅不旋踵。賴朝乃請守護之設、分取天下兵食、而其號則不過曰追捕使。若曰旣充其腹、何必華其服。

通釋 外史氏曰く、噫、是れ足利氏を助けて、虐を爲す者なり。夫れ天下、名あり、實あり。昔、我が王家、海內を統馭し、租を食ひ、稅を衣て、而して爵秩を以て功勞に酬ゆ。是の時に當つて、名實の權竝に朝廷に在り。其の後に及び、其の名を盜んで敗るゝ者あり。平將門是なり。其の實を竊んで成る者あり。源賴朝是なり。其の名實を幷有せんと欲し而して之を兩失する者あり。則ち足利氏是れなり。夫れ將門未だ八州を定めず、而して先づ帝皇に擬す。天誅、踵を旋らさず。賴朝乃ち守護の設を請ひ、天下の兵食を分取す。而して其の號は則ち追

捕使と曰ふに過ぎず。既に其の腹に充つ、何ぞ必しも其の服を華にせんと曰ふが若し。

【通釋】外史氏が曰ふのに「噫、この論は足利氏を助けて、暴虐をなす怪しからぬ論である。それ天下には名、天皇）と實（土地・人民）とがある。昔、我が皇室が天下を統べ治め、年貢米や布帛を取り立てられて、それで以て手柄のあるものには位と祿を與へて酬いられた。この時には名も實もその權は皆朝廷に在つたのである。所がその後に其の名を盜んで失敗した者が出た。それは平將門である。又其の實を盜んで成功した者がゐる。それは源頼朝である。その名と實とを幷せ有しようとして兩方とも失つたものがゐる。それは足利氏である。夫れ將門はまだ關東八州を平定もしない内から先づ帝王の眞似をした。天の誅罰は踵を廻らす暇もなく、直ちに至つて殺されて終つた。頼朝は守護職を置かんことを請ひ、天下の兵權糧食を分け取りした。そして其の稱號は總追捕使といふに過ぎない。稱號は單に總追捕使であるが其の實權は大したものであつて、それは恰も腹一杯に實權を得てゐるのだから、着物（稱號）などはどうでもいゝ、立派にするに及ばぬといつたやうなやり方である。

【語釋】食レ租衣レ稅（租税を取り立てゝ、それを衣食に充當すること。）○盜二其名一（帝王の名を盜む。）○盜二其實一（土地人民を盜む。）

及三尊氏奪二中興之業一、尺地一民、莫レ非二其有一。而朝廷徒擁二虛器一。不三徒分二取之一也。然名分所レ在、不レ可二踰越一。故擁二戴北朝天子一而已。以二上將一宰二天下一。猶二源氏之故一焉。至二於義滿一、驕侈跋扈、僭二擬乘輿一、通二信外國一、稱二日本國王一、分二舊臣門族一、以倣二攝籙淸華一。豈非三欲レ幷二有名實一哉。朝廷擬二其贈號一、以二太上天皇一。雖二無稽之甚、貽二笑千古一、而義滿素心所レ蓄亦可二

以見矣。其早世不終志、可不謂我邦之幸也。而或者憾之、何哉。昔者、孔子愛告朔之餼羊。王室既喪其實矣。賴有其名耳。而今又欲舉而褫之。是助足利氏爲虐者也。

【訓讀】尊氏、中興の業を奪ふに及び、尺地一民も、其の有に非ざるはなし。而して朝廷、徒に虛器を擁す。徒に之を分取するのみならざるなり。然れども名分の在る所、踰越すべからず。故に北朝の天子を擁戴し、而して己上將を以て天下を宰す。猶ほ源氏の故のごとし。義滿に至つては、驕侈跋扈、乘輿に僭擬し、信を外國に通じ、日本國王と稱し、舊臣、門族を分つて、以て攝籙・淸華に倣ふ。豈に名實を幷有せんと欲するに非ずや。朝廷其の贈號を擬するに、太上天皇を以てす。無稽の甚しき笑を千古に貽すと雖も、而も義滿素心の蓄ふる所、亦以て見るべし。其の早世して志を終へざりしは、我が邦の幸と謂はざるべけんや、而るに或る者、之を憾むは何ぞや。昔者、孔子、告朔の餼羊を愛しむ。王室既に其の實を喪ふ。賴に其の名あるのみ。而して今又擧げて之を褫はんと欲す。是れ足利氏を助けて虐を爲す者なり。

【通釋】尊氏が建武中興の事業を奪ひ取つてからは、僅かな土地も一人の民も彼の所有でないものはない。そして朝廷では徒らに名あつて實のない虛位を持つてゐられたに過ぎない。賴朝の時に兵食を分け取りしたやうなことでなく、尊氏のは丸取りであつたのである。併し名義分際のある所は妄りに踰えることは出來なかつた。だから北朝の天子を守り立て、自分は上將軍となつて、天下を切り盛りした。其の點は源氏の前例のやうにやつた。義滿に至つては、心驕り奢侈贅澤がはびこつて、總て天子になぞらへて、その眞似をなし、外國(明)と信書をやり取りして、日本國王と稱し、舊臣や一門の族類を分けて三管領・四職・七頭などを作り、朝廷の五攝家・七精華に

ならつた。これは名實ともに併せ有しようと思つてしたのではないか。慥かに名實共に所有しようと思つたからそんなことをしたのである。朝廷でも稱號を贈らるゝに、太上天皇の號を以てせられた。これは誠に古今ためしのないことで笑ひを千歳の後までも殘したとはいへ、それに就いても、義滿が平生蓄へ持つてゐた下た心が如何なるものであつたかは想像に難くない。義滿が早く死んで其の志を果し得なかつたことは、實に我が日本の幸福であつたと謂はねばならぬ。しかるに白石はこれを遺憾としてゐるのは何事であるか。昔、孔子は、朔日を宗廟に告げる爲めに供へた犠牲の羊を大切にして、それを廢止することに反對し、名(告朔の餼羊)だけでも尊んで殘して置いたものである。斯樣に皇室はすでに其の實を失はれて終つた。併し幸にして其の名だけでも殘つてゐたのである。而るに白石は今や名までも取つて名實共に全部を奪はうといふ論をした。これは足利氏を助けて暴虐を爲すものといつても差支へあるまい。

【語釋】告朔之餼羊（餼は生牲。即ちいけにえのこと。周代には毎年季冬に翌年十二ケ月の暦を、天子より諸侯に頒賜した。諸侯はその暦を宗廟に藏し、毎月朔日に羊を一匹、供へて祭り、朔日なることを告げて、その暦を受け、領分内に行つたのである。これが告朔の禮といふことである。魯の國では文公以來、この禮を行はず、たゞ役人が餼羊だけを朔日に供へてゐた。それを孔子の門人の子貢が廢めようと言つたのを、孔子はその禮の一部分だけでも殘して置けば、また將來告朔の禮を行ふ本になるかも知れず、これを廢すれば全く古禮が廢れることになるから殘して置き度いと曰つたのである。論語八佾篇に見ゆ。）

晉以侯而宰周之天下、霍氏以大將軍而宰漢之天下。自古有之。是亦可矣。不必別撰名號以稱其實也。且夫自公侯至輿儓、以次相僕役。而莫非王臣者。何爲不順哉。饒令新建爵號、猶平新皇之爲耳。豈能如千歳因襲之名、在民耳目足以服其心邪。

假使足利氏如或者之說、吾知其不能一日居也。

【訓讀】晉は侯を以てして周の天下を宰し、霍氏は大將軍を以てして漢の天下を宰す。古より之あり。是も亦可なり。必ずしも別に名號を撰し、以て其の實に稱へざるなり。且つ夫れ公侯より輿儓に至るまで、次を以て相僕役す。而も王臣に非ざる者なし。何ぞ不順と爲さんや。饒令、新に爵號を建つるも、猶ほ平新皇の爲の如きのみ。豈に能く千歲因襲の名、民の耳目に在り、以て其の心を服すに足るが如くならんや。假ひ足利氏をして、或る者の說の如くならしむるも、吾れ其の一日も居る能はざるを知るなり。

【通釋】かの晉は諸侯の身分を以てして周の天下を切り盛りし、霍氏は大將軍の位地を以てして漢の天下を取り裁いた。こんなことは昔から例のあることである。それも場合によつては差支へない。併し何も好んで別に名號を撰んで其の實際に叶ふやうにしなくともよかつたのである。それに上は公侯から下は賤しい者に至るまで、その順序によつて、上の者は下の者を使役するやうになつてゐる。けれども結局皆天子の民でない者はないのである。だから晉が下を治めても、霍氏が下を治めても將軍が下を治めても、別に逆しまなこととは思へない。(だから別に名號など撰ぶ必要はないのである) 白石のいふやうに、新に爵號を作つて見たところで、それは平新皇の所業とかはりはない。どうして／＼、大昔から引き續き、人民の耳目に熟し切つてゐる所、そして民の心を服するに充分である所の名號のやうな譯には行くものではない。たとひ足利氏をして白石のいふやうに別に稱號を作らしめても、結局一日もその位地に安んじて居ることの出來なかつたことを自分は確信するのである。

【語釋】晉以侯云々（晉文公、諸侯に覇となり、天下に號令したが別に稱號を設けたりしなかつた、從來通り侯爵で臨んでゐた。）〇霍氏云々（前漢の霍光は大將軍となり昭帝を輔佐し、天下に臨んだが、これも別に稱號など作らなかつた）

王輿僚（左傳昭公七年に、人に十等のあることを述べてゐる。王、公、大夫、士、卓、輿、隸、僚、僕、臺。）〇平新皇（平將門は新皇と稱して僞宮を建てた）

余謂、足利氏之欲幷有名實也、於其自處、已爲失義。而於其事上御下之際、又有失計焉者。何以謂之。夫我已有其實、而貽天子以虛器。是擁虛器者耳。何必介介然扶北而擠南。唯夫扶北而擠南。是故天下囂然、莫或寧一。而其分舊臣・門族也、所謂三管領、皆據大封者也。既與之以土地人民之富、而又假之以官號之崇、授之以權柄之要。是奚異傳虎以翼歟。應仁之亂、是其所由起焉。而終致上將亦擁虛器、同於王室其極也、幷其位號而喪之矣。豈非計之失者哉。

訓讀 余謂ふ、足利氏名實を幷有せんと欲するや、其の自ら處するに於て、已に義を失ふと爲す。而して其の上に事へ、下を御するの際に於て、又計を失ふもの有り。何を以て之を謂ふ。夫れ我れ已に其の實を有して天子に貽るに、虛器を以てす。是れ虛器を擁する者のみ。何ぞ必ずしも介介然として、北を扶けて南を擠さん。唯夫れ北を扶けて南を擠す。是の故に、天下、囂然として或は寧一なる莫し。而して其の舊臣・門族を分つや、所謂三管領は皆大封に據る者なり。既に之を與ふるに、土地人民の富を以てし、又之に假すに官號の崇きを以てし、之に授くるに權柄の要を以てす。是れ奚ぞ虎に傳くるに翼を以てするに異ならんや。應仁の亂、是れ其の由

つて起る所なり。而して終に上將も亦虛器を擁すること王室に同じきを致す。其の極や、其の位號を幷せて之を喪ふ。豈に計の失ふ者に非ずや。

【通釋】余は思ふに、足利氏は名實ともに幷せ有しようとしたが、その時既に自分の身を處置するにその大義を謬つてゐたのである。そして又上は天子に事へ、下は民を制御して行く上に於ても、やはり計畫を誤つてゐたのである。何故そんなことをいふかといふと、次の譯である。一體足利氏は既に其の實を有して、天子に差上げるに空の容器を以てした。天子はたゞ空の容器を持つてゐらるゝに過ぎない（實權がないから）。然らば何もそんなに頑張つて北朝を扶け南朝を押し倒すやうなことをするにも及ばない。（どうせ空の容器であるから）それを足利氏は何處までも北朝を扶けて南朝を押し倒さうとしたものだから、天下は騷然として安寧統一さるゝことがなくなつたのである。そして舊臣一族を分け、所謂三管領が皆廣大なる土地に立て籠るやうになつたのである。すでに三管領に澤山の土地人民を與へ、又尊き官位を許し與へ、之に樞要なる權力を授けた。これは、まるで虎に翼を付けたのと少しも變らぬ。應仁の亂の起つたのは全くこの點が因になつたのである。所が結局將軍の足利氏までが皇室と同じやうに亦空の容器を擁するやうになつて終つた。そしてとゞの詰り足利氏は位も役目も倂せて失つて終つた。これはなんと計策の宜しきを失つたやり方ではないか。

【語釋】介々然（こせつくこと。）○傅レ虎以レ翼（韓非子の字面。亂暴者に便すること。）○應仁之亂（山名・細川の爭。）

【餘論】以上第二段、白石の論を掲げて、足利氏が名實を兼ね取らうとして失敗し、之を倂せ失つたことに論及し、名實兼ね取るべからざることを叙ぶ。

ある人が「白石の所謂名號とは天子に下る一等の名に過ぎない。王名といふのではない。だからそれを天子の

名實を奪ふといふことは出來ない。だから山陽の此の論は文理透徹を缺いでゐる」と曰つてゐる。併しこれは一片の理屈に過ぎない。天子に下る一等の名と雖も、天下萬姓盡く其の臣とならば、畢竟これ亦一人の天子である。外史の所謂別に名號を撰んだとしても平新皇の類の如きであらう。これがまた一人の天子でなくて何ぞ。白石の論に從へば天子少數直屬の臣を臣とするに過ぎない。それは恰も魏武の漢皇を驅使するが如き結果を將來するは火を見るより瞭かである。本論は大處から之を見んことを要する。

亨冊終

日本外史新釋卷九終

昭和五年八月六日印刷
昭和五年八月十日發行

第十三回配本

【非賣品】

昭和漢文叢書
日本外史新釋
亨

不許複製

著作者　賴成一

發行者　東京市神田區北神保町十一番地
辻本卯藏

印刷者　東京市牛込區榎町七番地
竹內喜太郎

發行所　東京市神田區北神保町十一番地
弘道館
電話九段一三六八番
一二六九番
振替口座東京八一一五番


為漢文叢
書劉生仿
明人意寫之

